

Fire Emblem ～漆黒の  
灰色 炎の紋章に導かれて～

ノーリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

力こそが全てであり、鋼の教えと闇を司る魔が支配する王国があった。

そこに君臨したある一人の騎士はその力を存分に振るい、そしていつしかその力に呑まれ、最後は戦いに敗れた。

力及ばず事切れ、騎士の生涯は終えるはずだった。が、その意識が再び目を覚ますこととなる。

見も知らぬ、縁もゆかりもない世界で彼が何を成すのか。

そして、彼という強力な異物が何をその世界に引き起こすのか。

これはそんな物語。

# 目次

144	N O .	o l .	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	16	N O .	1	N O .
	0 5	1	※※	0 4	0 3	0 2	0 1		0 0		0 0
	邂逅がもたらすものは	—	黒騎士ガレスについて	一人目の理解者	月下の宴	両断	出逢い		P r o l o g u e		P r o l o g u e
		140	V	125	101	69	41		後編		前編

	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	N O .	186	N O .	
	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2		1 1	1 0	0 9	0 8	0 7	0 6
	重なる縁	闇の因縁	好意と敵意	グルニアの木馬隊	種火は燦る	—	生まれるのは火種か協調か	パレス攻略戦	おかしな鞆当て	二人の王女	船上にて	奮迅、鮮血に染まる暗黒
	477	439	409	383	351	337		305	282	236	220	

N O .	N O .	N O .	676	N O .	N O .	615	N O .	N O .	N O .	N O .	ルス	N O .
2 6	2 5	2 4		2 3	2 2		2 1	2 0	1 9	1 8		1 7
三つの頼み	去来する想い	純粹ゆえに		ブラックナイツ・カミュ	その力の片鱗を		マムクート・プリンセス	暗躍の黒騎士	マクロニソスの城	忘れていた感覚		アナザースターロード・マ
779	739	723			648			584	568	533	509	

N O .	N O .	o 1 .	N O .	N O .	N O .	N O .
3 1	3 0	2	※※	2 9	2 8	2 7
天秤の傾く先	もう一人の竜姫		黒騎士ガレスについて	その先に待つもの	因縁の決着	天空を駆ける騎士
928	908	903	V	886	838	798

## NO. 00 Prologue 前編

「オオオツ…俺が…この俺が…負けるというのか…」

とある世界のとある時代、幾つかの国々を巻き込んだ大きな戦争があった。そしてその最終局面、一人の騎士の胸を一振りの剣が深々と刺し貫いていた。

「む…無念だ…後少しで…世界を…手に」

悔しさをまざまざと滲ませながら膝を着き、そして倒れ伏すその騎士。かつては人格者であり、誰もが慕っていた彼は、しかしある時から力を渴望し、その誘惑に負け、そして堕ちてしまった。だがその末路は、敗北をもって最期を迎えた。

死の間際、その赤く光る眼で見たもの。それは、自分に敵対していた連中が自分のために黙祷を捧げているところだった。

(フツ…)

今際の際にその姿を嘲る。それは、甘いと思つたが故か、それともお人よしと思つたが故か、あるいは別の感情からか、それはわからない。どのみち、もう意識を取り戻すことはないのだから。

そうして彼は、その数奇で哀れな生涯を閉じたのだった。

オレルアン平原。

当方の島国タリスより遂に兵を上げたアリティアの王子マルス率いるアリティア軍。彼らは西進を続け、ようやくオレルアン王国に足を踏み入れることができた。

草原の国オレルアンは、建国以来大陸の盟主国であるアカネイアと深い関係を持つ北方の大国である。だが現在は国土の大半をマケドニアに占領され、防戦一方の非常に苦しい立場に追われていた。

そのオレルアンにアカネイア王国の唯一の生き残りであるニーナ王女が身を寄せている。解放軍の大義名分、旗頭的にも、そして戦力の増強と言う意味でも、アリティア軍がまずこのオレルアンと合流しようと考えてるのは実に当然なことであった。

そして今、オレルアン王国の玄関口であるこのオレルアン平原にて、アリティア軍とマケドニア軍との戦闘が繰り広げられていた。

その最中だったのである、後にどんな戦局すら一変させると称される異形がこの世界に現れたのは。

「よし、大体は決着がついたな」

各所からの報告を聞き、アリティア軍の指揮官であるマルス王子が一息つく。

「左様ですな」

傍らに控える老騎士のジェイガンが答えた。マルスにとつては一番の側近であり相談役であり、そして守り役の頼れる存在である。流石に寄る年波には勝てなくなっているようだが、それでもまだまだ十分に一線を任せられる存在だった。

「後は、城周辺の騎馬部隊を残すのみですな」

傍らにもう一人控えていたモロドフ伯爵が状況を付け加えた。ジェガンと並ぶマルスの側近である。彼は戦場に出ることはないものの、その豊富な知識や経験はアリティア軍に欠かすことのない存在であった。

「うん。ジェイガン、じい、全軍に命令を。用意が整い次第、足並みを揃えて奴らに突つ

込む！」

「ははっ！」

「承知しました！」

マルスの命令を伝令に伝え、陣容が整うのを待つ。向こう側もこちらが何をしようとしているのはわかっているはずだが、それでも突撃してこないのは騎馬の利を生かすためか、こちらが橋の手前に陣取っているため一斉に攻撃できないことを警戒しているた

めか。恐らくは両者だろう。

そうこうしている間に各地に向かっていた歩兵部隊が合流する。そして十分に陣容が整ったところで、

「全軍、突撃！」

マルスが剣を抜いて命じたのだった。それに従い、各部隊が橋を渡って城を目指す。そしてそれに呼応するように、マケドニア軍の騎馬部隊もアリティア軍に向かって突撃を仕掛けてきた。そして、両軍の端緒がもうすぐ交わろうとしたその時、それが起こったのだった。

「！ 何だ!？」

最初、アリティア軍でそれに気付いたのは将であるマルスだった。そして、

「全軍、停止！」

慌てて号令をかけて全軍の進行を止める。伝達手段が肉声か伝令ぐらいしかなないだけに全軍に命令が行き届くには時間がかかってしまい、両翼は既に戦いに入ってしまったが、それでも中央付近は端緒を開く前にマルスの命令が届いて進軍を停止した。

それは敵軍であるマケドニア軍でもそうだったのだろう、敵の指揮官であるベンソン将軍が同じように全軍の突撃を止めたのである。

「マルス様」



「いかがなさいましたか？」

ジェイガンとモロドフが主人の真意を尋ねに側に駆け付けてきた。と、

「ジェイガン、じい、あ、あれ……」

そうして、小刻みに震えながらマルスが目の前を指さす。確認するかのようにその先を見たジェイガンとモロドフもギョツとした。そして、それはマケドニア軍も同じだった。

「將軍、あれは一体……」

「うむ……」

部下に問われたがわかるわけもなく、ベンソンは重々しく頷くしかできなかつた。だが、それも仕方のないことだろう。

何故ならば、それに気が付いているアリティア軍とマケドニア軍の將兵の視線の先では、信じられないことが起こっていたからだ。空間がぐにやりと歪み、黒い穴が開いていた。その穴からはバチバチと電気が幾重にも弾け飛んでいる。

やがて、その電気の弾け飛びの感覚が短くなっていき、それに呼応するかのようになり、黒い穴は更に黒さを増す。そして、

「うわっ！」

まるで太陽のような眩しさに思わずマルスを始めとしてその場の全員が顔を背ける。

そして瞼の裏で閃光が無くなったのを感じ取ると、徐々に目を開けた。

そこには、先ほどもであつた黒い穴もなければ弾けるような電気ももうなかつた。だが代わりに、予想だにもしないものがそこにあつたのだつた。

「黒い……騎士……?」

誰かが呟く。そう、そこにいた……あつたのは、全身を漆黒のフルプレート製の鎧で固めた漆黒の騎士の姿だつた。その手には彼の得物だろうか、とても大きな両刃の斧が握られている。そして騎士自身は氣を失っているのだろうか、微動だにしなかつた。

『……』

誰もがどう反応していいのかわからず、戦場は戦場には不相応な静寂で満たされた。

そして、

『……』

その場にいた大半の人間が驚愕に目を剥く。なんと、その黒い騎士が動き出したのである。

「ぐ……うっ……」

地の底から湧き出てくるような唸り声を上げながら黒騎士は上半身を起こす。そして、後頭部に手をやりながら現状を把握するように周囲を見渡した。

(……)……(……)

事実、黒騎士は現状把握のために周囲を見渡していたのであった。そして、自分に向かって注がれている大量の視線に気付くことになる。

(何だ……この連中は……)

自分のことを奇異な視線で見つめてくる周りの連中に思うところがないでもないが、取りあえずは立ち上がることにした。その姿に周りの連中がまたざわつく。

(うるさい奴らだ)

そうは思ったものの、彼としても現状の把握がままならないため、さてどうしたものかと考えようとした。が、

「ええい、邪魔だー！」

それを許してくれない者がいた。マケドニア軍の将であるベンソンである。戦場を乱された腹いせからか、理解できない状況に終止符を打つためかはわからないが、彼は単騎、黒騎士に向けて突撃したのである。

「あ、將軍ー！」

部下が慌ててその後を追う。その時には、ベンソンはもう黒騎士のすぐ側まで迫っていた。

「死ねー！」

得物であるナイトキラーを振りかぶると、黒騎士に向かって突き刺す。馬蹄の音とそ

の掛け声に気付いた黒騎士が咄嗟に移動したものの少し遅く、その左肩が貫かれた。

「きゃっ！」

噴水のように噴き出た血に、レナが口元を押さえて蒼ざめる。天馬騎士としてレナより場数を踏んでいるとはいえ、シーダも顔を顰めていた。その頃交戦地では、ベンソンが余裕の表情で馬上から黒騎士を見下ろしていた。

「ふん、木偶か」

碌に反撃もしてこない黒騎士の姿に心理的な優位に立つと、ベンソンは黒騎士の肩に刺さったナイトキラーを抜く。そして、再び振りかぶった。

「失せろ！」

黒騎士の生命を刈り取ろうとナイトキラーが振り下ろされる。だが、今度はベンソンの思い通りにいかなかった。

「…やかましい」

黒騎士は傷を負ってない右手で獲物の斧を持ち直す。そして、左手は添えるようにその斧に添えると、ブンと空中を一薙ぎした。耳が痛いばかりの金属同士の交差音がし、そして、ベンソンの手からナイトキラーが吹き飛ばされ、大分後ろの地面に突き刺さった。

「な！」

自分の手の中から獲物が吹き飛んだことに呆然としながら目の前の黒騎士を見つめるベンソン。そんな彼に向かって斧を構えると、

「死ね」

黒騎士は慈悲も何もなくそう一言だけ呟き、そして鎧の隙間から見える赤い目が鋭く光った。それが、ベンソンがこの世で見た最後の光景だった。黒騎士が恐ろしい速度で斧を横薙ぎにする。だが、何も変化は起こらない。しかし、黒騎士が斧の刃を地面にドスンと突き立てた時、状況に変化が起こった。

ベンソンの上半身が、ズレ始めたのである。まるで、ズ：ズズ：ズズズ：と云う擬音が入るかのように黒騎士が薙ぎ払った位置で身体が滑り落ち、そして地面に落ちたのだった。それも、馬の首ごと。そしてそして次の瞬間、噴水を思わせるかのようにベンソンの身体と馬の首から血が吹き上がり、程なく残された胴体部分も倒れたのだった。その光景に、アリティア、マケドニア両軍が驚愕をもって目を見開く。

「しよ、將軍!？」

「將軍が一撃で!」

「ば、バケモノだーっ!」

「に、逃げろーっ!」

マケドニア軍は一撃で将を討たれたことに恐慌状態になって蜘蛛の子を散らすかのように我先にと逃げ出した。そして、アリティア軍はと言うと、

「……」

「れ、レナさん!?! レナさーんっ!」

「……」

「し、シーダ様! シーダ様っ!」

遠目とは言えその光景を見てしまったレナとシーダがその場で気を失ってしまい、ジュリアンとドーガが二人を支えた。そして、

「う……うええっ……おええっ……」

「ご、ゴードン! おい大丈夫か、しっかりしろ!」

同じくもろにその光景を見てしまったゴードンがその場で嘔吐し、カシムが必死になつて介抱していた。一方、将のマルスはと言うと、

「あ……う……」

黒騎士の気配に中てられて碌に動けないでいた。口の中がカラカラに渴き、汗が次から次へと噴き出してきて止まらない。と、

「お下がりください、マルス様! カイン、アベル!」

ジェイガンがマルスをかばうように黒騎士とマルスの間に入った。と同時に、その両脇をカインとアベルが固める。だが、それだけではなかった。カインとアベルの脇を固めるように、オグマとナバールが姿を現したのである。

五対一で対峙する中でジェイガンたちは何も動きを見せず、黒騎士の出方を見ていた。と、

「小僧……」

フルフェイスの兜の奥で目を赤く光らせながら、黒騎士がマルスに語り掛けてきたのだった。

「な、何だい?」

気後れしつつもマルスが答える。

「お前が指揮官か?」

「あ、ああ」

咽喉をカラカラに渴かせながらマルスが答える。正直言って相對しているだけで震えが止まらないのだが、だからと言って誰にも投げられないのだから仕方なかったのだが。

「そうか……」

マルスの答えを聞くと、黒騎士は顔を横に向けた。そこには、死体となったベンソン

があつた。

「最初に聞いておくが、そこに転がっている愚か者はお前の手の者か？」

ベンソンを指さしながら黒騎士がマルスに尋ねる。

「い、いや、違う。僕たちの敵だ」

「そうか。ならばよかつた。もし貴様の手の者なら、話し合いにはならんだろうからな」  
その言葉に、マルスを始めとして主だったものが少し安心した。話し合いを口にした  
ということは、その意思があるということである。それがわかっただけでも収穫とい  
うものである。

「それで……？」

だが緊張の時間はまだまだ続く。

「え？」

今言った言葉の意味がわからず、マルスが黒騎士に尋ねた。

「そこに転がっている愚か者と同じく、お前も問答無用で斬りかかってくる輩か？  
だつたら……」

そこで地面に突き立てていた斧を抜くと、マルスに向かつてその刃を向けた。勢い良  
く刃が向けられたため、ベンソンの残り血が跳ねてマルスの顔を濡らす。

「！ 何て脅力だ……！」



両刃の、どう見ても相当の重量がある巨大な斧を軽々と振り回すその姿に、マルスは驚きが止まらなかった。と、

「望み通り、相手になつてやるが…」

そのまま斧を構えると、黒騎士はマルスを始めとするジエイガンたちに殺気を送った。その殺気に、ジエイガンたちが一斉に武器を構える。そして、一触即発のピリピリムードになったところで、

「！ 待ってくれ！」

それを打ち破ったのはマルスだった。

「マルス様？」

代表してジエイガンがその行動の意味を尋ねる。

「ジエイガン、武器を収めてくれ！ 他の皆も！」

「王子…」

「しかし…」

カインとアベルも困惑顔になる。そんな中、いち早くマルスの指示に従ったのはオグマとナバルだった。

「宜しいのですか、王子？」

「ああ」

「わかった」

オグマとナバルがそのまま鞘に自分の剣を収める。

「さあ、ジェイガンたちも！」

「…仕方ありませんな」

マルスに念を押され、ジェイガン、カイン、アベルもオグマたちに倣って己の得物を収めた。全員が武器を収めたところで、

「この通りだ。こちらに敵対する意思はない。だから貴方も収めてはくれないだろうか」

と、マルスが語り掛けた。

「フン、よかろう」

取り敢えず敵対する意思がないことを確認した黒騎士が先ほどと同じように自身の得物の刃を地面に突き立てる。

「話し合う余地があると考えていいんだな？」

「勿論」

「結構」

「良かった。では、戦後処理を終えてから改めて」

「ああ」

こうしてマルスは拠点の制圧に向かい、そしてオレルアン平原での戦いは終止符を打った。ありえない出逢いを一つ、もたらして。

そしてこの出逢いがこの世界に何をもたらすのか、それは今は誰にもわかるはずはなかった。

## NO. 00 Prologue 後編

戦闘後。

戦いが終わればそれで何もかも終わりになるわけではない。物資の補給や傷病兵の救護、糧食の配給など、軍単位で行動するとなればそれなりにやるべきこと、やらなければならぬことが目白押しなのだ。

各人が己の仕事を遂行するために忙しそうに走り回っている中、一本の木の幹に背中を預けながら腕を組み、とある天幕を鋭く睨んでいる人物がいた。

視線の持ち主の名はカイン。アリエティア宮廷騎士団の一人で、“猛牛”の異名をとる猛将である。

「よう」

そんなカインの許に近づくと人影が一つ。

「アベル……」

視線を外した先にいる、己の相棒の名を呼ぶ。

「ほれ」

「ああ、サンキュ」

差し出された水筒を受け取ると、カインは蓋を開けて中の水を咽喉の奥に流し込んだ。一口飲んで止めるつもりだったが、その意に反して身体はどんどん水を欲しく、どうやら知らず知らずのうちに随分汗をかいていたようだった。

「ふーっ…」

十二分に水分を補給したところで、カインは水筒から口を離した。そして口元を拭くと大きく息を吐く。と、

「カイン」

同じように水分を補給していたアベルがカインの名を呼んだ。

「ん？」

カインがアベルに答える。

「お前、どう見た？」

「何を？」などという野暮なことは言わない。何故なら、何のことを聞いているかは十分にわかっているからだ。

「正直…向かい合っているときは怖くて仕方なかった」

そして、率直な感想を述べる。

「お前やジェイガン隊長たち五人で対峙しているからどうにか立ち向かえてたが、もし一対一だったら、恥も外聞もなく逃げだしてと思う」

「後ろに王子がいたとしてもか？」

「…ああ」

少し逡巡したが、それでもカインは見栄を張ることなく正直に答えた。

「騎士としちゃあ、口が裂けても言つちやいけないことだがな。主君を見捨てるどころか生け贄にして逃げるなんてよ。全く、情けないつたらないぜ…」

そう言つて、乾いた笑いを上げるカイン。おどけてはいるものの、己の素直な心情が情けなく、そして受け入れがたいものであるのが少なからずシヨックだった。現に、この場に誰もいなければこのまま蹲つて泣いていたかもしれない。

だがカインにとつて救いだったのは、相棒も同じように思つていたことだった。

「俺も同じさ」

カインと同じように天幕を睨み付けながらアベルが答えた。

「あん？」

「正直、震えが止まらなかつたよ。今でも思い出せば震えがきちまう。もし一人で対峙してたら、俺もやつぱり逃げてただろうな」

「……」

アベルも自分と同じだと知り、しかし騎士としてはその行為に同意することもできず、カインは口を噤むしかなかった。それを慮つてか、アベルは自分にも言い聞かせる

ようにその先を続けた。

「だがな、俺たちはアリティアの騎士だ。どんなに怖かろうが恐ろしかろうが、足が竦もうが心が折れようが、主君を見捨てて逃げるわけにはいかない。ましてや、主君を贄に差し出すなんて以ての外だ」

「ああ」

「だから、次はあっちゃいけない。王子があ的那天幕の中であの男とどんな話し合いをしてるかわからないが、もし決裂したらその時は俺たちが盾にならなきゃいけない。そうだろう?」

「だな」

カインが頷いた。その顔にはまだ心なしか恐怖が見え隠れするものの、それでも吹っ切れたことが見受けられるものだった。

同時刻、カインたちの位置からほぼ正反対の位置に、同じように木の幹に背を預けて腕を組み、カインたちと同じ天幕を鋭く睨んでいる男がいた。

「ナバール」

と、この男に近づくと人影が一つ。左頬に十字の傷が刻まれた、タリスが誇る剣の使い手であるオグマの姿だった。

「オグマか」

少しだけ視線をオグマに移した男：ナバールがその姿を見止めてオグマの名を呼んだ。オグマはそのまま近づくと、少し距離を置いてナバールと肩を並べる。そして、ナバールと同じようにその天幕に鋭い視線を送った。

「何か動きは？」

短刀直入にオグマが尋ねる。

「いや…今のところ妙な動きはない」

「そうか…」

ナバールからの返答に、オグマが心からホツとしたように息を吐いた。

「護衛として立ち会うことを許可してくれば、こんな面倒なことにはならず済んだのだがな…」

ナバールは些か不満そうである。事実、天幕内の状況がわからないから面倒臭いのだろう。

「仕方ない。王子がそれを許さなかったのだ。あの男に敵意を示さないためにな」

「わかっている。だが万一のとき、あの二人でどうにかできるのか？」

ナバールが指したあの二人と言うのは、ジェイガンとモロドフのことである。今マルスはジェイガンとモロドフを伴って、天幕の中で話し合いの最中だった。

「その時のために、俺やお前がいるのだろうか」



「ふん、いいように使われるのは気に入らん」

不満を隠そうともしないナバールの姿に、オグマは内心で苦笑しつつも、それを悟られないようにそのまま続ける。

「お前はあの男をどう見立てた？」

「正直、勝てんだろうな」

オグマの問いに、ナバールは言葉通り正直に答えた。

「俺とお前が組んでかかったとして、それでも二回に一回勝てればいいところだと思う」  
「そうか」

自分の見立てとほぼ変わらないことに流石だなと思いつつ、オグマが頷いた。

「確かにそうだろうな。そして、加えて言うならもう一つ」

「ん？」

「純粋な戦闘の勝敗としてならもう少し率は上がるだろう。だが、あの男は存在自体が次元を超えているような気がする」

「成る程」

そのオグマの表現に、ナバールが感心したように頷いた。

「流石だな。上手く言うものだ」

「と言うことは、お前も？」

「ああ」

ナバールが静かに頷いた。

「あの仮面の奥に光る赤い目……。あそこから放たれる闘気と言うか殺気と言うか狂気は尋常なものではない。一般人は当然として、戦士や騎士でも並の実力の持ち主では、あの氣に中てられたら立ち向かう意思を根こそぎ削り取られるだろう。人と言われるよりは魔の者と言われた方が余程納得するというものだ」

「確かにな」

「だからこそ、あの王子があの男に対してやろうとしていることには危惧しかない。あれは飼いならせん。己の意志以外には従うことはないだろう」

「だが、今更遅い」

オグマも鋭い表情で天幕を見つめる。

「だからこそ、俺たちがいる。もしもの時は突っ込むぞ、ナバール」

「俺にそこまでしてやる義理はないが、それでもあれほどの男との勝負となれば血は騒ぐ。例え結果は見えているとしてもな。もしそうだった時は、奴は俺に譲れ、オグマ」

「死ぬかもしれないぞ?」

「元より承知の上だ。それでも血が滾るのは止められん。我ながら面倒な性分だがな」

「わかった」

ナバールの覚悟にオグマもそれ以上は口を挟めなかった。その代わり、天幕内での話し合いが何事もなく終わってくれることを願う。

カインとアベル、オグマとナバルルだけではなく、アリティア軍の主だった者たちがしきりにチラチラと様子を窺っている一つの天幕。その中では今まさにマルスと黒騎士の話し合いが行われているのだった。

「さて…」

黒騎士に椅子をすすめたマルスがその正面に座ると徐に口を開く。

「まずは自己紹介しようか。僕の名はマルス。今は亡国となっているが、アリティアの王子だ」

その言葉に、黒騎士が仮面の下で眉を顰めた。

(アリティア…だと?)

聞いたこともない国名に黒騎士が訝しがる。と、

「ん、んんっ!」

ジェイガンがわかりやすい咳払いをした。黒騎士がゆつくりとジェイガンに顔を向ける。と、

「こちらが…王子が名乗られたのだ。返すのが礼儀だと思うが?」

ギロリと黒騎士を睨んでそう注意した。カインやアベル、オグマやナバールが話していたように黒騎士の尋常じやない気配は肌で感じているだろうが、それでも気後れしない辺りは流石は歴戦の勇士である。もともと、十分生きた老骨と言うことで生命を惜しんでいないだけなのかもしれないが。

「いいよ、ジェイガン」

それを制したのは他でもないマルスだった。

「しかし、王子……」

「その気になれば話してくれるさ。そうだろうか？」

そう言つて、マルスは黒騎士に向けて微笑んだ。

（成る程……人懐っこい笑顔だ。こういつた魅力で国や軍を統べるならば、大した器の小僧だ）

素直にそう思う。だが一方で、

（とは言え、少なからず無理をしているのもわかるがな）

それは黒騎士に見抜かれていた。だが、それは無理もない話である。何せ、馬の首ごと人の身体を真つ二つに両断してしまったのだ。それを目の当たりにし、その力に慄かない方がどうかしている。現にマルスもにこやかに黒騎士に接しているが、その内心には恐怖が渦巻いていたのは紛れもない事実だった。

とは言え、話し合いになってしまった以上はジタバタしても仕方なく、まな板の上の  
コイ同然に腹を括つてこの話し合いに臨んでいるというのがマルスの現状であつた。

(まあ、いい…)

黒騎士はそう判断する。全てはこの話し合いの後の話である。話し合いの結果どう  
転ぶかは現時点ではわからないが、取りあえず己のために話を先に進めることにした。

「ああ」

黒騎士が答える。その返答にマルスがホツとしたように領き、ジェイガンとモロドフ  
は不満気な様子だったがそれでも主君の決めたことには逆らえず、取りあえず推移を見  
守ることにした。

「では、何か聞きたいことがあるかい？ 僕が答えられることなら何でも答えるよ」

「ならば、お言葉に甘えさせてもらおうか。では最初に、この世界…と言うべきかこの大  
陸…と言うべきかはわからんが、それについて教えてもらおう」

「??？」

黒騎士が切り出したことの意味がわからずに首を捻つたマルスだったが、取りあえず  
言われたことの回答を口に出す。

と言つても、それが黒騎士の求めている回答かどうかは自信が持てなかつたため、聞  
きたいことが違うのならば遠慮なく言つてくれと一言断りを入れてから話し出した。

「…成る程」

一通りマルスの説明を聞き終えたところで、黒騎士は今の話を反芻するかのようによつくりと答えた。

「いいかな？ 何故、そんなことを？」

疑問に思つたマルスが思わず尋ねた。何故なら、今話したことはこの大陸に生きる者ならば子供でも知つてのことだからである。それをわざわざ聞きたいというのはどういふ意図があつてのことなのだろうかとマルスが訝しがるのも無理はない。そして、

「どうも、ここが俺の知つている世界とは途轍もなくかけ離れた場所のようなのでな」  
それに対する返答がこれだった。その答えに、マルスは当然としてジェイガンやモロドフさえも眉を顰める。

「どういふことかな？」

口を開いたのはモロドフだった。主君を差し置いて差し出がましい真似をと思ひもしたのだが、それも口に出した後では文字通り後の祭りだった。

「フン…」

黒騎士は軽く右手を上げると一本ずつ己の指を折っていく。

「ゼテギネア…ゼノビア…ローデイス…どれか一つでもいい、この名に聞き覚えがあるか？」

「いや…」

否定したマルスが後ろのジエイガンとモロドフに振り返る。

「聞いたことがありますな」

「私もです」

「そうか」

二人の重臣の答えを聞いたマルスが顔を戻した。

「と、言うことだけど」

「だろうな。それと同じように、俺もアカネイア…ドルーア…アリティア…オレルアン…マケドニア…グルニアなどと言った名は聞いたことがない」

「本当かい？」

マルスが驚き気味に尋ねた。

「嘘を言っただうする。今ここでそんなことをしても、何の意味もないだろう」

「うん、確かにね」

マルスも頷いた。目的もわからないのに腹の探り合いをしても、確かに意味はないからだ。

「じゃあ貴方は、僕たちが知らないうんと遠くの国から来たってことなのかい？」

「…かもしれない」

「? ハッキリしない言い方だね」

断定せず、含みを持たせた黒騎士の返答にマルスが訝しんだ。

「気にするな。ただの下らん推論だ」

「そういう言われ方をすると気になるな。できれば教えてもらえるとありがたいんだけど…」

食い下がってみる。だが答えは、

「…知りたがりは早死にするぞ」

一切の情を感じさせない冷たい答えだった。その物言いに思わずジェイガンとモロドフが反応しようとする。何せただでさえ強烈なインパクトだったのに、未だ立場がわからないのだ。過剰反応をしてしまうのも仕方のないことだろう。

「ジェイガン、爺」

そんな二人の変化を感じ取ったのか、マルスが少しだけ振り返るとジェイガンとモロドフを目で制した。

「は」

「申し訳ありません」

自分たちの失態を窘められ、二人はすぐに非礼を詫びた。

「うん」



マルスはジェイガンとモロドフの答えを受けるとすぐに顔を戻して黒騎士と再び対峙する。

「すまなかつたね、気を悪くしないでもらいたい」

「構わん、臣下としては普通の反応だろう。一々咎める気はない」

「そう言ってもらえると助かるよ」

そこでマルスは話を改めるかのように軽く咳払いをした。

「取りあえず、貴方が途轍もなく遠いところから来たのはわかった。それで、これからどうするんだい？」

マルスたちにとつても黒騎士にとつても一番核心に迫ることである。

「さて…」

マルスの質問を受けた黒騎士がゆっくりと足と腕を組んだ。

「どうするか…」

黒騎士が己に言い聞かせるかのように呟いた。今の言葉は紛れもない黒騎士の本心である。気が付いたら右も左もわからない世界で目を覚ましたのだ。選択肢などほぼないに等しかった。指をトントンとやりながら己の今後に思いを馳せる。と、

「どうだろう、身の振り方が決まっていけないなら、我々に協力してくれないか？」

マルスが率直に頼んだ。その瞬間、黒騎士の指がピタリと止まる。

「…正気か？ 小僧」

「勿論」

黒騎士の圧力は感じているだろうが、それでも怯むことなくマルスが頷く。と、黒騎士がいかにも愉快そうに笑った。

「止めておけ」

そして、そう続ける。

「さっきの話を聞いたところ、お前たちは正義の軍勢なのだろうか？ 自分で言うのもなんだが、俺はその対極の存在だ。光と闇が交じり合うことはあるまい。遅かれ早かれ必ず歪みは起きる。結果、取り返しのかんことになるかもしれないぞ？」

黒騎士が、彼には珍しく忠告した。そしてその意見にはジェイガンとモロドフも賛成だった。目の前の男の醸し出す雰囲気は決して我らにとって歓迎すべきものではない。それを肌で感じているからこそ、ジェイガンとモロドフはマルスの意見には反対だったし、黒騎士の意見には賛成だった。だが、

「でも、負けたら何にもならない」

一人、マルスだけは納得しなかった。

「率直に言うよ。我が軍はまだ旗揚げしたばかりの軍だ。指揮官級の人員も頑張つてくれているが実力はまだ発展途上中の者が多い。つまり、圧倒的に人員が足りないん

だ。だから……」

「俺に力を貸してほしい……と言うわけか？」

「うん。どうかかな？」

マルスがジッと黒騎士を見つめた。今までの、ともすれば人のよさそうな好青年の姿とはまた違った雰囲気がその身体から醸し出されていた。

(成る程……)

これが目の前の男の有している違う側面か、と黒騎士は思った。まだ年端もいかぬ若者だが、それでもこの雰囲気は一軍を束ねるだけの器量は確かにある。決して綺麗ごとだけでは戦いには勝てないとその目が雄弁に物語っていた。

「清濁併せ？む……というやつか」

「流石だね」

黒騎士の言葉に少し驚いた顔を見せた後、マルスは感心したように答えた。

「俺がお前たちを呑み込むかもしれないぞ？」

「そうはならない。……いや、僕がさせない」

「クク……面白い。ならば見せてもらおうか、貴様の手並みを」

肩を震わせて笑いながら、黒騎士は己の結論をマルスに聞かせる。

「いいだろう。そこまで言うのなら、暫く貴様たちに付き合つてやろう」

「本当かい？」

マルスが念を押して尋ねる。

「ああ」

「ありがとう……と言えればいいのかな、この場合は？」

「礼など不要だ。それはすべて終わって、それでもまだ貴様たちが健在だったらしろ。途中で瓦解するかもしれないから」

俺という猛毒を引き込んだためにな、と付け足し、黒騎士はまたクククと不気味に咽喉を震わせたのだった。

「……いい」

そんな、実に楽しそうに笑っている黒騎士を見据えながら、マルスは口を開いた。

「はい」

「至急、天幕を一つ用意してくれ。彼の物を」

「……畏まりました」

モロドフとしては言いたいことが色々あったのだろう。それは表情に滲み出ている。だがそれでも、少なくともこの場は主君を立てて口を噤み、天幕を出て行った。

「では俺も失礼するぞ。少し外の空気を吸いたいのでな」

そう言うのと、黒騎士が立ち上がった。

「わかった。何はともあれ、これからよろしく頼むよ。えつと…」

名前を呼ぼうとしたのだが、未だに黒騎士の名前を聞いていないことに気付いてマルスが言い淀む。と、

「…ガレスだ」

黒騎士が、不意に口を開いた。

「え？」

「俺はガレス。黒騎士ガレスだ」

「あ、ああ、そうなんだ」

先ほどとは違い、あっさりと自分の名を教えた黒騎士…ガレスに些か拍子抜けしながら、マルスは改めて言葉を向ける。

「よろしく頼むよ、ガレス」

「フツ…」

それに否とも応とも応えず、ガレスは軽く笑うと天幕を出て行ったのだった。

「ふーっ…」

ガレスが出て行った後、マルスは大きく息を吐いた。そして、目の前のテーブルに上半身を預ける。

「あー…」

そして唸るような声を上げた。普段のマルスからではおよそ想像もつかないような態度と声だった。

「大丈夫ですか、王子？」

この天幕に残っているもう一人、ジェイガンがマルスを慮って尋ねる。と、マルスはテーブルに突つ伏したまま顔だけをジェイガンに向け、

「大丈夫じゃ…ない」

と、疲労困憊といった様子でジェイガンに答えた。

「相對しているだけでこんななにも肉体的にも精神的にも削り取られたのは初めてだよ。これならまだ、父上に怒られている方がよっぽどましだったかな」

ハハハと力なく笑うマルスにジェイガンは気の毒に思いつつも、どうしても聞いておきたいことを尋ねるために口を開いた。

「王子」

「何だい？」

「本気で、あの男を我が軍に加えるおつもりなのですか？」

そのジェイガンの疑問に、マルスから返ってきたのは、

「うん」

という、簡素な一言だった。その後、マルスはゆつくりと上半身を起こして改めてジエイガンに振り返る。

「ジエイガンは反対かい？」

「無論です」

躊躇なくジエイガンが答えた。

「あの男がどれほど危険なのかは、先の戦場でも今の話し合いでも良くお分かりになりましたでしょう。また、あの男自身もそう言っております。確かにあの強さはまだ未熟な我が軍には咽喉から手がでるほど欲しいものですが、組み入れたとしても益よりも害の方が確実に大きくなると私は思っております」

「流石に的確な意見だね」

ジエイガンの返答に、マルスが満足そうに頷いた。

「もつともな意見だと思うよ。僕だって、自分が主の立場じゃなくて臣下の立場だったら同じように進言しただろうしね」

「では、何故？」

ジエイガンが重ねて尋ねる。すると、マルスの目がスツと細くなった。

「言っただろう？ 綺麗ごとだけじゃ戦いには勝てない。僕たちがこれから相手にするのはグラをはじめマケドニア、グルニア、そしてドルーア……一筋縄じゃない強国ば

かりだ。勿論、僕たちだつて今のままでこれらの国と戦うわけじゃない。この先にはまだ見ぬ心強い味方もいるだろうし、戦鬪経験を積むことで僕たち自身も強くなれる。けど、それでも勝負に絶対はない。勝つ確率が少しでも上がるなら、それを選ぶのは当然のことじゃないのかな？ それに……」

「何でしよう?」

「毒を以て毒を制す」つていう言葉もあるじゃないか。彼……ガレスがその役割を担つてくれるかもしれないね。……それに、毒饅頭だとわかつてても食べなきやいけないときはあるよ」

マルスの覚悟を聞き届けたジエイガンだったが、しかしそれでも一抹の不安は拭えなかつた。

「ですが王子、あの男が王子の考えている以上の強力な猛毒だつたらどうします?」

「その時は……」

細めていたマルスの目が、ジエイガンの重ねての質問に更に細くなった。

「引き入れた者の責任を取らなきやね。……例え、刺し違えることになつても」

「……畏まりました」

マルスの決心を聞き届けたジエイガンが恭しく頭を下げた。そしてその頭を上げた時、ジエイガンの目は確固たる決心を固めていたのだった。



「やっ…」

同時刻、とある天幕の中。

奇妙な成り行きでこの軍に合力することになった黒騎士ガレスが椅子を引いてそこに腰を下ろした。

(妙なことになったものだ…)

単純にそう思う。死んだはずのこの身が生きていて、どこかもわからない場所で意識を取り戻し、場の流れがあつたとはいえあれよあれよという間にまた戦争に首を突っ込むことになったのだから。とはいえ、

(まあ、退屈はせんか…)

咽喉の奥でクククと笑う。これが平和で豊かで繁栄している世界とかだつたら退屈で仕方ないが、そんなことはなく戦争の真つただ中なのだ。ガレスとしては望ましい環境であるのは間違いない。

(しかし…)

そんな中、ある疑問が浮かんでくる。それは単純に、この世界は何処なのかということだった。意識を取り戻す前に最後に覚えているのがゼノビアの軍勢に討たれた己の姿だった。それを考えると、ここはあの世…死後の世界だと考えるのが一番しっくりす

る。

(だが…)

ガレスは首を回して己の左肩を見た。そこには、先ほどの戦いでベンソンに貫かれた傷痕があった。その後、僧侶から回復を受けたために外傷は塞がっているが、あの時の鮮血と鋭い痛みは紛れもなくこれが現実のものだとガレスに教えていた。

ならば、ここは何処なのか…。その答えかもしれない言葉を、ガレスは自然と呟いていた。

「転生…」

己を暗黒道に導いた魔導士ラシユデイ：彼が度々口にしていた言葉である。細かいところは詳しくは覚えていないが、意味合いとしては生をやり直す。新たな生を歩むといったところであろうか。先ほどの話し合いでマルスが引つかかり、そして下らん推論とガレスが述べたのがこのことだった。自分は転生してこの世界にやってきたのではないかと。

(あの時は聞き流していたが、今のこの状況は奴が言っていた転生によく似ている気がする。だが、何故俺が？　そして、何故こんな世界なのだ？)

仮にこれが転生の結果だとして、ガレスはそこが引つかかった。暗黒道に堕ち、暗黒魔法も使えるとはいえガレスは純然とした戦士である。転生に必要な要件など知らな

いし、儀式を行えるほどの魔力もない。何より引つかかったのは、何故自分に縁もゆかりもないこの世界に自分が墜ちてきたのかということだった。

（引き金が死であることは間違いない。俺の死が偶然にも転生の条件を満たした。だが、何らかの要素が欠けていたために、転生自体は成功したものの、こんな縁もゆかりもない世界に墜ちてきた…そう考えるのが一番妥当か）

そう推察する。だがこれも所詮は只の推論。何の裏付けもない空論にすぎないのである。

「まあいい…」

故に、ガレスはこれ以上考えるのをやめた。そして、今日の前にある現実に向ける。

「神の気まぐれか悪魔の所業かはわからんが、ここにこうして俺がいるのは事実。ならば、せいぜい楽しませてもらうまでのことだ…ククク…ハハハ…アツハツハツハツハツ…」

実に愉快そうにガレスが高笑いを上げた。その姿は、正しくゼノビアの旧臣たちが評したようにまさにオウガそのもののような姿だった。

こうして、かつてとある世界を恐怖に叩き落した一人の黒騎士が異なる時間、異なる

空間の世界で復活を遂げた。

そしてこの小さな歪みがこの先何をこの世界にもたらすのか、今はまだ誰にもわからなかった。

## NO. 01 出逢い

オレルアン平原での戦いを終えたアリティア軍は次なる目的地、オレルアン城に向かって行軍していた。その行軍の中に、一際注目を集める人物が一人。

「……」

「……」

「……」

誰も何も言わないものの、誰よりも注目を集めている漆黒の重騎士……そう、黒騎士ガレスである。指揮官級の面々が絶えずチラチラチラチラと視線を送っていた。その中身もまた恐怖に怯えているものもあれば、どう対応していいかわからないもの、そして一挙手一投足を見張っているものなど色々な思惑が込められていた。が、総じて感じられるのは

(警戒されているな……)

その一言だった。当事者であるガレスはそれを鋭敏に感じ取る。

(まあ、無理もない話か……)

何せファーストインパクトが余りにも強烈だった。加えてその後、マルスがガレスを

味方に迎えると指揮官級の面々に告げた時の微妙な雰囲気というか、どう表現していいのかわからない表情が、ガレスの加入をどう思っているかというのを如実に表していた。それは、現在の行軍の位置でも現れている。

ガレスは後軍に置かれ、その中でも最後方に配置されていた。無論、重騎士というところで行軍速度が遅くなりがちということもある。が、それだけが理由ではない。

やはり全軍の指揮官であるマルスと離しておきたいという狙いがあるのだろう。他の指揮官級が欠けても勿論痛手だが、それでも代わりは立てようと思えば立てられる。だが、総指揮官であるマルスの代わりは誰にも務まらない。それを考えれば、危険分子と離しておこうと考えるのは至極当然である。

事実マルスの周りには、ジェイガンをはじめカインやアベル、シーダなど歩行速度の速い騎馬兵や飛兵が周囲を固めていた。そして、抵抗する手段を持たないが負傷者の救護には欠かせないレナやリフ、戦闘にはあまり適任でないジュリアン、射手ゆえに接近戦は対処できないゴードンやカシム、ノルンが中軍を担っていた。

結果後軍はそれ以外のメンバーで構成されることになる。そして彼らは、グルリとガレスを取り囲む形で行軍を続けていた。そして、全員がガレスに注意を払っていた。

(クク……苦勞なことだ)

彼らの努力をガレスが嘲笑う。自分が何かをするつもりなら確かに必要なことだろ

う。だがそれはあくまでも、何かをするつもりなら…である。今のガレスには別に何を  
するつもりもなかった。

暗黒道に堕ち、暗黒道に呑まれたとはいえ、転生した影響…それも、異世界に転生し  
た影響からか、ガレスには支配欲や世界を混乱させるつもりはなかった。ここが自分  
いた本来の世界ではないことも影響しているのだろう。この世界を力で支配したとこ  
ろで、ゼテギネアが蘇るわけでも、エンドラが喜んでくれるわけでもない。それを考え  
ると、そんなことに労力を使うのはバカバカしくなったのである。

ただ、暗黒道の支配から抜けられなかった部分もあり、その一つが戦闘に対してであ  
る。ガレスの戦闘意欲は尽きることがなかったのだ。そのため、いかに戦いで楽しませ  
てくれるかということが今のガレスにとっては何よりも重要なことだった。

(転生…か)

ガレスがそのことに思いを馳せる。というのも、一つ、それが影響したと思われるこ  
とがあつたからだ。

(まさか、若返っているとはな…)

その時のことを思い出す。マルスとの話し合いが終わり、自部用に用意された天幕の  
中で、ガレスは久しぶりに兜を脱いだ。そして、鏡に映る己の姿を見て驚きに止まっ  
てしまったのだ。というのも、そこに映っている己の姿はどう見ても二十前後の若かりし

頃の姿だったからだ。

暗黒道の影響でエンドラは時が止まったかのように己の若かりし頃の姿を保っていた。無論、ガレスも同じ力の恩恵を受けたために実年齢は六十を超えていたものの、若かりし頃の姿を保っていたのだが、一度死に、己の知らぬ世界に転生してきた今も尚、その時の姿のままなのである。

だが、己が最早完全には暗黒道の支配下にないことをガレスは理解していた。先述の通り、この世界に対する支配欲や世界を混沌に導くつもりがまるでなくなったことと、それに反するかのように戦闘意欲が尽きないことがいい例である。もし未だに己の全てが暗黒道に取り込まれていたら、どんな場所でもどんな状況でもお構いなしに破壊と混沌に向かって突き進んでいただろう。そんな意識がまるでなくなったのが、完全にというわけではないといえ暗黒道の支配下から解放されているいい証拠だった。

(これも、縁もゆかりもない世界に転生してきたことによる影響なのか?)

そうとしか考えられなかった。転生の秘術が実際にはどのようなものかはガレスにはわからない。だが、その影響としか考えられなかった。

(まあ、好都合なことには違いがないが)

ガレスが一人納得する。戦いをするのなら、若いに越したことはない。年輪を重ねれば成る程豊富な実戦経験というものが得られようが、それと引き換えに碌に戦えないの



であれば、ガレスは若さを望むのだった。

とは言え、己がある程度しか暗黒道の影響下にならないというのであれば、油断すれば普通に死ぬことになる。そこは注意しなければいけない。だが、それもガレスにとつては戦闘を楽しむためのスパイスでしかなかった。

（常に死と隣り合わせのこの感覚…久方ぶりに思い出したぞ。好き勝手に戦い続けるのもあれはあれで面白いが、己の生命を賭けるこの感覚。ククク…）

鎧の中で声を押し殺して笑うガレス。生命を懸けるといふ要素は実に今の自分を楽しませるものであった。周囲に悟られぬようにひとしきり笑った後、ガレスは己の現状について整理する。

（暗黒道の支配下ではなくなったのは確かだ。だが、完全に影響がなくなつたかというところでない。目が真紅のままなのと、戦闘狂いのこの性と、自らの得物を苦も無く扱える身体能力。そしておそらくは暗黒道の力を借りて成す、あの力も健在だろう）

あの力に関しては、いずれどこかで試してみないことにはと思っていたが、それでもこうして考えると、戦闘に関する能力はそのままに、支配欲とか世界を混沌に導くという思惑が削ぎ落されただけということになる。ある意味、マルスが上手く扱えばとんでもない戦力になるのが今のガレスだった。

（だが…）

ガレスはそれをマルスには言わなかった。自分もてっぺんに近かった者として、てっぺんに立つ者によって、その下がどうなるかはよくわかつているからだ。マルスが自分を使うに値する者かどうか見極める必要があった。

もしその器でもないのにいいように使われたらガレスにとつては業腹である。その時はこの軍勢を敵に回す覚悟でマルスを惨殺しても気が納まらないだろう。故にガレスは口を噤んだ。先述の通り、まずはマルスの人となりを見極める必要があると判断したからだ。

もつとも指揮官の色というものは多かれ少なかれ率いる軍に表れるものである。指揮官が傍若無人なら兵士だって尊大になるだろうし、規律を守らないようなら、兵士たちも同じく軍規など守らなくなる。

(まずはそれを見させてもらおうか)

当座の方針を決めると、ガレスは傍らに視線を向けた。

「おい」

「何だ」

その視線の先にいた者：モロドフが答えた。実はモロドフはガレスに道すがら、この世界の基礎知識を教えていたのである。だがこれも紆余曲折あった。

自分たちが想像もできない遠いところから来た（と思っている）ガレスにこの世界の

基礎知識を教える役目をマルスは誰かに任せなかった。だが、指揮官級はほぼ全員顔を引き攣らせ、そうでない者もおよそ人に物を教えるのは不向きな面々だった。どうしたものかとマルスが頭を悩ませているのを見かねたモロドフが、その役目を買って出たのである。無論、モロドフにも買って出た理由はあった。

やはり一番は、自分が古い先短いというのがあつたのだろう。いつ死んでも悔いはないという思いがあるためにこの危険な役目を買って出たのが一つ。そしてもう一つは、同じく老齢ながらも戦場に立てるジエイガンヤリフとは違い、自分は戦場に立つことはできない。彼らが欠けることはそのまま戦力の低下を意味するため、戦力としては貢献できていない自分がこの役目を担うのが一番適任だと思つたからである。そのため、モロドフがマルスに名乗り出てその了承を得たのだった。

実際最初はマルスも気乗りしていなかったが、今の理を話してマルスを説き伏せた。こうして、モロドフは一時的にはあるがガレス付きとなつたのであつた。

「次の目的地はまだなのか」

そして、道すがらこのアカネイア大陸に関する色々なことをレクチャー受けながら行軍してきたガレスは、モロドフにそんな質問を浴びせかけた。

「そろそろ見えるはずだがな」

モロドフがそう答える。オレルアン平原からオレルアン城までの距離と、軍の行軍速

度から推測するに、そろそろオレルアン城が見えてくるころだった。

「次は…オレルアン城とか言ったか」

ガレスはモロドフのレクチャーを思い出しながら一人ごちる。

「そうだ」

モロドフもガレスの呟きに頷く。

「クク…城攻めか。楽しいことになりそうだ」

愉快そうに肩を震わせるガレスを嫌悪感満載の目で睨み付けるモロドフ。それと同じに、ガレスを取り囲むように警戒している指揮官級の面々もさらに警戒心を上昇させた。

そんな微妙な緊張感に包まれたのも僅かの間。視界の先に城の姿が目に入ってきた。アリティア軍の次なる目的地、オレルアン城であった。

「よし、全軍出撃！」

マルスの号令と共に、アリティア軍がオレルアン城を目指して進軍する。迎え撃つのは先のオレルアン平原の時と同じく、マケドニア軍だった。

「騎馬部隊は先行してオレルアン城へ！ 歩兵部隊は近辺の敵軍の掃討を！」

マルスの指示に従い、軍が動き始める。その指揮能力、そして用兵は年齢に反してなかなかのものだった。

（成る程な。どのぐらいの修羅場を潜り抜けてきたかは知らんが、中々の指揮官振りといったところか）

ガレスがその様子を見て率直に感じた感想である。まだ軍の規模がそれほど大きくないからというのもあるかもしれないが、手並みとしては取り敢えずは十分なものだった。

「フーン」

マルスに対する評価をしていたところで前線で討ち漏らした敵兵が向かって来たため、ガレスは斧を一閃してその敵兵を排除した。そして、そのまま斧を肩に担ぐ。

「…つまらんな」

思わず正直な感想を述べてしまった。というのも、ガレスに与えられた役割は先陣ではなく後詰めめの護衛任務だからである。

物資の守備や、非戦闘員の警護なども軍単位で動くとなれば大切な任務ではある。だが、前線を始めとする戦闘地域であらかたの敵兵は排除されるため、後詰めの方まで迫ってくる敵はほぼいなかった。もつとも、後詰めが戦闘に晒される状況となったら、ほぼ軍が瓦解している…というか、敗北の状況になっているのだから、後詰めが暇なの

はいいことなのだが。

だが、ガレスにとつては物足りないことこの上ない。せっかく戦えると思つたら、与えられた役割は後詰めの護衛なのだ。これではせっかくの力も振るいようがなかった。

(まあ、警戒しているのならば当然の措置だがな)

理解はしている。もし自分がマルス：アリティア軍を率いる者の立場だつたら、底の見えない不気味で警戒すべき存在を前線で使うなど、危なつかしくてとてもできやしない。それ故に、前線に置くことはできなかつた。となれば必然的に、ガレスが回されるのは後詰めしかなくなるのである。とは言え、ガレスによつて非戦闘員や物資を壊滅させられる恐れもあるのだが、そうはさせじと今回の出撃に加わらなかつた指揮官級の面々がガレスの身動きを封じるかのように目を光らせていた。

もつとも、ガレスがその気になればその連中ごと血の海に沈めるのはたやすいことだが、ガレスにはもうそういつたつもりもなかつた。別にアリティア軍に義理立てしてゐるつもりはないが、かと言って寝返つたところで何かあてもあるわけではない。今更生命を惜しんだりはしないが、かと言って無駄に散らすようなバカバカしい真似もする気はなかつた。

(まあいい。駒が足りなくなれば、そのうち前線にも出ることになるだろう)

それまでは身体慣らしにのんびりとさせてもらうか。そう割り切ると、ガレスは戦局

を觀察した。近辺の敵の掃討は終わり、残すは城周辺の敵のみになっている。そんな中、

(ん?)

ガレスは妙なものに気付いた。見知らぬ顔がアリティア軍に加入して前線で戦っているのだ。五騎の騎馬に率いられた騎兵と騎馬弓兵の部隊がいつの間にかアリティア軍に加わっていた。その中で一際目立っていたのが、頭にターバンを巻いた一人の男の騎士だった。

(あれがハーデインか)

その姿を見てガレスがそう推察する。ここに来るまでにモロドフから聞いたオレルアンの騎士のこと。そして、その騎士団長は“草原の狼”の異名を冠する有能な騎士だということ。

(成る程、腕前は確かなようだ。脇を固めている連中がまだ頼りないからともいうのもあるが、あの男の戦果が際立っている)

冷静に分析する。

(それに、年恰好からしてもマルスたちよりも年上だ。その分の経験は、今後アリティア軍の中で生きてくるだろうな)

マルスとハーデインがどのような関係を築くかはわからないが、もし上手く協力でき

たら互いの至らない部分を補い合うことができ、アリエティア軍としても強力な戦力を迎えられることになるだろう。だが、そうならなかった場合は下手したら空中分解する恐れもあった。

(まあ、どちらに転ぼうが俺にはどうでもいいことだがな)

そうなるのだつたら所詮、マルスはその程度の器である。自分を使いこなすなど夢のまた夢の話だとガレスは思っていた。そんなことを考えていると、前線から早馬が来た。

内容は、前線までの安全は確保したから後詰めもゆるゆると進軍してきてほしいというものだった。決着がついていないのに些か早計だと思いましたが、後詰めが前線に到着する頃には戦闘が終了していると判断したのだろう。

(どちらにせよ、指揮官の命令ならば従わぬわけにはいくまい)

ガレスがそう判断した。既に、出撃していない他の指揮官級が後詰め移動のために矢継ぎ早に指示を出しており、ガレス自身は何もやることがなかった。

(ククク…優秀な連中だ)

アリエティア軍の指揮官級の手並みを心中で褒めるガレス。若年層が多いだけあって手際よく…とはいかなかったが、それでも必死になって立ち回っているのが手に取るようにわかった。



(さて、俺はどうするか…)

予想外に暇になってしまい、手持無沙汰となったガレス。そんな時、ガレスはあることに気が付いた。

(ん…?)

グルリと首を回してある方向に視線を定める。

(これは…)

オレルアン城南方。渡河したアリティア軍本体を追って後詰めが城へ向かっている中、全くの逆方向に当たるこの場所に、一人の人物が歩いていた。漆黒の甲冑に身を包んだ黒騎士、ガレスである。

誰も側にいない中、悠然と一人目的地に向かって進むガレス。やがて、ガレスはとある場所で足を止めた。

(…?)か…)

そして、目の前のものを見上げる。それは、一つの砦であった。

進軍方向と真逆の南方にあるこの砦にガレスが赴いた理由。それはただ一つだった。

(血の匂いがする…)

それが、先ほどガレスが気付いたことだった。ここは戦場だけに、血の匂いがするのは別に不思議なことではない。ガレスが気になったのは、非戦闘地域であるこの場所から血の匂いがしたことだった。

非戦闘地域で血の匂いがするということは、何かしらがあつたのを意味することに他ならない。そして、血の匂いということはつまり、流血沙汰があつたということである。それを示すかのように砦の入り口付近は無防備にも開け放たれ、外から見える範囲に幾つかの死体があつた。

(「こんなこじんまりとした砦に何がある?」)

それを確かめるべく、ガレスはゆっくりと中に入っていったのだつた。

「下がりにさい、下郎!」

その頃、砦の最上階ではちよつとした修羅場が繰り広げられていた。飢えた目つきをした数名の兵士が、一人の少女を取り囲んでいたのである。

少女は、まだ少女という年齢ではありながら威厳と気品が端々に滲み出ていた。只者ではないことは一目でわかる雰囲気醸し出している。対して兵士たちは飢えた野獣のような目つきで少女を品定めしていた。こちらは逆に、雑魚であることが手に取るよ

うにわかる小物つぷりであった。

「ヒヒヒ…」

兵士の一人が下卑た笑い声をあげる。

「まさか、こんこんなところにいたとはな」

「ああ。落ち延びる最中に偶然見つけたのだが、運がいい。何せ、大賞首よりも余程価値があるからな」

「ドルーアに引き渡せば、俺たちの将来は間違いなく安泰だ。…だがその前に、楽しませてもらおうか」

兵士たちの下卑た顔が更に歪んだ。

「来ないで！ 来れば今ここで生命を断ちます！」

男たちの欲望に晒された少女が精一杯の虚勢を張る。こうなつては、どうあがいても自分の将来は目に見えていた。どうせ死ぬのならば、凌辱されて純潔を奪われる前に己の運命を決めようと思えるのは当然のことである。だが、

「ふん、あんたにそんなことはできないよ」

兵士の一人が少女の覚悟を鼻で笑った。

「愚弄しないで！ これでも私は王族の端くれです！ 自害の覚悟くらいできています！」

「そう言う意味じゃないんだよ、お姫さま」

他の兵士が補足した。

「何ですって?」

少女が鋭く眼前の兵士を睨んだ。

「わからないか? あんたが死ねば、アカネイア王家はすべて死に絶える。そうなれば、反乱軍は今度こそ終わりだろう。戴く盟主がいなくなるんだからな。その結果、夢も希望も無くなった連中は一生を奴隷として生きていくのさ。あんたはそういった連中の希望や未来よりも、己の誇りや純潔を選んで逃げだすのか?」

「ッ!」

兵士の指摘に少女が唇を噛んだ。

「ですが、貴方たちに捕まったところでどうせ殺されるのは同じでしょう!」

「だが、すぐにはそうはならない。ドルーア本国に護送される間に助けがくるかもしれないし、公開処刑ならその時に助けがくるかもしれない。限りなく可能性は低いが無ではない。だがここで自決すれば、ここですべて終わりだ。どちらを選ぶかはわかりそうなものだがな」

「……」

少女が悔しそうに唇を噛んだ。名もない雑兵にここまで言われるのは屈辱だが、もつ

と屈辱なのは向こうの方に理のあることがわかってしまったからである。一々、その言葉が胸に突き刺さった。

「王族としての責任を投げ出すおつもりか？」

戦火の中、あの時言われた一言を思い出す。

(カミュ…)

その姿を思い出し、少女の心は重く沈んだ。

(私はまた、同じ過ちを繰り返そうとしていたのですね…)

少女の身体から力が抜け、その場にへたり込んだ。その様子に、兵士たちがニヤリと表情を歪ませる。

「まあ、俺たちは死体でも構わないけどな。楽しめないのが残念だが、どちらにしろ死ぬ運命だから、それが早くなるか遅くなるかの違いだ」

兵士たちがジリジリと少女に近づく。己の目の前に迫る絶望的な運命に彼女の視界がぼやけ、そして何も見えなくなるうかとしたところで、それは起こった。

「…随分と面白いことをしているな」

少女、そして兵士たちの背後から第三者の声が突然響き渡った。

「！」

「誰だ！」

全員が振り返って声のした方向に首を向ける。少女も、砦の壁に背を預けながらよろよろと立ち上がった。そこには、全身を漆黒の鎧で固めた一人の重騎士、ガレスの姿があった。

「何だ、お前?！」

兵士の一人がガレスをジロリとねめつける。だが、ガレスはそんな兵士を気にも留めずに辺りを見渡した。

(女に群がる男の集団か…わかりやすい構図だ)

鎧の中でガレスが侮蔑気味に唇を歪めた。しかも、女とは言え彼女はどう見ても少女だった。それに襲い掛かろうとは、

(ここいつら、余程堪っていたのか? それとも、ガキにしか興味のない変態どもの集まりか?)

ガレスがそう推察するのは仕方のないことだった。だが、すぐに頭を切り替える。

(フン、まあいい)

ガレスの興味は既に兵士ではなく、少女に向いていた。呆然とした表情で自分を見ている少女と目が合う。と言っても、フルヘルムの兜をかぶっているガレスと目が合ったとは少女は認識していないかもしれないが。

(……)に来る前に一通り聞いた情報。そして、年恰好に姿形を考えれば……)

ガレスの頭脳が一つの答えを弾き出した。

「…お前がニーナか？」

己の名を呼ばれ、少女…アカネイアの王女ニーナが唇を震わせながら尋ねる。

「あ、貴方は一体…？」

「フン、さてな」

はぐらかすと、視線をニーナから兵士たちに移す。

「どう見ても、王女様を護る護衛の者には見えないが、貴様らはマケドニア軍の残党か？」

「だったら？」

「失せろ。貴様らのような雑兵、殺す気にもならん。生命だけは助けてやる」

ガレスの尊大な物言いに兵士たちは一瞬間喰らったが、すぐに口々に嘖き出した。

「貴様、バカか」

「丸腰の癖に、何ほざいてやがる！」

「身の程を知るのは、テメーだよ」

そして次々と兵士たちが得物を抜いた。そう、兵士たちの言う通り、ガレスは己の得物を手にしてなかった。武器を持つことなく、ここにやってきたのだ。人数的にも状況的にも、自分たちの絶対的優位を信じて疑わない兵士たちはニーナを離れてガレスに近

寄り始めた。まずは邪魔者を始末してからゆっくり楽しもうという腹積もりに変えたのだらう。

「フン」

ガレスはそんな兵士たちを鼻で笑うと、兵士たちに合わせていた視線を再びニーナに合わせる。

「おい」

そして、ニーナに声をかけた。

「な、何か？」

ニーナが答えた。

「目を瞑っている」

「え？」

「目を瞑っている。理由はすぐにわかる。何だったら、耳も塞いでおけ」

「あ……う……」

ガレスの雰囲気気圧され、ニーナは機械仕掛けの人形のようにコクコクと頷いた。言われた通り、ニーナはその場で目を瞑る。直後、

「ぎゃあつー！」

一人の兵士の断末魔の悲鳴と、とんでもない衝撃音が響き渡った。



「ヒッ！」

身を竦ませたニーナの耳に、次々と言葉が届く。

「ダメエ！」

「やりやがったな！」

「ぶっ殺してやる！」

直後、先ほどと同じような断末魔と轟音。そして、肉を挽き潰したような不快な音がニーナの耳に届いた。慌ててニーナは耳も塞ぎ、嵐が過ぎるのを待った。

どのくらいの時間が流れた後だったろうか、不意に、ニーナの肩に手が置かれた。

「！ いやあつ！」

条件反射的にニーナが手を振り回す。だが、すぐにそれは拘束された。そして、

「慌てるな」

ガレスの言葉がその耳朵を打った。

「あ、貴方……」

その声色にホッとしたニーナが目を開こうとする。が、

「目を開くのはまだ早い」

ガレスがそれを制した。そして、

「歩けるか？」

ニーナにそう尋ねたのだった。

「え、ええ…」

ふらつきながらもニーナが立ち上がる。

「結構。では行くぞ」

ガレスはそのままニーナの手を取ると、遠慮なく歩き出した。

「あ…」

男に手を引かれて歩くことなど久しぶりのことだったからか、ニーナは少し戸惑った感じでガレスに引かれてその場を歩き始めた。

「ここからは階段だ。足元に注意しろ」

「はい」

すっかり大人しくなったニーナを先導しながらガレスが少し階段を降りる。そして、もう目を開けてもいいぞで

階段の降下途中でニーナの手を放すと、ガレスはそう伝えた。

（あ…）

鎧のためにその温もりは感じられなかったが、それでも頼りになる大きくなががっしりした手が離れてゆき、ニーナは寂しさを感じた。だが、それも一瞬。己を顧みずにズンズンと先へ進むガレスを、ニーナは慌てて追いかけた。

「その…」

ガレスに追いついたニーナが躊躇いがちに口を開く。

「何だ？」

後ろを振り返ることなく、ガレスが口を開いた。

「幾つか質問しても構わないでしょうか？」

「ああ」

「ではまず一つ。何故私にあの時、目を瞑れなどと？」

ニーナがその真意を尋ねた。

「…お前は、人の内臓が飛び散っている光景や、グシャグシャに潰れた顔が見たいのか？」

その質問に関するガレスの返答は実に明快で簡潔なものだった。その場面を心ならずも想像してしまい、ニーナの表情が蒼ざめた。

「そういうことだ…」

「わ、わかりました」

「後でこの砦は焼き払うなり取り潰すなりするのだな。アカネイアの姫君が犯されかけた砦など、お前たちにとっては縁起の悪いものでしかないだろう」

「それは、ハーデインの決めることです」

「フン、まあいい。俺には関係のないことだ。お前たちの好きにするがいいさ」

危機が去つて大分落ち着いてきたからか、ニーナの様子も徐々にいつも通りに戻つていく。

「では次に、何故丸腰なのです？ 助けてくれたことに礼は言います。ですが、武器も持たずして立ち向かうなど、あまりに不用心ではありませんか？」

次にニーナが尋ねたのはガレスが得物をもつていないことだった。さっきの兵士たちが嘲つていたように、ガレスは丸腰でここに来たのである。普通ならば武器を手にした集団に、無手で挑むのは無謀以外のなにものでもない。

「俺の得物は長柄の斧でな。あんな狭い室内でそんなものを振り回すわけにもいかんだろう。だったら、最初から持つていないほうがいい」

「で、でも、丸腰で立ち向かうなんて……」

「あのバカどももそう思っただろうさ。だからこそ、ナメてかかってくるしてくれた。結果は言うまでもないだろう」

「それは、それこそ結果論でしょう？ あの中に、一騎当千の兵がいたらどうします？」

「そんな連中は、我欲を満たすために無抵抗な女に襲い掛かるようなゲスな真似はしないだろうよ。それに……」

「？ それに？」

「いや…」

言いかけてガレスは口を噤んだ。得物はなくとも、ガレスにはもう一つの力があつた。だがそれは、まだこの世界では使つたことのない力である。もしかしたら使えなくなっているかもしれない以上、口にするのは憚られた。

（まあ、先ほどあれが使えることがわかつたからな。だったら、暗黒魔道も心配はないと思うがな…）

それでも、実際にそれがわかるまでは油断は禁物である。と、

「では、最後に一つ」

ニーナが再び口を開いた。

「ん？」

「貴方、一体何者なのです？」

「俺か？ 俺はな」

岩の出口に辿り着き、口を開きかけたところでガレスがその身を止めた。

「??？」

どうしたの？ と尋ねようとしたところで、ニーナの耳に聞き覚えのある声が届いた。

『貴様、何者だ!？』

その声を聴いた途端、ガレスの影からニーナが砦の入り口に姿を現した。

「お待ちなさい!」

ニーナの目の前には、見知った顔の二人の騎士がいた。

「! ニーナ様!」

「御無事でしたか!」

ニーナの無事を確認し、その二人の騎士が表情を綻ばせた。

「ウルフ! ロシエ! 武器を収めなさい!」

「ニーナ様!」

「しかし…」

名を呼ばれた二人の騎士、ウルフとロシエが逡巡する。ニーナの横に立つガレスが何者かわからないのだから当然だが。

「この者は私を助けてくれたのです。恩人に刃を向けることは私が許しません!」

「ニーナ様…」

「畏まりました」

そこまで言われては武器を収めないわけにもいかず、不承不承ながらウルフとロシエは武器を収めた。

「失礼しました」

「構わんさ、少し驚きはしたがな。だが、臣下としては当然の行いだらう」  
そこでガレスはニーナを置き去りにして歩き始めた。

「あ…」

「迎えが来たのなら、俺はもういいだろう。後はこの連中に任せる」

そのまま、ウルフとロシエの横を通り抜けようとしたところで、

「待て」

不意に、ウルフが口を開いた。

「…何だ？」

足を止め、ガレスがウルフに振り返る。

（！…何だ、こいつの醸し出す雰囲気は…）

ガレスの尋常ならざる気配を向けられ、ウルフは思わず気圧された。それでも、それを表面に出さなかったのは流石である。同じようにロシエもガレスのその尋常ならざる気配に畏怖の念を感じたが、それでも表面上はそれを見せることはなかった。

「貴様…何者だ？」

ゆつくりと口を開き、先ほどと同じことをウルフが尋ねた。ウルフとロシエの登場で有耶無耶になってしまったそのことを聞く機会が訪れ、ニーナも耳をそばだててガレスの返答を待った。

「あの女……ニーナを助けたことからわかるだろう？」

「……アリエティア軍の者だともいうのか？」

「そうだ」

ガレスが頷く。

「だが貴様のような輩、先ほどの戦場では見なかったぞ」

「その辺はマルス王子に聞くのだな。縁があれば次の戦場で会うだろう」

それだけ言い残すと、ガレスはその場を後にした。取り残されたニーナたち三人はガレスの背中を見送ったまま、少しの間固まってしまったかのように動けなくなっていた。



## NO. 02 両断

オレルアン城近辺の敵を一掃し、城門を護る敵の守将ムラクを倒したアリティア軍は、オレルアン城を奪回すべく慌ただしく城攻めの準備をしていた。その中には、先ほどの戦いで合流したハーディン率いるオレルアン軍の姿もあった。

アリティアとオレルアン。この二つの連合軍が力を合わせて城攻めの準備をしている中、ガレスは少し暇を持って余っていた。

(やれやれ、手持ち無沙汰も考え物だな)

つい先日軍に加わったということに加え、率いる兵卒がない身では身一つの支度を終えればそれで終わってしまう。誰かの手伝いなどという殊勝な心掛けがあるわけもなく、ガレスは何をするでもなくしばしオレルアン城を見つめていた。と、

(ん?)

あることに気付いたガレスがオレルアン城から視線を外す。

(そうか、終わったか)

そしてガレスは、人目につかないように注意しながら近くにある森の中へと入っていった。

「……」

森の中に入ったガレスが、その場に佇んでジツと何かを待つ。と、少し経ってから近くの繁みがガサガサと音を立てた。ガレスがそちらに首を向けて先ほどまでと同じように待っていると、やがてその繁みから現れたのはガレスだった。

二人のガレスは向き合うと同じタイミングで軽く頷く。と、先ほどまでオレルアン城を見つめていたガレスの姿が薄くなり、そしてもう一人のガレスへと吸い込まれるようにして消えて行った。

そして一つになったガレスは、何もなかったかのようにその場を後にしたのだった。

(ククク…)

再び、オレルアン城手前。先ほどまでもう一人の自分がいたところまで戻ってくる。と、ガレスは内心で不気味に笑った。

(この力、衰えてはいないようだな…)

そして漆黒の鎧の中で満足そうに頷くと腕を組む。先ほどまでのあの光景はもちろん幻覚などではなく、ガレスの暗黒魔道の副産物の一つであった。

ゼテギネアの皇子として戦っていたとき、魔導士ラシユデイから与えられた暗黒魔道

の力の副産物の一つとして、ガレスは己が分身を創ることができるようになった。そしてその力は、この世界でも健在だった。

そもそも、現在味方からの厳しい視線にさらされているガレスが、どうして単独行動をすることができたかと言えば、この力を使って自分の分身を創り、その分身をアリア軍と同行させていたからであつた。だからこそ、ガレスは自由にあの砦まで赴くことができたのだ。得物を持っていかなかったのもそのためである。ニーナには得物を持つていない理由を狭い室内で振り回せないからだといった。確かにそれも嘘ではないが、もう一つの理由があつた。本体の自分が得物を持つていけば、分身の手には得物がなくなる。そこを突っ込まれると後々面倒なことになるため、分身に得物を持たせて自分は無手で赴いたのである。

また、ただでさえ警戒されている現状だけに、この力のことは他の者には話していなかった。このことが漏れれば、非常に面倒臭いことになるのは手に取るようにわかるからである。もつとも、ガレス本人としては分身を創る能力がこの世界でも使えるということがわかつただけでも収穫である。

(暗黒魔道の副産物であるこの力が健在ならば、魔道の本来の使い方であるあの力も使えるとみて間違いはないだろう)

面白いことになりそうだし。そう、一人ごちたガレスの耳に、出撃の号令が下る。

「行くか」

ガレスが得物を持って歩きだした。城内戦ということもあり、今回はガレスにも出番が回ってきたのであった。

そして、オレルアン城内の攻防戦がここに始まったのだった。

「フーン！」

「ぐあっ！」

通路を塞ぐアーマーナイトをガレスが切り捨て、進路を確保する。その進路を、カインやアベルなどの騎兵部隊が駆け抜けていく。その後ろに、ジュリアンや先ほど仲間になったりカードといった盗賊が続いた。オレルアン城には貴重な宝も多く、それを持ち逃げする盗賊を倒すため、あるいは先に、そういった宝を確保するための采配だった。そして、ガレスやドーガといった重騎士が敵を迎え撃ち、その背後からゴードンやカシムといった弓部隊やマリクの魔法部隊が援護をし、残敵の掃討やガレスたちの脇を固めるのが歩兵部隊という布陣であった。

そういった状況でも、ガレスに向けられる視線は友好的なものではないが、その中で特にガレスに厳しい視線を向けている人物が三人。先ほど、ニーナを助けた砦で会った

ウルフとロシエ。そして、その主であるハーデインだった。

(ククク…鬱陶しい連中だ)

無論、ガレスはその視線に気付いているが、放っておいた。心中でどう思っているかとはともかく、今は味方である。その背後から斬りつけるようなバカな真似はするまい。そんな真似をしたら大なり小なりアリティアとオレルアンの間で不和や禍根を残すからだ。そうなつてはどうなるかは火を見るより明らか。だからこそ、ガレスは鬱陶しいと思うだけで特に気にも留めずに放っておいた。

敵兵と斬り結びながらそんなガレスを遠目で見るオレルアン騎士団の面々は、ガレスをつぶさに観察していた。

「ハッ！」

「ぐわっ！」

剣を振り下ろしてまた一人の敵兵を切り捨てたハーデイン。そのままその剣を鞘に納めたその周りを、彼の部下であるロシエたち四人が固める。

「成る程…」

少し敵の勢いが弱まったところで、ハーデインが徐に口を開いた。

「ロシエとウルフの言った通りだな。あの男…かなりの使い手だ」

遠目でガレスの戦いぶりを見ながら、ハーデインは素直な感想を口にした。

「ハーディン様」

「ロシエ、ウルフ、しつこいようだがもう一度だけ尋ねる。ニーナさまは本当にあの男に助けられたのだな？ 乱暴されたわけではないのだな？」

「はい」

ロシエが頷いた。

「ニーナ様が御自らそう仰いました。また、衣服も乱れた様子はなかったため、間違いはないかと」

「それに、もしそうならばあの男と共に砦を出てくるはずもなければ、かばうこともないでしょう。ですから、ニーナ様の仰られた通りだと思います」

「そうか……」

複雑な表情でハーディンがガレスを睨む。助けてくれたことには感謝しているが、ガレスが得体の知れない存在であることが苦々しいのだろう。

「しかしハーディン様、そうなると別の疑問が浮かんできます」

部下の一人、ザガロが口を挟んできた。

「別の疑問？」

「はい。あの男は何故、あそこにいたのでしょうか？ ロシエとウルフが砦の異変に気付いたのは、戦いが終わってニーナ様にその報告に伺った時です。本来、こんなことを

言つてはなりません、あの男がいなかったらニーナ様は乱暴されて連れ去られているか、最悪あの場で御命を奪われていた可能性があります。そこをあの男が助けた…たしかにたまたまかもしれませんが、タイミングが良すぎるとは思いませんか？」

「…何が言いたい？」

ハーデインが尋ねた。

「あの男が敵と繋がつてゐるっていつのか？」

「そこまでは…」

ビラクの指摘に、ザガロが苦々しい表情で首を左右に振つた。

「ですが、確かにタイミングが良すぎるのは事実です」

ロシエがザガロの意見に同意した。

「確かに本当に偶然あのタイミングであの砦を訪れたのかもしれませんが、そんな確率はどれほどのものか、ハーデイン様もお分かりいただけだと思います」

「そうだな」

部下たちの意見には反論する余地もなく、ハーデインは頷くしかなかった。

「マルス王子は、あの男に対してどう言つてゐるんです？」

ビラクがハーデインに尋ねる。

「おかしなことを言つていた」

「おかしなこと?」

「ああ。空に穴が開き、そこから落ちてきたとな」

「は!？」

ザガロが素つ頓狂な声を上げたが、それは他の三人も同じだった。皆、目を丸くしているとかバカバカしいといった表情になっていた。

「冗談…じゃないですよね?」

ウルフの言葉にハーディンが頷く。

「最初は、私も何を言ってるのかと思っただ。だが、あまりにも真剣な表情でそう言うのでな。それに、マルス殿の側近たちも皆真剣な面持ちでそのマルス殿の言葉に賛同していたのでな」

『……』

どういった反応を取っていいかわからず、四人は口を噤んでしまった。いきなりそんなことを言われても信じろという方が無理な話だけに仕方のないことであるが。

「だが、あれほどの手練れ…」

ハーディンの視線の先には余裕の戦いぶりを見せるガレスの姿があった。アリテイア軍もまだガレスとの距離感を掴み切れていないのか連携に隙があるが、それでもそんな些末なことを感じさせないほどの戦いぶりであった。



「騎士であれ流れ者の傭兵や戦士であれ、その名が聞こえてこないはずがあるまい。ならば、降つて湧いて出たと言われた方が納得も行く」

「ハーディン様?!」

「まさか、本当にマルス王子の言われたことを信じられるのですか?」

ロシエがハーディンの言ったことに目を丸くし、ザガロが主人に対して確かめるように尋ねた。

「まさか。だが、あの男の裏はしつかりとった方が良いだろう」

そして、ハーディンはウルフに首を向ける。

「ウルフ、お前に任せる。あの男を探れ。どんな些細な情報でも構わん。何かわかれば逐一私に報告せよ」

「はっ!」

「さて、ではこの件についてはこれぐらいにするか」

再びハーディンが剣を抜く。それに倣うかのようにロシエたち四人も己の得物を構えた。

「ここは我らの城だ! アリティアに遅れは取るまいぞ!」

『おお!』

腹心の四人の部下と共に、ハーディンは再び前線へと切り込んでいったのだった。

(フン、やつと動いたか)

視界の端でそのハーディンたちの姿を捉えたガレスが鼻を鳴らした。

(何をゴチャゴチャ密談していたのかは知らんが、いい御身分なことだ。…まあ、何を話していたかは大体わかるがな)

戦闘の間も、ハーディン率いるオレルアンの軍勢の視線は絶えず感じていた。それを考えれば、自分についてあーだこーだやいのやいの言っていたのであることは簡単に予想出来ることだった。

(俺を探るのなら好きに探ればいい。徒労に終わるだけだからな)

転生によつて異世界であるこの世界に落ちてきたガレスにとつては、この世界でのバックボーンも遍歴もあるわけではない。叩いても埃など出るはずもなかった。とは言え、そんなことを丁寧に見えるほどガレスが親切なわけではない。

(合流してからのというもののずっと鬱陶しい視線を向けてくれるからな。せいぜい無駄骨を折ることだ)

いつものようにクククと笑うと、ガレスは周囲に視線を向ける。城の中間地点までは制圧したとあつて、周囲にはもう敵兵の姿はどこにも見えなかった。

(残党討伐は他の連中に任せてもいいだろう。俺ばかり働くのも癪だしな)

残すは玉座付近を固める敵だけになった。だったら、急ぐ必要もないだろう。それ

に、元々が重騎士であるガレスはどうしても行軍速度は遅くなる。ならば、少しぐらい遅れても誰にも文句は言われまい。ガレスはそう判断するとゆっくりと玉座に向けて歩き出したのだった。

「くっ、くそ！ 思い上がるな反乱軍の兵士ども！」

オレルアン城の玉座では、この城の実質的な守将であるマリオネスが未だ立ちはだかっていた。鎧で身を固めたアーマーナイトよりも更に重厚な鎧に身を包んだジェネラルのため、容易に武器でダメージを与えることはできなかった。そのため、ここは魔導士の出る幕となる。

「マリク、魔法を！」

「はい、王子！」

マリクが進み出て魔法の詠唱に入る。それを見た瞬間、マリオネスがニヤリと笑った。

「撃て！」

不意に、マリオネスが命令する。と、玉座の左右にある柱の陰に隠れていたアーチャーが姿を現し、マリクに向かって矢を放った。

「！ 危ない！」

詠唱に入っているために瞑目して集中し、その矢に気付いていないマリクを救ったのはオグマだった。素早く横から体当たりを仕掛けてマリクの身体を吹っ飛ばす。

「うわっ!？」

横からの急な衝撃に何がと思ったマリクだったが、その肩をアーチャーの矢が射抜いた。そしてもう一本の矢はオグマの脇腹に刺さる。

「ぐうっ!」

「がっ!」

オグマとマリクが射抜かれたところを抑え、痛みに顔を顰めながら膝に床を着いた。

「二人とも!」

その姿にマルスが思わず叫ぶ。それに返答する代わりに、二人は患部を抑えて素早く立ち上がった。

「退くぞ! 走れるな?」

「ええ」

マリクが頷いたのを確認するとオグマはそのまま後退する。マリクも、オグマに少し遅れてだが後退し、どうにかアーチャーの攻撃範囲外に逃れた。

「マリク! オグマ!」

すぐに二人の許にマルスが駆け寄る。

「すみません王子、油断しました…」

「そんなことはいいい！ 傷は大丈夫なのかい!？」

「急所に刺さったわけではありませんから。出血は少々派手ですが、大したことはありません」

「わかった。二人とも、下がって手当てを！」

「ですが、あの敵将を倒すには魔道ではないと…」

「それを考えるのは僕たちの役目だ。こんなところで生命を散らすような真似はしないでくれ」

「かしこまりました」

頷いたのはオグマである。マリクはまだ不満気な様子だったが、オグマに諭されて今の自分は足手まといでしかないと理解したため後退した。

「物陰にアーチャーを配置していたとはね…」

玉座へ振り返ると、マルスがギリツと唇を噛んだ。

「してやられましたな。ですが、あれは一度限りしか使えん手。タネがわかってしまえばどうとでも対処はできます」

「うん。ドーガ、アーチャーたちを釣り出してくれ。カイン、アベル、釣り出されたアー

チャーたちの対処を」

自分の部下に指示を出したところでマルスはハーディンへと振り返る。

「オレルアンの諸騎士たちにも、アーチャーへの攻撃をお願いしたい」

「わかった。承ろう」

「すまない。では皆、頼む！」

『ハッ！』

マルスの指示通りにそれぞれが動き、苦もなくアーチャーたちを葬る。ジェイガンが言った通り、タネがわかってしまえば対処はどうとでもなる一度限りの手だった。玉座までの安全を確保し、残るは敵将であるマリオネスただ一人。

「さて、どう攻めようか……」

玉座はいわば本陣である。そこを奪われればすなわち敗北となってしまうため、マリオネスは玉座から離れる様子はない。そのため、マルスたちは陣を整えて思案できるだけの余裕があった。

「返す返すも、先ほどの不意打ちでマリク殿を離脱させられたのは痛手でしたな」

ジェイガンが忌々しげな表情になって唇を噛んだ。

「うん。でも、居ない者は仕方ない。リフやレナたちからの報告だと、深傷ではないけど無理はさせないほうがいいってことだったし、僕らだけで対処するしかない」

「しかし、あの重装甲では生半可な攻撃は受け付けませんぞ」  
「わかってる」

マルスが頷いた。

「であれば、これを使おうか」

ハーデインが一振りの剣を抜いた。

「ハーデイン殿、それは？」

ジェイガンが尋ねる。

「我が城の宝の一つ、アーマーキラーだ。盗賊どもが盗んで逃げる前に取り返した。これならば、重装甲の敵が相手でも普通にダメージは通る」

「そうか。では、お願いしたい」

「承知」

「ただ、僕も攻撃に加わる」

「！ 王子、それは！」

ジェイガンのみならずカインやアベル、ドーガたちの顔色も変わった。当然と言えば当然の反応ではあるが。

「ジェイガン、知っているだろうか？ 僕のレイピアも騎馬や重騎士には威力を發揮する

ことを」

「無論、存じております。ですが……」

「ハーディン殿にだけ戦わせて、僕らだけ高見の見物つて訳にもいかないだろう?」  
「しかし……」

ジェイガンはまだ渋面である。

「死ぬかもしれないぞ?」

脇から口を挟んできたのはそのハーディンだった。

「死なないさ」

だがマルスは臆することもなくハーディンに振り向き、その目を真っ直ぐに見た。

「ほお?」

感心したようなバカにしたような声色で返答するハーディン。

「僕は死なない。こんなところで死ねないんだ」

そしてマルスはもう一度、確固たる決意を口にした。

「……いいだろう」

少し間を置いて、ハーディンが頷いた。

「それではマルス殿、加勢を頼もうか。私は左から攻める」

「わかった。じゃあ僕は右から」

「うむ。武運を祈る」



「公も」

簡単なやり取りを交わし、ハーディンとマルスは左右に分かれた。

(いい目をしている)

その途上、ハーディンは先ほどのマルスの表情を思い出していた。

(何度かお会いしたことがあるが、コーネリアス王と同じ眼差しだった。血は争えんな)

マルスの姿に感心し、頼もしく思いながらも、

(だが)

同時にハーディンは不安も感じていた。

(だからこそ、己の立場を知らねばならん。先ほどの自分は死なないという心構えや意志は大事だが、思っただけで何事もなせるのなら誰も苦労はしない。世の中には、どんなにあがいても無理なこと、力及ばないことがある。それを早いうちにわかってくれればいいのだがな…)

このハーディンの危惧を現実主義とみるか面白みがないとみるかは議論が分かれるところだろう。だが、一つ言えるのは間違った意見ではないということだった。ハーディンはマルスに若さゆえの危うさと眩しさを感じていたのであった。

(それは、これからいやでも知ることになるだろう。：無論、生き延びればの話だがな)

そこで配置に着くとハーディンは振り返った。視線の先には、同じように配置につい

ていたマルスが力強く頷いた。それを合図に、ハーディンとマルスは左右からマリオネスへと突っ込んだのである。

「ぬうん！」

まずはハーディンが斬りかかる。

「小癩な！」

が、マリオネスは己の得物である鋼の槍でそれを受け止めた。二人が力比べをしている間隙を縫い、マルスが右から斬りかかった。

「行くぞ！」

「チッ！」

「ぐわっ！」

マリオネスがハーディンの腹に蹴りを見舞って弾き飛ばす。そして、そのまま鋼の槍をマルスへと振り下ろした。

「死ね！」

「ッ！」

寸でのところで何とかそれを交わしたマルスが、マリオネスと交差ざまに胴を薙ぎ払う。

「ぐおっ！」

片膝を着いたマリオネスの腹部から鮮血がにじみ出た。

「やったのか？」

マルスと合流したハーデインが尋ねる。

「いや、手ごたえは浅かった。致命傷には至らない」

「そうか」

「おのれ！」

マリオネスが立ち上がるとハーデインとマルスをキツと睨み付けた。

「この傷の礼はさせてもらおうぞー！」

「笑わせる。傷どころか、こちらはその首が欲しいのだがな」

「ああ」

「ほぎくなー！」

そして再び、二対一の戦いが始まったのだった。

「はあ…はあ…はあ…」

「ふう…ふう…ふう…」

マルスとハーデインが肩を並べながら、共に息を切らせて肩を上下させている。連携して何度か攻撃を繰り返しているものの、マリオネスの分厚い鎧の前に、思った以上に

ダメージが与えられていなかった。

とは言い、予想より少なくともダメージが蓄積されているのは間違いないので、マリオネスにきいているのは間違いない。だが、それでも情勢はマルスたちにやや不利だった。

(まずいな…)

ハーデインが内心で臍を噛む。

(決め手に欠ける。予想以上にあの鎧が頑強だ。それに…)

横目でチラツと隣のマルスに目を向けた。呼吸は先ほどより整ってきているものの、額や腕に滲んでいる大粒の汗が体力の消耗具合を示していた。そして、それは自分も同じこと。

(このままではジリ貧だ。ここは…)

そこでハーデインがマルスに顔を向けると、マルスは引き締まった表情で小さくココロと頷いた。その表情で、マルスも自分と同じことを考えていたのだと悟る。

(フツ…)

思考が一致したことに内心で軽く笑うと、同意するかのようにはマルスもハーデインに向けて頷いた。

「行くぞー！」

「ああ！」

そして、二人が再び仕掛ける。このままではズリ貧だと判断した二人は、危険を承知で今まで以上の力で攻撃に入った。俗に言う、『虎穴に入らずんば虎子を得ず』というやつである。

「小癩な真似を！」

ここが勝負どころと判断したのは同じだったのか、マリオネスが二人を迎え撃つ。まずはハーデインに狙いを定め、鋼の槍を横薙ぎに払った。

「！」

咄嗟にアーマーキラーで受け止め、何とか武器を封じる。力比べをしている間に、マルスが間合いを詰めた。

「はああああっ！」

そしてレイピアを振りかぶって突きを繰り出した。重さと速さの乗った突きはマリオネスの鎧を貫き、その身体へと刺さる。

「！ やったか!?!」

ハーデインが一瞬だけ気を逸らした瞬間、マリオネスの槍はハーデインを吹き飛ばした。

「ぐっ！」

二転三転しながら石畳に身体を打ち付けられ、ハーディンは思わず澁面を作った。

『ハーディン様!』

その姿に、オレルアンの騎士たちが悲鳴を上げる。

「ぐ……うつ……」

全身を襲う痛みには耐えながら、ハーディンはマリオネスの動向を探るためにすぐに目を開いた。と、自分に代わってマルスがマリオネスと鏢迫り合いをしている光景が目に入ってきた。

「……ッ!」

「ぐっ!」

力比べをする。だが、すぐに決着はついた。マリオネスの槍が、マルスのレイピアを弾き飛ばしたのである。

「!・しまった!」

体力の消耗に加えてレイピアのような細身の剣は、その作りゆえに力勝負には向いていなかった。そのため、この結果はある意味当然と言えた。

加えて、噴き出していた汗が手を滑らせ、力の伝わりが普段に比べたら悪かったこともこの事態を招いた。そして、丸腰になった敵を見逃すほど戦場は甘いものではない。

『マルス様!』

アリティア軍の面々が叫ぶ中、

「死ね！」

マリオネスが鋼の槍を振り下ろした。レイピアに気を取られていたマルスはそのために反応が遅れ、その鋼の槍を回避することは不可能だった。だが、鋼の槍がマルスの生命を奪う直前、不意にマルスは後ろから強力な力で引つ張られて後方に投げ飛ばされたのだった。

「何?！」

「痛てて……」

目の前から獲物がいなくなったマリオネスと、後方に吹き飛ばされたマルスが痛みに顔を顰めながらゆっくりと視線を上げる。そこには、

「終わっているかと思えば……」

いつの間にもこの場にやってきたのだろうか、ガレスの姿があった。

「まだ、手古摺っているとはな……」

呆れとも驚きともつかない様子でそう嘆息すると、ガレスはハーディンへと顔を向けた。

「下がれ」

そして、簡潔に一言だけ言って命令する。

「何だと!？」

だが、頭ごなしに命令されて素直に聞くほどハーデインは物分かりが良いわけではない。尚且つ、傲然とその命令を下している者は警戒してやまない要注意人物である。余計に素直に引き下がるわけにはいかなかった。

「ふざけるな!」

当然、ハーデインが受け入れるわけもなくガレスをキツと睨む。だがガレスは鬱陶しげにハーデインをねめつけるだけだった。

「フン」

そして、小バカにしたように鼻を鳴らす。

「しこたま身体を痛めつけられ、肩で息をしながら口だけは達者だな」

「余計なお世話だ!」

「貴様が死のうが深手を負おうが俺には関係ない。だが、今後のことを考えるとここで殺されては困るのでな」

「貴様ら!」

と、そこでマリオネスが再び襲い掛かってくる。その標的は新しく現れたガレス…ではなく、体力を損耗しているハーデインだった。

「ッ!」



ガレスに気を取られ、ハーデインは反応が少し遅れた。アーマーキラーを構えて何とか鋼の槍を受け止めて力比べに持ち込む。互いに損耗している者同士とは言え、体重の乗った槍の重さにはやはり剣は耐え切れず、ハーデインは弾き飛ばされた。

「ぐっ！」

「死ね！」

先ほどのマルスと同じく、マリオネスがハーデインの生命を刈り取ろうと槍を突き出す。が、これも先ほどのマルスと同じように、その槍の切っ先が届く寸前にハーデインは襟首を掴まれ、後ろにグイッと引つ張られて後方に投げ飛ばされた。勿論、それをやったのはガレスである。

「ぐわあああつ！」

ハーデインの態度にイラついていたのか、それとも手段を選んでいられなかったからかはわからないが、マルスより心持ち力を入れて引つ張ったため、ハーデインはマルスより派手に後方に吹っ飛んだ。結果、先ほどのマリオネスの攻撃を防いだ時以上にこたまその身体を石畳に叩きつけられたのである。

「う……ぐっ……」

全身の痛みに耐えながらもハーデインが身体を起こす。

『ハーデイン様！』

そこにロシエたちオレルアンの騎士が集まるのは当然だった。

「さっさと後ろへ送れ」

ガレスの容赦ない言葉に、ロシエたちがキツとガレスを睨む。だがガレスはもう興味がないとばかりにマリオネスと斬り結んでいた。

「おのれ！」

互いの得物越しにマリオネスがガレスを睨み付ける。

「もう少しであの二人の首を上げることができたものを！」

「ククク…それは残念だったな」

憤怒の表情に燃えるマリオネスをガレスは嘲笑して答える。その姿、その態度がマリオネスを一層逆上させた。

「この上は、貴様の首から刎ねてくれるわ！」

「クク…やってみせろ」

そこで互いに一度離れ、そして距離を置いて二人は再び斬り結んだのだった。

「痛てて…」

顔を響めながらマルスがよろよろと立ち上がった。ハーディンもザガロとビラクに両脇を支えられながらその場に立ち上がる。

「王子！」

「王子！」

「大丈夫ですか、マルス王子！」

すぐさま、アリティア宮廷騎士団がマルスの許に集い、主人の安否を確かめた。

「ああ、何とかね」

ぎこちない笑みを浮かべながら、マルスはハーディンへと顔を向ける。

「貴方は大丈夫かい？ ハーディン殿」

「大事ない……と言いたるところだが、予想以上に身体が痛む」

そして、そのままハーディンはガレスを睨み付けた。

「あの男、ふざけた真似を……」

「すまない」

憤るハーディンに、マルスが頭を下げた。形としてはあるが、一応アリティア軍に所属しているだけに、仕方のないことである。

「何者なのだ、あの男は、マルス殿」

ハーディンは不愉快な思いを隠すことなくマルスに尋ねた。

「先ほど説明した通りだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

「空から突然現れたと？ 信じられぬ」

「そうだね。僕も逆の立場だったらそう思うよ。でも、事実は事実である以上どうしよ

うもないし、それに……」

「それに？」

「あれだけの実力者が今まで無名なままでいられるものかな？」

「……」

ハーデインが口を噤んだ。それはまさしく、先ほどハーデイン自身も口にしていたことだからだ。各国の將軍のみならず、流れ者の戦士や傭兵ですら腕が立てばそれなりの噂は入ってくるものである。ましてや今は戦時下である、腕の立つ者の噂ならば平時より余程回るものだ。

だが確かに、ガレスの噂など少しも聞いたことはなかった。

「……」

忌々しげな表情でハーデインが戦場に視線を向ける。そこには、マリオネスとの戦闘に興じているガレスの姿があった。

「ククク、どうした」

横薙ぎに薙いだガレスの得物をマリオネスが何とか受け止める。先ほどまでのマルスやハーデインとは違い、今度はマリオネスが得物の不利を感じる立場になっていた。何せ、ガレスの得物は分厚く重量のある斧である。受け止めるのですら一苦勞なのだ。

「動きが鈍いぞ？ あのと二人との戦いで体力を使い果たしたか？」

「黙れ！」

マリオネスが鋼の槍を振り下ろすものの、ガレスは難なく受け止めて力任せにそれを薙ぎ払った。

(ツ！ 何て力だ！)

その衝撃に、マリオネスは思わず顔を歪める。鋼の槍から伝わってくる衝撃と振動に、ガレスの底知れぬパワーを感じてマリオネスは洩面を作るしかできなかった。

「…つまらんな」

だがガレスは心底面白くなさそうに吐き捨てる。

「どうやら本当にあの二人との戦いで体力を使い果たしたようだな。このまま長引かせても時間の無駄だ。とっとと終わらせてやる」

そしてガレスは己の得物を構え直す。

「こい。あの世に送ってやる」

「！ うおおおっ！」

ガレスの言葉にか、それとも態度にかはわからないが騎士として看過できず、マリオネスは突撃してきた。ガレスはそのマリオネスを見据えながら、真紅に光る瞳を不気味に輝かせる。そして次の瞬間、何かが飛んだ。そしてそれは凄まじいスピードでマルスたちのすぐ横の壁に突き刺さったのだった。

「うわっ!」

「な、何だ!」

悲鳴を上げたカインとアベルだけにとどまらず、全員がそれを見た。そして大半の間が顔を蒼ざめる。

「え…あ…」

「何と…」

ドーガが言葉を詰まらせる横で、ジエイガンは目を見開き愕然としていた。というのも、そこに突き刺さっていたのはマリオネスの得物である鋼の槍だったからである。そしてその鋼の槍には、マリオネスの両腕の肘から先の部分が握られており、鮮血が滴っていた。大半の人間の顔が蒼ざめていたのはそのせいである。

「ぎ、ぎやああああああっ!」

直後、マリオネスの悲鳴が玉座の間に響き渡った。マルスたちが顔を向けるとそこには、両腕の肘から先を失ったマリオネスが激痛に悶えている姿があった。

「う、腕! わしの腕があ!」

その激痛、そして両腕を失ったという現実がマリオネスに容赦なく襲い掛かる。そして、

「安心しろ」

その原因である悪魔がマリオネスに襲い掛かったのだった。

「すぐ楽にしてやる」

ガレスはフルヘルムの下で不気味に微笑みながら一度斧を降ろす。そして、

「ガアアアアアッ！」

猛獣の咆哮もかくやというほどの雄たけびを上げそれを大上段から振り下ろした。

「が!？」

その刃がマリオネスを寸分の狂いもなく捉え、そして、肉や鎧を切り裂く轟音を立てながらマリオネスを真つ二つに両断した。

血、脳漿、臓物などを撒き散らしながらマリオネスは倒れる。その凄惨な死体に、顔を蒼ざめていた面々は思わず膝を着いて口を押さえる。前回のオレルアン平原の戦いで多少の免疫ができていたせいも、吐く者がいなかったのが救いだが、それでもほんの僅かな何かが起これば容赦なく吐いてしまいかねない精神状態であるのは間違いない。そんな中、

「終わったぞ」

死体の前に立っていたガレスは振り返るとそう呟く。漆黒の鎧だけに色こそ目立たないが、鎧を伝って血が何筋も滴り落ちるその姿に、更に多くの者が顔を蒼ざめた。

だがガレスはそんな彼らのことなど気にした様子もなく歩を進める。そして、

「後は任せる」

「う……あ……」

壊れたおもちゃのようにコクコクと首を上下に振るマルスに後始末を投げると、ガレスはその横を通り過ぎた。その正面を、恐怖の感情に彩られた面々が固まったように塞いでいる。

「……どけ」

そんな面々にガレスが一言そう言うと、彼ら彼女らは弾かれたように両脇にどいて道を作った。モーゼの十戒の如く開いたその道を、ガレスはゆっくりと歩いていく。

カツン、カツンと石畳を鳴らしながら去って行くガレスを、マルスたちは呆然とした表情で見送ることしかできなかつた。



## NO. 03 月下の宴

オレルアン本城。

アリティアとオレルアンの連合軍の初戦闘となったこの城の奪還戦で、無事に城を取り戻した翌日の夜。オレルアンの諸侯とアリティア軍の主だったものが大広間に集まり、戦勝の宴が始まろうとしていた。だが、その雰囲気は何ともギクシャクしていた。

オレルアンの諸侯が遠巻きながらこれ見よがしに注目し、そしてアリティア軍の面々も一定の距離を置いて決して近づこうとしない。そんな、それなりに込み合った城の大広間にもかかわらず、ポツカリと空白地ができたその中心にいたのは、当然ガレスだった。

「……」

ガレスは自分に向けられる好奇や畏怖の視線を黙殺しながら宴の始まりを待っている。鬱陶しいことこの上ないのだが、こういったどうしようもない有象無象がいるのは良くわかつているので無視していた。まさか、一人一人詰め寄って睨みを利かせたり脅したりするわけにもいかない。

そんな、お世辞にも気分の良いものではない視線を集めていたガレスは、黙りながら

も仮面の下で何を考えているかというと、

(いつまで待たせる気だ…)

イラつきつつも呆れていた。こういうものに時間がかかるのは当然なのだが、それでも遅すぎる。進展なく進む時間に、いい加減帰ろうかと思つてるところで、ようやく宴が始まろうとしていた。ニーナが挨拶のために立つ。

「本日、ここに集まつてくれた諸侯にまずは感謝いたします。アリテイアのマルス王子が軍を率いて我々に合流してくれたおかげで、長らく敵に支配されていたこの城を取り戻すことができました。明日からはまた厳しい戦いが始まるでしょう。そのための英気を養い、また城を取り戻した祝いとして、今夜は存分に楽しんでください。では、乾杯」

『乾杯！』

一斉にグラスをニーナに向けて掲げると、全員それに口を付けた。例外は一人、ガレスのみ。いつもの如くフルヘルムの兜をかぶっているの、グラスの中のアルコールを摂ろうにもそれができないのだ。いやそれ以前に、格好からして戦場と同じいつもの漆黒の鎧なのである。礼服の人々の中で唯一の戦姿とあつて、浮いているとか場違い感が半端じゃなかった。だが、これはガレスには責任はないことである。

何しろ、ゼテギネアから転生でこの地に降臨したため、持ち物などこの鎧と得物しか

なかったのだ。礼服の類など持っているわけはなかった。マルスが用意しようにも一日で、しかも戦時下にそんな真似ができるわけもない。

礼服を借りようにも、現段階で男で持っているのは王族であるマルスぐらいしかなく、サイズが合うわけもなかった。

なので、流石に宴の席に甲冑姿で赴くわけにはいかないのでガレスは一度は招待を断つたのだが、ニーナが是非出席してくれとたつての願いを伝えてきたのだ。盟主である彼女の願いとあれば無下に断るわけにもいかず、妙な雰囲気になるのは百も承知でガレスはここに赴いたのだ。なるべく目立たないように大広間の隅に陣取っていたのだが、一人だけ甲冑姿：それも漆黒の鎧なので目立たないわけではないのである。そんな妙な雰囲気がいままで大広間に流れていたものであった。

（まあ、場がどうなるうが俺の知ったことではない。何を考えているかは知らんが、恨むのならニーナを恨むんだな）

腕を組んだまま、微妙な雰囲気醸し出すアリエティア軍の面々やオレルアンの諸侯たちこそう内心で悪態をつく。

「では、存分にお楽しみを」

乾杯が終わり、場の空気が多少なりとも和らいだところでガレスは組んでいた腕を解く。そしてマントをたなびかせながら身を翻すと、義理は果たしたとばかりにそのまま

大広間を出て行ったのだった。その瞬間、大広間の雰囲気が一変して柔らかいものになる。

「やれやれ、肝が冷えた」

「何ですの、あの不気味な騎士は」

「まるで死神みたいだったな」

「おお怖い。未だに震えが止まりませんわ」

オレルアンの諸侯が口々に好き勝手なことを言ってガレスに対して悪態をつく中、この場に招待されたアリティア軍の面々はホツとしていた。無遠慮な視線を投げかけてくるオレルアンの諸侯に、ガレスが何かやらかしはしないかと気が気じゃなかったからである。

そうなってしまったら最後、連合軍は空中分解し、ここですべてが終わってしまうだろう。そんな最悪の状況にならなかったことに、アリティア軍の面々は心から安堵していた。

（無分別な戦闘狂じゃないのかな…）

今までの戦いぶりを見てみるととてもそうは思えないが、マルスはワインを軽く嗜みながらニーナにチラツと目をやってそんなことを考えていた。

オレルアン城内での戦闘後にオレルアン軍の者から、ガレスがニーナを助けたと聞か

された。そのことに、マルスは信じられずに目を丸くしたのだ。

これまでのガレスの言動を見、そして昨日のこの城でのマリオネスの惨殺具合を見た身としては、とてもガレスが人助けなどをやるように思えなかつたからだ。だが彼らは間違いないといい、そしてニーナもガレスを名指しでここに招待するようにマルスに頼んできたのだ。それも、頼むというよりはどちらかと言えば命令に近い感じであつた。

(俄かには信じられないけど……)

ガレスの人となりを判断するにはまだ材料が必要だ。そう思ったマルスは、グラスを給仕に渡すとそのままニーナの許へと足を運んだ。オレルアンの諸侯たちのご機嫌伺いが一段落しそうなを見計らつての行動である。

「ニーナ様」

程なく自分が挨拶する段になり、マルスは恭しく頭を下げた。

「マルス王子」

ニーナが嬉しそうなホツとしたような口調でマルスの名を呼ぶ。

「御挨拶が遅れて申し訳ありません」

「よいのです、そのようなことは。さあ、顔を上げてください」

「はい」

ニーナの言葉に従い、マルスは顔を上げた。ニーナと、その隣には彼女を護るかのよ

うにハーデインの姿があった。

「ハーデイン公」

「マルス殿、こうやって改めて言葉を交わすのは初めてだな。何しろ戦場ではこんな真似はできませんからな。無礼は許されよ」

「いえ、私こそ公に早めにご挨拶するべきでしたが、遅くなって申し訳ありません」

「そう言ってくれるな。それはお互いさまではないか」

「そうですね」

「ふふふ…」

二人の軽妙な言葉のやり取りに、ニーナが思わず顔を綻ばせた。

「楽しんでくれていきますか？ マルス」

「はい。ここにいる我が軍の者も、場外の我が軍の者も、ニーナ様のお心遣いにはとても感謝しております」

「そう、よかった。ところで…」

ニーナがコホンと咳ばらいをすると、軽く頬を赤らめた。

「はい？」

「彼は…ガレスはどうしたのです？」

その名を聞き、ハーデインの顔が僅かながらに不快そうに歪んだ。まあ、愉快な思い

出はないのだから仕方のないことではあるが。

「さあ？」

返答できず、困ったように苦笑してマルスが首を左右に振った。

「わからないのですか？」

ニーナの表情が曇った。

「申し訳ありません。ハーディン公にはお話ししましたが、何しろ彼は天より落ちてきた戦士。僕としても未だにわからないことだらけで」

「天より……？」

そこでニーナが傍らのハーディンに振り返って仰ぎ見た。

「本当なのですか？ ハーディン」

「マルス殿からはそう伺っております」

「そんな……」

流石にそんな回答は予想外だったのだろう、ニーナは何と言っているかわからず、二の句が継げなくなってしまうた。

「二応、彼は我々に対する協力者という立場なのですが、今はまだどうにも手綱を握ることはできなくて……。申し訳ありません」

「いえ、いいのです」

そうは言うものの、ガツカリとした表情になったのをハーデインは見逃さなかった。

「しかし、ガレスに何か用でもあったのですか？」

そのことが気にかかり、マルスが尋ねた。そもそも、ガレスをこの場に呼んだのはニーナのたつての希望だからである。それを考えれば、何かしらの用件があるのは容易に推察できることだった。

「え、ええ。彼に一度きちんとお礼を言いたかったのですが」

「そのことですか」

ああ……と言った感じでマルスが理解した。

「ハーデイン公から伺いました。なんでも、ここから南にある砦でガレスがニーナ様を助けたと」

「ええ。その時は色々あつて助けくれたお礼もできなかつたので、一度改めてお礼を言いたかったのですが」

「そう気にすることもないかと」

表情を変えず口を挟んできたのは、この場のもう一人の当事者であるハーデインだった。

「え？ ハーデイン？」

「ニーナ様は我らの盟主の身。友軍の者とは言え、一介の騎士に一々そんなことで声を



かけるのも如何かと思われれます。どうしてもとあれば、我が配下の者にニーナ様の感謝の言葉を届けさせます」

「え、ですが…」

ニーナは不満そうである。その姿が、ハーデインを僅かながらも苛立たせた。そこにマルスが口を挟む。

「いえ、僕もハーデイン公の意見には賛成です」

マルスの同意にハーデインは我が意を得たりとばかりに頷き、ニーナは残念そうな表情になった。

「マルス王子」

「ニーナ様、お気持ちはありがたく頂戴します。ですが、ハッキリ申し上げます。今はまだ、ガレスにはあまり近づかない方が良いでしょう」

「何故ですか？」

間髪入れずにニーナが尋ねた。

「まだ彼を見定めていないからです」

「え？」

「正直に申し上げて、今彼は我が軍に協力者として力を貸してくれていますが、この先どう転ぶかはわかりません。それを考えた時、あまり彼と接点を持ってない方が良いでしょう」

思っておりますので」

「ちよつと待つてマルス王子、それはどういう…」

「いずれ、いやでもわかる時が来るかと思ひます。それまでは、どうか自重ください。では」

最初と同じように恭しく頭を下げると、マルスはその場から退いたのだった。

「あ…」

最後、マルスが言ったことの意味を聞くことができず、ニーナが珍しくムツとした表情になった。

「…もう！」

そして、小さく悪態をつく。

「ハーディン、貴方もマルスと同じ意見なのですよね？」

「はい」

ハーディンが頷いた。

「そう…」

その答えに、ニーナがやはりガツカリとした表情になる。

「生命の恩人にお礼を言うのが、そんなにいけないことかしら…」

「それ自体には文句はありませんが、それも相手によりますな」

そしてハーデインの言葉に、今度はニーナは少し拗ねたような表情になった。

「ハーデインやマルスが言うほど、私には彼が危険人物とは思えないわ」

「かもしれない。ですが、ニーナ様の御身のことを考えれば、警戒しすぎても十分とは言えません。先ほどマルス殿が言われたように、どうか自重のほどを」

「ふう…わかりました」

そこまで言われたらどうしようもできず、ニーナは諦めたように溜め息をついた。

「ご理解いただけで幸いです。それはさておき、我らだけではなくニーナ様も宴をお楽しみください」

「ええ」

頷くニーナ。とは言え、主催者であり、旗頭である彼女の許には詣でる人物が引きも切らない。にこやかに対応することに追われ、ニーナが宴を楽しむ暇などはなかった。

「ふう…」

マルスが辞してから暫くの間客の応対を行い、ようやく一段落ついたところでニーナは一息ついた。そして、徐に玉座から立ち上がる。

「ニーナ様、どちらへ？」

ハーデインが尋ねた。

「少し疲れました。別室で少々休みます」

「では、部屋まで我が配下の者を随行させましょう」

「いえ、一人で大丈夫。それに、宴が終わるまでには戻ってきます」

「…かしこまりました」

「では、少し失礼しますね」

そう言い残すと、ニーナはなるべく目立たないように大広間を出た。その後ろ姿を見送った後、ハーデインは側にいる配下の者を手招きする。そして、

「ザガロを呼べ」

その人物にそう命じたのだった。

「はっ…はっ…はっ…」

大広間を辞したニーナはすぐにその場を小走りで行き出した。目的地は決まってい  
るのだが、行先は不明。その行き先を求め、ニーナは途中であう下働きの者たちから情  
報収集に励んだ。

そして暫くの後、ついに有力な情報を手に入れる。ニーナはその情報をもとに、逸る

気持ちを抑えながら目的の地へと向かった。

(城を出たところを見た者はいない。ならまだ城内にいるはず…)

そして城内にいたのであれば、これから向かうところにいる確率が最も高い。そのため、ニーナはその場所へと急いでいた。そしてその場所…大広間からずいぶん離れたところにあるとあるテラスに近づくと、ニーナは走るスピードを落とす。そしてゆっくりと呼吸を整えると、少しずつ近づいてそのテラスの様子を窺った。

(…いた…)

果たして、ニーナのお目当てはそこにいた。漆黒の鎧に身を包み、テラスの手摺に体重をかけながらグラスを傾けているガレスの姿がそこにあった。

(そう言えば、素顔を見るのは初めてになるわね)

ニーナが何とはなしにそう思う。ワインを嗜んでいるのだから当たり前だが、ガレスはいつも被っているフルヘルムの兜を脇に置いていた。まだそれなりに距離があるのでハッキリとその容貌はわからないが、金髪なのだけはわかった。

(すう…はあ…すう…はあ…)

その場でもう一度ゆっくりと呼吸を整えると、ニーナはガレスへと近づいていったのだった。

(ふむ…)

ニーナがガレスを見つける少し前、大広間を辞したガレスは城の廊下を歩きながら下働きの娘を一人捕まえた。そして泣きそうな表情になったその娘からグラス一つとワインを二本ほどせしめると、大広間とほぼ反対側の位置にあるこのテラスへと赴き、徐々にグラスにワインを注いで一人酒を始めたのだった。

義理は果たしたのでそのまま退出しても良かったのだが、晒し物にされた挙句無遠慮な視線やこれ見よがしに話のネタにされたことがそれなりに業腹だったので、せめても意趣返しというわけである。小さな仕返しではあるが暴れるわけにもいかないの、ガレスはこれで留飲を下げることにした。

(なかなかの味だな…)

フルヘルムを外して若返った顔を外気に晒しながら、ガレスは飲んでいたワインに關してこんな感想を持っていた。本来の世界ではゼテギネアの皇子の立場だっただけに、旨いものはかなり飲み食いしてきた。それだけ舌が肥えているガレスでも、それなりに満足できるワインの味だった。

(そこからへんは、腐つても王族というわけか)

思わぬ恩恵に感謝しつつ、そしてムカつくことばかりの中でも少しはいいこともある

ものだと思いながら、ガレスは一人酒に興じる。見上げれば、ゼテギネアと同じく大きな月が中空の夜空に浮かんでいた。

(月はどの世界でも変わらんか)

まあ、さすがにカオスゲートや天宮シャングリラを始めとするような天空の島はないだろうなと思いつたりとした時間を過ごす。そしてどれだけ経ったであろうか。不意にガレスは、こちらに近づいてくる気配を感じた。

(ん?)

誰だと思いながらも面倒なので振り返るような真似はせずに引き続き月見酒に興じ続ける。と、

「あ、あの……」

直後、ガレスの耳に自分に話しかける声が届いたのだった。

(ほお……)

その声色で誰だかわかったガレスがそのまま首だけを声のした方向に巡らせる。そこにいたのはガレスの予想通り、ニーナだった。

(主賓が何をしに来たのか……)

まさかこんなところで再び顔を合わせるとは思わず、少し驚きながらも手摺から身を起こした。

「これはこれは……」

そして、必要以上に恭しく口を開いて言葉を紡ぐ。

「どうされた、ニーナ姫？ 宴の主賓である貴方が、こんなところにいるのは感心しませんな」

始めて見たガレスの素顔に何故かドギマギしつつも、ニーナはその口調に少し棘を感じた。だが、怯むことなく答える。

「探していたのです。貴方を」

「ほお？」

面白そうにガレスが軽く笑みを浮かべた。

「探していた？ 俺を？」

「ええ」

ニーナが頷いた。

「何のために？」

単刀直入にガレスが尋ねる。

「貴方に礼を言うために、です」

それに対するニーナの返答がこれだった。

「礼だと？」



ガレスの口調が、今までの恭しいものからいつものもの変わった。

「何のことだ？」

「忘れたわけではないでしょう。南の砦で、私をならず者から助けてくれたことの礼です」

「…ああ」

そこでもうやくガレスは納得いったような表情になった。

「気にすることはない」

そして、本当にどうでもよさそうにそう答えた。

「血の匂いのしない方向から血の匂いがしてきたから様子を見に行っただけだ。そこにたまたまお前がいて結果的に助けただけのこと過ぎん」

「しかし経緯がどうであれ、助けられたのは事実です。ならば、それに報いるのは当然のことでしょう」

「…律儀なことだ」

その姿にいつものようにクククと咽喉の奥でガレスが笑った。そして、ニーナに向き直る。

「それで？」

そう尋ねると、ニーナはガレスの近くにあったワインのボトルに目を付けた。幸いと

言うべきか、一本は開いているもののもう一本はまだ未開栓である。ニーナはガレスへと歩み寄ってその未開栓のワインを手に取る。

「開けてもらえるかしら?」

そして、そのワインのボトルをガレスにそのまま差し出した。

(何をするつもりやら…)

未だにニーナの真意が読めないものの、断る必要もないためガレスはボトルを受け取るとそれを開けた。遅かれ早かれそれも頂くつもりだったのだ。それが予想外の展開でこうなっただけのことである。

「開けたぞ」

「ありがとう」

ニーナが開栓されたワインのボトルを受け取る。すると、中身が零れないように慎重に、その口の部分をガレスへと少し傾けた。

「??」

行動の意図がわからず、ガレスがボトルとニーナの顔を交互に見る。と、

「褒美として、杯を取らせませす」

そう言つて、ガレスにグラスを差し出すように促したのだった。その言葉を聞き、最初、ガレスは固まったように微動だにしていなかった。が、やがて、

「ク…ククククク…」

静かに、しかしさも楽しそうに笑い出した。そして程なく、

「ハッハッハッハッ…！」

実に楽しそうに大笑いしたのである。その姿に、今度はニーナが固まったように微動だにしなかったが、だんだんと己を取り戻していった。そして、

「な、何が可笑しいのですか！」

と、厳しい表情と口調になってガレスを詰つたのだった。

「クク…いや、失礼失礼」

ニーナの怒気に謝罪をしながらもまだ可笑しいのか、随分小さくなったとはいえ笑い声は完全には納まらなかった。そのガレスの姿に、ニーナは相変わらずムツとした表情になっているがガレスは構わずに笑みを抑えようと努めた。だが、ニーナは知らないことだがこうなってしまうのはある意味仕方のないことであった。

(まさか、俺が杯を賜ることになるとはな…)

ガレスがそう思う。何せガレスは元々神聖ゼテギネア帝国の第一皇子だった身である。つまり、褒美に杯を取らせる立場であつて、決して杯を賜る立場の者ではないのだ。そんな自分が、まさか杯を賜ることになるうとは…。そう考えると、可笑しくて仕方なかったのである。

(まあよかろう。これもある意味得難い経験だ。謹んで賜るとしようか)

今までは上に立つ者だったが、この世界に来て初めて主を戴く者としての立場になったのだ。果たして目の前のお姫様、そしてあの亡国の王子が主たる器であるかどうかはこれから見極めることにして、今はこの立場を楽しもう。

ガレスはそう考えたとその場に跪き、グラスを軽く掲げた。

「では、謹んでご拝領賜ろうか」

「え……あ……」

今までのからの変わり身に思わずニーナは言葉を詰まらせたがそれも一瞬。コホンと一回軽く咳ばらいをすると、ゆつくりとそのグラスにワインを満たした。

少しづつ増えていくグラスの重さが止まったところでガレスは立ち上がる。そして、ゆつくりとそれに口を付けようとした。が、

「一人で楽しもうとするとは、心配りのできない殿方ですね」

ニーナが恨みがましい視線をガレスに向けた。見ると、少し唇を尖らせてムツとしていた。

(やれやれ……)

子供の御守りは大変だと思いながら、ガレスは手摺の上にグラスを置いた。

「グラスはあるのか？ 一人酒だったからここには余分なグラスなどないぞ」

「用意してきます。だから、少し待っていなさい」

そう言い残すと、ニーナは身を翻した。そして廊下の陰に隠れようとする前にガレスに振り返る。

「いいですね。決して先に口を付けないで！」

そう念を押すと、ニーナがそそくさとその場を後にしたのだった。

「やれやれ……困ったお姫様だ」

呆れたような口調でニーナを見送ると、ガレスはそのまま再び手摺に身を委ねた。そして待つこと数分。ニーナがテラスへと戻ってきた。

「はあ……はあ……はあ……」

随分急いだのだろうか、少々息が切れている。

(そう慌てることもないだろうが……)

内心で半ば呆れながらも、ガレスはそれを口には出さずにニーナを見ていた。何度も深呼吸を繰り返し返したニーナがようやく呼吸を落ち着けてガレスに向き直る。そしてグラスを差し出した。

「……」

ガレスは黙ってワインを手に取ると、そのグラスへとワインを注いでいく。やがて自分のグラスと同じぐらいまでグラスが満たされたところでボトルを上げた。

「ありがとう」

礼を言うニーナにヒラヒラと手を振ってこたえようと、ガレスはワインのボトルを近くに置く。そして、先ほどニーナから賜ったグラスを手に取った。

「乾杯」

「乾杯」

二人は軽くグラスを鳴らすとそれぞれ口を付ける。そして、どちらからともなく傾けていたグラスを戻した。

「ふう……」

ニーナが軽く一息つく。酔ったのか、それとも別の理由があるのかはわからないがその頬を赤く染めていた。そんなニーナの様子を横目で観察しながらガレスは再びグラスに口を付ける。

そうしながら、ガレスは少し離れたところから自分たちを見張っている気配に意識を向けた。

ニーナがグラスを探しに行っている時からだろうか、その気配を感じ始めたのは。それに気付いた当初は鬱陶しかったが、面倒なので放っておいた。実害があるならともかく、その気配は只こちらを見張っているだけなのである。偵察ならば放っておいても構わないと判断してガレスは捨て置いていたのである。

(…まあ、誰の差し金かはわかるがな)

「ご苦労なことだ…と続け、何時ものように咽喉の奥でクククと笑った。そして、その気配を挑発するかのようになり、ニーナに話しかける。

「さつきも言ったがいいのか？ 主賓がこんなところで油を売っていても」

「わかつています。ですから、何時までもここにいるつもりはありません」

「顔を売っておきたい連中や、お前に取り入ろうとする連中に恨まれるのは御免なのだから」

「そんなこと、貴方は露ほども思っていないでしょう？」

「ククク、言ってくれるな…」

愉快そうに笑うとガレスは再びグラスに口を付けた。確かにニーナの言う通り、そんな連中のことなど何とも思っていないのだから正しいのだが。

ガレスはそこでグラスのワインを飲み干すと、ボトルに手を伸ばして再び注ごうとする。が、それをニーナが押しとどめた。

「ん？」

ボトルに抵抗感を感じて振り返ると、ニーナがボトルに手を伸ばして掴んでいた。その意図を何となく察したガレスがボトルを手放すと、代わりにグラスを差し出した。

「ふふ…」

楽しそうに微笑むと、ニーナはそのグラスに再びワインを注ぐ。グラスにワインが満たされたところでガレスが軽く頭を下げた。そして、再びグラスに口を付ける。

「んっ…」

グラスを煽るガレスの姿を、ニーナは少し嬉しそうに見つめた。そして、少しだけガレスとの距離を詰める。ガレスは当然それに気付いたが、抱き寄せることも追い払ったり離れることもせず、ただそれを受け入れていた。そして、ガレスと肩を並べながらニーナも己のグラスに口を付ける。

何者かの監視の中、月下の宴は音もなく、そしてゆっくりと時を重ねていった。その雰囲気、ガレスとニーナはしばし身を預けていたのだった。



## NO. 04 一人目の理解者

一夜の休息を得たアリティアⅡオレルアン連合軍……いや、アカネイア解放軍は次なる目的地を目指してオレルアン城を旅立った。目指すは、ニーナの故国でもあり、この大陸全ての国家の宗主国であるアカネイア。そしてその王都、パレスである。

ニーナからアカネイアの炎の紋章である『ファイアーエムブレム』を託されたマルスが全軍の指揮を執る立場となり、解放軍は一路中央公路を南下し始めた。無論、本来辿るべき歴史ならばないような、一種の緊張感を孕んだまま。

その緊張感の源であるガレスは、以前にもまして厳しい監視の視線が四方八方から刺さる中、何か問題を起こすこともなく普通に行軍を続けていた。ガレス自身、今は何も起こす気はないから当然なのだが。とは言え、衆人環視が長時間続けば鬱陶しいことこの上ない。

(本当に鬱陶しい連中だ……)

辟易としながらも相手にするのも面倒臭いため、ガレスは黙殺を続けることにしていた。そんな中、時たま姿を見るニーナからはその都度、他の連中のものとは違う意味ありげな視線を受けるのだが、オレルアンの連中がニーナをカッチリと護衛するので、ガ

レスとニーナはあの夜の宴以降二人つきりになることどころか、言葉を交わすこともなかった。

もつとも、この時点でニーナがガレスをどう思っているかは知らないが、ガレスはニーナのことを他の連中と同列に扱っていたので接点がなくても別に何も思っていないのだが。

そんな、微妙な雰囲気と緊張感を孕んだまま南下を続ける解放軍にの許にとある知らせが入った。何でも、付近の村の子供たちが賊に囚われており、解放軍にその助けを求めてきたのだ。これに応じるか応じないかで解放軍内で少々の悶着があつたが、最終的には進行方向にその村があるということで、行きがけの駄賃というわけではないが救援に赴くことが決まつた。

そしてその地で、また新しい出逢いがあるのだった。それは無論、ガレスにも。

「フーン！」

「ぎゃあつー！」

得物を一閃したガレスに斬られ、賊がまた一人その生命を散らした。今回の戦場は開けた場所ということでガレスにも出陣の命令が下つたのだ。と言っても、相変わらず前

線ではなくて後詰めではあるが。

とは言え、先日のオレルアンでの戦いで兵力を増強した関係で指揮官級もかなり待機しているので、物資や人員を護ることは彼ら彼女らに任せることができたので、ガレスもゆつくりと前線へと歩を進めていた。

(手ごたえのない連中だな…)

先ほどから襲ってくる賊の何人かを処理しながらガレスは内心でぼやいていた。

(まあ、仕方ないのか。統率もクソもない賊では、この程度のものか)

折角の戦場ではあるが相手が賊ということもあってガレスは非常に物足りなかった。そのため、向かってくる敵を倒すだけにとどめ、自分から突っ込む真似はしなかった。と、前線の中に見たことのない人影を見つけた。

(ん?)

目を凝らしてよく見てみると、素早い動きで剣を振るう剣士だった。そして、

(女か…)

そう、その人物は女だった。性差により、力強さは自軍の剣士たちであるオグマやナバルよりも感じられなかったが、その分速さや剣技は互角か僅かにそれ以上に感じられた。それ程の腕前だったのだ。

(敵だったら面白い相手になったかもしれないが…どうやら違うようだな)

彼女が戦っているのは自分たちと同じく賊だった。であれば、彼女は味方ということになる。近くに村があるため、恐らく助けを求めてきたその村の戦士というところだろう。

(まあ、心強い味方が増えるのはいいことだ)

何とも、ゼテギネアにいた頃のガレスでは考えそうにもないことを考えながら、ガレスはゆっくりと前線へと向かっていった。

「お前、弱い」

前線。そう言い捨てて、目の前の賊を斬り捨てる黒髪の女剣士。彼女の名前はアテナ。先ほどマルスが村を訪れた際に、囚われた子供たちを取り返すために解放軍に合流した剣士である。

「くそっ！」

斬り捨てられた仲間の姿に、賊は齒噛みした。数では勝ってはいるが、目の前の女剣士はかなり腕の立つ人物であるのが今までの戦いでわかった。正直、まともに戦っては勝ち目がないことも。

「来ないのか？　なら、アテナ、参る！」

「くそっ！ なめるな！」

賊たちがアテナを取り囲んで一斉に襲い掛かった。アテナは持ち前の剣技と身のこなし、洞察力で何とか致命傷を喰らわずに凌いでいる。

(敵、多い。でもアテナ、凌ぎきれる。そうすれば、アテナの勝ち)

冷静に状況を分析しながらアテナは多数の賊を相手にする。サシの勝負ではないのに持ちこたえられるのは偏にアテナの技量ゆえなのだが、それ故に注意を万遍なく巡らせる必要があつた。

そのため、アテナは平時なら気付くであろうとある気配を見逃していた。それは、彼女の生命を奪うべく物陰に隠れて遠くから矢を番えているハンターの存在だった。

「へへへ……」

下卑た笑みを浮かべながらハンターがアテナに狙いをつける。そして、アテナが背中を見せた直後、

「死ぬ！」

呪詛の言葉と共に矢が放たれた。矢は一直線にアテナへと飛ぶ。それを見た賊がほんの少しだけ唇の端を歪めた。

(???)

その姿を見たアテナが引つかかって内心で首を傾げる。直後、戦士としての第六感が

正面を見据えながらも背後に注意をひかせた。

「！」

その時には、もう矢が指呼の距離まで迫っていた。かわそうにも傷を負うことは避けられない上に、対峙している賊が見逃してくれるはずもない。

(背に腹は、代えられない！)

覚悟を決めたアテナが痛みに耐えるために覚悟を決めたその直後、金属音がすぐ近くから鳴り響いた。そして、アテナを貫くはずの矢はいつまで経ってもその身に激痛を与えなかった。

「だ、誰だテメエ！」

代わりに賊がアテナの向こうに向かってそう叫ぶ。アテナがチラリと視線を向けると、そこには漆黒の鎧に身を包んだガレスの姿があった。

「誰でもいいだろう。知ったところで貴様らの運命は変わらん」

「んだとお!？」

賊が凄む。だがガレスは、

「フン……」

鬱陶しそうに鼻を鳴らすだけだった。

「お前……?」

アテナもまた、突然現れたガレスに戸惑っている。だがガレスは答えることなくアテナに告げた。

「その連中の後始末は任せてもいいな？」

「わかった。お前、どうする？」

「フン」

そこでガレスは先ほどアテナに向かって放たれた矢を親指で指さす。

「ああいう真似をしてくれた連中を、もてなしてくるのさ」

「わかった。行け」

「ああ」

ガレスはこの場をアテナに任せると、紅い目を光らせてそのままアーチャーへと歩みを進めた。

「アテナ、お前たち倒す」

今は戦闘中ということもあり、ほんの少しの間だけガレスに意識を向けたアテナは、すぐに振り返って賊たちを睨み付けた。

「ああ!？」

「面白いこと言ってくれるじゃねえか!？」

「死ぬのはテメエだよ！」

いきり立った賊たちが口々にひねりのない脅し文句を吐き捨てると、己の得物を構え直す。だが、アテナは怯みもしない。

「お前たち、卑怯者。アテナ、そんな奴らに負けない！」

「んだとお!？」

「ナメヤがって…」

「殺してやる!」

そうして、賊たちはアテナへと襲い掛かった。賊たちを睨み付けて得物を構える中、アテナが楽しそうにニヤリと笑ったのだった。

「ふう…」

軽く一息ついたアテナが剣を鞘に収める。彼女の周囲には、物言わぬ死体となった賊たちが斬り捨てられていた。

「……」

そしてゆっくりと首を巡らせると、アテナはある方向に視線を定める。その先には、悠然とこちらに向かってくるガレスの姿があった。

傷一つ負うことなく、先ほどと全く変わらない様子で自分の方に向かってくるガレスの姿に、アテナは楽しそうに微笑んだ。



「あいつ、強い」

素直にガレスに抱いた感想を吐露する。そして身を翻すと、そのまま子供たちが囚われていた砦へと走って向かったのだった。

「マルス、アテナもお前と行く」

賊退治ということもあつて大した苦戦もせず終了した後、アテナがマルスにそう申し出た。

「え？」

突然の申し出に、マルスが戸惑いの表情を見せる。だが、アテナは変わらぬ態度で話を続けた。

「アテナ、お前たちに助けられた。受けた恩は返す。これ、人として当たり前のこと。アテナ、マルスの戦いに力を貸す。マルス、助かる」

「ありがとう。これからの戦い、君の力が得られるなら心強いよ」

「こちらこそ。よろしく頼む」

「ああ」

二人はしっかりと握手を交わした。ここにまた一人、頼れる仲間が解放軍に加わった

のである。と、

「ところで…」

不意に、アテナが周囲をキョロキョロと見渡した。

「? どうしたんだい?」

アテナの行為の意図がわからず、マルスが首を傾げて尋ねた。

「あの男…どこだ?」

「あの男?」

誰のことかわからず、目的の人物の名前を聞こうとしたところで、

「! いた!」

お目当ての人物を見つけたアテナがマルスの前から走り去った。一体誰を探していたのかとアテナの向かう方向に首を向けたマルスは直後に固まってしまい、そして真っ青になった。

「! ちよつと待った、彼は!」

慌ててアテナを呼び止めるマルスだったが、残念ながらその声はアテナには届かなかった。

「おい!」

マルスの前から立ち去ったアテナが目的地に着くと、両手を腰に当てて目の前の人物を呼んだ。予想外に大きな声だったために、周囲も思わず視線を向け、そして直後にマルスと同じく固まってしまった。何故ならアテナの視線の先にいたのは……

「ん？」

アテナに向かって振り返ったその人物は、紛うことなきガレスだったからである。現時点では声をかけるどころか、腫物扱いしているガレスだけに、周囲に一瞬で緊張が走った。だが、

「お前は先ほどの……」

マルスや他の連中の予想を裏切り、ガレスは普通にアテナに応じたのだった。

「何か用か？」

そして身体ごと振り返ると、ガレスはアテナに正対する。その、あまりにも普通な対応にそれを見ていた連中は今度は目を丸くしたのだった。

「アテナ、礼を言いにきた」

「礼だど？」

ガレスがフルヘルムの下で眉根を擧げる。が、ガレスがそんな状況であることなどもちろん知る由もなく、アテナは話を進めた。

「そうだ。お前、さっきアテナ助けてくれた」

「ああ…」

礼の意味がようやくわかり、ガレスは拍子抜けしたように呟く。

「気にするな。あんなもの、ただのついでに過ぎん」

「でも、助けてくれたことに変わりはない。助けられたら礼を言う。人として当たり前のこと」

「律儀なことだ…」

ガレスがいつものように、楽しそうにクククと笑った。

「わかった。ありがたく頂戴しよう」

「よかった」

アテナが軽く微笑む。和らいだ雰囲気に、周囲もホツと一息ついた。が、ガレスと解放軍の関係を知らないアテナは遠慮会釈なくその先を続ける。

「お前、強い」

次にアテナが口にしたのはそんな言葉だった。

「ん？」

フルヘルムの仮面の下で、ガレスが楽しそうに笑った。

（考えてみればこんなふうに普通に誰かと会話をするのも久々のことか…）

ゼテギネアでは暗黒道に堕ちたため、自軍の者とさえ会話らしい会話などほとんどな

かった。ここに来てからも暗黒道の呪縛からは完全に抜け切れていないために、周囲から腫物扱い……あるいは敬遠されているのが手に取るようにわかった。

そのため、最後に交わした他人との会話らしい会話など忘れてしまうほどに昔のことであった。そして今、久々の会話らしい会話をガレスは少し楽しんでいた。

(俺らしくもない……)

そうは思わないでもなかったが、嫌な気分かというとなんかそんなこともなく、ガレスは暫しアテナに付き合うことにした。

「そうか？」

ガレスが答える。

「ああ。アテナ、嘘つかない。お前、本当に強い」

「光栄だな」

ガレスとしてもアテナの技量は遠目にも近目にも目の当たりにしたのだ。一角の戦士にそう言われて、悪い気はしなかった。が、ガレス自身も周囲もアテナに驚かされるのはここからであった。

「アテナ、強い奴好き。だから、お前のこと、好き」

「……何だと？」

突然の告白にガレスが一瞬言葉を詰まらせ、周囲も驚きを隠せなかった。だが、すぐ

にガレスはその言葉の意味を悟る。

『好き』というフレーズが使われたから勘違いも起ころうが、いわゆるLOVEではなく、LIKEの意味の方であることは明白だった。少し考えればわかることである。それを裏付けるかのように、目の前のアテナはニコニコ楽しそうに笑っているが、恥じらったり顔を赤くしている様子はなかった。

(青臭いガキでもあるまいし…何を考えているんだ、俺は)

少し溜まっているのかと内心で自嘲しながら、ガレスは再び先ほどと同じ言葉でアテナに応じる。

「それは…光栄だな」

「ああ。そのうち、手合わせ頼む」

「いいだろう。死なない程度に手加減してやる」

と、侮辱されたと思ったのか、アテナがムツとした表情になった。

「アテナ、そんなに弱くない。お前、アテナのこと見くびり過ぎ。ばか」

「クク…そうか」

アテナの態度に面白くなったのか、ガレスが軽く笑った。だが、すぐにいつもの調子に戻る。

「ならば、それが大言かどうかはいずれ確かめさせてもらおう」

「望むところ。アテナ、負けない」

「クク…向こうっ気の強い女だ」

そして、ガレスはアテナの前から立ち去った。久方ぶりの楽しい時間を過ごして。周囲の連中がまだ呆気にとられる中、ただ一人、もう一人の当事者であるアテナだけは満足そうにその後ろ姿を見送った。

こうして、解放軍に頼もしい味方がまた一人加わったのだった。

## NO. ※※ 黒騎士ガレスについて Vol. 1

【黒騎士ガレス】

神聖ゼテギネア帝国皇子。神聖ゼテギネア帝国女帝エンドラの息子。

元々は騎士道精神に溢れ、民衆にも慕われた皇太子の手本のような人物だったが、ハイルランド王国（神聖ゼテギネア帝国の前身）に大陸の他の国家が連合軍を組んで攻めてきたとき、魔導師ラシユデイの誘いに乗って暗黒道に堕ちたエンドラと共に、己も暗黒道に堕ちた。

以来、その強力な力と引き換えに残忍で残酷で苛烈な性格の持ち主となり、幾度となく反乱軍と戦うことになる。

反乱軍に敗れてこの世界に堕ちてきた（転生の一種）ことにより暗黒道の支配下からはある程度抜け出せているものの、完全には抜け出せていない。そのため、現在は解放軍に身を寄せているが立ち位置の不安定な状態が続いている状況になっている。

【特殊能力】

・分身作成

暗黒の力で己の精神体を分身として作り出すことができる。本体さえ生きていれば



いくらかでも作成可能。

【使用可能魔法】

- ・ ナイトメア
  - ・ デスクラウド
  - ・ チャーム
  - ・ ダーククエスト
  - ・ イービルデッド
- 全て伝説のオウガバトルで実際に使用できる暗黒魔法。但し、実際に原作でガレスが使用できるのはこの中の一つだけだが、この作品では上記全てが使用可能。
- ナイトメア、デスクラウドは単体攻撃魔法
- チャームは単体補助魔法
- ダーククエスト、イービルデッドは全体攻撃魔法

【使用武器】

- ・ サタンブローバー

死神が持つ鎌に近い大型の斧。相手の精気を奪い取ると言われる。

※これだけは伝説のオウガバトルからの出典ではなく、後継作品のタクティクスオウガからの出典です。

理由としてはガレスの得物は斧なのですが、伝説のオウガバトル内に出てくる斧が種類が少ないうえに（やろうと思えば）いくらでも手に入るの、一品物のありがたみがないため、後作品のタクティクスオウガで初出のこの斧を持たせました。

代わりと言っては何ですが、原作のタクティクスオウガ内ではサタンブローバーを道具として使用時にとある効果があるのですが、その特殊能力はこの作品ではありません。

※以上、更に詳しく知りたければ、原作である『伝説のオウガバトル』をプレイするか、あるいは実況動画やプレイ動画を見ることをオススメします。

くくく各勢力との現時点での関係くくく

アリエイア△△

マルスがその力を見込んで協力を要請したため、現時点では協力関係にある。が、その力があまりに強力過ぎるために恐れている者や警戒している者は多く、必ずしも友好的な状況とは言えない。

とは言え、その力に頼っているところもあるのは事実なので、現在は警戒しつつも付

かず離れずの状態が続いているような状況である。

オレルアンⅡ×

アカネイアの忘れ形見であるニーナを今まで庇護しており、そのニーナを拐される前にガレスが救出したため本来ならば良好な関係を保っているはずだが、その全身から醸し出す雰囲気や威圧感、邪悪さがその評価を覆している。

むしろ、ガレス本人を危険な不穏分子と見ているためにニーナとの接触到に注意を払っている。関係は非常に悪い。と言っても、現段階ではオレルアン側が一方的に敵視している状態だが、継続するようなら爆弾になる可能性も大いにあり得る。

その他Ⅱ△

距離感や人物を測りかねているために、付かず離れずで状況を見ているといったところ。

※オレルアン城解放時点では、勢力と呼べる勢力はアリティアとオレルアンぐらいのものなので現時点ではこのようにしました。後はタリスとカダイングらいですが、他の勢力と共にその他とみなしてください。

## NO. 05 邂逅がもたらすものは

中央公路を南下してアカネイアへと向かう解放軍。その途上、とある小さな村から救援を求められこれに応じた解放軍は、アテナという新たな仲間を加えた。そして再び進路を戻す。

アテナという仲間が加わったことで、解放軍ではちよつとした変化が起こっていた。それは、

「そうか。ガレス、アテナと同じように他の地から来たのか」

「ああ」

「アテナとガレス、同じだな。アテナ、ますますガレスのこと気に入った」

「…そうか」

どう返答していいかわからず、ガレスは彼にとって珍しく戸惑いながらアテナの相手をしていた。だがアテナはそんなガレスを気にする様子もないのか、それとも気付いていないのかはわからないが、その行軍の速度は先ほどまでと変わらずガレスに合わせていた。その様子を、解放軍の主だった面々は驚いたような表情で見つめている者もいれば、ハラハラした表情で見ている者もいた。

そう、解放軍に起こっていたちよつとした変化というのはこれである。解放軍に合流してからというものの、アテナはガレスと共に過ごすことが多いのだ。ガレスのこれまでの戦いぶりを目の当たりにしたことがないというのもあるだろうが、それでも解放軍の主だった面々のうち何人かは、それとなくだったりあるいは直接的にアテナに助言や忠告しているのだった。無論、その内容はガレスにあまり近づいたり深追いしないようにというものである。

だがアテナは、それを無視してガレスと積極的にコミュニケーションを取っていた。無視して……と言うよりは、彼女の剣士としての洞察力と純粋な心がガレスの人となりを見抜いた結果の産物と言つていいかもしれない。

つまり、本能的に直感的に、アテナはガレスがそこまで危険な人物ではないということを見抜いたので。確かに邪悪さは間違いないが、それでも全く話が分からない、理解のできない人物でもないということのアテナは直感と本能で捉えていた。だからこそ、現時点では皆が恐れるガレスと積極的にコミュニケーションを取っていたのである。

では、当のガレスはどうかというと……

(やれやれ……)

少し辟易していたというのが実情である。この地に堕ちてきてから少し経ったが、相

も変わらず解放軍の面々は自分を腫物扱いにしているため、他者との交流などほぼ皆無に等しかった。

それは別にそれでも良かったのだが、とは言えずと警戒されっぱなし、敬遠されっぱなしというのも地味に神経や精神を削られていた。遠慮も手加減もないあの戦闘の様を見れば自業自得と言えるのだが、それでもいい加減鬱屈してきたので変化を求めていたのも事実だった。

…とは言え、望んだ変化ではあるがいきなりここまでズケズケとコミュニケーションを取ってこられたのは予想外だったため、戸惑っているのが本音だった。

(とは言え、突き放すわけにもいかんからな…)

アテナの行動に裏や思惑はない。それは彼女の表情とその行動でわかる。だからこそ、困っているのであるが。

(…まあ実際、いい暇潰しにはなる。だが、こう積極的にこられてもな…)

腫物扱いから一瞬で怒涛のコミュニケーションへと一変したのである。どうしたらいいかと対処に頭を悩ませるのも仕方のないことであった。

「? ガレス?」

そんなことなど知る由もないアテナが、そのガレスの様子を察知したのかキョトンとした表情になってガレスを覗き込んだ。

「何だ？」

ガレスが答える。

「どうかしたか？」

そんなガレスに、アテナは端的に尋ねた。

「？ 何がだ？」

「ガレス、今何か考えごととしてた。アテナ、そんな気がした。違うか？」

「いや、確かにそうだ」

流石に鋭いな……と思いながらガレスが答えた。

「ガレスが考えごと、珍しい。どうかしたのか？」

「いや……」

ガレスが言葉を濁す。そして、フルヘルムの兜の下で、アテナに気付かれないように

ガレスはアテナの顔を見た。

（お前が原因とは流石にな……）

アテナ自身には何の罪もないのだが、アテナが原因であることは間違いない。だが、そんなこと言えるわけもなければ、説明のしようもなかった。そのため、ガレスは答えをばぐらかすしかなかった。

とは言え、他者に対して気遣うという真似を無意識にとはいえしているあたり、やは

り完全ではないとはいえ暗黒道の影響から解放されているのだろう。

「?、そうか?」

そして、ガレスの現時点での悩みの種であるアテナは不思議そうな表情で首を傾げた。ガレスの様子を見るとどうにも引つかかるのだが、本人が口を開かない以上は無理強いして聞くこともできない。

（他人に言いたくないときも、言いたくないこともある。だから聞かない。アテナも、それぐらいはわかる）

内心で自分の判断に頷きながら、アテナはそこで口を噤んでガレスとコミュニケーションを取ることを一時中断したのだった。

そんなガレスたちを先述のように解放軍の面々は多種多様な思いを抱きながら見ている。が、その中で一際目立つのがニーナだった。

（あの二人、また…）

馬車の中から遠巻きにガレスとアテナの様子を見ることになっていたニーナ面白くなさそうにその美しい顔を顰めた。オレルアン騎士団によってガレスとの接触は断たれ、あの夜の宴以降碌に話もできていないニーナには、自分が何もできない間にガレスと肩を並べているアテナが羨ましくもあり恨めしくもあった。逆にオレルアン騎士団：特にハーデインはガレスという不穏分子とニーナの接触が断てたことで、表にこそ出



さないが非常に満足していた。

そんな、各人の思惑や微妙な雰囲気にも包まれ、解放軍は中央公路を南下していく。そして程なく、解放軍が辿り着いたのは峡谷にして隘路、護るに易く攻めるに難い天然の要衝だった。

その名を、レフカンデイ。

「ハーマイン将軍」

解放軍がレフカンデイに差し掛かった頃、そのレフカンデイの峡谷を預かる司令官であるハーマインの許を訪れる一人の騎士の姿があった。

「おお、これはミネルバ殿か」

ハーマインが自分の許を尋ねてきた人物の名を呼んだ。その人物：真紅の鎧に身を包んだその女騎士こそ、マケドニアの第一王女であるミネルバであった。

彼女は自身も武人として大陸に名高いが、戦闘指揮官としても非常に優れており、その能力を見込まれて、兄であり現マケドニアの王であるミシエイルの命令でここへ派遣されたのである。

「どうかなさいましたかな？」

自分の許を訪れたミネルバに対し、ハーメインが尋ねた。

「どうもこうも……」

返答したハーメインに対し、ミネルバは不満な表情を隠さずに言葉を続ける。

「こんなやり方、私は賛成できません。栄光あるマケドニアの騎士として堂々と正面から戦わせてください」

「成る程、今回の一戦、ご不満ですか」

「ええ」

首肯してミネルバはその意を表した。

「お気持ちは何もとも。しかし王女、貴方のマケドニア軍はオレルアンで多くの兵を失った。お忘れではあるまい？」

「それは……」

ミネルバが唇を噛む。反論したいが事実である以上、何も言えないのだ。それをわかった上で、ハーメインは更に言葉を続けた。

「体勢を立て直すにはこの城で時間を稼ぐしかないのだ。私は陛下直々のお声がかかりでここへ送り込まれてきた。色々と思うところはあろうが、その私が決めたことだ。ここは大人しく従って頂きたい」

「……」

ハーマインの言っていることはわかる。わかるのだが、それでも納得できるかと言えばそんなことはなく、ミネルバは不満を隠せなかった。そのため、それがわかったハーマインも殺し文句を出さざるを得なかった。

「だが、どうしても貴方が我ら帝国のやり方に従えないと言うなら、人質となっているマリヤ王女の身の安全は保障できないが、それでもいいのか？」

（！・ 下卑た真似を！）

人質になっている妹のことを強制的に思い出させられ、ミネルバは全身がカッと熱くなった。とは言え、ここで暴挙に出ても問題は解決しない。どころか、ますます悪化するだけである。故に、ミネルバは内心の怒りや不満を押し殺してハーマインに従う以外の道はなかった。

「…わかりました、貴方の指示に従いましょう。だが、こんなやり方でアリティアの騎士団が倒れるとは思えない。いずれきつと後悔なさる時が来るでしょう」

予言めいた言葉をハーマインに言い残すと、ミネルバは身を翻してその場を去った。そして、己の持ち場に戻る。

「ミネルバ様」

そこには、彼女の腹心の部下たちが主の帰りを待っていた。

「パオラ、カチュア、エスト、出ます」

『はいー』

号令と共に彼女たちは大空へと舞い上がったのだった。

「随分と頑張っているようだな」

後陣で前線の戦況を見ながらガレスはぼんやりと呟いた。後陣に置かれていることが指し示すように、今回ガレスは待機の身である。地形が隘路ということもあつて、機動力に優れた騎兵や飛兵が今回の主力だった。そのためガレスはお留守番である。

（何か別の思惑があるのかもしれないが…）

そう思ってしまうのは考え過ぎだろうか。アテナというそれなりの理解者ができたとはいえ、その数はまだアテナたった一人。それ以外のほぼ全ての人間は敵愾心…とまではないかないものの、警戒心や恐怖心といったものを持つてはいるはずなので、そう考えしてしまうのも無理からぬところである。

（まあ、邪推か思惑通りかは確かめようがないがな。せっかくだし、のんびりさせてもらうか）

考えてみれば、オレルアンではずっと働き詰めだったのだ。それを思えば少しぐらいのんびりしたところで文句はあるまい。ガレスはそう考えると、天幕に戻って昼寝でも

しようかとその身を翻した。が、

(ん?)

直後、動きが止まる。そして再び身を翻すと、遠くの戦場へと視線を向けた。

(今のは…)

「王子、村への進路を確保しました!」

「わかった、カイン」

伝令役として戻ってきたカインに答えると、マルスが剣を抜いた。

「アリエティア軍は引き続き砦への進路の確保を! オレルアン騎士団には僕と共に村へと向かってもらう!」

「承知した!」

マルスの命令にハーディンが答え、配下の騎士たちに命じるべくその場を離れた。ハーディンの後ろ姿を見送ると、マルスはカインへと振り返る。側にはいつの間にか合流したのか、僚友のアベルの姿もあった。

「カイン、アベル、そういうことだ。僕はこれから村の解放へと向かう。その間に君たちは、砦への進路の確保を」

「承知しました」

「王子、お気を付けて」

「ありがとう。皆も気を付けて」

『はい!』

カインとアベルのみならず、その場にいる解放軍の面々が力強く頷いたのを心強く思いながらマルスは村の解放へと向かった。

「さてつと…」

マルスを見送ったカインが馬首を返して進路に視線を向ける。

「…全く、見れば見るほど厭らしい地形だな」

「ああ」

隣に肩を並べるアベルも頷いた。

「狭い隘路じゃ大群で攻めるわけにはいかず、攻めるに難く護るに易いか」

「だからこそ、ここに砦を築いて防衛線を設けているんでしょうね」

二人の横に並んだマリクが会話に参加する。

「そうですね」

ゴードンも加わって厳しい視線を前方に向けた。

「重装兵を前面に押し出して少しずつ進軍していくか」

「あるいは機動力のある騎兵で一気に叩くか」

「その二択で、王子は今回は後者を選択したというわけか」

「それは仕方ないだろう」

今度はオグマである。

「こちらは兵力的にはまだ劣勢なのだ。時間をかければかけるほど不利になる。それに、オレルアンで加えた兵たちは皆騎士だ。騎士の頭数が多い現状ではそうなるというものだ」

「そうだな。それに、あまり日数もかけていられん。長引けば向こうは援軍も来るだろう。だが、こちらには援軍はない。消耗戦になれば、ジリ貧になるだけだ」

ナバールの指摘である。流石に幾多の戦場を潜り抜けているだけあって、的確な観察眼であった。

「…つと」

カインが何かを捉える。

「どうした？」

「見ろ」

アベルの問いかけに、カインが空を指さした。見上げると、そこにはこちらに向かつてくる敵兵の影があった。

「新手のお出しました」

「今度は飛兵ですか。だったら、僕の順番ですね」

マリクが前に出ようとするが、

「待て」

その足を、オグマが止めた。

「？ オグマさん？」

「良く見ろ、マリク。あれはドラゴンじゃない、ペガサスだ」

そう言われて再びマリクが目を凝らすと、確かにその敵影はドラゴンナイトではなくペガサスナイトだった。

「ペガサスならお前の魔法よりは…」

「ああ、ゴードン」

「ええ」

マリクと入れ替わるようにゴードンが前に出てくる。そして、矢を番えて弓を引くとその矢を放った。弓矢の餌食となったペガサスナイトはそのまま落下していく。

「よしー！」

落下していく敵兵の姿に、ゴードンが軽くグツとガッツポーズをした。

「お見事」

「へへ…」



マリクの称賛にゴードンは鼻の頭を擦って恥ずかしそうにはにかんだ。  
「気を抜くなよ、これで終わりじゃない。来るぞ！」

カインの叱責に二人が気を引き締めて首を返す。そこには、二騎のドラゴンナイトと同じく二騎のペガサスナイトが突っ込んでくる光景が迫っていた。そして、そのうちのドラゴンナイト二騎とペガサスナイト一騎が別行動をとって側面から攻めかかろうとしていた。

「今度はドラゴンか」

「行くぞ、オグマ」

「ああ」

「では、僕も。ドラゴンナイトならば私の魔法攻撃も有効でしょう」

オグマ、ナバルル、マリクの三人が竜騎士の迎撃へと向かった。

「カシム、念のためにあの三人の援護を頼む」

「了解」

指示を出したアベルにサムズアップすると、カシムもオグマたちに合流した。

「さて、残るはあのペガサスナイトだな……」

カインが一騎だけ残ってその場に滞空しているペガサスナイトを睨み付ける。

「？ 妙だな？」

そして、その姿に眉根を潜めた。

「気付いたか、カイン」

「ああ」

アベルの問いかけにカインが頷く。

「どうかしたんですか？」

オグマたちの代わりに合流してきたノルンがアベルに尋ねた。

「あのペガサスナイト、こつちを攻めてくる様子がない」

「え？」

アベルの説明にノルンが件のペガサスナイトを観察する。すると確かに、こちらに攻めてくる様子は見受けられなかった。フワフワと空中を回遊：待機しているだけである。

「こちらに弓兵がいるのに気づいたから、警戒しているんじゃないですか？」

ノルンが疑問を口にした。

「それなら、尚更おかしい。だったら、さっきのドラゴンナイトたちと連携を組んで攻めてくるはずだ。なのに、単騎で上空に待機しているだけだ。こちらを攻めてくる素振りもない」

「ああ、どう考えてもおかしい」

アベルも難しい顔になる。だが、

「大丈夫ですよ」

破顔したのはゴードンだった。そして、カインたちの前に進み出る。

「ペガサスナイトには変わりないんです。当てさえすれば……」

そして、弓に矢を番えて上空のペガサスナイトに狙いを定める。

「待て、ゴードン！」

「迂闊な行動をとるな！」

カインとアベルが慌てて制するものの、ゴードンは聞き入れない。それは、先ほど一騎仕留めたことに加えて、飛兵が弓に絶対的優位にあるからである。飛兵に対する弓兵の有利は確かに正しい判断だが、先ほど一騎を仕留めていることに対しての驕りもあった。そして、その驕りを見逃してくれるほど、戦場は優しい場所ではないのだ。

「喰らえ！」

ゴードンが矢を放とうとするまさにその瞬間、ペガサスナイトが少し横に身体を動かした。その瞬間、ゴードンは太陽を直視することになってしまった。

「うっ！」

眩しさに思わず目が眩んでしまい、それとほぼ同時に矢を放ったため狙いは大きくそれた。そしてゴードンは一時的に視界不良になってしまう。それを見計らったかのよ

うに、ペガサスナイトの背後から手槍が投擲される。その手槍は、鋭い素早さと強さを乗せて一直線にゴードンへと向かっていた。

『ゴードン！』

「ゴードンさん！」

カイン、アベル、ノルンが悲鳴を上げる。だが、未だ視界不良なゴードンには何が起こっているのか、そしてこれから何が起ころうとしているのかわからない。だが、三人の声色から災いが自分の身に降りかかろうとしているのはわかった。そして今のゴードンには、それを対処することはできない。

こうしてゴードンは、戦場で緩みを見せたツケを己の生命で払うことになった…はずだった。だが、

「う、うわっ！」

手槍がゴードンの生命を刈り取るほんの一瞬間、ゴードンは急にとつともなく強い力で後方に引つ張られた。そして一瞬でぶん投げられ、地面にその身をしこたま打ち付けることになる。

「痛ててて…」

「ゴードンさん！」

「おい大丈夫か、ゴードン！」

ノルンとカインが慌ててゴードンの許に駆け寄った。対照的にアベルは「お前……」

眼前の光景に唾然とする。

「いつの間……」

「フン」

鬱陶しそうに、或いは小馬鹿にしたように鼻を鳴らしたのは、今回は待機を命じられたはずのガレスだった。

「……今回は待機だったはず。何故出てきた」

アベルが眼差しを鋭くしてガレスに問いかける。が、ガレスは答えようとはせずそのまま視線をゴードンへと定めた。

「一体何が……」

「大丈夫ですか、ゴードンさん？」

「うん、ありがとう」

痛む身体を擦りながら、ゴードンがノルンに肩を貸してもらって立ち上がる。

「フン、大げさに痛がるな」

「え？」

顔を起こす。ようやく視力の戻ってきたその目に飛び込んできたのは、自分に顔を向

けているガレスの姿だった。

「っ！」

その姿に、ゴードンは思わず硬直してしまふ。が、

「た、助けてくれたんですか？　ゴードンさんを」

それとは対照的にノルンが恐る恐るながらもガレスに尋ねた。

「ああ」

その答えに、ゴードンが今度は毒気を抜かれたようにええ…？　と、ビククリしたような顔をした。

「傷があるならさっさと下がれ。ないならそこで好きなようにしてろ」

「え…ああ…」

何と答えていいのかわからず、思わずゴードンは肩を貸してくれているノルンの顔を見た。だがノルンもどうしていいのかわからないのは同じため、返答など返せるわけもなく困った顔をするほかはなかった。と、

「おいー！」

痺れを切らしたのか、アベルがガレスに半ば怒鳴りかけた。その劍幕に、思わずゴードンとノルンがビクツと身を竦ませる。その頃にはカインもアベルに合流しており、同じように厳しい視線でガレスを睨み付けていたのだった。

「フン…」

だがガレスはいつものようにつまらなそうに鼻を鳴らすと、自身の得物：暗黒の両刃の斧であるサタンブローバーを肩に担いで少し前に進み出た。

「死の匂いがしたんでな…」

そして、そう答える。

「何?」

「死の匂いだと?」

アベルとカインがガレスのその返答に怪訝そうな表情になった。

「ああ」

だがガレスは委細構わず話を続ける。

「まあ、それが見事に当たってたわけだな」

そして地面に突き刺さっている手槍と、先ほど自身が後ろに投げ飛ばしたゴードンを交互に指差した。

「あ…」

ガレスの助けがなければ自身が手槍に貫かれていたことがようやくわかり、ゴードンをはじめとしてその場にいる全員が神妙な顔をした。だが、ガレスはいつものように何一つ気にせず、その手槍の射出許へと視線を向ける。そこには、いつの間に増えたのか

三騎のペガサスナイトと、それを従えるかのような一騎のドラゴンナイトの姿に変わっていた。

「どうやらあの女らしいな…」

ガレスはその中に一騎だけいるドラゴンナイトに視線を固定するとそう呟いた。

「！ あれは！」

その騎士たち…正確に言えば、ガレスの指摘したドラゴンナイトの姿にカインが言葉を詰まらせた。アベルもじんわりと全身から汗を滲ませ、緊張感を露わにする。

「赤い竜騎士…」

「ああ、間違いない。マケドニアのミネルバ王女だ」

視線の先で自分たちを見下ろしているミネルバの姿に、カインとアベルは急速に咽喉を枯らしてゴクリと唾を飲み込んだのだった。

「ミネルバ様」

同時刻、解放軍の上空にて。囃役となっていたペガサスナイト…パオラが主人の許へとペガサスを滑らせた。

「ご苦勞様でした、パオラ」

任務を果たした部下に、ミネルバが労いの言葉を掛ける。



「残念ながら不意打ちは成功しませんでしたね」

部下の一人、カチュアがその言葉通り残念そうに呟いた。

「…ええ、あの重騎士に邪魔されたわ」

ミネルバが返答するも、彼女は本当に残念には思っていないかった。この戦いでの方針とは言え、こんなやり方で戦うのはミネルバにとつては本意ではない。とは言え、妹のマリアのことを考えれば従わざるを得ない。不本意な戦いと、妹の身の安全を天秤にかけた心理状態では剣先も鈍るのは当然のことだった。

とは言え、不本意ながらも出陣した以上は何らかの戦果を挙げたいが、こんな戦いで挙げた戦果に何の意味があるとミネルバの心は乱れていた。だから、ゴードンを倒せなかったのは実のところ痛し痒しというところだったのである。と、その重騎士…ガレスが少し前に進み出てきた。そして、己の得物である巨大な斧…サタンブローバーの穂先をゆっくりとミネルバたちに向けた。

「うわ、何あの真っ黒。こわい」

その姿に感じたのは恐怖か嫌悪感か。そのどちらかはわからないが、今この場に率いている直属の部下の最後の一人、エストが顔を引き攣らせながら少し下がった。

「ちよつとエスト、もうちよつと緊張感持ちなさいって」

ある意味普段と変わらないエストの姿をカチュアが窺める。

「だつてさー、姉様」

「だつてじゃないでしょう?」

「はいはい、二人ともそこまでしなさい」

まったりしかけた空気を引き締めるかのようにパオラが口を挟んだ。姉に注意され、妹二人はバツが悪い表情になって俯いたり苦笑いを浮かべる。

「ミネルバ様、如何なさいますか?」

カチュアとエストが大人しくなったのを見計らつてパオラが主君の意見を伺つた。

「そうね…」

顎に手を当て、ミネルバが次の一手を考える。と、何処からかいきなり彼女の身体を包むように、そして纏わりつくように黒い靄のような霧のような物体が現れた。

「な、何!」

想定外の状況にミネルバが驚きながらそれを振り払おうと身体を左右に振る。だが、その黒い何かは剥ぎ取れない。そして次の瞬間、ミネルバは己の全身から急激に力が抜けるのを感じた。

「! くっ!」

バランスを崩して自分の飛竜からも落ちかねなかつたが、何とか力を振り絞つてそれは防いだ。だが、そうしている間にも全身から力が抜け、そして、

(い、意識が…)

急激に意識が遠くなっているのを感じていた。

「ミネルバ様！」

慌ててパオラが脇からミネルバを支える。

「ミネルバ様！」

「ミネルバ様！」

カチュア、エストの二人も急いでミネルバの許に向かおうとする。が、その直後、

「！」

何とも言えぬ嫌な気配をカチュアが感じた。そして思わず、エストのペガサスの手綱を取る。瞬間、

「エスト！」

思いつきり、それを引っ張った。

「うわっ！」

自然、ペガサスは引っ張られることになって止まった。そして、いきなりのことにフランスを崩したエストは愛馬の背から落ちそうになった。

「あいたた…もう、何するの姉」

不満気な表情でカチュアを恨めしく睨んだ直後、エストの後方で強烈な風圧が吹き上

がった。

「な、何?！」

何が起こったのか、慌てて振り返るエスト。だが、

「動いちゃダメ!」

未だにエストの天馬の手綱を握っているカチユアが鋭く静止する。その迫力にも言えず、エストはその場から動けなかった。と、もの凄い速さで何か为天から降つてきてそのまま落下していく。その縦軸は、エストがそのまま進んでいけば丁度彼女と接触する場所だった。そしてすぐに、何か相当な重量物が落下した音が周囲に響き渡る。

『……』

固唾を飲みながら見下ろすペガサス三姉妹。やがて、土煙が晴れたその場に現れたのはガレスの姿だった。

そしてガレスは先ほど投げた物……自らの得物であるサタンブローバーを再びその手に持つと、先ほどと同じようにその穂先をゆっくりとミネルバたちへと向けたのだった。

「ヒッ!」

その姿に先ほどまでの軽口はどこへやら、エストが恐怖に顔を引き攣らせながら慄いた。カチユアも脂汗を滲ませながら小刻みに震えている。

(何とかしないと…)

一人、現状のこの中では唯一冷静なパオラが次の手を打つべく頭を回転させた。そして、

「二人とも、撤退します！」

そう、妹たちに指示を出した。

「エスト、私の逆側からミネルバ様を支えて！ カチュア、殿をお願い！」

「う、うん！」

「わかりました！」

流石に血を分けた姉妹だけあって、行動が決まると阿吽の呼吸で動き出す。そして、物の見事に戦闘空域を脱出したのだった。

「大したものだ…」

どンドン小さくなっていくミネルバたちの後ろ姿を目で追いながら、ガレスは思わず呟いた。

「見事な状況判断だな。クク…しかし、惜しかった」

そして、何時ものように聞いた者が凍り付くような静かな笑い声を上げた。

「邪魔をしなければあのピンクの髪の小娘、ペガサスごと真つ二つになっていたものを。あの青い髪の小娘、いい勘と反射神経をしている」

そして、ガレスは続けざまに楽しそうに笑ったのだった。そんな中、

「お、お前……」

呆然とした表情でカインが口を開いた。

「今、一体何を……」

アベルも理解できないという表情で呟く。それはゴードンやノルンも同じだったが、

「フン……」

素直に話すはずもなく、ガレスはつまらなそうに面倒くさそうに鼻を鳴らしたのだった。ガレスが何をしたのか、それは少し時間を巻き戻すことになる。

ゴードンを手槍の危機から救ってミネルバたちにサタンブローバーの穂先を向けた後、ガレスはそれをすぐに収めた。そして、精神を落ち着かせて集中し始め、

「ナイトメア」

そう紡ぐと、軽くジャンプしてサタンブローバーを下から降り上げた。その直後である、ミネルバの身体をあの黒い靄とも霧ともいえない物体が包んだのは。そしてをそれ

を確認した後、ガレスは振りかぶると己の膂力を最大限まで發揮してエストの生命を刈り取るためにサタンブローバーを投擲したのだった。

本来は投擲武器ではないためブーメランのように手元に戻ってくることはないのだが、投げた先が上空のため引力に引かれて落下してくる。そのため、多少のズレはあっても自分の近くに落下してくることがわかっていたのでこのような真似をしたのだった。

これが、あの時の顛末である。

(クク……やはり使えたか)

サタンブローバーを回収したガレスが満足そうにフルヘルムの下で笑っていた。オレルアンでニーナを助けるときに暗黒道の副産物である分身能力も使えたために、もう一つの副産物である暗黒魔法も使えろと思っていたが、その読みはズバリ当たっていたことにガレスは非常に満足していた。

先ほど使用したのはナイトメアであつてガレスの得意とする暗黒魔法とは違うが、それでも実際に使用できるといことがわかったのは収穫である。

(まあ、分身を造れた時点で恐らくこうなることは予想出来ていたが、それでも実際に試してみないことにはわからんからな。……ククク、だがこれで暗黒魔法も使えることが

ハッキリした)

「面白くなりそうだ……」

小声でそうガレスが呟いた直後だった。

「ほお……」

先ほどまでここにはいなかったある男の声が聞こえ、そして、ガレスの首筋に剣が当てられたのは。

「何の……とか説明してもらおうか？」

「貴様……」

自分の後ろから聞こえてきた声にガレスがゆっくりと首だけ振り返る。そこにいたのは予想通りの人物だった。

「何時の間に……」

「フン」

ガレスをバカにしたように鼻を鳴らすその人物。

『ハーデイン公！』

カインとアベルをはじめ、その場にいたアリテイア宮廷騎士団の面々や、ドラゴンナイト討伐から戻ってきたオグマたちもその名を叫んだのだった。

「今回、貴様は出撃の一員ではなかったはず。何故ここにいる」



「それが貴様に関係あるのか？」

「当然だ。軍律を乱すような真似を犯す輩を捨ておくわけにはいかぬ」

「クク…成る程な」

火花を散らして睨み合いながらガレスとハーデインが対峙する。もつとも、ガレスはハーデインに背を向けたままの状態ではあるのだが。

「答えろ」

感情の一切籠つてない声でハーデインが詰問する。だが、ガレスは何時ものように取り乱した様子もなく、微動だにしない。

「嫌だと言ったら？」

そして、挑発するかのようになぞ答えたのだった。

「ほお…」

ハーデインがその挑発に乗ったかのように薄く微笑み、ガレスの首筋に中ててある剣に少し力を込めた。周囲は二人を止めることもできず、ある者はハラハラしながら、ある者は面白そうに唇の端を上げながらその様子を見ている。と、

「待ってくれ！」

そこに割つて入ったのはマルスだった。

「マルス王子か」

ハーディンが横目でチラッとマルスの姿を確認した。

「ハーディン、この一件は僕に預からせてくれないか？」

「…何故だ？」

ハーディンがガレスの首筋に剣を当てたままマルスに振り返ってそう尋ねた。このような状況下で対象から目を放すのは決して利口なことではない。だが、逃がさないという自信があるのか、逃げないという自信があるのかはわからないが、ハーディンはガレスから視線を外してマルスに振り返ったのである。

「僕の部下たちから事情を聞いたんだ。彼は僕の部下の一人を助けるために今回勝手をしたらしい」

「何だと!？」

マルスの言葉に驚きを隠せないハーディン。それは、何時ものようにハーディンの側に控えている直属のオレルアンの騎士たちも同じであった。

（この男が…人助けだと!?)

驚愕の想いを抱いたままハーディンがガレスに振り返る。いつもと全く変わりのない様子 of ガレスの姿からは、人助けなどということには一番縁遠い存在に見えたからだ。

（いや…だが…）

振り返る。認めたくないことだが、そもそもオレルアンでマケドニアの残兵に拐きそうだったニーナを救ったのが誰だったかということ。それは、認めたくないことが目の前にいるこの漆黒の男に違いなかった。それを考えれば、今マルスが言ったこともあり得ると思う。

(しかし…)

偏見と言ってしまったえばそれまでだが、それでもハーデインはガレスが人助けするようには思えなかった。と、

「ほ、本当ですー」

その逡巡を断ち切るかのように誰かの声がハーデインの耳を打つ。声のした方向に振り返ると、少女の兵士に肩を貸してもらって立っている。少年兵の姿があった。

「お前は…」

その姿は確かに戦場で数度目にしたことがあった。確か、名前は…

「ゴードンと申します。以後、お見知りおきを」

少女の兵士、ノルンから離れるとゴードンは礼を失せないように頭を下げた。

「この男に救われたというのは、お前か？」

「はい」

ハーデインの問いかけにゴードンが頷いて答えた。

「手荒な方法でしたけど、助けられたのは間違いありません。もし彼が…が、ガレスさんが出てきてくれなかったら、僕は死んでいたかもしれない」

「む…」

真剣な面持ちでそう訴えられ、ハーデインは言葉に詰まってしまった。そこに、

「僕からも重ねて頼む」

マルスも口を挟む。

「……」

二人に真剣な表情で頼まれ、ハーデインは渋面を作って黙り込んでしまった。この不穩分子の処理をするには格好の口実ができたからだ。とは言え、事情が事情であれば厳罰をもって処するというわけにもいかない。

少しの間悩んでいたハーデインだったが、少し経ってガレスの首筋から剣を引いた。

「…いいだろう」

そして、剣を鞘に収める。その行動に、オレルアン騎士団を除く周囲の面々はホツとした表情になった。

「マルス王子、指揮官は貴方だ。貴方に従おう」

「すまない」

「だが先ほど言ったように、この男が軍律を破つたのは事実。無罪放免というわけには

いかんぞ」

「わかつている。…ガレス」

マルスが一步前に進み出るとガレスの名を呼んだ。

「何だ？」

ガレスがそれに相対するように振り返る。相変わらずの全身から醸し出す威圧感に内心では冷や汗を掻くマルスだが、表面上はそんなことは億尾にも出さずにガレスに命令した。

「しばらく謹慎を命じる。解除するまで勝手な行動は許さない。見張りもつけさせてもらおう」

「…まあ、いいだろう」

ガレスがすんなりとマルスの命令に応じたことに驚きつつも、それ以上にホツとした表情をここにいるほぼすべての人間が浮かべた。

（わかりやすい連中だ）

フルヘルムの下で何時ものようにクククと笑いながら、ガレスはサタンブローバーを担ぐとゆつくりと後方へ戻っていった。その途上、

「あ、あの…」

思いもよらず横から声をかけられる。振り返ると、そこにはまだ警戒心や恐怖心を抱

いているゴードンの姿があった。

「何だ？」

立ち止まると、ガレスが尋ねる。ゴードンは一瞬ビクツと身体を震わせたが、

「その…あ、ありがとうございます」

ペコリとお辞儀をしたのだった。

「戦場に立っているのなら、最低限自分の身ぐらい自分で守れ。半人前扱いされたくないかったらな」

「あ、は、はい」

何を言われるか、あるいは問答無用で手を出されるかと内心でビクビクしていたゴードンだったが、予想外の言葉に驚きつつも再び頭を下げた。そして再び歩き出したガレスに、

「お主…」

話し掛ける者がもう一人いた。

「ん？」

ガレスが再び声のした方に首を向ける。そこには、見たこともない老人の姿があった。

（何だ？ このジジイは？）

これまで見たこともないその姿にガレスは内心で首を傾げる。と同時に、その雰囲気から只者ではないことも悟っていた。

(…何者だ? このジジイ?)

見た感じ、リフやウエンデルのような只の老人に見える。だがガレスは肌で感じていた。目の前の老人が只の人間ではないことを。

「…何だ?」

足を止め、奇怪に思いながらガレスが尋ねる。

「いや…」

だが返ってきたのは、その一言だけだった。

「…そうか」

そしてガレスもそれ以上何も言わず、そのまま後方へと戻っていったのだった。双方に、只の人間じゃないという思いを抱かせながら。

「ミネルバ様、大丈夫ですか?」

一方、戦闘空域から離脱したミネルバたち四人。パオラが片側からミネルバを支えながら心配そうに尋ねた。

「ええ、もう大丈夫よ。ありがとう、パオラ」

まだ些か本調子というわけにはいかないのだろうが、それでも先ほどよりは随分とマシになったためにミネルバも体勢を立て直すとそう答えた。

「そうですか、良かったです」

その様子にパオラがホツとしてミネルバから少し離れた。

「カチュア、追手は？」

そのまま、後方のカチュアに尋ねる。

「大丈夫、追ってきている様子はないわ。もつとも、向こうは飛兵の姿がほとんどなかったから当然かもしれないけど」

「そう」

一先ず安心といったところだろうか、パオラが重ねて安堵の息を漏らす。カチュアもエストの横に並んで馬首を揃えた。

「それにしてもミネルバ様、一体どうなされたんです？」

カチュアが尋ねる。だがミネルバは首を横に振るだけだった。

「わからないの。あの黒い霧のようなものに包まれた直後、急激に身体から力が抜けて、意識が遠くなったの」

「では、原因はあの黒い霧……」



パオラが表情を厳しくしてそう呟く。

「そうでしょうね。問題は何故あんなものがいきなり現れたか…だけど」

「あの男…でしょうね」

「ええ」

「そうね」

カチュアアの呟きにミネルバとパオラが頷いた。三人の脳裏に浮かんだのは当然の如くガレスの姿だった。そして、その言葉を聞いた瞬間、エストがビクツと身体を震わせた。

「エスト?」

最初にそれに気付いたのはカチュアアだった。いつもはうるさいぐらいに元気な末妹が、ここまで一言も発言していないことに気付いたのだ。ミネルバとパオラもエストに視線を向けると、エストは俯いたまま手綱をギュツと握りしめていた。

「ちよつと、エスト?」

「どうしたのです? エスト」

ミネルバとパオラもエストの様子がおかしいことに気が付いて声をかける。と、エストはいきなりカチュアアに抱き着いた。

「ちよつと、どうし…」

突然のことに戸惑ったカチュアが訳を聞こうとしたところで口籠もった。何故なら顔を伏せたままのエストは小刻みに震えていたからだ。歯の根も合わないのだろうか、ガチガチという微かな音も聞こえてくる。

「エスト、貴方…」

どう声をかけたらいいかかわからずに、カチュアはそれ以上二の句が継げなかった。と、

「…、怖い…」

顔を伏せたままだが、ようやくエストが口を開いた。

「え？」

「…、怖い、怖いよう、姉様…」

そこでようやくエストが顔を上げた。まるで子供の頃に戻ってしまったかのようにエストは大泣きしていた。

「エスト…」

「何!? 何なのあいつ!? あ、あんな怖い奴始めて…」

そこでガレスのことをより克明に思い出してしまったのだろうか、エストが再び身体を震わせた。

「ヒッ!」

そして、ひきつけを起こしたかのようにガタガタと震えだしてしまふ。その間も、エストが泣き止むことはなかった。

「エスト……」

カチュアがエストを包み込むように優しく抱きしめる。

「大丈夫よ。もう大丈夫だから」

「うん……うん……」

カチュアの胸の中でしきりに頷きつつもエストはすぐに離れることができなかつた。それだけエストには恐ろしい体験だったのだ。そしてその姿に、ミネルバとパオラも何も言えなかつた。顔を見合わせて心配そうな表情を浮かべるだけしかできなかつたのだ。

「これからですが、どうなさいますかミネルバ様？」

「そうですね」

取り敢えずエストはそつとしておくことにして今後の方針をパオラが尋ねる。ミネルバは少し考えていたが、答えはすぐに出た。

「とりあえずは王の指示を待つしかないでしょうが、不可抗力とはいえ私は前線を放棄した身。しばらくは謹慎を言い渡されるでしょう。その間に、貴方たちにはやってもらいたいことがあります」

「何なりと」

「ありがとう。まずは、デイルルへと飛びなさい」

「デイルルですか？」

「ええ。マリアの様子を確認してきてほしいの。無事ならいいのだけれど、そうでなかったら何としても止めて頂戴。その間に連絡をくれれば、軍法に背くことは承知で私も向かいます」

「！・ そんな、ミネルバ様！」

その発言に、カチュアが驚いて絶句した。パオラと、ようやく泣き止んだエストも驚いて固まっている。

「よいのです。戦場で散るかもしれないこの生命。ならばせめてマリアだけでも…。いいですね、これは命令です」

「…承知しました」

パオラが苦渋の表情で返答した。臣下としては止めなければならないが、同じように妹を持つ姉の身としては痛いほどミネルバの気持ちがわかるのだ。

「ありがとう。それでマリアの無事が確認できた場合、その後のことなのですが…」

上空での密談はそれから少しの間続いたのだった。

その後、レフカンデイでの戦いはミネルバが退却したこともあつて解放軍の勝利で幕を閉じた。そして、本来迎るべき歴史では有り得ないここでのガレスと彼女たちの出逢いが後にどういった影響を及ぼすのか、今はまだ誰も知る由はなかったのだった。

## NO. 06 奮迅、鮮血に染まる暗黒

中央公路を南下して難所であるレフカンデイの峡谷を抜けた解放軍はそのまま軍を進軍させてアカネイアへと向かい、その途中、とある港町へと立ち寄る。

ワーレンという名のその港町は帝国に多大な税金を払い、それと引き換えに自治を許されているという、このご時世では珍しい場所だった。自治都市という立場上、解放軍にも門戸を開いているこの地で、解放軍はこれまでの旅の疲れを癒すために休暇を取ることにしたのだった。

「レナ、少しいいかしら？」

「シーダ様」

声をかけられて振り返ったレナの正面には、シーダの姿があった。そしてその横には、はにかむように微笑んでいるノルンの姿もあった。

「ノルンさんも」

「こんには」

ノルンが軽く頭を下げた。

「どうしたのですか？」

レナが小首を傾げてシーダに尋ねる。

「少しお話があつて。今、いい？」

「はい。取り立てて急ぐような用もありませんし」

「良かった」

ホツとした表情でシーダが一息つく。そして、

「ねえレナ、この後、私たちに付き合わない？」

と、用件を切り出した。

「ええつと……」

シーダの意図を図りかねて、レナが少し困ったような表情になった。

「仰るこのの意味が良くわからないんですけど……」

「あ、そうね。ごめんなさい」

ちよつと端折り過ぎたことに気付いてシーダが謝る。

「実はこの後、ワーレンにお買い物に行く予定なのだけど、レナも一緒にどうかなくて」

「あ、そういうことですか」

ようやくシーダの言わんとしていることがわかってレナが頷いた。

「でも、私でいいのですか？ 折角ですからシーダ様はマルス様とご一緒なさった方が……」

「うん。それも考えたんだけどね。でもマルス様、お忙しいみたいだし……」

寂しそうに浮かべたその表情に恋慕の情が浮かんでいるのをノルンとレナは見逃さなかった。

「それに当然のことかもしれないけど、この軍も現時点では女性が少ないじゃない？

だから、お買物しながら女の子同士のコミュニケーションを取りたいかなって」

「成る程。だからノルンさんもいらっしやるのですね」

「まあ、そういうことです」

照れ笑いを浮かべながらノルンが軽く自分の頬をポリポリと搔いた。

「アテナも誘ってみただけだね。取り付く島もなく断られちゃって」

「アテナさんは仕方ないかと。失礼を承知で言えば、そういうのは興味なさそうですし……」

レナの返答に肯定するわけにも否定するわけにもいかず、シーダとノルンは苦笑して返すしかなかった。

「と言うわけで、数少ない女の子のレナを誘ってるんだけど、どうかしら？」

シーダが本題に話を戻してレナに尋ねる。



「ええ、お供します」

レナは微笑むと喜んでシーダの申し出に同意したのだった。

「ホント!?!」

レナの返答を聞いたシーダがパアツと顔を輝かせる。その様子に、ノルンとレナがクスクスと笑った。

「あ、ご、ごめんなさい…」

二人が笑っていることにはしやぎ過ぎたのを思い至ったのか、シーダがまた軽く頭を下げた。

「いやだわ、私ったら。恥ずかしい」

「そんなことありませんよ、シーダ様」

レナが穏やかに微笑みながらシーダを諭す。

「そうですよ。感情表現が豊かなのは人として素晴らしいことです」

ノルンもレナに同意してうんうんと頷いた。

「もう…二人してそんなこと言って…」

恥ずかしいのかムツとしたのか、シーダは拗ねたような表情を見せて恨めしそうにノルンとレナを見た。

「ふふ…すみません」

レナが謝る。ただ、その表情は今も尚穏やかに微笑んだままだ。

「もう…」

「まあまあ、シーダ様」

まだ納得いかないような表情のシーダをノルンが宥める。

「それより、レナさんも付き合ってくれることが決まったのですから、早く参りましよう」

「ん、そうね」

ノルンにそう諭され、シーダもようやく普段通りになった。そして女三人で歩き出そうとしたところ、

「きゃっ!」

前方不注意のために何かにつつかってしまったシーダが短く悲鳴を上げて尻餅を着いた。

「痛たたた…」

尻餅を着いたまま、シーダが額を擦る。

「シーダ様!」

「大丈夫ですか!?!」

ノルンとレナが慌ててシーダに駆け寄って膝を曲げた。

「え、ええ…」

ぶつけた額がまだ少し痛むのか、顔を顰めながらまだ擦っている。と、

「大丈夫か？」

シーダの遙か頭上から声が聞こえた。

「？」

見上げる。そこにいたのは、見たことのない大柄な男の姿だった。ドーガよりも一回り大きなその身体は、堂々たる体躯だった。だが、その顔に見覚えはない。

(???)

シーダは内心で更に首を捻った。

(こんな人、いたかしら…?)

チラツと、左右のノルンとレナに目を走らせる。二人も見覚えがないのだろうか、当惑の表情を浮かべながら目の前の大男を見ていた。と、

「おい」

不意にその大男から声がかけられる。

「な、何？」

思わずビツクリして悲鳴を上げそうになってしまったが何とか抑えてシーダが返事をした。

「何時までも座り込んでいるが、腰でも抜けたか？」

「え……あ、ああ。大丈夫よ」

慌ててシーダが立ち上がった。ノルンとレナもシーダに合わせるかのように折つていた膝を伸ばす。

「その、ごめんなさい」

そのままシーダが軽く頭を下げた。別にシーダが謝るようなことはないかもしれないが、場の流れと言うか空気で何となく頭を下げたのだ。と、

「怪我は？」

三人の目の前にいる大男がシーダに尋ねる。

「え、ええ、大丈夫。何処もおかしなところはないわ」

「それは結構」

表面上は変わった様子も見せないが、大男は一応そう言つてシーダを氣遣つた。と、

「あの……」

二人の会話におずおずとレナが口を挟んできた。

「何だ？」

大男がレナに視線を向ける。

「不躰なことをお尋ねしますが、貴方、どちら様ですか？」

「は？」

大男はレナの質問に一瞬固まった。だがすぐに、

「ハツハツハツ……」

と実に楽しそうに大笑いし始めたのだった。

「そうか、俺がわからんか。クク……これは傑作だ」

その後も暫く大男の笑いは納まらなかつた。そのため、

「ちよつと、何が可笑しいんですか？」

気分を害したのだろう、ノルンが彼女には珍しくムツとした表情で大男に詰め寄つたのだった。だが、

「クク……笑いたくもなるさ」

大男は気にする様子もなく笑っている。だが、それでは流石に状況が進展しないのはわかつていいるからか、ようやく笑いを収めて三人に向き直つた。

「シーダにレナにノルンか。珍しい組み合わせだが、女三人で買物にでも行くのか？」

「私の名前を……？」

目の前の、見覚えのない大男が自分の名前を言ったことにシーダが困惑顔で呟いた。

「無論、知っている」

「だったら、敬称ぐらい付けたらどうです？」

ノルンがムツとした様子のまま再び大男に詰め寄った。だが大男は先ほどと同じくまるで気にした様子もない。

(ツ！ このお…)

無視しているというわけでもないのだろうが、どうでもいいという感じで扱われていることにノルンは内心でムカムカしていた。そんな中、

「失礼ですけど…」

再びレナが口を挟む。

「何だ？」

「先ほどの質問に答えていただけますか？ 貴方、何者です？」

「クク…まだわからんか」

相変わらず楽しそうに笑っている大男に流石のレナも不快になったのか面白くないといった表情を浮かべた。だが、ようやく話が進展を始める。

「まあ、貴様らに素顔を見せるのは初めてだからな。わからずとも仕方ないか」

「え、それって…」

シードが何かに思い当たったようだったが、大男は気にせず先を続ける。

「何なら兜だけでも持つてくるか？ あの漆黒のフルヘルムを」

「！」

「ま、まさか……」

その一言でレナとノルンもわかったのだろう、驚きに目を見開きながら固まってしまった。

(そう言えば……)

三人が目の前の大男の目を見る。その目は、燃えるような真紅の瞳だった。そして、そこから導き出される答えはただ一つ。

「ガレス……なの?」

恐る恐る尋ねたシーダに、

「そうだ」

目の前の大男……ガレスは頷いてその言葉を肯定した。そしてその瞬間、レナとノルンが引き攣って固まってしまった。

「……驚いたわ」

一人、シーダだけは何とか踏みとどまる。だがシーダにしても、レナやノルンとそう状況は変わらなかつた。それでも踏みとどまれたのは小国と言えども王女として色々な場面での場数を踏んでいることと、どれだけ恐ろしくても目の前の大男は味方であるという二点のことがあつたからだつた。

とは言え、そのシーダにしてもギリギリの状態で踏みとどまっているのでちよつとそ

のバランスが崩れたらレナやノルンと同じようになってしまいかねないのだが。

「何がだ」

一方ガレスはいつもと変わることもなく淡々と返す。ただ、その顔がいつもの兜に覆われていないだけに、その表情の変化は簡単に見て取れた。そして今、ガレスは三人を見てニヤニヤと楽しそうに笑っている。それは、彼女たちが自分の素顔を見て驚いていることに対してか、それとも目の前にいるのが自分だとわかって恐怖に慄いている様が愉快だからかは本人しかわからないが。

「貴方、素顔はそんな感じなのね」

シーダがガレスの素顔を見て興味深そうにそう呟いた。暗黒道の力がかつて母であるエンドラはその若さと美貌を止めていたが、ガレスも同じように年齢で言えば六十を超えていたのに若さを止めていた。

そのため、今のガレスは実年齢は六十を優に超えるのだが、見た目は二十歳そこそこの若々しい姿をしていた。無論、そんな事情など知らないシーダたちは、目の前の人物が実はジェイガンやモロドフと同じぐらいの年齢なのだということなどわかるわけではないのだが。

「まあ……な」

そのため、ガレスははぐらかすようにそう答えた。と、シーダの左右のレナとノルン



の様子少し変わったことに気付く。驚きや恐怖と言った感情は確かにあるのだろうが、それと同時に僅かながら見とれているようにも感じられたのだ。その証拠に、二人ともほんの少しだけ顔が赤くなっていた。

(少しからかってやるか)

それがわかったガレスが、珍しく茶目つ気を出す。

「それはそうと脇の二人、さつきから黙って俺の顔を見ているがどうかしたか」

「! い、いえ!」

「べ、別に何でも…」

指摘されて気まづくなつたレナとノルンが慌ててガレスから視線を外す。が、ガレスは追撃の手を緩めなかった。

「俺に見とれていたのか?」

「! な、何を…」

「ば、バカなこと言わないでください!」

「ククク…わかりやすい奴らだ」

そつぽを向いた二人に、ガレスはまた楽しそうに笑うのだった。

「あれ? でもそう言えば貴方…」

何かを思い出したシーダが眩く。

「何だ？」

「確か、謹慎中だったはずじゃなかったかしら？」

「あ、そう言えばそうですね」

レナも頷いた。

「そうですね。マルス様に報告しますよ。さつきと帰ってください」

さつきからかわれたことがまだ治まらないのか、ノルンが少し棘のある様子でガレスを促した。だが、ガレスは気にする様子もない。

「それなら問題ない」

「え？」

「少し前に使いが来てな。謹慎は解かれた」

「そうなんですか？」

「ああ」

尋ねてきたレナにガレスが頷いて答えた。

「…本当ですか？」

ジト目のノルンはまだ疑わしそうだ。

「疑うならマルスに聞けばいい。聞くところによるとここはそこそこ大きな歓楽街らしいからな。マルスも気を使ってくれたのだろう。ならば、ありがたく楽しませてもらう

ただだ」

「そう…」

シーダが少し表情を曇らせた。温情をかけるのはマルスらしいと思わないでもないが、相手がガレスだけに面倒ごとを起こさないとも限らない。そのため、釘を刺す。

「犯罪にならなければ何をしてもいいけど、私たちの評判を落とすような真似はやめてね」

「クク、言ってくれる」

いつものように咽喉の奥で笑うガレスの姿に、いつもの漆黒の鎧こそ身に着けていないが、シーダたちは目の前の大男が本当にガレスなのだと言うやく納得がいったのだった。

「ね、お願い」

その、いつも通りの笑いに急に不安になったシーダが念を押す。

「わかったわかった。俺も別に好き好んで荒事を起こすつもりはない」

「本当ね？」

「ああ。但し…」

ガレスが言葉に含みを持たせる。

「な、何？」

シーダが一抹の不安を感じながら答えた。

「俺が手を出す気はなくとも、俺に絡んでくるバカがいれば話は別だがな」

「あ、あはは…」

絶対にそんなことになりませんようにと内心で祈りつつ、シーダが乾いた笑いを浮かべた。両隣ではレナとノルンもその光景を想像してしまったのだろう、唇の端をヒクつかせていた。

「ではな」

そこでガレスは身を翻してワーレンへと向かった。ガレスの背中を見送り、少しの間呆然としていたシーダたち三人だったが、自分たちも楽しむため、そして何より時間を無駄にしないためにワーレンへと向かったのだった。

他にも、各人が思い思いの時間を過ごす中、急変はその言葉通りいつも突然やってくるのだった。敵の大部隊がこのワーレンを包囲するように進軍しているという報せの早馬が入ってきたのは、それからおよそ一刻後だった。

「マルス王子」

休息をとるのも中断し、慌ただしく出撃の用意を整えているところで見知らぬ傭兵が

マルスに近づいてきた。

「君は…確かこのワーレンの自治を…」

記憶を辿り、目の前の傭兵の情報を引き出していく。

「はい、シーザと申します」

傭兵…シーザが軽く頭を下げた。そして言葉を続ける。

「既に聞き及んでいるかと思いますが、ドルーアの同盟国であるグルニアの騎士団が西の砦に集結しており、この町は完全に包囲されています」

「うん」

「このままでは危険です。幸いにして東の城は手薄ですからそこを狙われるのが得策でしょう。我々もお手伝いしますので、一刻も早く東の城へお逃げください」

「それは…こちらとしてはありがたい申し出だけど、いいのかい？ 僕たちにそんなに肩入れして」

マルスが驚きながらシーザに尋ねる。彼らは敵ではないが、かと言って味方というわけでもない。なのにそこまでしてくれる理由がわからないのだ。それに、下手な真似をすればこの港町の立場だって悪化するのだ。今言った通り肩入れしてくれるのは嬉しいが、そこまでする理由がマルスにはわからなかった。

「お気になさらず。奴らのことです、王子が…解放軍が今ここにいるという情報を掴ん

だ以上、ここになだれ込んできて王子の姿が見つからなければ、弁明の暇もなく必ずここは蹂躪されましょう。ならば王子に：解放軍に与するのが道理というもの」

「だが、君たちがいなくなってしまうばこのワーレンは…」

「解放軍が東の城を落としたと知れば、必ずや奴らは王子を追って東の城へと向かうでしょう。ならば、わざわざここに来る必要もなくなります。ですので、出来れば奴らに動きを把握されつつ東の城を落としてほしいのです。難しい注文だとは思いますが…」

「いや、我々としても無関係な民衆が戦火に巻き込まれることは避けたい。シーザ、君の進言に従おう。ジエイガン」

マルスが傍らのジエイガンに振り返った。

「はっ」

「各隊に伝令を。今言ったように今回は速度が何よりも重要になる。故に、今回は騎馬と飛兵で軍を編成する。残りの歩兵や魔導師たちはここで待機をするように伝えてくれ。東の城を落とした後、すぐに離脱する」

「はっ！」

頭を下げると、ジエイガンはそそくさとその場を後にした。そして、マルスはシーザへと振り返る。

「シーザ、君たちには船の確保をお願いしたい。東の城を落としたらすぐに脱出する。」

そのための船だ。頼めるかい？」

「わかりました。すぐに手配しましょう」

「申し訳ないけど、頼む」

「ハッ！」

マルスから依頼を受けたシーザも、先ほどのジエイガンと同じようにそそくさとその場を後にしたのだった。

「スピード勝負か……」

近くに誰もいなくなったことで、マルスが己を落ち着かせるかのように軽く息を吐いた。

「しんどい戦いになりそうだな」

予感と言うより予言を呟きながら、マルスはそうならなければいいがと一縷の望みを抱きながら軍の用意が整うのを待つのがだった。

「クソが……」

ワーレンの港町内部。東の城を攻略するために出撃した騎兵、飛兵部隊以外の面々は、この港町で脱出の準備を進めていた。その中には当然、ガレスの姿もあった。重騎士な

のだから当然なのだが、せっかくの余暇を潰されることになり、ガレスも結構頭に来ていた。敵にこっちの事情を斟酌してもらうことなどどだい無理な話なので仕方ないのだが。

だが、だからと言つて納得できるかと言うのはまた別の話である。

(久しぶりに女を抱こうと思つていた矢先にこれか。余程叩き潰されたいようだな)

個人的な事情とは言え、久しぶりの楽しみを邪魔されたガレスはイライラしていた。それがいつも以上に漆黒の鎧から外に滲み出ているのか、他の面々もいつも以上にガレスを敬遠して行軍の準備を進めていた。そんな中、

「た、大変だ!」

街の入り口で見張りに立つていたダロスが慌てて戻ってきた。

「どうした、ダロス」

血相を変えて戻ってきたダロスの様子に何人か集まり、代表して…と言うわけでもないだろうがオグマが尋ねた。余程驚いたのか全力で走ってきたのかはわからないが、ダロスは少しの間喋ることもかなわなかった。だが、何とか呼吸を整えると、

「こ、こっちにグルニア軍が…」

それだけ何とか口に出した。もつとも、その一言だけで誰もが察することができた。そして、そこに集まった面々は全員顔色を変える。



「何だと!？」

「おい、本当か!？」

「見間違いじゃねえのか!？」

オグマの三人の部下、サジ、マジ、ブーツが口々にそう言うのとダロスに詰め寄った。だが、

「ま、間違いない」

ようやく呼吸が落ち着いてきたのか、ダロスが口元を拭って答えた。

「遠くから馬蹄の音と、そして土煙が上がっていたのを見た。それが、こっちに向かってきているのも」

「そうか…」

オグマが頷いた。

「ご苦労だったな。奥に引っ込んで休んでくれ。リフ神父」

「はい」

「付き添ってやってくれるか。消耗があまりにも激しいようだったら、杖を使ってやってくれ」

「わかりました。では、参りましょうかダロス殿」

「す、すまねえな。神父」

「いえいえ」

一礼すると、リフはダロスと共にワーレンの奥へと向かっていった。

「さて…」

オグマが口を開く。その頃には、今回出撃していなかった解放軍の主だった面々がその場に集合していた。

「脱出にあとどれぐらいかかる?」

「ようやく全体の半分といったところだ。支度を始めてから今までと同じ時間がかかる  
と見ていい」

ナバールが答える。

「そうか…」

その返答に、さしものオグマの顔も曇った。どれだけ戦場で強くても、こういう問題は  
どうしようもない。とは言え、いつまでもそんなことにかまけている暇もないのもま  
た事実だった。

「とにかく、全員に支度を今以上に急がせるしかないな」

「しかしオグマ殿、それだけではどうしようもありませんぞ」

「わかっています、ウエンデル司祭」

オグマが苦渋の表情で頷いた。

「彼我の距離とこちらの進捗状況を考えれば、どう鼻肩目に見ても我らが脱出するより敵と接触する方が早い。故に時間を稼がねば……」

「ククク……」

難しい顔で角を突き合わせているオグマたちだったが、不意にあの耳につく嘲る笑いが聞こえてきた。その場にいる面々が一斉に振り返ると、ガレスが楽しそうに肩を震わせて笑いながら己の得物を握り締めていた。

「そうか……」

そしてそれだけ呟くと、そのまま町の入り口へ向かおうと歩き出す。

「待て」

その足を止めたのはオグマだった。

「何だ？」

何を言われるかは大体わかっているが、一応ガレスは立ち止まって用件を尋ねた。

「何処へ行くつもりだ」

「知れたこと」

予想通りの問いかけに、ガレスも隠すことなく答える。

「ここに向かってくる連中を潰しに行く」

「そんな！」

口を挟んできたのはゴードンだった。

「危険ですよ、止めてくださいい！」

そして懇願する。前回のレフカンディで助けられたことでゴードンはガレスに恩を感じることもとなり、随分態度が軟化していた。アテナほどではないにせよ、この軍でのガレスの二人目の理解者となろうとしていた。が、

「だったら、街中で乱戦が貴様らのお望みか？」

「！ それ……」

表情を曇らせてゴードンが俯く。ゴードンだけでなく、他の面々も同じように俯いていた。それは絶対にできない手段だからだ。一般民衆を戦火に晒すことは、今後軍を進めるにあたって絶対に避けなければいけないことだった。故に、その手は取れない。

「そういうことだ」

そして、ガレスもそれがわかっていいるからこそ町の入口へと向かおうとしたのだ。た。

「わかったら貴様らはさっさと逃げ出す準備を整えておけ」

「な、ならせめて、僕が支援します！」

ゴードンが名乗り出る。弓使いであるゴードンの支援は成る程理に適っているものだった。だがガレスは、

「いらん」

一言で切つて捨てた。

「え」

「邪魔だ」

そして、そう付け加えたのである。

「おい待て、それはいくら何でも」

無謀だと続けようとしたナバールにガレスが振り返つた。そして、フルヘルムの下  
の真紅の瞳でナバールを射抜く。

(ツー)

その、不気味な視線に幾多の戦場や死地を渡り歩いたナバールも固まつてしまつて声  
が出せなかつた。

「加減はせんからな。巻き添え喰らつて死にたいならついてくればいい。それが嫌なら  
とつとと逃げ支度を済ませろ」

「しかし…」

マリクが何とか食い下がる。が、

「…二度は言わんぞ」

文字通り殺意の籠つた視線を受け、マリクはゴクリと唾を飲んだ。いつの間にか、咽

喉はカラカラに渴いていた。

「ククク、楽しみだ……」

実に愉快に笑うガレスの背中を見送りながら、個人差はあれど残された面々は今一度ガレスに恐怖心を抱いたのだった。ワーレンがそのような状況になっているのと前後して、マルス率いる出撃部隊は東の城を落とすことに成功していた。

「よし、こつちは何とかなったな。シーダ！」

城を落とす、味方の被害が軽微だったことにホッとしたマルスがシーダを呼んだ。

「はい、マルス様！」

シーダがすぐにマルスの側へ飛んでくる。

「すまないけどワーレンへ飛んでくれ。そして、すぐにこちらへ移動するように残った皆に伝えてほしい」

「わかりました」

「頼む。ワーレンの警備兵が船を手配しているはずだ。帰りはそれに乗ってこつちに合流してくれればいいから」

「はい。では！」

「うん。宜しく頼むよ」

マルスの言葉にコクンと一つ頷くと、シーダはペガサスの腹を蹴って空高く舞い上がったのだった。

「急がないと…」

逸る気持ちを抑えながらシーダがワーレンに向けて飛ぶ。しかし、

「！ あれは！」

シーダはあるものを見て愕然とした。それは、ワーレンへと向かっているグルニア軍の大部隊だった。見張りをしていたダロスが発見したのと同じ部隊である。

「そんな！ 陽動が失敗したの!？」

思わず歯噛みするシーダ。今叫んだように陽動が失敗したのか、それとも何か目的があるのかは知らないが、事実として敵の部隊がワーレンに向かっていることだけは間違いないかった。

「ダメ！ このまま飛んでも間に合わない」

そして彼我の距離から、自分がワーレンに着くよりも大分前に敵部隊がワーレンについてしまうのがわかってしまった。

「このまま飛んでもどうしようもないわ。だったら…」

シーダはある決心を固めると、ペガサスの馬首を返した。そしてそのまま、東の城へと急いで戻ったのだった。

「マルス様！」

東の城へととんぼ返りしたシーダがペガサスを降りてマルスの許に駆け付けた。

「シーダ!？」

その声、そしてその姿にマルスが目を丸くする。急いで走ってきたシーダは乱れた呼吸を整えるために胸に手を当てて荒い呼吸を繰り返した。

「どうしたんだ、そんなに慌てて。それに皆は?」

「た、大変なんです…」

息も絶え絶えになりながらシーダが口を開く。まだ少し苦しいが、それでも当初よりは随分と呼吸も落ち着いてきたために続きを話し始めた。

「グルニア軍の大部隊が、ワーレンへ…」

「何だっ!?」

マルスが驚きの声を上げる。だがそれは、この場にいるジェイガンやカインにアベル、ハーデインたちも同様だった。

「私がワーレンに向かおうとした時にはもう大分ワーレンに迫っていたの。だから、このままワーレンに飛ぶよりはこっちに戻ってきて、皆で取って返した方が良いかと思つて戻ってきたんです」



「賢明な判断ですな、シーダ王女」

ハーデインがシーダに称賛の言葉を掛ける。そういった状況下でシーダが一人戻っても趨勢は変わらない。ならばこちらに戻ってきて全軍で取返すべきである。そうハーデインは考えたからこそ、シーダの判断を褒めたのだった。

「良く知らせてくれた」

マルスも同じことを思ったのだろうか、ハーデインと同じようにシーダの労をねぎらう。

「後は僕たちが引き受ける。シーダは少し休んでいてくれ」

「ううん、ご一緒します。今空を飛べるのは私だけ、伝令にしる敵の牽制にしろ、私にか担えない役目があるはずですよ」

「…そうか、わかったよ」

少し逡巡したマルスだったが、シーダの申し入れを受け入れた。何しろその目が雄弁に語っていたのだ。絶対に一緒に行くと。それがわかってしまったため、マルスは折れざるを得なかった。

そしてそのまま、マルスはジェイガンへと振り返る。

「ジェイガン、全軍に通達を。これより我々はワーレンへと急行する」

「はっ！」

「オレルアンの同志たちについてはハーディン公にお任せしたい」

「承知した」

マルスの命令に慌ただしくジェイガンとハーディンが身を翻す。そうしてごく短時間で準備を終えた解放軍は、疾風の如くワーレンへとんぼ返りしたのだった。そこで彼らが見たものは…。

「ハ、これは…」

目の前に広がる光景にハーディンが思わず絶句する。だが、それが出来るだけハーディンは精神が強い。他の面々は大多数が顔色が真っ青になっているか、吐き気をこらえるように口を抑えているのがやっつとだからだ。

「っ」

そんな中、マルスも思わず顔を顰めてマントで口元を隠した。だが、それも仕方のないことだろう。何故ならば眼前には無残に斬り刻まれた無数の死体が転がっており、辺り一帯血の海だからだ。そして、その中心部には

「……」

その惨劇を作ったであろう人物が黙って佇みながらマルスたちに顔を向けていた。

「ガレス……」

必死に吐き気を抑えながらマルスがその人物……ガレスの名を呟く。

「遅かったな」

一方、ガレスはいつもと変わらぬ様子でマルスたちを迎えた。

「いや、大部隊で行動していることを考えれば、早かったと言うべきか？」

「そんなことはどうでもいい」

ガレスの軽口をマルスが遮断した。そう、本当にそんなことはどうでもいいことなのである。

「それより……これは君が？」

「ああ」

マルスの問いかけに、当然とばかりにガレスが頷いた。

「君一人で？ 他の皆は？」

「町で脱出の準備をしている。……もつとも、全部叩き潰した今となつては急ぐ必要もないがな」

いつものようにクククと笑う。その笑いがいつも以上に恐ろしく、全員が背筋に悪寒を感じ、そしてガレスに対して恐怖を感じていた。

「……一つ聞きたいのだけど、君が敵を迎え撃つたのは自分の意思かい？ それとも皆に

頼まれてのことなのか？」

マルスが続けて質問する。もし他の皆がこうするようにしたのなら、言い方は悪いがそれは厄介払いに近いものがあるとマルスは感じたからだ。いやそれどころか、あわよくば消えてもらうことを期待して：嫌なことだが、そう考えてしまう。だが、

「俺が出向いた」

ガレスの返答はマルスが危惧していたものではなかった。それを聞き、マルスが内心でホツとする。

この先、もしかしたら今ホツとしたことを後悔するときが来るかもしれない。だが今は、残してきた皆がそういうことを考えなかったことが喜ばしいことだった。

「そうか。…だがなぜ君一人で？ 直接戦闘要員はともかく、支援要員はいても良かったのでは？」

「いらん。巻き添えにしかねんからな。そう忠告したら、大人しく引っ込んだ」

そしてまたクククと笑い、その姿を見た者たちがまた恐怖を抱く。が、

「グツ！」

短く声を上げると、ガレスがその場に片膝を着いた。

「ガレス！」

その姿に駆け寄ろうとしたのはニーナである。彼女の身を危険に晒させないため、

ニーナは手薄な東の城へ出撃した部隊に同行させていたのであった。そのため当然のように今も同行しており、ガレスが膝を着いたのを見て思わず飛び出したのだった。ハーディンやオレルアン騎士団の面々も、彼女がそんな真似をするとは思わずにすぐに反応できなかつた。だがガレスは、

「止まれ！」

珍しく声を荒げると、得物であるサタンブローバーをニーナに向かって横薙ぎにする。二人の間の距離はまだだいぶ離れていたためにその刃がニーナを捉えることはなかつたが、風圧がニーナを襲った。

「ヒッ！」

怒鳴られたことと、そして風圧に驚いてニーナが思わず足を止めた。そして呆然とした表情でガレスを見ている。

「……つちに來て何をするつもりだ」

片膝を着いたままガレスがニーナに尋ねた。

「あ、貴方を助けようと……」

言葉が詰まらせながらもニーナが答える。だがガレスは、

「止めておけ」

簡潔にそう答えてニーナの善意を拒絶した。

「え？」

「鎧が漆黒だからわからんだろうが、全身返り血でベツトリでな。今の俺に触れたらそれに塗れるぞ。その柔肌や折角の召し物を血で汚したくはあるまい？」

そのまま、ガレスはハーディンに視線を移した。

「連れていけ。そして、二度とこっちに出てこさせな」

「貴様に言われるまでもない。ロシエ、ビラク」

「はっ」

「はい」

ハーディンの意を汲んだロシエとビラクがニーナを左右から誘導する。

「さあ、ニーナ様」

「ここはまだ安全とは言い切れません。何卒ご自重を」

「で、ですが……」

ニーナはまだ後ろ髪を引かれるのだろう、逡巡している。それに業を煮やし、そしてほんの少しだけ嫉妬したハーディンが強権を発動した。

「構わん。ロシエ、ビラク、強引にでもお連れせよ！」

「はっ！」

「ニーナ様、失礼いたします！」

「ま、待つて二人とも！　せめてもう少し…」

「なりません！」

「無礼はお許しください！」

ハーデインの命令に従い、ロシエとビラクはニーナを誘導する。ハーデインに命令されたように、そしてガレスに指示された通りに、ガレスから引き離すように。

(全く、手間のかかるお姫様だ)

未だにこつちを見ながら悲しそうな顔をしているニーナの姿に、いつものようにククと笑いながらガレスはそのままマルスへと視線を向けた。

「マルス」

「な、何だい？」

ここでききなり声をかけられるとは思っていなかったのか、マルスは一瞬ビクツと身体を震わせてガレスを見る。

「疲れた。俺は少し寝る。死体の後始末や町への事情説明は貴様たちでやっておけ」

「わ、わかった」

「よし」

その場でガレスは崩れ落ちるとそれ以降動かなくなつた。血の海の真ん中で眠るガレス自身とその底知れぬ強さに、解放軍の面々は改めて恐れを抱くのだつた。

## NO. 07 船上にて

港町ワーレンでの戦いを終え、マルスたち解放軍はワーレンを後にした。当初の予定では敵の追撃を逃れるために迅速に離脱するはずだったが、その必要もなくなったために事前の準備に十分な時間をかけてワーレンを後にしたのだった。

船に揺られ、次に目指すはペラティ。大小幾つもの島々からなる島嶼国家である。

船に揺られて目的地を目指す解放軍の面々の表情はあまり明るくない。それは、慣れない船旅と言うのも理由の一つ。そしてもう一つは、ワーレンの戦いでまたも恐ろしい姿を見せた暗黒の重騎士の姿が誰の脳裏にも大なり小なりあるからだろう。

では、その暗黒騎士…ガレスはと言うと。

「ん…」

ゆっくりと目を開けると、ガレスは視線の先に板張りの天井を見ることになった。

「……は……？」

上半身だけ起こすと、まだ覚醒しきつてない頭で周囲を見渡す。目に飛び込んできた



のは板張りの個室だった。

「そうか、そうだったな……」

そこで今の状況がどのようなものだったかを思い出したガレスが、そのままその場……ベッドの上から起き上がった。

「ふう……」

そして軽く息を吐くと、身体を捻ってゴキゴキと骨を鳴らす。大分身体がほぐれたところでガレスは空腹を感じた。

「飯にするか……」

そのままガレスは己に割り当てられた個室を出て行く。そして、どこかへと足を向けたのだった。

船内の食堂。深夜や早朝でもない以上はいつでもガヤガヤと賑やかなこの場所は当然今も賑わっていた。指揮官級の専用食堂なのか、一般兵の姿は見えない。それでもそれなりの人員がいるのは、『腹が減っては戦ができぬ』を体現していると言える。一人で食事をしている者もいるが、基本、何人かでグループを組んで楽しくお喋りをしながら食事を囲んでいた。

「ぐっ！」

「おいサジ、大丈夫か？」

「慌てすぎなんだよ。ほら、水」

「ふう、食った食った」

「ドーガ、お前……」

「ちよつと食い過ぎじゃないか？」

「気を付けないと、太りますよ」

「ジュリアン、少しジツとしてて。口元が汚れてるわ」

「あ、ありがとう、レナさん」

「……いいなあ」

「ぼやくなよ、カシム」

こんな感じで和気藹々とした時間が過ぎていた。そして、その食堂にまた一人顔を出す。が、その人物の顔を見た者は、思わず固まってしまっていた。

(フン……)

自分の姿を見て周りの人間の態度が変わったことはあまり面白くないその人物……ガレスだったが、それ以上は取り立てて気にすることもなく食事を取りに向かった。その姿を見た解放軍の面々の多くは、声を潜めながらガレスについてヒソヒソと話を続ける。

(面倒な連中だな…)

鬱陶しいと思わないでもないガレスだったが、相手にするのも億劫なので放っておいた。そのまま一人分の食事を受け取ると、あいている長椅子に腰を下ろして食事を始める。その様子を、解放軍の面々の多くは自分たちも食事やお喋りをしながら遠巻きに観察していた。

(人が飯を食ってるのを見て、何が面白いのか…)

引き続き鬱陶しさを感じながらもそう思っているガレスだが、実害はないので放っておいた。四方から視線を感じながら空腹を満たしていると、不意に自分の真正面に気配を感じた。

(ん?)

不思議に思つて落としていた顔を上げる。と、

「(ん?)…宜しいかな?」

同じように自分の分の食事を持っている一人の人物の姿があつた。

(…いつは…)

確かに見たことのあるその人物のことを思い出す。

「(ん?)老人か」

そして目の前の人物がガレス自身の記憶と一致したため、その人物のことを呼んだ。

もつとも名前を知らないために、『ご老人か』などと言う呼び方でぼやかしていたのだが。

「好きにしろ」

そして、そう続ける。

「では、お言葉に甘えるでしょうかの」

そしてその老人はそのままガレスの正面に腰を下ろした。

(変な組み合わせ…)

その様子を遠巻きに見ている面々がそう思ったのも無理はない。だが彼ら彼女らの内心など知るわけもなく、二人が向き合って食事に手を付けた。

「自己紹介が遅れたの。儂の名はバヌトウ。火竜族のはしくれじゃ」

(ん?)

聞きなれぬキーワードに、ガレスが顔を上げた。

「火竜族? 何だそれは?」

「おや、やはり知らぬか」

その返答が予想出来ていたのか、バヌトウは食事をしながらガレスの質問に答えだした。

「我らは竜人族…人間はマムクートと呼ぶが、そういう種族での。己の本来の姿、力を竜

石という石に封じ込めた者じゃ。故に、人であるこの姿は仮のものと言った方が良いかの」

「ほお…」

自分の元居た地ではお目にかかれぬ種族を目の当たりにし、ガレスの興味、好奇心が刺激された。

「面白い連中だな」

「ほっほっほっ、お主には敵わんよ」

その言葉にガレスの動きがピタリと止まり、バヌトウを正面から見据える。

「どういう意味だ？」

「ふふふ…」

口元を隠しながらバヌトウが意味ありげに笑った。

「自分で良くわかってるじゃろう？」

そして声を潜め、バヌトウはガレスと二人だけしか聞こえぬほどの音量で続ける。

「お前さん、只の人間ではないだろう？」

「！」

凶星を当てられたことにガレスが一瞬驚いた表情をする。が、それも本当にほんの一瞬ですぐにいつもの表情に戻った。しかし、バヌトウはその表情の変化を見逃さなかつ

た。

「凶星とは言え顔に出すとは、修行が足りぬのう」

「貴様……」

ガレスの視線が鋭くなる。普通の人間が向けられたら震えあがるようなその視線も、バヌトウは平然と受け流して食事を続けていた。流石に年の功と言うべきか肝が据わっていると言うべきか、大したもののである。

「…それを知って、どうするつもりだ？」

ガレスが尋ねた。返答如何によつては手荒な真似も辞さないつもりだったからだ。だが意外なことに、

「何もせんよ」

バヌトウから返ってきたのはそんな返答だった。

「何だと？」

まさかそんな返事が返ってくるとは思わず、ガレスは拍子抜けしたような表情になった。それが面白かったのか、バヌトウがニヤリと笑う。

「わしら以外に人間とは異なる存在がいたのが興味深くてな。寧ろ親交を深めたいと思っているのじゃが、迷惑か？」

「……」

暫く呆気に取りられていたガレスだが、ようやくバヌトウが言ったことを理解したのか、頭を抱えるように額に手を置いた。

「何とも…」

そして、いつものものとは違う力ない笑いを漏らす。

「食えんご老人だ」

「ほっほっほっ、誉め言葉として受け取っておこうかの」

楽しそうにバヌトウが笑うと、食事を終えたのかトレーを持って立ち上がった。

「ではの。また暇ができたなら、茶飲み話にでも付き合ってくれ」

「…考えておく」

「期待しているぞ、お若いの」

そしてポンポンとガレスの肩を二回ほど叩くと、バヌトウはその場を後にした。二人の様子を周りで見ていた面々は、ガレスが自分のペースを乱されている様子に目を丸くしていたが、一番変な感じでいるのは誰であろう本人であるガレスだった。

(…ここは変わり者の集まりか)

他の面々が知ったらお前にだけは言われたくないと揃って口にしそうなことを考えながらガレスも食事を終えた。そして、先ほどとはまた異なった思惑を纏った数多くの視線を集めながら、ガレスは食堂を後にしたのだった。

こうして、ガレス自身は意図していなくとも、アテナ、ゴードン（？）に続く、三人の理解者が解放軍に現れたのだった。

「ふう…」

昼下がりの穏やかな陽の光の下、ガレスが軽く一息ついて船の甲板でのんびりと時を過ごしていた。

今回の戦場となるペラティは島嶼国家ということもあり、重装甲で小回りの利かないガレスには出撃の指示は出されなかつたのだ。ここまで船旅をしてきたということもあり、ガレスはいつもの鎧を脱いで甲板に姿を現していた。鎧を着こんだまま万一海に落ちたら大事ということと、漆黒の鎧のために照り付ける太陽の光を吸収して内部が蒸し風呂以上の地獄になるということ、後、海風から鎧を護るという理由でガレスは前回のワーレンでの休息時に続いてここでも身軽な恰好をしていた。

「…いい天気だ」

空を見上げ、思わず呟く。快晴の空に太陽が浮かび、ジリジリと地上を照らしている。この場面だけで見れば実にのどかに平和に時間が過ぎていた。

とは言え、少し離れた場所では今もマルスたちが戦っているのだが、ともすればそん



なことも忘れるほど穏やかな時間が流れていた。そののどかな雰囲気には誘われたのか、ガレスは思わず欠伸をする。

(この俺が欠伸か)

欠伸を終えた後、思わずそんなことを思ってしまう。向こうにいた頃は暗黒道の完全な支配下であり、疲れや眠気なども感じることもなくただひたすら戦闘と殺戮に明け暮れていた。それを考えれば欠伸などあり得ないことであつた。

転生によつて全く違う地に堕ちてきたとはいえ、未だに完全には暗黒道の支配下からは抜け切れていないため戦闘欲求や殺戮欲求などは旺盛だし、暗黒魔法も使えるがそれでも以前に比べれば大分人間らしさを取り戻してはいた。もつとも、今後も少しずつではあるが暗黒道の支配下から抜け出して人間らしさを取り戻していけるのか、それともここで打ち止めなのかはわからないが。

(まあ、今そんなことを心配しても始まらない。とりあえず今は…)

ガレスはそのままその場で甲板の上に寝転んだ。

(少し昼寝でもするか…)

穏やかな陽気に誘われて、ガレスは眠気に身を任せてそのまま眠りに就こうとした。が、

「おや」

目を閉じたところで、頭上から誰かの声が聞こえた。

(ん?)

どこかで聞き覚えのあるその声にガレスは思わず目を開けた。逆光で少し目のくらんだ視線の先にいたのは、自分と同じ異質の存在だった。

「……老人か」

眩くと、ガレスは上体を起こしてそのまま船縁へと背を預けた。

「すまんの、邪魔をしたか？」

少しだけ申し訳なさそうに、老人：バナトウが話しかけた。

「いや……」

ガレスが大きく息を吐く。

「まだ横になったばかりだからな。別に構わん」

「そうかね」

ガレスの了承が取れたところで、バナトウもガレスの隣に腰を下ろした。

「それで、何の用だ？」

早々にガレスがそう切り出す。

「ほっほっほっ、先だつての食堂のことを忘れたわけじゃなからう？ お主と親交を深めに来たんじゃないよ」

「成る程な…」

その時のことを思い出し、ガレスが軽く頷いた。

「マルス王子や他の者から事情は聴いたが、流石に儂も驚いたわい。お主、違う世界から来たというのは真か？」

「まあな。どうやらそのようだ」

隣から、少し覗き込むように尋ねてきたバヌトウに、ガレスが平然と頷いて答えた。

「何と…」

だがやはりバヌトウには刺激が強すぎたのか、驚いた表情を浮かべている。

「全く…信じられんもう」

「信じる信じないは貴様の勝手だが、事實は事実だ。仕方あるまい」

「うむ。確かにそうじゃがな…」

それでもやはり信じられないのか、難しい顔をしてバヌトウは小首を捻った。

「それに、俺に言わせれば貴様らのような種族がいることの方が驚きだがな」

ガレスが呟いた。

「ん？ お主の元居た世界には儂らのような竜人族はいなかったのか？」

「マーメイド、ホークマン、ウエアウルフのような面白い種族は色々いたがな、竜に変身できる種族は流石にいなかった」

「ほう……。だが儂らからすれば、それほど多くの人間以外の種族がいることに興味を覚えるがのう」

「……この世界にはいないのか？」

バヌトウの返答に少し興味を持ったガレスが尋ねた。

「わからん。世界の果てまでくまなく旅すればどこかにいるかもしれない。だが少なくとも、このアカネイア大陸には知的種族は二種類だけじゃ。即ち、人間と我ら竜人族」

「成る程な」

ガレスがしきりに頷いた。思えば、この世界に堕ちてきてからこの世界の基本情報的なものは頭に入れたが、それ以外の情報は皆無に等しい状態なのだ。これ幸いと、ガレスは頭に新しい情報を叩きこんでいた。

「全く……」

対称的にバヌトウは疲れた表情になってふう……と息を吐く。

「まだまだ世界は広いわ」

「そうだな」

全くもってその意見には同感だったので、ガレスも頷いて同意した。そして、

「ご老人」

続けざま、ガレスが口を開いた。

「何かの？」

「今度は俺が聞いてもいいか？」

「儂に答えられることならな」

「なら大丈夫だ。何故戦いに参加した」

「どういふ…意味かの…？」

意図が凶りかね、バヌトウがガレスに尋ねた。

「貴様は俺のような戦闘狂いでもなければ、どこぞの国や組織に所属しているわけでもない。竜に変身できるということは十分な戦闘能力があるのだろうが、進んで戦いに身を置くようには思えん。寧ろどちらかと言えばそう言うのを忌避して身を隠す者のようなタイプだと思った。だからこそ、戦場に身を置いているのが不思議でな」

「これはこれは…」

ガレスの推察に、バヌトウが驚きに満ちた表情を浮かべた。

「自分で戦闘狂いと言っているから単なる猪武者かと思えば、何の何の中々の洞察力ではないか」

「…褒めるのか貶すのかどちらかにしろ」

「おお、これはすまんの」

そうは言いながらも、バヌトウは悪びれもせずに楽しそうに笑った。

「確かにお主の見立て通りじゃよ。儂はある目的があつてここに身を寄せている」

「それは何だ？」

「人探しじゃよ」

バヌトウはあつさりと自信の目的をガレスに告げた。

「もうどのぐらいになるかのお…」

「成る程な」

バヌトウの返答にガレスが頷いた。

「貴様にとつて余程重要な人物のようだな」

「うむ。だが、儂だけに重要なわけではないぞ。人間にとつても重要な存在じゃ」

「ほお？」

そのバヌトウの語り草に、ガレスは少し興味を惹かれた。

「それは…ぜひ逢つてみたいものだな」

「そのうちの。神竜王様のお導きがあればの…」

そう答えた時のバヌトウの神妙な表情に、ガレスもそれ以上は何も言えなかつた。

「さて…」

一息つくくと、バヌトウが腰を上げる。

「そろそろお暇するかの」

「そうか」

「うむ。戦場で肩を並べるときはよろしく頼むぞ」

「ああ」

「それと、昼寝の邪魔をして悪かったの。ゆっくり休んでくれ」

では、と最後に言い残し、バストウはその場から去って行った。ガレスは再び横になるが、目が冴えてしまったのか一向に眠気は襲ってこなかった。

(やれやれ…)

内心で溜め息をつくとき、昼寝を諦めてガレスが立ち上がった。

「終わったようだな…」

丁度その時、遙か遠くから歓声が上がったのが聞こえた。首を巡らせると、その先にあつたのは今回の目的地であるペラティ城だった。

「さて、次は何処へと行くことになるやら」

俺が暴れられる場所ならいいがなと思いつながら、ガレスはそのまま自分に割り当てられた船室へと戻っていったのだった。

## NO. 08 二人の王女

ペラティを陥落させ、意気軒高な解放軍はそのままアカネイアへの進路を採る……誰もがそう思っただろう。しかし解放軍はその進路を真つ直ぐアカネイアに向けず、とある場所を目指していた。

その場所はデイル。帝国の堅牢な要塞がそびえたつ要衝の一つである。何故彼らはここへ足を運んだのか。それは、ペラティを陥落させた直後まで戻らなければならぬ。

『マルス様』

ペラティにて戦後処理を行っている最中、ジェイガンがマルスに近寄ってきた。

『どうしたんだい、ジェイガン?』

振り返る。自分と同じように戦後処理中のはずだったジェイガンが、仕事が終わったわけでもないのに自分のところへやってきたのが不思議だったのだ。あるいはもう終わったのだろうか……



(そんなはずはないと思うけどな)

内心で首を捻りながら、ジエイガンの報告を待つ。

『は。実は、単騎でここに乗り込んできた敵兵がおりまして』

『何だつて?』

マルスは目を丸くした。が、当然だろう。敵陣に単騎で乗り込むなど自殺行為以外のなにものでもない。マルスの頭を瞬間的によぎったあの黒騎士でもない限りは、そんな真似をすればどうなるかは火を見るより明らかである。

『…でも、わざわざ報告に来るということは、何かあったのかい?』

『はい。実はその者が、マルス様と面会を求めております』

『…理由は?』

『それが頑として口を割らず…。マルス様に直接申し上げるの一点張りです』

『ふうん』

マルスが顎に手を添えて考え出した。

『如何なさいますか?』

主君の意をジエイガンが尋ねた。

『その敵兵に應對したのは、ジエイガンかい?』

『初めから…と言うわけではありませんが』

『そうか。じゃあ、ジェイガンから見てその敵兵はどう見えた？』

マルスはもつとも信頼できる、己の腹心の眼力がその敵兵をどう評価したのか意見を求めた。

『そうですな…』

ジェイガンが少し考えこむ。そして、

『あくまでも私の勘ですが』

と、続けた。

『うん、構わない。遠慮なく言ってくれ』

『は。ではお言葉に甘えて。面会しても問題ないかと思われませう』

『そうか…』

この時点でマルスの腹は十中八九決まった。己がもつとも信頼できる腹心がそう言っているのだから間違いはないだろう。

『何故、そう思ったんだい？』

その意思を確固たるものにするため、マルスはジェイガンにそう判断した理由を尋ねた。

『は、その敵兵はシーダ王女と同じベガサスナイトでした』

『うん』

『ペガサスナイトを戦力として擁する敵国として真つ先に上がるのはマケドニア。マケドニアのペガサスナイト部隊：通称白騎士団を率いるのは王妹であるミネルバ王女であることはマルス様もご存じかと思えます』

『うん』

『ミネルバ王女と言えば一門の武人として大陸では有数の人物。その直属の配下である白騎士団の者ならば、決して主君に恥じるような真似はしないかと』

『マケドニアのミネルバ王女か…』

マルスが呟く。実際に会ったことはないがその名は良く知っていた。実直にして公明正大なマケドニアの王女。武人としても軍人としても一流の人物だということ。

だが今は戦時下。暗殺を仕掛けてきたという万一の危惧が頭をよぎらないこともない。

(でも…)

マルスはその可能性はほぼないと思っていた。敵地へ堂々とやってきて暗殺を仕掛けるということは、その本人は捨て駒ということになる。音に聞くあのミネルバ将軍が、自分の直属の部下をそんな風に切り捨てるとはどうしても思えなかったのだ。

『わかった』

そのため、マルスは判断を下した。

『会おう。ここに連れてきてくれ』

『はっ。では、すぐに』

『うん、頼むよ』

恭しく一礼をすると、ジエイガンはそのまま踵を返したのだった。

(さて、どんな用事なのかな…)

まだ見ぬその敵兵の目的を誰何しながら、マルスは会見の手配を始めたのだった。

『連れて参りました』

『ありがとう』

マルスが件の敵兵の両脇を固めてここに連行してきたジエイガンとカインに礼を言った。

『では、我らはこれにて』

『ああ。残務を頼むよ、二人とも』

『ハッ』

頭を下げるとジエイガンとカインはその場を後にした。

『さて…』

改めて二人が連れてきた敵兵を見る。その姿は、自分たちとさほど変わらない年頃の

女性だった。

『君の名前は？』

『はい』

そう尋ねると、彼女は軽く頭を下げた。

『初めてお目にかかります、マルス王子。私はマケドニア王女ミネルバ様の部下、マケドニア白騎士団のカチュアと申します』

そう言つて彼女…カチュアは自己紹介した。

『初めましてカチュア、僕がマルスだ。そして僕の正面にいるのがオレルアンのハーディン公。そして、奥の玉座に座っているのがアカネイアのニーナ様だ』

『！失礼しました！』

慌ててカチュアが膝を着いた。

『構いませんよ、カチュア…でしたね。そう畏まらないでください』

ニーナが緊張をほぐすためだろうか、いつも以上に穏やかにカチュアに話しかけた。

『ですが…』

『ニーナ様もああ仰られているのだ。あまり気負い過ぎることはない』

『…では、お言葉に甘えて』

ハーディンにもそう促されたが、だからと言つてすぐに割り切ることはできないの

か、カチュアは立ち上がったものの何処か居心地悪そうだった。

『早速だけど、カチュア』

それを察して：：かどうかわからないが、マルスがカチュアに話しかける。

『はい』

『用向きは何だい？』

『はい』

そこでカチュアは、整った表情を引き締めて口を開いた。

『実は、マルス様にお問い合わせがあつて密かに参りました』

『お願い？ 僕に？』

『はい』

『聞こうか』

マルスがその先を促す。と、カチュアがコクンと頷いてその先を続けた。

『実は、我が主であるミネルバ王女が率いる部隊はドルーアに対して反乱を計画しています』

『！ それは真か!?!』

カチュアの言った内容に、ハーデインが思わず口を挟んだ。

『はい』

『ハーディン公、まずは彼女の話を聞こう』

『ああ、うむ、そうだな。すまん、話の腰を折った。続けてくれ』

『いえ、お気になさらず』

軽く微笑むと、カチュアはその先を続ける。

『ですが、ミネルバ様の妹君であるマリア王女が敵の手中にあるため身動きが取れないのです。そこで、私がミネルバ様の密命を受けて参りました。マルス様、どうかマリア王女を助けるためにお力をお貸しくください』

『成る程ね…』

カチュアがここに来た目的を聞いて、まずはハーディンに視線を向けた。

『ハーディン公、どう思う？』

『うむ…』

ことの真贋を図っているのか、ハーディンが難しい顔をして唸っている。やがて口を開くと、

『あり得ない話ではないが…軽々に動くのはどうかかというのが正直な私の感想だな』

その言葉に、カチュアが他の者に気取られないほど僅かにだが悲しそうな表情をした。しかしすぐにそれを引っ込める。

『理由を聞いてもいいかな？』

マルスが尋ねた。

『確たる理由はない。だが、指揮官としては常に最悪の事態は想定しておかねばならない。今この娘が言ったことは謀で、我々をデイルにおびき出してそこで叩き潰すという筋書きも有り得ない話ではあるまい?』

『成る程ね』

一理あるなどマルスが頷いた。確かに十分あり得る話だからだ。と、

『マルス王子』

玉座のニーナがマルスを呼んだ。

『はい、ニーナ様』

マルスが答える。

『貴方はどう思っているのです?』

『僕ですか?』

『ええ。率直な意見を述べなさい』

『…わかりました』

ニーナに促され、マルスが自分の意見を口にする。

『僕はハーディン公とは逆で、彼女の言葉を信用してもいいと思います』

その言葉に、これまたカチュアの表情が他の者に気取られないほど僅かに喜色を見せ



た。

『何故ですか？』

ニーナが重ねて問う。

『マケドニアのミネルバ王女と言えば、優れた人物として大陸にその名は轟いています。それ程の人物がそのような真似をするとは思えないのです』

『だがなマルス殿、その女兵士が本当にミネルバ王女の配下であるという保証はない。我々がそれを判断できない以上、何とでも騙ることはできる』

ハーディンはあくまでも否定的だった。と言うより、現実主義といった方が良いかもしれない。まあ、ドルーアに国土の大半を奪われ、ニーナを奉じて苦しい戦いを生き抜いてきたからそういった思考になるのもやむを得ないと言えた。それはマルスにもよく理解できるし、否定するつもりは毛頭ない。

(それでも…)

マルスはどうしてもそうは思えなかった。何故か…それは先のレフカンデイでの戦いのことを思い出したからだ。

遠目からあまりよく見れなかったが、あの時のミネルバ王女はとても悲しい目をしてた。そしてその目が、マルスにある人物のことを思い出させたのだ。

(姉上…)

マルスが思いを馳せたのは姉であるエリスのことだった。アリティア城陥落の時に、自分を逃がすために己を犠牲にした姉であるエリスの、あの時の目と同じ目をしていただけだ。

思い違いかもしれない。論理的な説明などできない。だがそれでも、マルスにはあの目をしてきたミネルバが嘘をつくように思えなかったのだ。だから、

『僕は彼女と……そしてミネルバ王女を信じます』

そう、ハーディンに宣言するのに躊躇はなかった。

『そうか』

ハーディンはマルスの返答にそれ以上は言及せず、そのままニーナに向き直った。

『ニーナ様、如何なされますか？』

『ハーディン、私はエムブレムをマルスに託しました。であれば、私の意思はわかるでしょう？』

『……かしこまりました』

一拍置いてハーディンが答える。ニーナがエムブレムをマルスに託したということはそのうちをを表す。ハーディンも納得はしたが、それでもまだ気持ちのどこかに割り切れない蟠りがわずかながらでもあるのだろう。そのため、何となくそれを察したニーナがハーディンを慮った。

『ごめんなさい、ハーディン。貴方にとつては考えるところもあるでしょうけど…』  
『いえ、お気になさらず。ニーナ様のご意志であれば尊重するのが臣下の務めです』  
『そう。ありがとう』  
『ハッ!』

双方ともまだ多少の引つ掛かりはあるのだろうが、それでも表面上は納まった。

『決まったね』

それを見計らったかのように、マルスが口を開いた。そしてそのままカチュアに向き直る。

『カチュア、ミネルバ王女へ伝えてくれ。我々はデイルルへ向かうと』

『ありがとうございます! 早速ミネルバ様にお伝えいたします!』

では、と頭を下げるとカチュアはそそくさとその場を後にしたのだった。

このようなことがあり、解放軍はアカネイアへと向けていた進路を一旦変更してデイルル要塞へと向かっていたのだった。そして今、要塞攻略戦が始まるうとしていた。そしてその出撃者の中には、今回はガレスの姿もあつたのだった。

「ジューコフ將軍」

マルスがデイル要塞を攻撃しようと軍備を整えている頃、ミネルバがデイルを預かる將軍、ジューコフの許に訪れていた。

「ミネルバ王女!?!」

突然現れたミネルバに、ジューコフは驚きを禁じ得ずに目を剥く。そして、  
「勝手に持ち場を離れ、何をしに来られた?」

当然と言えば当然の質問をミネルバに投げかけた。

「もし貴女が少しでもおかしな動きをすれば、マリア王女の身の安全は保障できぬぞ。そのこと、わかっているのか?」

「…いや、貴方に逆らうつもりはない」

開口一番、ミネルバがそう答えた。

「ただ、少しの間でいい。マリアに会わせてはくれぬか。あの娘はまだほんの子供。きつと、悲しい思いをしているだろう。將軍：頼む。マリアに一目会わせてほしい」

妹の身を案じたミネルバがジューコフにそう懇願する。姉妹としては麗しい姉妹愛だが、一軍を預かる將の身としては正直首を捻りたくなくなる行動である。だが、そうさせるほどにミネルバはマリアが心配なのかもしれない。

「それは、できぬ相談だな」

そしてジューコフから返ってきた返事は、当然と言えるものだった。

「マリア王女は大事な人質。妹姫が心配なら、下手な考えを起さず大人しく命令に従うことだ」

そう返答した直後、

「將軍！ 大変です！」

一人の兵士が血相を変えてジューコフの許へ駆け込んできたのだった。

「どうした？」

「で、ディール要塞の東に反乱軍が現れました！」

「何だと!？」

予想外の報告にジューコフが驚きを隠せなかった。

「何故こんなところに反乱軍が来るのだ!？」

吐き捨てても、その理由はわかるはずもなかった。

「くそっ！ とにかく竜騎士団に出撃を命じよ！ それと、本体に援軍を要請することも忘れるな！ 奴らが要塞に入る前に何としても撃破するのだ！」

「ハッ！」

ジューコフの命を受けた兵士がすぐさま身を翻して戻っていく。それを見送った後、

ミネルバも同じように身を翻してその場を去った。

「反乱軍……マルス王子、か……」

誰にも聞かれぬように口の中でそう呟くと、靴を鳴らしてミネルバは飛竜に跨り空高く飛び上がったのだった。

「よし、要塞の入り口は何とか確保したな……」

激戦の末、要塞入り口付近の敵兵をあらかじめ排除したマルスが大きく息を吐いた。

「厳しい戦いだっただな……」

隣で剣を鞘に収めたハーデインも厳しい表情になっている。その言葉通り、激戦を物語るように装束のあちこちが血で染まっていた。

「うん。でも、本番はここからだ」

マルスが頷くと振り返り、そこに居並ぶ今回の指揮官級の面々を見渡した。

「ここからは事前の軍議通り、軍を二手に分ける。歩兵、装甲兵や魔道士たち小回りの利く者は僕と一緒に要塞内部へ。騎兵や飛行兵は外から城へ向かってくれ」

そしてマルスはハーデインに顔を向けた。

「城外の騎兵たちの指揮はハーデイン公にお任せする。頼んだよ」

「心得た。武運を祈るぞ」

「そちらもね」

「フツ…よし、騎兵部隊は我に続け！」

号令をかけると、ハーディンは騎兵や飛兵を率いて離脱していった。

「それじゃあ、僕らも行くか」

『おお！』

勇ましい歓声が上がリ、マルス率いる砦の攻略部隊も進撃を開始したのだった。

「ドーガ！ 敵をおびき出してくれ！ カシムやジオルジュ、ゴードンはドーガがおびき出した敵を攻撃！ 討ち漏らした敵はオグマたちに任せる！ レナヤリフは負傷者の手当てを！ ジュリアンは財宝の回収へ！ マリクは万一に備えてジュリアンについていてくれ！」

『ハッ！』

マルスの指揮で次々と各人が動き出す。そしてまるで各人がマルスの手足のように命令を遂行していった。

（大した手並みだな…）

その様子を最後方から見ていたガレスはその指揮能力に感心していた。今までも何度かマルスの指揮能力の高さは見ていたのだが、目の当たりにするたびに感心させられ

てしまう。マルス自身も剣士としては一流だが、その本当の強さはこの高い指揮能力にあるなと思っていた。

(だが、それは総大将にとつては何よりも重要な要素だ)

そもそも、総大将が負けたら戦は終わるのだ。それを考えれば、総大将自身の強さはさほど重要な要素ではない。寧ろ、部隊を手足のようには扱える指揮能力の方が総大将の資質としては重要なのである。それを考えれば、マルスは軍の頂点としては申し分ないと言えた。

(政治や外交面であの坊やがどうなのかは知らんが、間違いなく軍事においては天賦の際の持ち主であると言つていいだろう)

最後方から、ガレスはそんなことを考えていた。今回は城塞の攻略戦がメインということでガレスも出撃にお声がかかったのだが、役割としては後方の備えに留め置かれている。後方からの援軍に備えて……という名目だったが、やはりワーレンでの一件が響いているのだろう。

ガレスがワーレンを襲ってきたグルニア軍を皆殺しにした後、その事後処理でワーレンにいた留守の面々のうち何割かはその惨状を目の当たりにした。そして一様に嫌悪感と、ガレスに対する恐怖感を改めて抱いたのだった。

そんな事情があつたため、ガレスはまた閑職に追われる羽目になった。且つ、少しず



つではあるが築けていた人間関係もリセットされてしまう。今までと変わらずにガレスに接してくるのは、現時点ではアテナとバヌトウ、それとニーナぐらいのものであった。とは言え、ニーナとはそもそも接触する機会がほとんどないので実質はアテナとバヌトウだけだった。

そんなわけで、現在ガレスは殿を任されていたのである。もともと、嘘から出た真というわけでもないだろうが、先ほど後方から敵の援軍が現れたために結果的にガレスを後方に置いておいたことが吉と出たのだが。

そんなこんなしているうちに要塞内部での戦いは進み、少しずつ敵を圧している状態になっていた。

(まあ、楽をさせてもらえぬならそれでもいいがな)

最後方でのんびりと前線の状況を眺めながらガレスはそんなことを考えていた。ワーレンでガス抜きしたこともあってストレスや鬱憤はかなり抜けたのだろう。

「王子、要塞内の制圧が完了しました!」

ドーガがマルスに報告したのはそんな時だった。

「敵兵は撃退。後は人質であるマリア王女がいらっしやると思われる部屋のみです」

「そうか、ごくろうだったね。それでマリア王女は救出したのかい?」

「いえ。扉に鍵がかかっておりましたので、我々ではどうすることも…」

「わかった」

状況を聞いたマルスはジュリアンに顔を向けた。

「ジュリアン、頼む」

「任せておいてください、王子」

そして今度はジュリアンがドーガに顔を向けた。

「その部屋まで案内してくれるかい？」

「ああ、ここにちだ」

ドーガがジュリアンを先導して歩き出した。その後をマルスたちがついていく。ガレスも最後方からのんびりと歩を進めたのだった。

「ここにかい？」

要塞内部。とある部屋の前に案内されたジュリアンが振り返ってドーガに尋ねた。

「ああ」

「よーし…」

腕を撫すと、ジュリアンは鍵穴に針金を差し込む。暫くカチャカチャと音がして、そしてカチツと音がした。

「開きましたよ、王子」

「ありがとう」

仕事を終えたジュリアンが下がると、入れ替わるようにマルスが扉の前に立つ。そしてドアのノブを握ると回して、ゆっくりと開けた。

「だ、誰?！」

部屋の外での戦いの物音が聞こえたのか、部屋にいる幼い少女が震えながらマルスに視線を向けた。

「マケドニアのマリア王女だね?」

マルスが微笑みながらマリアに話しかける。その笑顔に見ほれたのか、少女は少し頬を赤くしながら頷いた。

「え、は、はい…」

「どうやらどこにも怪我などはないようだね。無事で何よりだ」

「あ、あの、貴方は…」

「つと、失礼」

自己紹介が遅れたことを詫びてマルスが軽く頭を下げた。

「僕はアリテイアのマルスだ」

「あつ、貴方がマルス様…」

(へえー、素敵な人なんだ)

王女と言ってもそこは年頃の少女。そんなことを思いながら言葉を続ける。

「助けてくれてありがとう。私が助かったことを姉に伝えてください。きつと喜んでくれるから」

「うん、わかってる。実は君を助けに来たのもミネルバ王女に頼まれたからなんだ」

「そうなんですか…」

自分のために色々と動いてくれたことを姉に感謝しつつ、マリアが先を続ける。

「それと…」

「うん？」

「これからは、私もマルス様のお力になります」

「えっ!?それは…」

マリアの申し出にマルスの歯切れが悪くなった。救出は請け負ったものの、まさかそんなことを言われるとは思わなかったからだ。どうしたものかと思いつながら難しい表情になると、

「お側に置いてください。ね、いいでしょ!」

と、マリアが畳みかけてきたのだった。

「いや、しかし…」

「マリアの必死の訴えも、マルスは変わらず表情を曇らせている。

「すまないけど、それは僕の一存では決めかねるな」

「ええー、どうして?」

「いや、どうしてって…」

グイグイと積極的に圧してくるマリアに相変わらずマルスは困惑顔だ。

「君は王女だろう? 国のことを考えれば、戦火に身を置くのは止めた方が良い」

「お言葉ですけど、それなら兄さまや姉さまだって同じです。それに、マルス様だってアリテイアの王子じゃないですか」

「マリアは不満な表情のまま。周りがそうは思っていないなくても、自分だけ除け者にされているように感じたのだろう。」

「わかっているさ。でも、ミネルバ王女のたつての願いで今回僕たちがマリア王女の救出に来たんだ。ミネルバ王女に会わせる前にその貴方に万一のことがあったら、僕は彼女に会わせる顔がない」

「……」

姉を出されては流石に何も言えないのだろう、不満気な表情のままではあるがマリアが押し黙った。

「だからマリア王女、君の件についてはミネルバ王女に任せようと思ってる。どうかそ

れまでは、大人しくしてほしい」

「…わかりました」

不承不承と言った様子ではあるが、マリアが了承した。

「でも、姉さまがいいって言ったら、私も軍に参加しますからね」

「ああ、それなら構わないよ。約束する」

「よかった…」

ホツとした様子になってマリアは胸を撫で下ろした。

「見た感じ、悪いところはなさそうだけど、体調とかは大丈夫かい？」

「はい、心配しないでください」

「わかった。それじゃあ、行こうか」

「はい！」

マリアが元気よく返事をするると小走りに部屋から出てきた。こうして、解放軍はここにやってきた目的を達成したのだった。部屋から出てきたマリアは安心した様子で他の面々と会話したり頭を下げたりしている。

(威勢のいいガキだな)

最後方からその様子を眺めていたガレスがぼんやりとそんなことを思っていた。人質という立場ではあったが、いかにもしおらしいお姫様というわけではなく快活なその

姿に意外に思いつつも好ましいものであった。

「さて、では後はここを脱出して城へ向かっている部隊と合流して終わらせよう」

マルスの指示に部下たちが返事を返したり頷いて答える。そして彼らの視線はすぐ側にある扉に向けられた。

「恐らくあの扉がこの要塞の裏口だろう」

そして、マルスがジュリアンへと振り返る。

「ジュリアン、もう一度頼む」

「お任せください」

ジュリアンが人ごみから出てきて扉の前に片膝を着いた。そして、先ほどと同じように鍵穴に針金を差し込むとカチャカチャと音を鳴らして鍵開けを始める。

(…ん?)

ジュリアンが鍵開けをしている間、ガレスが何かを感じて他の者を押しつけて前に出てきた。その途中で、カチリと扉の鍵が開いた音が要塞内に聞く。

「王子、開きましたよ」

「ありがとうございます」

礼を言ったマルスの脇からマリアがトトトと駆け出す。そして、ドアのノブに手を掛けた。

「外だー！」

嬉しそうに顔を綻ばせながらマリアがドアを開けた。今までずっと狭い室内で人質生活だったから久しぶりの広い外に喜ぶのは当然だったかもしれない。だが、ここはまだ敵地である。であれば当然、

「死ね！」

ドアを開けた瞬間、待ち構えていた敵が斬りかかった。予想もしていなかったその展開に、マリアは固まってしまい、そして他の誰も動けなかった。

「マリア王女！」

そんな中、唯一マルスが駆け寄ろうとするも距離があるため凶刃がマリアに届く前に駆け付けることも叶わない。そうして、マリアはその短く哀れな一生を終えるはずだった。が、

「きゃっ！」

不意に襟を後ろから引つ張られ、マリアはそのまま後方へと投げ飛ばされる。それはまさしく凶刃がマリアの生命を奪う本当にほんの一瞬前だった。

「痛った〜い…！」

投げ飛ばされたマリアが痛みに顔を顰めながら身体を起こす。

『マリア王女！』



その声が引き金になったというわけでもないだろうが、硬直から解けた何人かが慌ててマリアに近寄った。

「ご無事ですか!」

「お怪我は!」

「う、うん、大丈夫…」

心配してくれる面々に答えながら、己の身に何が起こったのだろうかと先ほどまで自分がいたであろうところに目を向けた。そこには、剣で斬りかかってきた敵兵と思われる人物。そして、漆黒の重厚な鎧に身を包んだ一人の騎士がいた。そして：

「ヒッ!」

思わずマリアが悲鳴を上げる。それは敵兵の剣から血が流れ、それが滴り落ちて小さいながらも石畳に血だまりを作っていたからだだった。

「あ、あんた…」

扉を開けたため、マリアのすぐ側にいたままで固まっていたジュリアンがその光景に呆然となりながらパクパクと口を開く。

「…貴様も早く失せろ」

目の前の人物…ガレスに威圧感たつぷりにそう警告され、ジュリアンは慌てて後ろへ下がった。

「引っ込んでろ、貴様ら」

流血しながらも、ガレスはマルスたちを制した。

「コイツは手練れだ。少なくとも、今の貴様らでは勝てん。死にたくなければ大人しくしている」

最後にそれだけ言うと、ガレスはサタンブローバーを振り下ろす。だが、敵兵は余裕でかわすとガレスを誘導するかのように外へと出た。

「フン、誘っているつもりか」

見え見えの挑発だが、建物内では思う存分得物を振るえないのも事実。寧ろ好都合とばかりにガレスがその後を追った。と、

「ら、ライブー」

呪文の詠唱が聞こえ、出血が引いていく。振り返ると、マリアが小刻みに震えながらもガレスに治癒の魔法をかけていた。

「…フン」

礼を言うでもなく、何時ものように鼻を鳴らすとガレスが外へ出る。他の面々はガレスに従って要塞の中から二人の戦いを見ていた。

「待たせたな…」

対峙したガレスが敵兵を見据えながら呟いた。

「ふふ、いいのか？ サシの勝負で」

敵兵が挑発するようにそう告げる。

「クク：そのセリフ、そのままそっくり返してやる。援軍を呼ぶんならさつさとした方が良いぞ。後で後悔しても遅いからな」

「言ってくれる。大口でなければいいがな」

「クク、試してみるか？」

「そうだな」

そこで二人は互いに得物を構える。視線が火花を散らし、緊張感が否応にでも高まった。その緊張感に耐えられなくなった、要塞内の誰かがゴクリと唾を飲み込んだのを合図とするかのように、二人は相手に向かって斬りかかった。

「ガアアアアッ！」

「おおおおおっ！」

ガキンと、剣と斧が接触した金属音が周囲に響き渡る。

「ヒッ！」

その轟音に、何人かが竦んでしまっていた。中には、腰を抜かしてしまったものも僅かながらにいる。

だが大半は、ガレスと敵兵の戦いをじっと見守っていた。

「フッー」

敵兵が剣を縦横無尽に振るう。得物の特性上、大振りで重量のあるガレスのサタンブローバーはどうしても剣や槍には手数で負けてしまう。そのため、今のところガレスの防戦一方だった。

「フン」

とは言え、そこは本来の世界で殺戮に明け暮れた戦闘狂。経験に裏打ちされる予測で敵兵の攻撃を凌いでいく。

「ほお…」

やがて、敵兵が一旦距離を取った。どれだけ攻めても防御を崩せないことに驚いた表情になっている。

「大したものだ。そんな見るからに重い得物を使っているのに、俺の攻撃をことごとくいなすとはな」

「クク…感心している場合か？」

ガレスが楽しそうに笑った。戦闘狂いの性�顔を出しているのだろう。

「そんな攻めでは俺は殺せんぞ」

「防戦一方の奴に言われてもな。凌ぎきるだけで精一杯で、攻撃してこない奴が勝てると思っっているのか」

「クク…そう思うならさっさと俺の首を取って見せろ」

「言われるまでもない！」

敵兵が再び斬りかかる。ガレスは相も変わらず見事にその攻撃を防いでいるが、予想以上に素早い攻撃の連続で攻撃に移る隙が見出せなかった。が、

(鬱陶しい…)

敵兵の攻撃をいなしながらガレスはそんなことを考えていた。確かにこれまでは防戦一方だし、攻撃に移る隙もないがそれでも自分が負けるとは思っていなかった。

別に己の実力を過信しているというわけではなく、純然たる事実である。かつての世間で殺戮に明け暮れていた時の経験から、彼我の実力差を判断して辿り着いた結論だった。

(予想外の隠し玉でもあるのなら別だが…)

そう思ったが、これまでの攻撃を見てその可能性は限りなく低いと思っていた。確かに技量が高いが、剣に汚さがないというか素直なのである。フェイントを交えたり軌道を変えたりすることがなく、真っ直ぐ叩き込んできていた。

逆に言えばそれでもこれまで生き延びてきたということは、それだけ技量が高いという証拠でもあるのだが、惜しむらくは今回の相手が悪かった。

(つまらん…)

そう判断すると、ガレスはこの戦いをいい加減終わらせることにした。何度目かの敵兵の攻撃を大振りで弾き飛ばす。

「何ッ!？」

その脅力に後方に吹き飛ばされた敵兵が顔を顰めた。と、はじめてガレスが攻撃に打って出てサタンブローバーを振りかぶって突進してくる。

「ちいっ!」

舌打ちしながら敵兵は迎え撃とうとしたが、次の瞬間、ガレスは思わぬ行動を起こした。自分の得物であるサタンブローバーをその手から離したのである。

「!？」

無手で向かってくるガレスを迎え撃とうとした敵兵だったが、一足遅かった。敵兵が気付いたときにはガレスは既に懐に入り込んでいたのだ。得物を手放したことで、速度が速まったのである。そして、ガレスの真紅の瞳が不気味に光ったのを敵兵は見てしまった。

「おおおおっ!」

そのまま、ガレスはシオルダータツクルの要領で敵兵に突進していく。そして、勢いよく敵兵をかち上げた。

「ぐはっ!」

悲鳴を上げながら敵兵が上空へと吹き飛んだ。激痛に顔を顰めながらも戦意は失つておらず、体勢を立て直すすと着地と同時に攻撃に移ろうと構える。そんな時、その目に飛び込んできたのはガレスが地に膝を着いて己の右手を大地に押し当てている姿だった。そして、

「デスクラウド！」

ガレスがそう言った直後、敵兵の着地地点から怪しげなガスが噴き出す。そのガスが敵兵の身体を蝕み、そして、

「がはっ！」

再び上空へと弾き飛ばされた。

(い、今のは、魔法なの…か?)

朦朧とする意識の中、かろうじてガレスに目を向ける。そこには、自分を亡き者にしてようとサタンブローバーを振り上げるガレスの姿があり、そして直後、敵兵の意識は永久に閉ざされたのだった。

「ふっ…」

中々の激闘を繰り広げた敵兵の虚を突いてその身体を真っ二つにぶった斬り、ガレスは大きく息を吐いた。と、二人の戦いの決着を見届けた攻略部隊が砦から出てくる。だ

が、ガレスに話しかける者はいない。と、

「あつー！」

何かに気付いたマリアが声を上げた。

「どうしたんだい？ マリア王女」

マルスが尋ねると、

「あれ、あれです、マルス様！」

マリアが上空を指さした。そこには、こちらに向かってくるドラゴンナイトが一騎いた。そして、その飛竜を操っているのは…

「ミネルバ王女…」

マルスがその名を口にしたのだった。ガレスを始め、他の者も皆上空に視線を向けている。

ミネルバはそのまま飛竜を滑らせるように降下してきて、マルスたちから少し離れた場所に着地した。そして、そのまま騎龍から降りて地上に立つ。

「マルス王子ですね、はじめまして」

ミネルバはそのまま近づいてきて、ある程度マルスとの距離を詰めると話しかけてきた。

「マケドニアのミネルバです」



「はじめましてミネルバ王女、僕がアリティアのマルスです」

マルスも礼に則つてミネルバに応えた。

「マリアを助けていただき、ありがとうございました。それと、いろいろ事情があつたにせよ今まで敵対して申し訳ありませんでした」

「いえ、マケドニアは国の指針としてドルーアに与することを選択した。であれば、我が敵対するのは仕方なかつたことです」

「例え世辞であつても、そう言つて頂けると些か心が救われます」

自嘲するようにミネルバが寂しく微笑んだ。

「…ですが、兄のミシエイルをはじめマケドニア軍の多くは、いまだドルーア帝国に加担しています。しかし、彼らは私にとって父の仇。かなうなら、私自身の手で倒したいと思つています」

「わかります。そのお気持ちは、とても良く…」

マルスの脳裏にアリティア城が陥落するあの日のことが思い出された。今でもその時のことを思い出すと無力感に苛まれ、そして黒い感情に支配されるのだ。だからこそ、今言つたようにミネルバの気持ちが口先だけでなくよくわかつた。

「ただ、私の部下たち…特に白騎士団のパオラ、カチュア、エストの三姉妹はお助けください。彼女たちは反乱を恐れたドルーアにより、私から引き離されてしまいました」

(カチユア…あの子か)

ミネルバが口にした名前のうち、一人の名前にマルスも聞き覚えがあった。先日、ミネルバの使者として解放軍を訪れていた少女の名前だからだ。

(そう…か)

この短い時間の中で、事態がもう既にかなり進行していることに驚いたものの、そんなことは億尾にも出さずマルスはミネルバの話の続きを聞いていた。

「ですが、私が生きていることを知れば喜んで仲間に加わるでしょう。マケドニアを踏み躪った憎いドルーア…そのドルーアを倒すために、私たちも王子と共に戦わせてください」

「ありがとう、ミネルバ王女。我々は喜んで貴方を迎えさせていただきます」

マルスがミネルバの申し出に了承の意を示した。こうしてまた一人、解放軍に心強い味方が増えたのだった。そして、

「姉様！」

姉妹が久しぶりの対面を果たすことになる。

「マリアー！」

小走りに走ってきたマリアを、ミネルバがしっかりと抱きしめた。その光景に、解放軍の面々が心を和ませる。

「さあ行こう。今度こそ城外の部隊と合流し、城を制圧して先へと進もう」  
姉妹の感動的な場面を邪魔するのは気が引けるが、かと言っていつまでもこうしているわけにもいかず、心苦しくあつたがマルスが号令をかけた。その号令に従い、順次、砦の攻略部隊は城へと向かっていくのだった。

「ふう……」

他の面々が城へと向かっている間、最後尾のガレスも他の者と同じように城へ向かった……わけではなかった。ガレスは地に座り、少し己の身体を休めていたのだ。

(やれやれ、あの程度で少しとは言え息が上がるとはな……)

素直にそう思う。ガレスは先ほどの戦いの疲れが取れず、勝手に休憩を取っているのだ。久々に暗黒魔法を使った影響が出ているのだろうか。どちらにせよ、暗黒道の支配下から中途半端にはいえ抜け出しているのです。その影響も否定できない。

ワーレンの時も戦いの後疲れて眠ってしまったが、相手にした数が違うのである。それだけ、あの敵兵が強かったともいえるが。

とにもかくにも、自主的な小休止を取っているガレス。と、不意に上空から影が差した。

(ん?)

何だと思いい顔を上げると、そこにはこちらへと舞い降りてくるドラゴンが一騎。敵かと思つたがそうではなく、そこに乗っているのはミネルバとマリアだった。

(ふむ…)

何の用かとは思わないでもなかったが、敵でないことは確認できたので捨ておくことにした。そのまま、ミネルバたちは高度を下げてガレスのすぐ側に降り立った。

「どうした?」

近寄ってくるマリアとミネルバに、ガレスが顔を上げて尋ねた。と、

「その…大丈夫?」

心配そうな顔で覗き込んできたのはマリアだった。

「? 何がだ?」

今一つ要領を得ない質問に、ガレスが尋ね返す。と、

「…上空から貴様がここで座つたまま動かないのが見えてな。マリアがそれに気付き、様子を見に行きたいと言い出したのでやってきたのだ」

「クク…それはそれは」

ようやく二人の来訪の意味がわかり、ガレスは何時ものように咽喉の奥で笑つた。

「ありがたいことだな。だが、勝手に戦列を離れてもいいのか?」

「無論、マルス殿には話は通してある」

「用意のいいことだ……」

少し呆れながらガレスが答えた。その間も、マリアが心配そうにガレスを覗き込んでいる。

(この小娘に、ここまで案じられるような真似をした覚えはないはずだが……)

そのことがガレスは不思議でならなかった。ガレスとマリアの接点など、先ほどあの敵兵から生命を救ったことしかない。命の恩人と言えばそうかもしれないが、そのやり方も首根っこを掴んで強引に後方に投げ飛ばす、いつもの対処だった。とは言え、心配そうに覗き込んでいる者をいつまでも放っておくわけにもいかない。

(……つくづく甘くなつたものだな、この俺が)

そう思いつつも、それが嫌ではない現状に内心で驚きながらもガレスが口を開いた。

「心配はいらん。先ほどの戦いで少し疲れたのでな、勝手に小休止を取っていただけだ。そろそろ後を追おうと思つていたところだ」

「ホント!?!」

マリアが顔をぱあつと輝かせる。

「ああ」

「良かったあ……」

そして今度はホツと胸を撫で下ろした。

（俺が怖くないのか？ 見かけによらず肝が座っているというか、珍しい奴だな…）

普通、人が自分と相對したときに見せるような素振りが垣間見え、ガレスは困惑していた。と、

「…レフカンデイでは世話になったな」

マリアが一段落つくの待って…と言うわけでもないだろうが、今度はミネルバが話しかけてきた。

「うん？」

ガレスがマリアから視線を外し、ミネルバへと向き直る。

「クク…そう言えばそうだったな」

レフカンデイのことを思い出し、ガレスが咽喉の奥で笑った。

「あの時はお前たちを皆殺しにするつもりだったが、こうなると殺さなかったことが良いほうに働いたわけだ」

「…サラつと言ってくれるな。あの一戦の後遺症で、エストは暫く碌に働けなかったのだぞ」

こんなことを言うつもりではなかったのだが、どうしても恨み言が先に出してしまう。実際、それだけの目に遭わされたので当然なのだが。ミネルバ自身もナイトメアをくらって意識を持っていかれかけたことでもあるので余計に。だが、

「エスト？ 誰だそれは？」

ガレスから返ってきたのはこの一言だった。とは言え、別にガレスには悪意があるわけでも揶揄しているわけでもない。敵兵の名前など知るわけもないのだから当然である。

「…貴様が殺そうとした私の部下だ」

「えっ!？」

マリアが驚いて姉を見た。敵対していたのだから当然あり得る話だが、それでも実際にそんなことを聞かされるとやはりショックは一入なのであろう。だが、ガレスは気にも留めた様子はなかった。

「ああ、あのピンクの髪の小娘か」

ミネルバの一言で思い出したガレスが呟いた。だが悪びれる様子はない。

「仕方あるまい。今はともかく、あの時点では敵だったのだ。敵を殺して何が悪い」

「わかつている」

そう、ミネルバもわかつているのだ。ガレスの言っていることが正しいことを。戦場で敵に手心を加えれば、その結果は己や味方の死につながる。それを考えれば、ガレスが言ったことは正しい。

「…わかつているさ」

だがそれでも、素直に割り切れるかと言えばそんなことはなく、忸怩たる思いを抱かずにはいられなかつた。

「クク…複雑な感情を抱いているのはわかるが、そうしかめつ面をするな。せつかくの美人が台無しだぞ」

「な、何を…ッ！」

そのミネルバの複雑な思いを和らげるためだろうか、あるいはただ単にからかうためかはわからないが、ガレスが何の脈絡もないことを言ってきた。そして、そんなことを言われるとは思ひもしなかつたミネルバが予想外に狼狽する。

「どうした？ 一国の王女なのだからこの程度の世辞や追従など、聞き飽きているだろう？ …もつとも、俺は本心で言つたがな。バカにするわけではないがそれほどの器量良しだ、さぞかし求婚や縁談の話は多かつたのではないか？」

「ッ！ マリア、行きますよ！」

ミネルバがプイッと顔を背け、マリアの手を引いた。機嫌を損ねたとも思えるが、その顔はほんのわずかだが赤くなつていた。と、

「痛ッ！」

ミネルバに引つ張られたマリアが顔を歪めた。

「マリア？」



それに気付いたミネルバが立ち止まって手を放す。

「どうしたの？」

膝を着いて目線を合わせると、ミネルバはマリアに尋ねた。

「姉様……その……」

マリアが己の足に緯線を向ける。ミネルバも同じく足に視線を向けたところで、マリアが軽く自分のスカートを引つ張り上げた。と、右足のくるぶし辺りが赤く腫れている。

「どうしたのです、それは？」

ミネルバが心配げに患部を見ながらマリアに話し掛けた。

「その……さつきちよつと捻っちゃって……」

そう答えながら、マリアがミネルバに気付かれないようにチラツとガレスに視線を向けた。

（成る程な……）

そして、ガレスはその視線で悟った。

（俺が首根っこ引つ掴んで後ろへ投げ飛ばした時に痛めたのか。運のない小娘だ）

自分でやっておいてこの言い草はない。確かにそのおかげでマリアの生命は助かったのだが、マリアを傷物にしたのも事実なのだ。

(…どうしたものか)

鎧の中で苦虫を噛み潰したような表情になって考えていたガレスだったが、やがて頭を抱えながら立ち上がった。

「痛むのか？」

そして、マリアを見下ろしながら尋ねる。

「え？ う、うん…」

そんなことを聞かれるとは思っていなかったマリアが、おっかなびつくり頷いた。

「そうか。だったら…」

ガレスは不意に手を伸ばすとその手をマリアの腰に回し抱きかかえる。

「きやー！」

いきなりのガレスの行動に驚いて悲鳴を上げるマリアだったが、ガレスは委細構わずそのままマリアを自分の右肩に乗せた。

「これならどうだ？」

ガレスが尋ねると、

「わあ…」

マリアが目を輝かせた。ガレスの肩に乗っているために、いつも自分が見ている視界とはまるで違う光景が目飛び込んでくる。兄や姉が駆る飛竜の上から見る光景とは

また違った景色に、マリアは喜びを隠せなかった。

「気に入ったか？」

「うん！」

見上げて尋ねてきたガレスに、マリアは満面の笑みで頷いた。その返答を聞いたガレスは、そのままミネルバへと向き直る。

「どうする？ お前さえよければ俺がこのまま妹君を城まで送るが」

「……」

返事を返すことなくミネルバは考えた。正直、ガレスの不気味さというか邪悪さというか得体の知れなさは警戒しても有り余るのでマリアとはあまり近づけたくないのが本心である。何より、一度手合わせしている分、余計その想いは際立っていた。

（だが…）

チラツとマリアに視線を向ける。喜びに顔を輝かせ、興奮しているマリアの姿を見ると、止めるなどとは言えなくなってしまう。

（それに、今ではもうこの男も味方なのだ。であれば、マリアを害するような真似もするまい）

ミネルバはそう判断すると、

「それでは申し訳ないが、よろしく頼む」

と、ガレスにマリアの処遇を任せることにした。

「わかった、承ろう」

「うむ。：マリア、あまりはしやぎ過ぎずに、その男に迷惑をかけないようにね」

「はい、姉様♪」

微笑みながらそう答えたマリアに、しようがない子と思いながら軽くフツと息を吐くと、ミネルバは愛竜に跨って空へと舞い上がった。

「では、私は一足先に城にて待つ！」

「わかった」

「気を付けて、姉様」

心配するマリアを安心させるように軽く微笑んでから大きく頷くと、ミネルバはマルスたちの向かっていった方向：城へと飛び去って行ったのだった。

「では、俺たちも行くか」

「うん！」

遙か向こうに遠くなっていくミネルバの姿を追ってガレスが歩き出した。そしてガレスが歩き出した頃にはもう城は陥落していたのである。

こうしてデイール要塞での戦いは幕を閉じた。そして、マリアを肩に乗せて城へとやってきたガレスを見て解放軍の面々は目を丸くし、暫くの間あらぬ噂が出ることに

なつたのだつた。

## NO. 09 おかしな鞆当て

デイル要塞を陥落させ、マケドニア王家の末妹であるマリアを救出した解放軍。同時にそれは、彼女の姉であるミネルバをも仲間を迎え入れることにもなった。

大きな戦力を手にした解放軍は、今度こそその進路をアカネイアに向ける。そして今、解放軍はアカネイアの王都であるパレスを臨むところまで辿り着いたのだった。

「…派手にやっているようだな」

遠くから微かに聞こえてくる剣戟や鬨の声に、ガレスは思わずそんなことを呟いていた。今回は草原を駆け巡る戦いということでガレスにお声はかからず、後方待機を命じられていた。そのため、前線の戦況に思いを馳せながら思わず呟いたのである。

(しかし…)

己の左側に視線を移し、

(どうしてこうなった…)

そうして今度は己の右側に視線を移してしみじみとそんなことを思う。何故なら、

「どうした？ ガレス？」

左からアテナに話しかけられ、

「どうかしたの？」

右からマリアに覗き込まれたからだ。

「いや……」

言葉を濁す。まさか馬鹿正直に、お前らが悩みの種だ……などとは言えない。いくら傍若無人のガレスでもその程度のことには心得ていた。故に、

(本当に……どうしてこうなった……)

再度、自問自答するしかなかったのだった。

「さて……どうするか」

マルスから、今回のパレス攻めの部隊に選ばれなかったガレスが呟いた。

(他の連中のようにこまごまとした仕事をしてもいいが……)

補給物資の確認や負傷兵の治療、介護など、後方待機には後方待機なりの仕事がある。

そして、出撃しない面々はそれに従事することになるのは当然のことだった。ガレスもそう言った考えが一瞬頭をよぎったが、

(バカなことを考えるものではないな)

すぐに否定した。そういった仕事に回れば、他の連中がビクビクオドオドするのが手に取るようにわかる。それでは効率的に逆効果というものであるう。

…まあ何より、そんな七面倒臭いことなどやりたくもないというのが本音だが。

「…寝るか」

休めるときに休んでおこうと頭を早々に切り替えたガレスが自分の天幕へ向けて歩き出す。と、

「ガレス」

不意に、誰かに声をかけられた。

「ん？」

声のした方向に振り返る。そこには、アテナが立っていた。

「アテナか」

ガレスがその名を呼ぶ。

「どうした？」

そして、用向きを尋ねた。

「今、暇か？」

「いや」

何となく嫌な予感を感じたガレスは即座にそう答えて否定した。もつとも、この後は



天幕で休む予定なので大嘘なのではあるが。

「そうか。何の用があるんだ？」

だが、アテナも簡単には引き下がらずに食い下がる。

「…何でもいいだろう。お前には関係ないことだ」

その返答に、アテナはムツとした表情を見せた。

「ガレス、水臭い」

「何だと？」

少し語気を強める。

「何か用があるなら、アテナも手伝う。そうすれば、用、早く終わる」

「それで？」

「アテナと手合わせしてほしい」

「成る程な…」

ガレスが軽く息を吐いた。

「それが本音か」

「そうだ。アテナ、ガレスとまだ手合わせしてない。だから、手合わせしたい」

「ククク…」

今度はいつものように笑う。

「そう言えば、そんなこともあったか」

「忘れてたのか？」

アテナが心外だとばかりにガレスに尋ねた。

「ああ」

「酷いな。ガレス、薄情」

「否定はせん」

アツサリと、ガレスはアテナの言葉に同意する。

「だが、軽率な返答をしたことは詫びよう。済まなかったな」

「え…」

ガレスの謝罪にアテナが言葉を詰まらせた。まさか、ガレスが謝罪するとは思わなかったからだ。が、

「その上で言わせてもらうが、あの約束は反故にしろ」

「何故だ？」

そんなことを聞かされては謝られても納得はできず、アテナはガレスに食い下がった。

「簡単なことだ、俺は手加減ができません。だから手合わせなんぞはできませんのだ。試合ではなく殺し合いになってしまうからな」

そして、ガレスがアテナの目をジッと見据える。

「俺が勝つにせよ、お前が勝つにせよ、どちらかが死ぬような結果がお前の望みか？」

「それは……」

アテナが口ごもる。アテナの望んでいるのはあくまでも手合わせであり、殺し合いではない。無論、自分が負けるなどとは毛頭思っていないが、かと言って本気になったガレスを、その生命を奪う以外で止められるのかと言われれば大いに疑問だった。今まで付き合っているから、ガレスがこういうことで嘘を言うとは思えなかったからだ。

「……まあ、そういうことだ」

その、揺れ動くアテナの心情が推察できたガレスが再び口を開く。

「手合わせがやりたいなら、他の連中に頼め。相手によるが、大概是喜んで相手してくれるだろう」

最後にそれだけ言い残すと、話は終わったとばかりにガレスが止めていた歩みを再開し始めた。

「！　ま「あ、いたいた」」

待つてと言おうとしたところで、そこにまた珍客が顔を出した。ガレスとアテナが声のした方向に顔を向けると、そこには先日救出し、戦列に加わったマリアの姿があった。

「マリアか」

ガレスが呟く。

「何か用か？」

ガレスが尋ねると、

「うん」

と、マリアが頷いた。

「探してたんだけ」

「探してた？ 俺をか？」

「うん」

再びマリアが頷く。

「物好きだな、お前も…」

何時ものようにガレスが咽喉の奥でクククと笑う。

「俺に関わると、他の連中がいい顔をせんだらう」

「うん。そうなんだよね…」

そこでマリアが納得できないとばかりに首を傾げた。

「なんでかな？」

「クク…他の連中は俺がイカれてるのが良くわかってるからな」

「？ そうなの？」

「マリアが今度はきよとんとした表情になって尋ねてきた。

「ああ。お前だって、ディール要塞で俺がお前たちの知らない暗黒魔法を使つて敵兵をぶつた斬つたのを見ているだろう?」

「うん。そうだけど…」

「人間ならば、得体の知れないものには恐怖を抱くものさ。言つておくが、それが悪いわけじゃない。寧ろ普通の反応だ。だから、普通の連中は俺を恐れる。俺に積極的に関わってくるお前や…」

そして、ガレスはアテナにスツと腕を向けた。

「コイツがおかしいだけだ」

「? 貴方は?」

そこでマリアはアテナに尋ねた。ガレスの隣に彼女がいたのは当然知っていたが、何せまだマリア自身が新参者ということもあつて、主要な面々の顔と名前を憶えていないのだ。

「アテナだ。お前は…マリア…だったな?」

「うん、宜しくね、アテナ」

アテナとマリアが挨拶を交わす。ガレスを挟んで実に珍しい組み合わせであつた。本来なら王女であるマリアはアテナの態度や物言いにムツとして腹を立ててもおかし

くないのだが、そうならないのはマリアのもって生まれた性格というものだろうか。

「ああ。宜しく、マリア」

対するアテナはいつも通りである。まあ、アテナは誰が相手でも態度を変えないので当然と言えば当然なのだが。

そして、女二人が挨拶を交わすのを尻目に、ガレスはさっさとその場を立ち去ろうとした。が、

「ちよ、ちよつとー！」

「待て、ガレスー！」

当然、マリアとアテナがそれを許すわけもなく声をかけてその足を引き留めた。

「…何だ？」

仕方なく立ち止まると、鬱陶しそうにガレスが振り返った。実際、さっさと休みたかったので二人の相手をするのが億劫なのだろう。

「もう！　せつかく尋ねてきたのにそんな扱いはないんじゃない!？」

マリアが腰に手を当てる怒っている。確かにご機嫌斜めなのだろうが、ガレスから見てもちんちくりんの少女がそんな真似をしても怒りなど感じられず、寧ろ微笑ましい光景にしか見えなかった。

「そうか。だったら帰れ」

「むっ!」

ガレスの拒絶の言葉に、マリアは更に気分を害したようだった。口を尖らせて睨んでいる。あまり王女様らしくない仕草だが、妙に似合っているのは否めない。

「さつきも言っただろう、俺に関わると他の連中がいい顔をせん。特にお前はこの軍にとつて立場上は敵とはいえ、一国の王女だからな。尚更俺と関わるのは良くはない。それ…」

「それに…何?」

「怖い怖いお前の姉に目を付けられても困るしな」

そう言つてまたガレスがクククと笑う。言葉では怖いなどと言っているが、微塵もそんなことを思っていないのはその態度からでも容易にわかった。

「姉様は怖くなんかないもん!」

「わかつたわかつた」

子供をあやすかのようにマリアをあしらうガレスは、今度はアテナに視線を向ける。

「お前はまだ何か俺に用があるのか?」

「え?」

アテナが戸惑いながら答える。

「手合わせの件なら詫びて断つただろう? 他にも何か用があつたのか?」

「あ……と……」

アテナが口籠もる。マリアと挨拶をしている間に自分たちを無視してさっさとその場を後にしようとしたために思わず引き留めてしまったのだが、では用件はと言われると返答に窮していた。ガレスに見抜かれた通り、それ以外にさしたる用件などなかったからである。ただ自分たちを置き去りにして去って行こうとしたのが気に食わずに引き止めただけだった。

「ないようだな……」

それを見透かし、ガレスが身を翻した。が、歩き出そうとして右側が若干重いことに気付く。

「？」

不審に思って視線を向けると、マリアが自分にしがみついている光景が目に入ってきた。

「…何の真似だ」

ガレスがマリアを見下ろしながら口を開いた。ガレスにとってマリアの体重などどうとでもできる重さなので強引に引き摺ってもいいのだが、そんな真似をすればまた面倒なことになるし、何より本気でミネルバに目を付けられかねない。そのため、内心では非常に面倒臭く思いながらも仕方なく理由を聞いた。



「一緒にお話でもしようよ〜」

(そんな理由か…)

どうにも、頭がクラクラするようなマリアの一言に、ガレスは頭を抑えて天を仰ぎたくなった。自分の危険性は先ほど十分に伝えていたし、実際、マリアも自分が救出されるときにガレスがああ敵兵をどうやって屠ったかは目の当たりにしているので、釘を刺せば大人しくなると思っていただけだ…

(甘かった…)

予想外の展開に発展したことにガレスは内心で溜め息をつかざるを得なかった。ゼテギネアの皇子として、ゼノビアの反乱軍相手に殺戮を繰り返したダークプリンスであつたが、この世界に堕ちて暗黒道の支配から解放されつつあるからかどうにも調子が狂う。

(かつての俺だつたら容赦なく殺しただろう。仮にそうせずとも、張り倒すか投げ飛ばすぐらいはしたと思うが…)

今はどうにも、そんな気分になれなかつたのだ。無論、力的にやろうと思えば当然できるのだが、どうしてもその気が出ない。

(こつなつたのを喜ぶべきか悲しむべきか…)

自問するも答えは出ない。そうしている間もずっと、マリアはガレスにしがみついて

いる。

（本当に妙なガキだな。生命を助けたのは確かだが、俺のような得体の知れない奴に臆せずに関わろうとするとは。だが）

それがうざったいのは本心だ。しかし、僅かでも嬉しさがあるのもまた確かだった。

（やれやれ…）

それを自覚したため、ガレスも観念する。

「わかった」

そして、マリアに向けてそう答えたのだった。

「え？」

粘ったとはいえ予想外の返答だったのだろう、マリアがきよんとした表情でガレスを見上げた。同じくアテナも、ビックリした顔になってガレスを見ている。

ガレスはそんな様子の二人に目もくれずに周囲を見渡す。と、近くに一本の大きな木が生えているのを見つけた。

「立ち話は面倒だ。あの木の下へ行くぞ」

「う、うん…」

おっかなびつくりといった感じにマリアが答える。ガレスはそのままその木の許へと移動した。はからずも、マリアを引きずるような形で。

「! ま、待て、ガレス!」

そんな二人に置いてきぼりにされたアテナが、慌ててガレスたちの後を追ったのだ。そして、冒頭の状況へと向かうのであった。

木の根元に腰を下ろしたガレスが、現在自分が置かれている状況に頭を悩ませている。そうしながらも、

「ねえ、ガレス♪」

マリアが話しかけてくる。その表情は本当に楽しそうだ。

(本当に、読めんガキだ…)

ガレスはその表情を見て心底そう思う。自分の置かれている立場と、危険性については先ほど十分に説明したのに、それでも離れることなくこうやって張り付いてきているのだから当然である。

(いくら俺が命の恩人とは言え、限度があると思うがな…)

不思議でしょうがなかったが、いくら頭を捻つても答えが出るわけではない。マリアが何を考えているのかなど、わかるわけではないので当然ではあるが。

そんなことを考えてマリアへの返事が遅れていると、

「ガレス」

今度はガレスを挟んでマリアと反対の左側にいるアテナが話しかけてきた。アテナも、ガレスやマリアと同じように木の根元に腰を下ろしている。と、

「アテナ、今私がガレスとお話してるの」

マリアが割り込んだ。

「だから、貴方はちよつと黙ってて」

「けどガレス、マリアに答えない。だから、アテナが話しかける」

「答えてないけど、まだちよつとしか時間経ってないでしょ？」

「そうだけど、だからってアテナが話しかけちゃいけない理由はない」

二人のやり取りで、ガレスを挟んでいるマリアとアテナの雰囲気がちよつと変化したのをガレスは感じた。

（女の鞆当てか。面倒な状況になったな…）

状況が悪化しそうな空気を感じ取ったガレスはフルヘルムの下でうんざりとした表情になって溜め息をついた。とは言え、この状況を招いたのは自分なのだからどうしようもない。

自分が好んで招いたわけではないのは誓って言えるが、それでも野放しにしておくその後々面倒なのは手に取るようにわかっていった。

「…その辺にしておけ」

故に、全く気乗りはしないがガレスが二人に口を挟む。

「ガレスは黙ってて！」

「ガレス、うるさい」

と、当然このように左右から怒られることになる。女同士の我のぶつけ合いだから仕方ないかもしれない。そしてこういう状況になると、普通は男は引つ込むものだがガレスが引つ込むわけはなかった。

「そうか」

そのまま立ち上がる。

「では、お前たちで楽しく話でもしている」

そう言つて、そのままその場を立ち去ろうとするので、マリアとアテナが慌てて引き止めた。

「ま、待って！」

「待て、ガレス！」

「何だ……」

億劫な感じを微塵も隠さずにガレスが振り返つた。

「まだ何かあるのか？」

「『何かあるのか？』じゃ、ない！」

おかんむりなのはマリアである。

「何でそういうことするの!」

「お前らが黙っていると言ったんだらう。だったら、俺がここにいる意味はない。どこで何をしようが俺の勝手だ」

「そういう問題じゃないもん!」

マリアの機嫌は斜めのままだ。ガレスとしても的外れなことを言っていることと、マリアが何を望んでいるのかはわかってはいるのだが、自分を置き去りにして張り合う二人付き合ってもらえないと思ったのもまた事実である。と、

「ガレス」

今度はアテナが口を開いた。

「何だ?」

ガレスがアテナに振り返る。どうせマリアと同じようなことを言うのだらうと思っていたガレスだが、その思惑は見事に裏切られることになった。

「その…すまなかつた」

そう言つて、頭を下げたのだる。

「む…」

そう出るとは思わなかつたガレスが言葉に詰まり、

「え……」

マリアも思わず驚いていた。

「アテナが悪かった。ガレスに最初に話しかけたのはマリア。そのマリアを差し置いてガレスに話しかけたのはアテナが悪い」

「……それで？」

ガレスが続きを促す。

「だから、もう少しアテナたちと付き合ってほしい。頼む」

「……」

頭を下げているアテナを見ながら、ガレスは何も言わない。側にいるマリアも、どうしたらいいかわからず、キョロキョロとガレスとアテナに交互に目をやっている。そして、

「……わかった」

少しの後、ガレスがそう答えた。そして、先ほどの場所まで戻ると同じように腰を下ろして木の幹に背中を預ける。マリアとアテナも慌ててガレスの後を追いついて、こちらも先ほどと同じようにガレスの左右に腰を下ろした。

「さ、マリア」

腰を下ろして早々にアテナが口を開く。

「え?」

「マリア、ガレスと話があるのだろうか? だから、アテナ譲る」

「う、うん」

頷くも、マリアは先ほどの威勢はない。どころか、少ししよげ返っているようにも見て取れた。

(…そうなるぐらいなら、最初からあんな真似をしなければいいものを)

そう思ったガレスだが、冷静になったからこそ自分の行動を省みたという風に取りれないこともない。

(やれやれ…)

呆れつつも、ガレスは今度はその場を離れなかった。その後は暫く三人で穏やかな時間を過ごすごことになる。その光景を、今回未出撃になった他の面々は不思議なような驚いたような表情で見っていたのであった。

「ん…?」

三人で時間を過ごしてから暫く後、あることに気付いたガレスが不意に顔を上げた。

「どうしたの?」



マリアが首を傾げる。

「いや……どうやら大分趨勢が着いたようだな」

「そうなのか？」

アテナが不思議そうな顔でガレスに尋ねた。

「ああ。剣戟や闘の声の中心部が大分動いている。今の場所はパレスがあるだろう場所にほど近いところまで来ているようだな」

「へえ……」

感心したような表情になってマリアが目を丸くした。

「ガレス、凄くいい♪」

はしやぎながら、マリアが横からガレスに抱き着いた。その行為にアテナが少しムツとして口を尖らせる。

「……止せ」

だが、ガレス自身もまた戸惑っていた。確かに鬱陶しくもあるが、持て余しているわけではない。だが、とにかくこういうことは今は止めてほしかったのである。何故なら、

「んっ、んんっ！」

不意に、咳払いが聞こえた。チラッとガレスが顔を巡らせると、そこにはマリアの隣

に立って木に背を預けているミネルバの姿があった。

「マリア」

ミネルバが諭すようにマリアに話しかける。

「そんな真似してはいけません」

「どうして？」

ミネルバに振り返り、マリアが首を傾げた。

「貴方は王女なのですよ。みだりに他人と慣れ慣れしくするのは褒められたものではありません」

「だってえ……」

敬愛する姉に諭され、マリアはシユンとしてしまう。その姿に心を痛めるミネルバだったが、この件に関しては譲るわけにもいかなかった。

（やれやれ……）

そんな姉妹のいざこざに巻き込まれる形になったガレスは、どうすることもできずに黙っているしかなかった。

今回の戦場は開けた場所と言うことで、最初は当然ミネルバも出撃予定だったのだが、敵に長距離弓兵であるシューターが配備されていることが判明し、急遽、ミネルバの出撃は取りやめになったのだ。

とは言え、偵察や状況把握などに飛兵が活躍するのもまた当然のことなので、出撃のメンバーに入りたいのもまた事実。そこで今回は、ミネルバよりも小回りが利いて身軽なシーダが選ばれ、ミネルバはお留守番となったわけである。

出撃メンバーから外されたミネルバは少し不満気ではあったが、それでも決定した方針には逆らうことはせず、それを受け入れた。そのため、今回同じように出撃メンバーから外れたマリアを探していたのだが、見つけた時側にいたのがガレス（と、アテナ）だったのである。そして、マリアの隣にガレスの姿を見たミネルバが慌ててマリアの許にやってきたのだった。

マリアはいきなり現れた姉の姿に驚いたが、素直に事情を説明すると何とか納得してもらえた。その代わり、ミネルバもそこに（お目付け役として）留まるようになったのだが。

こういった経緯で、このおかしな一団にミネルバも加わり、よりおかしな一団になっていたのだった。そのため、他の面々からの好奇の目はより一層強くなったのだが、マリアとアテナは元々それに気付いていなく、ガレスは面倒臭いので放置していた。ミネルバだけは神経を尖らせていたが、どうしようもないと思つて諦めていたのである。

まあ、そんなこんなで留守番の時間を過ごしていた一団だったが、パレス周辺から大きな関の声が上がったのが風に乗って後衛部隊の陣まで届いてきた。

「終わったようだな……」

それに気付くと、ガレスが立ち上がった。それに追従するように、アテナとマリアも立ち上がる。

「…わかるのか？」

ミネルバが窺うようにガレスに尋ねた。

「ああ」

短くそれだけ答えると、ガレスは歩き出した。

「あ、ガレス！」

「待ってよー！」

アテナとマリアがその後を追う。複雑な表情でガレスたちの…特にマリアの後ろ姿を見ていたミネルバも、やがて三人を追って歩き出した。

ガレスの言った通り、解放軍はパレス周辺での激戦に何とか勝利を収めた。そして解放軍は今、その大きな目的地の一つであるパレスへと臨もうとしているのであった。

## NO. 10 パレス攻略戦

「パレス…」

アカネイアの象徴たるパレスから少し離れた場所で、解放軍は慌ただしく次の出撃の準備をしていた。パレスの周辺の敵は掃討し、いよいよこれからパレスの奪還戦に挑む。

その準備に全軍が従事している中、ニーナは遂に手の届く距離まで戻ってきたこの場で感慨にふけていた。

（思えば、色々ありました…）

そして、ふとこれまでのことを思い返す。ドルーアにメデイウスが復活して国が滅ぼされ、グルニアのカミュの手によって命からがらオレルアンへと逃げ延びた。そして彼の地で反帝国の戦いを起こすものの芳しい成果は得られず、徐々に追い詰められていく中でマルスたちが合流してくれた。

彼らを加えたアリティアⅡオレルアン連合軍はそこから勝利を重ね、ついにここまで戻ってきたのだ。

（長かったような…短かったような…）

不思議なもの……と、ニーナは思わざるを得なかった。思えば、何度も殺されてもおかしくない場面はあった。だが現実はどうして生き延び、そして今、パレスまであと一息のところまで戻ってきたのだ。

そして、これまでのことを思い出していたその脳裏には自然と、その間に会った色々な人物が浮かんでくる。その中で、ニーナの印象に特に残ったのが二人の人物だった。奇しくも両方とも『黒騎士』の異名を冠する二人の人物。

(カミュ……)

まずは己の生命を助けてくれた、あの敵国の黒騎士……グルニアのカミュだった。自国を滅亡させた者として最初は死ぬほど憎んだが、彼に諭されて生き延び、今自分はこのにある。そしてその間に色々な経験をしたところで、カミュに対する思いもだいぶ変わってきていた。

確かにアカネイアを滅ぼした主力の軍をカミュが率いていたことは純然たる事実だが、生命を助けてくれたことに変わりはない。それに将の立場であれば、王の命令には従わないわけにはいかない。カミュは軍人として忠実に己の任務を遂行しただけなのだ。

だから許されるというわけではないが、最初の頃のように憎みきれなくなったのもまた純然たる事実であった。

(…いずれ、貴方とも戦わなければいけないのでしようね)

その、決して遠くない未来に確実に起こるであろう現実に胸を押し潰されそうになり、ニーナは顔色を曇らせて嘆息した。そしてもう一人、

「ん？」

その人物のことを考えようとしたところで不意に誰かの声が聞こえ、ビツクリしてニーナは思わず声のした方に顔を向けた。

(!!)

そして、そこにいた人物に思わず声を上げそうになってしまったのを、何とかニーナが堪えて言葉を飲み込んだ。が、

「そう驚くな…」

現れた人物はそんなニーナのことが手に取るようにわかったのか、いつものように咽喉の奥でクククと笑った。そして、ゆっくりとニーナに近づいてくる。

「が、ガレス…」

「久しぶりだな」

現れた人物…黒騎士ガレスに思わずニーナが唾を飲んだ。

(何て間の悪い…)

いや、この場合は間の良いかもしれないが。とにかくニーナがガレスのことに思いを

馳せようとした直前に、その人物が現れたのだ。驚かないわけはなかった。だが、ガレスはニーナがそんな状態であったなどとはもちろん知るわけもない。鎧を鳴らしながらニーナに近づき、隣まで来るとパレスを臨んだ。

「あれが、お前の城のアカネイア・パレスか」

「え？ え、ええ…」

おつかなびつくりと言った感じでニーナが答えたが、確かにニーナは驚いている。それは、タイミングよくこの場にガレスが現れたことともう一つ、

「どうしてここに？」

その理由だった。

「どういう意味だ？」

文字通り意味がわからず、ガレスがニーナに尋ね返す。

「今は、全軍パレス攻略のための準備中だったはず。それなのに、こんなところで油を売っていいのですか？」

「ああ…」

ニーナが何を言いたいのかわかり、ガレスが納得したように頷いた。

「そういう意味か」

「ええ」



「クク…簡単なことだ」

いつものようにガレスが咽喉の奥で笑った。

「え？」

「ハブられた。ただそれだけのことだ」

「え…？」

ガレスの返答に、最初ニーナはその言葉の意味がわからずに呆然と返すことしかできなかつた。

そんなニーナが滑稽だったのか、再び咽喉の奥で笑いながらガレスが続ける。

「他の連中の俺に対する恐怖は余程根深いらしい。仕事が何も回されなかつたのでな。暇を持て余してブラブラしていたら、お前の姿を見つけて声をかけただけだ」

「まあ…！」

ガレスの事情説明にニーナは最初驚き、そしてムツとした表情を見せた。そんな真似をするなんて…という義憤があるのだろう。だが当のガレスはと言うと、

（面倒ごとに関わらずに済むのは実にありがたい）

と思っていたので、実際は願ったりかなったりだった。

「そんなことをするなんて…」

ニーナは腹の虫が収まらないようだが、それを宥めたのは当然ガレスだった。

「おい、余計な真似はするなよ」

「え？」

再びガレスの言っていることの意味がわからず、ニーナが首を傾げた。

「お前のことだ、マルスに直談判…あるいは強権を使って命令するかもしれんが」  
「迷惑なのですか？」

思わずニーナが尋ねた。まさかそんな反応をするとは思わなかったからだろう。しかし、

「ああ」

ガレスはいともアツサリと首を縦に振った。

「そんな…」

ガレスの言ったことが素直に信じられず、ニーナは呆然と呟く。そんなニーナを尻目に、またガレスが咽喉の奥で笑った。

「細々とした面倒ごとに関わらずに済んでいるから、俺としては非常にありがたい。だから、このままで一向に構わん。故に、今言ったように余計な真似はするなよ？」

「……」

ニーナが口を噤んでしまう。本来なら許されるような事態ではないが、本人が望んでいるとあればどうしようもない。現状を黙認するほかはなかった。それに、ハブられて

いることをやせ我慢して強がっているようにも思えない。

(まあ、そんな貴方もできれば見てみたいですけどね)

思わず想像して、ニーナがクスツと笑った。

「あそこには……」

そんな中、パレスを見据えながらニーナの隣に立ったガレスが呟いた。

「え？」

「あそこには、まだ相当数の敵がいるのだろうか？」

「え？ え、ええ。恐らくは」

パレスから敵が逃げ出したという報告は受けていない。と言うことは、パレス内部にはまだかなりの敵がいて籠城の構えを見せ、こちらを迎え撃つつもりなのだろう。

「そうか。クク……」

それを聞いて、ガレスがいつものように咽喉の奥で笑った。

「何が可笑しいのです？」

「クク、笑いたくもなるさ……」

尋ねてきたニーナにガレスが楽しげな様子を隠そうともせずには答えた。

「前の戦いでは後ろに回されたからな。今回は城内戦なら俺にもお呼びがかかるだろう。たっぷり楽しませてもらおうか……」

(！)

そのガレスの姿にニーナは息を呑み、背筋が寒くなかった。この場面だけ見れば成程、まだ恐怖を抱かれるのもハブラれるのもわかる。だが、

(決して、それだけの人ではないのですけれど……)

事実、成り行きとは言え助けられている以上、ニーナはそれをよく知っていた。ガレスが歩み寄ろうという気がないのだから仕方ないが、なぜそこまで頑ななのかという疑問は残る。

(…けど、他の人たちが知らないこの人の一面を私が知っているというのは悪い気分ではないですけどね)

そんな、ともすれば惚気にもなりそうなことを考えながら、ニーナはガレスに話しかけた。

「ガレス」

「何だ？」

「もし貴方がパレス攻略戦に出るのでしたら、一つ頼みを聞いていただけませんか？」

「頼みだと？」

ニーナがこんなことを言ってくるとは思わず、ガレスはフルヘルムの下で眉を顰めた。

「ええ」

だがニーナは気にするでもなく、頷いて答える。

「…内容によるが」

ガレスが答えた。事実、そうとしか答えようがないので仕方ないが。

「そうですね。頼みというのは、捕虜のことです」

「捕虜だと？」

「ええ」

ニーナが再び頷いて答えた。

「パレスにはアカネイア聖騎士団…我が国の騎士だったものが捕えられています。今囚われの彼の者たちの規模がどの程度かはわかりませんが、彼ら彼女らを無事に救出してほしいのです」

「そういうことはマルスに言え」

ガレスが少し呆れた様子で答えた。指揮権を持たない、一介の戦闘員であるガレスにそんなことを頼むのはお門違いもいいところだからだ。

「勿論、作戦前にマルスには直々に伝えます。ですが、貴方にも直々にお願ひしたので  
す」

「…何故だ？」

ガレスが尋ねた。すると、ニーナがニコツと笑う。

「勿論、貴方のその実力を見込んでのことです」

「…買い被り過ぎだ」

ガレスが少し逡巡した後には答えた。逡巡したのはニーナのあつけらかなとした様子に戸惑ったのと、守れるかどうかかわからない約束を交わしたくなかったからである。

「そうでしょうか？ 私にはそうは思えませんが」

それを見透かすようにふふつとニーナが笑った。そんなニーナに、

「…まあ、やれるだけはやってやる」

そう答えると、ガレスは身を翻してその場を立ち去り始めた。その後ろ姿を、ニーナは黙って見つめていた。

そしてガレスの姿が見えなくなると、再び振り返ってパレスに視線を向ける。柔らかな風がニーナの身体を滑り抜けてその髪を乱す。ニーナは髪のを直すと、時が来るまでパレスへと思いを馳せていた。

決戦の時間まで、後少し。

「ボア様」

パレスの一角にある牢獄。ここに幽閉されている数人の兵士のうち、唯一の女性が口を開いた。

彼女の名はミディア。アカネイアの貴族の出身で、自身も聖騎士の称号を戴いた、アカネイア騎士団でも屈指の騎士である。

彼女は城内の様子がいとも違うことに気付き、同じく牢獄に幽閉されていた一人の司祭：アカネイアの高司祭であるボアに話しかけたのだった。

「この城内の慌ただしさは、一体どうしたのでしょうか」

「うむ…おそらく、ニーナ様が軍を組織し帰ってこられたのだろう」

状況を判断してボアが己の推論を述べた。

「えっ！ 本当ですか!？」

ミディアはその言葉に嬉しいとも安心したともとれる口調と表情で答える。

「なら、私たちは助かるのですね」

「安心はできません、ミディア。こうなった以上、敵も我らを生かしてはおくまい」

ボアが冷静に現状を判断してそう指摘する。

「そうなったとき、武器を持たぬ我らは抵抗する術はない」

「ですがボア様、これでやつとアカネイアから敵を追い出すことができますのです。それを思えば、例えここで果てようと悔いることはありません」

「ふふ…相変わらず気の強いことじゃな」

強がりではなく、本心からそう言っているミディアにボアの表情が柔らかくなった。だが、すぐにその柔らかくなった表情を引き締める。

「しかし、お前が死ねばアストリアは悲しむぞ」

その一言に、ミディアの顔色が曇った。

「…私も、あの人だけにはもう一度お会いしたかった。それだけが心残りです」

「その想いを叶えるためにも最後まで頑張るのじゃ。決して、諦めてはならぬぞ」

「はい！」

力強く答えたミディア。それに呼応するかのようには、他の幽閉された兵士たちも立ち上がったのだった。

「よし、入り口は確保したな！ 全軍、前進！」

『はいっ！』

パレス入り口付近。緒戦をものにした解放軍は制圧したその場を足掛かりに、ジリジリとパレス内部へと兵を進めていた。

流石にここを落とされるのはドルーアにとっても一大事なのだろう、質・量ともにパ



レス城外の敵と遜色ないほどの敵部隊が配備されている。そのため、気の抜けない一進一退の攻防が続いていた。

「くっ！ まずいな…」

あまり多くの進展が望めない状況に、必死で指揮をしながらもマルスが焦れたように呟いた。情勢的には一進一退といえどもこちらがやや有利であることには違いない。では、何がマルスを焦らせているかと言うと、作戦前に二ーナに頼まれた捕虜のことだった。

既に大規模な軍事衝突に移っている以上、敵の手が捕虜に及ぶのも時間の問題だろう。そうなればどうなるかは、火を見るよりも明らかだった。

(どうすれば…)

自らも敵を退けながら、打開策を探るためにマルスは冷静に現状を把握した。皆、必死で戦っているが戦力均衡としてはギリギリである。こちらが優勢のため何とか一人ぐらいなら離脱してもどうにかカバーできる状態ではあるのだが、

(でも、一人ぐらいじゃ…)

敵の攻撃に耐えきるのも、敵を殲滅させるのも難しいだろう。ここは多少の犠牲は仕方なしとして、迅速に行軍するのが最善か…そう思ったマルスの視界にガレスが入った。

(……よし！)

少しの間戦いながら逡巡していたマルスだったが、ある覚悟を決める。そして、

「レナ！ ガレス！」

二人を呼んだのだった。

「何だ？」

「はい、マルス様」

ガレスが前線から、レナが後方からマルスの元へと戻ってきた。

「二人に命令を下す。僕の指示に従ってくれ」

そして有無を言わず、マルスは二人にある命令を下したのだった。

「はあ……はあ……はあ……」

一方、ミディアたち牢獄の捕虜はじわじわと騷られていた。それを示すかのようにミディアの呼吸は荒く、身体の各所から血が滲み出ている。

「クソツタレ！」

「イラつく真似しやがって！」

苛々を隠しきれず、トムスとミシエランのアーマーナイトコンビが牢に蹴りを入れた。その少し向こうから矢を番えたアーチャーが、ニヤニヤしながら矢を放つ。

「グウツ！」

「チツ！」

二人が顔を歪めた。アーマーナイトである二人にとつては微々たるダメージにすぎないのでどうということはない。寧ろ、好き勝手に廻り者にされている精神的ダメージが益々イラつきを募らせていた。

「全く……姑息な真似をしてくれるよ」

牢獄の中の捕虜の最後の一人、アーチャーのトーマスが吐き捨てるように呟いた。彼も他の連中と同じく全身に傷を負っている。

「けど、このままじゃ牢の外でニヤついでるあいつらのオモチャにされて終わりか……」

「クソツッ！ 益々イラつくぜ！」

「こんなもんなけりや、首根っこへし折ってやるのによ！」

トムスが何とか鉄格子を破壊しようとして試みるものの、流石にアカネイアの王都であったパレスの牢獄と言うべきか、非常に頑丈に作られておりビクともしない。それを見物するドルーア兵は、決して近づかず、遠巻きにその様子をニヤニヤと眺めていた。

「せめて、武器があればな……」

叶わぬ願いだと思いつつもトーマスが呟いたそのことは、全員が抱いている感想であった。だが現実問題、捕虜が武器を持たされたまま投獄されることなどあるわけもな

い。

「ここまでなの…かしらね…」

絶望的な状況に思わずミディアが口走ってしまった。と、

「諦めるな、ミディア」

ボアが叱咤する。

「ボア様…」

「今までは決して手を出さなかつたこやつらが急に我々に攻撃してきたのは、それこそニーナ様が戻られた何よりの証拠。救援は必ず来る。それまでの辛抱じゃ」

「わかつています。しかし…」

それまで自分たちがもつのだろうか…？ そんなよからぬ予想は、現実のものになつてしまう。

「ぐあつー！」

すぐ近くで悲鳴が上がリ、そして何か倒れ込んだ音がした。慌ててミディアたちが振り返ると、そこには地に伏しているトーマスの姿があつた。

「トーマス！」

慌ててミディアたちが近づくと、トーマスの身体の所々が燻っているのに気付く。

「これは…」

ボアが顔を上げると、そこには予想通りの敵兵の姿があった。

「魔道士……」

ミディアもその敵兵の姿を見て呟く。トーマスの身体が所々燻っていたのは、魔法による攻撃を受けたからだだった。

「前門の虎、後門の狼つてわけかい……」

忌々し気な表情と口調のまま、トムスが呟いた。

「物理攻撃なら屁でもねえが、魔法は俺たちには少し荷が重いぜ……」

ミシエランも苦々しい表情になって気絶しているトーマスを敵の攻撃の届かない場所へ運んで行った。と、お遊びは終わりだとしても言うのだろうか、敵兵が一斉に矢を番え、魔法の詠唱に入つてミディアたちに狙いを定めた。

「ッ……」

ミディアが唇を噛んで悔しそうに牢の向こうの敵兵たちを睨む。ニヤニヤした表情が更に怒りを増幅させるが、この状況では何もできない。そして、無慈悲なその攻撃がミディアたちの生命を奪おうとした時、不意に真横から高速で何かが飛んできた。そして、その何かが一人のアーチャーを弾き飛ばす。

「ぎゃあっ……」

悲鳴を上げたアーチャーは身体が真っ二つになって吹っ飛び、派手に血飛沫を撒き散

わしてそのまま絶命した。

「?!?!」

何が起こったのかわからずに驚いて固まってしまいうミディアたち。

「おい、どうかしたのか…?」

気を失っていたトーマスがよろよろとよろけながら起き上がってきてミディアたちに尋ねたが、思わず目にしたその敵兵の姿に同じく固まってしまった。

「救援か!」

一番最初に再起動したボアが事態を把握しようとするその何か飛んできた方向に目を向ける。この辺りは流石に年の功と言うべきだろうか。その一言に呪縛が解けたかのようになったミディアたちも同じく首を横に向けた。と、そこには全身を漆黒の鎧で包んだ重騎士…ガレスの姿があった。

「フン」

ガレスはつまらなそうに鼻を鳴らす。先ほどアーチャーに向かって投げた、己の得物であるサタンブローバーが鮮血を滴らせながら壁に刺さっていた。

「貴様、何者!」

敵兵がガレスに警戒しながら鋭い視線を向けた。

「クク…」

対してガレスは、いつものように嘲るように咽喉の奥で笑った。

「貴様らを始末しにきたのさ」

そして力みも気負いもせず、そう答える。

「くっ！」

敵兵たちは一瞬で味方の生命を奪ったガレスの強さと、底知れない恐ろしさに恐怖を抱きながら対峙する。そんな突然の出来事に、牢内のミディアたちは相変わらず、何も出来ずに固まって成り行きを見ているしかなかった。

「ふざけやがって！」

「武器も持たないくせに大口を叩くな！」

敵兵たちが殺気を漲らせながら威嚇した。敵兵たちにとっては数的有利とガレスが得物を持っていないという点もあり、雰囲気は呑まれかけてはいたものの自分たちの優勢は疑っていないかった。が、

「ククク…」

威嚇しても怯むどころか、全く動揺していない…それどころか楽しそうに笑うその姿に、恐ろしさの底が更に知れなくなった敵兵は動揺と恐怖を抱き始めていた。

（何なんだよ、コイツは！）

目の前の、死神や悪魔を具現化したような存在に遂に耐え切れなくなり、敵兵がタイ

ミングを合わせて一斉に攻撃を仕掛ける。だが、恐怖で切っ先が鈍っていたこともあり、ガレスは難なくその攻撃をかわすかあるいは受け止めていた。

「つまらんな…」

そして、ガレスが吐き捨てる。

「何だと!」

その言葉にカツとなった敵兵たちが再度ガレスに攻撃をしようとする狙いを定めた。だが、今度はガレスも黙ってはいなかった。

「貴様らなど、弄ぶにも値せん。互いに殺し合つてろ!」

最後の方は怒気すら孕ませながら無手のまま、まるでサタンブローバーを持っているかのように構えた。そして、

「チャーム!」

いつものように、サタンブローバーを振り上げるかの如く下から上へと腕を振り上げる。と、その瞬間、敵兵たちは互いに互いを攻撃しあつた。

「え!? え!? え!?!」

いきなり同士討ちを始めた敵兵たちを呆然とミディアが見つめている。

「な、何だこりや!?!」

「おい、どうなってるんだよ!」



トムスやミシエランも同じように唾然としていた。そんな中、同士討ちしている敵兵を無視してガレスはサタンブローバーの許へ向かい、壁に突き刺さった己の得物を引っこ抜いた。

（投擲斧ではないから、投げると一々回収に行かなければならんのは面倒だな。かと言つて、魔力でどうこうできる問題ではないから、仕方ないが…）

そんなことを考えながら得物を手にしたガレスが振り返ると、そこには物言わぬ屍だけが転がっている状況に既になっていた。

「…身の程知らずどもが」

忌々し気に吐き捨てると、ガレスは足元に転がっていた死体に振り返りもせず、ミディアたちの許へと近づいた。

「お前たち、アカネイア騎士団の捕虜だな」

「え、ええ」

代表してミディアが気後れしながらも答える。

「結構」

ミディアの返答を聞いたガレスが頷いた。

「そのうち救援が来る。それまでそこで大人しくしている」

それだけ言うと、ガレスは身を翻す。

「おい、開けてくれないのか？」

トーマスがその背中にそう言っただけで呼び止めた。

「生憎俺は盗賊じゃないんでな。鍵も持っていない。だから、それができる奴らが来るまで大人しくしてるんだな」

「では、何故貴方はここに？」

ミディアが尋ねると、

「只の露払いだ」

それだけ答え、ガレスはゆっくりとその場を後にしたのだった。

「よし」

ジュリアンが顔を綻ばせながらパチンと指を鳴らした。そして、牢の扉をゆっくりと開ける。

「やれやれ…」

「助かったぜ」

「ありがとう」

先陣とばかりに出てきたトーマス、トムス、ミシエランの三人がジュリアンに礼を言った。

「いやあ、何の何の」

照れくさそうにジュリアンが鼻を擦る。そして、その後ろからひよこつとレナが顔を覗かせた。

「重傷を負っている方はいらっしやいますか？」

「トーマス、見てもらえ」

続けて出てきたボアがそう促した。

「いや、でも……」

「さっき魔法を喰らっていたじゃろう？ 間違いなく、この中ではお前が一番重症のは

ずじゃ」

「ああ」

「そうだな」

トムスとミシエランもボアの意見に追随する。

「ん、わかった」

三人に促され、トーマスも大人しく従った。一度は逡巡したものの、確かに自分が一番深手なのはわかっていただけからだ。レナが慌ててトーマスにライブをかける。

「大丈夫かい？」

そこに顔を出したのはお付きの兵を数名従えたマルスだった。

「貴方は？」

最後に牢から出てきたミディアが尋ねた。

「僕はマルスだ」

「！ 貴方がアリティアの！ これは失礼いたしました！」

ミディアを始め、五人が一齐に叩頭した。

「この度は我らを助けていただき、感謝いたします」

「そんなに畏まらなくていいよ。頭を上げてくれ」

「しかし…」

「いいから。それじゃあ、話もできないだろう？」

「はい。では」

マルスに促され、ミディアたちは一齐に頭を上げた。

「怪我は？」

「掠り傷です。御心配いただくほどのものではありません」

「そうか。よかったよ」

ミディアの返答を聞いて、マルスがホツとした表情になって胸を撫で下ろした。

「君たちのことはニーナ様からも頼まれていたからね」

「恥ずべきことです。臣下の身でありながら、ニーナ様にご心配をかけてしまいました」

ミディアの言ったことは他の四人にも通ずることだった。全員、複雑な表情になって項垂れてしまう。

「いや、ニーナ様はそのようなことは思ってはおられない。君たちの無事だけを祈っていた」

「そうですか。身に余る光栄です」

「後でお逢いになるといい」

「はい」

ミディアが力強く頷いた。

「しかし君たちが、多少の傷は負っているといえども全員無事なのは、ガレスが間に合ってくれたおかげだろうね」

「！ それは、禍々しい両刃の斧を持った漆黒の重騎士のことですか？」

ボアがマルスに尋ねる。

「うん。…まあ、この惨状を見ればガレスが間に合ったのは容易に推察できるけどね」

少し離れた場所が血の海になっている状況を見て、マルスが困ったものだった表情をした。

「やはり、ワープで先行させたのは正解だったみたいだね」

そして、一人呟く。先ほど入り口付近の戦いでレナとガレスを呼び寄せたのはこのた

めだったのだ。人質の救助のために、一騎当千の兵であるガレスを先行してミディアたちの許にワープさせたのである。その判断は間違いでなかった。

…その代わり、こういった凄惨な場面を作ることになるのだが、それは必要経費である。ガレスを用いるのならばこうなるのは仕方のないことであつた。と、

「あの…マルス王子」

おずおずとミディアが口を開いた。

「うん？ 君は？」

「申し遅れました。私はアカネイアの聖騎士の一人、ミディアと申します」

「そうか。で、ミディア、なんだい？」

「はい。単刀直入にお尋ねします」

「うん」

「あの漆黒の重騎士、一体何者なんです？」

「そのことか…」

マルスがどう説明したらいいものかと戸惑つた。素直に事情を話せばいいのだが、内容が内容だけにすぐに信じてもらえるとは思えない。かと言って、適当なことを言うわけにもいかない。そのため、

「すまないが、それは本人に直接聞いてくれるかな？」

ガレスにぶん投げることにした。

「え…しかし…」

ミディアの表情が曇る。何しろ、ガレスの恐ろしき、異様さはつい先ほどまざまざと見せつけられたのだ。尻込みするのも当然と言えた。

「ミディア、君の気持ちはわかるよ。でも、ガレスは話のわからない男じゃない。普通に聞けばちゃんと答えてくれるさ」

「でしたら、ここで教えてくださっても…」

「そうも言えない事情があるんだよ」

マルスが振り返ると、レナやジュリアン、他の者も苦笑しながら頷いた。その姿に、ミディアのみならず他の四人も首を傾げるしかなかったのだった。

「取りあえず、話はここまでだ。後はパレスを奪還してから。君たちは今は避難した方が良い」

「いえ、我々も戦います」

ミディアが答え、ボアたち四人も頷いた。

「ここは我らの城。取り戻すのならば、我らも働きたいのです」

「そうか。では、宜しく頼む」

「はい！」

力強くミディアが頷き、五人は前線へと走っていった。こうしてまた、解放軍は心強い味方を迎え入れるようになったのである。

その頃には城内での戦闘も大分趨勢が傾いていた。残敵はまず玉座付近の敵将。こちらには、主力が向かって攻防を繰り返している。そして、

「ククク…」

ガレスがサタンブローバーを構えながら楽しそうに笑っていた。その眼前には、威嚇するかのようによく咆哮を上げる火竜が一体。この火竜が、玉座付近以外に残っている唯一の敵だった。そしてガレスは、この獲物を貰い受けたのである。その周りには、回復役であるマリアや、後方支援任務の面々が遠巻きにその様子を見守っていた。

「あれは、火竜！」

そこに、先ほど新たに戦列に加わったミディアたちが合流した。

「おい、あれって…」

「ああ、間違いねえ…」

トムスとミシエランがガレスの姿を見てお互いに顔を見合わせた。

「おい、加勢しなくていいのによー！」

一対一の構図に思わずトーマスが叫んで、アカネイア騎士団の面々が加勢しようとする



る。が、

「余計なこととはしない方が良いでしょう」

そんな五人をゴードンが止めた。

「余計なことって!?!」

焦れたようにミディアがゴードンをキツと睨む。だが、

「見てればわかります」

ゴードンはそれだけ答え、それ以上は何も言わなかった。そのため、ミディアが詰め寄ろうとしたが、その前に戦局が動き出した。火竜がブレスを吐いてきたのだ。

「!」

動き出した戦局に遅かったかと悔やんだミディアたち。だが、

「遅い」

ガレスはこともなげにそう言うのと、難なくそのブレスをかわした。そして、

「デスクラウド!」

かわしぎまに魔法を唱える。床下からガスが噴き出し、火竜を包んだ。そのガスに包まれた火竜が、苦しそうに雄たけびを上げた。

「な、何、あれ?」

「魔法か?」

「でも、あんな魔法、見たことねえぞ……」

「ボア様」

「むう、儂も知らんな……」

アカネイアの高司祭であるボアも知らない魔法ということに、ミディアたちが驚く。もつとも、ガレスの使った魔法はこの世界の魔法ではないので当然ではあるが。

「ククク、そらー!」

一方、ギャラリーがそんな状態になっているなどは露知らず（知ってても気にはしないだろうが）、ガレスはデスクラウドでダメージを追った火竜をサタンブローバーでぶった斬る。デスクラウドのダメージに加え斬撃を浴びたことで怒り狂った火竜が滅茶苦茶に暴れ出した。

「うおっ!」

「きゃっ!」

振動で揺れる床や、頭上から落下してくる瓦礫に後方支援部隊が苦慮する中、その震源というか発生元である火竜は苦しみながらもガレスにターゲットを定める。そして、再びブレスを吐き出した。そのブレスが今度はガレスに命中し、その身を業火が包んだ。

「ガレス!」

「ガレスさん！」

マリアとゴードンが悲鳴を上げ、他の者も信じられないといった表情になっている。だが、

「ククク……」

何処からともなく、何時もの咽喉の奥で笑う笑い声が聞こえてきた。しかし、声はすれども姿は見えず。何処だと解放軍の面々が探していたが、直後、

「死ね」

という、無慈悲な宣告と共に轟音が響き渡った。

「ヒッ……」

その轟音に何人かは思わず身を竦ませていたが、直後、火竜の動きが止まる。そしてその長い首が切断され、轟音と共に床に落ちたのだった。少し経ち、土煙が晴れたその場所には火竜の返り血を浴びながら仁王立ちしているガレスの姿があった。

『……』

はじめてその姿を目にするアカネイア騎士団の五人はその恐ろしさに思わず固まってしまう。

「ガレス……」

対称的に、マリアがガレスに慌てて近寄るとライブをかけた。他、ゴードンを始めと

する数名がガレスの許に向かい、残りの者は遅ればせながら前線へ向かったり、ミディアたちの許へ向かったマルスを出迎えていた。

「おお、マルス王子」

「やあ、リフ。どうだい、戦況は？」

「本隊については玉座周辺まで攻め上っていますから、そろそろ決着がつくでしょう。残敵もあらかた掃討し、大物は……これあの通り」

リフがガレスに腕を向けた。その傍らで物言わなくなった死骸と化した火竜の姿を見て、

「成る程ね」

と、マルスが苦笑しながら納得したのであった。ガレスの様子を未だ呆然とした表情で見ているミディアたちを尻目に、マルスがリフに伝える。

「僕はこのまま玉座へと向かう。皆は周囲の状況を確認しながら合流するように伝えてくれ」

「畏まりました」

恭しく礼をするリフに見送られ、マルスが玉座へと向かった。こうしてパレス奪還作戦は新たな仲間と、そして新たな不協和音をもたらしつつも解放軍の勝利という形で幕を下ろしたのであった。

## NO. 11 生まれるのは火種か協調か

遂にパレスを奪還した解放軍は、その勢いのままにアカネイアの旧領を再び取り戻していった。

だがアカネイアの西方地方に、頑としてアカネイアへの復帰を拒み続ける元アカネイアの騎士が治める地があった。その騎士の名はホルスといい、アカネイアが瓦解する前は忠義の厚い騎士の誉高かった人物である。

そんなホルスが、アカネイアが再興しても尚旧領に服するのを拒み続けていた。ホルスの人となりを知っていたニーナはその事実を信じられないものの、ドルーアへと攻め込むためにそのままにはしておけず、ホルスを討伐する命を下したのであった。

「ホルスよ」

アカネイアの軍……つまり、元々の自国の国軍を迎え撃つことになったホルスの許に、軍監としてドルーアから派遣されているデジャニラが赴いてきた。

「反乱軍が首都パレスを奪い取ったらしいな」

「…ああ」

対してホルスは抑揚のない返事を返す。その様は、無理に感情を押し殺しているように見えた。

「あの忌々しいアカネイアの小娘め…」

対してデジャニラは不機嫌さを隠すこともなくそう吐き捨てる。

「やはり、生かしておくべきではなかったわ。グルニアのカミュが何と言おうとな」

「……」

ホルスはデジャニラの暴言に何も反応しない。それに気付いたデジャニラが不機嫌そうにホルスをねめつけた。

「ん？ どうした、ホルス。まさか祖国に戻れる…などとは考えていまいな？」

ホルスは何も答えないが、デジャニラは構わず先を続ける。

「もし、そなたが裏切れば、この地に住まうそなたの領民どもがどうなるか…」

「わかってている！」

それ以上は聞くまでもないとばかりに、ホルスがデジャニラを怒鳴りつけた。

「もはや私はアカネイアの騎士ではない。ドルーアに降った日から、この時が来るのを覚悟していた」

「それでよい」

ホルスの返答を聞いたデジャニラは満足げに頷いた。

「ならば兵を率い反乱軍を討つのだ。そなたの大切な民のためにな…」

それだけ言い終わると、デジャニラは城を守備すべく戻っていった。

「…出陣！」

デジャニラが遙か遠くへ行つたのを確認した後、ホルスは部下たちにそう命じた。端正なその顔立ちは感情を読み取らせなかったが、それでも少しだけ苦渋に満ちた表情をかたどっていたのだった。

マルス率いる解放軍は戦いを有利に進めている。ホルスの兵は決して弱卒というわけでも練度が低いわけでもない。しかしここまで数々の戦いを乗り越えてきた解放軍と、アカネイア陥落後は精々が反乱分子の鎮圧程度の任務しかしてこなかったホルスの軍では結果は明らかだった。解放軍は終始優勢に戦いを進めていく。

「…つまらん戦だ」

その様子を、後方部隊のガレスが眺めながら呟いていた。今回は大規模戦闘にはならないだろうということと、どちらかといえば開けた地形での戦いということで主力は騎馬や飛行部隊だった。ということと、ガレスは今回はお留守番なのである。

そして後方から戦況を見ていて、ガレスは心底今回の戦いに参加しなくてよかったと

思っていた。

（あんなつまらん戦では、鬱憤が溜まるだけだ。後ろでのんびりしている方が余程マシだな）

前線に出て戦ってる人間が知ったら激怒しそうな感想を思い浮かべながら、ガレスはその場を後にした。相変わらず、周囲は後方部隊なりの仕事を行っているが、ガレスはそれを手伝う素振りもない。

…と言っても、周囲もガレスに仕事を割り振るつもりはないのでおあいこではあるが。

（さて…どうするか…）

暇を持て余したガレスが腕を組んで考える。知り合い…というか、多少なりとも親交のある連中はここには誰もいなかった。

ゴードンとバナトウ、ミネルバは出陣しており、マリアは負傷兵の看護。アテナは他の剣士連中と手合わせをしているという状況である。

（…少し休むか）

あの戦況では、遅かれ早かれ決着はつくだろう。ならば、それまでのんびりさせてもらおうというのがガレスの出した結論だった。マルスもガレスが、戦闘時とはもかくそれ以外の時は常軌を逸した行動をしているわけではないので、その行動に制約をかけて



はいなかった。

そのため、自分の天幕へと戻ろうと歩を進めようとしたガレスだったが、

「待ちなさい」

思いもしない足を止める声に、驚いて素直に従ってしまった。

(ん?)

誰だと思つて声のした方を振り返ると、そこには見慣れない女騎士が一人。

(この女は…)

見慣れはしなないが見覚えのある顔である。誰だったかを思い出そうとしたガレスだったが、意外とすぐに思い出せた。

「お前、確かパレスの捕虜の一人だったな」

「ええ、ミディアよ」

そして彼女…ミディアがゆっくりとガレスに近づいてきた。

「…ガレスだ」

相手が名乗つたので、当然の礼儀としてガレスも自分の名を名乗つた。

「聞いているわ、マルス王子から」

「ほう?」

それはそれとは思いながらガレスが頷いた。ミディアはガレスから少し距離を置い

て止まる。

「…それで？ 何の用だ？」

自分の目の前に立っているミディアの表情から、警戒心アリアリなのが読み取れ、思わず笑ってしまいそうになるのを堪えながらガレスが尋ねた。

「え、ええ。一応、助けてくれたお礼をしておこうかと…」

そう言ったものの、所在なさげといった感じでミディアは落ち着きなくしている。その様子に、ガレスは思わずからかいたくなくなった。

「ククク…そう怖がるな」

なので、挑発するように笑いながらミディアに話しかける。

「別に、取って食ったりはせんから安心しろ」

「こ、怖がつてなんか…」

ミディアが若干しどろもどろになりながらそう反論した。しかし、相変わらず所在なさげにしている上に目が泳いでいるとあっては説得力はない。

「まあ心配するな。取って食いもしないが、押し倒して無理やり犯すような真似もせんからな」

「なッ！」

赤裸々な物言いに、ミディアが顔を赤らめる。だがすぐに、その表情は怒りへと変

わった。

「無礼者！」

そして咎める。あまりの声の大きさと鋭さに、周囲の人間もビツクリして止まってしまい、珍しいものを見るようにミディアとガレスに交互に視線を向けていた。

「あ……」

思わず我を忘れて叫んでしまい、周囲の耳目を集めてしまったことにミディアが居た堪れない表情になった。

「ククク……」

対してガレスはどこ吹く風といった感じで、いつもの様子からまるで変わったところがない。

「それで？」

「え？」

言っている意味がわからず、ミディアが思わず聞き返した。

「用件はそれだけか？」

「え、ええ……」

口籠もりながらもミディアがそう答える。

「そうか。だったら、謝意は受け取った。さっさと戻れ」

「なッ!」

その、あまりに無礼な物言いにまたミディアが怒りに震える。

「何て無礼な…!」

「クク…そう怒るな」

「怒るに決まっているでしょう!」

「そう言うな。お前のためでもあるのだからな」

「…どういう意味?」

まだ納得はしていないのだろうが、ガレスに今の返答の意味を尋ねる。

「お前は聖騎士だったな?」

「ええ」

「なら、頭もそれなりに聡いのだろうか? だったら、俺が他の連中にどういう態度で臨ま

れているか、何となくでもわかるはずだ」

「それは…確かにそうだけど…」

ミディアが少し言い淀む。救出されて間もないが、確かにガレスが周りから腫物の様に扱われているのは理解できていた。本人は気にしていない様子だが、それでもそれを面と向かってハッキリ言えるほどミディアは他人を慮ることのできない女性ではなかった。

「そんな俺と一緒に居たら、お前までいらん誤解を受ける。だからさっさと戻れ。まだ新参なのだから、余計な厄介ごとに首を突っ込みたくないだろう」

「…わかったわ」

少しの間逡巡していたミディアだったが、やがて口を開いた。鬱屈した思いはあるが、本人がこう言っている以上はどうしようもない。ここは素直に従うしかなかった。

「では、私は戻ります。それと…」

「ん？」

「オレルアンでかどわかされそうだったニーナ様を助けてくださったそうですね？」

「ほお…誰に聞いた」

まさかそんなことを知っているとは思わず、興味本位でガレスがミディアに尋ねた。

「ニーナ様ご本人から。それもあって、その件も含めてこうしてやってきたのですが」

「クク…律儀なことだ。だが、あれは只の成り行きだ。別にあいつだから助けたわけではないし、そもそもあいつがああの場合にいたのも勿論知らなかった。全ては単なる偶然的の副産物だ」

「それでも、ニーナ様が貴方に助けられたのは事実です。ですから、お礼を言わせてくだ

さい」

「わかったわかった。気持ちには十分受け取った。だからさっさと戻れ」

流石に鬱陶しくなったのか、ガレスが手をヒラヒラと振ってミディアに戻るよう促した。その扱いに三度ムツとしたミディアだったが、これで義理は果たしたとばかりに軽く叩頭してその場を立ち去ったのだった。

「まったく、律儀な女だ」

その律義さに可笑しくなり、ガレスがいつものように咽喉の奥で笑った。そうこうしているうちに、戦いは最終局面に入ったようだった。

「問題はないようだな」

現在の彼我の戦力差を確認すると、もはや負けることはないだろう。そう判断したガレスは自身の天幕へ戻るために身を翻したのだった。

程なくして敵将のデジャニラは討たれ、そしてホルスは降伏した。そしてその身柄は

：

「いいえ、それはなりません」

戦闘後に降伏し、裏切り者であるために死を望んだホルスだったが、ニーナはそれを許さなかった。

「!! ニーナ様…」

顔向けできないかつての主君に、ホルスは合わせる顔がなく苦虫を噛み潰したような

表情で顔を背けた。

「久しぶりですね、ホルス」

「はっ…」

かつての主従が立場を違えて再び相見える。

「話は聞きました」

「……」

ニーナのその一言にもホルスは無言を貫いた。何を言っても言い訳になってしまうという思いもあるのかもしれない。

「貴方の言うように、アカネイア騎士の名を汚した罪は万死に値…いえ、それ以上です」  
「仰る通りです。返す言葉もございません」

ホルスは肅々とニーナのその叱責を受け入れた。

「ニーナ様、何を…」

思わずマルスが間に入ろうとしたが、ニーナに目で制されてそれ以上立ち入ることはできなかった。

マルスが自分の意を汲んでくれたことを理解すると、ニーナはそのままその先を続ける。  
「ですから、貴方には騎士らしい死など授けません。生きて汚名をそそぐのです」

「!! なんと……私に生きよ、と?」

「その通りです」

ニーナが首肯した。

「貴方は、民を守るために出来るかぎりのことをした。それは誇るべきことです。ですが、ここで死んではただ裏切り者としての名を残してしまう。それは、貴方に従う部下たちも裏切り者の汚名を着たままといふことです。それでもいいのですか?」

理を説いてニーナがホルスを説得した。

「……それは……」

ニーナの言い分は間違つてはいないため、ホルスが戸惑いを見せた。逡巡していることがありありとわかる。

「これからの行いで、貴方が間違つていなかっただけを示すのです。それでこそ貴方を信じて従い、不幸にも散つていった者たちも浮かばれる……。裏切りを行った価値が本当にあったと言えるものではありませんか?」

「ニーナ様……」

「生きて、共に戦つてください。私たちと共に。死ぬことは許しません、いいですね?」

ホルス」

「ここで、勝負はついた。かつての主君にここまで言われては、ホルスも断る術を持ち



合わせていなかったのである。

「…はい。ニーナ様の、御心のままに……」

こうしてホルスは解放軍に降った。解放軍はまた一人、大きな力を迎え入れたのだつた。

「無事に終わったようだな…」

天幕の中で椅子に座って休んでいたガレスが一人呟く。ここでの勝利と、敵将の一人であるアカネイアの旧臣、ホルスが無事に仲間になったことも、後陣に伝えられてきていた。

「戦力が増えることは喜ばしいことだが…」

しかし…とも、ガレスは思っていた。

(パレスを落としたことによつて、この世界での宗主国であるアカネイアの旧臣どももが  
続々と加入してきている)

それは解放軍にとつては痛し痒しではないかとガレスは思っていた。

(ここまで解放軍を主導してきたのはマルスのアリティア軍とハーデインのオレルアン  
軍だ。それがここにきて、アカネイアの勢力が急激に増している)

(いかに宗主国とは言え、解放軍にとつては新参だ。幸い、今まで加わったアカネイアの

連中は良識のある奴らばかりだからまだいいが、そこを勘違いして凶に乗る連中が出てこなければいいが…)

「この先、一波乱、二波乱あるかもしれないな。何もなければいいのだが…」

そんなことを呟き、そして自分が柄にもないことを呟いてるのに気づいたガレスが自嘲した。

「ククク、俺らしくもない。…だが、悪くはない」

己に確実に起きている変化を感じながら、ガレスは立ち上がると天幕を後にしたのだった。

## NO. 12 種火は燻る

パレスを取り戻し、ホルスタチアカネイアの旧臣たちをも迎え入れることに成功した解放軍は、遂にアカネイア全域を解放した。これまでの苦勞が報われたことにむせび泣く者も多数出た中、パレスにてアカネイア解放の宴が催されることになった。

「ふむ…」

天幕にて姿見で己の姿をチェックしたガレスが軽く頷いた。

「まあ、こんなものだろう…」

急ごしらえの仕立てにしてはそれなりに格好のついた礼服に、ガレスはそう思っていた。今ガレスはいつもの漆黒の鎧ではなく、フォーマルな場の正装ともいえる礼服に身を包んでいた。手配したのは勿論ニーナではなく、マルスであった。

オレルアン城での宴の一件で、マルスはガレスに公式の場で着ていくような正装を宛がうことの重要さを知った。あの時は、鎧しかないガレスが断つたのだが、ニーナの是非にという願いでそのまま甲冑姿で参加したのである。

乾杯だけ済ませてすぐにガレスは退散したものの、当然場の雰囲気はぶち壊しになり、暫くの間ギクシヤクとした空気が流れたのはマルスも良く覚えていた。だが、起こってしまったことは仕方ない。大切なのは次である。そのため、二度とああいう雰囲気にならないようにマルスは手を打った。

一番手っ取り早いのはガレスをああいう公式の宴に出席させないことである。ガレス自身も堅苦しく思っているため双方の思惑は一致して願ったり叶ったりなのだが、何せ危ないところを救ったことがあつてニーナはガレスにご執心なのだ。それこそ、ハーデインほどではないがまずいな：とマルスでさえも考えてしまうほどに。

そのニーナのたつての願いとあれば、全軍の総指揮官と言つてもニーナの臣下の身であるマルスには断りようがなかった。そのため、苦肉の策としてせめて格好がつくように礼服を用意したのだ。

パレスを取り戻したのであれば、戦勝の宴はいずれ行われるであろうと思ひ、マルスはパレス解放後にすぐにアカネイアの職人にガレスの礼服を仕立てさせた。マルスにとつて幸運だったのは、パレス陥落後にすぐに宴が開かれたのではなく、アカネイア全士の解放後に開かれることであつた。その分時間が確保できたため、余り余裕はなかつたが、かと言つて無理ないスケジュールでガレスの礼服を仕立てることができたのだつた。

そして今、ガレスはその卸したての礼服に身を包んだということである。そして、それが意味することはただ一つ。

「ガレス」

不意に、天幕の外から名前を呼ばれた。

「ん？」

「レナです。入ってもいいですが？」

「ああ」

「失礼します」

ガレスの了承を得たレナが天幕へと入ってくる。

「マルス様から、用意ができたか見てくるように……と……」

「ああ」

振り返ったガレスの姿に、レナは思わず息を呑んだ。実に様になってるからだ。ワールンでガレスの素顔は見ていたが、今の装いはそれを更に引き立てて凛々しくさせ  
ていた。

「……」

余りの予想だにしない光景に、レナはポーっとしてまじまじとガレスを見てしま  
う。  
と、

「どうした？」

反応が止まってしまったレナに、ガレスが訝しげな表情を向けた。

「！ い、いえ…」

(まさか、見とれてたなんて言えないし…)

己を戒めるように、レナが軽く咳払いをした。

「支度はできているようですね」

「ああ」

「では、私はマルス様にその旨を伝えてきます。ガレス、貴方も早いうちにマルス様の許へ向かってください」

「わかった」

ガレスの返答を聞いたレナがベコリと一礼すると、ガレスの天幕を出て行った。一方で、

(やれやれ…)

ガレスは内心で溜め息をついていた。それは勿論、この後の時間についてのことであつた。

(こういう肩の凝る席は、なるべくなら遠慮したいのが本音だが…)

ゼテギネアの皇子として、社交の場では何度となく場数を踏んだガレスである。別に

気後れしたり緊張しているわけではない。では、何がガレスをゲンナリさせているかというたとだ一つ。

(面倒なことだ……)

それに尽きるのだった。昔のまともだった頃の自分ならまだしも、暗黒道に堕ちた今の自分では(例えば暗黒道の支配下から抜けつつある現状でも)、こういう社交の場は面倒の一言に尽きるのである。できれば遠慮したいというのがガレスの偽らざる本音だった。だが、そうできない理由があった。

(俺が出席を拒めば、マルスの立場が悪くなるかもしれないから)

それが、ガレスが出席を拒まない理由だった。ニーナの肝いりだからこそ、断つたら解放軍内に余計な波風が立ちかねない。それが原因でマルスが微妙な立場になるのはガレスは望んではいなかった。

厳密に言えば臣下ではないため、知ったことかとぶん投げることもできるのだが、自由なく好き勝手やらせてもらっている今の自分の立場を考えると、それは不義理だと思っただのである。

(クク……こんなことを考えると、順調に暗黒道の支配下から抜けてきているというところか?)

それがいいことかどうかはわからないが、取りあえず出席すると決めた以上は己の責

務を果たすまでである。

「行くか…」

一人そう呟くと、ガレスはゆっくりと己の天幕を後にしたのだった。

「入るぞ」

マルスの天幕の入り口までやってくると、ガレスはそう言つて返答を待つことなくさつさと天幕へと入った。

「！ 無礼な！」

「返事をするまで待たんか！」

マルスの両脇のジェイガンとモロドフが苦々しい表情になつてガレスを糾弾した。

「フン…」

だが、ガレスはいつものように鬱陶しそうに鼻を鳴らすとマルスに視線を向ける。

「待っていたよ」

ヒートアップするジェイガンとモロドフとは対照的に、マルスはいつもの調子だった。そして椅子に座りながら、ゆっくりとガレスに視線を巡らせる。

「待たせたか、悪いことをしたな」

「え…」



ガレスの謝罪にマルスが固まってしまふ。

「? どうした?」

そんなマルスに、ガレスが尋ねた。

「いやちよつと驚いてるんだ。まさか、ガレスの口から謝罪が出てくるとは思わなかったからね」

「…正直なのは感心だが、正直すぎるのは考え物だな」

「あはは、ゴメンゴメン」

楽しそうに笑うマルス。ガレスとそんな会話を楽しむ主君の姿に、ジェイガンとモロドフは驚いていた。

「さて、それじゃあ行こうか」

そう言つて、マルスが椅子から立ち上がる。

「ああ」

ガレスも頷いた。

「他の招待客はいるのか?」

「うん。我が軍からは後一人」

「お待たせしました、マルス様」

と、その最後の一人が到着したのだろう。天幕の外から中へと声をかける。ガレスと

違って、その後にはずかずかと天幕へ入ってくるなどしない。

「あれが、普通の振る舞いだぞ」

「フン」

「どうぞ、お入りください」

モロドフがチクリと指摘し、ガレスはいつものように鼻を鳴らして答える。そして、ジェイガンは天幕の外へと声をかけた。

「失礼します」

中に入ってきたその人物は、ガレスも良く知っている人物だった。だが、いつもとは違って着飾っているせいか、いつもとはまた違う魅力があった。

「シーダか」

その人物…シーダの姿にガレスが思わず名前を呼んでしまった。

「あら、ガレス」

シーダもガレスの姿を見つけ、軽く微笑む。

「こんにちは」

「ああ」

そして挨拶を交わした。と、マルスが驚いたような表情になる。

「シーダ…知ってたのかい？ 彼がガレスだって」

「ええ」

微笑んだままシーダが頷いた。

「ワーレンで休暇を取ろうとした時、素顔を見ましたから。もつとも、敵襲のおかげで休暇どころじゃなくなっちゃってしまいましたけどね」

「成る程」

シーダの説明に納得したのか、マルスが頻りに頷いた。

「さて、それじゃあ全員そろったことだし、行こうか」

「はい」

「わかった」

二人の返事を聞くと、マルスはモロドフとジェイガンへと振り返る。

「それじゃあじい、ジェイガン、留守を頼んだよ」

「はっ」

「お任せください」

「うん。それじゃあ行こうか、二人とも」

「ええ」

「わかった」

二人を引き連れ、マルスは天幕から出て行く。そして、会場であるパレスの大広間へ

と向かったのだった。

会場であるパレスの大広間には、もう既に人がごった返していた。ポーつと歩いていたらすぐに人とぶつかってしまいうほど、人口密度は高くなっている。

「うわあ…」

その光景に、シーダは思わず驚きの声を上げていた。

「驚いてるのかい？ シーダ」

マルスがシーダに尋ねる。

「はい」

「そうか。…でも君だってタリスの王女じゃないか。社交の場の場数は踏んでいるはずだろう？」

「ええ。でも、タリスはご存知のように東方の小国の島国です。こんなに盛大な社交の場なんて、とてもではないですけど経験したことなくって…」

そこでシーダが不意に自分の身体に視線を落とし、ジロジロと自分の装いを見た。

「？ どうしたんだい？」

その、突然のシーダの行動に不思議に思ったマルスが尋ねる。

「その…マルス様、もしそうならハッキリ仰ってほしいんですけど」  
「うん」

「私…浮いてませんか？」

「え？」

シーダの言ったことの意味がわからず、マルスがキョトンとした顔になった。

「だ、だって…」

シーダが所在なし気にもじもじしながら口を開く。

「周りの方たちって、皆様衣装もお化粧も素敵な方ばかりなんですもの。どうしても気後れしちゃって」

「…ぷっ」

言葉の意味をようやく理解したマルス。そして次の瞬間には思わず吹き出していた。

「まあ！」

口元を抑え、肩を震わせながら笑いをこらえているマルスの姿に、シーダがムツとする。

「酷いですわ、マルス様。人が真剣に聞いているのに！」

そして、プイッとそっぽを向いてしまった。

「ゴメンゴメン」

流石にやり過ぎたと思ったのだろうか、マルスが謝る。しかしそれでもまだ笑いが収まらないのだろうか、その表情は崩れていたが。

「もう…」

むくれたままのシーダが拗ねたように不満を口にした。

「ふーっ…」

呼吸を整えるため、そして笑いを収めるためにマルスが何度か深呼吸をした。

「でも大丈夫だよ、シーダ」

そしてようやく、マルスは先ほどのシーダの質問に答えたのだった。

「え？」

「君は周囲の人間に引けを取ったりはしていないさ。もつと自信を持っていい」

「！ ほ、本当…ですか？」

何うようにシーダがマルスをおずおずと見上げた。頬も赤く染めている。

「うん。何処に出しても引けを取らないよ、シーダなら」

「ま、マルス様ったら…」

赤くなっていた頬を更に真っ赤に染めてシーダが俯いてしまった。恥ずかしいというのも勿論あるのだろうが、嬉しいのと今のこの顔を見られたくないというのもあるの  
だろう。

(青臭いことを言ってるものだな…)

そんな傍らの二人に対し、ガレスは何処までも冷静だった。この場の雰囲気にもまれてかどうかはわからないが、マルスとシーダがいつもとは微妙に違った空気であることを、傍で見えていたガレスは理解していた。

(もつとも、自分たちは気づいていないだろうが)

一歩引いて冷静に見ているガレスには、それが良くわかっていた。

(まあ、こいつらの好きにさせてやりたいが…)

恋仲…というにはまだぎこちない二人だが、初々しくもあつて周囲で見ている分には微笑ましい二人である。だが、場所が場所なだけにそういった雰囲気についても浸らせておくことはできなかった。

(…しかし、何故俺がこんな引率の教師みたいな真似をしなくければならんのか)

そうは思わんでもなかったが、他に人がいない以上仕方がない。お邪魔虫になるのは気が引けたが、ガレスは口を挟むことにした。

「いい雰囲気のところ悪いが…」

「えっ!？」

「や、やだ…」

マルスは鳩が豆鉄砲くらったような顔をし、シーダはまた頬を赤らめた。

「いい雰囲気のところなんて…」

「そ、そうだよガレス。僕たちはそんなつもりじゃ…」

「ああ、わかったわかった」

面倒臭そうにガレスがヒラヒラと手を振った。こういう反論も想定内であるので、その想定通りの反応を返したことにガレスは辟易していた。

（全く、尻の青いガキどもだ…）

あれだけイチャコラしておいて何を今更…と思わないでもないガレスだったが、そこを指摘すると余計に話が拗れそうなので収めておくことにした。

「そろそろ大人しくしておいたほうがいい。始まるぞ」

「そ、そうだね。わかったよ」

マルスがそう返した。しかし、シーダは何か引つかかるところがあったのか、ガレスをジッと見上げている。

「…何だ？」

ガレスが口を開いた。シーダの視線に気付いていないわけではなかったが、これ以上面倒なことになるのは避けたかったので放置しておいたのだ。しかし、放置したにも関わらずシーダの視線が外れることはなかった。渋々口を開いたのだった。

「不思議に思ってたんだけど…」



「何がだ？」

「ガレス、貴方随分落ち着いてるわね」

「そう言えば……」

マルスもそのシーダの意見に思うことがあるのだろう、シーダと同じようにガレスに視線を向けていた。

「……そう見えるか？」

ガレスは二人にそう答えながらも、まあ、当然だなと内心で思っていた。ゼテギネアでは皇子であったガレスである。社交の場は何度も経験しているから、場数は数えきれないほど踏んでいるのだ。その経験があるからこそ、気後れることも浮かれることも緊張することもなくこの場にいることができるのだった。

だがそんなことは知らない二人は、ガレスが落ち着き払って余裕の態度でいたことが不思議でしうがなかった。厳密に言えば、少なくともマルスはガレスが自身のことについて話したからある国の皇子であったことは知っているために、それを考えれば何も不思議なものではないとわかるのだが、この場の雰囲気がそれを失念させていたのだろう。シーダはガレスの生い立ち……というか、元々ガレス自身がどういう立場の者であったか知っているかどうかかわからないので何とも言えないが。

（大体、俺がどういいう立場の人間で、何処からここへやってきたのか、軍の人間がどれほ

ど把握しているかも知らんからな)

戻れもしない元の世界のことなど、どうでもいいことだと既に割り切っているため放置しておいた結果がこれである。もつとも、それすらどうでもいいと思っただが。

「うん」

マルスが頷いた。

「こういう場の出席経験、あるの？」

シーダは気になるのか、更に尋ねてくる。

「…まあな」

それに対してガレスは短くそう答えた。一々説明するのも面倒だからである。しかし、シーダは

「へえ…」

と、短く呟くにとどまったが、俄然興味が湧いたようだった。

「ねえ、それって「どうやら、お喋りはここまでのようだな」

詳細を聞こうとしていたシーダだったが、ガレスが機先を制するかのようには遮った。

「え？」

頭に？マークを浮かべたシーダに、ガレスがちよんちよんと前方を指さす。シーダが

振り返ると、そこには大広間に姿を現したニーナの姿があった。

「あ、ニーナ様……」

「シーダ、これからニーナ様のご挨拶だ。ガレスの言った通り、お喋りはここまでだよ」  
「そうですね……」

ガツカリしないでもなかったが、主催が現れては仕方ない。シーダは口を噤んで前方に視線を向けた。

万雷の拍手の中をニーナが静々と歩く。それを護衛するかのようには、ハーディンがその脇を固めている。そして程なく、玉座にゆつくりと腰を下ろしたのだった。

「アカネイアの諸侯、本日はよく来てくださいました」

ニーナからの最初の一言に、場が水を打ったように静まり返る。しかし、

「まず初めに、私は皆に詫びねばなりません」

謝罪から始まったニーナの挨拶に、少し場がざわついたが、だがすぐに、そのざわつきも終わって静まり返る。流石に主催の挨拶をいつまでも遮るような不調法者はこの場にはいなかった。

「今は私一人だけになってしまいましたでしたが、我々王家が力不足だったため、皆には一方ならぬ苦勞をさせてしまいました。この日を迎えるまで皆がどれだけの苦勞をしたのか、若輩である私には想像も及びません。言葉では語りつくせぬような艱難辛苦を強いら

れた者もいるでしょう」

アカネイアの諸侯たちはそのニーナの言葉に、これまでの苦勞を思い出している者もいるのだろうか、眉を顰めたり目元を抑えている者がいる。が、それと同数かあるいはそれ以上が何の感慨もなく聞いているか、あるいは感動している振りをしている者だった。

(…まあ、よくある光景だ)

ほぼ最後尾から、ガレスはその様子というか空気を敏感に感じ取っていた。戦勝国に寝返る…あるいは取り入るのは別に不思議なことじゃない。生命のため、金のため、家族のため、地位のため、或いは先だつてのホルスのように治めている領地の民衆のため…。

理由は様々だが、誰だつて生命は惜しいし、家族は大事だし、金や地位は欲しい。それを考えれば、ドルーアに寝返つていたのも別に非難されるようなことではない。アカネイア王家が…ニーナが非難されるとしたら、それは戦争に負けたことである。

(もつとも、あんな小娘がどれだけ上手く立ち回ろうが、大勢に変化はなかつただろうがな)

そう思つたガレスだが、それと同時にそれは仕方のないことだとも思つていた。王家の間人だからと言って年端のいかない小娘一人に何が出来るというのだろう。あるいは

は、かつての己のように暗黒道に足を踏み入れればまた違った結末になったかもしれないが、今更そんなことを言っても意味のないことである。

それよりも、ドルーア統治下で甘い汁を吸っていたであろう連中の、取り繕うような表情にらしくもなくムカムカして気分が悪かった。

だがそれはニーナ自身も百も承知なのだろう。それでもそれを表面に表すことなく気にも留めずに言葉が続けていった。そして、

「グラスを」

立ち上がってそう促したニーナに従い、アカネイアの諸侯たちが次々に周囲のメイドや給仕たちからグラスを手を取った。そして、ニーナが音頭を取る。

「乾杯」

『乾杯』

少しの間、グラスのアルコールを飲む音のみが大広間に響き渡り、そして誰彼ともなくグラスを口から話す。

「今宵はゆるりと楽しんでください」

そう告げたニーナの言葉が口火になったかのように大広間は喧騒に包まれた。

「ふーっ…」

グラスに入っていたアルコール：ワインを軽く飲み干すと、ガレスは軽く一息ついた。そして、近くにいたメイドのトレイの上にそのグラスを戻し、それと同時にまだ口がついていないグラスを手を取った。

「もらうぞ」

「はい」

メイドはそう言ったが、許可などなくてもガレスは飲むつもりだった。もつとも、一介のメイドが不条理でもない客の申し出を断るわけではないのだが。

「あまり飲みすぎないようにね」

そんなガレスを見て、マルスが苦笑しながらやんわりとたしなめる。

「わかっている。こんなところで酔い潰れるつもりなどない」

「ならいいけど……」

「それよりマルス様、ニーナ様にご挨拶に伺いませんか？」

「そうだね」

マルスはシーダの意見に頷くと、そのままガレスに視線を向けた。

「ガレス、貴方もどうだい？」

「断る」

『え……』

その返答に、マルスだけでなくシーダも絶句してしまった。臣下である以上、ニーナに挨拶に出向かないわけにはいかない。それに、ガレスはニーナがたつての希望で参加している身だ。であれば、余計に出向かないわけにはいかないはずだった。

「いや、でも…」

それがわかつているからこそ、マルスは言葉を濁した。

「それはちよつと失礼じゃない？」

シーダも同意見である。それどころか、マルスよりもガレスに対する非難を強めていくように見えた。

(チツ…)

面倒な連中だと思わないわけではない。だが、ガレスにも言い分はあった。

「心配するな、後で出向く」

「後で？」

そのガレスの言葉に、マルスが首を捻った。

「後で行くんなら、私たちと一緒に今行っても良くない？」

シーダも引つかかったのだろう、ガレスの顔を覗き込む。が、

「バカを言うな」

鼻で笑うと、ガレスはスツと腕を伸ばした。

「有象無象どもが引きも切らずに並んでゐるのに、あんなところに出向けるか。バカどもが落ち着いてからでも問題はあまるまい」

(うわ…)

(辛辣…)

ガレスの、らしいと言えどもともらしい傲岸不遜な物言いにマルスとシーダは思わず引きつってしまった。

「そ、そうかい。それじゃあ取りあえず僕たちは行つてくるよ。さ、シーダ」

「はい、マルス様」

そう言つて微妙な笑顔を向けると、マルスとシーダは連れ立つてニーナの許へ…正確に言えばニーナの許へと続く長蛇の列の最後尾へと向かつたのだつた。

「ご苦労なことだな…」

その後ろ姿を見送りながらガレスは思わず呟いた。臣下であり、全軍の総指揮官という立場から仕方ないのかもしれないが、それでもこんな長蛇の列に並ぶなどバカバカしいにもほどがある。先ほどマルスたちに言つたように、ニーナのたつての願いで出席している以上、ちゃんとした正装ということもあつて今回は前回と違つて挨拶ぐらいはするつもりだが、もし最後までこんな状況だつたらほつといつて帰るかと思つていた。

(付き合つていられるか)



そう決めて、取りあえず今は飲食を楽しむことにした。が、そんなガレスを遮るかのように来客が足を運んできた。

「おい」

声をかけられる。だが、ガレスはそれを無視した。別に意地悪でそんな真似をしたわけではなく、自分に声をかけてくる人間などこの場にはいないと思っていたからだ。唯一、その可能性がありそうなマルスとシーダは今はニーナへと向かう長蛇の列の一人だ。

そんなわけで、ガレスは自分とは無関係だと思っていた。が、

「おい」

今度は声をかけると同時にその肩に手が置かれた。

(ん?)

ここでようやく、先ほどからの呼び声は自分に向けられたものだとわかり、ガレスは振り返る。そこには、ドレスアップした三人の男女の姿があった。そしてその顔には見覚えがある。

「貴様らは…」

「こんばんわ」

「お初に」

声をかけてきた人物以外の残りの二人が挨拶した。

「ミディアと……お前はジョルジュだったな」

三人組のうち、二人の名を呼んだ。

「ええ」

「ああ」

二人が頷くが、ジョルジュは少し不服そうであった。解放軍に入ったのはミディアより大分以前なのに、思い出すような素振りをされたことが気に障ったのだろう。ないがしろにされたように感じてムツとしたのだ。

(……)

ガレスは視線や表情からジョルジュが何となく面白くなさそうにしているのに気づいたが、相手にするのも面倒臭いので放っておいた。そして、残りの一人に視線を向ける。

「貴様は？」

「! ……お初にお目にかかる。私はホルス」

ほぼ初対面でいきなりの貴様呼びわりにホルスも内心でムツとしたが、それを表面に出すこともなくホルスが受け答えた。流星に領主として今まで苦労してきただけに、腹芸はお手の物のようだった。

「ほお…そうか、お前が」

ガレスは先日の戦いで加入したホルスに、自然とそんな感想を漏らしていた。  
「で？」

挨拶が済んだところで、ガレスが改めて口を開く。

「え？」

どういふこととばかりに、ミディアが首を傾げた。

「アカネイア連中が雁首揃えて何の用だ？」

「あ、ああ。ええ…」

用件を聞かれ、ミディアが軽く咳払いをして用向きを伝えようとする。が、

「お前の見張りだよ」

それよりも早くジョルジユがそうガレスに伝えた。

「何？」

「ちよつと、ジョルジユ！」

ミディアが慌ててジョルジユを叱責するが、ジョルジユはお構いなしとばかりに一歩前に踏み出すと、ガレスを鋭く睨み付けた。

(こいつにこんな顔をされる筋合いはないのだが…)

そんなことを考える。そもそも、解放軍に加入以降こうやってまともに話したのも初

めてなのに、敵意を剥き出しにされる理由がわからない。とはいえ、この様子なら放っておけば勝手にベラベラ喋ってくれるだろうと思つて黙つていた。

「フン」

いつもガレスがやるように、ジョルジュが鼻を鳴らす。

「随分と、ニーナ様に目をかけられているようだな」

（やはり、それが気に食わないのか）

予想通りの答えに、いつそ苦笑するガレスだった。勿論、そんな表情を顔に出したらますます面倒なことになるので内心で苦笑するにとどめたのだが。

「俺とあいつの関係について、仔細は聞いているのだろうか？ それだけのことだ」

「そのことについては、我らアカネイアの旧臣、深くお礼を申し上げる」

ホルスが深々と頭を下げた。だが、ジョルジュはまだ納得いかないというか面白くなさそうな表情をしている。ミディアはどうすればいいのかといった感じの思案顔だ。

「それで？ 見張りというのは俺がこの場で何かやらかすかもしれないと思つたか？」

「あ……う……」

魂胆を見透かされ、ミディアが顔を赤くして黙ってしまった。

（ジョルジュだったら、なんでバカ正直に言っちゃうのよ……）

恨めしそうにジョルジュを見る。少し落ち着いたのか、ジョルジュは先ほどよりいくらか雰囲気がいつもの感じに戻っていた。

「ニーナがそんなことを言うとは思えんが……ハーディンの差し金か？」

「ちが「あの男とは関係ない」

ミディアの返答に被せるようにジョルジュが答えた。その表情は、先ほどにも勝るとも劣らない面白くなさそうな顔をしている。

（ほお……）

その表情を見て、ガレスはアカネイアとオレルアンの関係も一枚岩ではないということがわかった。少なくとも、アカネイア側にはオレルアンに不満を持つ者がいることは間違いなかった。

（何が気に入らないのかは知らないがな）

自分にとってはどうでもいいことである。ガレスはそのままワインを飲み干すと、近くのメイドのトレイの上にワイングラスを置いた。

「まあ、見張りでも何でも好きにすればいい」

面倒臭くなったガレスがそう答える。ハナから何も起こす気はないので、好きにさせることにした。鬱陶しいが、まあそれも主君への忠義故と思えばわからないでもない気はする。

(忠臣か…)

かつてのことに思いを馳せる。ハイランド四天王、そして大將軍。自分たちの下にも間違いなくいたかつての忠臣たちの姿を思い浮かべ、ガレスは暫し似合わない干渉に耽っていた。

「言われなくてもそうするさ」

ジョルジュがメイドからワインをもらおう。ミディアとホルスも同じようにワインを手に取り、咽喉を潤わせていた。特にミディアは緊張からか咽喉がカラカラになっていた。たので非常にありがたかった。

「そう言えば…」

自分を取り囲むように集まったミディアたち三人に目を向けながら、ガレスが口を開く。

「何か？」

ホルスが答えた。

「お前らだけか？」

「と、言うത്？」

「他にも何人かアカネイアの連中がいただろう。そいつらはどうした」

「ああ、それは…」

「あいつらは、平民だからな」

ホルスが答えようとしたが、ジヨルジユが先に答えた。

「成る程」

その一言で十分に理解したガレスはそれ以上の追及は止めた。つまりはそういうことなのである。この場に来ていない解放軍の面々も、来ていないのはそういう理由だからである。人数的な理由も勿論あるだろうし、アカネイア戦勝の宴だからというのもあるのだが、一番の理由は何と言っても身分的なものだった。

ゼテギネアの皇子（これをどの程度信じているのかにもよるが）であったとしても、この世界では何の後ろ盾もバックボーンもないガレスがこの場に招かれているのが異常なのである。それだけでも、ニーナの鶴の一声であることは疑いの余地はなかった。

厳密に言えば、他にも招待された人員はいたのだ。それが、ミネルバとマリアだった。二人はマケドニアの王族であるから当然と言えば当然である。しかし、ミネルバは少し前までドルーアに与していたということもあつて丁重に断った。マリアはマリアで、姉様が行かないんだったら、私も行かない！ と、いうことだったので二人ともこの場にいらないのである。

「ボア様は、裏で忙しくされているけどね」

「そうか」

苦笑してそう付け加えたミディアが答えた。といつても、ガレスにはボアが誰なのか今一つハッキリとした確証が持てない。それだけ人の加入がここ最近は目まぐるしいのだ。

（まあ、縁があればそのうちわかる。わからなければ、そいつとは縁がないだけだ）  
そんなことを考えながら大広間に目を向けた。相変わらず、ニーナの前には長蛇の列が並んでいるが、それでも大分落ち着いてきたのか、その列も最初の頃と比べれば随分と短くなっていった。

（ふう…）

その様子を見て、ガレスは内心で溜め息をついた。そして、そのまま歩き出す。

「何処へ行く」

そんなガレスに、ジョルジュがすぐに釘を刺した。だが、ガレスがそんなものを気にするはずはない。

「ニーナのところへ」

その返答に、三人の顔色が変わった。中立つぽかったミディアや、どちらかといえば友好的だったホルスも厳しい表情に変わる。

（大した忠臣っぷりだ…）

あの小娘にそれほどのカリスマがあるのかと思わないでもないが…というのがガレ



スの正直な感想だった。

「おい、俺がさつき言ったことを聞いてなかったのか？」

先鋒役と言つていいジョルジュが視線を鋭くする。

「無論、覚えている」

「だったら、何故ニーナ様の許へ出向く」

「ただの招待の返礼だ。まさか、一応は招待客である俺に、主催者であるニーナの許に返礼へ出向くなどでもないほうどアカネイアの連中は礼儀知らずでもあるまい」

「それは…」

「文句があるなら貴様らもついてくればいいだろう」

「ああ、そうするさ」

「無論」

ジョルジュとホルスがすぐにガレスの左右斜め後ろに並んだ。ミディアも一つ遅れ、ガレスの真後ろにつく。傍から見ればガレスがジョルジュたち三人を引き連れているようにも見えなくもない、奇妙な一団はこうしてニーナへの挨拶に向かった。

(キナ臭くなってきたな…)

短くなってきたとはいえ、相も変らぬ長蛇の列に辟易としながらガレスは解放軍について考えていた。戴いているのはアカネイアの王女ではあるが、全軍の総司令官はアリ

ティアの王子。大きな勢力を誇るのはオレルアンの騎士団。そこにアカネイアの旧臣たちが少しづつ数を増やしている現状。一見まとまってはいるが、それは酷く危ういフランスに思えたのだ。

(蟻の穴から堤も崩れるというしな)

世話にはなっってはいるが、不協和音が出たり空中分解したら止める手立てはない。そんな力も人望も自分にはないことはよくわかっている。

(今後の身の振り方を、少しは考えた方が良いかもしれんな…)

最悪の事態になったときのことも想定しつつ、ガレスは素知らぬ顔で拝謁の順番を待ったのであった。

## NO. 13 グルニアの木馬隊

パレスを取り戻し、ミディアを始めとする捕虜や、ホルスを始めとするアカネイアの旧臣たちを迎え入れた解放軍はまた一段と勢力を増していた。そしてその勢いに押されるかのように、次なる目的地へと旅立つ。

次に目指すのはアリティア。そう、全軍を率いるマルスの故国である。マルス、並びにアリティアの騎士たちはやつと懐かしき故国を取り返す戦いに入ろうとしていた。

しかし、その道のりは当然たやすいものではなかった。まず立ち塞がったのが、長距離射撃の部隊であった。

機械仕掛けのその戦車隊：通称を木馬隊という、グルニアの主力部隊の一つであった。

機械音を響かせながら、戦車隊がマルスたちを待ち受ける。彼らを突破することが、アリティアを取り戻すための第一歩だった。

だが、そう簡単に突破できる相手ではない。遠くに見えるその威容に、解放軍の誰もが厳しい戦いになるのを感じていた。

「マルス」

攻撃の号令をかけようとするマルスの許へ、ニーナがやってきた。

「ニーナ様！」

その姿を見、声をかけられたマルスは臣下の礼を取る。

「楽に」

「はい」

ニーナに促され、マルスは顔を上げた。そのまま進んできたニーナが、マルスの隣に並んで遙か先に布陣している戦車隊をジッと見据える。

「グルニアの戦車隊……強敵ですね」

その威容を目の当たりにしたニーナが思わず呟いた。

「はい。ですが、アリエティアを取り戻す上で、避けては通れません」

「そうですね。でもマルス、無理はいけませんよ」

たしなめるようにニーナがそう忠告した。

「人々の希望は、貴方の双肩にかかっているのです」

「わかっています。ですがご安心ください、ニーナ様。敵は広い範囲を攻撃できませんが、その分、懐に飛び込まれれば弱い。勝機は十分にあります。私の戦いぶりをご覧くださいー！」

「期待していますよ、マルス」

「はい。ここは間もなく戦場になります。ニーナ様は後方でお待ちください」  
「ええ」

ニーナはマルスの言に従い、後方へと戻った。その際、チラツと今回の出撃人員に選ばれていたガレスに視線をやったが、それも一瞬ですぐにその場を去った。

(……)

対してガレスはというと、それには気付いていたが特に反応するわけでもなく無視していた。ここで反応すると後々面倒なことになるのはわかっていたからだ。

(オレルアンやアカネイアがな)

脳裏にハーディンやミディアたちの顔が浮かび、ガレスは何時のように鎧の下で喉を鳴らして苦笑していた。

「よし、行くぞ、皆！」

そんな中、マルスの号令がかかる。そして、解放軍と戦車隊の戦いの火蓋は切つて落とされた。

「さて……行くか」

得物のサタンブローパーを手に持ち、ガレスも動き出したのだった。

今回の戦いにおける作戦はいたってシンプルであった。戦車隊の長距離攻撃を重厚な鎧で身を固めた装甲兵で防ぎ、騎馬隊が一騎に距離を詰めて戦車隊を各個撃破するというものである。

騎馬隊と肩を並べる機動力を誇る飛兵は、今回は射撃兵器が相手ということもあって出撃してはいなかった。

進軍経路は北・南・中央の三路があり、解放軍は部隊を分けて進軍していく。北はドーガとホルスを要としてオレルアン軍が、南はトムスとミシエランを要としてレナの兄のマチスや少々機動力に欠けるがオグマやナバル、シーザやラデイといった身軽な傭兵、剣士部隊が担当していた。

そして残る中央を、ガレスを要としてアリティア軍が進軍していた。

「フーン」

自分に向かって真っすぐ飛んできたクインクレインの巨大な矢を、ガレスが両断して破壊した。

（何の変哲もない只の巨大な矢であれば、造作もないことだ）

ガレスはこともなげにそう考えていた。北と南でも巨大な矢が飛び交ってはいるが、所詮は矢である。避けることも斬り捨てることも容易であった。加えて、ガレスのような重装甲であれば、受け止めることもできないわけではない。とはいえ、何度も受け止

めていけばいかに重厚な鎧でも破壊されてしまうし、そもそもが受け止めた時の衝撃がダメージとして蓄積される以上、それはあまり利口なやり方ではなかった。

(無駄な傷を負わんことに越したことはないからな…)

ガレスがそう考えながら、前方に目を向ける。攻撃の合間の隙を縫って一気に距離を詰めたジエイガンとカインとアベルが、敵サーバーを殲滅している光景が目に入ってきた。

(ふむ…)

あの様子だと突破口を開くのも時間の問題だなと判断し、ガレスは息を吐いた。仕方がないとはいえ、まんまの壁役は気分のいいものではないし疲れるのだ。

「北と南の状況は？」

そんな中、状況が落ち着きだしたのを感じたからかマルスが側にいたゴードンに尋ねた。

「はい。北と南はまだ膠着状態です。ただ、それでもジリジリとこちらが押しているの  
で、ここよりは遅れることになるでしょうが、突破は時間の問題かと」

「わかった」

頷きつつも、マルスは厳しい表情を崩さない。

「何か気がかりでもあるのか？」

それが少し気になったガレスが、マルスに尋ねた。

「うん。こちらは戦力を分散して進んでいる。にもかかわらず、それにしても進軍が順調なのが気になってね」

「成る程な」

ガレスが頷いた。

「我々に合わせて敵も戦力を分散しているからじゃないでしょうか？」

ゴードンがマルスに尋ねた。

「それはあるだろうね。ただ、敵は先に布陣していてこつちを待ち構えていたんだ。仕掛けをしようと思えば僕たちが来る前にいくらでもできたはずさ」

「もう一つ。マルス様だけを狙って兵力を集中させることだってできたはずだ。犠牲は多大になるだろうが、大将首さえとってしまえば戦は終わりだ。しかもマルス様は神劍ファルシオンを使える英雄アンリの末裔。ファルシオンの力なくてはメデイウスを倒すのは不可能……とは言わないが、限りなくゼロに近い。それを考えれば、不審に思うのも仕方はないと思うよ」

マルスの横に並ぶマリクが自分の考えを披露し、それに同意するかのようにはマルスも頷いた。そして、マルスはそのまま上空を見上げる。

「航空戦力がないのも気になるところだ。こちらは戦力を分散させているのだから、上



空から奇襲というのは非常に有効な手段だと思っただけ。…考えられるのは、シューターで戦力を固めているために味方に被害が及ぶのを避けたということぐらいだけ」

「けど、何です?」

「…グルニアの木馬隊とまでその名を知らしめている程の練度の高い部隊が、そんなお粗末な実力とは思えない。味方の被害を考慮に入れたとしても、シューターなら援護射撃でも十分牽制になる。そういった点からも、どうも腑に落ちないんだよ」

「確かに…:そうですね」

マルスとマリクの意見を聞き、ゴードンがしきりに頷いていた。

(よく考えているな)

ガレスもまた、表面には表さないもののマルス(とマリク)の推論に感心していた。ガレスから見ればまだまだ尻の青いガキだが、それでも年齢にそぐわぬその観察眼に敬意を表していた。

(立場が人間を創るとはよく言うが、コイツはその典型的な例かもしれんな)

そんなことを考えていたガレスが、

「索敵はしているのだろうか?」

と、マルスに尋ねる。

「勿論だよ」

「だったら、問題はないだろう。異常があればすぐにお前のところに報告が入るはずだが、その様子もないようだからな」

「確かにね。今のところ入ってくるのは、北と南からの伝令だけだし」

「なら、目の前のことに集中しろ。隠し玉があるかもしれない」

ガレスがそう注意しようとした直後、まるでタイミングを見計らったかのように

「ぐうっ！」

「がつ！」

という、悲鳴のような声が不意に聞こえてきた。

「ん？」

「！」

「今のは!？」

気になったマルスたちが前線へと首を向ける。そこには、ジェイガンと斬り結んでいる、オグマやナバル、アテナのような剣士の姿があった。

カインとアベルはその剣士にやられたのか、腕や肩から血を流し、その出血部分を片手で抑えている。そしてその二人をかばうかのように、ジェイガンがカインたちと剣士の間に入って戦っていた。

「！ カインとアベルが！」

その光景に、マルスは驚きを隠せなかった。聖騎士のジェイガンと、自分の両腕と言つていいカインとアベルが苦戦しているとところなど、ここ数年見たことがなかったからだ。しかし今現実には、三人は危ない状況になっている。

「マルス様、早く救援に！」

「うん！」

マルスが頷く。ジェイガンたちの働きによつて中央のシューター部隊は全滅しているため、もうシューターの長距離射撃を心配する必要はない。この頃には北と南からの伝令で、南北のシューター部隊も制圧したことを知つたため安心して部隊を進めることが可能だった。そんな中、

「先に行くぞ」

一人、ガレスがそう言い残してさっさとジェイガンたちの許へと向かつたのだつた。

「あ、ちよつと、勝手な真似は！」

マリクがたしなめようとするが、

「構わない。行かせてやってくれ」

他ならぬマルスがそれを押しとどめた。

「マルス様!？」

「マリク、ガレスの実力は君も良く知っているだろう？」

「しかし……」

確かにマルスに言われるまでもなく良く知っているが、何せ相手はジェイガンたち三人を相手にして渡り合っている凄腕である。いくらガレスの実力を知っていても、一抹の不安を抱くのは仕方なかった。

「今は僕たちも用意を整えることが先決だ。早ければ早いほど、救援に向かうのも早くなる」

「わかりました」

マルスにそう諭され、気を取り直してマリクが頷いた。

「ゴードン、マリク、部隊の集合を急いでくれ」

「わかりました!」

「はい!」

マルスの命を受け、ゴードンとマリクが足早にその場を走り去る。二人を見送った後で振り返ると、マルスはガレスの背中を見ていた。

(…死んだら死んだで、その時は……)

ガレスの背中に視線を向けるマルスの口元が、ほんの少し、本当にほんの少しだけ歪んだのだった。

「ふん！」

「ぬうううっ！」

ジェイガンと剣士が激しい鏝迫り合いを繰り返している。馬上からの攻撃というところで一見ジェイガンに有利に見えるが、実はそんなことはなかった。そのアドバンテージをイーブンにするほど、剣士の力が強かったのである。

(寄る年波には勝てんか……！)

そうは思いたくはないが、剣士を弾き飛ばすこともできない現状にジェイガンは内心で臍を噛むしかなかった。

「ジェイガン隊長！」

「我々も加勢します！」

カインとアベルはそう告げて言葉通りジェイガンに加勢しようとする。が、

「来るな！」

その申し出は、他ならぬジェイガンによって拒絶された。そうしながらも、ジェイガンは目の前の剣士と息の抜けない攻防を繰り返している。

「しかし！」

カインが食い下がった。が、

「手負いのお前たちではこの剣士の相手は無理だ！ 深手になる前に後退せよ！」

「何を言うのです！ 隊長を置いて我々だけで後退できるわけがありません！」

アベルもカインと同じように食い下がった。が、

「隊長命令だ！ 後退せよ！」

『ツ！』

そう言われては従う他はない。軍である以上、上官の命令は絶対なのだから。

「…わかりました」

「すぐ戻ります！ それまで御武運を！」

カインとアベルが悔しさを隠しもせず後退した。と、

「フツ」

剣士が軽く笑い、ジエイガンの得物を押し戻した。

（ツ！ 何て力だ…）

先ほどから嫌というほど感じている感想を改めて感じ、ジエイガンは剣士から距離を取った。

「末期の別れは済んだか？」

「大口を」

挑発するような剣士の言い草に、ジエイガンは取り乱すこともなく答えた。

「そんな戯れ言は、この皺首を取ってから言うのだな」

「…なら、そうさせてもらおうか」

そう答えると、剣士は再びジェイガンに挑みかかった。攻撃を受け止めたジェイガンはまた剣士と斬り結ぶ。一進一退の白熱した攻防が再び始まった。

何合か斬り結んだ後、不意に一騎打ちは終わりを迎えた。剣士の攻撃に、ジェイガンは得物を弾き飛ばされてしまったのだ。

「しまった!!」

思わず己の得物を視線で追う。そして、その隙を見逃すような剣士ではなかった。

「悪く思うな」

らしくないセリフを吐きながら、剣士がジェイガンの首めがけて刀を振るう。得物に気を取られて反応が遅れてしまったため、気付いたときには凶刃がすぐ側まで迫っていた。

「覚悟」

「!」

彼我の距離と剣を振るうスピードにより、ジェイガンはその攻撃を避けられないことを悟った。そして、その刃がジェイガンの生命を刈り取るうとした時だった。突然、耳をつんざくような大きな金属音が周囲に響いたのだった。

「ぐわっ!」

そして、剣士が吹き飛ぶ。

「!?」

何が起こったのかわからずに呆気にとられたジェイガンだったが、すぐにその顔が緊張で強張った。いつの間にかすぐ側に、見知った顔があったからだ。

「貴様……」

「ククク……」

不快感を隠そうともしないジェイガンの視線の先には、当然のようにガレスの姿があった。

「さっさと下がれ」

それだけ告げると、剣士と対峙するために少し前に進み出る。

「バカを言うな、俺はまだ戦える！ 第一、貴様なぞに任せられるか！」

「そうか」

結構な罵声を浴びたがガレスは一向に気にする様子もなかった。その代わりに、サタンブローバーをひっくり返し、刃に近い部分を手に持った。

「ならば、俺が下がらせてやろう」

「何？」

不審がるジェイガンに気にせず、ガレスは逆持ちしたサタンブローバーの柄の部分で



ジエイガンの馬の尻を叩いた。予想だにしない刺激に馬が暴れ出す。  
「うおっ！」

いきなりの暴れっぷりに必死の手綱裁きを見せるジエイガン。が、落ち着かせるのを黙って見ているようなガレスではない。

「行け」

そう言うと、ガレスは再度馬の尻を叩いた。と、馬はガレスの命令に従うかのように馬首を返すと後陣へと向かったのだった。

「き、貴様！」

「クク、振り落とされるなよ……」

怒りの形相を向けながらも遠ざかっていくジエイガンを見送ると、ガレスは剣士に向き合った。

「待たせたな」

「フン……」

剣士が鼻を鳴らした。

「攻めてきても良かったものを。こちらの用意が整うまで待つとは、律儀な奴だな」  
「寝込みを襲うような真似をして勝っても意味はない。ただそれだけのことだ」

「ククク、成る程。だがその信念が命取りにならないかな」

「試してみるか？」

「クク、当然だ」

そこで会話は途切れ、そして一騎打ちが始まったのであった。

「ジェイガン！」

『ジェイガン隊長！』

前線から戻ってきた…と言うより、強制的に戻らされたジェイガンをマルスとカイン、アベルが迎えた。

「無事だったかい？」

「は」

馬上から降りてマルスに恭しく礼をするものの、その表情は未だに懨然としている。

「隊長？」

「何処かお怪我でも？」

「違う」

ジェイガンの様子がいつもと違うことに気付いたカインとアベルが訝し気にそう尋ねるも、ジェイガンは懨然としたままだった。と、

「ガレスと何かあったのかい？」

察したマルスが尋ねた。

「は」

ジェイガンは何の抑揚もなく一言そう答えた。

「勝手に戦いに割り込まれ、無理やり戦線を離脱させられました」

「…全く、ガレスらしいね」

マルスが苦笑する。しかしジェイガン、そしてそのことを聞いたカインとアベルも憚然とした表情になった。

「あの男…」

「好き勝手にしてくれる…」

「……」

カインとアベルが文句を呟く。ジェイガンは何も言わないものの、やはり不服そうな表情は晴れない。が、

「マルス様が許可を出されたのでしょう？」

と、尋ねた。

「うん。カインとアベルが手傷を負ったのが見えたんでね。部隊の集結には時間がかかりそうだったんで、先行してガレスにだけ先に行ってもらった。それに、ガレスは重装兵だから機動力には劣るからね」

「であれば、我ら臣下としては口を挟むことはできません」

それだけ告げると、ジエイガンはいつもの様子に戻った。隊長にそう言われては、部下であるカインとアベルも何時までも不満タラタラでいるわけにもいかない。不承不承であるが、ジエイガンと同じように納得することにした。

「すまないね」

そんな彼らの心中を察したマルスが申し訳なさそうに謝った。

「いえ、臣下であれば当然のことです」

「ありがとう。僕はいい部下に恵まれたよ」

「勿体ないお言葉」

三人が軽く叩頭した。そんな三人にマルスが苦笑していると、

「マルス王子！」

不意に、誰かがマルスの名を呼んだ。振り声のした方向に振り返ると、そこには今駆け付けたのだろうか、ミディアの姿があった。

「やあ、ミディア」

軽く手を挙げたマルスに対し、ミディアは下馬すると叩頭する。

「遅れました、申し訳ありません。思いのほか掃討に手間取りまして」

「そんなことはないさ。君は騎兵だし、寧ろ早い方だよ」

「ありがとうございます。で、戦況は？」

「中央路もシューターは全て片付けた。だが、強敵が陣取っててね」

「強敵？」

ミディアが表情を強張らせる。

「ああ。今、ガレスが戦ってるよ」

「！ あの男が!？」

ガレスの名を聞いたミディアが反射的に前線に目を向けた。そこには確かに斬り結んでいるガレスと、そして…。

「！ あの人は!？」

ガレスの相手をしているもう一人の顔を見た途端、ミディアの顔色が真っ青になった。

「どうかしたのかい？ ミディア」

「申し訳ありません、マルス様!」

ミディアはそれだけ言うと、大急ぎで愛馬に跨り、そして前線へと飛び出してしまった。

「あつ！ ミディア!」

「何を!」

マルスやジェイガンが止めるのも聞かず、ミディアは矢のように前線へと向かってしまった。

「マルス様！」

「ジェイガン！ ここに残って僕の代わりに部隊をまとめてから進軍してくれ！ カイン、アベル、済まないが一緒についてきてもらおうよ！」

「ハッ、王子！」

「お任せください！」

カインとアベルのみを引き連れ、ミディアの暴走を止めるためにマルスは彼女の後を追ったのだった。

「ククク、そら」

「っ！」

横薙ぎされたサタンブローバーを剣士は何とか剣で受け止めた。が、

「ぐわっ！」

その衝撃に耐えきれず、そのまま吹き飛んでしまう。そして、何度か地を派手に転がることになった。

「ククク……」

劍士はすぐに立ち上がって体勢を立て直したものの、ガレスは追撃することもなく悠然と立って笑っていた。まるで、猫が鼠をいたぶるかのようになつていた。

(くうっ…)

その姿に、劍士は内心では恐怖が隠せなかった。その戦闘能力の高さも驚愕ではあるが、得体の知れない恐怖感というものがガレスから絶え間なく醸し出されているのを感じ取つていろいろいるからだ。

(こいつは何だ、バケモノか!?)

思わずそんなことを考えてしまう。この男と戦うぐらいなら、竜になつたマムクートと戦う方がよっぽど楽かもしれないとまで思い始めてもいた。そして、そんな劍士の心理状態を見抜いたかのようにガレスが振りかぶる。

「これで終わりか? ククク…」

死の宣告さながらにそう告げながら、ガレスが大上段からサタンブローバーを振り下ろした。劍士は何かかわすが、そのタイミングも戦闘開始当初より間違ひなくギリギリになつていた。

(このままでは…)

勝ち目はない。そう思つて打開策を探ろうとした瞬間、

「ナイトメア!」

ガレスが剣士に向かって右手を広げる。と、いきなり黒い霧のようなものが何処からともなく噴き出し、剣士の身体を包んだ。

「な、何だこれは!？」

慌ててそれを振り払おうとするもののそんなことができないこともなく剣士の身体はその黒い霧に包まれた。直後、剣士は自分の身体がガクンと重くなるのを感じた。

(い、意識が…)

急激に意識が薄らいでゆき、顔を上げるのも困難になる。

「中々楽しめたが…」

そんな剣士に止めを刺すべく、ガレスがゆっくりと近寄ってきた。

(このままでは…！)

その足音を耳にし、剣士は意識を失うまいと必死で抵抗する。だが、身体が言うことをきかない。そうこうしている間に、ガレスは剣士の目と鼻の先まで来ていて、そして動きを止めた。

「そろそろ終わりにしてやる」

そう宣告すると、サタンブローバーを振り上げた。そして、頭上から振り下ろす。ここまでかと剣士が諦めたが、そうはならなかった。直後、ガキンという強烈な金属音が響いたからだ。



(な、何だ？ 一体何が…)

確認しようとするもそこまでが限界だった。剣士はそのまま力なく地に伏したのだった。

「…何の真似だ？」

己の得物を防いだ槍の持ち主…ミディアを見ると、ガレスは不機嫌そうにそう尋ねた。攻撃を防いだのがオレルアンの連中ならば、納得はできないがまあわからなくもない。オレルアンにはかなり警戒されているからだ。だがミディア…アカネイアの連中となると話は当然変わってくる。アカネイアの連中もオレルアン同様にガレスを警戒してはいるが、それでも主君であるニーナの危機をガレスが救ったというのは聞き及んでいるため、こんな真似をするとは思わなかったのだ。だが、ミディアはガレスの質問には答えない。代わりに、

「…殺したのですか？」

そう、怖い表情になって馬上からガレスを睨んできた。

「…そうしようとしたところをお前が割って入ってきたのだろう。それを考えれば、俺がこの男を殺したかどうかはわかるだろう」

面白くなさそうにそう言うと、ガレスが仕方なくサタンブローバーを引いた。敵に止

めを刺そうとしたところを邪魔したのには何かしら理由があるはずと思ったからだ。それを聞いてから再行動することにしたのだ。

(どう言い繕うつもりか…)

お手並み拝見とばかりにミディアと剣士に視線を向ける。と、ミディアは慌てて馬から降りた。そして、

「アストリアー！」

と、その剣士の許へと駆け付けたのだ。

「う…」

だが、アストリアと呼ばれたその剣士は意識を取り戻さない。短く呻くだけである。

「アストリア、しっかりして！」

剣士…アストリアのすぐ側で跪いてミディアが声をかけたり身体を揺らしたりする。だが状況は変わらず、アストリアは一向に目を覚まそうとしなかった。

(成る程)

そしてガレスは、ミディアの行動で大方を察する。

「お前の男か」

「っ！」

明け透けなガレスの物言いに、ミディアの頬が赤く染まった。が、それも一瞬。ここ

は戦場ということもあり、すぐにガレスをキツと睨む。

「貴方、アストリアに一体何を……！」

「ククク、そう睨むな。只眠らせたただけだ」

そのまま、ガレスはアストリアへと視線を向けた。

「放つておいてもそのうち起きる。生命に別条はない」

「本当ね？」

「こんなくだらないことで嘘をついてどうする。まあ、気のすむまでそのまま介抱でもしている」

そしてガレスはサタンブローバーを肩に担ぐ。

「目が覚めたらその二枚目に伝えておけ。生命拾いしたな、と」

「あ、貴方……」

「クククククク……」

ガレスは愉快そうに笑うと、その場を後にしたのだった。ガレスがその場を離脱した後、入れ替わるようにマルスたちがやって来た。

ミディアは勝手に飛び出したことを謝罪すると、アストリアについて説明。程なく目を覚ましたアストリアと再会を喜び合ったのだった。

その頃には解放軍は中央通路にて戦力の再編成が終わり、改めて城を目指したのだっ

た。

長距離兵であるシューターは、その分懐に入られると弱い。一気に間合いを詰められた解放軍に、シューターの残敵部隊は有効な対処もできずに一人、また一人と生命を落としていくことになった。そして戦力を終結させたためその後は大した時間もかけることなく、新たな仲間を加えてグルニアの木馬隊との戦いは解放軍の勝利で幕を閉じたのだった。

## NO. 14 好意と敵意

グルニアの木馬隊を退けた解放軍は、一路次なる目的地を目指す。当面の最終的な目的地は勿論アリティアなのだが、そのアリティアに辿り着く前に幾つかの地を通らなければならなかった。

そしてアリティアを目指す解放軍はとある国に辿り着いた。その国の名はグラ。マルスたちアリティアの者にとっては決して忘れられない。そして、忘れてはいけない国の名である。

(父上…)

かつてのことにマルスが思いを馳せる。父コーネリアスが戦場の露と消えたのは、同盟国であったグラが裏切り後背からアリティアを攻めたからだ。言ってみればアリティア滅亡の直接の引き金を弾いたのはグラなのだ。アリティア宮廷騎士団…そして何よりマルスにとつては因縁のある相手なのである。指呼の距離まで迫ったグラの城を鋭い目で見据え、マルスはその時を待っていた。

そんな中、ガレスは陣中の自分の天幕で予期せぬ事態を迎えていた。

「クク…次はまた城内戦らしいな。であれば、また俺の出番か？」

まあ、装甲兵も増えてきたことだし、厄介者の俺の出番はないかもしれないかもしれんがなと思いつながら、ガレスは天幕の中で休んでいた。と、

「こんちわ」

「失礼する」

不意に天幕が開き、見知らぬ二人の男が入ってきた。

「? 何者だ？」

見覚えのない二人にガレスが怪訝な表情をする。ここにやってきた以上、解放軍の者であることは間違いないはずだが、誰なのかもわからなければその用件もわからなかった。

「…誰だ、貴様ら」

率直な意見をガレスが入ってきた二人に投げかけた。と、二人のうちの片方がその言葉に対してシヨックといった表情になった。

「おいおい…」

そしてその男がへこみがちに口を開く。

「そのご挨拶はないんじゃないか? まだここに加入して日が浅いとはいえ、あんたと戦場を共にしたこともあるんだぜ?」

「知らんな」

ガレスの返答は実に素っ気なく。返されたその男がますますへこんでいた。

「大の男がそんなみつともない様を見せるな。同情が買いたいなら他の奴でやれ」

対してガレスは何処までも辛辣であつた。と、このままでは話が進まないなどでも危惧したのだろうか、もう一人の男が口を開いた。

「挨拶周りに参つた。この相棒は加入して日が浅いそうだが、私はもつと浅く前回の戦いで加入したのでな。同じ兵器を操る者同士、仲良くさせてもらっているのだよ」

「兵器だと?」

「うむ」

ガレスの問いかけに、男が頷いた。そして、もう一人のへこんでいた男も氣を取り直したのか仕切り直すためか、コホンと咳払いをした。

「俺はジエイク」

「ベックだ。宜しく頼む」

「…ああ」

どうしたものかと思つたガレスだが、無駄に敵を増やす真似をするのも面倒なので挨拶を受けたのだつた。

「ところで、さつき貴様兵器とか言つたが」

先ほどそう言った片割れ……ベックに向かってガレスが尋ねた。

「ああ。俺たち二人はシューターなんだよ」

「成る程な」

そこでガレスも得心がいったのか頷いた。先日の戦いで相手にしたグルニアの木馬隊と同じ兵種なのだったら、確かにあれは兵器と呼ぶにふさわしいものである。

「そう言えば……」

二人の兵種がシューターだとわかったことでガレスがあることを思い出して口を開いた。

「ん？」

「アカネイア・パレスの辺りからだだったか、目の端にチヨロチヨロ引つかかったシューターがいたような気がしたが、あれが貴様か」

「……何かムカつく言い方だが、確かにそうだよ」

ジェイクが言葉通りムツとしながらも不承不承といった感じで答えた。ベックがそんなジェイクに苦笑している。

「あんた、かなり異質な存在らしいな」

不意に、ベックがガレスに向かってそう言った。

「ん？」



「色々と軍中での話が聞こえてくる。中々居心地の良さそうなところだけど、ただ一点、あんたのことに話が及ぶと、どうも怪しい雲行きになる」

「そうそう」

ジェイクも追隨した。

「話を逸らすか、震えて口を嚙むか、忌々しそうな表情になるか、反応は人それぞれだけど、とてもお仲間に対しての態度じゃないな」

「そうか」

素っ気なく、そして気にもしていないガレスの返答にジェイクとベックは少し驚いていた。

「そういう扱いに何か思うところはないのか？」

「別に……いや、一つあるか」

そこでガレスは二人に視線を向ける。フルヘルムの下から覗く真っ赤な眼光に、ジェイクとベックは背筋が震える思いがした。

「あいつらがまともで結構なことだ。それぐらいか」

そしてガレスの口から出てきたのは、ジェイクとベックが予想していたような返答ではなかった。

「はっ」

意味がわからず、ジェイクが思わず間拔けな声を上げてしまう。

「人間は自分の理解の及ばぬ存在に對しては恐怖心を抱く。その観点で見れば、俺を恐れるあいっらはまともだ。故に結構な話だ」

(う……)

淡々とそう語るガレスから醸し出される雰囲気、ジェイクもベックも気圧される。

「……ただ、そんな連中ばかりじゃなかったけどな」

「ほう?」

「ごく少数だが、あんたのことを信頼しているというか好意的に見ている連中もいたよ」  
「そうか。大体想像はつくが」

アテナ、マリア、バヌトウ……次点でミネルバとゴードンぐらいのものだろう。

「……これだけ人が集まれば、物好きも少しはいる。それだけのことだ」

「そうか。それじゃあよ」

気圧されていたが何とか気を取り直して、ジェイクが少し身を乗り出した。

「ん?」

「俺たちもその物好きに入れてくれよ」

「何だと?」

鎧の下でガレスの眉がピクリと跳ね上がった。

「何を考えている、貴様ら…」

「そう凄まないでくれ」

ベックが再び苦笑した。

「ただ単に、あんたに興味が出たからだ。それに同じ軍で戦う者同士、誼を通じていて困ることはないだろう？」

「…物好きだな」

「否定はしないよ。けど、どっちかって言うならフットワークが軽いつて言ってもらいたいね」

「そうだな。正式な軍属の連中は立場や地位があるからこうはいかないんだろうけど、俺たちみたいなフリーの戦士はそういうしがらみがないからな。誰とどういう関わり合いを持つとうが自由なのさ」

「成る程な。軍属には軍属の、フリーにはフリーのメリットやデメリットがあるということか」

「そういうこと。それに、正体不明の凄腕の戦士とかワクワクするじゃねえか」

「ククク、能天気なことを…」

いつものように鎧の下でガレスが不気味に笑った。その雰囲気には、やはりジエイクとベックが気圧される。が、

「まあいいだろう。友好的な連中を無下にあしらうほど俺もバカではない。慣れ合う気はないが、付かず離れずの程よい距離感を保つのなら、貴様たちの好きにするがいいさ」「本当か!？」

ガレスの返答にジェイクの顔がぱあつと輝いた。

「嘘をついてどうする」

「よっしゃー!」

ジェイクがガッツポーズした。ベックも満足そうに頷いている。

「んじゃ、これからよろしく頼むぜ」

「お手柔らかに」

「それは、貴様ら次第だな」

再びガレスが鎧の下で笑った。そうしてまた奇妙な縁がここに生まれたのだった。しかし、良縁が生まれれば悪縁も生まれるもの。禍福は糾える縄の如しとはよくいったものである。

「おい」

ジェイクとベックが天幕から去った後、グラ城攻略前の陣中を何気なく歩いていたガレスが背後から声をかけられた。

「ん？」

振り返ると、そこには見知った顔が二つ。一人はミディア。そして、

「貴様はあの時の……」

そこには先日、グルニアの木馬隊との戦いの際に相手をしていた剣士がいた。

（名前は確か……アストリアとか言ったか）

何故か敵意の籠った眼差しで睨んでくるアストリアに、面倒なことになりそうだなと内心で辟易しながらガレスは応対することにした。

「ミディアの男か」

「アストリアだ。そういう言い方は止めてもらおうか」

「クク……だが事実だろうか？」

「ッ！ こいつ！」

「アストリア！」

アストリアが激昂しそうになるところをミディアが抑えた。そうされて不満はあり  
ありだったが、アストリアは何とかこらえた。

「クク、お前も大変だな」

そんなアストリアを尻目に、ガレスは何時もの調子でミディアに視線を向ける。

「あまり挑発しないで」

「した覚えはない。大体、挑発などに乗るほうが悪い」

「そうかもしれないけど、する方に責任がないとは言えないわ」

「クク、まあいいだろう。こんなところで水掛け論をする気もないしな。それで…」

ガレスがアストリアに再び視線を向けた。

「何か用か」

「用があるから声をかけた。そうでなければ、貴様など呼び止めはしない」

「成る程。正論だな」

（…一々鼻につく男だな）

ガレスの態度にアストリアが苛立つ。最初は敵として相対したからということもあるのだろうが、どうもこの二人は壊滅的に相性が悪いようだった。

「…貴様がオレルアンでニーナ様をお救いしたということ聞いたのでな。一応、礼を言いに来た」

「アカネイアの連中は揃いも揃って忠臣ばかりか。結構なことだ」

ガレスは何気なくそう呟いたのだが、それがまたアストリアに火を点けてしまった。

「…それは何か？ つい先日までドルーアの手先だった俺に対する当てつけか？」

「アストリア！」

ミディアがたしなめる。

「そんなつもりはないが、そう聞こえるのなら随分根性のひん曲がったことだな」  
「！ 貴様ツ！」

思わずアストリアが腰の剣に手を掛けた。

「止めて！ アストリア！」

ミディアが必死で止める。ガレスはただでさえ衆目の視線を集めやすいのだが、この時にはもう周囲の注目をすべて集めるまでになっていた。

「ミディア！」

「陣中で刃傷沙汰を起こすつもり!? 貴方もさつき言ったでしょう、この人はニーナ様の命の恩人なのよ！」

「しかし……！」

「落ち着いて。そんな真似をして、ニーナ様に会わせる顔があるの!？」

「クツ！」

憤懣やるかたないといった感じだが、主君を出されてはいかんとしがたかった。アストリアは収まらないといった感じではあったが、必死に心を落ち着かせて剣から手を放した。

「はあ……」

ミディアが披露困憊といった感じで大きく息を吐いた。尋常じゃない様子になって

いる二人に対してもう一方の当事者であるガレスはというと、  
(鬱陶しい連中だな…)

そう思っていた。先ほどミディアに言ったようにガレスは挑発した覚えはない。多少の皮肉は混ぜたつもりだが、それでも軍属の騎士がこんな安い皮肉に乗ってくるとは思わなかったのだ。第一、ガレスは間違ったことを言っている認識はなかった。しかし、イメージというものは恐ろしいもので、周りを取り囲んでいる連中の大半がガレスに対する非難の視線やミディアやアストリアに対する同情の視線を向けていた。

何も知らない癖にとは思わないでもないガレスだったが、一々事情説明するような面倒なことはしたくないために放っておく。それがまたガレスに対する謂れなき(?) 誤解を招くことにもなるのだが。

「おい」

ガレスがミディアに向けて口を開いた。アストリアとは、こちらはともかく向こうはどうにもまともに話ができる状態ではないため、ミディアに矛先を変えたのだ。

「な、何?」

少々驚きつつも、ミディアが答える。

「用件はそれだけか?」

「え、ええ…」



「わかった。それが用件なら、ありがたく頂戴しよう。だから戻れ。出撃の準備でお前たちもやることはあるだろう」

「わ、わかったわ。アストリア」

「ああ」

大分落ち着きを取り戻したのだろう、アストリアも頷いた。そして一度大きく呼吸をすると、ガレスを鋭く睨みつけてそのままクルリと背を向けたのだった。その後を、ミディアが小走りで着いていく。

(ククク、嫌われたものだ…)

後ろから見ていても怒気を孕んでいるのが良くわかるアストリアの後ろ姿に、ガレスはいつものように咽喉の奥で笑っていた。何故か話が拗れてしまい、ここでまた一つ余計な因縁ができてしまったのだった。

(取り敢えず、あの男の前には立たないようにするか。背中から斬られてはたまらんからな)

もつとも、それで殺せるような俺ではないがな…ガレスはそう考えながら、その場を後にしたのだった。

「アストリア」

ガレスの前から立ち去って己の天幕に戻るアストリアに、ミディアが追い付いて声をかけた。が、アストリアは無言で歩を進めている。

「どうしたの、一体？」

いつもと違うアストリアの様子にミディアが心配になって尋ねた。と、アストリアはその場で足を止めてミディアに振り返る。

「理由は言わずともわかるだろう？ ミディア」

「ガレスのこと？」

「ああ」

アストリアはコクリと頷いた。

「あれはどう見たってこっち側の存在じゃない。ガーネフやメデイウスと同じ向こう側の存在だ。それなのに、なぜここにいる」

「でも、あの男はニーナ様を……」

「わかっている。だが、それだと言ってみれば不可抗力だ。偶然が重なっただけのこと。それでもニーナ様は御身を助けられたということ随分あの男に目をかけられているようだが、君もジョルジュもボア様も、他のアカネイア騎士団の連中も奴のことを良しとはしていないだろう」

「それは……ええ」

ミディアがおずおずとだが、しかしハッキリと頷いた。

「それにオレルアンの連中も、あの男にはあまりいい感情を持っていないのだろうか？」

「それもその通りよ。まあ、自分の領内で盟主であるアカネイア王家の王女がかどわかされかけて、それを自分たちで始末つけられなかったのだからしょうがないかもしれないけど」

でも、とミディアが反論する。

「この軍の全軍の指揮官であるマルス王子はガレスを排除しようという気はないみたい。少なくとも表立ってはね。だから、どうすることもできないわ」

「わかっている。だからこそ、余計に腹立たしいのだ！」

アストリアが近くに生えていた木の幹に、イライラを叩きつけるかのようにガンと拳で叩いた。

「とにかく、あの男はニーナ様に極力近づけない方が良い。ニーナ様も御身の立場はわかっておられるだろうから大丈夫だとは思いますが、万に一つということもあつてはならないからな」

「ええ。わかっているわ」

言いたいことを言い終わつたからか、そこでようやくアストリアはいつもの落ち着きを取り戻す。そして、その落ち着きを更に取り戻すために数回深呼吸をした。

「落ち着いた?」

頃合いを見計らってミディアがアストリアに話しかける。

「ああ」

アストリアがミディアのよく知る雰囲気に戻って頷いた。

「すまなかつたな、ミディア。先ほどは」

「気にしないで。アカネイアの騎士の立場ならば当然のことだから」

「そう言ってくれると助かる。行こう、ミディア。我々も出撃の準備に取り掛からねば」

「ええ」

頷いたミディアと共に、アストリアは歩き出した。ミディアに思いをあらかた吐き出したものの、アストリアの心中にはまだ不満が燻っていた。それが後々、大きく燃え広がることになるのだが、この時はそんなことになるとはミディアもガレスも、そして何より本人であるアストリア自身も予想してはいなかった。

グラ城での戦いは熾烈な激戦となった。グラ軍としても本城であるここを落とされるわけにはいかず、対して解放軍もこの先へ進むためには決してここで敗れるわけにはいかなかった。城内、あるいは城外のそこかしこで激闘が繰り広げられるが、最後には

これまでの経験の差が出た。激戦の末に解放軍は敵将であるジオルを討ち、グラ城は陥落して勝利の鬨の声を上げることになったのだった。

そしてガレスは、自身が想像した通り今回の戦いでは留守を任されることになった。機動力が物を言う広いフィールドや、島嶼国家などの複雑な地形の野戦ではなく、じつくりと進軍していく城内戦でありながら、である。

他の装甲兵は何人か出撃していたので、ただ単に今回はお休みということなのか、それとも違う理由があるのかは、総大将であるマルスにしかわからないところではある。ともかくにも、グラ城での戦いはガレスの出番のないままに解放軍の勝利で終わり、解放軍は次なる戦いの地を目指すことになる。

その戦勝の夜更け、見張りなど一部の者を除いた大多数が眠りに就いている中、ガレスは己の天幕から姿を現した。

「ふう……」

いつもの如く漆黒のフルメールで身を包んでいるガレスは、ゆつくりと首を左右に捻った。眠りが浅かったのか、変な時間に目が覚めたのである。

…いや、ここで目が覚めたのはあるいは運命だったのかもしれない。

(またか……)

夜の空気に当たりながら、ガレスはここ最近感じるようになったある気配を感じてい

た。敵意や害意のあるものではないのだが、時たま纏わりつくような気配を感じるのだ。

探るような気配だけであり、何をしてくるということもなかったので放っておいたが、いい加減鬱陶しくなってきた。

(丁度いい、炙り出してやるか)

そう考えたガレスは不意に夜の闇の中を歩き出した。そのガレスに付かず離れずの距離を保ちながら、その気配の持ち主も一緒に移動してくる。

(ククク、来い来い)

鎧の下でほくそ笑みながらガレスは人目に付かぬように陣中の外れまで移動する。そして、不意に近くの森の中へと入った。

「！」

ガレスを見失った気配の主は驚き、そして迅速にガレスが森へ入った場所まで移動する。逸る気持ちを抑えながらも決してガレスには気取られないようにそつとその人物も森の中へ入った。が、そこにはガレスの姿は何処にもなかった。

「え……？」

周囲を見渡してみるが、ガレスの姿はない。新月や曇天の下ならともかく、今日は満月ではないにせよ月は出ている。視界はそれなりに確保できるために辺りの様子かわ

からないということとはなかった。と、

「こんな真夜中に散歩か？」

「！」

不意に背後から声をかけられ、ビクツとその人物が飛び上がった。悲鳴を上げなかったのはハッキリ言つて奇跡である。そしてその声色は、間違いなく聞き覚えのあるものであった。

(ど、どうして!?)

パニックになりながらもそろそろと振り返る。そこには、いつの間に立っていたのか漆黒のフルメールに真紅の瞳、ガレスの姿があった。

「ヒッ！」

顔を引き攣らせながらその人物が弾けるように飛んでガレスから距離を取った。

(こいつは…)

一方、ガレスは予想していなかったその人物の姿に、多少なりとも驚いていた。目の前にいたのは意外や意外、年端もいかぬ少女であったからだ。そしてそれと同時に、ガレスはその姿に見覚えがあるのを感じる。

(確か…そうだ、アカネイアの戦勝の宴で見たような気がする。ニーナの側にいたと思つたが…)

何とかそこまで思い出したところで、

「あ、貴方……」

その少女の方から口を開いてきた。

「何だ？」

虚勢を張っているのは手に取るようにわかるのだが、それでも相対している度胸に免じてガレスは少女の相手をしてやることにした。

「あ、貴方こそこんな夜中に何をしているの!? それも、鎧まで着込んで！」

糾弾するように強い口調でガレスを詰問する。が、年端もいかぬ少女の詰問に怯むようなガレスであるわけがない。

「眠りが浅かったのか、変な時間に目が覚めてな。夜の空気を吸おうとしたまでだ」

「じゃ、じゃあ、その鎧は!？」

「この時のためさ」

「え……？」

その意味がわからず、少女が思わず語気を緩めた。と、

「わからないか？」

ガレスが尋ねる。コクリと頷いた少女に、

「最近俺の周りをチヨロチヨロと嗅ぎまわっているネズミがいたからな。ネズミ退治の



ためだ」

「ッ……！」

そこで少女が固まった。そのネズミに当てはまるのは誰か、考えるまでもない。そして次の瞬間、ガレスの手が伸びて少女の両手首をまとめて抑えた。

「あっ！ やっ！」

何とか拘束から逃れようとジタバタするも、そのまま吊り上げられてガレスの視線と同じ高さまで持ち上げられる。ならばと顔を背けて目を逸らそうとするも、残ったもう一方の手で無理やり顔を正面に戻されて目を合わせさせられた。

（ヒッ！）

血や感情の通っていないような真紅の瞳に射抜かれ、少女は恐怖に固まってしまった。

「小娘、何が目的だ」

「は、放して！」

相変わらずジタバタするが、当然ながらガレスはビクともしない。

「放してくれないと、人を呼ぶわよ！」

「やってみろ。誰かが駆け付ける前に、貴様の首がへし折れるか窒息する方が早いだろうがな」

その声色、そして魂をも凍らせるかのように錯覚させるほど冷徹な視線と強くなる握

力に、少女は震えが止まらなかった。

(ほ、本気だ……)

それを本能で悟り、少女は目に見えてガタガタと震え出した。と、

「…フン」

不意に、ガレスが少女を放した。

「きゃっ！」

重力に従って落下し、地面に尻餅を着くことになった少女はしきりに自分の尻を擦る。

「痛ったーいー！」

涙目になりながら擦り続ける少女に、

「自業自得だ」

と、ガレスが吐き捨てた。

「うう……」

その言葉に恨みがましく思った少女だったが、ガレスの言うことももつともだったし、何より解放されたことに安心したためにそれ以上恨み言は言わなかった。と、

「おい、ネズミ」

不意にガレスが口を開いた。

「ネズミじゃないわよ！」

侮蔑するようなその呼称に、先ほどまでの恐怖は何処へやら、憤懣やるかたないといった表情で少女が文句を言う。

「ならば目障りなゴキブリか？ それとも鬱陶しく飛び回る蚊の方が良いか？」

「失礼なこと言わないで！ 私はリンダよ！」

そこで始めて少女が自分の名を名乗った。

「ほお、そうか」

ガレスが少女：リンダの名を聞いて頷いた。と、リンダの表情が怪訝なものになる。

「どうした？」

それに気付いたガレスがリンダに尋ねた。

「貴方：私のこと覚えていないの？」

「知らんな」

「なッ！」

リンダがガレスの返答に思わず絶句した。

「いや、正確にはアカネイア奪還のときの宴でニーナの近くにいたような気はしたが、それだけしか覚えていない」

「ニーナ様が紹介してくれたでしょう!？」

「覚えていないな。関わりができるかどうかわらん奴の顔など、一々覚えていられるか」

「な……な……」

リンダが口をパクパクさせる。覚えていないというのも業腹だったが、その傲岸不遜な物言いに開いた口が塞がらなかったのだ。

「フン、まあいい。…で、リンダ」

「…何よ」

今までの無礼な物言いに、リンダがムスツとしながら答えた。

「貴様、何のつもりで俺を探っていた」

そう言われ、リンダがハツとしてそのことを思い出した。そして間髪入れずに再び距離を取ると、今までで一番厳しい表情になってガレスを睨む。

「…聞きたいことがあるの」

「ほお？ で、何だ？」

ガレスが軽く首を捻るとその先を促した。

「…貴方」

「ああ」

「…貴方、ガーネフの手の者なの？」

「ガーネフ？」

リンダはこれ以上なく真剣な面持ちでそう尋ねるが、ガレスは何のことかサツパリ分からなかった。なので、

「誰だ、それは」

自分の思っていることを正直に述べることにした。と、リンダが驚いたような表情になる。

「嘘でしょう…？」

そして今度は、そのままの表情でそう呟いた。

「ガーネフのこと、知らないの？」

「知らない」

ガレスの更なる返答に、リンダは未だ驚きが隠せない。

「が、ガーネフよ!? 魔王ガーネフ」

「だから、知ら…いや、待てよ」

そこまで念を押されてガレスはようやく頭に引つかかるものがあつた。ここに墮ちてきた最初の頃、モロドフに一通りこの世界のことを習ったことがあつた。その中で今の名前が挙がつていたような気がする。

(もつとも、うろ覚えだから自信はないがな)

しかし恐らく間違いはないだろう。目の前のリンダの反応を見てそう納得すると、「思い出した。名前だけは聞いたことがあるかもしれん」

と、訂正したのであった。

「…本当にそれだけ？」

リンダが訝し気な表情でガレスを観察する。が、

「ああ。第一、貴様のような尻の青いガキを謀つてどうする」  
相変わらずの傲岸不遜な態度でガレスは返したのだった。

「ッ！ ホント、失礼な人ね」

「お互い様だ。チヨロチヨロチヨロチヨロと周りを探っていた奴に言われたくはない」  
「ほつといて」

ムスツとした表情でリンダが答えた。

「フン、まあいい。それで、そのガーネフとやらは何者だ」

「…私の、父の、仇」

その瞳に復讐の炎を燃やしながら、リンダが噛み締めるようにそうガレスに返答したのだった。

「ほお…」

全く無関係ではあるが、面白そうな話題が出てガレスは興味を惹かれた。

「もう少し詳しく話してもらおうか」

「…いいわ」

リンダが頷くとガーネフのことを話し始めた。大賢者ガトーの弟子でありながら嫉妬に狂い、禁じられた暗黒魔法マフーに手を出して暗黒の道に堕ちたこと。そしてドルーアのメデイウスと手を組み、世界を我が物にせんと暗躍を続けていること。同じくガトーの弟子であった父ミロアを殺されたこと。そういったことを簡潔にガレスに説明したのだった。

「…成る程な」

ひとしきり聞いたところで、ガレスが口を開いた。

「それで、ここに加わってから貴方のことを聞いたの。聞けば聞くほど、ガーネフに繋がっているような、ダブるような気がしたから探っていたのだけど…」

「逆に俺におびき出されて、まんまとそれに引つかかったというわけか」

「う…」

リンダが言葉に詰まる。反論しようにも、事実だけに何も言えない。

「まあいい」

だがガレスはそれ以上追求しようとはしなかった。

「お前の行動の理由はよくわかった。だが俺は、そいつとは何も関係ない。残念だった

な」

「でも、貴方はどう見たって……」

「ああ」

リンダが続けようとしたが、遮ってガレスが口を開いた。

「確かに俺も暗黒道の住人だ」

「！ やっぱり！」

リンダが厳しい表情になってガレスを再び睨む。

「ククク、そう睨むな」

だが、ガレスはそんな視線もどこ吹く風と受け流した。仕方のないことではあるが、やはり踏んでいる場数が違うとあって、ガレスの方がリンダより一枚も二枚も上手であつた。

「だが、俺はその男とはまた違った違った暗黒道だ。俺を殺したところでその男に繋がりはせんから何の意味もない」

「でも、暗黒の力は……」

どうにも割り切れないリンダ。毛色が違うと言われても、父を殺した力と同系統の力の持ち主が同じ陣中にいるのは忸怩たる思いがあるのだろう。

「力は何処までいっても所詮力だ。要は使い方と何のために使うかだ」



ガレスが静かに語る。

「俺の力は確かに褒められたものではない。それは俺も認めよう。だが、俺は自分の力をこの軍の内に向かって使ったことはない。それでも、暗黒の力だからと糞も味噌も一纏めにして排除するか？」

「……」

静かに語るガレスの語りを、リンダは真剣な面持ちで聞いていた。

「それでも納得いかなければ仕方ない。闇討ちでも何でもするんだな。但し」

「但し？」

「俺も大人しく殺されてやるほどお人よしではない。もしその気があるのなら、自分の生命を懸けるつもりでかかってこい」

そこで話は終わったとばかりに、ガレスは身を翻した。

「もう大分遅い。早く休め」

首だけ振り返りそう言い残すと、そのままガレスはその場を立ち去ったのだった。そして、後に残されたリンダは複雑な面持ちで俯き、暫くその場から動けなかったのだった。

(魔王……か)

自分の天幕へ戻る道中、ガレスがさっきのリンダの話进行出す。

(まるで俺だな……)

きっかけは違えど、闇に堕ちたという事実に関して言えば同じことである。違うのは向こうは未だ深淵の闇の中。そしてこちらは徐々にはあるがその呪縛から抜けてきているということだろうか。

(ククク、楽しみだ……)

どちらにせよ、いずれは一戦交える相手。その時どうなるか……ガレスは静かにその時を待つことにして、そのまま天幕へと戻ったのだった。

## NO. 15 闇の因縁

グラ王国との戦に辛くも勝利した解放軍は、一路、アリティアへの道のりを進んでいく。残る主要な敵はドルーア、マケドニア、グルニアの三か国。アカネィアを取り戻し、今またグラまで制圧したことで解放軍の士気は大いに上がっていた。次の目的地であるアリティアも、遠い目標ではなくなっていた。

だがその前に、避けては通れぬ場所があった。その名は魔道の国カダイン。魔道士たちの聖域であるこの地を牛耳っているのは、ドルーアの総帥であるメディウスと並ぶ解放軍の怨敵、魔王の異名をとる闇の司祭ガーネフであった。

だが解放軍にも、本来は相容れないはずの強烈な闇が一つ。どちらの闇が勝るのか、間もなく巡り合うときが来ていた。

(さて…)

グラ城を制圧してカダインが目前に迫ったある日、ガレスは陣中を当て所もなく散歩していた。

(グラ城からここまでの間、多少の小競り合いはあったものの戦闘らしい戦闘はなし。被害がないのは結構なことだが、つまらんな…)

この頃戦闘らしい戦闘がないため、ガレスは暇を持て余していた。と、

「あの…」

不意に、誰かに声をかけられる。だがガレスはそれを無視した。

(次の戦場では楽しめればいいのだが…)

そんな不穏なことを考えながら歩を緩めることなく進んでいく。と、

「ねえ…」

また、誰かに声をかけられた。先ほどとは違う声色だ。しかし、ガレスは相変わらず立ち止まろうとしない。と、

「ちよつと！… その真つ黒！」

怒気を孕んだ声が周囲に響き渡った。その言葉に、周囲の面々がビクツとしながら声の主に視線を向ける。周囲の面々が視線を向けた先…すなわち、己の背後にガレスが振り返った。そこにはそれぞれ、ムツとした表情と、苦笑を浮かべている女性の姿があった。

(…誰だ?)

見覚えのないその二人の姿に、ガレスは訝しがる。青と緑の髪色のその二人は、これ

まで会ったことがなかったように思えた。が、  
(いや…)

良く見ると、どこかで見覚えがあるような気もしてきた。周囲の面々がハラハラしている様子の中で、ガレスは彼女たちに答えることにした。

さっきの一言はどちらが言ったのかはわからないが、この状況から考えてガレスに向けての言葉だったのは間違いないからである。

「何だ」

いつもと変わらぬ様子で口を開く。と、

「あのねえー!」

青い髪の娘がムツとしたまま嘯みついた。その姿に、周囲の面々が驚いて固まってしまふ。

「何で話しかけているのに無視するのよー!」

「何?」

青い髪の娘の言っていることが一瞬理解できず、その横に立っている緑の髪の娘にガレスが視線を向けた。

「ええ、まあ、その通りです」

察した…と言うわけでもないのだろうが、彼女が頷いた。

「貴様ら、俺に用があったのか」

ガレスの問いかけに、

「そうよー！」

「はい」

二人が頷いた。と、

「そうか、それは……」

ガレスが一拍置く。そして、

「失礼したな」

そう謝罪すると、深々と二人に頭を下げたのだった。

『えっ……』

予想もしていなかったガレスの行動に、二人は驚いてしまう。周囲の面々もガレスの  
とつた行動に目を丸くしてビックリしていた。

『……』

予想外の行動に固まってしまったままの二人に、ガレスは頭を上げると話しかけた。

「何しろ俺は未だにこの軍では厄介者でな。声をかけてくる者など皆無に等しいので、  
まさか俺を呼んでいるとは思わなかったのだ。許してほしい」

「あ、う、うん……」

青い髪の娘が頷いた。先ほどまでの怒りは何処へやら、毒気を抜かれたかのようにコクリと素直に頷いたのだった。

「それで？」

改めて、ガレスが二人に話しかける。

「え？」

緑の髪の娘がキョトンとした表情で小首を傾げた。

「いや……呼び止めたからには何か用があつてのことだろう？ 何の用だ」

「え、あ、ああ……」

そこでようやくそのことに思い至つたのか、彼女はコホンと一つ咳払いをした。そして、

「貴方にお礼を言いに来たの」

と、目的を話したのだった。

「礼だと？」

しかし、ガレスはピンとこない。それもそのはずで目の前の二人はどこかで見たような気はするものの、逆に言えばその程度の印象しか持ち合わせていない。そんな良く知らない連中に礼を言われるようなことはしていないからだ。

「何かの間違いだろう」

そう判断したガレスは身を翻してその場を立ち去ろうとした。が、

「マリア様の件よ」

青い髪の娘の一言でその動きを止めた。

「マリア？」

身を翻したまま首だけを二人に向ける。と、

「ええ」

「はい」

二人がコクリと頷いた。

「ディール要塞で、マリア様を救ってくれたそうね」

「ああ」

そのことについてはその通りなのでガレスが頷いた。

「そのお礼」

「そうか。…と言うことは、貴様らはマケドニア白騎士団。ミネルバの直属か」

『そう』

二人がほぼ同時に頷いた。そこでガレスは、ようやく彼女たちが自分を呼び止めた理由がわかった。

「そうか」



そしてそれと同時に、何故見覚えがあるのか思い至ったのだった。

「思い出したぞ。貴様ら、レフカンディでミネルバと共に攻めてきたあの天馬騎士たちだな」

「ええ」

緑の髪の娘が頷いた。そして、自分の胸に手を当てる。

「私はパオラ。こっちは妹のカチュアよ」

「お久しぶりね」

緑の髪の娘：姉であるパオラに紹介されて、青い髪の娘：カチュアが軽く頭を下げた。

「ガレス。黒騎士ガレスだ」

返礼とばかりにガレスも名を乗った。と、

「良く知っているわよ。名前はここに加わって初めて知ったけど、貴方自身のことは良くね」

「ほお？」

カチュアの言った内容に、面白そうな口調になってガレスが尋ねた。いつの間にか、パオラ自身も表情がムツとしたものに変わっている。

「貴方のせいで、妹が：：エストがひどい目になったからね」

「そんな名は知らんが、あの時俺が真つ二つにしてやろうと狙ったあのピンクの髪の毛か？」

「ええ」

パオラがムツとしたまま不満ありありな口調で頷いた。

「クク、そうか…」

対してガレスはいつも通り、楽しそうに咽喉の奥で笑っていた。

「戦士として使い物にならなくなったか？」

「なりかけたわよ。お陰様でね」

「今は何とか戦線に復帰してるけどね」

「クク、そうか。それで、その小娘はどうした」

ここにはいないエストのことをガレスが尋ねた。関わり合いたくないから隠れているのだろうか。

「あの子は別任務」

しかし、パオラから返ってきたのはガレスの予想を裏切る言葉だった。

「だから、今ここにはいないわ。いずれ合流するでしょうけど」

「ほお、成る程」

ガレスが頷いた。こちらとしてはあの時は敵同士だったし、あの行動は何ら恥じるも

のではないと思っっているが、相手が怯えているのだっただら無理に接触する気もなかった。

（本当に、俺も甘くなつたものだ…）

しみじみそう思いながら、

「合流したら、俺に接触しないように気を付けるのだな」

と、パオラとカチュアに忠告した。

「勿論、そうするわよ」

「ええ。ただ、それとマリア様の御命を救ってくれたことは別だから。その点に関しては感謝しているわ」

「それと、おかげでミネルバ様が意にそわぬ戦いをしなくて良くなったこともね」

「わかった。それと、礼ならマルスに言うんだな。ディールに進軍を決めたのは奴だからな」

「ええ」

「わかつているわ」

「クク、ならばいい」

最後にそれだけ言うと、用件はもう済んだとばかりにガレスはパオラとカチュアの許から立ち去った。その後ろ姿を、パオラとカチュアは少しの間黙って見送つたのだっ

た。

進軍の準備を終えた解放軍は、一路カダインを制圧するために出撃していく。魔道の国であるカダインの主兵力は当然魔道士で構成されている。それともう一つ大きな特徴として、カダインは砂漠の国であった。

ジリジリと炎天下の太陽が地上に照り付けている。そんな地理的要因もあり、解放軍の今回の主兵力は地形を苦にしない飛兵と、砂に脚を取られにくい歩兵や魔道士であった。騎兵や重装兵などはお休みということになるため、当然、今回もガレスの出番はなかった。

「……」

進軍が始まったばかりのため、まだそう遠くには行っていない友軍の姿を見ているガレス。軍のはずれでそうしていたのだが、そんなガレスを見張るような視線がいくつもあった。最初の頃よりは数が減ったものの、まだ幾つかこういった視線はある。

(ご苦労なことだな)

鬱陶しいが、一々相手にしていたらきりがないためガレスは捨て置いていた。先日のリンダのようなあまりに露骨なものだったら対処しようかとも思うのだが、本当に見

張っているだけで何もしてこないためにガレスは黙殺することにしていたのだ。

(オレルアンか？ アカネイアか？ あるいはアリティアか？)

自分を探らせそうな勢力を次々と思い浮かべながらいつものように鎧の下で咽喉を鳴らして忍び笑いをするガレス。と、

「！」

ガレスの背筋に急に悪寒が走ったのだった。それもかなりの。

(何だ、今のは!?)

その悪寒はまさに今解放軍が戦場としてある場所の近くから感じ取ることができた。先日のリンダとの会話がすぐに頭に浮かぶ。

「…」

後方とは言え戦場ということ得物を持っていたことに僥倖を感じると、ガレスはそのまま戦場へと向かっていった。そしてその行動を、ガレスを見張っていた幾つかの影がそれぞれの主人に報告すべく戻ったのだった。

「状況は？」

一方、こちらは戦場の本隊。緒戦を制したマルスは周囲を見渡しつつ状況を確認し

た。

「被害は軽微。重傷者や戦死者はおりません」

「肉眼で見る限りには、視界内にはもう敵もないようだな」

答えたのはオグマとナバルだった。今回は軒並み騎兵がお休みということでジェイガンたちやハーディンたちですら編成していない。そのため、参謀役的なポジジョンにこの二人がついていた。と、

「マルス様！」

上空から四つほど舞い降りる影があつた。東西南北へと偵察へと向かわせていた、シーダ、ミネルバ、パオラ、カチユアの四騎である。

「みんな、ご苦労さま」

マルスの労いに表情を崩してそれぞれ礼をする。

「姉様！」

無事戻ってきたミネルバにマリアが飛びついた。

「マリア」

「無事だったんだね、良かった！」

「当たり前でしょう、偵察なのだから。それより、報告がまだなのだから離れなさい」

「あつ、ご、ごめんなさい！」

申し訳なきように慌ててミネルバから離れるマリアの姿にほっこりしながら、マルスはシーダたちに向き直った。

「どうだった？」

「はい」

全員が普段の面持ちになって報告を始める。

「先ほど合流したときに情報を交換し合ったのですが、伏兵の存在は確認できませんでした」

「航空戦力の増援もありません」

「残存兵力は砂漠で迎え撃つ姿勢を見せている現有戦力だけで間違いないかと」

「そうか。わかった」

シーダ、パオラ、カチュアからの情報を聞き、次の一手を考えるマルス。と、

「マルス王子」

ミネルバがマルスに話しかけてきた。

「何かな、ミネルバ王女」

「うむ、残存の敵兵力の少なさとこの立地、増援の気配がないことか迅速な行動が望ましいと思われるが、如何かな」

「そうだね。それは僕もそう思っていた」

ミネルバの私見にマルスも賛同した。

「ここは何せ魔道の国であるカダイン。これまでとは違って気候も大きな敵になる。魔道士であるマリクたちはともかく、軽装とはいえ鎧を着こんでいる皆には辛いだろう」

「そうですね」

オグマも同意した。

「それに…大物が出てこない保証もないしね」

「ガーネフ、か」

ナバールの眩きに側にいたリンダの身体が僅かに震え、表情が強張った。

「うん…」

そして、マルスの表情も強張る。

「ここはガーネフの、言ってみれば庭みたいなものだ。出張ってこないならそれに越したことはないけど、そんな保証はどこにもない。それに、今の僕達にはガーネフに対抗できる術はない。…だったよね、リンダ」

「はい…」

悔しそうに歯噛みするリンダに周囲の視線が集まった。

「ガーネフの持つマフーの魔道書には普通では太刀打ちできません。対抗策を見つけないければなりません、それまでは悔しいですがやり過ぎすしか…」



「となれば、もしここにガーネフが現れたら尻尾を巻いて逃げるしかないな」

ナバールの指摘にリンダがますます悔しそうにした。

「そうだね。そしてその間に、僕が拠点を制圧するしかない。そのために、今回は身軽なメンバーで出撃したからね。さて、それじゃあ行こうか」

そしてマルスが指示を出す。

「オグマ、先陣は君の部下たちに任せたい」

「はい」

「ナバール、シーザとラディ、アテナにもオグマの部下たちと同じく先陣を務めるように伝えてくれ。オグマとナバールは彼らの両翼についてサポートを」

「わかった」

「マリクやリンダたちは後方から先陣の援護を、シーダたちは引き続き哨戒と伝令、撃ちもらした敵の掃討を頼む」

「はい」

「マリア王女やレナにリフたちはマリクたちの更に後ろで負傷者の治療にあたってくれ」

「わかりました！」

一通りの指示を出す。そして、行動を開始しようとした時だった。

『ふふふ……』

どこからともなく笑い声が聞こえる。

「ツ！」

「誰だ！」

「……」

マルスが表情を強張らせ、オグマが周囲に視線を走らせた。ナバールは既に腰の剣の柄に手を掛けている。

『……まで御苦労なことよの』

その不気味な声は鳴りやまず、再度周囲に響き渡った。マリアなどは姉様あ…と、身を震わせながらミネルバに抱き着いていた。そして、ある一点にどこからともなく闇が集合し、それが具現化し始めた。そして、その闇が人の姿を象る。

現れたのは、およそ生きている人間として認識するのすら怪しい顔色の壮年の魔道士だった。そして、この場でその人物が誰かを知っているのは只一人。

「ツ！ ガーネフッ！」

憎しみに満ちた表情でリンダがその壮年の魔道士…ガーネフを睨み付けたのだった。もつとも他の面々も今の話の流れから、この、いかにもヤバそうな気配の魔道士が誰なのかは容易に察することができただろうが。

「小娘…」

姿を現したからだろうか、先ほどまでと違ってハッキリと声が聞こえるようになった。そして名前を呼ばれたためにガーネフはリンダに視線を向け、にやあつと怖気の走るような笑みを浮かべたのだった。

「その顔には見覚えがあるな。確か…」

「忘れたとは言わせないわ」

恐怖と憎悪と怒りがないまぜになった感情を持って余しながらもリンダがしっかりとガーネフを見据えた。

「お父様が殺された時のことは、今でもこの目に焼き付いている」

「…そうか、貴様、ミロアの娘か」

ようやく思い出したのか、ガーネフが楽しそうに笑った。

「ええ！」

「ふふふ、成る程な。それで、敵討ちでもするつもりか？」

「当然！」

言うが早いか、リンダがオーラを詠唱してガーネフに放とうとする。が、突然身体が硬直して動けなくなった。

「！ か、身体が…」

「愚か者め」

ガーネフが侮蔑しながら吐き捨てた。その手に持つ不気味な魔道書が暗く明滅している。

「ふん！」

ガーネフの右手から暗黒の思念体のようなものが現れるとそれがリンダに襲い掛かった。

「きゃああああつ！」

リンダがその思念体に包まれて悲鳴を上げながら吹き飛んだ。

「リンダ！」

マルスが慌てて駆け寄る。かなりの深傷だった。

「う……う……」

苦しそうにリンダが表情を歪ませて呻く。先ほど自分で、今の状況ではガーネフに対抗できないと説明したのに、感情が制御できなくなってしまうって迂闊な行動に走った結果がこの様である。

「リフ、回復を！」

「お任せください」

「わ、私もお手伝いします！」

リフト、ミネルバにしがみついていたマリアが恐怖に駆られながらも勇気を出してリンドラの許に駆け寄ってライブをかけた。

「ふふふ…」

再び聞こえてきたガーネフの嘲笑に、リンドラたちを除くその場にいた全員が身構える。

「忘れたのか。儂の手にこのマフーの書がある限り、何人も儂に刃向かうことなど出来んわ」

「ガーネフ…」

マルスが剣を抜いて構えた。だが、不用意に突っ込むことはしない。それは今のリンドラ状況を見て、ガーネフが言ったことがハツタリでも何でもないとわかったことが一つ。そしてもう一つは、総大将である自分が万が一にも倒れてしまつたら解放軍が瓦解しかねないという危惧があつたからだ。

それをわかつているからだろうか、周りの他の面々も油断なく武器を構えながらもジリジリとマルスを護るようにその周囲を固めていく。

「ふふふ…」

だが、その程度のことかわからないガーネフではない。相変わらずの厭らしい笑みを浮かべ、マフーを今度はオグマとナバルルに向けて放つた。

「ぐおっ！」

「ぬうっ！」

二人とも先ほどのリンダと同じく身動き一つすらできずに、まともにマフーの直撃を受けて吹き飛んだ。

「オグマ！ ナバール！」

「ふふふ、マルスを護ろうとしておるのだろうが無駄なことよ」

「マリア王女、彼女は貴方にお任せします」

「は、はい！」

リンダの状態が落ち着いたのを確認し、リフが今度はオグマとナバールの許へと向かった。

「リフ、二人の容体は？」

ガーネフに相對しながらマルスがリフに尋ねる。

「かなりの深傷です。すぐに治療に入ります」

「頼む。死なせないでくれ」

「…やってみます」

リフがすぐにオグマとナバールの治療に取り掛かる。その言葉の端々から、かなり難しい状況であるのが察することができた。元々魔法に弱い戦士系の二人だから魔道士

であるリンダよりもダメージは大きいのだろう。

そしてそれは、ガーネフも重々承知しているのだろう。だからこそ、リンダを潰した後の標的をオグマとナバルにしたのだろう。

(的確なのは間違いないけど、厭らしい真似をするな)

眼前のガーネフにマルスは内心で悪態をついたのであった。

「ふふふ…」

それを見透かしたかのようにガーネフがまた笑う。

「何時までもここで貴様らと遊んでいる暇はない。だがマルスよ、貴様を殺せば終わるのもまた事実。邪魔な芽は摘んでおくに限る」

『!』

その言葉で、標的がマルスに移ったことがわかったマリクたち、残りの面々が襲い掛かろうとする。だが、やはり身体が硬直して動けなくなった。

「これは!」

「くうっ!」

「マルス様!」

「お逃げください!」

「ふふふ、無駄なことよ。既に我が術中。貴様らと同じく動くことはできんわ」

「! そんな!」

何とかシーダが振り返ったが、ガーネフの言った通り、自分たちと同じように身体が硬直して動けなくなっているようだった。

「ガーネフっ!」

それでもマルスの瞳は光を失っていない。が、ガーネフはそれすら愉悅のように楽しそうに笑った。

「ふふふ、いい目をしているな。その目が何も映さなくなったとき、他の連中がどうなるか見物だな」

「や、やめて!」

シーダが訴えるものの、それでガーネフが止めるわけもない。

「死ねい!」

そしてマフーがマルスの生命を刈り取るために放たれた。

(ここまでのなのか!?)

瞳の光は失わずとも、何もできない自分に歯齧みをしながら迫りくるマフーと、その後ろに見えるガーネフを睨み付けるマルス。そして、もう少しでマフーが届こうかというところで、不意にマルスの視界が真紅に染まった。

「え!」



突然のことに驚いたが、すぐに気を取り直してよく見てみると、それは真紅にたなびくマントだった。そして、風で翻ったその先にあるのは漆黒の鎧。すぐに思い浮かぶ顔があつて見上げると、そこには果たして予想通りの人物の姿があつた。

「が、ガレス！」

『え!?!』

未だ意識が朦朧としているオグマとナバル以外の全員が驚く。マフーから回復したりンダもその名前に驚いていた。そこには、今回は出撃していないガレスの姿があつたからだ。

「どうしてここに!?!」

「……」

だがガレスは何も答えない。その代わりに、

「ほお……」

ガーネフが楽しそうに厭らしい笑みを浮かべた。

「木偶人形が壁になつたか。どこの馬の骨かしらんが、見上げた忠誠心よ」

「……」

侮蔑するようなガーネフの揶揄だったが、ガレスはやはり何も答えなかつた。マフーの直撃をくらつたガレスは、ガーネフの揶揄するような木偶人形のようにジツと突つ

立っている。

「だが…邪魔だ!」

そして止めを刺さんとばかりにもう一度マフーをガレスに喰らわせた。

「ふふふ、苦しかろう」

ガーネフが愉悦に満ちた表情で笑う。そんな中、

「…ク」

マフーの直撃を受けながらもガレスが徐に口を開いた。そして、

「ククククク…」

と、いつものように笑い出したのだった。

「ふふふ、恐怖に狂ったか? 何が可笑しい」

ガーネフはそれをそう判断したようだった。だがすぐに、それが間違いだったということを知ることになる。

「ククク、可笑しいさ」

「何?」

怪訝そうな表情になるガーネフに向けて、ガレスは真紅の瞳を光らせた。そして、ゆつくりとガーネフに向かって歩いていく。

『えっ!?!』

その行動に、マルスを始めとする解放軍の面々は驚きを隠せなかった。「な、何だと!？」

だが、誰より驚いたのはガーネフである。反撃どころか一切の行動が許されないはずのマフーをくらいながら、平然とガレスが歩いてきたのだから。

「き、貴様、何故動ける!？」

「ククククク…」

驚きに気が動転しながらもガーネフは問い質した。ガレスは相変わらず笑っていたが、

「理由は二つ」

ゆつくりとガーネフに迫りながら、死刑宣告でもするかのようにそう述べた。

「二つは俺が貴様と同じく暗黒道の住人だからだ。後ろの連中のようにまともな奴らだったらどうにかなったかもしれないが、俺のような外道には貴様御自慢の魔法も効果が薄いようだな」

「くっ!」

ガーネフが悔しそうに歯噛みしながら何度もマフーを唱えるが、それでもガレスは歩みを止めない。正確にはダメージ自体は入っているのだが、マフーの最大の特徴である相手の行動を無力化するという効果が出ていなかった。と、

「フン」

突然、ガレスが己の得物であるサタンブローバーをその場の地面に突き立てた。その行動にマルスたちはまた驚き、ガーネフは怪訝な表情になる。

「何のつもりだ、貴様」

怪訝な表情そのままにガーネフが問い詰めた。

「貴様には、これを使うまでもない」

「何だと!?!」

ガレスの侮蔑したような言い方にガーネフが怒気を孕ませる。しかし、ガレスは少しも気にする様子にはなかった。どころか、更に挑発するような言葉を投げかける。

「どうした? 気に入らないなら、俺を殺してみせろ」

「言われるまでもないわ!」

憎悪と怨念の感情を増大させ、ガーネフが再度マフーを放った。だが、ガレスの足を止めることはできない。

「くそ! 何故だ! 何故倒れん!?!」

「教えてやろうか? それは、先ほど俺が言った二つの理由のうち、未だ明かしてないもう一つの理由の答えでもある」

「っ! 調子に乗りおつて!」

引き続きマフーを放つものの、ガレスの足はやはり止まらない。と、ガーネフの隙を  
ついでガレスが急に移動速度を上げた。

「！」

ガーネフがそれに気付いたとき、ガレスは既にガーネフの目の前まで来ていた。そし  
て、右拳を握り締めて振りかぶっている。

「俺が倒れないもう一つの理由はな」

ガレスの真紅の瞳がその鋭さを増した。

「貴様が弱いからだ」

「なん」

それ以上、ガーネフは言葉を続けられなかった。何故ならガレスの右拳が恐ろしい速  
さと重さを纏ってガーネフの顔面に炸裂したからである。

「ぎゃつ！」

ガレスのストレートをくらってまともにガーネフが吹き飛んだ。その光景を、マルス  
たちはまるで夢でも見ているかのように呆然と見ていた。そんな中、治まらないのが一  
人。

「これが暗黒の力だと……」

ガレスだった。ガーネフの魔道に心底苛立ちながらガレスがそう吐き捨てる。そし

て、

(ふざけるな！)

怒気を孕ませながら歩を進めた。

「わ、儂が弱いだと!？」

砂に塗れながら、ガーネフが憎しみを露わにして立ち上がってガレスを睨み付けた。

「そうだ」

ガーネフに近づきながら、ガレスが心底忌々しそうに吐き捨てる。

「貴様も暗黒道に堕ちた者。俺も暗黒道に堕ちた者。同じ穴の貉なら、単純に力量の強い方が勝つ。シンプルな道理だ」

「ふざけたことを言うな！」

ガーネフはガレスの言ったことを真つ向から否定した。到底そんなことは認められないのだろう。

「この儂が、貴様のようなどこの馬の骨ともわからん奴に劣るわけがなからう！」

「下衆が…ああ、そう言えば貴様は師匠に己の心の弱さを見抜かれ、兄弟子に光の魔道書を渡されたことが原因で嫉妬に狂って暗黒道に堕ちたんだつたな。戦いもせず逃げ出した腰抜けなら、弱くて当然か。いや、失敬失敬」

「き、き、貴様あー！」

一番触れてほしくない古傷を扶られ、ガーネフは半狂乱のようになってガレスにマフーを連発した。だが、狂いつぶりならガレスも負けてはいない。先述のようにダメージは身体に蓄積しているが、怒りがそれを凌駕していた。

(気に入らん…)

マフーを正面から浴びながら、それでもガレスは前進を止めない。目の前の男が心底気に入らないからだ。何故なら…

(まるで、かつての俺を見ているようで、実に気に入らん！)

我儘な同族嫌悪だった。目の前のガーネフは、在りし日の自分をまるで目の前に突き付けられたかのようなだった。あの時の自分をまざまざと見せつけられているようで、目障りなことこの上なかつたのだ。

「くそっ！ 何故だ！ 何故倒れん！」

ガーネフはそんなガレスの内心など知る由もなく、相変わらず半狂乱になってマフーを連発していた。そんなガーネフを、更にガレスは挑発する。

「大体、これが暗黒魔法だど？」

そう吐き捨てると、ガレスが嘲笑した。

「何が可笑しい！」

「クク、笑いたくもなるさ。こんなものが暗黒魔法とはな」

「何だと!？」

「俺は純然たる戦士だが、それでも貴様より余程まともな暗黒魔法を使えるぞ」

「どこまでも馬鹿にしおって! 貴様は絶対に許さん!」

「それはこつちのセリフだ、負け犬があ!」

素早く横に移動して何度目かのマフーをいなしたガレスが、追撃のマフーが来る前に先手を打った。

「ナイトメア!」

黒い霧がどこからともなく現れ、ガーネフの身体を包んだ。

「ぐうっ!」

ダメージを受け、ガーネフが苦悶の表情を見せる。

(ば、馬鹿な!)

マフーを封じるあの魔道書がないのにダメージをくらったことに、ガーネフは愕然としていた。そして、その隙を見逃すガレスではない。

「デスクラウド!」

ガーネフの足元から毒ガスが吹き上がり、その身体を跳ね飛ばした。幸い砂漠だったからよかつたものの、それでも全身を地に打ち付け、ダメージが更に蓄積する。

(わ、儂が、あんな三下に!)



苦悶の表情を見せながらガレスを憎しみの籠った目で見据えるガーネフ。そのガレスは、追撃の手を緩めなかった。

「ダーククエスト！」

マフーもかくやとばかりに 周囲が暗黒に包まれた。そして、どこからともなく現れた多数の怨霊がガーネフ目指して飛んで行き、その身を吹き飛ばす。

「ぎゃっ！」

ガーネフが悲鳴を上げて吹き飛んだ。そんなこれまでの戦いを、マルスたちは未だに呆然と見ていた。最初にこの場にいた面々だけではなく、指示がないために戻ってきた他の連中……すなわち今回の出撃に参加していた全員がガレスとガーネフの一騎討ちを見ている。

「…本当に、とんでもないな」

マルスはそう呟くことしかできなかった。

「僕たちが手も足も出なかつたガーネフを、あんなに一方的に……マリクも信じられないといった表情でマルスに追隨する。

「……この場にエストがいなくて本当によかつたわ」

「そうね、姉様」

パオラとカチュアは心底そう思っていた。

「目には目を、刃には刃をと言うが、暗黒には暗黒をということか」

「だが、実力が違い過ぎる。今更ながらあの男、規格外もいいところだ」

オグマとナバルも呆気にとられていた。シーダとマリアは少なからず恐怖を感じているのか、身を震わせている。ガレスに好意的なシーダとマリアですらこれなのだから、他の面々の感じている恐怖は更に強かった。そんな中、一人感情のベクトルが違うのがリンダだった。

「……」

リンダは唇を噛み締めながら悔しそうにしている。父の仇を目の前にして何もできなかった自分と、その仇を圧倒しているガレスを比較して忸怩たる思いに囚われていたのだ。

周囲のそんな様子を気にかけることもなく、ガレスは前進をやめない。ぼろ雑巾のようになりながらそれでも立ち上がり、憎しみと狂気に彩られた表情で未だガレスを睨んでいる。ガーネフに己の鬱憤を叩きつけるために。

「ま、マファー！」

性懲りもなくガーネフがマファーを唱える。しかし、今までと同じようにガレスの足を止めることはできなかった。それは先ほどガレスが言った、単純に力の強い者が勝つという理由が一つ。そしてもう一つ、こうして相対して肌で感じたものがあつた。だが、

(恐らく、この馬鹿には死んでもわからんだろうな)

ガレスはそう確信していた。そして、それがわからない以上はどう転んでもこいつは  
いずれ負けるだろうと。だったら、

(俺がここで潰しても、何ら不都合はないだろう)

かつての己を見ているようで嫌悪感が増すばかりの目の前の三下…ガーンエフを潰す  
べく、ガレスは走り出した。

「マフー！」

ガーンエフは相変わらずマフーを唱えているが、結果は変わらなかった。そして、

「あの世で兄弟子に詫びてこい！」

ガレスのストレートが再びガーンエフの顔面にを捉えた。

「ぐぎやあああああつ！」

吹き飛ぶガーンエフ。しかし、吹き飛んだ先にガーンエフの姿は残っていないかった。

「逃げたか…」

忌々しそうにガレスが呟いた。確かにガーンエフを捉えた感触はあつたが、クリーン  
ヒットではなかった。フィニッシュの瞬間、拳にかかっていた圧が消えたのを感じたの  
だ。案の定、吹き飛んだ先にあつたのはガーンエフが纏っていたローブだけで、ガーンエフ  
の姿はもうどこにもなかった。

（ああいう手合いはしづとさと執念深さだけは人一倍だからな。…もつとも、俺が言えた義理でもないがな）

かつての自分を思い出し、ガレスは忌々しきを感じながら自嘲した。と、  
「やったのかい？」

背後からマルスの声が聞こえてきた。戦いに集中していたから気がつかなかったが、他の連中も集まってガレスの許にやって来たようだった。

「いや…」

ガレスが吐き捨てる。

「痛めつけはした。が、とどめは刺し損ねた」

「そうなのか…」

残念そうな口調になるマルス。背を向けているからその表情まではわからないが、恐らく口調と同じく残念な表情をしていることだろう。

「そう言えば…」

次に口を開いたのはミネルバだった。

「何だ？」

相変わらず、ガレスは背を向けたままミネルバに答えた。

「何故貴様がここにいます。今回の出撃では貴様は声がかかっていないはずだが」

「あ、そ、そうね」

シードもそれに気付いたのだろう。ハツとした表情になってミネルバに追隨した。

「それについては、この戦いの後に話そう。お前たちはもう行け。まだ戦いの途中だろう」

「！ そうだった！」

マルスが現在の状況を思い出した。あまりにもガレスとガーネフの一騎討ちが激しかったので忘れていたが、今はまだカダイン制圧の途中なのである。のんびりしている暇はなかった。

「皆、さっきの作戦通りに展開してくれ！」

『はい！』

マルスの指示で各人が己の任務を遂行するために散らばっていく。この辺りの迅速さは流石に歴戦の兵たちというべきであろうか。

「後で話は聞かせてもらおうよ、いいね？」

最後、去り際にマルスがガレスにそう伝えた。いつものような親しみを感じる口調ではなく、指揮官として部下に詰問するような態度だった。

「好きにしろ。俺は逃げも隠れもせん」

「わかった」

ガレスからの了承を取ったマルスが、自身も戦列へと復帰していく。そうしてこの場は喧騒から一瞬で静寂へと変わった。後に残されたのはガレス一人。

「……」

砂と共に吹き付ける風の中、ガレスはゆっくりと動き出した。そして、先ほど地面に突き立てた自身の得物、サタンブローバーをゆっくりと引き抜く。

「……」

ガレスはその近くに、結構な大きさの岩があるのを見つけた。引き抜いたサタンブローバーをゆっくりとその岩に向けて構える。そして、

「がああああああっ！」

裂帛の気合と共にサタンブローバーをその岩めがけて振り下ろした。

「な、何だ!？」

もの凄い衝撃音に、思わずマルスたちも振り返る。土煙が晴れたその場所から現れたのは、粉々になった大岩の前で肩をゆっくりと上下させているガレスの姿だった。

そこにいたのがガレスだとわかったマルスたちは、再び進軍を再開する。見て見ぬふりをしたという言い方の方が、或いは適当かも知れないが。

「本当に……気分が悪い……」

ここに堕ちてから……いや、もしかしたら今までで一番気分の悪い相手との戦いにガレ

スは業腹だった。ガーネフ自身が気分が悪いというものもあるが、一番腹立たしかったのはとどめを刺せずに逃がしてしまった自分への失望だった。

「…逃がさんぞ。次こそは確実に潰してやる」

未だ風に舞い、あちこちに飛んでいるガーネフのローブを睨み付けながらガレスはそう吐き捨てたのだった。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

テーベ。幻の街と言われる、人知れぬこの秘境の最奥部にある不気味な神殿。ガーネフはそこで乱れた呼吸を落ち着けていた。その最中、顔面に鈍い痛みが走っていることに今更ながら気付く。

鏡…なんて洒落たものはないため水面に映った己の姿を確認すると、酷く腫れあがった己の顔がその水面に映った。

「くっ！」

苛立ち紛れにその水面を殴って波紋を起こし、すぐにその場を立ち去った。そしてどかっ！と椅子に座る。

「ええい、忌々しい！」

怒気を孕みながら肘掛けをダン、と叩きつけた。そんなことをしても怒りが治まるわけもなく、増すばかりである。

「何なんじゃ、あの男は！」

ガーネフは怒りながらも屈辱に塗れていた。或いはかつて師であったガトーが自分を選ばずにミロアにオーラを託したとき以上の屈辱を感じていた。

「この儂を小物扱いしおつて……！」

実際、散々にあしらわれているだけに尚腹が立った。その上、マファーに手を出したきつかけのことまで指摘されたのである。これで怒るなという方がガーネフにとつては無理があるというものだろう。

「殺す！ 必ず殺してやる！」

憎悪を滾らせながらガーネフが何度も殺すと唸っていた。その憎しみ、負の感情に呼応するかのようにはマファーが暗く明滅している。

光の中にある闇と、闇の中にある闇。二つの闇はこうして相対した。その死闘の結果は、今はまだ先の話。



## NO. 16 重なる縁

「成る程、よくわかったよ」

陣中、設えられた個人天幕よりも大きな天幕にマルスの声が響き渡った。その視線の先にいるのは、ガレス。

「そうか」

マルスに対しガレスが、いつものように素っ気なく答えた。そんなガレスをジッと見据えながら、マルスが徐に口を開く。

「それじゃ最後に聞くけど、何か言いたいことはあるかい？」

マルスがそう、ガレスに尋ねた。

「いや……」

対してガレスはゆっくりと首を左右に振るとそう答える。

「何もない」

「わかった」

ガレスの返答を聞いて、マルスがそう答えた。

「追って処分は言い渡す。それまでは謹慎していてくれ」

「わかった」

話が終わり、ガレスは立ち上がった。そしてゆっくりと天幕を出る。自身の斜め後ろをアベルとカインに固められて、ガレスは二人を引き連れる形で自身の天幕へと戻った。勿論、実際には引き連れているわけなどではなく、二人に見張られる形であるのだが。

こうして、一種連行される形になったガレスは、そんな自分に向けられる様々な視線を感じながら、自身の天幕へと戻ったのであった。

「ふーっ…」

先ほどの天幕。ガレスが退出した後、マルスが大きく息を吐いていた。

「お疲れか?」

横から声をかけてきたのはハーデインだった。彼もまた、マルスに召集されてこの場にいたのである。

「うん」

マルスがトントンと自分の肩を叩いた。

「ある程度は慣れたつもりだったんだけどね…」

ハーデインに向けてそう答えると同時に苦笑した。

「やっぱりそうでもないみたいだ。ガレスとまともに正面から相対すると疲れてしょうがないよ」

「仕方のないことだな」

ハーディンはそんなマルスを咎めたり注意したりせず同意した。

「あの男が相手ではな。癩に障るがな」

「ははは…」

マルスも力なく笑って返すしかなかった。つい先ほどまでこの天幕内で行われていたこと…それは先の戦いでのガレスの命令違反に対しての尋問である。

今までも命令違反は何度も犯してきたガレス。ただ、それによって解放軍が不利益を被ったことはないのになあなあで済ませていた。しかし、度重なる命令違反が軍中で問題視されていたことも事実であった。そこにきて、先日のカダインでの行動である。

今回もガレスが命令違反を犯したことで不利益を被つてはいない。それどころか、ガレスの活躍(?)によって、被害が出なかったことを考えれば責められる謂れはないかもしれない。

しかし、軍である以上命令違反は重罪である。その結果、今までは良いほうに転んでいるが、いつ裏目に出るかかわからないのだ。それを重く見た面々が、ガレスの命令違反は看過してはならないとマルスに進言し、マルス自身も綱紀を糺すためにその進言を容

れて先ほどまで先日のカダインでの戦いの命令違反について尋問していた、というわけである。

「ハーディン公」

傍らのハーディンにマルスが話しかけた。ガレスの命令違反について糺すべきだと主張したのは当然、ハーディンを始めとするオレルアン騎士団の面々だった。それと、アカネイア騎士団の面々である。

「何か？」

ハーディンが答えた。

「今のガレスの釈明、どう思う？」

「そうだな……」

ハーディンが腕を組んで考えた。

「普通ならば何を世迷言を……と考えるとところだが」

そこでハーディンがマルスへと視線を向ける。

「貴殿はそうは考えていないのだろうか？ マルス殿」

「うん」

マルスが即座に頷いた。

「私としては半信半疑だが、今言ったようにあの男が言うと世迷言では片づけられん」

「それもあるけど、前例もあるからね」

「そうだったな」

ハーデインがふうと息を吐く。

『『死の匂い』か…』

そしてそう続けたのだった。先ほどの尋問で、何故命令違反を犯して出撃したのか尋ねてガレスから出てきたのがこの答えだった。

『死の匂いがしたからな…』

それ以上はガレスは何も言わなかった。その姿に、マルスとハーデインはこれ以上何度聞いても答えは変わらないだろうと判断して、それ以上何も聞かなかった。

「レフカンデイの戦いでゴードンを助けてくれた時に言った理由が、さつきガレスが言ったのと同じ理由だった。そしてその時の戦いで、ガレスは確かにゴードンを助けてくれた。それはハーデイン公も覚えているだろう？」

「ああ」

ハーデインが同意する。確かにゴードンがレフカンデイの戦いでガレスに助けられたことを訴えていた。その場に自分もいたから間違えるはずもない。

「ゴードンだけじゃない。正式に出撃していた時だけど、デイール要塞でマリア王女を救ってくれたのもガレスだった。それを考えると、ガレスが適当なことを言っているよ

うには思えないんだよね」

「つまり、今回もあの男がいなければ誰かが死んでいたと？」

「うん。何しろ、相手があのガーネフだったからな」

「……」

ハーディンがそこで口を噤んだ。今回は戦場が砂漠ということに騎兵や重騎士は軒並み出撃していなかったために確認できなかったが、マルスが言う以上はガーネフが出てきたというのはホントのことなのであろう。そして、相手がガーネフであれば誰かしら死んでいた可能性も高いのも間違いないと言えた。

これらを考慮すると、今回のガレスの命令違反は当然許されるべきものではないが情状酌量の余地は十分にあるものと言えた。

(しかし……)

ハーディンはそれにすんなり賛同することはできなかった。これまででは大人しくしているとはいえガレスが不穏分子であることは間違いないし、何をしでかすかわからないのは相変わらずだったからである。

だからこそ、未だに折に触れてガレスを見張らせているのだ。オレルアン城で二ーナとガレスが二人だけの夜会をしていたのをザガロから報告を受け、それ以降は部下の手が空いている時に怪しまれないようにガレスの動向を探らせていた。最近ではアカネ

イアの連中も同じようなことをしているようである。それほど、ガレスは未だに軍内の一部からは危険視されていた。

そんなガレスの首に鈴をつけることは不可能に近い。であれば、ある程度動きを制限するように行動するべきなのかもしれないが、そうしたところでどれほどの効果があるものかとハーデインは思っていた。

(いくら嚴重に注意や罰則を与えたとしても、あの男がそれを気にするとは思えん)  
必要となれば、ガレスは今後もいくらでも命令違反を犯すだろう。そして本人が軍規を護る気がないのならば処罰するしかない。

だが、ガレスの犯した命令違反によって救われた者たちからすれば、それに納得できるものではない。理屈ではわかっていても、感情がそれを許さないというわけだ。その結果、軍中に不協和音が起こっては本末転倒である。どうにも処分に悩む問題であった。

(全く、厄介な存在だ)

ハーデインは内心で毒づくしかなかった。そして悩んだ結果、自分にできることのみをしようと考えたのである。

具体的に何かというと、ニーナをガレスから極力遠ざけることであった。それについては、アカネイア側も協力してくれるだろう。アカネイアと連携を取れば、実現は不可

能ではなかった。勿論、完全に遮断できるわけではないだろうが。

(だが、あのような素性の知れぬ男とこれ以上は交流させるべきではない)

ハーデインはそう判断し、己のできることを行うことにした。そして、ガレスの件はマルスに預けることにしたのだった。

「私としては当然処罰はすべきだと思っている。だが、いくら処罰したところであの男にとつては痛くも痒くもないだろうな」

「まあ、それはその通りとしか言えないかな」

マルスが苦笑した。マルスとしても、こちらがいくら処分してもガレスが黙って大人しく命令に従うとは思っていなかったからだ。

「忌々しいが、上手く使うしかない。マルス殿、貴殿には申し訳ないが、あの男の使い方は貴殿に任せる」

「僕が預かってもいいのかい？」

「うむ」

マルスの問いかけに、ハーデインが頷いた。

「…正直に言う。あの男は私には手が余る。それに我々とあの男との関係性は貴殿も良く御存知だろう」

「まあ、あまりよく思っていないのは理解しているよ」



「回りくどい言い方をしなくてもいい。良く思っていないどころか、ハッキリ距離を置いている。流石にあからさまに敵視はしていないが、我らがあの男に積極的に関わる気は毛頭ない」

「それはハーディン公個人としてでなく、オレルアンの総意と受け取って構わないのかな？」

「うむ」

ハーディンがハッキリそう言い切った。

「故に、あの男のことはマルス殿に一任したい。我らは我らでやらねばならぬことがある」

「ニーナ様のことかな？」

「気付いていたか」

「それはまあね」

マルスが再び苦笑する。

「ただ、余程鈍くない限り気付くよ。ニーナ様がガレスと交流しようとするのを極力排しているのは見てればわかるから」

そこでマルスの面持ちがいつものものに戻る。

「ハーディン公」

「何か？」

「正直なところを聞きたいけど、公はガレスとニーナ様がお互いに惹かれ合っていると  
思っているのかい？」

マルスは自分が考えていることを素直に聞いてみた。と、

「いや」

ハーディンは即座にその可能性を却下した。

「ニーナ様のご執心なのは確かだろう。だがあの男はどうか？ あの子が色恋沙汰に  
うつつを抜かすような男に見えるか？ マルス殿」

「全く」

マルスが左右に首を振った。

「女性に対する興味が無いとは思ってないよ。聞いた話だけど、ワーレンでは女遊  
びするつもりだったってことだから。でも、それは割り切って遊べる相手だからだと思  
う。しがらみができそうだったり、厄介なことになりそうだったらガレスは手を出さな  
いと思うな」

「私も同感だ。故に、ニーナ様とどうにかなるようなことはないと思う。だが、あの男に  
その気がなくともニーナ様のご執心である以上、何がどう転んでもおかしくはない。そ  
んなことにならないようにするために、可能性は極力排除するに限る。だからこそ、

我らはそのために動く。故にあの男の扱いについてはマルス殿に一任したい」  
「わかった」

ハーデインの申し出にマルスが同意した。

「ただ、僕が抑えきれるとは思わないけどね」

「素直な意見だ」

マルスとハーデインがお互いの顔を見て苦笑しあつた。

「とは言え、全く制御不可ではそれこそ軍として機能しない。ある程度は頑張ってくれ」  
「まあ、やるだけやってみるよ。確かに非常に扱いにくいのは事実だけど、全然どうにもならないわけじゃないしね」

そこで、まるすがふうつと大きく息を吐くと深々と背もたれに身を預けた。

「…諸刃の剣だよ。それも、とんでもなく強大な…ね」

「確かに」

そこで二人は、ガレスに思いを馳せたのだった。

その、マルスとハーデインの頭痛の種である張本人のガレスは大人しく自分の天幕に戻っていた。そして、

(…おかしい)

現状に少なからず戸惑っていた。というのも、何故か何人かの客がガレスの天幕を訪

れていたからである。

「ガレス、マルス王子に何を言われた？」

尋ねてきたのはアテナだった。

「…今までと大して変わらん。命令違反の咎で謹慎処分をくらったただけだ」

「ほほお、成る程のう」

お次はバヌトウである。

「災難じゃったな」

「バカを言え。軍規に背いて謹慎なら、寧ろ軽い方だろう。いい機会だ、ゆっくり休ませ

てもらおうさ」

「本当ですかね？」

茶々を入れたのはゴードンだった。

「貴方のことだから、必要とあれば平気でまた命令違反しそうですけど」

「うんうん」

「わかるわかる」

ゴードンに同意してしきりに頷いているのはジエイクとベックだ。

「…好き勝手言ってくれるな」

多少ムツとしながら、ガレスが文句を言う。が、

「だが、本当のことだろうか？」

「む……」

ミネルバに冷静に突っ込まれぐうの音も出なくなってしまった。このように、ガレスの天幕には何人かが押し寄せており、こうやって雑談をしていたのだった。そしてこの状況に、当のガレスは戸惑いを隠せなかった。

（今度こそ、周りの連中が距離を置くかと思っていたが……）

予想に反してそうはならなかった。いつもの面々と言えばいつもの面々だが、それでもこうしてガレスの許を訪れているのである。

（やせ我慢しているのか、余程物好きが多いのか、それとも別の目的があるのか……）

どれなのかわからない。しかし少なくとも表面上は、皆変わらぬように見えた。加えて、

「失礼」

「お邪魔するよ」

新顔が増えたのである。

「貴様らは……」

新しく入ってきた二人を見て、ガレスが記憶を辿った。そして、何とか思い出す。

「……思い出したぞ。確か、ワーレンで成り行き上加わった連中だったな」

「覚えていてくれて光栄だ」

一人が口を開いた。

「私はシーザ」

「俺はラデイ。宜しくな」

二人は軽くガレスに挨拶すると、周囲にいるアテナやゴードンたちにも軽く挨拶した。

「…それで、何の用だ」

挨拶が一通り終わったところを見計らってガレスがシーザとラデイに尋ねた。

「いやあ」

「噂の黒騎士殿とお話がしたくてね」

「噂…な」

ガレスがフルヘルムの下でニヤリと笑った。

「どうせ、碌でもない噂だろう?」

「御明察」

シーザが頷く。

「とは言え、そればかりじゃないんだぜ?」

そう、ラデイが続けた。

「ほお？」

「確かに大半は碌でもない噂だけど、中にはそうでもないものもあるのさ。ほとんどは、あんなの強さに憧れるようなものだけだな」

「成る程な」

ガレスが頷く。戦士である以上は強さを求めるのは当然のことであり、現状ではかなりの味方に恐怖心や敵愾心を抱かれてはいるものの、それでも頭一つ抜けた強さを誇るガレスに憧憬を抱く者がいてもおかしいことではなかった。

「それでも、宮仕えの連中は立場上中々あんたに接触はできないようだが……」

「俺らみたいなフリーの連中はそういうしがらみがないんでね。自分の気持ち一つでこうやってお邪魔もできるって訳さ」

「……」  
「ここにいる顔ぶれを見ても、そのような感じだしな。只若干、予想外の御方もいるが……」

シーザとラディはゴードンとミネルバに視線を向ける。特にゴードンはまだしも、王族であるミネルバがこの場にいることには大いに驚いていた。

確かにマケドニアは敵国であるため、寝返ったといつてもこの軍で主導権を取れる立場ではない。

だが、だとしても彼女はれっきとした王族の一員であり、第一王女なのだ。兄……現国

王であるミシエイルに何らかの不幸があった場合、次の王位継承者になるのは彼女なのである。無論、現時点では国を裏切った裏切り者だからその芽はないが、終戦後ならどうなるかわからない。

そんな人物がガレスの許を訪れているのはやはり違和感が拭えなかった。

「…マリアの件があつたからな」

シーザとラデイの疑問に答えるかのように、そう、ミネルバが答えた。

(成る程)

シーザが予想通りの答えに心中で頷いていた。デイル要塞の攻略戦では自身は出撃していなかったが、伝聞でガレスがマリア王女の生命を救つたのは聞いていた。そこから縁が生まれてこうやって交流しているということなのだろう。

(けど、それだけってわけじゃないだろうけどな)

ラデイがそうとも推察する。妹の命の恩人なのは確かだが、それだけで個人的に親交を深めるようなお人よしではないと思つていたからだ。ミネルバの性格を知っているというわけではなく、王族としての帝王学的な観点からの推察である。

(戦後のことも睨んでるんじゃないのかね？ 引き入れる…は無理かもしれないけど、客将として暫くでも滞在してもらえれば、ある程度の抑止力になるって踏んでるんじゃないかな?)



下衆の勘繰りかもしれないが、そう思ってしまうのも仕方ないことだった。それほどガレスは異質であり強力なのである。

(それで言えば、この坊やも同じかもしれないけどね)

ラデイが今度はゴードンへと視線を向けた。ゴードン自身もガレスに生命を救われたので懐いているのだろうが、マルスから密命を受けているという可能性がないとは言切れないわけだ。その辺りのことはシーザも考えていた。

(まあ、どう転ぶかはフリーの我々には関係のないことだしな)

シーザがそう纏めると、そそくさと輪の中に入った。こうして、何故か謹慎を言い渡されたガレスの天幕は賑やかな状況になったのだった。

「…お前たち、出撃の準備はいいのか？」

賑やかになった天幕の状況に多少なりとも戸惑いながらガレスが尋ねる。謹慎を言い渡された自分は勿論今回は出撃するつもりはないし、マルスたちの選択肢からも外れているだろうから構わないが、自分以外の連中は誰に出撃のお声がかかってもしないからだ。

「俺たちはもう終わらせてる」

「ああ。何せ得物が特殊なもんでね。日々整備しておかないと、いざというときに役に立たないからな」

まず初めに答えたのはジェイクとベックだった。シューターの二人ならば成る程領ける話である。

「アテナ、剣の手入れは念入りにしてある。心配ない」

アテナも問題なしといった表情で答えた。彼女自身、集団戦闘よりは単独戦闘に向いているのはマルスも十分わかっている。遊撃や偵察、攪乱が主任務になっている。そのため、自身の身の回りさえ用意を整えていれば問題はなかった。

「儂はこれ一つあれば十分じゃからの」

バヌトウが隆石を取り出すとふおつふおつと笑った。武器を必要としないマムクートであるのだから、身支度も簡単なものである。

「我らは今回はお役目なしとのことなので」

「陣中の手伝いは終わったしな。後はのんびり見物さ。今回のあんたと同じだよ」

「まあだからこそ、こうして今回お邪魔したわけでもあるのだがな」

「シーザとラディである。しかし、問題のない面々はここまでであった。」

「そうですね」

ゴードンが口を開くと座っていた椅子から立ち上がった。

「僕自身はまだ今回出撃するかどうかはわかりませんが、同僚がどうなるのかわからないので少し手伝ってきます」

そう言うのと、軽く頭を下げて天幕から去って行った。

「では、私もそろそろ…」

ゴードンを見送った後、ミネルバも口を開く。

「部下たちが上手く取り纏めてくれているとは思いますが、最終確認は自分でしないと…」

「そうか。武運を祈るぞ」

「フツ」

軽く微笑むと、ミネルバはそのまま天幕を後にした。その後、少しの間ガレスの天幕は賑やかだったが、ゴードンとミネルバの離脱が引き金となったのか、一人、また一人と出撃準備や陣中での手伝いのために辞していったのであった。

「じゃあガレス、アテナも戻る」

天幕に残った最後の一人、アテナが天幕の入り口で振り返るとガレスにそう告げた。

「ああ。出るんだったら気を付けろよ」

「わかった」

コクリと頷くと、アテナはその場を去って行った。

(無意識のうちとはいえ、俺が他の連中を気遣うような発言をするとはな…)

これも、暗黒道の呪縛からの解放が進んでいる影響かと思いつながら大きく深呼吸して

息を吸う。ガレスが天幕の外へ出てきたのには理由があった。

一つは文字通りアテナを見送るため。もう一つは外の空気を吸うため。そして最後の一つ。これが一番重要なのだが、

(…ネズミの気配が消えんな)

それが一番の理由だった。シーザとラデイが入ってきた後ぐらいから、天幕の外で幾つか気配を感じたのである。入ってくるかと思っていたのだがそんなこともなく、躊躇しているように感じたため放っておいたのだが、その気配は今も続いていた。

(何がしたいのか…)

折角姿を現したのに行動に移さない気配に呆れながらも、ガレスは引き続き放っておくことにした。姿を現さないというのであればこちらから気を利かせるつもりなど毛頭ない。天幕でのんびり休むことにしよう。

そう考えたガレスが身を翻して天幕に戻ろうとする。と、

「あの…」

ようやく、その気配のうちの一つが声をかけてきた。

(やれやれ…)

のんびりできるかと思っていた矢先にこれである。面倒臭いと思わないでもなかったが、聞こえてしまった以上は無視するわけにもいかない。声のした方向に振り返っ

た。果たしてそこにいたのは、レナの姿だった。

「お前か……」

ガレスの指摘に、レナがオドオドしながらもペコリと頭を下げた。

「何か用か？」

「あ、は、はい……」

頷くもののどうにも歯切れが悪い。どうやらレナは、先日のカダインでのガレスの暴走っぷりからまだ恐怖を感じているようだった。

（まあ、普通の反応だな）

それがわかるため、ガレスも咎めるでもなくレナが自主的にその先を口にするのを待つ。少しの間ガレスの視線にオドオドしながらも、ようやく意を決したのか、レナが口を開いた。

「その……付き添いで参りました」

「付き添い？」

レナから出た予想外の言葉にガレスが怪訝な口調になる。

「誰のだ？」

「その……」

レナが後ろを振り返る。すると、レナの身体の陰からマリアがひよこつと顔を覗かせ

た。

「マリア…」

これまた予想しなかった人物の登場にガレスが驚きを隠せなかった。

「お前か」

「!」

ガレスに視線を向けられたマリアはビクツと身体を竦ませると、そのままレナの後ろに隠れてしまった。

「マリア様」

そんなマリアをたしなめるように、レナが己の後ろを振り返ってそこにいるマリアに声をかける。

(?)

何だこれとは思いながらも、ガレスはそのまま何もしなかった。と、

「ほら、マリア様」

レナが再度自分の後ろにいるマリアに促すように声をかけた。

「う、うん…」

促されたマリアがゆっくりとレナの後ろから顔を出す。そしてそのまま勢いよく姿を現すと、

「そ、その、ごめんなさい！」

と、いきなり謝ったのだった。

「…何？」

訳も分からず謝罪され、ガレスが戸惑う。そして、

「…それは一体何に対する謝罪だ」

と、思ったことを素直に口にした。ガレスにはマリアに謝られるようなことをした覚えはない。それを考えれば、今の謝罪は意味がわからなかった。

「そ、その…」

マリアがオドオドしながら口を開く。

「こ、この前の戦いで、貴方を怖がっちゃったから…」

「…何だ、そんなことか」

マリアの説明によろやくガレスも合点がいった。言葉通り、先日のカダインでの戦いで暗黒道に堕ちた者としての力を存分に披露したため、それを目の当たりした者たちから間違いなく距離を置かれていた。

だが、ガレス自身は特にそれを気にしてはいなかった。立場が逆だったら同じように恐怖を感じているだろうし、それが正常な感覚であるのは重々理解できるからである。故に、距離を置いた者たちは放置していたのだ。

(しかし、まさかそのことで面と向かって謝られるとはな…)

ガレスは驚きを隠せなかった。ただ、相手がマリアということも少なからず影響しているのかもしれない。まだ幼いマリアだけに、自分の心に素直に従ったのだろう。そう考えれば微笑ましくもあつた。

「気にするな」

だからこそガレスも責めることはせずにマリアを氣遣つた。

「まともな人間の感覚なら、あの時の俺を見て恐怖を抱かない方がおかしい。だからこそ、お前が謝る必要はない」

「ほ、ホント?」

おっかなびっくりといった感じでマリアが尋ねてくる。

「ああ」

それに対し、ガレスがゆっくりと頷いた。

「だが、謝ってお前の気が済むのなら謝罪は受け入れよう。だからもう戻れ。出撃前の準備があるのだろうか?」

「あ、私は今回は出番がないみたい。だから、もうちよつとお話しよ?」

謝罪を受け入れてもらったことですっかり…とまではいかなくとも、大分いつもの調子が戻って来たのか、マリアが嬉しそうにそう言ってガレスの許へとチヨコチヨコと



走ってやって来た。

ガレスは自分のすぐ側までやってきたマリアから視線を外し、レナに視線を合わせる。

「私は今回は出撃の命令が出ているので、そろそろ戻りたいんですけど…」

「そうか」

ガレスが頷いた。

「でも、マリア様お一人だけにするわけには…」

レナが言葉を濁す。ガレスを信用してないわけではないのだろうが、この前の一件があるだけにやはりマリアを一人きりにするのは抵抗があるのだろう。

「大丈夫だよ」

対してマリアはそう返す。しかし、本人がそうは言ってもはいそうですかと納得して踵を返せるものではなかった。

「しかし…」

案の定、レナが口籠もると、

「心配するな」

不意に、ガレスがレナに対して助け舟を出した。

「え？」

「要するに、マリアを一人にするのが心配なのだろうか？」

「え？ ええ…」

「……」

その言葉を聞いたガレスが頷くと、ゆっくりと自信の天幕の裏へと回っていった。すると、いきなり何やらけたたましい物音がレナとマリアの耳に聞こえてくる。

『？』

レナとマリアが顔を見合わせてお互いに小首を傾げていると、

「待たせたな」

と、ガレスが戻ってきた。

「ちよつと、放してよー」

まるで猫や兎をそうするかのように右手でとある人物の首根っこを押さえながら。ジタバタと暴れているその人物はリンダだった。

「フン」

戻ってきたガレスがリンダの望み通りその首根っこを掴んでいた手を放した。当然、リンダの身体は重力に従って落下する。

「きゃっ！」

放してと文句を言ったものの、突然解放されたリンダは体勢を整える暇もなく地面に

激突することになった。

「痛ったーい！」

むくれながら、身体についた土を掃うリンダ。と、

「ククククク…」

その姿に、ガレスがいつものように愉快そうに咽喉の奥で笑い始めた。

「ちよつと、何が可笑しいわけ!？」

笑われたことにリンダが不愉快さを隠そうともせず、座ったままだがガレスを睨み付ける。

「お前が性懲りもなく俺の周りをこそこそ嗅ぎまわっているからだろう。自業自得だ」

「…嗅ぎまわっていたわけじゃないもん」

リンダが唇を尖らせてガレスに文句をつける。

「ほう？ だったら何が目的だ？」

「そ、それは…」

リンダが口籠もった。と、

「あ、あの…」

今までの展開を呆然と見ていたレナがおずおずと口を開いた。

「何だ？」

ガレスがレナに問いかける。

「その…そちらは？」

「ああ、こいつか」

コイツ呼ばわりにムツとしながらも、リンダが立ち上がった。

「お前の代わりだ」

『え？』

ガレスから返ってきたその言葉に、当人のレナだけではなくマリアとリンダも首を捻ってガレスを覗き込んだ。

「マリアを一人にすることは避けたいが、お前は出撃準備があるのだろうか？　ということ、こいつがお前の代わりにお目付け役をしてくれるそうだ」

「ええ…？」

レナがどう反応しているのかといった感じで戸惑いながらリンダとマリアに交互に視線を向ける。確かにリンダが自分の代わりをしてくれるならそれに越したことはないが、先ほどまでのやり取りを見ると、とてもそのことのためにここへ来たわけではなさそうだからだ。

「勝手なこと言わないで」

案の定、リンダがムスツとしながらガレスの前言を否定する。

「クク、そうむくれるな」

だが、ガレスの方がリンダよりも一枚も二枚も上手だった。

「別に難しい話じゃない。マリアが飽きるまで、俺たちを見張っていればいいだけの話だ」

「だから、何で私がそんなことを」

「俺を見張っていないのだったら、何故まだネズミまがいのことをやっている」

「い、いいでしょ、別に」

リンダが文句を言うが、ガレスは一切意に介さない。

「俺を見張っているならわざわざ隠れる必要もなくなるから悪いことでもないだろう？」

それとも、この軍に何人かいる物好きたちと同じように、お前も俺と交流を深めにも来たのか？」

「ば、バカなこと言わないでよ！」

リンダがプイッとそっぽを向いた。

「だったら何も問題はないだろう。それに、お前が領かないとマリアの受け入れを断念しないとならなくなるのだがな」

レナがマリアだけを残すのは承知しないのでな、とガレスが続けた。その言葉を聞いたから……というわけでもないのだろうが、リンダがチラッとマリアに視線を向ける。マ

リアは、祈るような表情でリンダを見ていた。

(う…)

そんな顔で見られては断れない。いや断るのにはできるのだが、それではどうしたって後味が悪くなってしまふ。ガレスにはたつぷりと含むところのあるリンダだが、リアには何ら含むところがないため八方塞がりだった。

「どうだ？」

と、そこで計ったようにガレスが口を開いた。

(あー、もう！)

いいように使われている感は否めないが、どうしようもない。内心で頭を掻きながらリンダが覚悟を決めた。

「わかったわよ。やればいいんでしょ、やればー」

「だ、そうだ」

「わあー！」

マリアの表情がぱあつと明るくなり、即座にリンダの許へ走り寄った。そして、

「ありがとうね！」

リンダの手を取ってニッコリ笑い、マリアが感謝の意を述べた。

「え…？ は、はい…」

マリアの屈託のない態度にリンダが戸惑う。その光景を見ているガレスがまた咽喉の奥で笑い、それに気付いたリンダがまたムツとしてガレスを睨んでいた。

「と、言うわけだ」

一頻り楽しんだ後、ガレスはレナに再び視線を向けた。

「これで文句はないだろう？」

「はあ……」

レナが煮え切らない口調で答えた。確かにマリアを一人にしないですむが、どうにもうまくガレスにまるめ込まれた感否めないからだ。とは言え、そろそろ本当に戻らないといけないため、納得する他はなかった。

（何だかんだでこの人、味方に危害を加えたことはありませんからね）

そのことも思い出し、レナは遂に決心した。

「それでは、私はこれで」

「ああ」

「よくわかっておいででしょうが、くれぐれもマリア様には妙な真似はしませんように」

「ああ」

「リンダさん」

「は、はい」

レナに名前を呼ばれたリンダが慌てて振り返った。

「余計なことに巻き込んで申し訳ありませんが、どうかよろしくおねがいます」

「あ、ま、任せてください」

「では」

そこで一礼すると、レナはガレスの天幕の前から立ち去ったのだった。

「さて…」

レナを見送った後、ガレスはさっさと自分の天幕へと戻った。

「あ、ガレス！」

マリアが慌てて後を追ひ、

「ちよつと、待ちなさいよ！」

その後をリンダが追った。こうして、未だ立場の安定しないガレスではあったが、それでも着実にガレスを中心とした人の輪は広がりつつあるのだった。



## NO. 17 アナザースターロード・マルス

アリテアを臨む戦いの火蓋は切つて落とされた。いつにもまして激しい戦いがアリテアのことかしこで繰り広げられる。次から次へと入ってくる伝令に、マルスは神経をすり減らしながらもその場では最善と思われる指示を出していった。各所での戦いは熾烈を極めたが、それでもやがて趨勢はつく。天秤が傾いたのは解放軍の方だった。

少しずつ、少しずつ解放軍が帝国軍を各所で押し出し、そしてその結果、解放軍は多大な被害を出しつつも遂にアリテアを解放することに成功した。

マルス率いるアリテア宮廷騎士団にとつては、実に何年かぶりの祖国への凱旋である。その心中には各人期するものがあつただろうが、感傷に浸っている暇はない。アリテアを解放したと言っても、それは外側だけ。アリテア城内には未だに多数の敵が解放軍を待ち構えていたのである。

解放軍は体制を整えると、休む暇もなくアリテア城内へと突入していったのであつた。

「さて…」

アリティア城外。城内にて戦闘中の面々の帰りを待つ未出撃の軍勢の中に、ガレスの姿があった。

（今回は出番があると思ったが…）

城内戦ということでそう考えていたガレスだったが、予想に反して今回ガレスは出撃の人員から外されていた。出撃人員を決めるのは指揮官であるマルスの仕事である。実際には、ジェイガンやハーデインなどに助言を仰いだりはしているだろうが、最終決定するのはマルスのはずだ。

（奴め、何か含むところでもあるのか？）

そう思わんでもないが、出撃を外される心当たりはたつぷりとあった。命令違反に対する咎かも知れないし、ただ単に現在謹慎中ということを出撃から外したのかもしれない。

（暇で仕方ないのだから）

手持ち無沙汰状態のガレスは愚痴しか出ない。戦場に出れば楽しめるが、留守番ではそれも無理な話。まさか、見境なく味方を襲うわけにもいかないのだ。

かと言って、他人の仕事を手伝うような殊勝な心掛けがガレスにあるはずもない。と

いうことで、

(戻つてのんびりするか…)

そう決めたのだつた。そのまま身を翻すと、自身の天幕へ戻ろうとする。と、

「よう」

いきなり誰かに声をかけられた。

(ん?)

今まで聞いたことのない声色にガレスが声のした方向に振り返ると、そこには見たことのない人物が立っていた。

(…誰だ?)

自問自答するがわからない。当然だ、見たこともないのだから。視線の先でガレスに声をかけた人物は、まるで値踏みをするかのようにガレスを見ていた。

(…)

捉え様によつては随分と不躰な視線なのだが、ガレスはそんなことは気にしない。それよりも、

(男か女かよくわからんな…)

それが第一印象だつた。視線の先にいた人物は随分と中性的な顔立ちと雰囲気をしていて。男だと言われても女だと言われても、どちらでも領けるような容姿に身なりを

していた。

「何だ？」

誰だか知らないが声をかけてきた以上、まるっと無視するわけにもいかないので尋ねてみた。と、

「あんたが噂の黒騎士さんかい」

その人物が興味津々と言った表情でガレスをじろじろと見ている。そして、

「成る程な。こりゃ異質もいいところだわ」

一人納得したようにうんうんと頷いたのだった。

(噂……な)

どうせ碌なものでもないだろうと思っていたので、そこには突っ込まないようにする。その代わり、

「何の用だ」

用件を尋ねてみた。

「おいおい、そうっすんけんすんなよ」

目の前の……恐らく男が楽しそうに微笑みながら肩を竦めた。姿形は中性的なのだが、声色が男のものだったので男だとガレスは判断したのだ。多分、間違いないだろうと思っている。

そして男は、ぼんぼんとガレスの肩を叩いた。

「ここに厄介になつたばつかりなんだけど、あんたの噂を嫌つて程耳にしたんでね。御挨拶がてらお目にかかりにきたつて訳さ」

「成る程な」

ガレスが口を開いた。だが、次に続く言葉は男の予想外のものであつた。

「見たことない顔だと思つたが、新入りか」

「おろ？ そつち？」

少し驚いた表情になつて男がガレスを見る。

「何を驚いている」

ガレスが尋ねた。

「いやあ、てつきり噂つて方に食いつくと思つてさ」

「今更だ」

「なぐるほどねえ」

男が納得したようにうんうんと頷いた。

「こりや、確かに変わり者だ」

「放つておけ。：用件はそれだけか？」

「おいおい、つれないこと言うなよ」

そう言うと、不意に男がガレスの首に腕を回して肩を組む。

「折角なんだ。お互いに交流を深めようぜ」

「貴様にその気があっても、俺にはそんな気はない」

「固えこと言うなよ。なっ、兄弟♪」

人懐っこいような笑顔を向けると、ニコニコと男が微笑んだ。しかし、当然ガレスを懐柔できるわけもない。

(なれなれしい男だな…)

と、内心で辟易していた。最初は断ろうと思っていたのだが、不意にガレスはこの後のことを思い出した。

今回は出撃しておらず、他人の仕事を手伝う気などさらさらないためにこの後は天幕に戻って休むだけである。言い換えれば、この後に何もやることはなく暇なのだ。それを考えれば

(暇潰しぐらいにはなるか…)

そう思い直すのも仕方のないことであった。

「いいだろう。少しぐらいは付き合ってやる」

「おっ、そうかい？」

男は再び人懐っこい笑みを浮かべた。そして、

「よっしや。んじや、行こうぜ」

と、ガレスと肩を組んだまま歩き出した。その光景を見た周囲の面々は皆一様に目を丸くして驚いている。

「わかったから放せ」

そう言つてガレスが男の腕を取ると、自分の身体から引き剥がした。

「んだよ、本当につれねえなあ……」

先ほどとは打つて変わつて、男は面白くなさそうな表情になる。だが、ガレスはそんなことを一々気にすることはなかった。

「黙れ」

短い言葉で一刀両断し、切り捨てる。

「ちえっ」

男は面白くなさそうに頭の後ろで手を組むと、ガレスの横に並んで歩いた。

「つと、そういうえば自己紹介がまだだったよな」

不意に思い出し、男がそれを口にした。

「不要だ」

「まあ、そう言うなつて。俺はチエイニーっていうんだ」

男……チエイニーが自分の名前を名乗った。

「…ガレスだ」

名乗られたため、最低限の礼儀としてガレスが名乗り返した。

「存じてるよ。宜しくな、噂の黒騎士殿」

「宜しくなるかどうかは、貴様の今後の態度次第だがな」

「やれやれ」

チエイニーが肩を竦めてお手上げといった感じになった。が、その程度でへこむようなチエイニーでもなかった。天幕へ向けてぽつぽつと会話を交わしながら、二人は並んで歩いて行ったのだった。

アリティア城内。

進軍を開始していた解放軍は、今回もまた激戦を繰り広げていた。しかし、ここまで勝利を収めてきた解放軍の士気も高い。特に、将であるマルスとアリティア宮廷騎士団にとつては自国を取り戻す戦いということもあつて、この一戦に対する入れ込みようは半端ではなかった。

そういつた経緯もあり、今回の出撃メンバーの中核はアリティア宮廷騎士団である。それを、他の面子が支援するという形であつた。



「王子！」

カインが馬蹄を荒く鳴らしながらマルスの許へとやって来た。

「カインか！ 戦況は!？」

「はい！」

前線から離れていることもあり慌ただしく下馬をすると、カインが戦況を報告する。

「城の西部方面はアカネイア、オレルアンの各部隊の活躍によりほぼ鎮圧が完了しました。今は、残存戦力を掃討しているところです」

「そうか。被害は？」

「それが……」

カインが表情を曇らせた。

「！ 誰か倒れたのか!？」

歯切れの悪い返事とその表情に、マルスの表情が蒼ざめた。

「いえ、戦死したわけではありませんが、重傷者が多数出ました。シスターや司祭たちの話では戦線に復帰できないわけではないが、それまでにはかなりの時間がかかるだろうと」

「そうか……」

マルスの表情に翳が差した。生命を賭けた戦争を行っている以上、こういうことは日常茶飯事なのだが、だからといってやりきれない思いがなくなるわけではない。彼らの犠牲の上に勝利は成り立っているのだから。

「…その中に、指揮官級の人物は？」

「数名。アカネイア騎士団のトムス殿とミシエラン殿、オレルアン騎士団のロシエ殿、それとタリスのバーツとカシムです」

「わかった。カインは前線に戻って、重傷者の搬送の手配を整えてくれ」

「はっ！」

「アベル、後方に行つてこのことを伝え、受け入れ体制を整えておくように伝えてくれ」  
「かしこまりました！」

「マルスからの指示を受け、カインと、そして側にいたアベルがそれぞれ逆方向に向かって馬を走らせた。

「ふーっ…」

指示を出し終えたマルスが大きく息を吐く。そして少し項垂れると、顔を隠すかのよう  
うに額を手で覆った。

「お疲れですか、マルス様」

傍らに立つジエイガンがマルスの様子をチラッと見ると、そう声をかけた。

「ジエイガン…」

どう答えたらいいいものかといった戸惑いをありありと感じられる声色でマルスが反  
応する。

「いや、疲れているわけじゃ…」

「では、今のカインの報告を聞いて気に病んでおられるのですかな？」

「！」

ズバリ言い当てられ、マルスの表情が強張った。

「凶星ですかな？」

「…参ったな」

顔を隠すように額に置いていた手を外すと、マルスが力なく微笑んだ。

「どうしてわかつたんだい？」

「御幼少のみぎりよりお側に仕えさせていただいたのです。マルス様が何をお考えなの  
かはこの老骨、存じているつもりですぞ」

「本当に参ったな…」

表情を見せたマルスがちからなくふうと溜め息をつく。

「わかつてるんだよ、戦争なんだからね」

「……」

ジエイガンは口を差し挟むこともなく、マルスの意見を黙って聞いていた。

「戦争である以上、死とは背中合わせなのは当然のことなんだ。今までは奇跡的に指揮官級に犠牲は出てこなかったけど、それでも下士官や兵卒には何人もの犠牲者が出ていく。それを考えると、何度も心が折れそうになるよ」

「お気持ちわかります。ですが、甘いですよ」

「そうか」

マルスはジエイガンの意見に怒るでもなく否定するでもなく頷いた。

「戦争に犠牲はつきものです。感傷に浸るのは結構ですが、それは全てが終わってからでも遅くありません。今は勝利するために、すべきことを成さねばならない時です」

「ジエイガン様、それは」

ジエイガンの言い様に言い過ぎだと思ったのか、ゴードンが思わず口を挟もうとしたがジエイガンが目でゴードンを制し、ゴードンはその迫力に圧されて何も言えなくなっていました。

「…私も戦場で数多くの先輩、同僚、後輩を失いました」

マルスを諭すようにジエイガンが続けた。

「そのたびにやりきれない想いを抱えましたが、それに囚われて私まで犬死しては先に逝った彼らに会わせる顔がありません。その想いで戦場を生き抜き、気づけばこの年ま

で来てしまいました。些細なことではありませんが、私に出来て王子に出来ないわけはないと思います」

「ありがとう、ジェイガン」

自分に喝を入れるためだろうか、マルスは自分で自分の頬を軽く平手打ちした。

「もう大丈夫だよ」

そう言つて顔を上げたマルスの表情は、いつものものに戻っていた。

「そのようですな」

その表情を見てジェイガンが頷いた。ゴードンと、同じく側にいたノルンがホツとしたような表情になる。しかし、

（完全に吹っ切れてはいないようですがな…）

頷いたジェイガンだけは、そう思っていた。さつきは周りの連中にこれ以上余計な心配をかけさせないためにあえて言わなかったが、大丈夫と言つたマルスに、まだ少しだけいつものマルスとの違和感があることを感じてしまったのだ。

それは長年マルスの側に仕えていたジェイガンだからこそ感じ取れた、ほんの些細な違和感だった。恐らく、他にわかるのはモロドフと、血縁である母のリーザ、姉のエリスぐらいのものであろう。

（だが、今はそれに構っている暇はなし…か）

ここは戦場なのだ。先ほど自分が言ったように、感傷に浸るのは戦いが終わってからでも十分できる。そして勝利で戦いを終えるために、今はやるべきことをやらなければならない。

「差し出がましいことを申し下げました。申し訳ありません」

諫めるためとはいえ、主君に対して言い過ぎたことをジエイガンが詫びた。

「気にしないでくれ。ジエイガンには寧ろ感謝している。これからも僕の力になってくれ」

「もつたいないお言葉」

マルスからのその言葉に、ジエイガンは益々忠勤に励もうと決意したのだった。そこに、

「マルス殿」

新たに合流してきた者たちがいた。城の西部での戦いを終えたアカネイア騎士団、オレルアン騎士団の面々である。

「ハーディン公、それにミディアたちも」

「待たせたな」

合流したアカネイア騎士団、オレルアン騎士団の面々は即座に馬を降りた。唯一馬上に跨ったままなのはハーディンのみである。

全軍の指揮官はマルスではあるが、マルスがオレルアンに辿り着くまでニーナを護ってきたのはハーディン率いるオレルアン騎士団なのだ。そのため、格的には両者に差はなかった。だからこそ、この形で落ち着いているのである。

最初、ハーディンは自分も下馬しようと思っていたのだが、それを他ならぬマルスに拒否されてこの形に収まっていたのだった。

「戦果は聞いているよ」

「そうか」

「うん。ただ、指揮官級に重傷者が出たともね」

「うむ……」

ハーディンが渋い顔になる。それは、側にいたアカネイア騎士団もオレルアン騎士団も同じであった。彼ら彼女らは渋いというより、暗いといった方が良いかもしれないが。

「救いは、生命まで取られなかったことであろうか。だが、戦列に復帰するまでは時間がかりそうだ」

「それも聞いている。彼らの奮闘を無駄にしないためにも、必ずこの戦いは勝たなきゃいけない」

「うむ」

頷きながら聞いているハーデインは、そのまま視線を僅かにマルスへ向けた。

(固いな)

それが、ハーデインが率直に感じた今回のマルスの感想だった。いつもよりやや肩に力が入っているように見える。

(やはり故国ということが入れ込んでいるのか？ それとも、重傷者を出したことが多少なりとも負い目になっているのか？)

あるいはもつと他の理由があるのかもしれないが、いずれにせよマルスの心中などハーデインに諮れるものではない。マルスがハーデインの心中を諮れないのと同じことである。

(一時の感情に流されて大局を誤ることはないと思うが、もしそうなら越権は覚悟で事を起こすしかあるまいな)

ハーデインにとつてはここで解放軍が潰えるようなことだけはあってはならないのである。それでは何のために今まで苦労したのかわからない。そうなるのだったらその時は、先ほど覚悟したように越権も辞さない覚悟でいた。

(すべてはアカネイアの、ニーナ様の御為に)

そう決意したハーデインの脳裏にニーナの姿が浮かんで消えた。そして次に浮かんできたのはガレスの姿だった。



(!)

忌々しさを感じながらハーデインはすぐに脳内のガレスを打ち消す。

(何故奴の顔が…)

自問したが簡単なことだった。ニーナがガレスに、どのような類のものかはわからないが特別な感情を持っていること。そして、越権や命令違反と言った行動はガレスの十八番だからだ。

(忌々しい！)

自分で自分をガレスと同列に扱っているような感じがして、すぐにその考えをハーデインは頭から振り払った。と、それとほぼタイミングを同じくしてジュリアンが玉座へと通じる扉の鍵を開ける。

今回はアリエティア城内に眠る貴重な財宝の回収も目的のため、盗賊はジュリアンとリカードの二人とも参戦していた。そして、お宝の回収はリカードに、扉の鍵開けや命令はジュリアンに役目を分けていたのだ。

「王子、開きました」

「わかった」

仕事を終えたジュリアンが下がる。下馬していた騎馬部隊も再び各々の愛馬の背に跨った。玉座までの道筋が解放され、マルスが剣を鞘から抜いた。

「全軍、突撃！」

『おぉーっ！』

解放軍が勇ましく鬨の声を上げて玉座の間へと突入する。と、

「ふふふふ……」

玉座から：正確には玉座に座っている人影が不気味な笑い声を上げた。解放軍は用心を怠ることなくその人影に対峙する。玉座に座っているということは、恐らくはこの城の敵将なのだろう。

「アリティアの王子、のこのこと死ぬために帰ってきておったか。せつかく助かった生命をわざわざ捨てに来るとは愚かなことよ」

「！ お前は！」

名指しされたマルスが睨み付けながら剣を構える。が、その人物は一向に構わずに先を続けた。

「だが、少し遅かったようじゃな」

「何だと!？」

「お前の母リーザはすでにわしがこの手で殺し、姉エリス王女はガーネフの求めに応じてくれてやったわ」

「！ 母上と姉上が!？」

マルスは信じられないといった表情で呆然と呟いた。それはアリティア宮廷騎士団も同じことだった。

「王妃様と王女様が…」

「そんな…」

ある程度は覚悟はしていたとはいえ、それでもその事実を突きつけられるとシヨックなのは仕方のないことであつた。そんな彼らを侮蔑するかのように、玉座の人影が嘲笑しながら先を続けた。

「さて、命からがら逃げだした小僧が、このメデイウス王第一のしもべ、モーゼス様に勝てるかな？ ふふふ…」

そこまで言い終わると、玉座の人物…モーゼスは己の手中にある魔竜石を使用した。その直後、普通の人間だったモーゼスが、竜へと姿を変貌させてゆく。そこに現れたのは、今まで見たこともない禍々しいフォルムの竜の姿だった。

「！ あれは…!?!」

始めて見るその竜の姿にマルスたちが息を呑む。と、

「魔竜じゃよ」

不意にどこからか声が上がった。当然、声が上がった場所に視線が集まる。そこにいたのはバヌトウであつた。

「魔竜？」

マルスが声を上げる。

「うむ」

バヌトウが頷いた。

「我ら竜族の中でも、守りに優れた種族じゃ。特に魔法に対する防御は随一の存在よ」

「そうなのか」

そのバヌトウの一言で、マルスはモーゼスへの攻め方を考え始めた。

（魔道士を近づけるのは愚策か。直接攻撃も、マムクートのブレスを考えれば避けた方が良い。であれば、間接攻撃と目には目を……だ）

そう結論を導くと、その通りに指示を出していく。

「歩兵や騎兵は露払いを！ 弓兵やシューターは敵将へと援護攻撃を！ 敵将はバヌ

トウ、貴方をお願いする」

「心得た」

マルスの指示に従い、軍が動き出した。玉座を護る敵兵を直接戦闘要員が行い、その数を着実に減らしていく。

そしてある程度片が付いたところで、弓兵の支援を受けながらバヌトウがモーゼスに挑んだ。

状況は解放軍に有利であったものの、流石は自分でメデイウスの第一のしもべと自負するだけのことはあり、モーゼスはバヌトウと互角以上に渡り合った。

しかし、それでも数には勝てず、長い戦いの末に遂にモーゼスはバヌトウによつて討ち取られたのだった。

「ぐふつ……やるな……」

竜の姿から人の姿に戻り、モーゼスは断末魔を迎えた。しかし、その表情は憎しみや呪詛で彩られたものではなく、不敵な笑みを浮かべていた。

「だが、その程度ではメデイウス様は倒せぬ……」

解放軍の先きを予言するようなことを言い、モーゼスは不敵な笑みをそのままに息絶えたのだった。

（メデイウス……）

モーゼスが最後に口にしたその名に、いずれ必ず見えることになる敵の総大将にマルスが思いを馳せる。

（勝てるのか？ 僕に……）

そして次に思ったのはそんなことだった。今回は弓兵とバヌトウに頼ったが、メデイウスが相手となればそうともいえない。ファルシオンを継ぐ者であるマルスが立ち向かわねばならない相手である。

だが現状は、その部下であるモーゼスにも一対一で勝負することはできなかつた。無論、総大将がやられては敗北になつてしまつたために軽挙妄動は慎むべきである。しかし、今はメデイウスの配下の一人とも互角に渡り合えないというのもまた事実であつた。

(力…か)

勝利のため、それを渴望する。軍を率いる者ならば当然のことかもしれない。だがその際浮かんだものを、大急ぎでマルスは頭から振り払つた。

(何を考えているんだ、僕は…)

一瞬の気の迷いかも知れないが、マルスは自己嫌悪に陥つた。その脳裏に一瞬だけ浮かんだもの。それは、カダインの戦いで見せた時のガレスの圧倒的な強さだつた。あの力、あの強さがあれば…。

一瞬、ほんの一瞬とはいへマルスはそんなことを考えてしまつたのだつた。だがそれは、マルスが求めてはいけぬ力である。その先にいきつくのはガーネフか、或いはメデイウスである。彼らとは仇敵のマルスが、彼らと同じ側に立つわけにはいかなかつた。

(疲れているのかな…)

思わずそんなことを思つてしまう。そう思わざるを得ないほど、今の考えは起こして

はいけないものだったからだ。と、

「マルス王子、宜しいですか？」

いつの間にかモロドフが側に立っていた。

「じいか。どうしたんだい？」

マルスが己の中に生じた異変を悟られぬようにモロドフに返事を返す。

「はい。アリエティアの解放を喜び、大勢の市民が集まってきております。王子のお姿を

一目でも見たいと……」

「そうか……わかった。今行く」

モロドフの言葉に、マルスが即断した。が、

「マルス……いいのですか？」

横から口を挟んできたのはニーナだった。アリエティア城を制圧したことで後方にもその報せは行き、ニーナがつい先ほどこの玉座の間に着いたのだ。

「ニーナ様、何のことでしょう？」

ニーナの言葉の意味がわからず、マルスが首を傾げる。

「仔細は聞いています。城は取り戻しましたが、母は殺され、姉は行方知れずなのでしよう？ そんな状態の貴方には、今心底解放を喜ぶ気にはなれないでしょう。ここは代理の者を立てても……」

「お氣遣い、ありがとうございます」

マルスが恭しく礼をする。

「ですが、そうはいきません。今日は、祖国が解放された記念すべき日。私が真つ先に祝福できねば、死んでいった者たちに申し訳が立ちません。私は一個人マルスである前に、アリテイアの王子なのです」

「マルス…そうですか」

マルスの決意を聞き、ニーナもそれ以上制止するのをやめた。ニーナの氣遣いに対してマルスは軽く会釈をすると、モロドフに顔を向ける。

「じゃあ行くうか、じい。みんなが待っている」

「はっ」

モロドフに先導され、マルスは民衆に應えるために歩き出した。こうして解放軍の大きな目標の一つであり、全軍の指揮官であるマルスの故国、アリテイアは解放されたのだった。



## NO. 18 忘れていた感覚

あの日、陥落するアリテシア城から落ち延び、マルス率いるアリテシア宮廷騎士団は何とかタリスへと逃れた。そして多大な犠牲と長い年月を費やし、遂に今アリテシア城を取り戻すことができた。それも、アカネシア全土を解放するための解放軍の総指揮官という立場でマルスはアリテシア城へ戻ってきたのである。

母であるリーザの死、姉であるエリスの行方など、マルスの心中に暗い影がないことはない。だがそれでも、故国を取り戻したことに違いはないのだ。

(まずは第一歩だ)

それは紛れもない事実である。そして仮初ではあるが、マルスはそのことを祝うことにした。即ち、オレルアンやアカネシアの城を取り戻した時と同じく、戦勝の宴である。アリテシアの国民たちもこぞって祖国解放の嬉しさに酔いしれる中、主役である解放軍の主だった面々は城内で同じように戦勝の宴を開いていた。それは、城外でも当然同じこと。

「ふう……」

瓶からワインをラツパ飲みしたガレスが口元を拭うと、どかっとならそれを側の地面に置いた。そして、ゴロンとその場に横たわる。視線の先に映る空は夜の闇が訪れ始め、星の瞬きが見え始めていた。

（始まったのは夕刻近くだったが、まだまだバカ騒ぎは終わりそうにないな）

寝ころんだままチラツと周囲に視線を向ける。篝火に照らされ、そこかしこから陽気な声や明るい調子の歌、大笑いが聞こえてきた。

現状で察することができるように、アリティア城奪還の宴の最中だが今回はガレスは城に招かれてはいない。例によつて例の如く、ニーナは招きたかつたようだが、ハーディンと、今回はマルスもそれを許可しなかつたのだ。謹慎中であることと、それによつて今回は何ら働いていないことが理由である。

（まあ、構わんがな）

ガレスとしては別にどつちでもよかつた。ゼテギネアの皇子として、ああいう場での場数は数多く経験しているから今更気後れなどもしないので、アリティアの諸侯とやらがどんな連中か見定めさせてもらうのも一興ではあつたが、お呼びでないなら別に構わない。

寧ろ、誰に気兼ねするでもなく（最初から誰にも気兼ねなんかしないだろう、お前は。

というツツコミは置いておいて）のんびりとできるのだからこちらの方が良かったりする。

その代わりというわけではないだろうが、今回の主役であるアリティア宮廷騎士団は隊長のジェイガン以下全員王城での宴に招かれていた。

（あいつらにはせいぜい窮屈な思いをしてもらおうか）

どれほど社交界のマナーやしきたりを知っているかは知らないが、仮にも宮廷騎士団なのだから全くの礼儀知らずではないだろう。だからと言って、こっちで楽しむようにフランクにとはいかないので、大なり小なり気疲れというか気苦労するのは手に取るようにわかる。

（惜しむらくは、その様を見物できないことだがな）

クツクツクツと意地悪い笑みを浮かべてガレスが上半身を起こした。と、

「ガレス、楽しそうだな」

傍らからアテナが話しかけてきた。

「わかるか」

「わかる」

ガレスの問いかけに、アテナがコクンと頷いた。

「何か楽しいことでもあったのか？」

「これからある」

「??？」

意味がわからず、アテナが首を傾げる。

「お前は知らなくてもいいことだ」

そんなアテナを見て、ガレスは先ほどのように意地悪くクククといつものように笑った。

「ほほ……どうせ悪巧みでもしておるのじやろう」

アテナとは別の方向から、今度はバヌトウの揶揄するようなツツコミが入った。

「……知らんな」

ガレスはとぼけると、先ほどのワインの瓶にまた口を付ける。そんなガレスを、バヌトウは楽しそうにふおっふおっふおっふと笑いながら見ていた。

城に招かれなかった指揮官級も思い思いに城外で楽しむ中、相も変わらず変わり者がガレスの周りを囲んでいた。未だにガレスを毛嫌いしたり敬遠したりする者も多いのだが、こうやって親交を交わす者があるのも確かなのである。しかも、少しずつではあるがその数も増えていた。

元々がゼテギネアの皇子という立場からのカリスマが人を惹き付けるのか、それとも自分では手の届かない強さに対するあこがれか、更には純然たる力への羨望か、はたまた

た純粋に交流を楽しんでいるのかどれなのかはわからない。ひよつとしたら他の理由があるかもしれないが、ともかくガレスの周りに出来る輪が広がっているのは確かだった。

「ま、そんなことはいいいじゃねえかよ」

ほろ酔いでガレスに近寄ってきたのはチェイニー。最近ガレスと親交を持った一人である。そのまま、チェイニーはガレスの横にどかっとなると、自分が持っていたワインを、これまた自分が持っていたグラスに注いで差し出した。

「今は楽しもうぜ。なあ？」

ニカツと笑いながらグラスを差し出したチェイニーを一瞥すると、ガレスは自分が持っているワインの瓶を軽く上に上げた。

「まだ残ってるんでな」

「かてーこと言うなよ」

チェイニーはガレスが見せたワインの瓶をひよいつと取り上げると、それを傍らに置いてグラスをそのまま差し出した。

「…おい」

ガレスの目つきが少し鋭さを増す。だが、酔いも回っているのか、チェイニーは気にする様子もなく、陽気に笑いながらグラスを差し出していた。

「ほれ」

「チツ…」

少し腹立ちながらガレスは乱暴にグラスをひったくると、そこに注いであったワインを一气飲みした。

「おぉー！」

パチパチパチとチェイニーがまばらな拍手をする。グラスに入ったワインを飲み干したガレスが、そのグラスをチェイニーへと突き返した。

「おかわりか？」

「ふざけるな」

「おお、怖い怖い」

「失せろ、酔っ払い」

「へいへい」

肩を竦めると、チェイニーはガレスから取り上げたワインの瓶をその場に置き、グラスを受け取って少々千鳥足気味に引っ込んだ。

「全く…」

酔っ払いは何処の世界でも変わらなとうんざりしながらガレスがグイッとワインをラッパ飲みした。その様が可笑しかったのか、それともなかなか見られないそんなガ

レスの姿が珍しかったのか、集まった他の面々がクスクスと笑っている。  
「そう怒るなよ、大将」

押掄したのはジエイクだった。

「誰が大将だ」

ガレスが不機嫌な様子で返す。

「誤解を招くような表現はするな」

「いいじゃねえか、酒の上でのことだぜ？」

「そうそう。誰もそこまで神経尖らせやしないよ」

ベックが頷く。解放軍には数少ない……と言うより、この二人だけしかないシューターとあって、この二人は常にコンビだった。兵種が同じというだけでなく、性格的にも馬が合うのだろう。戦場外でもよく二人でつるんでいた。と、篝火に照らされた二人の顔が赤くなっているのにガレスが気付いた。

「お前らも酔ってるのか」

確認のためガレスが尋ねる。

「当たり前だろ」

「酒が入ってるんだから、当然」

ジエイクとベックが頷くと、かんぱーい！ と陽気にお互いのグラスをカチンと合わ

せた。そこにチェイニーが加わり、三人で盛り上がっている。

「あちらの御仁たちはすでに出来上がってるようだな」

静かにグラスを傾けているのはシーザだった。横で、相棒のラデイがうんうんと頷いている。

「お前たちは大丈夫なようだな」

先ほどの三人と比較して静かに飲んでいるシーザとラデイにガレスが尋ねた。

「まあ」

「俺らは自治都市で交易都市の自警の傭兵だからな。そういったお付き合いは頻繁でね。自然と強くなるのさ」

「そういうことだ」

シーザとラデイは言葉通り、静かに酒を飲みながら雰囲気を楽しんでいた。レナはこの場にいないが、恐らくジュリアンたちと楽しく過ごしているか、細々とした仕事をして陣中を走り回っているのだろう。何とも花の足りない一団ではあったが、ここに新しい花が加わろうとしていた。

「あの…」

不意に、あらぬ方向から声をかけられる。

「ん？」



振り向くと、そこには予想していなかった顔があった。

「お前たち」

「どうも」

「こんにちは。…いや、こんばんはかな?」

そこに立っていたのはパオラとカチユアだった。

「これはまた…」

予想だにしていなかった人物の登場にガレスは驚いていた。それは他の面々も同じよう、バカ騒ぎしているジエイクたち三人以外の、バナトウにシーザ、ラデイも同じように驚いていた。

唯一、アテナだけはチラツと二人の顔を見た後、我関せずといった感じでグイグイと酒を飲んでいたが。

「どうした?」

思わぬ来客の登場に驚きながらもガレスが口を開いた。

「何か用か?」

「えつと…何て言えばいいのかしら…」

パオラが自分で言った通り、どう説明すればいいのかといった表情になって顔を曇らせた。

「んー…強いて言うなら、ご機嫌伺い？」

カチユアが顎に人差し指を当て、軽く首を傾げながらそう独り言のように呟く。  
「機嫌伺いだと？」

その言葉にガレスが訝しげな表情になった。

「誰のだ」

「誰って…」

「それは…」

二人の視線が当然のようにガレスに刺さった。

「…悪いことは言わん、考え直せ」

呆れたような表情になってガレスが溜め意をついた。

「俺の機嫌など伺ってどうする。時間はもつと有効に使うんだな」

そして、犬や猫を追い払うときのようにしっしっしと手を振って、二人に他のところへ行くように促した。

「ちよつと！」

その行為に、カチユアがあからさまに不快感を顔に出し、

「今のは、失礼じゃなくて？」

パオラも同じようにムツとした表情を浮かべていた。

「そうよ。レデイに對して」

「フツ、レデイ…な」

「何？ 何か文句でもあるの？」

「あるなら聞くわよ」

二人揃つて不機嫌な様子を隠そうともせず、ガレスをジロリと睨み付けた。

「クク…そうむくれるな」

一方、ガレスはいつものように二人の怒りなどどこ吹く風と涼しい表情である。

「折角の綺麗な顔が台無しだぞ」

「綺麗な顔…ね」

パオラが呆れ気味に反芻する。

「どうした？」

「どうしたもこうしたも、取つてつけたようにそんなこと言われてもね」

「ええ。嬉しくもなんともないわ」

カチュアもジト目でガレスを睨んでいた。

「そうか？ 正直な感想だがな」

「そういうことは最初に言つてほしいものね」

「そう。邪険に扱われた後にそんなこと言われても、取り繕うためのおためごかしにし

か聞こえないわよ」

「ククク…手厳しいな」

いつものようにガレスが咽喉の奥で楽しそうに笑った。

「まあ、それは別としてさっさと帰れ」

「だから、何で」

さつきから帰れ帰れと言われ、いい加減腹に据えかねたのかパオラの不満気な口調が少し語気を強めた。カチュアも同じくムツとしたままである。

「お前たちには主君がいるだろう。そつちをないがしろにして俺に構っていいわけではないだろう」

「ああ、そういうこと」

ようやくガレスのつれない態度の理由がわかり、パオラとカチュアが一時的に不満を収めた。

「ミネルバ様とマリア様ならマルス様に招かれてアリティア城に向かわれたわ」

「何だと？」

今度はガレスが怪訝な表情になった。

「だったら尚更だ。何故部下のお前たちがこんなところで油を売っている」

「別に売ってないわよ。ミネルバ様が、護衛はいいと仰ったから」

「そう。たまにはゆつくり息抜きでもしていなさいって」

「…成る程」

そこでガレスはようやく今の状況に納得がいったのだった。

「おわかり？」

「ああ。何故お前らがこつちにいるかは理解した。が、ならば尚更気になる」

『？ 何が？』

パオラとカチュアが小首を傾げて尋ねた。

「何故俺のところに来た。休養ならば他の連中のところに行けばいいだろう。わざわざ俺のところに来る理由が見えん。お前たちには妹の件もあるから、尚更俺は選択肢にないと思うのだから」

「それは…」

パオラが一瞬口ごもった。が、

「エストの件はエストの件よ」

カチュアが間髪入れずに答える。

「それは、あの子を殺そうとした貴方に思うところはあられるけれど、今は味方なんだし、あの子は実際死にはしなかったんだし、いつまでもグチグチ言うのも…ねえ？ 何か嫌じゃない」

「そういうものか?」

「そういうものだと思ってくればありがたいんだけど?」

「成る程」

カチュアの言い分にガレスが一応納得した。が、それと今ガレスが聞いたことに対する回答には多少のズレがあるので改めて問い質した。

「まあ、お前らがお前らなりに気持ちに整理をつけたというのならそれはそれでいいだろう。ではもう一度聞くが、何故俺のところに来た。この軍での俺の立ち位置がどんなものかは何となくわかるだろう。そんな奴のところに来ても、あまり得るものはないと思うがな」

ククツと、自嘲するようにガレスが笑った。そんなガレスを、パオラとカチュアが複雑な表情で見ている。

「クク…それとも」

「何?」

「ここにきて間もないから、まだ碌に交流を持った奴がないのか? …つまり、姉妹揃ってぼっちか?」

「しっつれいねー」

揶揄され、カチュアがまたムツとした表情になった。

「確かにまだここに加わって日は浅いけど、ミネルバ様やマリア様のつながりで、普通に人間関係は形成できてるわよ。まだ狭いけど」

「だったら、そっちへ行けばいいだろう」

「いいでしょ、別に。私たちが何処でどうやって時間を使おうと、貴方に指図される謂れはないわ」

「確かにな」

そこはその通りなのでガレスは口を挟まなかった。

「まあ、数多いお仲間の中で俺を選んでくれたわけだ。ありがたく同席してもらおうか」

『数多い』…ってというのがちよつとひっかかるけど」

「細かいことを気にするな」

「何で言った張本人がそう言う言い方をするのよ、もう…」

疲れたような表情になってパオラとカチュアがガレスの傍らに腰を下ろした。

「それにしても…」

パオラがまじまじとガレスを見る。

「何だ？」

「いえ…貴方って、鎧兜を脱ぐと随分印象が変わるのね」

「うん」

カチユアも頷く。そして二人揃って、珍しいものを見るようにまじまじとガレスを見ていた。

「そうか？」

ガレスはというと、どうでもよさそうに返事をする。とワインの瓶に口を付けて中身を胃の中へ流し込んでゆく。パオラが言ったように、今ガレスはいつものフルメール、フルヘルム姿ではなかった。

宴の最中なのだから当然かもしれないが、鎧兜を脱いだ姿なのである。貴重と言えば貴重なそのガレスの姿に、暫く我を忘れてパオラとカチユアが見入っていた。と、

「どうした？」

二人が大人しいことに気付いたガレスが口を開いた。それにハツとしたパオラとカチユアが、

「べ、別に」

「何でもないわ」

と、言葉を濁す。そんな二人の様子を見たガレスが、いつものように咽喉の奥でクククと笑った。

「俺に見とれていたか？」



そして、ズバリ確信を突いた発言を二人に向けた。

「！ ば、バカなこと言わないでちょうだい」

「そーよ！ 自意識過剰なんじゃないの!?!」

ガレスに指摘され、慌ててパイッと顔を背けるパオラとカチュア。その姿に、ガレスはまた意地悪くクククと咽喉の奥で笑うのだった。

「クク、顔が赤いぞ」

そして、追撃の手を休めずに更に突っ込む。

「熱でも出たのか？」

「見間違いないんじゃない?」

「そうそう。それか、篝火の加減でそういう風に見えるように照らされてるだけでしょ」

「クク、そうか」

「そうです」

「そうよ」

姉妹が息を合わせて否定し、ガレスはまた咽喉の奥で笑ったのだった。

「まあ、好きだけけゆつくりしていけ。もつとも、ゆつくりのんびりできる保証はどこにもないがな」

「ええ」

「そうさせてもらうわ」

持参したワインをお互いに注ごうとするパオラとカチュア。

「ちよつと待った」

そこに、横から声がかかった。

「え？」

「何？」

訝しがりながら二人が声のした方に振り返ると、そこにはいつの間にか近づいてきたのか、シーザとラデイの姿があつた。

「あなた方は？」

パオラが尋ねる。二人とも指揮官級の人物とは言え、まだ全員の顔と名前を把握していないのだろう。加入してまだ日が浅いのだから仕方のないことではあるが。

「失礼。私はワーレンの傭兵でシーザ」

「俺はラデイ。宜しくな」

「マケドニア白騎士団のパオラよ」

「同じくカチュア。宜しくね」

「ああ」

ラデイが頷いた。

「それで、何の御用かしら？」

パオラが重ねて尋ねる。と、

「折角来てくれたんだ。俺たちに注がせてくれよ」

「え、でも……」

カチュアが戸惑う。遠慮しているのではなく、ほぼ初対面なのにお言葉に甘えていいのだろうかと迷っているのだ。意見を求めるように姉のパオラに目を移したが、パオラもどうしようか決めかねているようだった。

「私たちと……ではないにしても、交流を深めに来たのだろうか？　ならば、これも何かの縁だと思つて是非」

シーザが重ねてそう言う。相変わらず顔を見合わせながらどうするか考えていた二人だった。その一言を聞いたとあつて結論は早かった。

「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただけようかしら」

「お、嬉しいね」

賛同を得たラデイがパオラの脇に座ると、ワインを受け取つてパオラが手に持っているグラスにそれを注いだ。

「では、貴方は私が」

「あ、ありがとう」

カチュアが緊張気味にシーザにグラスを差し出す。こういった経験はほとんどないのか、ちよつと恥じらっているように見えた。やがて、二人のグラスにワインが十分に満ちる。

「どうも」

「ありがとう」

パオラとカチュアはそれぞれワインを受け取る。すると、パオラがカチュアに自分のグラスを渡した。

「？ 姉様？」

どういふことかわからず、カチュアが首を傾げる。

「ちよつと持つてて、カチュア」

「え？ あ、う、うん……」

パオラに言われるがまま、カチュアはワインの瓶を傍らに置くとそのグラスを手にとった。すると、パオラは自分の持つていたワインの瓶をラデイに向ける。

「へえ……嬉しいね」

パオラの意図を察したラデイはさつきまで自分たちがいた場所に戻ると、自分たちのワイングラスを持つてくる。そしてシーザに彼のグラスを渡すと、ラデイは元の場所に座つてそのグラスをパオラに向けて差し出した。

すぐに、パオラがワインの瓶を傾ける。自分たちと同じぐらいの量まで注いだところで、パオラが傾けたワインの瓶を元に戻した。

「御返杯」

「ありがたく頂戴するぜ」

ラデイが相好を崩した。パオラが自分の分のグラスと、今度はカチュアのグラスを受け取る。代わりに、ワインの瓶をカチュアに渡した。

「それじゃ、私も」

「すまないな」

今度はシーザにカチュアがワインを注いだ。四人がそれぞれワインの入ったワイングラスを持つ。そして、

『乾杯』

図らずも声が重なり苦笑しつつ、いい雰囲気だ。ワインを嗜んだ。そこへ、

「お、羨ましいねえ」

酔っ払いの三人が加わる。

「何だよ、何時の間に女をひっかけたんだ？」

チエイニーがニヤニヤしながらシーザとラデイの間に腰を下ろした。

「そんなことはしてないぜ」

「ああ。彼女たちに失礼だろう」

そう言つて、二人は再びグラスを傾ける。

「や」

「どうも」

ジェイクとベックはそれぞれパオラとカチュアの傍らに腰を下ろした。

「おたくらは確か…」

「ミネルバ王女の…」

「ええ」

「部下のパオラとカチュアよ。宜しくね」

「俺はジェイク」

「ベックだ」

「存じてるわ」

「ええ。マケドニアにはシューターはほとんどいないからね」

「そうかい」

「ま、こうやって同じ軍に加わってるのも何かの縁だ。宜しく頼むぜ」

「ええ」

「こちらこそ」

和気藹々と宴の時間が過ぎていく。そんな彼ら彼女らのやり取りを、ガレスはワインを飲みながら見物していた。

「ガレス」

不意に、一人マイペースで飲んでいたアテナが話しかけてきた。

「何だ？」

アテナに顔を向け、ガレスが尋ねる。と、アテナは一言、

「楽しそう」

とだけ言ったのだった。

「楽しそうだと？」

「うん」

アテナが頷いた。

「俺がか？」

「勿論」

「そう見えたのか？」

「うん」

「…そうか」

納得しつつも、ガレスは内心では驚いていた。まさか楽しそうな視線を他人に向ける

日が来るとは思わなかったのだ。いつものように意地の悪い笑みではなく、単純に楽しそうに見えたということがガレスにとっては本当に意外だった。

「……」

そんな指摘をされた後、チラツと視線をある方向へ向ける。そしてその視線をすぐに戻すと、ぐいつと酒をあおってガレスは徐にその場を立ち上がった。

「? ガレス?」

不意に立ち上がったガレスに、アテナが首を傾げる。

「どうしたんじや?」

「小便だ」

尋ねてきたバナトウにそう答えると、楽しい時間を過ごしている面々に気付かれないようにガレスがその場を去ったのだった。

小便のために適当な繁みに入るガレス。その姿を追い求める二つの影があった。影はガレスに気づかれぬように細心の注意を払いながらガレスが入った繁みを遠巻きから覗き込む。しかし、そこにはガレスの姿はなかった。

「!」

「何!?!」



十分な距離が離れているのだが、影は万一にもガレスに気付かれないように最小限の声を出している。だが、当のガレスはいるべき場所にはどこにもいない。

(確かにここに入ったのに…)

(一体何処へ…)

ガレスを探し求め、影が気取られないように周囲に視線を走らせる。と、

「こんな日まで、御苦労なことだな」

(！)

(！)

不意に背後から声をかけられ、影は心臓が止まるかと思うほど驚いた。ハッキリ言つて悲鳴を上げなかったのは奇跡である。だがそれよりも、

(い、今の声は…)

(まさか…)

二つの影が恐る恐る自分たちの背後を振り返つた。そこには当たつてほしくない二人の予想通り、呆れたような表情で自分たちを見下ろしているガレスの姿があつた。

『ツ！』

再度、悲鳴を上げなかつた奇跡を起こしながらも、影は一瞬で固まつてしまった。そんな影を見下ろしながら、ガレスがニヤリと笑う。

「朝も夜も、雨が降ろうが風が吹こうが、時間があれば俺を見張っていて見上げたものだ」

「き…気づいて…いたのか？」

影の片方が驚愕に彩られながらも何とかそれだけ口にすることができた。

「気付かぬわけがないだろう」

ガレスが淡々と答える。

「貴様らは上手く気配を消せているつもりだろうが、俺には通用せん。鬱陶しくて仕方なかったぞ」

「だ、だったら何で、今まで泳がせてたんだ？」

もう一つの影が尋ねる。

「簡単だ。貴様らが見張っているだけで何もしてこなかったからだ」

ガレスがこれまた淡々と答えた。

「何かしてくれば俺としても遠慮なく貴様らを排除できたのだがな、貴様らは見張っているだけで何もしてこなかった。だから俺も何もしなかった」

「じゃ、じゃあ、何で今更…」

「さつきも言っただろう？ 鬱陶しくて仕方なかったと」

そこでガレスの視線が鋭くなる。

「何もしてこないとはいえ、ずっと見張られ続けていれば腹も立つ。いい機会だと思っただけな」

そこで雲間から月の光が差し、影を浮かび上がらせた。現れたその顔はオレルアン騎士団のホースメン、ウルフとザガロだった。

「最初は貴様だったな」

ガレスはザガロに視線を向ける。

「な、何のことだよ？」

生唾を飲みながらザガロが何とか答えた。

「わからんか？ それとも覚えていないのか？ オレルアン城を奪回したときの宴で、俺とニーナがテラスで酒を酌み交わしていたときに、貴様離れたところから見張っていただろう。あれ以降だ、貴様らの鬱陶しい見張りがついたのは」

「！」

ザガロが驚愕に目を見開く。まさか最初からバレていたとは思わなかったのだ。

「踊らされてたって訳か……」

ウルフが吐き捨てた。

「ああ。鬱陶しかったが中々楽しめたぞ、貴様らの道化ぶりはな」

「！　ハの！」

「いい性格してるぜ」

揶揄されたザガロとウルフが憎しみと嫌悪感を剥き出しにしてガレスを睨む。

「フン、お互い様だ。…余程ハーデインは俺が気に入らんようだな」

「ああ」

ザガロが吐き捨てた。バレてしまった以上、気を遣う必要もなくなったためにふてぶてしくなっている。

「確かにそれもある。だが何より、貴様がニーナ様と個人的な親交を持つのをハーデイン様は危惧しておられる」

ウルフが補足した。こちららも開き直ったからか、ぞんざいな口調になっている。

「フン」

ガレスが面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「気持ちにはわかるがな、俺があいつとどうにかなる、あるいはあいつをどうにかすると思っているのか？」

「その可能性があるというだけで排除の理由には十分なんだよ」

ザガロが厳しい視線でガレスを見据えながら答えた。

「ニーナ様は、今ではアカネイア王家の最後の生き残りだ。その血筋を絶やすわけにはいかない。一時的な気の迷いに違いないとはいえ、貴様のような得体の知れない奴の影

があつてもらつては困るんだよ」

「それで俺が下らん真似をしないように、貴様たちを使つて俺を見張らせていた……と」

「ああ」

「フン、下らんな」

「何だと！」

ザガロが激昂した。

「もう一度言つてみる！」

ウルフも同じく激昂する。自分たちが踊らされていたことに加え、主君の采配を下らないの一言で切り捨てたことが二人には許せなかつた。

「もっともらしい理由をつけているが、俺にはガキが嫉妬して子分を使つてみみっちい横槍を入れてるようにしか思えんがな」

「貴様に何がわかる！」

「わかるものか。貴様らの事情など俺は知らんからな。だから好き勝手に言っている」

「本当に腹立たしいな、貴様……」

「フン、お互い様だ」

双方の主張は平行線をたどる。このまま続けても解決の点はとも見出せそうにはなかつた。

「城の宴から戻ってきたら、貴様らの主人に伝えておけ」

やがて口を開いたのはガレスであった。

「貴様の危惧しているようなことにはならんし、俺もするつもりはないとな」

「……」

「もう一つ。バレたのだからこれ以上無駄な真似はするなともな」

「……」

ザガロ、ウルフの二人とも、応とは言わない。しかしこうなった以上、彼らの採るべき選択肢はガレスの言う通りにする他なかった。と、

「さて」

ガレスが表情を一変させてニヤリと笑った。そしていきなりザガロとウルフの首根っこを掴んで引きずり出す。

「お、おいー！」

「貴様、何を!？」

いきなりの展開に面食らいつつも、ザガロとウルフは当然抗議した。

「これまで散々嗅ぎまわってくれたんだ。今度は俺が意趣返しさせてもらおうか」

「な、何!？」

「ふざけるな！ 放せ！」

「ククク、無駄だ無駄だ」

抗議の声を上げるザガロとウルフを当然黙殺し、ガレスはそのまま二人を引きずりその場を後にしたのだった。

「あ、ガレス」

戻ってきたガレスにアテナが声をかけた。

「戻ったか」

「ああ」

と、その両腕にガレスが出て行くときにはいなかった二人を引き連れているのが目に入った。

「何だ？ そいつら」

「こいつらか？」

そこでいつものようにクククと笑う。そして、傍らにいるパオラとカチュアに視線を向けた。

「その二人と同じだ」

「ん？」

よくわからないといった表情でアテナが首を傾げた。突然話を振られた形になった

パオラとカチュアもキョトンとした表情になっている。

「ぼっちで所在なきげだったんでな、無理やり連れてきた」

「だから！」

「私たちはぼっちじゃないってば！」

「ククク」

パオラとカチュアの抗議を気にする素振りも見せず、その二人、ザガロとウルフをパオラとカチュアの前に放り投げる。

「そいつらにも酒を注いでやってくれ」

「わかったわよ、もう……」

「全く……」

ムツとしながらブツブツ言っていたパオラとカチュアだったが、ザガロとウルフには何の関係もないので普通にお酌することにする。

「はい」

「どうぞで」

「あ、ああ」

「ありがとう」

ザガロとウルフがおずおずとグラスを受け取った。そこでパオラとカチュアは、ザガ



口とウルフの顔に殴られたような箇所があるのに気づいた。

「あら？」

「どうしたの、その顔？」

「いや……」

「別に……」

そうは言いながらも、ザガロとウルフは恨みがましい視線をガレスに向けた。だが当のガレスは、ニヤニヤしながらザガロたちを見ていた。

（ああ……）

（成る程……）

それで大体何があったのかわかったパオラとカチュアが互いの顔を見ると肩を竦めた。そんな二人を尻目に、せっかく注いでくれた酒を飲まないのも失礼に当たると思ったのだろうか、ザガロとウルフはチビチビとそれを飲む。

「お、新顔さんかい」

見慣れない顔が増えたことに一番最初に気付いたチエイニーが寄ってきてドカツと傍らに腰を下ろした。すっかり打ち解けたのだろう、ジェイク、ベック、シーザ、ラディの四人もわらわらと集まってきて同じように腰を下ろす。

「あれ」

「これは珍しい」

「確かに」

「あんたら、オレルアン騎士団だろ？ 何でここにいるのさ」

「いや…」

「その…」

返答に窮しているザガロとウルフが助けを求めるかのようにガレスに視線を向ける。だがガレスは、二人の困っている様子をニヤニヤと眺めているだけで口を出そうとはしなかった。

（チツ…）

（あいつ…）

自分たちが右往左往しているのを肴に酒を飲もうとも思っているのがその表情からわかり、ザガロとウルフは恨みがましい視線を向ける。しかし、ガレスは一向に気にする様子もなくまたグイッとワインをあおった。

そうしている間にもいい感じに出来上がった酔っ払い軍団に半ば絡まれ、ザガロとウルフは四苦八苦する羽目になったのだった。

（ククク…）

ザガロとウルフの思っていた通り、二人の慌て様を酒の肴にしながらガレスは再びそ

の場に寝転がった。視線の先には夜空と無数の間叩く星々の数々。

(こんなふうに呑気に空を見上げるなど、いつ以来か……)

そんなことを考えながら、ガレスはのんびりとこの時間を楽しんだのだった。

## NO. 19 マクロニソスの城

アリティア城を取り戻し、泡沫の休息を取った解放軍は再び進軍を始める。オレルア  
ン、アカネイア、グラ、アリティアとドルーアの支配地から奪還したものの、ドルーア  
本国、並びにグルニアとマケドニアの主力国家はまだまだ健在である。両雄並び立たず  
というわけではないが、この中途半端な状態で世界が安定するということはあり得な  
かった。

次に解放軍が目標を定めたのがアリティア北方にある一つの城だった。その名はマ  
クロニソス。アリティアがドルーアの占領下の時代に物資補給拠点として大きな役割  
を果たした城である。

この城にいる敵の残党を片付けなければ、後背を突かれる可能性があった。後顧の憂  
いを断つために、解放軍は一路、マクロニソスへと向かったのであった。

「さて……」

マクロニソス城の近くに布陣した解放軍は出撃の準備で慌ただしく動いていた。そ

んな中、当然ガレスもその陣中にいた。アリティア城外での宴会時の甲冑を脱いだりラックスした姿ではなく、いつもと同じ漆黒のフルメールにフルヘルムの姿だった。真紅の瞳が少し先にそびえ立っているマクロニソスの城を射抜く。

「今回は城内戦のようだが……」

呟く。そして、

「俺の出番はあるのか？」

誰に問うでもなく、自問自答するように続けてそう呟いた。普通に考えれば謹慎を解かれていない今の立場なら出撃の声がかかる確率は低いだろう。だが、アリティア城内戦で重装兵が何人か重傷を負ったということを知っていた。

救護班や衛生兵の活躍で一命をとりとめ、快方には向かっているものの、まだ戦列に復帰するには時間がかかることらしい。であれば、戦力を整えるために謹慎解除もあるかもしれない。

（まあ、そこら辺はマルスの匙加減一つか）

自分にはどうすることもできない以上、指揮官の指示に従うしかなかった。謹慎解除の上出撃となれば楽しませてもらうだけだし、そうならなければ今回も留守番をするだけだ。

（ククク、俺としてはどちらでもいいがな）

戦場に出るのであればたっぷり楽しませてもらうだけだし、出撃が許可されないのであれば今回も後方でのおんぶりするだけである。

(どちらになるか、さて…)

その結果を待つべく、ガレスはマクロニソスの城から目を外すと、自身の天幕へと戻ったのだった。

「ダクテイル様」

マクロニソス城城内、守将であるダクテイルの許に兵士がやって来た。

「例の魔道使いを連れてきました」

「うむ、ご苦労」

部下を労うと、ダクテイルは視線を兵士の隣に向けた。そこには、この部屋に連行させられてきた一人の魔道士の姿があった。

「ぐっ…」

悔しそうに忌々しそうに己の現状を嘆く青年の魔道士。名をエッツエルと言った。

「どうだ、我らに協力する気になったか？」

青年…エッツエルにダクテイルが尋ねた。言葉通りであるならば、もう何度もこう

いったやり取りが行われているのだろう。だが、

「…断る。その気はない…」

恐らく何度も同じ返答をしたであろうエッツエルがそう言つて拒否したのだった。

「なんだと！ 流れ者の魔道使いのくせに、何様のつもりだ！」

エッツエルの拒否の返答に、ダクテイルが怒りをあらわにした。何度聞いても変わらぬ答えに業を煮やしたのだろう。そのままダクテイルはエッツエルを連行した兵士に顔を向けると、

「おい、この男の持ち物を身ぐるみ剥いでどこぞに放り込んでおけ。何か役に立つことがあるかもしれない」

と命令した。しかし、それを聞いた兵士は少し困ったような表情になる。

「身ぐるみと申しましたが、所持品は魔道書と指輪しか…」

これが、兵士が困惑した理由だった。身ぐるみ剥いだところで、大したものはないのだ。しかし、ダクテイルは兵士のその一言に興味を惹かれた。

「指輪？ どれ、見せてみよ」

そう兵士に命令する。別に大した意図があったわけではなく、ただほんの興味本位だった。しかし、

「!! 待て…返せ…」

指輪を取り上げられたエッツエルがそれを取り戻すために実力行使に出ようとしていた。

「それは…アーシエラの…」

指輪を奪い返そうと暴れはじめる。そして、ダクテイルに手を伸ばした。

「むっ！ 何をするか！」

「貴様、ダクテイル様から手を放さんか！」

ダクテイルの服を掴んだエッツエルを兵士が引き剥がす。だが、エッツエルは尚も食い下がることをやめない。

「ぐっ…！ 頼む…返してくれ…その指輪だけは…」

執拗にそう懇願するエッツエル。魔道士だというのに、その手の力は戦士にも勝るとも劣らないほどのものを見せていた。余程エッツエルにとって大事なもののだろう。

「こいつ！ 放せ！ その薄汚い手をどけろ！」

「がはっ…！」

しかし、エッツエルの想いは届かなかった。やつとの思いで何とかダクテイルはエッツエルを引き剥がしたものの、本当に一苦勞だった。

「おい、早く連れていけ！」

「はっ！」



またこんなことになるのは避けたいのだろう。ダクテイルが即座に命じる。兵士も心得たとばかりにすぐにエッツエルを連行したのだった。

「ふん、こんな安っぽい指輪なぞ……」

その、エッツエルが最後まで執着していた指輪をジロジロと眺めながらダクテイルが小ばかにしたように呟いた。が、

「ん？ 指輪……指輪か……」

何かを閃いたのだろうか。その指輪を見ながらブツブツと呟いたのだった。

「よし、行くぞ皆！」

マルスが号令をかけ、マクロニソス城の攻略が始まった。戦力的にバランスの取れた編成で挑んだ今回の出撃メンバーの中にガレスの姿はない。戦力的には非常に大きいのだが、やはりまだまだ謹慎を解くわけにはいかないのだろう。とは言え、

（必要とあれば何も気にせず出てくるんだろうけどな）

そうも思っているマルスだった。止めようにも止められるような人員はいない。自分のできることはそうならないように慎重に攻略していくことだった。その甲斐あって解放軍は順調に攻略していく。そんな中、大広間では、

「連れて参りました」

先ほどエツツエルを連行した兵士が戻ってきた。その言葉通り、傍らには再びエツツエルを連行してきている。

「うむ、ご苦労」

ダクテイルがろうと、兵士は軽く頭を下げて後ろに下がった。

「さて……おい、お前」

ダクテイルがエツツエルに視線を向ける。そして、

「指輪を返してやってもよいぞ」

と続けた。

「！」

その言葉に、エツツエルが驚きで目を見開く。但し、当然のようにタダでというわけではなかった。

「そのかわり、同盟軍の相手をしてこい。ちゃんと働けば考えてやる」

「……」

交換条件であり、その条件はエツツエルの予想通りのものでもあった。しかし、エツツエルにとってはあの指輪は何よりも大事なものである。そのため、返す返事は一つしかなかった。

「…素手では戦えん」

不承不承ではあるがエッツエルがそう言う。魔道士である彼にとって、肉弾戦は門外なのだ。丸腰ではどうしようもなかった。

「ん？ …まあ、そうだろうな」

エッツエルの言葉にダクテイルも頷いた。そのため、

「魔導書を返してやる」

と、当然のように続けたのだった。そしてこれも当然のように、

「ただし、裏切ればどうなるかわかっておるだろうな」

と、付け加えることも忘れなかった。ダクテイルから魔導書を受け取ると、エッツエルは即座にその場を後にしたのだった。そして、マクロニソスの城の一角にその姿を現す。

「…やむを得ん。とりあえずは従っているふりでもしておくか」

指輪を取り返すためとはいえ本当に解放軍と戦う気などはエッツエルにはなく、どうにかお茶を濁すことに努めるようにしたのだった。

解放軍はその後も城内のそこかしこで残党と渡り合った。しかし、ここまでの歴戦の

戦いを乗り越えてきた精鋭だけあって、戦況は有利に動いていた。

「ここまででは取り敢えず問題なしか」

これまでに入ってきた各所からの報告を聞き終えたマルスが、その内容からそう判断した。

「そうですね」

傍らのアベルもマルスに同意した。今回はジエイガンはお留守番であり、その代わりにこのアベルとそして、

「王子！」

馬を走らせてマルスの傍らへとやって来たカインだった。

「カイン、どうしたんだい？」

「はい」

慌てて下馬すると、カインが叩頭する。

「実は、妙な敵兵を見つけまして」

「妙な敵兵？」

その、何とも捉えがたい報告にマルスの表情も訝しがるようなものになった。

「はい。魔道士なのですが、こちらに積極的に攻撃してくる様子がないのです。向こうから近づいてくることもないのですが、こちらから近づくと攻撃してくるので、敵であ

ることは間違いないと思うのですが…」

「成る程ね」

カインの報告を聞いてマルスが少し考える。

「如何なさいますか？」

カインがマルスの判断を仰ぐ。

「積極的に敵対してくるなら戦わざるを得ないけど、その敵はそうではないのだろうか？」

「はい」

「なら、そのままにしておこう。ミネルバ王女のように無理やり戦わされているのかもしれない。マチスやロジャーのように説得すれば仲間になるかもしれないけど、向かっていったらかかってくるのだったら取りあえず後回しにしておいた方が良く。放っておけば危害を加えないなら、こちらとしても余分な戦力を割かなくても済むしね」

「かしこまりました」

「アベル、戦況は？」

「進捗としては先ほどからそう変わりないかと。ただ、どの方面でも優勢とのこと、そろそろ玉座への道も開けるのでは…」

その進言とほぼ時を同じくして、前線の部隊が玉座の間へ突入したとの報告がマルスたちにもたらされた。

「読み通りだね」

「ありがとうございます」

アベルが恭しく頭を下げた。

「それじゃあ仕上げと行こうか。カイン、アベル」

「はっ」

「御意」

側近の二人に声をかけると、彼らを引き連れてマルスは玉座の間へと向かったのだ。た。

「ぐっ！　ぐおおおっ！」

断末魔の悲鳴を上げながら、ダクティルが倒れた。これにより、解放軍によるマクロニソスの城の制圧は完了した。

マルスは戦後処理や城内の見回り、残っていた敵兵がいた場合の処理などを次々と部下に指示をしていく。そうして一息ついたところで、

「王子」

今回の出撃メンバーの一人であるノルンが話しかけてきた。

「ノルン。どうしたの？」

マルスが顔を向けるとノルンと、その傍らに見たことのない魔道士風の優男がいた。  
「???」

見覚えのないその顔に、マルスの頭上に？が浮かぶ。と、

「その、この方が王子にお話があるそうです」

ノルンがそう答えた。

「彼は？」

マルスがノルンにその魔道士の素性を尋ねる。

「先ほどの戦いで敵兵の一人です。ただ、ここを私たちが制圧したことを知ると投降してきました。そして、王子にお会いしたいと」

「ふーん…」

マルスはもう一度その魔道士の顔を見た。そうしながら、先ほどのカインの報告を思い出していた。

(もしかしてこの人が、さっきカインが言っていた魔道士かな?)

恐らくそうだろうなと思いつつ黙っていると、ノルンが言葉を続ける。

「魔道士でしたので、万一のために魔導書は預かっています。また、簡易ながら身体検査も行つて、凶器の類は持つてはいないことは確認済みです」

「わかった。ありがとう」

「はい」

そのまま、ノルンはその魔道士の斜め後方で魔道士の動向に目を光らせている。

「もう行つてくれても大丈夫だよ」

「えっ!?!」

マルスにそう言われ、ノルンは驚いていた。表面上敵意がないのはわかったとはいえ、それをうまく隠しているだけかもしれない。それに、マルスの側には他に誰もいないのだ。ここで主人と、投降してきたとはいえ先ほどまで敵兵だった者を二人きりにするわけにはいかなかった。

「いえ、私はここに残ります」

(真面目だなあ……)

臣下としては当然かもしれないが、目の前の人物の見当がおおよそついている以上、その必要はないと思うのだが仕方ないかと内心で苦笑しながら、マルスはノルンが同席することを許可した。

「さて……」

改めてマルスは魔道士に向き直る。

「待たせたね」



「いや」

魔道士が首を左右に振った。

「あんたがマルス王子なのかい？」

そしてそう続ける。

「うん。君は？」

「俺はエッツエル。旅の魔道使いさ」

魔道士：エッツエルがここで初めて自己紹介した。

「急に面会を申し込んだ非礼は許してくれ。どうしても一言礼が言いたくてな」

「僕に？」

エッツエルのその言葉にマルスは驚いた表情になった。カインからの報告でこんなことは予想していたが、それでも礼を言われるような心当たりはないからだ。

(どういう意味だろう)

不思議に思ったマルスがエッツエルの話を黙って聞くことにした。

「ああ。あんたのおかげでグルニアの連中に奪われていた指輪を取り返すことができ  
た。ありがとうよ」

「そうか」

事情を理解してマルスが口を開く。

「大事な指輪だったのかい？」

何とはなく、マルスがエッツエルに尋ねた。

「死んだ女房の形見さ。グラがアリティアを裏切った戦いで巻き込まれちゃった…」

「そうか…あの戦いでは僕も父を亡くした。心中、お察しする」

「ありがとうよ。…しかし、こんな戦乱の時代がまだまだ続くのかね」

「いや、そうはさせない」

エッツエルが独り言のように言ったその言葉に、マルスは思わず条件反射的に答えていた。

「僕たちが終わらせてみせる。そのために戦っているのだから」

「終わらせるため…か。随分キザで青臭い言葉だが、あんたが言うとなんな気もしねえな」

エッツエルは自分の感じたことを素直に口に出していた。そして、

「どうだい？ 俺もその戦いに参加させてくれないか？」

と、先ほどもでは考えてもいなかったことをマルスに伝えたのだった。

「え？ いいのかい？」

エッツエルのその申し出に思わずマルスが尋ね返していた。

「戦力が増えるのはありがたいけど、君は奥さんを戦争で…」

「だから、さ」

エッツェルがマルスの言わんとしていることを遮っていた。

「軍に加わるのは嫌だが、俺もさっさと終わらせたいのさ。こんな時代を、な」

「わかったよ、ありがとう。僕たちは喜んで君を歓迎するよ」

「決まりだ、な」

そこでマルスとエッツェルは互いに固い握手を交わしたのだった。こうして後顧の憂いを断った解放軍は、更に新たな心強い仲間を迎え入れることになったのだった。敵が残っていた軍資金も戦費として徴収すると次なる戦いへと向かう。

アリエティアを解放した今、いよいよ残るはドルーア。そして、その中核となるグルニアとマケドニアとの戦いである。そして、解放軍の進軍ルート的にまずぶつかるのはグルニアであった。

そこではどんな戦いが待ち受けているのか、それは今はわからぬことだが、一つだけ確実にわかっているのは、激戦になるであろうことだった。

## NO. 20 暗躍の黒騎士

マクロニソスの城を抜き、解放軍は先を進む。次なる決戦の地はグルニア。しかしその前に向かうべき場所があった。

ラーマン：古代神殿であるその地に、大賢者と呼ばれるガトーが求める二つのオーブがある。光と星のオーブ。ガーネフを倒すためにどうしても必要なその二つのオーブを手に入れるため、解放軍はまずそこを目指していた。その進軍の途上…

「よお」

ラーマンへ向かって進軍する解放軍の中でもひとときわ異質な漆黒の重騎士：ガレスのところへ近づいた影があった。

「ん？」

聞いたことがないと思われる声色に、ガレスが声のした方に振り返る。果たしてそこには予想通り、今まで見たことのない顔があった。

(…誰だ、こいつは?)

思い出してみる。が、頭の記憶にかすりもしない。ということとは、

(前の戦いで加わった新顔か)

そう判断した。確かマクロニソスの城での戦いで解放軍に加わった魔道士がいると聞いた。そして目の前の男からは騎士や剣士、戦士という雰囲気は微塵も感じられない。であれば、その新顔の魔道士なのだろう。

そう判断したガレスは取り敢えず用件を聞いてみることにした。

「誰だ、貴様？　そして、俺に何の用だ？」

「成る程」

ガレスの言ったことを聞いた魔導師が軽く口笛を吹きながら肩を竦めた。

「噂通り、おっかない雰囲気だな」

「フン」

その言葉を聞いたガレスがつまらなそうに鼻を鳴らす。

「用がないなら失せろ。俺に無駄な労力を使わせるな」

「御挨拶だねえ」

シニカルな口調で魔道士が答えた。が、すぐに、

「ま、いいさ」

と、気にする様子もなく言葉を続ける。

「俺はエッツェル。少し前にこの軍に入ってるね。色々と挨拶回りにいるところさ」

「そうか」

どうでもよさそうにガレスが答えた。実際、どうでもいいと思っ  
ているから適当に返答しているのだが。

「マクロニソスの城で魔道士が加わったと聞くんが、それがお前か」

「御名答」

魔道士：…エッツエルが微笑んだ。そして、

「実は俺、あんたと会うの楽しみにしてたんだぜ」

と、意外なことを言ってきたのだった。

「ほお？」

ガレスが少し興味を惹かれ、エッツエルの話に耳を傾けた。

「他の連中に挨拶周りしている時に色々と話をしたんだけど、かなりの連中があんたのことを話題に出してさ。興味が惹かれたんで会いたかったんだよ」

「そうか」

大体何を言われているかは予想がつく。

「碌な噂ではあるまい」

「まあね」

エッツエルがアッサリ肯定した。

「ただ、悪い噂だけって訳でもないからさ。余計に興味が惹かれたって訳さ」  
「物好きはどこにでもいる。それだけの話だ」

「おいおい、自分でそんなこと言っちゃうのかよ」

エツツエルが苦笑しながら再び肩を竦めた。

「やっぱ変わり者だわ、あんた」

「放っておけ。それと、挨拶ならばもういいだろう」

「薄情だねえ」

「慣れ合うのが嫌いなだけだ」

「ふうん。ま、いいや」

ガレスに従った……というわけでもないのだろうが、エツツエルがガレスから離れる。

「戦場を共にすることになったら、宜しくな」

「…ああ」

「何だよ、そのタメは？」

「やかましい」

「おお、怖い怖い。んじやな」

そこでエツツエルが軽くヒラヒラと手を振ると、ガレスの許から去って行った。

（変わり者がまた増えたか）

誰に聞いてもあんたにだけは言われたくないと必ず言われるであろう感想を抱きながら、ガレスは一瞬だけエツツエルを見送った。

軍中でそんなことがありながらも進軍は続いていく。そして…

「マルス王子、橋の向こうにグルニアの大部隊が見えます」

モロドフが現在の状況をマルスに説明する。ラーマンへ向かうためにはどうしても避けられないカシミア海峡にかかる橋。通称、カシミア大橋の手前まで解放軍は進軍してきた。そして橋を挟んだ向こう側には、モロドフの言った通り多数のグルニア軍が陣形を整えて待ち構えていたのである。

「遠いのでハッキリとは見えませんが、おそらく黒騎士団かと…」

「やはり、ここで待ち構えていたか」

マルスの表情が厳しさを増した。

「だけど、ここで歩みを止めるわけにはいかない。どうしてもラーマンにはいかなければならないんだ」

マルスはカダインを落とした直後のことを思い出していた。

『結局、ファルシオンは見つからず、か…』



ガレスによってガーネフを撃退したため、解放軍は悠々とカダインに辿り着いた。しかし、カダインをくまなく調べてもアリティア王家に伝わる神剣ファルシオンは何処にもなかった。

半ばそうだろうなと思っていながらも、やはり落胆を隠せないマルス。と、

『マルス…マルス王子よ…』

不意に、マルスに誰かが声をかけてきた。しかしそれは普通に声をかけられているのではなく、頭に直接響いてくるようなおかしなものだった。その証拠に、今周囲にはマルスに話しかけてきている者はいなく、その声色も聞いたことのないものだったからだ。

『！…誰だ！』

突然のことに警戒しながらマルスが周囲を油断なく探る。と、

『私はガトー。今、マケドニアから魔道によって話しかけておる』

と、声の主が続けて伝えたのだった。

『ガトー…ということは、白の賢者ガトー様？』

思わぬ人物からのコンタクトに流石のマルスも驚きを隠せない。

『そう呼ぶ者もおるようじゃな。今からわしの話聞くがよい』

だがガトーは驚くマルスを特にフォローもせずに淡々と話しを始めた。

『そなたの案ずるとおり、ファルシオンはガーネフが持つておる。マフィーとファルシオンさえあればドルーアと言えど簡単に逆らうことはできぬ。そして、いずれはドルーアをも従え世界を我が物にしようと考えておるのじゃ』

『…マフィーとはそれほどの魔法なのですか？』

思わずマルスが聞いていた。

『うむ。マフィーを持つ者相手には普通に戦つても傷一つつけられぬ。かつては禁断の魔法として我が手元で嚴重に管理していたのだが、当時ミロアと共にわしの弟子であったガーネフが盗み出し、姿を消したのじゃ。その結果、今そなたたちに苦勞をさせておる。マフィーを失つたのはわしの不手際。申し訳なく思つてな。そなたにマフィーを破る方法を教えようとして話しかけておる』

『その方法とは？』

『うむ、スターライト・エクスプロージョンじゃ』

マルスの質問にガトーが即座に答えた。

『この呪文をもつてすれば、マフィーの闇の加護を打ち破ることができよう。だが、この光の魔法を作り出すためには光と星のオーブが必要となる。よいか、マルス。光と星のオーブをわしの許に持つてくるのじゃ。さすれば、授けよう。マフィーを破る唯一の呪文…スターライト・エクスプロージョンをな』

カダインでそんなことがあったため、マルスはどうしてもラーマン神殿へと向かわなければならなかった。そしてそのためには、このカシミア海峡にかかる大橋での戦いは避けられないものだった。と、

「マルス、敵の大部隊が現れたと聞きましたが…」

後方からニーナがわざわざ前線まで足を運んできた。

「はい。どうやら、グルニア黒騎士団のようです」

「グルニアの黒騎士団…」

「それが何か？」

わざわざそんなことを聞きに来たのだろうか…そんなことが何となく引つかかったマルスがニーナに尋ねた。

「い、いえ、何でもないので。何でも…」

マルスの質問にお茶を濁したようにニーナが答えるが、  
「て、敵将はどのような者なのでしょね？」

と、なんともおかしな質問が続いたのだった。

「敵将、ですか？」

腑に落ちない思いを抱えながらもマルスが律儀に応対する。

「どのような者と申されましても……」

「その……グルニアには有名な将軍がいるではありませんか」

「ああ、カミュ将軍のことですね。恐らく彼ではないでしょう」

マルスがそう答えた。

「彼はドルーアの意にそわぬ行動をとり、その監視下にあると聞きます。母国が攻撃されれば別でしょうが、この地まで遠征してくることはないでしょう」

「そうですか。それは何よりです……」

ニーナが安堵したように溜め息をつく。もつともその安堵の溜め息は、味方を気遣つてというよりカミュが出てこない……敵がカミュではないことに対するもののようにマルスには見受けられた。

「それより、ここは危険です。ニーナ様は早くお下がりください」

だが、それに気付かぬふりをしてマルスはニーナを後ろへと下がらせる。

「わかりました。気を付けてくださいいね、マルス」

「はい」

力強く頷いたマルスに見送られ、ニーナは後方に下がった。

「じい、出陣だ。皆にそう伝えてくれ」

「はっ！」

モロドフが恭しく頭を下げると、マルスの命令を伝えに下がる。こうして、カシミア海峡を挟んだ戦いは始まったのだった。

「ふう…」

解放軍内、最後方にある一際豪華な天幕。その中で憂い顔で溜め息をついているのはニーナだった。

（取り敢えず、決戦は避けられたようですけど…）

そのことには喜びつつも、それは只の先送りではないことはよくわかっているためニーナの憂いは晴れない。彼女が心配しているのは只一つ。

（カミュ…）

その脳裏にはあのグルニア最強と名高い黒騎士の姿が浮かんでいた。アカネイアが滅亡し、自身も死の淵へと追いやられそうになった時にこの身を救ってくれたのは、仇であるはずの他ならぬカミュなのである。

以来、ニーナの心中にはカミュへの思慕の情がハッキリと残っていた。それは時を経るごとに大きくなり、今はハッキリと恋慕の情と言っていいものへと成長していた。

しかし今の立場はこちらは解放軍の盟主、あちらは敵の名だたる将の一人。和解でき

る余地などない。解放軍の敗退などもちろん願ってもいないが、だとすればカミュがこちらへ投降するしか手を取り合う形にはならない。しかし、カミュがそうする確率はほぼないと行っていい。良くも悪くも祖国に殉じるつもりなのだ。

であれば、こちらが勝つにせよ負けるにせよ、ニーナにとつて待っているのは悲劇に他ならない。そして、その悲劇はもうすぐ側まで来ようとしている。

「はあ…」

だからこそニーナの表情は浮かばず、気持ちも陰鬱としたままなのである。表情も晴れなかった。

（どうしたら…）

考える。だが、考えても考えても妙案など浮かびようがない。元々解答のない問題なのだ。考えても仕方のないことであった。しかし、だからといって何もせずにはいられなかった。それほど今のニーナは余裕がない…切羽詰まった状況なのである。

「ううん…」

目を閉じ、額を抑えて考えを巡らせる。しかし、何度考えても、どれだけ考えてもやはり妙案など出てこない。出てくるのは溜め息ばかりであった。

（いけませんね…）

ニーナは椅子から立ち上がると天幕を出た。

「ニーナ様」

「どちらへ？」

すぐに見張りをしていた兵士たちが声をかけてくる。

「少し、外の空気を吸おうと思って」

「では、我々も」

「お供します」

「ありがとうございます。お願いしますね」

『ハッ！』

気分転換のため、また陰鬱な気持ち但至少でも晴らすためにニーナは少し先にある高台へと向かった。

「ふう…」

高台についたニーナは大きく息を吸うとゆつくりとそれを吐き出した。そうして心を落ち着かせていく。心地よい風が吹き、ニーナの身体を撫でていった。

気分が晴れるというほどではないにせよ、やはり天幕の中に閉じこもっていた時と比べれば幾分かでも気が楽になったような気がした。とは言え、ニーナの頭痛の種が尽きたわけではない。

(本当に……どうしたら……)

高台から遠くを見ながら考える。位置的に今戦場になつてゐるカシミア大橋の辺りは見えない。マルスを始めとする諸将や諸兵士たちが生命掛けの戦いを行つてゐるというのに、自分は安全な場所でこんなことを考えていると思つて申し訳なくなる。だが、どうしても考えるのをやめられなかつた。

(嫌な考えばかり、浮かんでくる……)

自分たちの立場を考えればそれは仕方のないことだし、恐らく現実のものとなるだろう。それも、そう遠くない未来に……だ。だからと言つてそれに納得できるかというところはまた別である。そして、ニーナは納得したくなかつた。

「はあ……」

自然、溜め息がまた出る。陽の光と身体を撫でる風は相変わらず心地いいのだが、だからと言つて今のニーナの心境を晴らしてくれるほどではなかつた。

(こんなこと、誰にも言えないし……)

それがまた、ニーナにとつての重荷の一つであつた。吐き出すだけで楽になるということは確かにある。あるのだが、事情が事情である以上誰にも吐き出せるわけはなかつた。シーダやミネルバなど、同じ女性で同じ王女、そして信頼できる仲間である彼女たちに何度か打ち明けようと思つたものの、それが原因で不要な波風が軍内に立つたらと



思うとそれも躊躇われたのだった。結局、ニーナがその胸の内に抱え込んでいる以上、ニーナ一人で処理しなければいけない問題であった。

(どうすれば…)

忸怩たる思いにとらわれる中、不意に自分の後方で何かの物音がした。

(?)

何だろうと思つてニーナが振り返ると、お付きの兵士たちが地に倒れて動かなくなつていたのである。

「え!？」

どういうことでこんな状況になつたのかわからず、思わずニーナが戸惑つて絶句した。と、

「心配するな」

不意に、どこからか声が聞こえてきた。

「寝てるだけだ」

「だ、誰!？」

急な展開に驚きながらも辺りを見渡す。と、

「ククククク…」

よく聞く笑い声とともに現れたその姿に、ニーナはホッと一息ついていた。

「が、ガレス…」

「久しぶりだな」

漆黒の甲冑を身に纏い、ガレスがニーナの許に姿を現した。

「貴方だったのね」

「ああ」

「もう、驚かせないで」

「フン、貴様がこんなことで驚くような細かい神経をしているタマカ」

「ふふ、酷いこと言うのね」

ニーナがいつも通りの不躰なガレスの口調に顔を綻ばせながらクスクスと笑った。

そのおかげか、不思議と陰鬱だった気持ちが少なからず晴れた。

（まさか…私を氣遣って…）

と、一瞬思ったニーナだったが、いつも通りのガレスの様子に、

（ないわね）

と、一瞬で否定したのだった。それが面白くて、またニーナが微笑む。

「どうかしたか？」

そんなニーナの様子に気付いたガレスが尋ねる。

「いいえ、何でも」

当然、ニーナはそう誤魔化して否定したのだった。

「そうか」

ニーナの返答に、どうでもよきそうにガレスが答える。

「貴方は出撃しなかったのね」

ニーナが尋ねた。ここにしていることは即ちそういうことに他ならない。

「ああ」

ガレスも特に隠すことも反論することもなく答えた。そのまま、ニーナの許にやってきてニーナと肩を並べる。

「カダインで勝手をやった件がまだ尾を引いているらしい」

「そうなの」

ガレスの返答にニーナも特にそれ以上口を差し挟むことはなかった。言うべきこともないのだから当然かもしれないが。

「仕方ありませんね。命令違反は重罪ですから」

本来なら、死罪でもおかしくないのですよとニーナは付け加えたが、

「ククク、あいつらに俺が殺せるものか」

ガレスは一向に気にする様子がない。そしてその言葉が只のハツタリではないことはニーナも良く理解しているだけに、仕方ないとばかりに首を竦めるしかなかった。

「第一、勝手はしているが解放軍に不利益になることはやっていない。それで裁かれるのもおかしい話だ」

「ですけど、軍には軍法というものがありませんから」

「わかっている。だからこそ、その軍法に則って大人しくしているのだろうか」

「今は、でしよう?」

「…さあな」

言葉を濁したガレスに、またニーナはクスクスと笑うのだった。

「フン…」

隣に立つニーナの楽しそうな笑い声に、対照的にガレスはつまらなそうに鼻を鳴らした。そして、

「人のことより、自分のことだろうか?」

と、ニーナに視線を向けた。

「え?」

意味がわからず、ニーナが首を傾げる。

「何か気がかりがあるのだろうか?」

「! な、何のことでしょう」

心の奥底を見透かされたような気分になってニーナがとぼける。が、

「クク、とぼけるな」

ガレスはお見通しだった。

「どこからどう見ても『悩みを抱えています』といった感じの憂い顔でいただろう。あれがわからないのは余程の朴念仁か石頭ぐらいのものだ」

「……」

「話す気にはならないか」

ニーナが口を真一文字に結んだ。しかし程なく、

「話しても……」

囁くほどの小さい声でニーナが呟いた。

「ん？」

「…話しても、どうにもならないことですから」

「そうか……」

ニーナがそう言ったため、ガレスもそれ以上は聞かなかつた。やろうと思えば暗黒道の力を使って聞き出すこともできるが、どうにもその気になれなかつたのだ。

(クク、俺も甘いな)

自嘲するガレス。と、

「…敵のことなど」

再び囁くようにニーナが呟く。

「ん？」

「敵のことなど、知らなければ良かった…」

(成る程)

この一言で、ガレスはニーナの心中に引つかかっていることがわかった。そして、ニーナがここまでしか言えないことも察した。

人間何か心に引つかかっているものがある場合、言えるならば吐き出したいものである。吐き出せば少しは気分が楽になるからだ。

それが出来ないということは、それだけの事情があるというのだろう。そして、ニーナの言葉をこのケースに当てはめた場合、何か敵のことで引つかかっていることがあるということだ。解放軍の象徴である以上、敵に対してふさわしくない態度を取るわけにはいかないのだろう。例えそれが、どれほど辛いことであろうとしてもだ。

(公人としてはどうしても求められる要素だな)

ガレス自身もゼテギネアではのっぴきならない立場だっただけにニーナの苦労はよくわかる。勿論、暗黒道に堕ちた後のガレスが敵の事情を斟酌したことなどないが、暗黒道に堕ちる前だったら心当たりはあるからだ。

(俺がどうこうできるわけでもなし、自分で乗り越えてもらうしか仕方ない)

お節介を焼くつもりはないが、焼くにしても限界はある。できることもできないこともある。それを考えれば、ガレスに何をどうこうすることはできなかった。

(まあ、そいつを苦しまずに楽に殺してやるぐらいならばできるか)

そうなったら、その時のこいつの顔が見ものだがな…ガレスはそんなことを考え、再びクククと甲冑の下で笑った。と、

(ん?)

ガレスが何かを察知する。

(今のは…)

視線を向けたのはカシミリア大橋の方向。今戦場になっているその地で、ガレスはいつものアレを感じたのだった。

「……」

少しの間何かを考えるガレス。そして、

「少しは気が紛れたか?」

と、ニーナに声をかけた。

「え? え、ええ…」

頷きながらもニーナは戸惑っている。この軍の中ではかなりガレスとの交流が深いニーナだが、このような気遣うような言葉を掛けられたのは初めてと言ってよかったか

らだ。

「そうか」

一方で、ガレスはニーナが戸惑っているのを意に介することなく、身を翻した。

「もう行くの？」

その行動で、ガレスがここを立ち去ることを悟ったニーナが少し不満そうにそう言った。

「ああ」

首だけ振り返ると、ガレスが首肯する。

「お前の周りに俺がいると、快く思わない連中が多いんでな。奴らのことなどどうでもいいが、面倒ごとを増やすのは御免だ。それに、ここに転がっている連中もそろそろ起きるからな」

「そう……」

ニーナが本当に残念そうに俯いた。

「お前も気晴らしは程々にして天幕に戻れよ」

「ええ」

「結構」

頷いたニーナを後に残し、ガレスはその場を立ち去った。一見いつもと変わらないよ



うに見えるその姿が、ニーナには少し違和感を感じられるものだった。しかし、その違和感の原因を突き止めることは、ついぞできなかったのだった。

「あつ、マルス様ですね」

激戦の続くカシミア大橋での戦い。その間、一瞬の間隙を縫って一騎のペガサスナイトがマルスの許に降り立っていた。

「君は……」

「はじめまして」

ペガサスの乗り手である、まだあどけない少女が下馬をすると叩頭した。

「私はマケドニアのエスト。ペガサスナイトのパオラ、カチュアアの妹です」

そして彼女……エストが自己紹介する。

「やつとお会いすることができました。最初は姉たちと一緒にマルス様の軍へ合流するつもりでしたが、三種の神器の一つであるメリクルの剣がアカネイアから持ち去られ、グルニアにあると聞いて取り返しに行っていたのです。……で、これがそのメリクルです」

そしてエストは、大事に抱えていた一振りの剣をマルスに手渡した。

「これは……」

その威容に、思わずマルスも息を呑む。

「ねっ、すごい剣でしょ？ 相応しい人が使えばすごい働きをしてくれますよ、きつと」

「ありがとう、エスト。我々は君を歓迎するよ」

「はい。私も姉たちに負けぬように頑張ります。宜しくお願いしますね」

そして慌ただしくペガサスに乗ると、エストは再び大空へ舞い上がった。こうして、マケドニア白騎士団が誇るペガサス三姉妹がようやく揃ったのである。

エストはその後、今回の戦闘に参加していたミネルバとパオラ、カチュアへ帰参と再会の挨拶を済ませ、彼女たちと同じように戦闘に参加したのだった。

「よし！ 頑張っちゃおうぞー！」

大空を舞いながら腕まくりして張り切るエスト。

「もう……」

「気合が入るのはいいけど、少し落ち着きなさいよ」

パオラとカチュアが左右からそんな妹をたしなめる。

「大丈夫だって！ 今まで遅れた分を取り返すんだから！」

「全く……」

「しょうがない子ねえ」

苦笑しながらもパオラとカチユアも嬉しそうだ。やはり、久しぶりの再会ということもあつて自然と顔が綻ぶのだろう。

「頼りにしていますよ、エスト」

「任せてください、ミネルバ様！」

少し離れたところから自分たちを見ていた主君にも元氣印の返事を返すと、早速エストは敵陣に突っ込んでいった。

「仕方ないわね、今回は私たちがあの子のサポートに回りましょうか」

「わかったわ、姉様」

阿吽の呼吸で自分たちの役割を決めると、パオラとカチユアもエストを追うようにペガサスを滑らせる。頼もしい部下たちの働きに嬉しく思いながら、ミネルバはその空域を離脱した。別働として陽動をマルスに任せられていたので、それを果たすためである。

「やあつ！」

「ぐわつ！」

激戦の続くカシミア大橋の戦いで、エストはまた一人の敵兵を討ち取った。先ほどの宣言通り、遅れを取り戻そうとでもいうのか必死の働きである。

「エスト」

敵の攻撃が少し落ち着いたのを見計らってパオラが声をかけた。

「何、パオラ姉様？」

エストが額に滲む汗を拭いながらパオラに答える。

「張り切るのはいいいけど、少し抑えなさい」

「そうよ」

合流してきたカチユアもパオラの意見に追隨した。

「あまり突出すると、敵の標的になるわ。それでなくても貴方、今回は遅れを取り戻すためだろうけど敵を討ち過ぎてるんだから。気を付けないと万が一があるわよ」

「大丈夫だって！ 私も白騎士団の一員なんだよ」

「それはわかっているけど……」

パオラが口籠もる。妹の腕を信用していないわけではないのだが、それでもここまでの、言ってみれば予想外の活躍ぶりに不安が拭えなかつた。活躍するということは当然目立つわけで、目立つということは標的にもなりやすいわけだ。戦場での活躍ということとはつまり敵兵をそれだけ倒したということでもあり、敵の恨みをそれだけ買うということと同義である。それを考えると、手放して喜ばなかつた。

が、戦場は待つてくれるわけもなく、逐一その表情を変える。再び新手が援軍として

現れていた。

「おっと、新手だ。それじゃあ姉様、私行くから」

馬首を翻すと、エストはその新手へと突っ込んでいった。

「あつ、待ちなさい、エスト！」

カチュアが制止するもその耳には入っていないのか、それとも聞こえないふりをして無視しているのかわからないが、エストはその新手に突っ込んでいった。

「仕方がないわ」

パオラが少し呆れたように息を吐く。

「あの子の気持ちもわかるから好きにさせてあげたいけど、乱戦になって取り返しのつかない結果になったらどうしようもないし。もうひと踏ん張りしましょう」

「あの子ったら…終わったらお説教ね」

「ふふふ…」

ムツとした表情になっているカチュアを見てクスクスと笑いながら、エストを追いかけるようにパオラがペガサスを滑らせる。直後、カチュアも同じようにペガサスを滑らせたのだった。

「はあ…はあ…はあ…」

カシミア大橋での激戦に、エストも息が上がってきた。勿論、彼女一人が戦っているわけではない。周囲にはここまで戦い抜いてきた歴戦の勇士たちがいるが、敵の抵抗も激しいのである。流石は大陸でも最強の呼び声の高いグルニアの騎士団だった。

「ふっ！」

「せいっ！」

パオラとカチュアも必死になつて戦っている。今回は二人ともエストのサポートに回っている。そのエストが突出気味のためどうしても彼女たちも相手にする敵が多くなり、いつも以上に疲労が溜まっていた。

そういった状態のため、状況的にはかなり危ないものだった。

(……を凌いだら、少し退いて体勢を立て直さなくっちゃ……)

そう判断するエストの視界に、何度目かの敵の波状攻撃が襲い掛かる。肚を決め、エストは疲労で重くなりつつある身体の力を振り絞って再び敵と斬り結び始めた。

そこかしこで繰り広げられる激戦の中、それでも二人の姉のサポートもあり、今回も何とか凌げそうな目処が立ってきた。

(……まで来れば……)

先行きが見えかけてきて、決して油断ではないがエストが一息つこうとする。その彼女を、射程距離範囲ギリギリから狙っている一騎のホースメンの姿があった。

「！ エスト！」

「危ない！」

サポートに回っていたため、エストより戦況を見渡すことができたパオラとカチュアが妹の危機に思わず声を上げる。駆け付けようとも、こちらはまだ手の放せる状況ではない。

「えっ!？」

二人の姉の注意を喚起する声が耳に入り、エストがすぐさま周囲を見渡した。そして、自分に向けて狙いを定めているホースメンと目が合う。

(！)

その敵兵に気付いたのと、その敵兵がニヤリと笑ったのはほぼ同時だった。そして直後、その敵兵が矢を放った。

ほぼ不意打ちであることと、彼我の距離からかわすのは不可能だった。エストの心臓が高鳴り、冷や汗が全身を滑り落ちる。思わず身を固くしたエストだったが、すぐに訪れるであろう致命的な激痛はやってこない。

(あ？ あれ？)

恐怖から閉じてしまっていた目を恐る恐る開けると、自分に矢を放っていた敵兵は地面に倒れ伏していた。その姿から、誰かに倒されたのであろうことは容易に想像できる

のだが…

(え? え? 一体何が…?)

その瞬間、目を閉じていたエストには何が起こったのかわからなかった。だが、

「エスト、しっかりしなさい!」

長姉であるパオラから喝を入れられ、エストの背筋が伸びる。

「ね、姉様…」

「まだ戦いは終わってないのよ!」

「そう!」

カチュアも加わる。

「まずは目の前のことをしっかりとこなしなさい!」

「う、うん、わかったよ!」

姉二人の喝にエストが頷くと、戦線を維持しつつ離脱を始めた。突出しすぎたのを修正するためと、本体への側面からの支援へと自分の役目を切り替えたからだ。

「…カチュア」

変わらずエストのサポートに回るために再びエストの許へとペガサスを滑らせるパオラが、並走して飛行しているカチュアへと話しかけた。

「何、姉様?」



尋ねる。だがカチュアも、姉が何を言うのか内心はわかっていた。果たしてカチュアの予想通り、パオラの口から出てきたのは、

「…見た？」

この一言だった。

「…ええ」

カチュアも一言だけで返事をする、頷く。

「そう…」

カチュアの返答を受けたパオラはペガサスを滑らせながら先ほどのことを思い出していた。カチュアも同じく、先ほどのことを思い出す。

それは、エストに矢が放たれるあの時のことだった。その瞬間、エストは目を瞑ってしまったから何が起こったかわからなかったが、パオラとカチュアは目撃したのだ。

ホースメンにほど近い敵兵の影の中から突然人影が現れ、その矢を手を持った得物で叩き落したこと。そして直後、地面からガスのようなものが噴き出てホースメンを包み、ホースメンが苦しみ呻きながら倒れて死んだこと。

突然のことに呆気にとられていたパオラとカチュアだったが、気がついたときにはその人影はなかった。そして乱戦ということもあり、敵味方含めて他に気付いた者はいないようだった。しかし…

(あの人影は……)

(間違いなく……)

ハッキリとは見ていない。しかし、そのシルエットは彼女たちのよく知る人物であったのは間違いなかった。

戦場の一角でそんなことがあつたなど他に知る者もなく、カシミア大橋の戦いは終焉を迎えようとしている。そして激戦の末、解放軍は何とか今回も勝利を得ることができたのだった。

(ククク……)

解放軍勝利の報せが届いたことに陣中は沸き返る。そんな中、いつものようにガレスは内心で笑みを浮かべて天幕へと戻った。その不気味な笑いは勝利に喜ぶものというよりは、自分の思惑通りに事が運んだことに対する喜びのように見えたのだった。

## NO. 21 マムクート・プリンセス

カシミア大橋での激戦に辛くも勝利を収めた解放軍は、次なる目的地へ向けて進軍していく。次なる目的地はラーマンの神殿。ガトーに持つてくるように指示された星と光のオーブを求め、それを手に入れるためにこの神聖な神殿を侵さなければならなかった。

(気は進まないが……)

それでも、マフーを打ち破るためとあれば仕方ない。マルスは沈みかねない気持ちで奮い立たせながら、ラーマン神殿を攻略する号令を出した。その出撃のメンバーの中に、ようやく謹慎が解かれたのだろう、久方ぶりに戦場に立つガレスの姿もあった。

(……)

ガレスに視線を向け、マルスはこうなった経緯についてももう一度思い出していた。

『じい、光と星のオーブは間違いなくラーマンにあるのか?』

カシミア大橋での戦いを終え、戦後処理も一息ついたところでマルスが傍らのモロドフに尋ねた。

『はい』

マルスの問いかけにモロドフが頷く。しかし、

『ですがご注意ください』

と、付け足した。

『ラーマン神殿には恐ろしい力を持った女神がおり、聖域を侵す者はすべて焼き殺されると思います』

『…大丈夫なのですか？ マルス』

やはり傍らにいてそのモロドフの説明を聞いたニーナが心配そうにマルスに尋ねた。

『正直、やってみなければわかりません』

聞きようによつては無責任ともいい加減ともとれるが、これがマルスの偽らざる本音である。相手の正体も戦力もわからない以上、うてる対策も限られてくるため仕方のないことではあるのだが。

『ですが、光と星のオーブはどうしても手に入れる必要があります』

そこは絶対に譲れないため、マルスも肚を決めるしかなかった。

『神殿を護る者をできるだけ刺激せぬようにしましょう』

自身も危惧を感じているのだろう。モロドフがそうマルスに進言する。

『そのためには、少数精鋭で臨まれるのが良いかと』

『わかった。大勢で聖域を踏み荒らすのも忍びない。ここは僅かな者たちを選んでいくことにしよう』

ラーマン攻めの方針を固めたところで、マルスが考え込む。

(少数精鋭か…)

引つかかったのはそこだった。少数精鋭であるならば当然、選りすぐりの戦士たちが必要になる。自軍の面子の中で、その役目にピッタリの人物で真つ先に顔が浮かんでくる者がいた。そう、ガレスである。

(しかし…)

万一の危惧は尽きない。また勝手をやられては軍の規律に関わる。それに、謹慎させたからといって反省するような生易しい精神の持ち主ではないのは良く知っているからだ。出撃させたその場で好き勝手やる可能性は大いにあった。

とはいえ、戦力としてみればこれだけピッタリと次回の戦いで当てはまる人物もない。どうしようかと大分悩んだマルスだったが、背に腹は代えられぬとばかりにガレスの謹慎を解き、今回の出撃メンバーに加えたのだった。

(大人しくしていてくれればいいけど…)

一抹の不安を感じながらも、マルスはガレスに視線を向ける。

(クク…心配性な奴だ)

そんな中、当のガレスはというと大人しく出撃の命令を待っていた。自分をチラチラと気に掛けるマルスには勿論気付いているが、内心で嘲笑いつつ当然無視。久しぶりの戦場とあって、楽しさにワクワクしていた。

(恐ろしい力を持つ、すべて焼き殺す女神か)

ラーマンにいるという、その守護者に思いを馳せる。そして、

(果たしてどんな奴か。俺を楽しませてくれればいいがな)

そんなことを考えながら開戦の時をひたすら待つ。と、

「宜しくの」

近くから声がかけられた。

「ん?」

振り返ると、そこにいるのはバヌトウだった。

「貴様か」

その姿に、思わずガレスが口を開く。

「今回は貴様も出るのか」

「うむ。儂の力が必要と言われての。それに、儂としても今回はマルス王子に直談判するつもりじゃったから、話が早くて助かるわ」

「ほお?」

予想だにできなかったバヌトウの言葉にガレスが興味を惹かれた。

「どういう風の吹き回しだ?」

「何、確かめたいことがあるだけじゃよ。確かめたいことが…の」

まあとにかく、危なくなったら助けしてくれるかの。と言い残し、バヌトウはガレスの許を立ち去っていった。

(フン、よく言う)

その後ろ姿をガレスが呆れながら見送る。マムコートであるバヌトウが簡単にやられるとは考えにくいからだ。寧ろ、やり過ぎないかとさえガレスは思っていた。

(まあいい)

ようやく出撃の号令が降り、ガレスが今回の他の出撃メンバーと共にラーマンの神殿へと入ってゆく。マケドニアのペガサス三姉妹の視線を背中中で感じながら、ガレスはそのまままゆつくりと歩いて行ったのだった。

(クク、奴らめ、気付いたか)

彼女たちが自分に視線を向ける理由はよくわかっている。だが、それに答えるのはこの戦いが終わってからのことだった。

「フン」

「ぐわっ！」

寄ってくる敵兵を簡単に斬り捨てると、ガレスはサタンブローバーを肩に担いだ。ラーマンの神殿には小部屋が幾つもあり、恐らくそのどこかに光と星のオーブがあるものと思われる。しかし、どこにあるかはわかるわけもないのでしらみつぶしに探すことになるのだが、部屋の中には当然敵兵もいるため、その敵兵を倒し、室内を探索しての進軍になるので、進軍速度はいつもと比べて格段にゆっくりしたものになっていた。

「……」

敵兵を排除して手持無沙汰になったガレスは、ジュリアンがこの部屋にある宝箱の鍵を開けているところを何とはなく見ている。と、

「ガレス」

不意に声をかけられた。振り返ると、そこにはアテナとエッツェルの姿があった。

「貴様たちか」

二人の姿に思わず言葉を漏らす。

「ん」

アテナは軽く首肯するだけだったが、



「御挨拶だな」

エッツエルは苦笑していた。

「そんな言い方ないんじゃないか？」

「知るか。氣遣ってほしいのなら、シスターのところにも行け」

「ちえ、ホントにいい性格してるよ、あんた」

「お互い様だ」

そう言つてガレスはエッツエルから視線を外し、エッツエルはそんなガレスに苦笑していた。

「敵は？」

そんな中、アテナが左右をに視線を向ける。

「この辺の奴らは排除した」

「そうか。流石だな、ガレス」

ガレスの返答にアテナがニコニコと微笑む。

「大したことではない。あんな連中、退屈しのぎにもならん」

本当に失望したような口調だった。

(これは、噂の女神さまとやらに相手になつてもらわんと収まりそうにないぞ)

消化不良を抱えつつ、ガレスがサタンブローバーを肩に担いだ。と、

『あつた!』

こことは違う部屋からそんな声が聞こえてきた。ふと見ると、ジュリアンはいつの間にかこの部屋からいなくなっていた。

(素早い奴だ)

流石盗賊とは言えるが、それでもその早業に少し呆れながらガレスが部屋を出た。敵を排除し、宝も回収した以上、ここにおいても何の意味もないからである。

「あ、待て、ガレス!」

「おいおい、置いてかないでくれよ」

アテナとエツツエルもまた、さっさとこの場を去っていったガレスを慌てて追いかけたのだった。

「あれが…女神?」

無事、光と星のオーブを回収し、貴重な財宝の数々も手に入れた解放軍。後はこの神殿を制圧するだけである。そのためには、噂の恐ろしい女神をどうにかしなければいけないのだが、玉座に佇むその姿を見た解放軍の面々は皆、どう反応したらいいものかといった顔をしていた。

と言うのも、そこにいるのは何処からどう見ても小さな女の子だからだ。確かに女の

子だから女神というのは正しいのだろうが、それでも敵対する者をすべて焼き殺すような恐ろしい様子は見えない。

(どうしたものかな…)

マルスがまさかのその姿に戸惑っていると、

「おお、チキ！」

後ろから突然そんな声が聞こえてきた。

「バヌトウ…」

振り返ったマルスに呼ばれ、誘われるかのようにバヌトウが前に進み出た。

「その名前は確か…」

「うむ。仲間に加えてもらった時に話したの。あの子が儂が探しているチキじゃよ」

「そうだったのか」

良かったとばかりにホッとする。

「じゃあ、あの子がナーガの…」

「うむ。ナーガ一族の最後の生き残りじゃ」

マルスの指摘にバヌトウが頷いた。

「あんな小さな女の子が…」

バヌトウの説明を受けても、まだ信じられないといった表情でマルスが呟いた。

「見かけは子供とて侮るでないぞ、マルス王子。チキがその気になれば儂など足元にも及ぼん」

「そこまでののか？」

「うむ。それほどナーガの一族は我らの中でも群を抜いているということじゃ」

マルスがゴクリと唾を飲んだ。緊張感から思わず冷や汗も滲む。しかし、それだけの力の持ち主が味方になってくれるのであればありがたいことであった。

その僥倖にマルスはホッと胸を撫で下ろす。が、

(…つまらん)

対照的にガレスは不満だった。バナトウの説明は勿論ガレスも聞いていた。であれば、玉座の少女…チキは味方ということになる。

(それでは戦えん。ここまでの中途半端な戦闘で鬱憤が溜まって仕方ない)

最後にお楽しみを取り上げられる形になり、ガレスは非常に不満だった。とは言え、こういう流れになってしまった以上、斬りかかるわけにもいかない。

(仕方ない…)

内心では不満タラタラだったが、ガレスは無理やりにも割り切ることにした。そうでなければとても納得できないからだ。と、チキが急にトランス状態のような状態になる。

(ん?)

チキの様子に変化が起きたことに気付いたガレスがフルヘルムの下で怪訝な表情になった。と、チキが竜へと変身する。

「これは!?!」

誰かが口火を切ったのと同時に、不穏な雰囲気が始まったことにざわつき始めた。そして、その不穏な空気は現実のものになる。チキが襲い掛かってきたのだ。

「わっ!?!」

「危ない!」

なんとか全員、チキが吐いたブレスをかわす。流石に少数精鋭の今回の出撃メンバーだけに、咄嗟のこととはいえ人的被害を被ることはなかった。しかし、チキは一向に竜から戻る気配がない。

狭い神殿内ということもあって距離を詰めてきたりすることはないので、威嚇するように唸りながら解放軍の面々を見据えていた。

「バヌトウ!」

事情の説明を求めるかのようにマルスがバヌトウへと振り返った。他の面々も同じようにバヌトウに視線を向ける。

「うむ……どうやら操られているようじゃの!」

「操られている…？ メデイウスか!？」

敵の総大将の名が出て、解放軍の面々に緊張が走った。

「いや、あ奴は確かに強大な力の持ち主じゃが、そんな能力はあるまい。恐らくはもう一方…」

「ガーネフか…」

マルスが苦虫を噛み潰したような表情になった。カダインではガレスの働きによって退けたが、流石に魔王と呼ばれるだけのことはあつた。

「何とかならないかい？」

マルスがバヌトウに尋ねる。

「儂が説得しよう。ただ、儂はあの子とは戦えん。懐に入って説得するゆえ、あの子の注意を引き付けてほしい」

「注意を…」

マルスをはじめ、他の面々がチキへと振り返った。相変わらず威嚇するようにこちらを見ているその威容に、冷や汗が流れたり口の中がカラカラに渴く者も少なくない。

「難しい注文だね」

マルスのその言葉は、他の面々の心中も代弁する言葉であつた。

「すまん。じゃが、あの子は絶対に失うわけにはいかんのじゃ。重ねて頼む」

「なら、俺がやろう」

誰にその役目を…と、マルスが考えようとしていたのだが、不意に名乗りを上げる者がいた。声のした方にいたのは…

「ガレス…」

謹慎明けのガレスだった。

「ククク…」

実に楽しそうに声を押し殺して笑いながら、ガレスが前に進み出る。

「つまらん戦いばかりで退屈していたところだ。あいつなら、少しは楽しめるかもしれない」

「楽しめる…って」

…こともなげにそういうガレスに、マルスは流石に戸惑いを隠せなかった。

「相手は竜だよ？　今までの様には…」

「問題ない。ドラゴンとは飽きるほど戦ったからな。今更気負いも怖気づきもするものか」

その返答に、マルスだけでなく他の面々も目を丸くした。と、  
「わかっておるとは思うが…」

バナトウが横から口を挟んでくる。

「ん？」

「殺してはくれるなよ。できることなら傷を負わせてもらいたくもない」

「好き勝手言ってくれるな」

「重々承知。じゃが、先ほども言った通りあの子はナーガ一族最後の生き残りじゃ。絶対に失うわけにはいかん」

「わかったわかった」

バナトウに向けて手をヒラヒラと振り、心配するなどばかりに促した。その態度に一抹の不安が残らないでもないバナトウだが、他に有効な手立てもないため任せることにした。

（いざとなれば、儂があつた男と刺し違えるしかないの）

最悪のことを考えながらもそう覚悟を決めて、バナトウはその時を待つ。

「下がってろ」

ガレスは振り返ると、マルス以下今回出撃の他の面々にもそう促した。

「あの…気を付けてね」

今回復要因として出撃していたマリアにそう言われ、ガレスは先ほどのバナトウの時と同じくヒラヒラと手を振って応える。

マルスたちがある程度の距離まで下がったのを察知したガレスが、サタンブローパー



をチキに向かって構えた。

「……」

変わらず威嚇するように唸るチキに対し、ガレスは微動だにしない。そして、誰かがゴクリと固唾を飲んだのを合図としたかのように、ガレスの真紅の瞳が光った。

「フーン！」

サタンブローバーを振りかぶると、ガレスはそれをチキに向かって投擲した。

『えっ!?!』

初手から武器を手放したことに何人かが驚きの声を上げる。だがガレスは全く動じなかった。そのままサタンブローバーはチキに向かって飛んでいき、そしてその身体の横をすり抜けて神殿の内壁に轟音と共に突き刺さった。

それが起爆剤となったのか、チキは咆哮を上げながらガレスに襲い掛かる。チキがブレスを吐き、それにガレスがすっぽりと包まれた。

『ガレス!』

アテナやマリアなど、ガレスに割と近い者が悲鳴を上げた。が、

「ハハハハハハハッ！」

不意に、全く違うところから笑い声が聞こえてきた。全員がそこに目を向けると、そこには先ほどまでと全く変わらないガレスの姿があった。

「いつの間に…」

誰かが呆然と眩く。だが、混乱しているのはチキも同じようだった。すぐさま身体を反転させると、チキが立て続けにブレスを放った。

「デスクラウド！」

ガレスが神殿の床に手を着くと地中からガスが吹き上がる。そして、そのガスが石畳を跳ね上げ、それがシールドとなつてブレスの攻撃からガレスを防いだ。

「ククク、そんなものか」

嘲笑しながら挑発するガレスに怒り狂つたのかチキがブレスを連発する。

「ダーククエスト！」

漆黒の闇から召喚した多数の怨霊がチキに向かって一直線に飛んでいく。そして、チキの吐いたブレスと衝突してせめぎ合い、そして双方の攻撃は互いの身体に届くことなく中間地点で雲散霧消した。

これまでの戦闘結果から、簡単に攻められる相手ではないと学習したのかチキは一転、様子を窺うようにガレスを遠巻きに見ている。

一方のガレスも自分からチキを攻めることはしなかった。腕を組み、静観の構えをしている。そしてバヌトウに視線を向けると、顎をクイツと動かして指示をした。

(うむ)

バヌトウがコクリと頷くと、チキに向かって歩き出す。ガレスに注意を向けていたチキは、死角から近づいてくるバヌトウに気付かなかった。

最悪の事態にならずに済んだことにホッと胸を撫で下ろしながら、バヌトウはチキに話しかける。

「チキよ、探しておったぞ」

バヌトウに話かけられたチキは振り返る。そして、そこにいるのがバヌトウだとわかったからか、竜の姿から人の姿へと戻った。

「だめ…私に…近寄らないで…」

途切れ途切れになりながら、必死にチキが答える。

「ガーネフに催眠術をかけられておるのじやな」

チキの現状に思わずバヌトウの表情が曇った。

「可哀想に…それ、目を覚ますのじや」

優しく声をかけると、バヌトウがガーネフの催眠術を打ち消した。チキの身体から力が抜け、崩れるように倒れ込む。

「おっと」

バヌトウがナイスキャッチをすると、その腕の中でチキが目を覚ました。

「ううん…」

まるで寝起きのようにゆっくりと目を開ける。

「気がついたか、チキ」

「あつ、おじいちゃま」

チキが自分を認識したことでガーネフの術が無事に解けたことがわかり、バヌトウは内心でホツと一息ついた。

「どうして…何があつたの？」

ガーネフに操られている間の意識はなかつたのか、矢継ぎ早にチキがバヌトウに尋ねる。

「大丈夫かの？」

質問に答えるのは後回しとばかりにまずはバヌトウがチキを気遣つた。

「うん…わたし、なんか、こわい…ずっとこわい夢を見ていたみたい」

「そうか…」

チキの返答に、バヌトウが実に申し訳なきような表情になった。

「すまなかつたのう…お前をこんな目にあわせてしまつて…。だが、もう心配ないぞ。これからはずっと側におるからの」

「うん。約束よ、おじいちゃま。ひとりぼっちはもう絶対イヤだからね…」

「ああ」

「もう大丈夫かな」

ガレスに下がれと言われて遠巻きに見ていたマルスたちだったが、チキが元に戻ったこと、そしてチキが嬉しそうにバヌトウに抱き着いている様子を見て、マルスがそう判断した。

「ええ、恐らくは」

「あの様子なら、問題はあるまい」

オグマとナバルがそう答え、他の面々もホツとしたような緊張が解けたような表情をしているので、そのままバヌトウたちに近づく。

「バヌトウ」

「おお、マルス王子」

近づいてきたマルスに声をかけられ、バヌトウが自分に抱き着いているチキを降ろして向き直った。

「上手くいったようだね」

「うむ、見ての通りじゃ」

「そうか。よかったよ」

「すまんの、感謝するぞ」

そしてバナトウは傍らのチキに目を移す。

「チキよ、この人が今お話したマルス王子じゃ」

「君がチキだね」

マルスはチキへと歩み寄るとその前まで来て腰を下ろし、チキに視線を合わせた。

「君のことはバナトウから聞いていたよ」

「うん。わたしもおじいちゃまからちゃんと聞いたの」

コクリとチキが頷く。こうして見ると、本当に年相応の子供にしか見えなかった。

「わたしも一緒にいいいでしょ？」

確認するようにチキがマルスに尋ねた。

「ああ、もちろん。僕たちは一緒だ」

「うれしい。ありがとう、マルスのおにいちゃん！」

「お、おにいちゃん？」

前触れもないお兄ちゃん呼ばわりに、流石のマルスも面食らってしまったようだった。少しの間固まってしまう。

「うん。おにいちゃんって呼んじゃダメ？」

マルスの反応にチキの顔が曇った。

「あ、いや。そう呼びたいなら構わないけど……」

慌ててマルスがそう答える。

「ありがとう、マルスのおにいちゃん！」

「うーん…」

ぱあつと輝いたチキの表情とは対照的に、マルスは少し困った表情をしていた。その様子を見ていた他の面々はクスクスと笑っていた。

「…笑うことないじゃないか」

恨めし気にマルスが振り返ると、何人かがわざとらしく目を逸らせた。

「ふう…」

仕方ないとばかりにマルスが溜め息をつく。と、

「マルスのおにいちゃん」

不意に、チキが話しかけてきた。

「何だい？」

顔を戻すと、マルスが優しく応じる。

「あの人…どこ？」

「あの人…？」

誰のことを指しているのかわからず、マルスの表情が曇った。その間も、チキがキョロキョロと辺りに視線を走らせる。そして、

「…いた…」

お目当ての人物を見つけ、チキがトコトコと走り出した。チキの走っていく方向に視線を向けた解放軍の面々たちは、その先に立っている人物を見て思わず固まってしまったのだった。

「あ、あの…」

お目当ての人物の目の前までやってきたチキが意を決したようにその人物に話しかけた。

「…何だ？」

答えたのは漆黒の黒騎士、ガレスであった。

(?)

話しかけてきたチキの表情を見て、ガレスは心底不思議に思った。その表情からは、一切の恐れが感じられないからだ。つい先ほどまで、殺し合いを演じていた(もつとも、バヌトウに頼まれたからガレスは殺すどころか傷つけることもできなかったのだが)相手に対する一般的な感情が見えないのである。

(どういふことだ?)

怪訝に思いながらも、その理由を知るためにガレスはチキの次の言葉を待った。



「その…助けてくれてありがとう」

「…何？」

何を言われたか一瞬わからず、ガレスはらしくない間抜けな声を上げた。が、

「ハハハハッ！」

すぐに高笑いを上げる。

「助けた？ 俺が？ お前を？」

「？ うん」

ガレスの高笑いに一瞬だけキョトンとしたチキだったが、すぐに気を取り直してしっかりと頷く。

「おい、何の冗談だ」

対してガレスはどこまでも傲岸不遜だった。

「俺はさつきまでお前と殺しあっていた男だぞ。助けるなど対極の事柄だ。寝ぼけてるならさつきと起きろ」

「寝ぼけてなんかないもん」

ここまでズケズケと言われて流石にチキもムツとしたのか、不満げな表情になって口を尖らせた。

「フン、信用できんな」

だがガレスの態度は一貫して変わらない。

「世迷言を抜かしているガキの言うことなど、聞くにも値せん」

「よまい……？　チキ、難しい言葉はわかんないけど、嘘は言つてないよ」

「だから「殺す気はなかつたでしょ？」」

ガレスが再び口を開こうとしたところで、チキがニコニコしながら言葉をかぶせてきた。

「……何のことだ？」

凶星を突かれ、ガレスが言葉に詰まる。

「おにいちゃんからは、わたしを殺そうっていう感じはしなかつたもん。わたしを怖い夢から起こしてくれるために、頑張ってくれたんだよね？」

「……」

チキにそう突つ込まれ、ガレスは何も言えなくなってしまう。内心は殺しあえないことに不満だったが、実情を知らない者から見れば確かにチキには直接的な攻撃は一切していないから、一般的には囿になったように見えるだろう。（実際のところそうだし）  
（いいように解釈するガキだな……）

自分のために頑張ってくれたおにいちゃんといった眼差しで、チキはニコニコとガレスを見ている。その能天気さに呆れどころか多少の怒りを覚えないでもないが、じゃあ

チキが言ったことは違うのかと言われればそんなこともないわけだ。否定はできないが、領きたくもないガレスがとつた手段が

「……」

沈黙することだった。その光景に、マルスたちはまた固まつてしまう。

「ガレスが黙つちやつたよ……」

信じられないものを見ていることに、マルスが呆然と呟いた。

「あの男も、子供には弱いようだな」

「そうか？ そんな甘いタマには見えんが……」

オグマがクスクス笑い、ナバールは呆れながらも面白いものを見たとばかりにニヤついている。そして、思わぬ形勢になったガレスとチキのせめぎあい（チキにはそんな気は毛頭ないだろうが）は、

「ありがとう、おにいちゃん♪」

と、チキがガレスに抱き着いたところでチキに軍配が上がった。微笑ましい光景にニコニコしている者と驚いている者が半々の解放軍。当のガレスは無理やり振りほどくわけにもいかず、フルヘルムの下で苦虫を噛み潰していた。しかしその中で、

「あぁーっ！」

その行為に不満げな声を上げた者もいたのだった。その人物は先程のチキのように

トテトテと走ると、これまたチキと同じようにガレスにしがみついた。

「? マリア?」

いきなり現れたその人物、マリアの行動にガレスが疑問符を浮かべる。

「どうした?」

突然の行動の理由を尋ねたが、マリアはガレスに対して何も言わない。しかし、不

満げな顔でチキに顔を向けた。

「ガレスにそういうことしちやダメ!」

「? 何で?」

いきなりそんなことを言われても、当然理由がわからないチキが首を傾げた。

「ガレスにそういうことしてもいいのは私だけなの!」

「いつ、誰がそんなことを決めた!」

「よくわかんない!」

「そうだな」

逐一ガレスからツツコミが入るものの、二人はスルーである。そしてチキも、明確な理由もないのにマリアの言うとおりにするほど大人ではなかった。

ガレスを挟んで、マリアとチキがいがみ合っている。正確には、マリアが一方的にチキのことを面白く思っていないのだが、先述のようにチキにはその理由が今一つわから

ないので戸惑っていた。

(何故この俺がガキのお守りなど…)

降ってわいたトラブルに巻き込まれ、ガレスは困り果てた。その両脇では、相変わらずマリアとチキのかみ合わない会話が續いていた。

そんな、予想しなかった光景に解放軍の面々がニヤニヤしながらガレスを見ている中、マルスは先のカダインでのガトーとのやり取りを再び思い出していた。

『ガトー様』

マフィーを破る方法を享受されたマルスがあることに思い至り、ガトーにそれを尋ねてみようと話しかけた。

『何かな、マルス王子?』

『少し、伺いたいことがあるのですけど』

『ふむ…濃で答えられることであれば』

『ありがとうございます』

礼を言い、マルスは早速本題に入った。

『先程、ガトー様はマフィーはスターライトでなくば破れぬと仰いました』

『いかにも』

『ですが…その…言いにくいのですが、我が軍にマファーを正面から打ち破った者がおりまして』

『…知っている』

少し間をおいてガトーが答えた。その間は、絶句したからか痛いところを突かれたか、はたまた全然違う理由ゆえなのかはわからないが。

『ではガトー様、単刀直入に聞きます』

『うむ』

『彼は…ガレスは一体何者なのです』

言葉通り、マルスは前置きも省いてズバリ尋ねた。

『それは、お主の方がよく知っておるのではないか？ マルス王子』

『それではやはり、彼が…ガレスが言う通り、こことは違う世界からやって来たと!』  
『そう考えるのが妥当だろうな』

ガトーが頷いた。

『それに、そうであれば説明も付く』

『説明? 何のです?』

『マファーをものもしなかったことに対する、だ』

そしてガトーが説明…というよりは、己の推論を述べた。

『あの男は確かに暗黒に堕ちた者だ。それは身近で見ているお主なら、痛いほどよくわかっているだろう』

『はい』

マルスが頷いた。実際、ガレスのこれまでの戦闘を見れば頷かない理由はなかった。

『この世界の者であれば、マファーに抵抗することはできん。例えガーネフと同じく、暗黒に堕ちた者でもな』

『はい』

『だが、こことは全く違う世界の者ならば、そもそもこの世界の理から外れておる。だからこそ、この世界の理を受け付けず、マファーをもとのもしなかった…そんな推測が成り立つ』

『成る程…』

ガトーの説明に、目から鱗が落ちたかのようにマルスが何度も頷いた。

『ただそれでも、何の実力もなければマファーのダメージで死んでおるだろうよ。そうならなかったのは、そもそもあの男の実力がそれだけ高いという証明にもなるということだ』

『よくわかりました』

(こことは違う異世界か…)

マルスは実を言うと、この点については今の今まで半信半疑だった。だが、それも無理ないかもしれない。いきなりこことは違う異世界から来たと言われても、それを素直に信じる方がどうかしている。しかし、こうなってしまう以上、マルスはガレスの言ったことを全面的に信じるしかなかった。

『ではガトー様、もう一つ宜しいでしょうか』

『何かな?』

『僕たちは、ガレスとどう向き合えばいいんでしょう?』

『ふむ…』

ガトーが少しの間沈黙する。

『…難しい問題だの』

暫くしてガトーの口から出てきたのは、そんな一言だった。

『そもそもマルスよ、お主はあの男の何を一番危惧しておるのだ?』

核心を突く質問をガトーがしてきた。

『色々ありますが、一番となるとやはり、いつか僕たちにその刃を向けるのではないかと』



『成る程、裏切りか』

『はい』

マルスが答えた。

『人は理解できないものには恐怖を感じるもの。仕方ないことかもしれない』

『……』

何と答えることもできず、マルスは口を噤んだ。

『手綱は握れておるのだろうか？』

『一応は。でも……』

『でも、何か？』

『…そう思っているのはこちらだけで、いいように掌の上で弄ばれているようにも時々感じられるのです』

『そうか』

そこでガトーも暫し沈黙する。そして、

『あの男の言っていることを信じるしかあるまいな…』

そう結論を出すしかなかった。

『あの男は自分の身の上のことはすべて正直に話したのであるか？』

『はい。それについては』

異世界からの来訪が本当だということが今までのガトーとのやり取りでほぼ間違いないことがわかったため、これまでガレスから聞いた事柄については恐らくはすべて真実と判断していいとマルスは思っていた。

『ならば、あの男は裏切るまいよ。お前たちが受け入れている限りはな。ただマルスよ、お前が不安を払拭できないのもわかる。そこで、だ』

『はい』

『光と星のオーブを儂のもとに持つてくるとき、あの男もつれてまいれ。どこまでできるかはわからないが、儂が直々に人となりを見てやろう』

『本当ですか!?!』

マルスの表情が少し晴れやかになった。

『うむ』

『ありがとうございます！ どうか宜しく願います!』

『期待には添えんかもしれんが、まあやるだけはやってみよう』

『はい!』

『ではマルスよ、武運を祈る』

『ありがとうございます！ 失礼します!』

『うむ』

そしてそこで、ガトーとの会話は途絶えたのであった。

(ガレス…)

相変わらず、傍から見れば微笑ましい光景が続いているガレスを見るマルスの視線が鋭くなった。

(見極めさせてもらうよ、今度こそ。君が本当に信用に値するのかどうかを…ね)  
視線の先の黒騎士を、マルスの鋭い眼光が再度貫いたのだった。

## NO. 22 その力の片鱗を

ラーマン神殿にて無事に光と星のオーブを手に入れた解放軍。これで、ガーネフに対抗しうる手段の材料は揃った。

さらに神殿を守護する恐ろしい女神：新竜王ナーガの娘であるチキを仲間に加え、解放軍の戦力はいよいよ充実していた。そしてとうとう、長かったこの戦いも最終局面に入ろうとしていた。

一行が進路を採るのはグルニア。誇り高い騎士の国である。まずはそこに向けて解放軍は進撃を開始していた。

が、その道中ではじつに面白い光景が解放軍の諸将、諸兵士の目を楽しませているのである。

「……」

行軍を続ける解放軍の一行の中に当然のようにガレスがいた。これはまあ、普通の光景である。そして未だに、遠巻きにチラチラ見られたり、ヒソヒソと耳打ちしているの

が見られるのだが、これもまたいつもの光景である。

しかし先日から、この光景の中にニヤニヤの視線も加わっていた。どうということかという、

「ねえ、ガレス？」

不意に、右肩から声をかけられた。

「何だ？」

ガレスが声のした方向に顔を向ける。そこには、ニコニコした表情でガレスの右肩にちょこんと座っているマリアの姿があった。

ディール要塞でマリアが足を痛めた時にガレスは右肩にマリアを乗せて運んだことがあったが、あれは足を痛めたが故の応急的処置だった。そのため、あの後は普通に歩いていたものの、こうして肩に乗せて歩いたりすることはなかったのだ。

では何故、再びマリアがガレスの右肩に乗っているか。無論、また足を痛めたからというわけではない。

「グルニアまであとどれくらいかな？」

「さあ…」

ガレスが素っ気なく答える。実際、この世界の地理がわからないガレスにとっては、例え目安でもわかるわけではない。なので、そう答えるしかなかった。

「そっか」

しかしマリアは気にする様子もなく、大人しく座っている。別に本当にあとどのくらいでグルニアに着くか知りたかったわけではなく、ガレスとこうしてお喋りしたかったのだろう。と、

「ガレス」

今度は左肩から声をかけられた。

「ん？」

先ほどと同じようにガレスが声のした方向に顔を向けると、そこにはマリアと同じようにガレスの左肩にちよこんと座っているチキの姿があった。このチキこそ、このような事態になっている原因なのである。と言っても、チキ自体には何ら落ち度はないのだが。

ラーマン神殿攻略後、チキが仲間に加わった。一目惚れというやつだろうか、仲間に加わったばかりなのにチキはマルスを非常に気に入っていた。ここまではまあいい。誤算というか予想外だったのは、ガレスもチキのお気に入りになったことである。

理由としてはやはり本人も言った通り、チキと戦った時に攻撃の意思を殆ど示さなかったことなのだろう。それで戦うのがガレスの目的ではなく、自分が元に戻るために必死になって頑張ってくれたとチキは思っていた。実際は勘違いもいいところなのだ

が、訂正するのも面倒なためガレスは放っておくことにした。結果、先述のようにチキは予想外にガレスに懐いてしまったのである。そして、それをマリアが面白く思わなかったというわけだ。デイルで助けてもらってから、ガレスに対して比較的良好な関係を築いていたため、真正面からガレスに懐くチキに少なからず嫉妬したのであろう。

面倒臭くなったガレスは適当なところでその場を切り上げたのだが、その後どういう話し合いがあったのかは知らないが、こういう形に落ち着いたわけである。即ち、右肩はマリアの、左肩はチキの専用スペースとなつたのであつた。そしてせがむ二人と、その保護者たちからの無言の圧力に、不承不承ながらガレスは二人を両肩に乗せて行軍する羽目になつたのであつた。

二人とも体重は軽いいためガレスにとつては苦でもなかつたのだが、一際でかい黒騎士が両肩に少女を乗せて行軍していれば嫌でも目立つ。そのため、好奇の目にさらされたり、ニヤニヤと生暖かい笑いを向けられていたりしたのだった。

(やれやれ…)

フルヘルムの下でうんざりしながら息を吐く。と、

「疲れたの？」

チキがそう尋ねてきた。

「どうしてだ？」

ガレスが顔を上げる。

「えつと…なんとなく、そんな気がしたから…」

(ふむ…)

少しオドオドしながらたどたどしくそういうチキに、ガレスは内心で感心していた。このフルヘルムを被っている以上は表情を見られることはないのだが、それでも雰囲気やちよつとした仕草で見抜く辺りは流石と言うべきだろう。

(大したものだな…)

素直にそう思う。どう見ても子供にしか見えないのだが、そういつた聡さは血筋の成せる業かとガレスは感心していた。

もつとも竜人族…マムクートは姿形こそ人間と同じだが、寿命は人間を遥かに凌ぐらしい。であれば、見た感じの形はこんなでも、もう何十歳とか何百歳といった可能性もあるのだ、だとすれば領けない話でもないのだが。

(ただ、行動や言動を見た感じ、年相応に思えるが)

そんなことを考えていたガレスが、バヌトウから聞いた話を思い出した。詳しい事情は聞けなかったのだが、チキはこれまでほぼ眠り続けていたらしい。であれば、生後どのくらい経っているのかわからないが、知識・言動・性格はまさしく年相応のものなのだろう。



「…疲れてはいないがな」

そんなことを考えていたと悟られなくなかったので、ガレスはチキの質問に答えた。  
「本当？」

チキが少しガレスを覗き込んだ。

「ああ」

「ふーん…」

納得いかないような表情でチキが数度首を捻った。と、

「ねえねえ、ガレス」

今度はマリアが再び話しかけてきた。

「何だ？」

再びガレスが首を捻る。と、

「次の休憩のとき、姉様たちとお茶でも飲まない？」

マリアはそう提案してガレスを誘ったのだった。

「ふむ…」

「ねえ、いいでしょ？ いいでしょ？」

突然のお誘いにどうしようかと考え込むガレスに、すかさずマリアが頼み込んだ。

（…まあいい）

別段断る理由もなかったため、ガレスはそのお誘いを受けることにした。

「いいだろう」

「やったあ♪」

マリアが顔を綻ばせる。その様子を見ながら、つくづくマリアも物好きだと思つてた。そして、それを悪くないと思つている自分も。

(暗黒道の影響が着実に薄れているのだな)

己の心境の変化に、ガレスもそのことを如実に感じていた。無論、危惧はある。今の自分の力は暗黒道によって得られているもの。それが無くなればどうなるのかわからない。もつと言え、この肉体ですら暗黒道の力によって若々しいのだが、誰も知らぬことだが実際のガレスの年齢は六十を超えているのだ。暗黒道の力が無くなればどうなるのか、危惧は常にあつた。

(ジタバタしたところでどうにもならん。なるようになるだけのことだ)

ある意味開き直つてその時を迎えようとガレスはしていた。と、

「いいなあ…」

マリアとガレスの会話を聞いていたチキが羨ましそうにそう呟いた。と、

「チキも一緒にどう？」

マリアがチキに尋ねる。

「いいの!?!」

チキの顔がぱあつと輝いた。

「うん!」

「ありがとう! おじいちゃまといっしょにいくね!」

「わかったよ」

そしてガレスを挟み、その両肩の上でマリアとチキは互いに嬉しそうに微笑んだのだ。ラーマン神殿ではチキに少なからず敵愾心のあったマリアだが、その後姉に諭されたのか、バヌトウに取りなされたのかはわからないが、チキと仲直りをしていった。もつとも、一方的に敵対心を抱えていたのはマリアだけだったため、仲直りという表現は適切でないかもしれないが。

ともかくにもガレスが再び二人に逢った時：即ちつい先ほどののだが、その時には仲良しになっており、二人してガレスの肩に乗るのを所望したということである。

そして以降、この戦争が終わるまで、ガレスの右肩はマリアの、左肩はチキの専用の場所となるのだが、それはまた別の話。

そんなこんなで、こんなビジュアルが陣中で目立たないわけはなく、ガレスは余計に噂的になっていたのだった。

「ふう……」

本日の行軍が終了し、天幕の設営作業に解放軍は取り掛かる。グルニアまでは大分距離を詰めてきたこともあり、明日には戦いになるだろう。つまり、戦闘前の最後の夜ということになる。

（何人が生き残れるか）

設営作業を行っている指揮官級の士官や兵士たちの面々の姿を見て、ガレスはそう思っていた。明日には間違いなく、このうちの何割かは黄泉へと旅立っているのだ。

こんなことを思っては何なんだが、代えの利く兵士級だけならともかく、代えの利かない指揮官級がそうならなければいいがなと思っていた。と、

「あの……」

設営作業中だったガレスが、不意に誰かに声をかけられた。

（ん？）

振り返る、そこにはよく見知った顔があった。

「…お前たちか」

そこにいるのはマケドニア白騎士団のパオラ、カチュア。そして…

「ツ！」

振り返ったガレスの姿に硬直を起こしかけたが、何とか踏みとどまりつつも、すぐさま姉たちの後ろに引っ込んでしまったエストの姿だった。

(こいつは…)

エストの姿に驚きとも呆れともつかぬ思いを抱きながら、ガレスは三姉妹に目を向ける。

(十中八九、あの件だろうな)

パオラとカチュアだけならともかく、レフカンデイで間違いなく殺そうとしたエストまでガレスの許にやってきた。この三人が自分の許を訪れる理由としての心当たりが一つだけあるガレスは、設営の手を止めた。

「何だ」

ガレスが口を開いた。別段、威圧的な口調ではなく、普通にいつも通りの口調だった。だがそれでも、恐怖心を植え付けられたエストには恐ろしいのか、身体をビクツと振るわせると、姉たちの後ろから小刻みに震えながら覗き込むようにガレスを見ていた。

(やれやれ…)

こうなることはわかっていただろうに連れてきた二人の姉たちに少し辟易する。あるいはエストが勇気を振り絞って自分から一緒に行くといったかもしれないが、そうならそうでもう少し覚悟を決めてきてほしいとガレスは思っていた。まあ、殺されかけた

のだからどだい無理な話かもしれないが。

「ちよつと…いいかしら?」

長姉ということもあつてか、パオラが口火を切った。その表情で、三人が今回ここに来た用件は自分の予想通りのものだなとガレスは確信していた。

「わかった」

そのため、ガレスも頷く。

「だが、ここではな。少し場所を変えるぞ」

「ええ」

ガレスの提案にカチュアが頷いた。あまり人に聞かれたくない話題であることに加え、ただでさえガレスは視線を集めるのに、ガレスとはそぐわぬペガサスナイト三姉妹も集まったとあつては周囲の耳目を集めるのは当然のことだった。

そのままガレスは身を翻すと、さっさと歩き始めてしまう。その後を、慌てて三人が追った。と、何を思ったのかガレスがいきなり歩みを止める。

「きやつ!」

三姉妹たちがガレスに突つ込まないように慌てて停止した。と、ガレスはクルリと振り返ると、

「…わかっていると思うが、後をつけたり覗くようなゲスな真似はするなよ」

自分たちに視線を向けていた周囲の人間に釘を刺すと、ガレスは再び歩み始めた。その後を追っていくペガサスナイト三姉妹も見送った、その場にいた連中はガレスの脅しに肝を冷やしたのか、それ以降も黙々と天幕の設営を続けたのだった。

「さて…」

天幕の設営場所から程よく離れた小高い丘。その真ん中まで来ると、ガレスは振り返った。末の妹は二人の姉の背中からオドオドしながら顔を出し、二人の姉はその末の妹をかばうように仁王立ちしている。

（麗しい姉妹愛だ）

感心しながら、ガレスは口を開く。

「用件は何だ」

「…わかつているのでしょう？」

パオラが鋭い視線でガレスを睨む。

「さて…な」

当然見当はついていいるのだが、ガレスはしれつととぼけた。

「あのねえ」

「姉様」

少しムツとした。パオラが食って掛かろうとしたところでカチュアが抑えた。

「無駄よ。この人のことだから、私たちが遊んでるんでしよう。ハッキリ言わないと答えてくれないと思うわ」

「クツクツクツ、ご挨拶だな」

ガレスが楽しそうに笑った。スリットから覗く真紅の瞳が鋭さを増し、それに気付いたエストが恐怖からかまた縮こまってしまふ。

「そう。それじゃあハッキリと言うわ。ねえ、ガレス」

「何だ？」

「貴方、前の前の戦い…カシミア大橋の戦いでエストを助けてくれた？」

（やはりか）

予想通りの質問に、ガレスは内心で頷いていた。が、表面上はそれを億尾にも出さずに会話を続ける。

「何をバカなことを…」

ガレスが大仰に首を左右に振った。

「前回のラーマン神殿ならともかく、前々回の戦いでは俺はまだ謹慎中の立場だったこととお前たちも知っているだろう。軍規を破るような真似、とても俺にはできん」

「白々しいこと言わないで」



カチュアが呆れたような表情になった。パオラも同様だが、特筆すべきはエストですら白々しい……と言った表情をしていることである。

「これはこれは……」

だが、ガレスは当然のように意に介さない。

「酷い言われようだな」

クツクツクツと、また含み笑いを漏らした。だが、パオラたちも負けてはいない。

「基本、貴方が軍規を守る気がないのは皆知ってるわよ」

「そうよ。それなのにそんなこと言われて、信じるわけないでしょ」

「クツクツクツ……」

結構なことを言われているのだが、ガレスはこういった会話が楽しいのか怒る様子は見受けられない。寧ろ、楽しそうに笑っていた。

「お前たちが何をどう思ってるそんなことを聞いてくるかは知らんが、俺はカシミア大橋……だったか？ その戦いでは大人しくしていたが」

「……本当に？」

パオラが疑わしそうな視線でガレスをねめつける。カチュアも同じく、これっぽっちも信用していないといった表情だ。

「ああ」

だがガレスはしれっとそう答えた。そして、

「嘘だと思ふならニーナにでも聞いてみる」

と、付け加えたのだった。

「え!？」

「どうして、ニーナ王女が出てくるのよ!？」

予想していなかった人物の登場に、パオラとカチュアだけでなく、エストもビツクリした表情を浮かべていた。

「何、簡単なことだ」

だが、ガレスは意に介することもなく続ける。

「この頃あいつが暗い顔をするが多かつたんでな。先日のお前たちが俺にしたのと同じくご機嫌伺いに行つてやったのさ」

「貴方がご機嫌伺い?」

「嘘お…」

パオラとカチュアは驚きながらも訝しげな表情をする。ここまで一言もしやべつてないエストも同様に疑わしい視線を向けていた。まあ、日ごろの傍若無人ぶりを良く見せつけられている身としては、こういった反応をするのもおかしい話ではないのだが。

「まあ、どう思おうがお前たちの勝手だ」

そして、さて…と続ける。

「用事はそれだけか？ だったら俺は戻る」

「待って」

歩き出そうとしたガレスの目の前に、パオラが仁王立ちした。

「何だ。まだ何かあるのか？」

少々辟易としながらもガレスが尋ねた。

「…本当に、貴方前々回の戦いでは何もしていないのね」

ジツと自分を見つめるパオラに、

（ククク、流石にそう大人しくは引き下がらないか）

内心で楽しそうに笑いながら、

「何故そこまで食い下がる」

と、これまたしれつとガレスが尋ねた。

「それは…」

「見たのよ」

カチュアが後を引き継ぐように口を挟んできた。

「見た？ 何をだ？」

「貴方を」

「ほお…」

面白そうに呟きながらカチユアの言葉にガレスが耳を傾けた。

「状況を説明してみろ」

「ええ」

「わかったわ」

パオラも再び参加する。そして姉たちとガレスのやりとりを、エストは心配そうな表情で見ている。

「カシミア大橋での戦い、この子…エストは途中から参戦したの」

「前にも言ったけど、この子は別任務で合流が遅れたから、その遅れを取り戻そうと張り切って戦いに加わったわけ」

「成る程」

「姉の鼻肩目と言われるかもしれないけど、この子の働きは十分なものだったわ」

「でも、だからこそ突出する形になって…要は誘い出されたのよ。敵が意図して誘い出したのかどうかはわからないけどね」

「ほう」

「この子もそれに気付いて防戦しながら前線を縮小したんだけど、何せ乱戦だったものだから中々思い通りに動けなくて」

「そうこうしているうちに、敵の弓兵がエストに狙いを定めたの。私と姉様は気付いたのだけど、駆け付けようにも間に合う距離じゃなかった」

「だからエストに声がけたんだけど、エストが気付いたときには矢が射られる直前だったのよ。その時の敵兵とエストの距離を考えれば、かわすことのできる距離じゃなかった」

「私たちは一番最悪な事態を覚悟したわ。…けど、そうはならなかった。エストは無事に生き残り、三人揃って戦いを終えることができたの」

「…それが、俺の仕業だど？」

『ええ』

パオラとカチュアがユニゾンで答えた。

「エスト自身は、戦士としてはあるまじき行為なんだけど、矢が放たれる瞬間に硬直して目を瞑ってしまったらしいの。だから、この子は何も見ていない」

「けど、私たちは見たのよ」

そこで、パオラとカチュアの視線が少しだけ鋭さを増した。

「…敵兵の影の中から漆黒の人影が躍り出して、敵兵の矢を叩き落したのを。そしてその直後、その敵兵が地中から噴き出した煙のようなものに吞まれて絶命したのをね」

「その影は、それだけやるとすぐに消え去ったわ。その後は、厳しい戦いだったけど特に

おかしなことは何もなく戦いは終わった」

「念のため、戦闘終了後にその敵兵のいた周辺を哨戒してみたんだけど、私たちが見た漆黒の人影らしきものは何処にもなかった。あの戦いで出撃していた人たちにも、該当するような格好の人はいないわ」

「そう。いるとするならそれは…」

鋭さの増した二組の視線がガレスに照準を合わせて逃がさない。

「よくわかった」

ガレスが答える。

「だが、先ほども言ったように俺はあの戦いではここにいた。どう考えてもお前たちの許にはいけないはずはない。何より、都合よく生命を助けるなどできるわけではないだろう」

「相手が普通の人ならその説明で納得するわ」

「ええ。けど、相手が貴方となれば話は別よ」

「そう。貴方なら…」

「何が起こっても…いえ、何をしてもおかしくはない。そう考えるのは考え過ぎかしら？」

「ククク…大したご挨拶だ」

本人を前にしてよくそこまで堂々とと言えるものだと思つたガレスだが、目の前の二人を殺そうとは少しも思わなかつた。これが以前の、ゼテギネアに君臨していた頃ならば間違ひなく目の前の三人を殺していただろうが、不思議とそんな気にはなれなかつた。寧ろ、堂々と自分と渡り合つてくるこの連中が面白くて仕方なかつた。

(良いことか、悪いことか…)

己の変化にそう思いつつも、勇気を出して自分に相對してきたこの三人を称え、ガレスは三人と真面目に向き合うことにした。

「……」

腕を組み、ガレスは真正面から三姉妹の視線を受け止める。が、何も口を開こうとしない。突き止める…せめて何かの手がかりだけでも引きずり出すまでは食い下がつてみせると言つた覚悟でパオラとカチュアがガレスを睨んでいる。エストは恐怖心がまだ拭えないからか、変わらずに姉たちの後ろに引つ込んでいるままだが。と、

「ククククク…」

三姉妹の背後からいきなり笑い声が聞こえた。

(！)

(い、今のは！)

(う、嘘っ!?)

自分たちの背後からいきなり聞こえた笑い声に心臓が跳ねあがる程驚き、三姉妹は慌てて振り返った。だが、そこには何もいない。しかし、その耳朶を打った声色はよく聞いたものだった。そして、

「お前たちが探しているのは…」

今まで黙っていたガレスが口を開くと、三姉妹は再び慌てて振り返った。

「俺のことか？」

そう告げると、目の前のガレスはいつもの姿から真つ黒い影の塊のようなものになり、そしてドロドロに溶けるようにその場から消え去った。

「うっ！」

「きゃっ！」

「ヒッ！」

嫌悪感や恐怖心を露わにしながら三姉妹が腰を抜かす。ドロドロに溶けたはずのその真つ黒な影のような塊は、綺麗サツパリその場から無くなっていた。と、

「ハハハハッ！」

その三人を揶揄するように少し離れた場所から笑い声が聞こえた。恐る恐る振り向いた三人の視線の先には、木に背を預けながら三人を見ているガレスの姿があった。

「あ、貴方…」



呆然としながらパオラが口を開く。三姉妹が自分に気付いたのを確認したガレスがゆつくりと歩きながら近寄ってきた。そして、

「これで満足したか？」

と、問い掛ける。

「さ、さっきのつて…」

まだ立ち直ってないのだろう。呆然としながらカチュアが口を開く。

「俺の影だ」

「じゃ、じゃあやつぱり…」

「説明するまでもないだろう」

ガレスがパチンと指を鳴らすと、それを合図としたかのようにその背後からガレスと全く同じ姿形の影が出てくる。

『…ッ！』

目の前で起きていることに理解が追いつかず、息を呑む三姉妹。もう一度本体のガレスがパチンと指を鳴らすと、今度は存在自体が薄くなっていき、すぐにその場から消えた。

「やつぱり、貴方だったのね…」

長女としての自覚だろうか、気を取り直したパオラがゆつくりと立ち上がる。カチュ

アとエストもそれに追従するように立ち上がった。もつとも、大小の違いはあれど三人とも足をガクガクさせて震えてはいたが。

「ククク、そうだ。お前たちの睨んだとおりだよ」

ガレスが真紅の瞳を光らせながらそう答える。

「どうやったらあんな真似ができるの?」

「俺の力だ。お前たちが日頃から忌み嫌っている、あの負け犬の暗黒司祭と同じ力だ」

「暗黒の…力」

「ククク、そうだ」

ようやく独り言のように呟いたエストに答える形でガレスがそう言った。

「もつとも、これでも力自体としては随分落ちてはいるがな」

「そ、そうなの!?!」

カチュアが驚きに目を見開く。あんな真似をしておきながらそれでも力が落ちていくというのだから、この世界の人間にとっては驚かない方がおかしい。

「そ、それじゃあついでにもう一つだけ聞かせて」

パオラが気丈に振る舞い、もう一度ガレスに視線を向けた。

「何だ?」

「貴方がエストを助けてくれたことはわかったわ。でも、どうしてエストが死ぬかもし

れないっていうことがわかったの？」

「あ、そ、そうね」

カチュアもそれに気がついたのか、姉の言葉に頷く。

「まさか貴方、未来予知まで……」

「バカなことを言うな」

パオラの推論をガレスがすぐに否定した。

「貴様らが暗黒道についてどのようなイメージを持っているかは知らんが、そんな便利なものはない。少なくとも、俺にはな」

「じゃあ、どうして？」

「死の匂いがしたからな」

「？ 死の匂い？」

「ああ」

頷きながらガレスが思い出す。ニーナと話している最中、戦場の方から突然死の匂いがしたのを。だからこそ、少し強引だったがあの場面で切り上げてニーナの許を去ったのだ。そしてそれに対応するため、分身を創り出してあの戦場に送り込んだ。それが、あの時の全てであった。

「死の匂いって……何？」

聞き慣れぬ…と言うより、聞いたことのないその単語にカチュアがガレスに尋ねた。「そのままのことだ。死の運命が迫っている人間からは、そういった匂いがする。もつとも、本当に匂いがするのではなく、そういった気配が出るのだがな。俺が勝手にそれを『死の匂い』と表現しているだけのことだ」

ガレスの視線がエストに向き、エストが蛇に睨まれた蛙状態で固まってしまった。パオラとカチュアもエストに視線を向ける。

「あの戦場から死の匂いがした。そこで影を創って送り込んだ。そして影が仕事をした。それだけの話だ」

『……』

三姉妹はどう反応したらいいものかといった感じで固まってしまっている。理解が追いついていないといった方が正しいかもしれないが。

「…それで？」

そんな三人を追い込むかのようにガレスが口を開く。

「え？」

「今回の件については種を明かしてやったわけだが、どうするつもりだ？ マルスや…あるいはハーデインにでも報告するつもりか？」

「う…」

「それは、その…」

パオラとカチュアが返答に困る。本来ならば当然報告すべき事案なのだが、妹を助けてくれた恩がある。何より、そんなことをしたらガレスがどんな真似をするかわからない。それを考えると、軽々しく返答するわけにはいかなかった。

(どうしよう…)

パオラとカチュアがお互い顔を見合わせて同じことを考える。と、

「し、しないよー」

二人の後ろからそんな声が上がった。

「エスト…」

「貴方…」

振り向いた先には、末妹であるエストがオドオドしながら、それでもハッキリとガレスにそう言ったのだった。

「ほお？」

今までほぼ空気状態だったエストが意志を見せたことに多少なりとも驚きながら、ガレスが続きを促す。

「何故だ？」

「だ、だって、生命の恩人だもん。それに」

「それに？」

「今までその力を、こつちが不利になるように悪用したわけじゃないんでしょ？」

「ああ」

ガレスが頷いた。確かに、そういう目的では使っていない。ニーナを助けた時とか、リンダやウルフたちを巻いたときに使ったぐらいである。今のところは、であるが。

「それなら、尚更そんな真似できないよ」

「そうか」

ガレスはエストの言葉を複雑な思いで聞いていた。確かに嬉しいことではあるが、それは人間として…である。軍人としてならば、エストの判断は決して褒められたものではない。

（まあ、別にいいだろう）

コイツが軍人として失格だろうがどうだろうが、俺には関係のないことだ。ガレスはそう割り切った。

（それに、今言ったことが本心である保証はどこにもないしな）

その時は少しきつい灸を据えてやるか…そんなことを考えてガレスは内心で笑ったのだった。

「さて…」

頭を切り替えると、ガレスは三姉妹全員に視線を向けた。

「用は済んだな。では俺はこれで失礼するぞ。お前たちもさっさと戻れ」

「ええ」

「うん」

「わかった」

「ではな」

そしてガレスはその場を立ち去った。その後ろ姿を三姉妹は複雑な視線を絡ませ、何とも言えない思いを抱きながら見送ったのだった。

## NO. 23 ブラックナイツ・カミュ

グルニア城近郊。解放軍を待ち受けるために布陣を敷き終え、今一人の騎士がその到着を待っていた。グルニア黒騎士団を率いる、大陸最強と名高いブラックナイツ・カミュである。

「……」

布陣を敷き終え、解放軍を待つカミュは微動だにしない。ただジツと、来るべき決戦の時を待っていた。と、

「カミュ将軍」

不意に、傍らから声をかけられる。

「ロレンス将軍……」

カミュが振り向くとそこには、グルニアの誇る名将であるロレンスの姿があった。

「如何なされた？」

カミュが礼を失せぬようにロレンスに尋ねる。騎兵であるカミュだが、今は騎乗していないために下馬をするということとはなかった。

「うむ……」



ロレンスが表情を曇らせるように口籠もった。その態度、そして纏っている雰囲気からロレンスが何が言いたいのかあらかた理解したカミュだが、強いるような真似はせず、ただ黙って続きを待つことにした。

「…貴公」

どれだけ待ったのか、それは短いのか長いのかわからないがようやくロレンスが重々しく口を開いた。

「この戦い、どう見ている？」

「どう…？ とは、どういう意味でしょうか？」

ほぼ予想通りのその言葉に、それでもカミュは真摯に向き合うためその真意を尋ねた。

「何でもよい。勝機はあるのか、意味はあるのか、それ以外でも思うところがあれば何か聞かせてほしい」

「成る程。では私の勝手な分析ですが…」

「うむ」

「勝機については、まず御座いますまい」

「…やはりか」

ロレンスも半ばわかつてはいたのだろう。それでもこう聞いてきたのはカミュに否

定してほしかったからかもしれない。しかし、カミュはそんなロレンスの想いを否定するかのように忌憚のない意見を述べた。

「ええ」

どこまでも冷静に、カミュは頷いた。

「今となつては遅いことですが、初動が悪すぎました。オレルアンで兵を挙げた辺りで総力をもつて戦いを挑めばこうなることはなかったでしょう。しかし、ドルーアは彼らを見くびつていたのか、そうはしなかった。また、我らとドルーア、マケドニアの連携が十分に取れていなかったのも、対応が後手後手に回つた大きな要因でしょう」

「それは、貴公の責任ではあるまい。アカネイアのニーナ王女の件で、貴公は久しく飼ひ殺しにされていた。兵馬の権のなかつた貴公にはどうすることもできまいよ」

「いえ、私の責任です。ニーナ王女を助けたことについては今でも後悔はしていませんし、あれで良かったと思つています。しかし、その後に上手く立ち回れなかったのは私に器量がない故のこと」

「仕方あるまい。貴公は将であつて政治屋ではない。貴公にその才までも備わつていれば、それこそとつくに同盟軍は瓦解していただであらうよ」

「これは…買い被り過ぎというものですよ」

「何の何の、そんなことがあるものか」

「はは、將軍も中々に口が上手い」

そこで二人は互いに少し微笑んだ。しかし、すぐに表情を戻す。

「パレスを取り戻されたのが分水嶺になったのかもしれない」

「そうだな」

引き続き続くカミュの分析に、ロレンスも同意した。

「あの城はアカネイアの象徴。それが同盟軍の手によつて奪還されたことは、同盟軍にとつては大きな戦果であり、我らにとつては大きな痛手であつた」

「ええ。事実、あの時点から同盟軍の勢力は確実に増したように思えます。レフカンデイ、ワーレン、ペラテイと抜けた同盟軍を、ドルーアも決して過小評価していたわけではないでしょう。逆に言えば、その待ち受けていた布陣をことごとく打ち破つた同盟軍の強さがこちらの想定以上だつたということですよ」

「そして勢いのついた野火は消えず、燎原の火の如く燃え広がるといふわけか」

「左様。そしてその結果が、今のこの状況ですよ」

カミュが目の前に視線を向けるように手をスツと広げた。

「栄えある我がグルニア黒騎士団も残るはこれだけ。同盟軍は我が方に数倍の兵力を擁して攻めてくるでしょう。無論、兵の多寡で戦が決まるわけではありませんが、援軍も期待できぬこの状況では、勝てる見込みはございません」

「うむ。そうだな」

ロレンスもその意見に賛同した。

「陛下がもう少し……」

「ロレンス将軍、それ以上は仰ってはなりません」

「む、すまん。年を取ると愚痴っぽくなっていかん」

「いえ、お気持ちはわかりますゆえ」

「そうか。……なあ、カミュ将軍」

そこでロレンスが改めてカミュに視線を向けた。

「何でしょう?」

「忌憚のない意見を聞かせてもらいたい」

「私に答えられることであれば」

「では問う。貴公、同盟軍に降るつもりはないのか?」

「……」

半ばそう言われるであろうことは理解していたカミュは、一瞬返答をせずに口を噤んだ。しかし、

「正直に申し上げれば……」

と、自分の心境を吐露する。

「うむ」

「…考えたことがないと言えば嘘になりましょう」

「やはりな」

ロレンスも頷いた。ただそれは、戦況が悪化したから保身のためというような理由ではないことはわかっていた。グルニアの誇る名将であるカミュは、そんな男ではないのはグルニアの軍人に限らず、国民の誰もが知っていることである。

「ですが…」

再びカミュは眼下に広がる最後の精鋭たちに視線を向ける。

「ここで私が寝返つては、これまで我々の命に従って生命を落としていった兵たちの死んだ意味がなくなりませう。そして何より、この戦いに敗ればグルニアは滅亡するでしょう。私には滅亡するとわかつている祖国を裏切ることなど出来ませう」

「そうか。貴公もほとほと不器用よな」

「今更です。最早性格は変えられませんよ」

「確かに」

そしてまた二人で寂しく笑った。だがすぐに、

「將軍…そ…」

と、カミュが口を開いた。

「ん？」

「將軍こそ、どうお考えなのですか？ 同盟軍に降るつもりですか？」

「……」

今度はロレンスが口を噤んだ。

「私に忌憚のない意見を求めたのであれば、同じように將軍も答えていただきたい」

カミュがそう問いかける。決して責めている口調ではないのだが、そう聞こえてしまうのはロレンスの心が定まっていなからだ。だからこそ、

「正直に言えば……わからんのだよ」

そう答えることしかできなかつた。

「わからない……とは？」

「確かに、儂も貴公と同じく祖国を裏切る気にはなれん。だがな」

「だが？」

「我ら軍人は良い。誇りと矜持を胸に戦場の露と消えればそれで満足だ。だが、我らの死で全てが終わるわけではない。無論、グルニアの国は終わるだろう。しかし、この国に生きる民草たちはどうなる」

「……」

今度はカミュが口を噤むことになってしまった。

「国は滅んでも人は滅びず。この戦いに負けた我らは敗戦国となる。敗戦国に生きる民草がどのような扱いを受けるか、わからぬ貴公ではあるまい」

「…同盟軍の盟主である二一十王女、また、炎の紋章を戴き同盟軍を率いるマルス王子は一門の人物と聞きます。決して我が国の民を虐げるような真似はしないでしよう」

「確かに。だがな、その考えが末端まで行き届くとは限らん。戦後、我がグルニアに派遣されるであろう人物がどうしようもない下衆である確率も皆無ではない。確かにそうなる確率は低いだろうが、万一そうなったときのことを考えると、ここで我が生命を投げ出してもいいものかと二の足を踏んでしまうのだ」

「……」

カミュには何も言えなかった。ロレンスの苦悩もよくわかるからだ。戦場で華々しく散るのは確かに武人…軍人としては本懐かもしれない。だがその後続くことを考えれば、軽々しく死を選ぶのは立場のある者としてはあるまじき行為であるのも確かだった。どちらが良い悪いというわけではない。どちらも正解だし、どちらも間違っているのだ。それがわかるからこそ、カミュにはロレンスを非難するような真似はできなかった。

「儂を不忠者と思うか？」

そんなカミュの内心を見透かしたかのようにロレンスが問い掛けていた。

「…いえ」

少しの逡巡の後、カミュはそう言って首を横に振った。

「将軍のお気持ちはよくわかります」

「そうか。だがそれは儂とて同じこと。儂にもお主の気持ちはよくわかる」

「そうですか…」

そして少しの間、静寂がその場に訪れた。

「…お互い不器用ですね」

「全くだ」

ロレンスは答えると、ゆっくりと身を翻した。

「将軍？」

「そろそろ持ち場に戻らねばな。同盟軍も陣容を整えて攻め寄せてこよう」

「わかりました」

同意する。そして、

「将軍！」

カミュが、去って行こうとするロレンスの背中に呼び掛けた。

「何かな？」

ロレンスが足を止めて振り返る。



「お二方のことを…王子と王女のことを、宜しくお願いします」  
「…承知した」

それを一期に、二人は別れた。その時点で、彼らはお互いどんな道を選択するのかわかったのかもしれない。不器用すぎる軍人同士であるが故の、相通ずる思いだった。

「マルス」

「ニーナ様」

出陣の布陣を終えたところで現れたニーナの姿に、マルスはいつものように臣下の礼を取る。

「楽に」

「はい」

ニーナに促され、マルスは立ち上がって軽く一礼をした。

「間もなく我々は出撃します。その前に、以前仰っていた『知っておいてほしい話』…できれば今、お聞かせ願えないでしょうか」

「…わかりました」

ニーナが決意したように頷いて口を開き始めた。

「…アカネイアがドルーア、グルニアの連合軍により占拠されていた時の話です」  
「はい」

「王家のものは私を除く全員がドルーアによつて殺され、ただ一人生き残った私もグルニア黒騎士団に捕らえられました」

「そのことは聞いております」

「アカネイア王家の血を根絶やしにするためドルーアは私の処刑を望み、グルニアもそれに従う意向だったと聞きます」

「ですが、ニーナ様は…」

「ええ」

その時の思いを噛み締めるかのようにニーナが頷いた。

「私は処刑されませんでした。私を捕えた黒騎士団の長が護ってくれたのです。その長の名を、カミュといいます」

「カミュ！ あの、『ブラックナイツ・カミュ』！」

頷き、ニーナが後を続ける。

「彼はドルーアの暗黒地竜メデイウスをも恐れず、自分の功を全て投げうって私をかばってくれました。そして、怒ったメデイウスが私を暗殺しようと考えていることを知り、ひそかに私をオレルアンへ逃がしてくれたのです」

「…そんなことがあったのですか」

当然ながら初めて聞く話であり、何よりもその内容にマルスは驚きを隠せなかった。

「だから、彼はドルーアの監視下に…」

『人や国、それぞれにはそれぞれの事情があるもの』…はじめは、私も彼を憎んでいました。ですが、今はどうしても憎みきれません。できれば、彼とは戦ってほしくない。そして…もし許されるのなら彼にもう一度逢いたいのです…」

「お話は承りました」

マルスが言葉通り、よくわかったという意を表すように深く頷いた。

「…お約束はできません。ただ、できる限りのことはします。カミュ將軍と戦わずに済むように。そして、ニーナ様と再び相見えられるように。これがアリティアの…いえ、アカネイア同盟軍を預かる私ができる精一杯の答えです」

「ありがとう、マルス。それで十分です…」

「では、我々はこれより出撃します。ニーナ様は後方にて吉報をお待ちください」  
「わかりました」

答えると、ニーナはしずしずと下がっていった。その後ろ姿を見送ると、マルスも前線へと向かう。

(何とかしてあげたいな…)

ニーナの先ほどの表情、そして後ろ姿を見送ったマルスの正直な思いだった。

(ニーナ様の望むような結果には、恐らくはならないだろうけど)

そうも思う。実際に会ったことはないが、カミュの勇名は大陸中に響いている。その伝え聞く人物像から判断すれば、恐らくこちらに寝返るような真似はしないだろうと思っていた。

(それでも…)

せめてもう一度逢わせるぐらいのことはしてあげたかった。それを成せるように努力しよう。そう決心したマルスは、そのまま前線へと合流したのだった。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

肩で息をしながら、何とかマルスが呼吸を整える。グルニア黒騎士団との最後の決戦に臨んだ解放軍だが、激戦を極めていた。流石に大陸中に勇名が轟くグルニア黒騎士団であり、ここで負ければ後がないことも相まって、各地での戦闘は今までで一番と言ってもいい激しい戦いであった。マルスの許にもひっきりなしに負傷や戦死の報せが舞い込んでくる。

(覚悟はしていたけど、これほどとはね…)

今更ながらにグルニア黒騎士団の強さを痛感し、マルスは歯噛みする他はなかった。ハーディン、ジョルジュ、ミディア、カインにアベルと、指揮官たちの必死の戦いでいいではいるものの、それでもいつどこかが瓦解してもおかしくはない状況であることに変わりはないかった。

だが、徐々に徐々に物量差が物を言い始める。元々の兵力の差と、また援軍の当てが見込めないこともあって少しづつ均衡は崩れていった。無論、優勢なのは解放軍である。そして、何名かの指揮官も負傷を負いながら、ようやくグルニア黒騎士団の猛攻を凌ぎきることができたのだった。

「苦労様、みんな」

報告に自分の許を訪れてきた指揮官たちに、マルスが労いの言葉を掛ける。

「状況は？」

「うむ、平野部の敵は撃退することができた。後は城周辺の敵のみだ」

集まった指揮官たちを代表してというわけでもないのだろうが、ハーディンが答えた。

「こちらの被害は？」

「兵の半数近くが負傷。ただ、戦死者は負傷者に対してそれほど多くはありませんので、それだけは救いかと」

「そうか……」

ミディアの報告にマルスの表情が曇った。続けて、  
「指揮官の人員に負傷者は？」

と、マルスが尋ねた。

「三割近くが深傷を負っています」

「ですが、致命傷とまではいってはいません。また、シスターたちが必死で治療に専念してくれていますので、生命の危険がある者や、後遺症が残るものはいないかと」

「指揮官に限って……ですが」

「そうか……」

カインとアベルの返答を聞いたマルスの表情が曇った。指揮官に多大な被害がないのは喜ばしいことである。しかし、兵士たちには当然のように被害があった。戦争をしているのだから犠牲が出るのは当たり前なのだが、そのことを考えれば浮かれる気にはとてもなれなかった。

（彼らには、戦後十分報いてやらないと……）

らしいことを考えながら、マルスが顔を上げた。

「とにかくこれで、城までの道筋ができたわけだね」

「うむ」

「ですが王子、本番はここからかもしれませんよ。何しろ、大物が残っていますから」  
ジョルジユが後方に振り返る。そしてそれに導かれるかのようにマルスをはじめとする指揮官たちの視線が同じく後方へと向かった。全員の視線の先には、一際目立つ一騎の騎兵の姿があった。

「あれが、ブラックナイツ・カミュか…」

マルスが思わず唾を飲んだ。いつの間にか、咽喉がカラカラに渴いていたのだ。

「…成る程。大陸最強という二つ名も、あながち大げさなものではないようだな」

ハーディンもその威容を目の当たりにして素直に認めた。

「恐らくは、今までで最強の難敵でしょう。どうなされますか？ マルス王子」

ホルスがマルスに尋ねる。

「無論、戦うしかない。けど…」

「どうしました？」

「その前に、やらなければいけないことがある。カイン」

「はっ」

マルスが腹心の部下を手招きすると、何やら耳打ちをした。

「わかりました」

「うん。頼んだよ」

「はい」

恭しく頭を下げると、カインは急いでその場を後にした。

「マルス殿、何を？」

ハーデインが今の行為について尋ねる。他の面々も口にこそ出さないが、ハーデインと同じく今の行為について首を傾げていた。

「本格的に攻める前に、どうしてもやっておかなくちゃならないことがあるんだ」

「それは？」

「すぐにわかるよ」

マルスはそれだけ言うのとそれ以上は言わなかった。他の面々が不審な表情を見せる中、やがてカインが戻ってきた。

「お連れしました」

ニーナを先導する形で。

「！ ニーナ様！」

思いがけない人物の登場に、ハーデイン以下全員が臣下の礼を取る。

「ご苦労様、カイン」

「はっ」

ただ一人、マルスはカインをねぎらうと、ニーナに視線を向けた。



「ニーナ様」

「マルス、話はここに来るまでの間に聞きました」

ゆつくりと歩いてくるニーナがマルスに話しかける。

「そうですか。遅くなりましたが、お約束の件、用意が整いましたので」

「ありがとうございます、マルス。無理を言っでごめんなさいね」

「いえ。ただ、万どこかに伏兵が潜んでいるかもしれません。僕を含め、何人かは護衛としてともに向かうことをお許しく下さい」

「勿論。私の我儘を聞いてくれたのですから、それぐらいは当然のものと思っています」  
「ありがとうございます。では……」

「ま、マルス殿」

突然始まったニーナとマルスのやり取りに、ハーディンが半ば面食らったような表情で顔を上げた。事情を知らないから当然なのだが、それは他の面々も同じだった。どういうこと？ といった感じで顔を上げている。

「皆、楽にしてください」

「ははっ！」

ハーディンを皮切りに臣下の礼を外すと、説明を求めするようにマルスに視線を向けた。

「この戦いが始まる前、ニーナ様に密かにお願いされていたことがあるんだ」  
「それは？」

「うん、敵将と…カミュ將軍と話をさせてほしいってね」

「何!？」

その場の、マルスを除く全員がニーナに視線を向けた。

「真ですか、ニーナ様？」

代表してというわけでもないのだろうが、ホルスが尋ねた。

「ええ。本当よ、ホルス」

ニーナはホルスの質問に頷いて答える。

「…グルニアのカミュ將軍と面識があるとは思いませんでした」

ミディアも初めて聞く主君の告白に驚きを隠せなかった。

「ごめんなさいね、ミディア。隠していたわけではないのだけれど…」

「いえ、責めているわけでは」

「ふふ、わかってるわ」

ニーナがクスリと笑う。

「…では、一体どういう経緯で知り合われたのか、お聞かせいただけませんか？」

ジョルジュが尋ねた。やはりそこが一番気になる点なのは変わらないのだ。

「わかりました」

ニーナが頷くと、出撃前にマルスに話したことと同じことをその場の皆に伝えた。

「そんなことが……」

事情説明を受けたホルスが二の句が継げなくなる。もつともそれは、アカネイアの臣であるミディアやジョルジュも同じだった。

「…国を滅ぼした宿敵に生命を救われるとは、何とも不思議な縁ですね」

「ええ、本当にね」

ジョルジュの自嘲気味な発言に、ニーナも苦笑しながら頷いたのだった。

「と言うわけで、ニーナ様とカミュ將軍を引き合わせたい。結果、無駄な血が流れずに済めばそれでいいし、そうならなかったら改めて攻めるだけだ」

「成る程」

納得したようにハーデインが頷いた。

「では、私も護衛に加わろう。大陸最強との呼び声も高い騎士だ。どのような結果になるかわからないが、一目拝んでおきたい」

ハーデインがそう言って、護衛に加わることに立候補した。

「我らも当然」

「お供します」

「宜しいですね、ニーナ様」

「ええ」

ジョルジュ、ミディア、ホルスの申し出を断ることもなく、ニーナが頷いた。

「すぐにアストリアも呼びます。それまでお待ちいただけますか？」

「わかりました」

「ありがとうございます」

叩頭したミディアは言葉通り、すぐに伝令を遣わせてアストリアを呼び寄せた。

「それではニーナ様、参りましょうか」

「はい。宜しくお願ひしますね、マルス」

「お任せください」

コクンと頷いたマルスたちを先導し、その周りを固めるかのようにアカネイアの臣下の者たちとハーディンが動き出した。

「カイン、アベル、僕たちが戻ってきたときにすぐに軍を動かせるように手配しておいてくれ」

「わかりました」

「お任せください」

「うん、頼むよ」

カインとアベルは深々と頭を下げ、一行を見送ると、すぐにマルスに指示された通りに動き出したのだった。

「カミュ将軍！ 私はアリティアのマルスです。あなたに話があります」

カミュからほど近く、お互いの声が聞こえるところまで近づいたところで、マルスがカミュを呼んだ。

「マルス王子か……」

一騎の騎兵が少し前に進み出てくる。そして、

「私がグルニアのカミュだ」

と、自己紹介をした。

「カミュ将軍、できればあなたとは戦いたくない。あなたにはこの戦いの無意味さがおわかりでしょう」

現れたカミュにマルスは説得を始める。だが、

「……ドルーアの野望に我が祖国グルニアが加担した以上、私も栄光あるグルニア騎士団の一員として最後まで戦う義務がある」

返ってきたのはある意味予想通りであり、望まない答えだった。

「しかし……」

カミュの返答を聞いてもマルスは諦めきれないのか、なおも食い下がろうとする。だが、

「マルス王子、もう遅すぎるのだ…」

憂いを表情に乗せ、カミュが首を左右に振った。

「私は、君にとつても父上の仇。ここはいさぎよく、剣を合わせてみようではないか」

返答内容、そしてその纏う雰囲気から説得は絶望的だった。誰もが仕方ないと半ば諦めかけたところで、真打が現れた。

「待つて、カミュ！」

「ニーナ様…」

前線に出てきたその姿に、流石のカミュも驚きは隠せない。

「ニーナ様…」

「マルス、私に話をさせて」

「わかつています。宜しくお願いします」

「ありがとう」

マルスが少し下がり、入れ替わるようにニーナが前に出てきた。

「カミュ、私はあなたのおかげで生き延びることができ、そしてマルスのおかげで祖国を再興できました。その二人が争うことは私には耐えられません」

「……」

「どうかお願いです、カミュ。私たちに……いえ」

そこで一旦言葉を区切る。そして、

「私に、もう一度力を貸してください」

一期一句区切るように口に出し、そう訴えかけたのだった。しかし、カミュの口から返ってきた返答は、

「……すまない」

ニーナが望むものではなかった。

「カミュ……」

それでも諦めきれないのか、叱咤するようにニーナがカミュの名を呼ぶ。が、

「……かなうことなら、あなたの願い通りにしたい。だがそれは、滅亡を目の前にした国を、王を見捨てることになる。それは、騎士である私の全人生を否定するのと同じことだ」

「カミュ……」

先ほどと違い、か細げな、力ない言葉が風に乗った。

「私は騎士として生き、騎士として死ぬ。それ以外に私の歩く道はない」

「……ここにハッキリと、カミュは訣別を宣言する。そして、

「さらばだ、ニーナ姫。どうか幸せになつてほしい」

と、最も残酷といえる別れの言葉を返したのだった。

「…短い間だったが、楽しかった。あなたと過ごした日々は、忘れない」

「……」

ハツキリとした訣別の言葉にニーナはそれ以上もう何も言えなかった。俯き、足早に下がっていく。

「ニーナ様！」

その後を、ハーディンたちが追った。マルスも後を追いかけてしようとするが、その前にもう一度振り返つてカミュを見る。

「……」

その真つ直ぐな瞳を生涯忘れることはしない。マルスはそう心に誓い、ハーディンたちの後を追つたのだった。

「王子、只今戻りました」

「ご苦勞様、アベル」

後方から戻ってきたアベルに、マルスが勞いの言葉を掛ける。

「ニーナ様のご様子は何？」



ハーディンがアベルに尋ねた。

「気はしつかりとお持ちになられています。ただ、やはりショックが大きいのでしょうか。顔色は悪く、終始俯いておられました」

「そうか…」

ニーナの様子を報告され、ハーディンも沈痛な表情になった。

「無理ありません」

後を継ぐように、ミディアが口を開く。

「生命の恩人と、戦わなければならぬのですから」

「うむ…」

ハーディンもそう答えるのが精一杯だった。ジョルジュ、ホルス、アストリアといったアカネイアの旧臣たちも主君の心情を慮ったのか、皆、一様に暗い顔をしている。

「でも…」

マルスの言葉に、その場にいた全員がマルスに視線を向けた。

「厳しいことを言うようだけど、このまま有耶無耶にするわけにはいかない。ニーナ様には申し訳ないけど、彼は…カミュ將軍とはこの場で決着をつけなければ…」

「そうだな」

重々しく頷き、ハーディンもマルスの意見に賛同した。

「これも戦場に生きる武人の定め。彼をこのままにしては、いずれ必ずこちらが手痛い目に遭うことになる。そうなる前に危険の芽は摘んでおかねばな」

「気は進まないけどね…」

「全くだ…」

顔を見合わせたマルスとハーディンは、お互い苦笑せざるを得なかった。

「ではマルス殿、どう攻める」

「うん、そうだね。小細工が効くとは思えないから、こういうのはどうかな…」

そしてマルスが作戦を披露し、指揮官たちはそれに賛同したのだった。

「では各自、持ち場についてくれ」

『はっ！』

「了解した」

『お任せを！』

指揮官たちは各自返事を返すと、マルスの作戦通りに展開する。その様子を見ながら、一方でマルスは遙か彼方に佇むカミュに視線を向けた。

(こんな巡り合わせでなければ…)

頼れる仲間になつていたかもしれない。しかし、それは考えても仕方のないことである。迷いを断ち切るかのように首を左右に振ると、マルスはその時を待ったのだった。

「む」

解放軍の進撃を待つカミュが、己の攻撃範囲に入った敵兵の姿を捉えた。

「ジェネラルか…」

その分厚い装甲を見て、敵兵の兵種を確認する。防御能力に長けたジェネラルは、普通の攻撃ではダメージを与えるのは困難な相手である。だが、

「可哀想なことだが、私には無意味なことだ。私にこの、グラディウスの槍がある限りはな」

馬の腹を蹴ると、カミュがゆっくりと馬首をそのジェネラルへと向けた。そして、グングンとスピードを上げてそのジェネラルへと迫り、そして、

「はああああっ!」

直間両様のアカネイア王家の三種の神器の一つであるグラディウスをそのジェネラルめがけて投擲した。

「っ!」

その鋭すぎる穂先にすんでのところ、貫かれそうになりながらもジェネラル…ホルスが何とかかわした。

「チッ!」

ホルスの身体を捉えられなかったことで舌打ちを打ちながらも、カミュは混乱していた。防御能力に長けたジェネラルはその反面、機動性を犠牲にしている。であれば、あんな動きができるわけがなかったからだ。

しかし、現実にはギリギリとはいえホルスに攻撃をかわされたのである。

(どういうことだ!?)

戸惑いながらも臨戦態勢に入ったカミュだったが、すぐにその理由はわかった。何と、ホルスは武器を持っていないのだ。つまり、完全な壁役、囷役としての役割を与えられていたのである。

武器を持っていないからこそ、防御や回避に徹することができ、そして先ほどのように避けることができた。加えて、武器を持たないことで敏捷性も上がり、カミュをもつてしても連続攻撃に移ることは不可能だったのである。

(しまった!)

後悔したが時すでに遅し。左右からメディアとハーディンがほぼ同じタイミングで襲い掛かってきたのだ。

「ふっ!」

「やあっ!」

「くっ!」

二人の剣、そして槍の攻撃を何とか凌ぐカミュ。二対一の戦いで、なおかつハーディンとミディアを相手にしながら互角に戦っているカミュは、やはり大陸最強の形容詞も伊達ではない強さだった。

しかし、カミュの相手をするのは彼らだけではない。

「そらっ！」

間隙を縫うようにジョルジュが弓を射かけ、

「参るー！」

アストリアも一撃離脱の戦法で襲い掛かってくる。

「ちいっ！」

とてもではないが全て捌ききれるものではなく、回避行動も駆使してカミュは防御に徹する。だがそれでも、カミュほどではないにせよ一流の戦士たちの連携攻撃に傷を負った。

「ぐっ！」

傷口から噴き出し、滲み出る血と痛みにカミュが表情を顰める。四人はカミュから距離を取って散開すると、ジリジリと包围網を形成して油断なくカミュの一挙手一投足を見張った。

(「」のままでは…)

すぐ目の前に迫っている己の迎えるべき運命に思い至り、カミュが険しい表情になった。だが、それも一瞬。

（フツ、何を考えている。この道を往くと決めた時に、こうなることはわかっていたはずではないか。ならば！）

カミュの表情から焦燥や迷いが消えた。

（せいぜい付き合ってもらうぞ、私の死に戦にな！）

そしてカミュの最後の戦いが始まる。

『生命の最期の煌めきが宿ったかのようなカミュ將軍との戦いはそれまで以上に激しくなった。だが同時に、見ほれるほど美しかった』

後年、ミディアがこの時の戦いのことを聞かれて述べた感想である。それほどの獅子奮迅振りと、生命を燃焼させる煌めきを、このときカミュに立ち向かった将たちは感じていた。

だが、多勢に無勢。火事場の馬鹿力も何時までも続くことはなく、更に解放軍にはカインやアベルなどの援軍も駆け付けた。そして…

「はあっ…はあっ…はあっ…」

息も絶え絶えになりながら、それでもカミュは戦う意志を失ってはいなかった。戦闘

不能になるような重症こそ未だに負っていないとはいえ、全身から血を吹き出しながらも未だに倒れないその姿は、正しく鬼神のようなものだった。

「くそっ！」

焦れたようにカインが吐き捨てる。

「流石は大陸最強の呼び声が高いだけはあるぜ。まだ倒れないか」

「落ち着け、カイン」

カミュを油断なく見据えたまま、アベルがカインをたしなめる。

「焦っては勝てるものも勝てなくなるぞ」

「わかっているよ。けど、こっちだってあまり余裕はないぜ」

「わかっている」

アベルが頷いた。既にこの場にはジョルジュとアストリアの姿はない。騎馬の機動力を生かした突進攻撃を回避できず、二人は救援の兵に連れられて後方へと退かされたのだ。致命傷というほどひどい傷ではないけれども、戦闘を続行するのはほぼ不可能と言ってもいいほどの深傷だった。少なくとも、この戦場にはもう戻ってこれないだろう。

騎馬の機動力に対抗するのはやはり騎馬ということ、退いたジョルジュとアストリアの代わりにハーディン直属のウルフとザガロが牽制役として前線に出てきていた。

二人とも騎馬弓兵であるため、距離を詰められないようにハーディンたちよりさらに下がった位置で油断なくカミュを見据えている。そして上空には回避しているシーダの姿もあつた。彼女も牽制役として先ほどより加わっているのである。

地の利……というのは正確な表現からすると少し違うかもしれないが、上空を抑えられたことはカミュにとっては非常に痛く、解放軍にとつては非常に有利だった。流石の大陸最強と言われる黒騎士も、重力に逆らつてグラディウスを投擲してもシーダには届かない。到達距離に達する前に重力に負けて勢いを失い、そのまま落下してしまうからである。対するシーダは上空から手槍を投げれば、これまた重力に引かれて勢いを増し、非力な彼女の腕力を充分にカバーする威力の手槍となつて地上に突き刺さることになつた。

上空を塞がれ、周囲を包囲され、援軍もない。流石の大陸最強の黒騎士もこれでは如何ともしがたく、運命の時間は着実に近づいていた。だが、

「……」

満身創痍になり、肩で呼吸を繰り返しながらも、その目だけはまだ死んでいなかった。

(流石は大陸最強と謳われるだけはあるわね……)

ミディアが辟易ともお世辞ともつかない複雑な心中でそう思った。表情にこそ出さずことはしていないが、彼女も実は体力的には限界に近かつた。性差を言い訳にはしたく



はないが、やはり女の細腕で大陸最強と謳われる騎士と渡り合うのは非常に厳しいものがあつた。何度弾き飛ばされて地面に叩きつけられそうになつたかわかりはしない。それでもジョルジュやアストリアと違って退却せずに済んでいるのは、馬術の腕で回り込まれるようなことや突撃を防いでいたからである。でなければ、恐らく一番早くこの戦場から離脱していたであろう。とは言え、いつまでもこの膠着状態にいるわけにもいかない。カミュも満身創痍だが、こちらもだんだん被害が広がっているのだ。

(…仕方ないわ)

多少の犠牲は必要経費と割り切るしかない。ミディアはそう覚悟を決めて動き出そうとした。が、

「待たれよ」

ミディアの雰囲気から彼女が何をしようとしたのか察知したのか、ハーディンがその行く手を遮るようにスツと右手を差し出して、ミディアの進行を遮った。

「ハーディン公…?」

行く手を遮られ、ミディアはどうして? といった様子でハーディンに視線を向ける。

「カミュ將軍はもう虫の息だ。ミディア殿が出るまでもあるまい。私に任せてはくれぬか?」

「しかし……」

ミディアが口籠もった。決してハーデインの実力を軽んじているというわけではない。だが、手負いの獅子は思わぬ力を発揮する。窮鼠猫を嘯むという言葉もある。ミディアが危惧しているのはまさにそこだった。

「ハーデイン公の実力は良く存じています。しかし、万一のことがあつては……」

「お心遣いは痛み入る。だがな」

ゆつくりと、ハーデインはカミュへと振り返った。

「あの有様ではもう長くはもつまい」

「ですが！」

「それにな」

ミディアの言葉を遮るようにハーデインが続けた。

「武人として、最期は正々堂々と送つてやりたいのだ。それがここまで奮闘してきた彼の将軍に対する礼儀だと思ふ」

「……」

そう言われ、ミディアは口籠もつてしまう。女騎士であるミディアにはそういった感情は正直よくわからない。ではあるが、カミュに対してそれなりの礼儀を示すのは理解できた。

「…お任せして宜しいのですか？」

多少の逡巡の後、ミディアが決意を固めた。

「うむ」

「わかりました。では、お任せします」

「すまない」

「いえ」

軽く叩頭すると、ミディアは馬を下がらせた。既に手は回していたのか、カイン、アベル、ウルフ、ザガロも、上空にいるシーダも攻撃を仕掛けようとはしなかった。

そのままハーディンは馬首を進め、カミュと向き合う。

「お待たせした。ここからは私がお相手しよう」

「…貴公は？」

大分呼吸が整ってきたとはいえ、それでもまだまだ多少は肩で息をしながらカミュが尋ねた。

「オレルアンのハーディン」

「成る程。貴公が天下に名高い草原の狼か」

ハーディンの名を聞き、カミュが再びグラディウスを構える。

「相手にとって不足なし」

「ならば、いざー！」

ハーディンも槍を取った。どちらかと言えば槍技より劍技の方が得意なハーディンだが、劍と槍とのリーチ差を考えれば、今回は槍で挑まざるを得なかった。普通の槍だったらいざ知らず、カミュが手にしているのはグラディウス。直間両様のアカネイア王家の三種の神器の一つである。懐に入ってしまったえば確かに劍の方が有利だろうが、グラディウスとカミュのコンビの前にそんな真似ができると思うほどハーディンは自惚れてはいなかった。

「参る！」

「おおー！」

両雄は馬を走らせると、お互いの中間地点で斬り結んだ。激しい金属音が鳴り響く中、一合、二合と斬り結んでいく。そして、

「がはっ！」

ハーディンの槍がカミュの腹部を貫いた。咯血しながらカミュはその槍を握り、顔を上げてハーディンを見上げる。

「見事」

「いや……」

その賛辞に、ハーデインは悲しそうに首を左右に振った。その理由は、カミュの全身に無数に刻まれた切創にある。

「お互い万全の状態であれば、勝ったのは貴公でしょう。私が勝てたのは貴公が手負いであればこそ」

「武人が戦場で傷を負うのは当然のこと。そして、機を逃さぬのも当然のこと。貴公にそれだけの天運と力があつた。そして私にはなかつた。それだけのことだ」

やがて、ハーデインの槍を握っていたカミュの手から力が抜けた。

「ニーナを…頼む」

「身命を賭しても」

「ありがとう…」

最期の力を振り絞ってカミュは己の身体に刺さつた槍を引き抜くと身を翻し、そのままヨロヨロと馬を走らせ、その馬上で目を閉じた。直後、乗り手を失つた馬は主人に殉じるかのように、主人を乗せたまま崖から身を躍らせたのだつた。

「追いますか?」

ザガロがハーデインの脇に肩を並べると、主に尋ねた。

「いや…」

それに対し、ハーデインは首を左右に振る。

「この下は確か、険しい峡谷だったはずだ」

ゆつくりと馬を進めると、カミュの馬が身を躍らせた崖淵からハーディンは眼下を見下ろした。今自分が言ったように、崖の下は切り立った険しい峡谷となっており、底部には大きな河が流れていた。

「…あの傷では生きてはおるまい。それに、あれだけの勇将の亡骸をわざわざ辱めることもないだろう」

「では…」

「うむ」

ハーディンは馬首を返すと、カミュの手から滑り落ちたグラディウスを手を取った。

「これを取り戻しただけで十分だ。急いでマルス殿と合流するぞ」

『ハッ！』

ザガロ、ウルフが返事を返す。こうして、大陸最強と謳われたブラックナイツ・カミュとの死闘は幕を閉じたのだった。

「ロレンス将軍、お待ちください」

グルニア城城門前。ほぼすべての敵を制圧し、解放軍は最後の敵に立ち向かっていた。城を護るのはグルニアの誇る名将、ロレンス。そう、この戦いが始まる前にカミュ

と話し合っていたあの将軍である。

「貴公は…アリティアのマルス王子か」

一歩前に進み出てきたマルスを見て将と感じ取ったロレンスが、マルスに話しかけた。

「はい。タリス王から将軍のお話は伺っております」

マルスが恭しく頭を下げる。

「将軍はグルニアがドルーアに加担することに最後まで反対しておられたと」

「うむ…」

険しい表情になってロレンスが頷いた。

「ならば僕たちは共に戦えるはずです。将軍、どうかドルーア打倒のため力をお貸しく  
ださい」

「…すまぬ、マルス殿。儂はグルニアの将軍。祖国を裏切ることはできぬ」

「将軍…」

マルスにしてみればロレンスの気持ちはよくわかる。そしてロレンスも、未だに心は  
揺れ動いていた。天秤の針がどちらに振れるかは、今はまだわからない。

「どちらに正義があるかは承知している。だが儂は、最期までグルニアの将でありたい  
のだ。こうなった上は己を殺し、祖国のためにこの場で戦うのがせめてもの…」

「將軍、お待ちください」

ロレンスの決意をマルスが押しとどめる。それは、揺れ動くその心情を察知したからか、それともただの偶然かはわからないが、それでもマルスにはまだ望みがあるように思えたのだ。

「そんな戦いが祖国のためになると本当にお考えですか？」

「む…」

痛いところを突かれ、ロレンスが反論に窮する。

「非礼をお許しください。ですが、あなたはグルニアの将です。あなたが戦う理由はグルニアの未来のためではなく、あなたが今戦っているその場所から、グルニアの未来は見えるのですか？」

「そうです、將軍！」

「ん？」

「え？」

突然の乱入者に驚いてマルスとロレンスが顔を上げると、そこには舞い降りてくるシーダの姿があった。

「シーダ」

「なんと、シーダ姫か」



思いもかけぬ再会に、ロレンスも驚きを隠せない。

「はい、お久しぶりです、將軍」

「美しくなられましたな。昔、貴方の御父上にはお世話になりました」

「將軍、あなたはグルニアがドルーアに味方するのは反対だったのでしょうか？　なぜ、止められなかったのですか？」

シーダが尋ねた。

「今のグルニア王はとても気弱な方でしてな。強大なドルーアの力に恐れをなしてしまわれたのです」

「將軍！　ドルーアのママクートによって人間を支配することにあるのです！　グルニアのためにも、そして世界中の罪のない人々のためにも、ドルーアの野望を止めなければいけません。どうか將軍、戦いをやめて私たちに力をお貸しください」

「うむ…：話はわかるが、やはり儂はグルニアの將軍。祖国を裏切るわけには…：」

「…：將軍にとつて、祖国とは何ですか？」

尚も逡巡するロレンスに、シーダが語り掛けた。

「何…：とは？」

「たつた一人の王さまのことなのですか？　その国に生きる無数の民のことではないのですか？」

「む、むう……」

再び返答に窮し、ロレンスは二の句が継げなくなってしまう。

『国は王のためにあるのではない。そこに生きる民のためにある』父の口癖です。例え王さまを裏切ることになっても、それがグルニアに生きる無数の力なき民のためなら、將軍、あなたは決して祖国グルニアを裏切ることにはならないはずです」

「……ふ、ふふっ」

シーダの説得の後、少しの間黙っていたロレンスだったが、不意に笑い出した。

「將軍?」

「どうされました?」

シーダとマルスがロレンスの様子を窺うようにに尋ねてきた。

「…困ったものだ。心の迷いを、ここまで見事に言い当てられるとは」

マルスとシーダの説得に、自嘲気味にロレンスが呟いた。だが、それもほんの一瞬。すぐにいつもの、しかしどこことなく迷いの晴れた表情になっていた。

「だが、貴公の言う通りだ。グルニアの未来を思うならば、儂が立つべき側は断じてドルーアなどではない」

「將軍、では?!」

「うむ。マルス殿、そしてシーダ姫。儂は貴公たちにお味方しよう。我が祖国の明日の

ため、我が祖国を護るために」

「ありがとうございます、将軍！」

「ありがとう、ロレンス将軍！」

こうして、二人の説得によりロレンスは解放軍に加わることになった。

(カミュ将軍、農は農の道を往く。許せよ)

空を見上げてこの戦いの前のことを思い出すと、ロレンスは解放軍にグルニア城を明け渡したのだった。

「ニーナ様」

グルニア城を無事制圧して戦後処理に追われる中、その合間を縫ってマルスはニーナの許に赴いていた。

「マルス……」

ニーナが振り返る。戦いには勝つたのだが、その表情は晴れない。それどころか、沈んで見えた。

「申し訳ありません。お望みを叶えることができませんでした」

ニーナの憂鬱の原因であり、マルス自身も気に病んでいたことについてマルスが謝罪

した。

「いえ、マルス。あなたにも苦しい思いをさせました…」

ニーナが左右に首を振ってマルスをいたわる。

「ごめんなさい…。本当に、ごめんなさい…」

「……」

こんな弱々しい姿のニーナは初めて目にするとあつて、マルスも何も言えずに俯くしかなかった。

「本当はね…マルス、きつとこうなるだろうと思つていたのです。あなたに炎の紋章を託したときからこうなるだろうと…」

「えっ?」

どういふことかわからず、マルスが思案顔になった。

『『アルテミスの定め』』という伝説を知っていますか?」

「いえ…」

初めて耳にする言葉に、マルスは素直に首を左右に振った。

「ファイアーエムブレムによつて王家が蘇るとき、その代償としてもつとも愛する者を失う…。かつてメデイウスが現れた時、アルテミス姫はあなたの祖先アンリ一世と深く愛しいながら、ついに結ばれることはありませんでした。そして、私の時は…」

「ニーナ様…」

何を言わんとしているのかわかり、マルスが何か言葉を掛けようとした。が、出てこない。こんな時に何と言葉を掛ければいいかわからないのだ。

「だめですね、私は」

自嘲気味にニーナが口を開いた。

「マルスはアリテイアで悲しい思いをした時も毅然とした態度をとったのに。私は、この現実を受け止められていない…。でも今少しだけ、ほんの少しだけ…自分に正直でいさせてください」

「仰せのままに」

こうまで言われては、マルスとしてもそれ以上何も言えなかった。

「少し席を外します。何かありましたらお呼びください」

「ありがとうございます、マルス…」

マルスは深々と頭を下げると、部屋から出て行った。それとほぼ同時に、ニーナの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「うっ…カミュ…どうして…ううっ…うううっ…」

人知れぬニーナの慟哭は、この後も暫くの間続いたのだった。

グルニア城近郊、海へとつながるとある河の河口付近。

その流れに流されていく人影があった。死んでいるのかピクリとも動かずに押し流され、どんどんと下流へと向かっていく。そしてその人影が、海へとつながる砂浜へと出たところで、それは起きた。

「ククククク…」

どこからともなく現れた黒い影が、その人影に近づいていく。そして…

## NO. 24 純粹ゆえに

激戦と形容する以外に相応しい言葉が見つからないグルニア軍との決戦に勝利した解放軍。

補給や休養、取りあえずの国内統治の問題など、山積する問題を片付けるのに少し日数を費やすことになった。

無論、その間にドルーア：そして、グルニアなき今唯一ドルーアに与しているマケドニアから攻めてくることも予想されていたためそれに対抗する手段も抜かりなく手配していたのだが、その心配は杞憂に終わった。ドルーア、マケドニア共に攻めてはこなかったのだ。

この件については、解放軍内でも様々な意見が飛び交っていた。

『戦力が整っていないのだろうか』

『様子を見ているのではないか』

『ドルーアとマケドニアの間で連携が取れていないのではないか』

『まだ、情報が伝わってないのでは？』

『攻めるより待ち受ける方を選んだのではないか？』

色々な意見が飛び交ったが、どれもすべて憶測でしかない。全て正しいかもしれないし、全て間違っているかもしれない。どちらにせよ、当事者ではなく部外者である解軍にはそういった敵の内部事情はわからぬところである。

ともかくにも、態勢を整える時間を得て、解放軍は陣容を立て直した。重傷者も少しずつ復帰しており、兵も指揮官も戦力不足を解消とまではいかないが、大分カバーできるようになってきていた。

そして何より、日を追うごとにニーナの様子が落ち着きを取り戻してきていた。直接明かされたマルスしか知らぬことではあるが、想い人であったカミュを失い悲嘆にくれていたニーナだったが、それでも解放軍の盟主たる自覚は持っていたのか、日を追うごとにいつもの姿に戻ってきていた。

もつとも、内情を知っているマルスには、ニーナが無理をしているように見えて仕方なかったが、本当に無理をしているのか、それとも内情を知っているからこそそう見えてしまっているだけなのかはわからないところである。マルスも流星にそのことを突っ込んで聞くようなデリカシーのない行いは慎んでいた。

そんなこんなで、少なくとも表面上は落ち着いた解放軍はいよいよグルニアから軍を進める。次なる目標は、ドルーアのもう一つの同盟国であるマケドニア。ミネルバ・マリアの王女姉妹と、パオラたち三姉妹やレナ・マチス兄妹の故国である。だがその前に、



後顧の憂いを断つため解放軍はグルニア国内に残る残存勢力の鎮圧へと向かうことにした。そして、その中の一つである東の山脈にて、また新たな出逢いを迎えることになるのだった。

「住民どもの抵抗はおさまったのか？」

東の山脈のグルニア軍残存勢力の指揮官であるラリツサが部下に尋ねた。

「それが…あの男が暴れて手のつけようがありません」

その部下の報告に、ラリツサがイラつきを抑えきれなさそうに舌打ちをした。

「他の住民を人質にとればよいではないか！」

「住民どもは、すべてさらに奥の洞窟に隠れてしまい…」

申し訳なさそうに報告する部下に、ラリツサは更に忌々しげな表情になる。

「ええい、もうよい！　今、同盟軍が近くまで来たとの報があつた。まずは奴らを一度撃退する。あのバケモノはそれからゆっくり料理すればよい」

解放軍の到来を知つたラリツサは、住民は一先ず置いて解放軍との戦いに力を注ぐことにした。一方、その洞窟内。怯えた表情で身を寄せ合っている住民と、それを護るかのように仁王立ちしている容貌魁偉の偉丈夫がいた。

「大丈夫かい、ユミルさん」

住民の一人がその大男を慮って話しかける。

「痛くない。気にするな」

振り返った大男がそう答えた。ユミルと呼ばれたその大男は、容貌は勿論だがその話し方や身に着けているものからも他の住民たちとはずいぶんかけ離れた雰囲気を感じていた。

「しかし、わしらを守るために武器を持った兵士たちと……」

「みんな、こんなオラを人間としてあつかってくれただ。だから、守るために戦っただけだ。 気にする必要はねえ」

口調こそぶつきらぼうだし、その容姿も粗野な感じがする大男：ユミルだが、その実は非常に好感のもてる男のようだった。

「すまないねえ……」

そんな住民の言葉に気にするなとばかりに得物を取ると、ユミルは洞窟の出口に向けて歩いてゆく。

「オラ、入口に出て見張っているだ。他の国の軍も来ているらしいだ。でも、みんなを傷つけるヤツはオラが許さねえ」

そんなユミルの背中を、住民たちはありがたいような心苦しいような複雑な表情を浮

かべて見送ったのだった。

「よし、行くぞー！」

『はっー！』

マルスの号令で、各指揮官が走り出していく。東の山脈の残存敵兵力はとある洞窟に逃げ込んでいた。

通称、炎の洞窟と呼ばれるその内部には、煮えたぎるマグマが流れている灼熱の洞窟である。暑さもさることながら、万一その中に落下でもしたら生命はないだろう。故にマルスは、今回の出撃に際して敵との戦い以上にそのマグマに注意するように申し伝えてきた。もう少し言えば、敵との戦いではそれほど悲観的に見てもいなかっただのである。

何故なら、ここにいるのは残存勢力である。そして自分たちは、先日グルニア黒騎士団の本隊との戦いで見事に勝利した。言い方は悪いかもしれないが、残存勢力が本隊以上の強者揃いということはありえないと思っていたからだ。

無論、油断はしてはいない。だが、普通に互しあえば負けるとは思ってはいなかった。そんなマルスの予想通り、戦局は解放軍に有利に進んでいく。

「失せろ」

己の前に立ちほだかる敵兵を一振りて絶滅させ、ガレスは進軍を続けていた。普段からガレスと共に作戦行動を行う人員は殆どいないのだが、今回は完全に一人であった。

ガレスの強さを見込まれて単独行動をマルスに命ぜられていたのである。まあ残存兵力の掃討という任務だけに、ガレスが不覚をとることはまずないだろうとマルスが考えていたというのもあるのだが。そしてその予想通り、ガレスは苦も無く敵兵を屠っていく。そしてズンズンと行軍を続け、遂にユミルたちが立て籠もる洞窟へとガレスは辿り着いたのであった。

(ん?)

その洞窟の入り口に仁王立ちするユミルの姿に、ガレスは不意に足を止めた。

「んん?」

ユミルもガレスに気付いたのか、怪訝な表情になって眉を顰めた。

「貴様、何者だ」

ユミルに向かってガレスが尋ねる。が、

「なんだ、おめえは?」

と、質問に対する返答ではなく、ガレスの質問と同じことをユミルが言ってきた。

「オラ、ここにいます。村のみんなを守っているだ。ジャマすんならおめえも許さねえぞ！」

と、得物を構えて非常にありがたい忠告をしてきた。

「…フン、まあいい」

興味なさげにそう呟いたガレスはその場を後にする。その報告を受けてか、それともただ単に偶然か、その後にマルスがユミルの許を訪れた。

「君は？ ……グルニアの兵士じゃなさそうだけど…」

「なんだ、おめえは？ オラ、ここにいます。村のみんなを守っているだ。ジャマすんならおめえも許さねえぞ！」

先ほどガレスに浴びせた言葉と全く同じことを言い、ユミルはマルスを威嚇した。慌ててマルスがユミルの誤解を解こうと試みる。

「誤解だ。ぼくらはグルニア軍の残党を倒しにきた。君たちを助けに来たんだ」

必死でユミルにそう訴えるマルスだったが、ユミルの警戒は解けない。

「ここにいます連中も、そう言ってみんなを洞窟に連れ込んだだ。でも、そりやウソだっただ…オラ、もうだまされねえ！」

「だますつもりはない。…でも、信じられないのなら仕方がない。とにかく、ここにいては危険だ。村の人たちとどこかに隠れていてくれ。そして、ぼくらの戦いを見ていて

くれればいい。ぼくらが、だますつもりかどうかそれで分かるだろう？」

「…だまって見てると、そういうことだか？」

「ぼくらは、君たちをだまさない。必ず助け出す。それを証明してみせたいんだ」

「…わかっただ。なら、オラは手をださねえ。でも、やっぱりだましたと分かったら絶対に許さねえからな！」

「ああ。それでいい」

マルスは頷くとその洞窟を離れた。今自分が言った言葉が嘘ではないと証明するた  
めに。

その後は特筆することもなく残兵討伐は進んでいった。やはりここまで勝ち進んできた解放軍には残兵ぐらいでは太刀打ちできるわけもなく、終始有利に戦闘を進めてゆく。そして、

「おのれ、われらは負けん。アカネイアごときに負けはせんぞおっ！」

敵将であるラリツサにも難なく手が届き、戦いを挑むことになった。しかし、やはり先だつてのカミュと比較すればその実力差は如何ともしがたく、少しずつ圧倒してゆく。

「ぐわあっ！」

やがて、ラリツサの身体を槍が貫いた。

「お、おのれ…。グ…グルニアが…貴様ら…ごときに…」

無念の言葉を残しながら、ラリツサは絶命したのだった。こうしてここ、東の山脈のグルニア軍残存兵との戦いは終了したのであった。

戦闘後、ユミルが護っていた洞窟からグルニアの民間人たちに事情を説明して解放軍はこれを救い出すことに成功する。

「マルス王子、わしらはグルニア軍の人に護ってやると言われて、ここに来ました。ですが、洞窟に入ったとたん人質として盾にすると言われて…。王子に来てもらえなければどうなっていたかわかりません。本当に、ありがとうございます」

「いえ、ご無事で何よりです。もう先ほどの兵たちは残っていませんので、気を付けてお帰りください」

「はい。重ね重ね、ありがとうございます」

住民たちは何度も礼を言いながら洞窟を後にしたのだった。そして、彼らと入れ違うようにユミルがマルスの許にやってくる。

『！』

その容貌から警戒のために武器を構えようとした側の者たちを制し、マルスがユミルへと応対した。

「マ、マルス王子…あんたの言うとおりでっただ。疑ってすまなかつただ」

実情を知り、姿を現したマルスに非常に申し訳なさそうにユミルが頭を下げた。

「いや、分かってくれればいいんだ」

マルスが意にも介さない様子でそう答える。この辺りの懐の広さは流石に様々な勢力を束ね、後の世に聖王とまで称される器の片鱗であろうか。そんなマルスにユミルも感化されたのだろうか、

「その、おわびになるかどうか わかんねえだが…オラにも手伝わせてくれねえか？」  
と、助力を申し出てきた。

「…ぼくらの軍に参加するということ？」

「んだ」

ユミルが頷く。

「オラはこの国でも一、二を争う力持ちだ。戦いなら誰にも負けねえ、きつと役に立つだ。…でもその、バケモノみたいだっていやがるんなら、無理に…」

最期の方は語尾が鈍るといふか勢いがなくなる。これまでの辛かった記憶を思い出しているのだろうか。だがマルスは、そんなユミルの危惧を払拭するかのよう歓迎の意を示す。

「とんでもない！ 君は、グルニア軍をむこうにまわして大暴れした戦士じゃないか。力を貸してくれるなら大歓迎さ。ぜひ、一緒に戦ってほしい」



「あ……ありがとう。絶対、ぜったい役に立ってみせるだ！」

そしてこの武骨な大男はニコツと笑うとマルスと握手を交わした。こうしてまた一人、頼れる仲間が解放軍に加わったのだった。

東の山脈での残存兵の掃討と住民の救助が完了したことで解放軍は目的を達成し、撤収の準備に入っていた。その最中、

「おお？」

ガレスは誰かから不意に声をかけられた。

（ん？）

振り返る。そこには、しきりに不思議な顔をしてガレスを見ているユミルの姿があった。

（こいつは…）

視線の先にいるその姿に少し驚きながらも、

「何だ？」

と、ガレスがユミルに尋ねた。

「いや……」

ガレスを見ながらも様子は変わらず、しきりに首を傾げながらユミルが口を開く。

「おめえ、さつき会っただよな？」

「ああ」

ガレスが頷いた。

「そうだよなあ……」

ガレスの返答を聞いたものの、それでも不思議というか納得いかないといった表情でユミルがしきりに首を傾げている。

「どうした？ 何か言いたいことでもあるのか？」

フルヘルムの兜の下で、ガレスがいつものように咽喉の奥でクククと笑いながらユミルに尋ねた。と、

「う……ん……」

と、何とも歯切れの悪い返答が返ってくる。

「なあ、しつこいようだけでもう一回聞けど。おめえ、さつきオラと洞窟で会っただよな？」

「ああ」

「うーん……」

しかしユミルは、そのガレスの返答に納得いかないとばかりに腕を組んだ。

「なんだ、何か文句でもあるのか」

ユミルの態度が引つかかり、ガレスが尋ねる。

「いや、文句っていうかよ…」

どういったらいいものかといった表情でユミルがボリボリと後頭部をかきながら、言葉を選ぶように口を開いた。

「なんつーか…さつき会ったおめえと何となく雰囲気が違うような気がするんだ」

（！ コイツ!?）

その一言に、ガレスが笑いを一瞬で引つ込めて真顔になった。といっても、それもフルヘルムの下のことなので誰もが気付くわけはなかったのだが。

「…気のせいだろう」

少ししてガレスが言ったのはその一言だった。

「俺のような格好の戦士など、この軍には他に二人としない。それを考えれば、お前の気のせいだ」

「うーん…」

それでもまだユミルは納得のいかない表情をしていた。そこに畳みかけるようにガレスが続ける。

「それに、先ほどは戦場という場所だ。戦場独特の雰囲気の中では、そういったことはま

まあるものだ。平時と戦時では様子や空気が違うのは当然のことだからな」

「ん、そうだな」

ガレスに諭され、ユミルが頷いた。納得したとも見えるが、この場の雰囲気の流れで、無理やりそう思い込んだとも見える。実際にどちらかはわからないが、何はなくとも取り敢えずユミルは納得したようだった。

「オラはユミルだ。マルス王子に頼んで軍に加えてもらっただ。おめえは？」

「ガレスだ」

「そうか。宜しく頼むだ、ガレス」

「ああ」

「んじゃオラは、他の連中に挨拶してくるだ」

「そうか」

「それじゃな」

そう言つてクルツと振り返り去つて行つたユミルの後ろ姿を、ガレスは暫く厳しい視線で見つめ続けていたのだった。

（奴め…）

ユミルが自分の目の前から去つた後、軍から少し離れた森の中でガレスがフルヘルム

の下で苦虫を嘔み潰していたような表情をしていた。撤収準備真つただ中のため天幕は既に引き払っており、一人でゆつくりできる場所がなかったため、森の中に身を隠していたのである。そして、その脳内に浮かんでいたのはユミルの姿だった。

(まさか気付くとはな…)

驚きとも忌々しきとも取れない表情になってギリツと唇を噛んだ。何に對してかという勿論先ほどのユミルとの件であり、

『なんつーか…さっき会ったおめえと何となく雰囲気が違うような気がすんだ』

の一言であった。先ほどは何とかあしらったものの、実はユミルの言ったことは間違いでなかった。

どういふことかと言えば、今回の戦いではガレスは影を創り、その影が実際に戦っていたのである。つまり、洞窟内でユミルが会ったガレスは影であり、そして今さっき会ったこのガレスは本体なのである。ユミルはその違いに気がついたのだ。何かしら確証があったというわけではなく、本能的なもの、直感的なもので感じたのだろうか。(形は蛮族のような格好だったが、その分直感は優れているというわけか?)

ありそんな話だと思いながら、ガレスはユミルには少し警戒するように己を戒めたのであった。ところで、何故今回は影を創ってそれを出撃させたかという点、単純にガレスの我儘である。

戦場の地形を聞き、そして今回の出撃のメンバーに選ばれたガレスは早々にこうすることを決めていた。

（溶岩の流れる洞窟だと？ そんなクソ熱いところなぞ行けるか！ 蒸し風呂など、ふざけるなよ）

ただでさえフルメールで熱を逃がさない格好なのに、鎧は漆黒のため余計に熱さを吸収してしまふ。この格好のまま入れば当然のように鎧の中はサウナ状態になるだろう。そんなところに進んで入りたがるほどガレスはマゾではなかった。そのため、影に押し付けて自分は天幕の中のんびりとしていたのだ。

（しかし…その差異に気付くとは…）

ガレスは驚きを隠せなかった。とはいえ、既にマケドニアのペガサス三姉妹には自ら種明かししているの、水面下で噂が広まっているかもしれないが、自ら種を明かすと相手に見破られるのはまた気分が違うのだ。

（まあ、この戦いも大詰めのようにだしほぼ絡むこともあるまい。関わらなければどうということもないか）

己を無理矢理そう納得させると、ガレスは言いようのない敗北感のようなものを抱えたまま軍へと戻ったのだった。

## NO. 25 去来する想い

カミュとの決戦を終え、グルニアの残存兵の鎮圧をようやく完了した解放軍は最低限度の休養を取ると、慌ただしくも次の地へと向かった。

次の戦いの舞台はマケドニア。ドルーアと同盟を結んだもう一つの国であり、こちらも大陸最強の呼び声が高い屈強の竜騎士を率いる強国である。加えて、グルニアとは違う点がもう一つ。

それは、解放軍内に同国の出身者が少なからずいたことであつた。レナ、マチスの兄妹は言うに及ばず、ペガサス三姉妹、そして何より、王族であるミネルバとマリア。

彼ら彼女らは個々思うところがありながらもその時を待つ。そして、その決戦の時まではもう少し。

「ミネルバ王女。もうすぐマケドニアの国境です」

マケドニアとの国境にほど近いところまで進軍してきた解放軍。陣中見舞いというわけではないだろうが、ミネルバの許へと訪れたマルスは様子を窺うように話しかけ

た。

「ええ、いよいよですね」

対するミネルバはいつもと変わらずに泰然自若としている。あまりの様子の変わらなさに、マルスが少し面食らったぐらいだった。

「いいのですか？」

そのため、思わずマルスは尋ねてしまった。

「何がでしょうか？」

「母国と戦うことに対してです。戦うに忍びないのなら今回は出撃いたただかなくても……」

「いえ、心配は無用です」

そんなマルスの配慮を、ミネルバは即座に断った。既に心は決まっているということなのだろう。

「王子にお味方したときからこの日が来るのは覚悟していました」

「ですが……」

それでも無理をしていると感じたのだろうか、マルスが続けようとした言葉をミネルバが押しとどめて、その先を言わせなかった。

「……マルス王子は思い違いをしておられる」



「え?」

「父の仇、志を違えたとはいえ、兄やかつての臣下と矛を交える。本当は、戦場になど出たくないのでは、と思つておられるのでしょうか?」

「…違うのですか?」

「いえ、そういう気持ちがないと言えば嘘になります」

ミネルバが首を左右に振つた。だが、すぐにいつもの真つ直ぐな瞳をマルスに向ける。

「ですが、それ以上にこの国の末を決める一戦を他者に任すなど考えられない。マケドニアの過ちは、マケドニアの者の手で正してこそ意味があります」

「兄君と戦うことも?」

そこで少しだけ表情に苦悶が浮かんだことにマルスが気付いた。もつとも、ミネルバは気付いてはいないだろうが。だが、それを振り切るようにすぐに言葉を続ける。

「…兄とは幼い頃より共に育ち、共に武術や勉強を学びました。そして、いつも私の一歩先を歩いていた兄は私の目標であり、あこがれでした。今でも私は心のどこかで兄を敬愛しているのでしょうか。だから…だからこそ、私が兄を倒します。余人ではなく、私自身の手で」

「…そうですか」

これ以上は議論を続けても無駄なことがマルスにもわかった。覚悟を決めた人間にクドクドと論すのは無理なことである。それは、先日のカミュとの戦いでもよくわかっていた。

「わかりました。それでは、マケドニアでの戦いではご協力をお願いします」

「はい、お任せください」

「では、僕はこれで」

「ええ」

一礼して去っていったマルスをミネルバが見送る。と、

「ミネルバ様」

反対の方向から声をかけられた。振り返った先にいたのはパオラ、カチュア、エストのペガサス三姉妹だった。

「貴方たち…聞いていたの？」

「は、はい。そんなつもりはなかったのですけど…」

「つい聞こえてしまって…」

「えっと、声もかけられなかったし…」

申し訳なきように弁明する三人の姿に、ミネルバは年相応の女性らしい柔らかな笑みを浮かべた。

「盗み聞きは感心しないわよ」

『す、すみません!』

三人揃って勢良く頭を下げた。それが可笑しかったのだろう、ミネルバ更に柔らかい表情になって頭を上げるように三人に促した。

「もういいわ。頭を上げなさい」

『は、はい』

「マリアは?」

二人が頭を上げたところでミネルバが尋ねた。

「チキのところにあります」

「そう。…良かったわ、あの子にも同じ年ぐらいの友達ができたみたいで」

「まあ、年恰好が似たようなだけで、向こうは実際もう何十年も生きていますみたいですよ」

「細かいことはいいのよ」

「あは、そうですね」

そうして四人でクスツと笑ったがそれも一瞬だった。

「…貴方たちは、次の戦いはどうするの?」

ミネルバがゆつくりと口を開いた。

「直接の相手になるのはマケドニア竜騎士団だけど、竜騎士団と白騎士団は交流がなかったわけではないわ。顔見知りもいれば、同僚、縁者や共に鍛えあつた者もいるでしょう。そんな人たち相手に戦える？」

「それは…」

エストが沈んだ表情になった。ミネルバの言うところには十分思い当たる節があるからだ。もつとも、祖国と袂を分かつた以上、遅かれ早かれいずれはこうなることはわかっていたからだ。

「……」

カチユアも口を真一文字に結んで何も言えなくなつてしまった。自分たちはミネルバの部下として主君についてきた。その覚悟はあつたつもりだが、いざそのことを目の前に突き付けられると心が揺れないというのは嘘になつてしまう。そんな中、

「私たちは、最期までミネルバ様にお供いたします」

そう答えたのはパオラだった。少なからず驚いた表情を向けるカチユアとエストとは対照的に、

「…いいのね？」

と、ミネルバが落ち着いた口調で尋ねた。

「はい」

パオラがコクンと頷く。

「無理はしなくてもいいのよ？」

「そんなことはありません。私たちはミネルバ様の部下。最期まで主人に従うのは当然のことです」

「……」

パオラの宣誓をどう解釈したのか、今度はミネルバが黙ってしまった。と、姉様の言う通りです」

覚悟を決めたように、カチユアがミネルバに同じく誓った。

「カチユア」

「確かに、思うところがないわけではないわけではありません。しかし、だからと言ってミネルバ様の許を離れる気はありません。我々は最期までミネルバ様と共に」

「そ、そうです！」

二人の姉に背中を押される形にはなったが、それでもエストが続いた。

「そりゃあ、知り合いと戦うのは嫌ですけど、そんな思いしてるのは私たちだけじゃありませんから。個人的な我儘が言える状況じゃないのはわかってます」

「あらエスト、随分殊勝なこと言うじゃない」

「ホントね。いつもみたいに駄々こねると思ったのに」

「そ、そんなことしないもん！ もう、ミネルバ様の前で何てこと言うのよ、姉様たち！」  
「ふふっ……」

真つ赤になつてムキになつたエストの姿に、ミネルバが思わず笑みをこぼした。

「ほらあ、姉様たちのせいでミネルバ様に笑われちゃつたじゃない！」

「はいはい、悪かつたわよ」

「ゴメン、ゴメン。怒らないで、エスト」

「もう……。いつつもうなんだから……」

まだ不満タラタラだつたエストだが、それでも主君の前ということもあつて渋々だが矛を収めた。

「ありがとう、三人とも」

一息ついたところでミネルバがパオラたちに礼を言う。

「私はいい部下に恵まれたわ」

「もつたいないお言葉」

「そうです。我々は最期までミネルバ様と共に」

「任せといてください！」

三人三様の返事を聞き、再びミネルバが柔らかなく微笑んだ。

「戦いは程なく始まるでしょう。期待していますよ、三人とも」

「はい」

「お任せください」

「わかりました」

「では、貴方たちも出陣の支度を整えておきなさい。私もマリアの様子を見てから戦いに備えておくことにします」

「わかりました」

パオラの返答を聞くと身を翻し、ミネルバはその場を立ち去ったのだった。

「ふう……」

ミネルバの姿が見えなくなった後、パオラが大きく息を吐いた。

「お疲れ様、姉様」

苦笑しながらカチュアがパオラを労う。

「ありがとう」

パオラも苦笑して返した。

「ミネルバ様、これで少しは気持ちが悪くなってくれればいいけど……」

「ああ、やっぱり」

「え？」

カチユアがそう呟いたことに、パオラが驚いて振り返った。

「さつきミネルバ様に誓ったことだけど、多少なりとも無理はしてたんではよ？」

「…わかったの？」

「そりゃあね」

カチユアが頷いた。

「それぐらいわかるわよ」

「そつか…」

バツが悪そうにパオラが苦笑した。

「ねえねえ、それってパオラ姉様も次の戦いには乗り気じゃないってこと？」

エストがひよいっと首を出して話に割って入る。

「ええ」

パオラが頷いた。

「ミネルバ様にはああは言ったけど、好き好んで自国の人間と戦いたいわけじゃないかな

い」

「そつか。…そうだよね」

「ええ」

「でもさ。それじゃあ何であんなこと言ったの？」



エストのその質問に、

「理由は二つね」

と、パオラが答えた。

「一つは？」

その理由には彼女も興味があるのだろうか、カチユアが尋ねる。

「まずは勿論、ミネルバ様のためよ」

そう、パオラが答えた。

「私たちにああ仰られてたけど、ミネルバ様だつてマケドニアの者と戦うのには抵抗があるはずよ。まして、国王陛下と…ミシエイル陛下と戦うことになるのは絶対に避けられないんだから。ミネルバ様はああいう方だからマルス王子にあんな風に仰られてたけど、絶対に思うところはあらずなの」

「それは…うん、そうでしょうね」

カチユアも姉の意見に頷いた。

「だからね。そんなミネルバ様のお気持ちも少しでも楽になればと思つてああ言ったのよ。部下が覚悟を決めてくれてるってわかつていただければ、ミネルバ様も多少はお気持ち紛れるでしょうから」

「そっか」

「ええ。…ただ、ミネルバ様のことだから私の浅知恵なんかとつくにお見通しで、その上で私たちに気を使って納得した振りをしてくださったかもしれないけどね」

「そんな、まさか…って言いたいところだけど、あり得るわね」

「そ。さつきミネルバ様は部下に恵まれたって仰ってくれたけど、部下としては聡明すぎる上司は少ししんどいわ」

「ふふっ」

パオラの勿論本気ではない、軽口といつていい愚痴に、カチユアがクスリと笑みを漏らした。

「じゃあさ、もう一つの理由って？」

エストが尋ねる。

「それは勿論、貴方たちのことを考えてよ」

「へっ」

「……」

パオラの指摘にエストが首を捻ったが、カチユアは何となくだが姉の言わんとしていることがわかったのか、黙って口を噤み姉の言葉の続きを待った。

「…ミネルバ様が私たちに、自国の者たちと戦えるか尋ねてきたとき、貴方たち口を噤んだじゃない。あの時点で口を噤むってことがどういうことを意味してるか、わからない

わけじゃないでしょ？」

「ええ」

「…うん」

カチュアもエストも少し陰のある表情になってパオラの言葉に頷いた。

「勘違いしないでね、別に責めてるわけじゃないわ。私だって未だに抵抗がないと言え  
ば嘘になるもの」

「え？」

その言葉を聞き、エストがビックリした表情になった。エストとカチュアが口籠もつ  
ている中、パオラだけがいち早く明確に自分の意見を口にしたからだ。

そんなエストに、フツツとパオラが微笑む。

「驚いた？」

「うん。だって姉様、すぐに答えたし。文字通り、とつくに覚悟が決まったのかと思っ  
てた」

「まさか。今言ったじゃない、抵抗がないと言えは嘘になるって。だからね、あれは臣下  
としてはあるまじき行為だけど、ミネルバ様に対して嘘を言ったのよ」

「えっ!？」

エストが先ほどよりさらに驚いた表情になった。パオラは親しみやすいところがあ

る姉だが、エストの知っている限りでは嘘を言うようなことはしないからだ。そんなパオラがあけつぷろげに嘘を言ったと言ったので、エストの驚きは大きかった。

だが、パオラはそんなエストの心情が手に取るようにわかるのだろう。再び柔らかく微笑む。

「だって、私がああでも言わなかったら、貴方たち何も言えなかったでしょう？　そうしたら、ミネルバ様がマルス王子に進言して次の戦場には出させてもらえなかったかもしれない。マケドニアの戦士たちと戦わなくて済むんだったら願ったり叶ったりだけど、ミネルバ様は間違いなく出撃するでしょう。主人だけ辛い目に遭わせて、自分たちだけ後ろでのうのうとしているわけにはいかないじゃない」

「あ」

「ここでようやく、エストもパオラが何か言いたいのがわかった。

「主人だけ戦場に出して、自分たちだけで後方にいるわけにはいかない。だけど、自国の人間とは戦いたくはない。それがわかるからね。まあ、わかっちゃった以上、矢面に立つのはしょうがないかなって」

「…姉様も大概苦勞性よね」

「大体自分の考えていることと同じような理由だったことがわかり、カチユアがしょうがないなどばかりに微笑んだ。」

「ま、仕方ないわよ。それに、貴方だって人のこと言えないんじゃない？」

「そんなこと……」

「ないといいわね」

「う……」

見透かされているように言われ、カチュアが口を噤んだ。そこでまたパオラが静かに微笑む。そして、

「さ、私たちも行きましょうか」

と、二人を促した。

「出撃の準備を整えておかないとね。準備不足で出られませんなんてことになったら、ミネルバ様に会わせる顔がないし」

「ええ」

「うん、わかったよ」

そうして、ペガサス三姉妹も己の持ち場に向けて戻っていった。マケドニア人たちがそれぞれの胸中に複雑な想いを抱かせながらその時は着々と進んでゆく。そして、

「よし、出撃だ！」

そこかしこで鬨の聲が上がり、解放軍は今回の戦いに挑む。

(死なないでくれよ、皆)

戦場にて指揮を執りながら、マルスは切実にそう願っていた。出撃前の軍議で、今回の出撃人員には相手がマケドニアの主力ということで決して無理はしないこと、傷の回復をいつも以上にこまめに行うことを念を押し出撃させた。

先のグルニアの戦いからはもう、敵対各国・各勢力の主力だけしか出てこない。だからこそ、ちよつとした油断が死を招く。現にカミュとの戦いではアストリアやジョルジュと言った一騎当千の猛者たちでさえ深傷を負ったのだ。それを考えれば、慎重になるのは当然のことであつた。そして、そのマルスの心配は的中することになる。

流石にマケドニア軍の主力部隊とあつて、衝突各所では例外なく激戦が繰り広げられていた。これまでの戦闘経験の差か、今のところ有利には展開してはいるものの兵の損耗が大きい。そのため、どの衝突箇所においてもシスターや司祭といった回復役の負担が大きくなつていた。

(それでも…)

マルスはまだ悲観してはいなかつた。いや正確に言えば、ここで負けるようでは話にならないと思つてた。何故ならこの場にはまだ、御大将がいらないからだ。マケドニアの国王であり、カミュと並ぶ名将の誉れ高いミシエイルの姿が。出撃の少し前にわかっ

たことだが、ミシエイルはここではなく、マケドニアの本城で自分たちを迎え撃つ様子だった。つまり言うなれば、この戦いは前哨戦ということになるのだ。前哨戦で負けているようではお話にならない。

(それに…)

マルスはチラツとミネルバたちに視線を向けた。只の先延ばしにすぎないとはいえ、この場では兄妹で血を洗う戦いを避けることができた。まずありえないだろうなとは思うが、それでももしかしたら、先送りにしたことによつて何らかの状況の変化が生じ、戦わなくて済むことになるかもしれない。都合の良い考えだし、そんなことはまず起きないのはわかっている。わかっているが、何事も零ということはありえないのだ。

首の皮一枚以下といえる、本当に一縷の望みを、マルスは捨てきれなくもあり、望んでもいたのだった。それはやはりグルニアでの戦いで悲しみに打ちひしがれるニーナの姿を見てしまった影響によるところも多分にあつた。

そんな思いとは裏腹に、戦いは進んでいく。そして、戦場では出撃前にミネルバの危惧した通りのが起きようとしていた。

「はいっ！」

白騎の長姉であるパオラが剣を振るって奮闘する。返り血をそこかしこに浴び、肩で息をしてはいるが、凌げないほどの状況ではなかった。それは一对多の状況になるようなことをせずに、多対一、少なくとも一对一の状況に持ち込んでいることが大きかった。力や守備面では竜騎士に分があるが、その代わり天馬騎士は速さや技量で竜騎士に勝る。そのアドバンテージを駆使して上手く立ち回り、何とか今のところは持ち堪えていた。

(カチュアやエストがいてくれれば、もう少しは楽なんだけど…)

しかしそれは、高望みだということはパオラにも分っていた。何しろ、戦線はあちこちに分散しているため、人手が足りないのだ。三人で当たるような状況にはなっていない。と、新たな竜騎士が突っ込んでくる。

(新手!?)

その竜騎士が構えた斧を剣で受け止めて鏢迫り合いを繰り広げる。が、その顔には見覚えがあった。

「貴方…」

「!」

パオラの表情が変わったことに気付いた竜騎士が斧を引くと距離をとった。そして、

「どうも」



と、頭を下げる。

「…確か、エストの同期だった子よね？」

「はい」

その竜騎士は再び頭を下げた。

「覚悟はしてたけど…」

戦場らしからぬ、やりきれないといった表情になってふう…と大きく息を吐く。

「こういうのは…本当に気が進まないわね」

「仰る通りで」

竜騎士も頷いた。今鏡を見たら、きつと目の前のこの子と同じような表情をしているのだろうなど、パオラはそんなことを他人事のように思っていた。そして、再び剣を構える。

「念のため、一応、聞いておくけど」

「何でしょうか？」

パオラに相對するかのよう、竜騎士も再び斧を構えた。

「降伏してくれる気は、ない？」

「…愚問ですな」

竜騎士が首を左右に振る。

「であれば、こうして襲撃するはずありませんよ」

「戦いの趨勢が見えていないわけじゃないでしょう？　ここで貴方たちが勝つても、それは局地的な勝利にすぎないわ。大局的に考えれば、いずれはマケドニアは敗れる。それがわからない貴方じゃないでしょう」

「…私は、マケドニア竜騎士団の騎士ですので」

「そう…」

パオラが苦々しい表情になった。説得が失敗した以上、戦いで決着をつけるしかないわけである。それが、例えどれほど望まぬ結果になるとしても。

(どうしようもないのね…)

やりきれない想いを抱えながら、パオラが竜騎士へと突っ込む。

「なら、勝負！」

「承知！」

二騎は再び上空で鏖迫り合いを繰り広げることになった。剣戟の音が何度も響き渡り、そして…

「がはっ！」

パオラの剣が、竜騎士の胸板を深々と貫いた。竜騎士が口から吐血し、その身体から

力が失われていく。

「…お見事。流石、エストが常日頃から自慢していただけたことはある」

「ありがとう。貴方のことは忘れないわ」

「マケドニアを…頼みます…」

「ええ」

安心したように微笑むと、竜騎士はそのまま地面へと落下していった。それを見送る形になったパオラの全身は、小刻みにだが震えていた。が、すぐに顔を上げて前を見据えると、他の援護に向かうために愛馬を滑らせたのだった。

そして、似たような光景は他の戦場でも…

「カチュアか」

「！ 貴方！」

現れた新手の竜騎士の顔を見て、カチュアが一瞬止まってしまった。

「久しぶりだな」

「ええ」

そこにいたのは、自分とは同期の騎士の姿だった。もつとも、同期といってもこちらが白騎士団で向こうは竜騎士団ということもあり、あまり交流する機会はなかったが、

それでも同じ釜の飯を食べた間柄には違いなかった。

そして時は流れ、今お互いは立場を違えて戦場に立っている。味方同士ではなく、敵味方として。

「どうよ？　ちつとは腕が上がったか？」

変わりないその物言いに、カチユアはここが戦場だということも忘れてクスツと笑ってしまった。

「変わりないわね、貴方は」

「あん？」

軽く首を捻った後、竜騎士が肩を竦めた。

「そりやそうだろう。この歳になって性格が激変する方が可笑しいって話さ」

「ふふっ、そうね」

お互い笑い合う。ここが戦場でなければ実に和やかな光景なのだが、ここは戦場。そして二人の間柄は敵味方。

「…それで」

ひとしきり笑ったところで、カチユアが槍を構えた。

「退いては…くれないわよね？」

「…ああ」

竜騎士も斧を構える。

「できればこのまま尻尾撒いて逃げたいところなんだが……まあ、そうもいかないのが宮仕えのしんどいところさ」

「別に無理しなくてもいいのよ?」

「ありがたいねえ。……けど、そういうわけにもいかんのか?」

「……どうしても?」

苦しそうな表情になって問い掛けるカチュアに、竜騎士はふつと息を吐いた。

「逆の立場だったら、どうするんだよ?」

そして、そう尋ねる。

「え?」

「ミネルバ王女を見捨てて逃げたら助けてやるって言われて、お前は逃げんのか?」

「……」

そう言われ、カチュアは何も言い返せなくなってしまう。そんなこと、できるわけがないからだ。そして、説得が不可能なことも同時に悟ってしまった。

「……」

無言のまま、ゆつくりとカチュアが覚悟を決める。

「そうだ、それでいい」

その姿に、竜騎士が満足そうな表情になって頷いた。そして自身もカチュアに向き合う。

「お互いにもう、退けやしねえんだ。だったら、やるしかねえだろうよ」

「わかるんだけどね…」

カチュアが寂し気にクスツと笑った。

「すぐ…よくわかるんだけどね…」

「まだ、躊躇ってんのか？」

カチュアがコクンと頷いた。

「そうかい。だったら…ここで終わりにしてやるよ」

カチュアの返答を目の当たりにした竜騎士がそのまま突っ込んできた。

「ツ！」

突然の突進に面食らったカチュアだったが、何とか気を取り直すと急いで槍を構える。間一髪、斧の攻撃は防ぐことができたものの、得物と臂力の差で軽々と吹き飛ばされてしまった。

「きゃっ！」

吹き飛ばされつつも何とか手綱だけは手放さず、必死に体勢を立て直す。何とか体勢を立て直したその視線の先にいる竜騎士が、寂しそうな視線をカチュアに向けているの

がわかった。

「そんなんじや、この先いずれ討ち死にする。なら、せめてここで終わらせてやるよ」  
そう言つて、竜騎士が再び突つ込んでくる。だが、今度はカチュアも吹き飛ばされはしなかつた。

「ほお…」

甲高い剣戟の音と共に竜騎士が今度は楽しそうに笑う。目の前のカチュアは、先ほどまでとは違つて強い瞳をしていた。やがて、どちらも弾き跳ぶ、弾き飛ばされる形で再び距離をとる。

「肚は決まったかい？」

竜騎士の問いに、

「ええ」

と、カチュアが答えた。

「顔見知りと戦うのは気が引けるけど、だからと言つてこんなところで私も死ぬわけにはいかないもの。それに、ここで私が死んだらミネルバ様に申し訳も立たないしね」

「そうだ、それでいい」

竜騎士が頷いた。

「こつちはミシエイル陛下に従うことを選んだ。お前はミネルバ王女と共に進むことを

決めた。互いに退かない以上はこうするしかないからな」

「そうね」

「ああ、だからよ」

再び竜騎士が得物を構える。

「どつちが勝つても、恨みっこなしといこうぜ」

「ええ」

カチュアも頷いて、同じように得物を構えた。

「悪いけど、勝たせてもらうわ」

「上等。こつちも手加減はしねえぜ」

「望むところよ！」

カチュアが初めて自分から仕掛けた。スピードを生かした鋭い突きを続けざまに放つ。竜騎士はそれを防ぐと、カチュアの脳天めがけて斧を振り下ろした。が、それを最小限の動きで交わすとカチュアは再び距離をとって突っ込む。

お互いの意地をかけた空中での一騎打ちは続く。そして：

「ぐっ！」

竜騎士が呻き声を上げた。その身体には、深々とカチュアの槍が突き刺さっている。



「へへ……」

己の身体を貫いたカチユアの槍を見ながら、竜騎士が力なく笑った。

「負けたか……」

結果を確認した竜騎士が口の端から血を流しながらカチユアを見上げた。

「強く……なったな……」

「ありがとう」

対照的に、カチユアは礼こそ言ったもののまったくの無表情であった。そのことに気付いた竜騎士だが、そこは指摘せずに自分の身体から槍を引き抜くと、そのまま力なく愛竜にもたれかかる。

「お前の勝ちだ。行きな」

「ええ」

「後のことは……頼んだぜ……」

そして竜騎士はそのまま目を閉じ、そして二度とその目を開くことはなかった。

「……」

カチユアはそのまま飛竜の手綱を制御すると、ゆっくりと飛竜を滑らせて近くに降りるように誘導した。その背中の、生命を失った竜騎士が落ちぬように慎重に配慮しながら。

「バカ……」

飛竜が無事に地上に降りたのを見届けたカチユアが、顔を伏せながらそう一言だけ呟く。その身体は、小刻みにだが震えていた。わかつてしまったのだ。一騎打ちの最後の最後、竜騎士が手加減して自分に討たれたのが。何故そんなことをしたのか、それは死んでしまった今はもうわからない。いずれにしてもカチユアが生き残り、竜騎士が死んだという事実だけがこの戦場に残った。

「…行かなくちゃ」

カチユアはそれだけ呟くと、再び新たな戦場を目指した。その目の目尻に光る涙が零れ落ちたのは、本人以外には誰も知ることがなかった。

「せ、先輩……」

また違う空域、エストは襲ってきた竜騎士の姿を見て驚きを隠せなかった。

「久しぶりね、エスト」

竜騎士が微笑みながら答える。その兜の下の素顔を、エストが忘れることはなかった。

「お久しぶりです」

エストが頭を下げる。今日の前にいる人物は、長姉であるパオラの同期の人物で、自

分も大変世話になった人物だった。その後、転属願を出して白騎士団から竜騎士団に配属され、交流は少なくなつたものの、それでも憧れ、尊敬する先輩には違いない人物だった。

「どう？ 少しは強くなつた？」

竜騎士がエストの姿を見てフツと柔らかい微笑みを見せる。

「はい！」

エストが朗らかに答えた。

「その節は、先輩にも色々とお世話になりました」

「パオラの妹だしね。…それにしても」

「はい？」

エストが首を傾げた。

「…本当に申し訳ないけど、貴方、成長しないわね」

「そ、そんなことないですよ。こう見えてもあの頃より腕は…」

「じゃなくって、身体のことよ」

そこで初めてエストは、竜騎士の視線がエストの全身に向けられていることに気付いた。

「パオラの妹なのに…」

「せ、せんぱい……」

哀れつぼく声をかけられ、エストは酷く落ち込んでしまった。あるいは戦いで負けるより余程手痛いダメージを負ってしまったかもしれない。

「幼児体型はあまり変わらないのね」

「そんなことないです！ これでも少しは成長してるんですよ!?!」

「パツと見で変化がわからないようじゃ、それは成長してるとは言わないわよ」

「……酷い」

益々落ち込んだエストに、竜騎士はクスリと笑った。

「せめて姉たちと同じぐらいのプロポーションになれるといいわね」

「うう……努力しますう……」

「……ま、頑張って」

竜騎士が労いの言葉を掛ける。そして、

「さ、構えなさい」

と、得物の斧をエストに向けた。

「……」

「どうしたの?」

得物を構えるように言ってもそうしないエストに、竜騎士が首を傾げた。

「先輩」

「何？」

「私、先輩とは闘え」

その先をエストは言うことはできなかった。何故ならエストの頬を手斧が掠めたからだ。

「う、あ……」

固まってしまい、それ以上何も言うことができなくなるエスト。竜騎士は手斧をキヤツチすると、その穂先を再びエストに向けた。

「次は容赦しないわよ」

「先輩……」

表情一つ変えずそう宣言する竜騎士に、エストはそれ以上何も言えなくなってしまった。

「甘えたことを言ってるんじゃないやありません」

そんなエストに、諭すように竜騎士が話しかける。

「この地で戦場に立った以上、こうなるのはわかっていたはず。貴方、闘う覚悟もできていなかったの？」

「そんなこと……」

エストは目を伏せた。確かに闘う覚悟はあった、それは間違いない。だがそれでも、やはり顔見知りといざ対峙するところになってしまふのはある意味仕方ないことだった。

だが目の前の人物は、そんなことは許さないとばかりに怜悯な視線をエストに向け。その視線にさらされ、エストは魂が凍り付くかのような錯覚に陥ってしまうほどだった。

「生半可な覚悟で出てきたなら、この先生き残ることはできないでしょう。だったらせめてもの慈悲に、ここで終わらせてあげる」

「……」

死の宣告に、だがそれでもエストの心は揺れ動いていた。今までの想い出が次々浮かんできては消えてゆくのだ。それがどうしても、エストの決心を鈍らせた。と、

「しつかりなさいな！」

竜騎士がエストを一喝する。

「先輩……」

「何ですか、その情けない顔は！」

エストの弱々しい表情に思うところはありつつも、それを表に出すことなく竜騎士はエストを叱咤した。

「それでもパオラの妹ですか！ それに、そんな情けない指導をした覚えはありません！」

「でも…」

叱咤されても、それでも煮え切らないエストに竜騎士が荒療治を施す。

「わかりました」

「え？」

「さつきも言いましたけど、貴方はここで終わりなさい。心配しなくても、パオラもカチュアもすぐに貴方のところへ送ってあげます」

「！」

エストの顔色が変わった。

「三人揃ってなら寂しくないでしょう？」

そして侮蔑するように竜騎士がそう言った直後、エストの表情に目に見えて変化が起こった。今までのものから一変、気迫に満ちたもの変わったのだ。そして、得物である槍を構える。

「姉様たちは、やらせない！」

その姿、その表情に竜騎士は満足していた。

（そう、それでいい）

安心すると、侮蔑した態度は崩さずに竜騎士が更に続ける。

「大口を。先ほどまで覚悟もできていなかったくせに」

「私一人ならあるいはまだ躊躇つてたかもしれないけどね。でも、ここで私が墜ちたら私の後ろにいる誰かに危機が迫るわけですから。そんな真似、させるわけにはいきませんから。…それを教えてくれたのは他ならぬ貴方ですよ、先輩」

「そう?」

軽く首を捻つて竜騎士が微笑む。

「ま、いいわ」

そしてまた得物を構えた。

「死ぬ気がかかってきなさい。その後ろにいる誰かを護りたいならね」

「わかつてます! 手加減して勝てると思つている程私は自分の実力を過信してはいないし、先輩を甘く見てもいませんから」

「宜しい」

「行きます!」

そう言うが早いか、エストは猛スピードで突つ込んで槍の刺突を繰り返した。竜騎士はそれを当然のように受け止める。

「攻撃が素直過ぎるわね、相変わらず」



「こつちだつて、先輩を一撃で倒せるとは思つてませんよ！」

すぐに方向転換するとエストは連続で刺突を繰り出した。竜騎士もそれをいなす。こうしてまた、望まぬ戦いが大空で繰り広げられ、そして…

「っー！」

何合打ち合つたことだろう。数など数えているわけもなく、覚えてもいないのでわかるわけではないのだが、エストにとっては飽きるほど長いようでありながら、驚くほど短いような時間が過ぎ、そして…

「あ…」

視線の先には、竜騎士の身体に刺さつた己の槍があつた。恐る恐るエストが顔を上げる。

「お見事」

口の端から血の筋を流しながら、竜騎士がエストを褒めた。

「強く…なつたわね…。流石、パオラの妹だわ…」

「せ、先輩…」

目の前の事実には、エストが泣きそうになる。が、直後に乾いた音が響き渡つた。

「先輩…」

エストが赤みの差した頬を抑え、呆然としながら竜騎士を見ている。竜騎士は変わら  
ずに口の端から血の筋を流しながら微笑んだ。

「しつかりなさいな」

竜騎士がニツコリと微笑んだ。先ほどまでの侮蔑するようなものではなく、見ててほ  
れぼれするようないい笑顔だった。

「勝者がそんな情けない顔するんじゃないの」

「でも……だって……」

エストが泣くのを我慢するかのように顔を歪ませた。これではどちらが勝ったのか  
わからない。

「仕方ない子ね……」

竜騎士は呼吸を乱し始めながらエストを気遣う。

「闘う以上はこうなることはわかっていたことでしょうか？ その結果、貴方が勝ち、そし  
て私が負けた。それだけのことよ」

そこまで言ったところで竜騎士の顔色が変わった。直後、派手に吐血する。

「先輩！」

慌てて側に行こうとするエストだが、竜騎士が押し留めた。

「よしなさい。もうどうにもならないわ。自分でわかるもの」

「先輩……」

「そんな情けない声を出さないの」

そして竜騎士は、自分の愛竜へともたれかかる。

「最後に貴方と戦えてよかったわ」

「先輩……」

「マケドニアを……宜しくね」

「……はい、必ず」

「ありがとう。これで……私も……」

そこで、竜騎士は事切れ、その短い生涯を終えたのだった。そして部下たちがそんなやりきれない想いを抱えている中、主君もまた

「オーダイン将軍」

「ミネルバ様……」

城門前、守将である顔なじみの将の姿に思わずミネルバは声をかけていた。敵将であるオーダインも思わず答えてしまう。

「久しぶりね」

「お久しぶりでございます」

敵将：…オーダインが頭を下げた。

「…兄上は？」

簡潔に、ただそれだけをミネルバはオーダインに尋ねた。

「陛下であれば今は城に。迎撃の準備の真つ最中でしょう」

「そう」

感情のない表情、声色でミネルバが答えた。

「もつとも、その準備を無駄にするのも臣下としての仕事の一つにはなりましようかな」  
そして、オーダインが得物の槍を抜いた。ミネルバもそれに応えるかのようにゆつくりと得物であるオートクレールを構える。この辺り、三姉妹と違つて（少なくとも表面の上は）躊躇がないのは流石に覚悟してこの戦いに臨んだからだろう。

そして、その覚悟を感じたからだろうか、オーダインもミネルバには気付かれないようにフツと微笑んだ。

「参ります！」

「承知！」

そして、二騎は激しい一騎打ちを繰り広げる。お互いに心に去来する思いはあれど、今はその思いを胸にしまい、ただ敵同士として。

見る者を圧倒するような一騎打ちがしばらく続き、そして

「ぐ……はっ……」

オーダインが口から血を吐いて落馬した。力を振り絞りながら顔を上げ、目の前にいるミネルバを見上げる。

逆光で表情を確認することはできなかつたが、何故かその顔は泣いているように見えた。

「お見事……でした……」

「將軍……」

ミネルバも何と答えていいのかわからないのだろう、ただそう呟くことしかできなかった。

「今のミネルバ様であれば、或いは陛下も……」

オーダインがその先を言おうとして止めた。この場面でこんなことを言つてはならないような気がしたからだ。故に、

「マケドニアを……頼みます……」

勝者に後を託し、オーダインはその生涯を閉じたのだった。

「……」

顔なじみの將軍の亡骸を前に、ごく短い時間だけ黙祷するとミネルバは再び飛竜に

跨った。誰も気づかなかつたが、その全身は確かにごく僅かだが小刻みに震えていたのだった。

マケドニア国境での戦いは、解放軍に軍配が上がる。大多数が勝利の喜びに浸るその中で、複雑な想いを重ねているマケドニア出身の面々。しかし、これはまだ前哨戦にすぎない。本番は次なのだ。

本当の決戦まで、後少し。

## NO. 26 三つの頼み

マケドニア国境での戦いを制し、解放軍は進軍を続ける。国境を超え、次に目指すはマケドニア本城。その間、マルスはミシエイルに何度か使者を送ったものの、全て色よい返事が返ってくることはなかった。

「戦うしかないのか……」

やりきれない表情になってマルスが呟く。半ば予想していたことではあるが、それでもそれが現実のものになるとガツカリするのは否めない。とは言え、避けられる戦いではないのは明確なことでもある。であれば、やることは一つ。

「負けるわけにはいかないからね」

色々と考えるところはあるものの、総大将がそう肚を決める中、陣中でも様々な動きはある。周囲が色々動く中、あの黒騎士にもまた少し、ちよつとした出来事があった。

「もつ」

陣中、ちよつとした用事を終えて天幕へ戻るところだったガレスを呼び止める声がい

た。

「ん？」

俺を呼び止めるとは、いつもの物好き連中かと思いながらガレスが振り返ると、そこには予想だにしない人物がいた。

(こいつは…)

頭の中を整理して記憶を呼び起こす。

「…確かグルニアで加わった老將軍だったか？」

「うむ」

そこでその老將軍…ロレンスが頷いた。

「ガレスだ」

カレスもまたいつものように、簡潔に自己紹介する。そして、

「俺に何か用か？」

と、ロレンスに尋ねた。

「特段の用というわけではない」

対してロレンスも簡潔に答える。初対面になるガレスと普通に渡り合うあたりは流石歴戦の勇士といったところだろう。

「ただ、ここに加わってから色々なところでお主の名を聞くのでな。どのような人物か



と思つて訪れてみただけだ」

「成る程……」

ガレスが納得しつつも、どことなく呆れる様子で返した。

「どうせ、その噂というのはどこも確なものではないだろう？」

「うむ」

ロレンスがハッキリ答える。人によつては気分を害する回答ではあるが、ガレスには全く気にならず、それどころか変に誤魔化そうとしたりオドオドしないのが逆に好感が持てた。

「クク、本人を目の前に言つてくれる」

「そうかな？ お主はそんなことを気にするようには見えんが」

「クク、本当に言つてくれるな」

いつものように咽喉の奥でガレスが笑った。

「それで？ 本人を目の前にした感想はどうだ？」

ガレスが尋ねた。

「お主は危うい」

それに対するロレンスの答えがこれである。

「相当な使い手であるのは見ただけですぐにわかる。だがそれ以上に存在自体が危う

い。まるで、気付かぬ間に取り返しをつかなくところまで侵食する猛毒のようにな」

「ほお…」

ロレンスの感想に、中々いい着眼点だとガレスは思っていた。的確に自分を表現しているとも思っている。

（流石は歴戦の勇士といったところか）

ガレスはロレンスの洞察力に内心で非常に感心していた。

「クク、それで？ 危険な俺を排除でもするつもりか？」

「…いや」

少しためらった後、ロレンスは首を左右に振る。

「お主が危険なだけの存在だったらそうしたがな」

「違うとでも？」

「うむ」

「クク、どこでそう判断したことか」

「簡単なこと。お主を悪く言う者だけではなかったからだ」

「ほお…」

ロレンスが言ったその理由に、ガレスが面白そうに呟いた。

「筆頭はマケドニアのマリア王女に、竜人族のチキ…といったかな？ その二人だった

が」

「クク、あいつらはガキだからな。ガキは騙されやすい」

「かもしれない。だが、それ以外にも必ずしも多くはないが、お主に味方する者はいた。その者たちと話し、その情報を聞いて儂なりに総合的に判断した結果、お主は排除するべきではないと、少なくとも儂はそう判断した」

「そうか」

フルヘルムの下で、ガレスがいつものように楽しそうに笑っていた。

「で？ 俺をそう判断してどうするつもりだ？ 何か頼みでもしようともいうのか

？」

「有り体に言えばそうなる」

「何？」

半ばあてずっぽうに言ったことに頷かれ、ガレスが予想外のことには驚いていた。

「…俺に頼みだと？」

「うむ」

念を押してもう一度聞いてみたガレスだったが、やはりロレンスの答えは変わらなかった。

「俺のような危険な存在に頼み事とはな…」

「それだけ、切羽詰まった状況なのだと考えてもらって構わん」

「…フン」

面白くなさそうにガレスが鼻を鳴らした。

「まあ、聞くだけ聞いてやろう。受けるかどうかは俺次第だしな」

「うむ。儂も無理強いするつもりはない。こちらの都合を押し付けるのだからな」

「そう聞くと確かに余りいい気はしないが、下らんおためごかしを使う奴らよりは余程  
ましだ。話してみろ」

「わかった」

ロレンスは頷くと、己の頼みをガレスに語ったのだった。

ロレンスからの頼みを聞いた明るる日、今日の行軍を終えた解放軍はいつもと同じよ  
うに天幕の設営を始める。

無論、ガレスも同じように設営をしていると、その許を尋ねてくる人影があった。

「ガレス」

「ん？」

聞き覚えのある声に顔を上げると、そこにはやはり予想通りの姿があった。

「ミネルバか」

もう何度目になるだろうか、この軍の中では大分濃い付き合いになつてゐる赤い竜騎士の姿があつた。だが、今回は彼女だけである。

「…お前一人か？」

思わずガレスが尋ねてゐた。大体妹のマリアと一緒にいるか、部下の三姉妹のお付きがあるかのどちらかなのだが、今回はどちらもない。ミネルバ一人だけだつた。  
(珍しいこととも…と思つたが、もしかして初めてかもしれない)

「ああ」

それに対し、ミネルバも頷いて答える。

「そうか」

設営の手を止めると、ガレスは立ち上がった。そして、ミネルバと正対する。

「何か用か？」

「用があるから来た」

「ハツハツハツ、もつともな話だ」

楽しそうにガレスが笑つたが、それも一瞬ですぐに笑いを収める。

「ここでは何だな」

ガレスが周囲を見渡す。当然のことだが周囲には一般兵や指揮官がいるために耳目

が集まる。聞かれて困るような用事ではないかもしれないが、かと言って聞き耳を立てられるのはそれはそれで気持ちのいいものではない。

「場所を変えるぞ」

「うむ」

ミネルバを引き連れ、ガレスはその場を後にした。その、妙な取り合わせになる二人組を、周囲は黙って見送ったのだった。

「さて…」

先ほどの場所から少し離れ、少し開けた場所まで来るとガレスが振り返った。

「で、用向きは何だ？」

ミネルバに尋ねる。

「まずは、先だつての戦いで我が部下を助けてくれた礼を」

そう答えると、ミネルバは軽く叩頭した。

（礼？）

何のことか一瞬わからなかったガレスだが、すぐに思い当たる節に辿り着く。ラーマンに攻め入る前のカシミア大橋での戦いの件であろう。

(その件で礼を言ってくると言うことは…)

あのことに ついて知っている可能性が高いかとガレスは思っていた。何しろ、ペガサス三姉妹はミネルバの直属の部下なのである。であれば、知っていると考えた方がよさそうだ。ガレスはそう思っていた。

「さて? 何のことか?」

だがポーズとはいえ、一応ガレスはすつとぼけてみる。が、  
「下らんはぐらかしは止め」

ミネルバはにべもなかった。

「カシミア大橋での一件は部下たちから聞いた。これだけ言えば十分だろう?」

「成る程」

(であれば、あのことも…)

十中八九、知っているだろうなと思いつつガレスがパオラたち三人に思いを馳せた。(奴らめ、ミネルバには報告していたか。…まあ確かに、あの時奴らに牽制目的で出した名前はマルスとハーディンだったからな。あの二人に報告はしていないのであれば、嘘はついてはいないか)

今考えた通り、確かにパオラたちは嘘はついていない。だが、秘密を漏らしたということに関して言えば事実であった。その相手がマルスやハーディンではなくミネルバ

ということだけのことである。

(クク、いずれ少し痛い目に遭ってもらおうか)

心中でそう決めると、ガレスはミネルバに向き直った。

「別に、あいつらを助けたわけではない」

「何だと？」

その言葉に、ミネルバの表情が少し歪んだ。

「どういうことだ？」

そしてその意味を問うべく、ミネルバが言葉が続けた。

「簡単なことだ。あの戦場で誰かが死ぬのはわかっていたから、それを阻止するために

出た。その対象があくまでお前の部下だったというだけのことだ」

「そういうことか」

ガレスの言っていることの意味がわかり、ようやくミネルバは納得いったのだった。

(死の匂い……か)

そしてふと、不意に頭に浮かんだそのことについて考える。自分には理解できない概念だが、ガレスには人の死の運命がわかるらしい。

もつとも、戦場であるのだから人死には日常茶飯事。そこを考えれば、それなりに名のある者や面識のある者が死の運命に直面したときだけ動くことにしているのだろう。



可哀想な話であるが、一般兵の戦死まで助けていたらいかにかガレスといえどもパンクしてしまう。だから、一般兵には可哀想だが、一般兵は切り捨てているのだろう。

（運が良かったと言うべきか）

ガレスがいたことでエストが死なずに済んだことに、ミネルバはそう思っていた。最初こそ、得体の知れない恐ろしい奴だと思っていたし、今も基本その認識は変わっていない。だが、生命を救われたからだろうか、マリアが妙に懐いてしまったため、マリアを危険に晒さないためにも仕方なくガレスと交流を持った。

そうして交流を積み重ねているうちに何となくだがミネルバもガレスの人となりかわかり、距離感も掴めてきていた。

（だからこそ…）

今からとあることを頼もうとするのだが、その前に一つやっておかないといけないことがある。

「そうそう、誤解のないように言っておくが」

急にミネルバの論調が変わった。

「何だ？」

ガレスがミネルバに視線を向ける。その、何度向けられても未だに慣れない真紅の瞳に気後れしそうになるが、ミネルバはそれを表には出さずに続けた。

「さつき部下たちにカシミア大橋の件について聞いたと聞いたが、あれは私の方から無理やり聞いたのだ。決してあの子たちが進んで口を開いたわけではない。それだけは理解していてくれ」

「ほお…」

ミネルバが釘を刺したが、ガレスは瞬時に違和感を感じた。そして、  
(全くの出鱈目というわけではないだろうが、大部分は嘘だろうな)

と、思っていた。実はミネルバが三姉妹からカシミア大橋の件で事前に報告・相談を受けていて、それで実際のところはどんな手を使ったのかを明らかにするために三人をガレスのところに派遣したということは考えられる。

しかし、ガレスがこのことを誰かに報告するのかと三人に尋ねた時のあの三人の反応から、恐らくその可能性は低いと思っていた。あの三人に限らずだが、反応が素直過ぎるのだ。

持つて生まれついた性格か、そういうことが不要な立場だったからかはわからないが、自分に正直というか、反応が素直というか、マケドニアの面々はそういうところが他の連中より垣間見えることが多かった。

(人としては褒められたことだが、上に立つ者としては必ずしもそうではないのがな)  
国を預かる立場になれば正直や素直だけでは到底太刀打ちできない。欺き欺かれて

が通常の世界になる。だがミネルバには、そういったところが見受けられない。  
(惜しいな)

このまま解放軍がこの戦争に勝利することになれば、マケドニアは当然代変わりしてミネルバが国王の座に就くことになるだろう。しかし、今のミネルバでは国王に即位しても一波乱・二波乱あるのではないか。ガレスはそんなことを思っていた。まあ、それを取り越えれば国王として申し分なくなるだろうが、どうなるかは未知数だった。

(まあいい。今こんなことを考えてもどうしようもないことだ)

ウダウダこんなことを考えていても話は進まない。そのため、ガレスはとりあえず話を進めることにした。

「そういうことか」

内心でどう思っているかは表に出さず、ガレスは納得した振りをすることにした。

「ああ。だから、あの子たちをあまり責めないでくれないか。頼む」

「わかった」

ガレスの返答を聞き、ミネルバがホッとしたような表情になる。

(わかりやすいというか、本当に素直な奴だな)

ガレスがそう思っている中、

「では、本題に入る」

と、ミネルバが表情を引き締めた。

「実は、お前に頼みがある」

「頼みだど？」

「ああ」

ガレスの質問に、ミネルバが頷いて返した。

（よくよく頼みごとをされる日だな、今日は）

昨日のロレンスのことを思い出し、ガレスはフルメールの下で声を抑えながら笑った。

「何だ。聞くかどうかは内容によるが、言うだけ言ってみろ」

「うむ……」

ミネルバが頷くと、ガレスに用件を伝えたのだった。

（さて、どうしたものか……）

ミネルバと別れ、設営中の自身の天幕へと戻る間、ガレスは珍しく悩んでいた。脳裏にあるのは当然ロレンスとミネルバからの頼み事である。まさか同じような頼みだとは思わず、ガレスとしては珍しく頭を悩ませていたのだった。

(黙殺してもいいのだが…)

こうやって悩んでいるということは、随分人間らしさを取り戻したものだと思われ、思わず顔がにやける。だが、だからと言って悩みがなくなるわけではない。

(二つともブツチぎつてもいいが…)

さてそれが得策かというところとも言い切れず、ガレスは非常に頭を悩ましていた。と、元の場所に戻ってきたところで、設営途中だった自身の天幕が完成していることに気付く。

(ん?)

誰か物好きがやってくれたのかと思っていたが、その中からひよつこりと顔を現した人物にガレスは驚きを隠せなかった。

「貴様…」

「やあ、ガレス」

にこやかな笑顔を向けたのは何とマルスである。その後ろから、カインとアベルが出てきた。二人はガレスを見た途端、余り気分の良さそうなものではない表情を浮かべる。

もつとも、あからさまに敵意を向けない辺り、オレルアンやアカネイアの連中よりは随分ましではあるが。

「……これは、お前が?」

マルスたちの後ろにある天幕を顎で指示してガレスが尋ねた。その行為に、カインとアベルはムツとした表情を強めるが、

「ああ」

マルスは気にした素振りもせずそう答える。

「用事があつて君のところに来ただけどいなかつたからね。で、設営が途中だったんで勝手にやったんだけど……迷惑だったかい?」

「いや……」

ガレスが首を左右に振った。

「余計な手間が省けてありがたい」

「それはよかつた」

相変わらずのニコニコ顔でマルスが答えた。

(食えん奴だ)

先ほどのミネルバとは全く違った対応に、ガレスは内心で苦笑した。

「それで、何の用だ」

ガレスが尋ねる。

「用もなく散歩に来たというわけでもあるまい」

「まあね」

頷くと、マルスが笑顔を取めた。

「次の戦い、君にも出撃してもらおうから。それを伝えに来たんだ」

「何だと？」

そのマルスの伝達事項に、ガレスが少し驚く。

「城内戦ではないのだろうか？」

念のためにガレスが尋ねた。

「ああ」

「なのに俺の出番があるのか？」

「屋外戦だからって君たちのような重騎士：装甲兵が出ないっていうのはないよ？」

「確かにな。だが、今までは屋外の戦いは機動力の優れる騎馬兵や飛行兵が主力として戦ってきただろう。だから少し気になっただけだ。それに、重騎士なら他にも面子はいらるだろう」

「…まあ、その辺は事情があつてね。あまり詮索しないでくれると助かるな」

「…フン、まあいい」

少しの間、マルスの真意を測るかのようにその様子を観察していたガレスだったが、やがてそう答えた。

「何を考えているかはわからんが、御大将自らの御指名とあれば断ることもできん。このところ暇もしていたしな」

「やあ、よかった」

ガレスの返答を聞き、マルスがホツとしたように答えた。実際にホツとしているのかもしれない。

「それじゃあ、次の戦いでは頼むよ」

「ああ」

了承の言葉を聞いて満足すると、マルスはガレスの天幕を後にしたのだった。そのまま、入れ替わるようにガレスは己の天幕に入ると椅子に身を投げ出して身体を休める。

「ふう……」

そして大きく一息つくくと、今日と昨日のことを思い出していた。

（妙な一両日だったな）

ロレンス、ミネルバ、マルスの三者と顔を突き合わせることが重なるだけでも珍しいのに、その内容がまた珍しいので、ガレスはそう思わざるを得なかった。マルスからの伝達事項はまだ普通のことだったからいいが、ロレンスとミネルバから相次いで頼まれ事を、しかも同じようなことを頼まれるとは思わなかった。

（クク、俺は余程運命とやたらに嫌われているようだ）



自分を皮肉り、ガレスはフルヘルムの下でいつものように静かに笑ったのだった。

## NO. 27 天空を駆ける騎士

マケドニア本城。

軍の布陣を終え、城のテラスにて解放軍の到着を待つ一人の騎士がいた。

「陛下ー！」

背後から声をかけられ、一拍置いて騎士が振り返る。マケドニアの国王にしてミネルバとマリアの兄であるミシエイルだった。

「何だ」

「全軍、配置完了しました」

「そうか。御苦労」

「はっ！」

叩頭すると、その兵士はその場を足早に去って行く。ミシエイルはもう一度首を戻すと、眼下に広がるマケドニアの将兵の姿を見た。

（陛下……か）

そうしながら、先ほどの尊称を思い出す。

（未だに少し慣れんな）

内心で自嘲気味にそう呟いた。もっとも、そんなことを億尾にも出すことはないの  
で、ミシエイルがそんな感情を抱いていることなど誰一人知ることもなかったが。

「ヤッ…」

斥候の報告では、解放軍が来るまではまだ今暫くの時間が予想された。そして、ミ  
シエイルはその前にやっておくことがあった。

テラスを後にすると、ミシエイルは中庭へと向かう。

「陛下、どちらへ？」

途中、声をかけてきた側近たちに、

「少し出る。供はいらん。奴らが来る前に戻るが、警戒は怠るな」

「ははっ！」

そう注意を促して己の騎龍に跨ると、ミシエイルは空高く舞い上がったのだった。

マケドニア本城近くのとある村。

この村の入り口で地上に降りたミシエイルは騎龍を降りると、真つ直ぐにある民家に  
向かってゆく。いきなり現れた国王の姿に驚いて平伏したり慌てて隠れたり、どう接し  
ていいのかわからずに複雑な表情で遠巻きに見ている村人たちには委細目もくれず、ミ

シエイルはその民家の門前に立った。そして、

「ガトー司祭、いるか？」

ドアをコンコンとノックする。

「うむ…」

少し遅れ、年輩の男の声が入り、ドア越しに聞こえてきた。

「失礼するぞ」

返事が返ってきたのを確認し、ミシエイルがドアを開けて中に入る。そこには、悠然と椅子に腰かけている一人の老人の姿があった。

大賢者ガトー。これまでも何度かマルスに道標を差し伸べてきた人物であり、そしてガーネフとリンダの父であるミロアの師である人物である。

「ミシエイルか」

ミシエイルの姿を見たガトーがその名前を呼んだ。

「何の用か？」

大体の用向きは何となくわかっているが、一応ガトーが尋ねてみた。と、

「同盟軍が攻めてきた。ここは、じき戦場になる。安全な場所へ移ってもらいたい」

ガトーが予想していた通りのことを言ってきたのだった。

「ふむ。心遣いには感謝する」

ミシエイルの、言葉通りの心遣いには謝意を示しつつも、ガトーはここを動く気はなかった。やらねばならぬこと、待っている人物がいるからだ。

「だが、ここを動くつもりはない。やらねばならぬことがあるからのう」

そのため、申し訳なくは思いつつもガトーはミシエイルの提案を拒否した。

「…なら、勝手になされよ」

ミシエイルも何となくこうなりそうなことは予想していたのだろう、意外とあっさりと矛を収めた。

「ただし、敵対するなら司祭といえど容赦はせぬ」

「そのようなつもりはない。…しかしミシエイルよ、そなたも愚かじやな」

ガトーに釘を刺したミシエイルだったが、返す刀でそう反論されてしまう。

「愚か？ 何故だ」

何を言っているのかわからなかったのだろう、ミシエイルが不審な表情になりながらその言葉の意味を聞いた。

「あれほど可愛がっておったミネルバたちと事を構えておるではないか。そなたとミネルバ、二人が力を合わせればマケドニアはいずれアカネイアをものぐ大国になれたであらうに」

「……」

思うところや反論すべき言葉はあるのだろうか、ミシエイルはそれを良しとしないのかただ黙ってじっとガトーの言葉を聞いていた。

「それが、ガーネフに騙されつまらぬ野望に取りつかれたばかりに父子、兄妹が相争い滅亡の危機を迎えるとはな」

「…もう、すんだことだ」

やがて、重々しく口を開いたミシエイルの表情は固いものだった。だが、意志の強さだけはその口ぶりからまだ失われてはいなかった。

「俺は父王を殺して王になり、ミネルバは俺と国を裏切った。それだけのことだ。だが、まだ俺は負けたわけではない。俺にはマケドニア王家の至宝である『アイオテの盾』がある。いかに敵が弓部隊を揃えてこようと恐るるに足らぬ」

腰の部分に提げてあるその至宝にミシエイルがチラリと目を向けた。

「…勝てたとして、その後どうするのじゃ？」

ガトーがその先の展望を尋ねた。だがミシエイルは軽く左右に頭を振るばかり。

「今は、先のことなどどうでもいい。ただ、同盟軍を率いるあの小僧：アリティアのマルスだけは必ずこの手で仕留めてみせる。それが俺の、マケドニア王としての意地だ」

「そうか…」

ミシエイルの決意の固さにこれ以上はどんな説得も無理と察したガトーが諦めたよ

うに嘆息した。

「ならば、もう何も言うまい」

「では、さらばだ司祭。生命あらばまたお逢いすることもあろう」  
軽く頭を下げると、ミシエイルはガトーの許を辞したのだった。

「父を殺した罪を自らあがなうことになるか…」

閉じられたドアの先、恐らくもう二度とは見ることはない背中を思い出しながら、ガトーはそう呟いていた。

「愚か…いや、哀れな奴よ…」

運命に翻弄された一人の被害者を思い、ガトーは嘆息することしかできなかつたのだった。

「陛下！」

マケドニア本城に戻つてすぐ、ミシエイルの許へと側近たちが集まつてきた。

「どうした？」

「同盟軍が攻めて参りました」

「来たか……」

その報告を聞き、ゆつくりとミシエイルが頷く。

「よし、事前の手筈通りに攻撃を開始しろ。奴らを必ずここで叩き潰せ」

『ははっ!』

叩頭すると、側近たちはそれぞれ散っていった。ミシエイルはそのまま再びテラスへ赴く。眼下には、確かにこちらに攻め寄せてくる解放軍の姿があった。

「…お前たちもそこにいるのか?」

語り掛けるように口を開く。だが、すぐに自嘲した笑みを浮かべた。

「フツ、未練だな。女々しい話だ」

ミシエイルはテラスを後にすると、再び騎龍へと向かった。背後から聞こえた鬨の聲に耳を貸すこともなく。

「ふんっ!」

「ぎゃっ!」

戦いを挑んできた竜騎士を、ガレスが一閃の許に片付ける。先だつてマルスの言った通り、今回ガレスは出陣していた。マケドニア城へと迫る最短経路は隘路であり、身動



きをとることが難しい。しかもマケドニア軍の主力は竜騎士や天馬騎士であるために地形には左右されることがないと言っている。そのため、どうしても挟撃ということに神経を回さねばならず、こちらへ回された連中は対応に苦慮しながら戦いを行っていた。

一方、平坦な道のりもないことはないがこちらは迂回路になっており、到着するのに時間がかかる。そのためこちらからは機動力に勝る騎兵や飛兵がマケドニア城に迫っていた。

さて、ではガレスはどちらに回されたかという点、説明するまでもなく最短ルートである隘路である。しかも前線に送られ、壁としての役割をさせられていた。

(成る程、こういうわけか)

次々に迫る竜騎士や天馬騎士と斬り結びながら、ガレスは何故今回マルスが自分を指名したのかがわかった。確かに、こうやって進軍するのであれば壁役としての重装甲の装甲兵は必要である。とは言え、

(一手に敵を引き受けさせられるのも、中々に癪に障る)

といった忸怩たる思いは当然あったりする。ちなみにマルスは迂回路から騎兵や飛兵を率いてゆつくりと攻め上がっているのだが。だから言うなれば、こちらは陽動部隊であった。

陽動と言えば聞こえはいいかもしれないが、誤解を恐れずに言えば捨て駒といつていいかもしれない。とにかく、こちらの最短ルートはガレスが先頭に立って獅子奮迅の活躍をしていた。そしてその背後から矢が放たれ、空を覆っている竜騎士や天馬騎士を次々と落としていく。

「よお大將、大丈夫かよ?」

ジエイクがガレスの様子を心配して声をかけ、

「あんたに任せきりなのはすまないが、俺たちは懐に入られると弱いんでね。申し訳ないが踏ん張ってくれ」

ベックは申し訳なさそうではあるがガレスに奮闘を促した。相手が竜騎士や天馬騎士とあってこちらには弓部隊が豊富に配備されたのである。

「私たちも精一杯頑張りますから、もうちよつとだけ耐えてください」

「ま、あんたなら大丈夫だろ?」

ノルンとカシムからも励ましとも揶揄とも取れない声援が飛んだ。更に最後方いるリフのリブローによって傷も回復させられるので、続けざまに竜騎士や天馬騎士の相手をさせられることになる。

「…全く、いいように使ってくれる」

文句とも愚痴ともつかぬことを零しながら、ガレスは再び戦場に仁王立ちした。

(確かに、こんな仕事は俺以外にはできんか)

ドーガやホルス、トムスやミシエランにロジャーといった他の重騎士の面々の顔を思いつきながらガレスはそう思った。この波状攻撃を受けられるような人員となると見当たらぬのだ。多人数で当たらせようにも隘路の地形ということもあつて数の展開は難しい。となれば、少数精鋭で壁役をこなさねばならない。となれば、ピッタリの役目になるのはガレスである。

何よりガレスは戦い方が戦い方のため、近距離にいると巻き添えを食って同士討ちになりかねない。だからこそ、このルートで攻め上がるときにガレスを単独で運用するところにマルスは決め、その援護役としてかなりの数の弓兵をこちらに回したというところであろう。

「まあいい、溜まった鬱憤はこいつらで晴らさせてもらうか」

眼前にまだまだ待ち受けている竜騎士や天馬騎士の姿を見据えると、ガレスはフルヘルムの下の真紅の両眼を不気味に光らせたのであつた。

「やあ、(´)苦勞さま」

隘路を進軍してきたガレスたちを、迂回路で進軍してきたマルスたちがある場所で迎

えた。マケドニア城の北東にある、とある村の入り口である。

「フン…」

能天気にも聞こえる労いの言葉に少しイラっとしつつもガレスは他の面々と共にマルスたちに合流した。

「随分と楽だったようだな？」

マルスたちの姿を見たガレスが皮肉っぽくそう尋ねた。確かに、返り血のような汚れが鎧や衣服にはそう付いていないし、第一からして迂回路を辿ったマルスたちが先に到着しているということが、何よりもマルスたちの状況を雄弁に語っているものだろう。

「まあね」

苦笑しながらマルスが答える。一応、予想通りに展開したとはいえ申し訳なく思っているらしい。

「君たちが敵の主力を引き付けてくれたおかげだよ」

「引き付けた？ 押し付けたの間違いだろう？」

「手厳しいな…」

マルスが苦笑したが、ガレスは変わらず厳しい視線をマルスに送っていた。その様子に気付いた、マルスに従っている者たちが剣呑な雰囲気を開始、一方でガレスと共に

に隘路を超えてきた者たちはどうすることもできずにハラハラと状況を見守っていた。  
「…フン、まあいい」

どれほど時間が経ってからだろうか、ガレスが矛を収める。それがわかり、周囲は途端にホツとした雰囲気にも包まれた。ガレスとしても、こんなところで事を構えるつもりはなかった。ただ、それもマルスに読まれていたのは業腹だった。

(狸め…)

目の前にいる人当たりのよい青年を貶しつつも、ガレスは腹芸の達人なこの青年に賛辞を贈った。

「状況は？」

ガレスが尋ねる。

「周囲の敵は片付けたよ。後は城周辺の守備兵だけだ」

マルスが状況を説明する。

「そうか。ではこれからいよいよ攻略戦か」

「ああ。兵力をまとめて一気に攻め込む」

「わかった」

その先陣も俺が務めることになるだろうなどとガレスは思いながら頷いた。と、

「マルス王子」

マルスの少し後ろに控えていたミネルバが少し前に出た。

「ミネルバ王女……」

ミネルバが何を言いたいのかは十二分に理解しているマルスが、それでもやはり少し苦虫を噛み潰したような表情になる。

「お願いがあります」

「ミシエイル王子……いや、ミシエイル王のことですか？」

「はい」

小さく、だがハッキリとした頷きは、その意思の強さを示していた。

「兄は……ミシエイルは私にけじめをつけさせてください」

「……辛い戦いになると思いますが」

「王子、マケドニア国境での戦いの直前のことをお忘れですか？」

「え？」

何のことを指しているのかわからず、マルスが戸惑い気味に声を上げた。

『マケドニアの過ちは、マケドニアの者の手で正してこそ意味があります』私はそう王子に申し上げたはず。確かに兄と戦うのは辛いことですが、余人に下駄を預けたら、それこそ私は一生後悔することでしょう。どうか、我が思いを汲んでいただきたい」

「……」

ミネルバのその真剣な眼差しと切なる訴えに、マルスはこれ以上は何も言えなくなつてしまった。

「わかりました」

色々思うことはまだあるのだが、それでもミネルバを止められるとは到底思えず、マルスは了承せざるを得なかった。

「それでは、ミシエイル王はミネルバ王女にお任せしましょう」

「かたじけない」

「ただ、一つだけ確認させてくれませんか？」

「はい、何でしょう？」

「僕たちは手出しもしない方がいいのですか？」

「マルスはそう尋ねた。そしてそれに対するミネルバの返答は、

「ええ」

という、簡潔にして素っ気ないものだった。

「手出し無用です」

「一騎打ちですか…無論、ミネルバ王女の強さは良く知っていますが、ミシエイル王子も相当な手練れだと聞いています。こんなことを言うのは何ですけど、生命を落とすかも知れませんか？」

「承知の上です。ですが、兄との決着はどうしても一対一でつけたいのです。…その結果、もし不覚をとるようなことがあれば、その時は申し訳ありませんが、後始末をお願いします」

「そこまで覚悟の上のことだど？」

「はい」

ミネルバが強い意志をもって頷いたのがわかり、マルスは認めざるを得なかった。

「わかりました」

複雑な想いを抱きながら、マルスは首を縦に振った。

「それではせめて、ミシエイル王までの露払い是我々が務めましょう」

「ありがとうございます。我儘を申しまして、申し訳ありません」

「いえ、お気持ちはわかりますから」

ミネルバの意を汲んだマルスが力なく微笑みながらも頷いた。そして、命を下す。

「すぐに陣形を整えて進軍の用意を」

『ははっ！』

マルスと共に迂回路を進んできた指揮官たちがそれぞれの持ち場へと戻った。

「…と言うことで、合流早々申し訳ないがそちらも進軍の用意を」

「わかった」



『はい!』

応の返事と共にこちらの指揮官級も進軍の用意を遠の得るために戻っていく。ガレスもその身を翻したのだが、

「ガレス」

その足を止める者がいた。

「何だ」

振り返り、声をかけた者……マルスへとガレスが視線を向ける。

「十分に、気を付けてくれ」

「何?」

まさかそんなことを言われるとは思わなかったガレスが虚を突かれたように少しの間固まる。

「フツ……」

だがすぐに笑った。

「俺の心配とは……熱でも出たのか?」

「そういうわけじゃないよ。ただ、ガレスにはこの後にやってもらわなくちゃいけないことがある」

「何だ?」

そこで初めてガレスの口調が怪訝なものに変わった。

「そんな話は聞いていないぞ」

「今初めて言ったからね」

抗議はするものの、マルスは涼しい顔である。だがすぐに表情を真面目なものに戻す。

「僕が今回君を指名したのにはその、やってもらわないといけないことがここであったからなんだ」

「フン、成る程な」

そこでようやく、この戦いの前にわざわざマルスが自分のところに向いて今回の出撃に指名してきた理由がガレスにもわかった。

「それならそうと最初から言えればいいだろう」

「まあ、そうなんだけどね。そうやって出撃を断られたら困るから」

「狸が…」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

「フン」

自虐したようなマルスの様に、ガレスがまだ面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「まあいい。だがせめて、何をやらせるかぐらいはここで聞かせろ」

「ある人に会ってほしい。ただそれだけだよ」  
「そうか」

マルスの返答を聞いたガレスが納得したわけでもないが矛を収める。ここでこれ以上言い合っても埒が明かないし、あまり時間もなかったからだ。

(腹は立たないこともないが、仕方ない)

そしてガレスはそのままマルスの後ろ：同じようにガレスに視線を向けていたミネルバへと顔を向けた。

「クク、どうした？」

「な、何？」

いきなり話を振られたミネルバが戸惑ったように口を開く。マルスも自分から話が逸れたことに気付いき、後方にいたミネルバへと視線を向けていた。

「しょぼくれた顔つきだな。口ではああ言っていたが、兄貴と殺し合うのが嫌なら、俺が変わってやろうか？」

「ば、バカを言うな！」

指摘された内容に侮辱されたと感じたのか、ミネルバが真っ赤になって怒鳴った。だが、余人が聞けば身も竦むような怒声も、残念ながらガレスには効果がない。

「ククク、そうだ。それでいい」

いつものように咽喉の奥で笑った。

「お前はそれぐらい勇ましい方がお似合いだ。少しは氣負った肩の力も抜けたか？」

「ツ！ 余計なお世話だ」

ここで、ようやくいいように転がされていたことに氣付いたミネルバが恨みがましい目でガレスを睨んだ。

「クク、まあそう怒るな」

だがガレスはいつも通りどこ吹く風で氣にする様子はない。

「文句があるなら戦いが終わった後にいくらでも聞いてやる。せいぜいくたばらないように頑張るんだな」

「貴様に言われなくても！」

「そうか」

満足げに頷くとガレスはその場を後にした。

(ガレスなりの氣遣いなのかな?)

二人のやり取りを傍らで聞く形になったマルスがふとそんなことを考える。言い方はあれだから褒められたものではないが、今の口ぶりだとすごく遠回しな『死ぬなよ』という表現に聞こえなくもない。その成果というべきかわからないが、現にミネルバは憤慨しているもののいくらか吹っ切れた表情をしていた。

(考えすぎ…だと思うけど…)

でも、もしそうだとしたら随分不器用というか遠回りな気遣いだなど可笑しくなり、マルスはミネルバに気付かれないようにクスツと笑ったのだった。

「兄上…」

「来たか、ミネルバ」

マケドニア本城の城門前、マケドニア最後の戦力との激戦を、こちらも多大な犠牲を払って何とか制した解放軍は遠巻きに戦場を見守っていた。城を護るミシエイルの前にミネルバが降り立ち対峙する。兄と妹、実に久しぶりとなる対峙だった。

「いざ参れ！」

ミシエイルが得物である銀の槍を構えるが、ミネルバはそれに応じない。

「兄上…」

「何をしている。戦場で躊躇うは命取り…そう教えたはずだ」

厳しい表情でミシエイルがそう指摘した。だがその厳しさは、敵へ向けるものではなく身内に向けるもののような愛あるものにミネルバは聞こえていた。だからこそ、

「…槍を置き、新たな道を歩むことはできないか？」

一縷の望みをかけて説得してみる。が、

「未練だな」

即座にミシエイルがその申し出を断った。

「すでに違う生き方を選んだのだ、再び交わることはない」

「そうか…」

こうなることは半ばわかつてはいたのだが、それでもやはり現実のものになると覚悟をしていてもショックは大きかった。だが、その現実には打ちのめされてはいられない。ミシエイルもそうだが、ミネルバもまた自分で選んだ現実を歩いていかなければならぬいからだ。だから、

「ならば、やむを得ぬ。参る！」

ミネルバも自身の得物であるオートクレールを構えるとミシエイルに突っ込んだ。ミシエイルは流星に悠々それを受け止めると、返す刀で突きを連発する。

「ツ！」

距離を取りながら上半身を細かく動かして回避すると、ミネルバも負けじと再びオートクレールを振りかぶった。それをミシエイルが上段で槍を構えて防ぐ

「くっ…」

「ぐうっ…」

鏢迫り合いにお互いの意地をかける兄と妹。そしてその光景を遠巻きに見ながら、放軍も固唾を飲んでいた。やがて、ほぼ同時に二人が互いから離れる。

(やはり、強い！)

今更ながらの兄の強さに、ミネルバは内心で冷や汗を掻いていた。だがそれは、実はミシエイルも同じだった。

(腕を上げたな……)

目の前に立ち塞がる妹を、ミシエイルは素直に評価していた。兄として考えれば喜ばしいことであり、感慨も一入である。だが、ここは戦場であり目の前の妹は敵。そんな感慨に浸っている暇などあるわけはなかった。

「おおおっ！」

「はああっ！」

再び二人は雄たけびを上げながら斬り結び始める。周囲の人間が手に汗握り、咽喉がカラカラに渴いていくほどの緊張感を感じる中、体勢を変え、竜騎士同士のために高低を変え、そして攻守を変えながら激しく一騎打ちを行うこと数十合。終わりの見えないように感じたこの戦いも、やがて終焉は必ず訪れる。そして、訪れた終焉は

「ぐっ！」

ミネルバのオートクレールがミシエイルの身体を深く抉った。鮮血が勢いよく吹き出し、元から真紅だった鎧を更に赤く染め、ミネルバの顔にも鮮血が走る。

「……までか……」

薄れゆく意識の中、ミシエイルは急激に身体に力が入らなくなり、その手の銀の槍を落とした。

「許せ……マケドニアの民よ……」

今際の際にそう呟くと、ミシエイルは目を閉じた。その脳裏に浮かんだのは愛する祖国とそこに暮らす国民。そして最後に浮かんだのは、その中で幸せそうに笑っている自分と妹たちの姿だった。満足そうに微笑んだミシエイルの意識はその後、再び戻ってくることはなかった。

「兄上……」

そんな兄の表情に気付いたミネルバがやりきれない表情をしながら唇を噛んで呟くと、自分のマントを外して兄の遺体にかけて。こうしてやりきれない想いを抱え、ミネルバの心に深い傷跡を残した兄との一騎打ちは終了したのであった。

「終わったか……」

ミネルバの悲しい勝利を目の当たりにし、マルスがやりきれない表情で呟いた。勝利したのは確かに嬉しいことなのだが、ミネルバの心中を察するととても手放しで喜べな



いのだ。

「王子」

そんな中、傍らのアベルがマルスに進言する。

「何だい、アベル？」

「お気持ちはわかりますが、ここで立ち止まるわけにはいきません。マケドニア城の制圧を」

「そうですね。臣下として口が過ぎるのは承知で申し上げますが、感傷に浸るのは後のことかと」

マルスを挟んでアベルの反対にいたカインも同僚の進言に同意した。

「うん、わかってる」

二人の腹心の部下の進言に、マルスが頷く。

「そうなんだけど、その前にやらなくちやいけないことがあってね」

「それは？」

アベルが尋ねた。

「城下にある村を尋ねないといけないんだ。そしてそこに」

マルスは一度言葉を切ると振り返る。そして、視線の先にいるガレスを捉えた。

「ガレス、君にも来てほしい」

「ああ」

いきなりの御指名だったが、事前に聞かされていたガレスはコクリと頷いた。だが、周囲の者にとっては初耳である。

「マルス様」

「それはどういふ…」

意図を聞こうとしたアベルとカインだったが、マルスは彼らに向き直ると、

「ガトー様からそう言われてね」

とだけ答えた。だがその回答に、周囲がざわつく。

ガトー様が…？

一体どういふ…

何やったんだ、あの男…

そこかしこからそんな感じのざわつきが溢れてくる。それを、マルスが柏手を打って静めた。

「ガトー様の御指名なんだよ。是非ガレスに会いたいわってね」

「その…ガトー、だったか？ そいつは何者だ」

「ガトー様って言うのは大賢者と言われているお方でね。リンダの父親だったミロア司祭、そしてあのガーネフの師でもある御方さ」

「ほお…」

ガトーがどういう人物なのかを知らされてガレスは少し興味が出た。リンダの父親であるミロアとはもちろん会ったことのないガレスだが、ガーネフは良く知っている。

(あの負け犬の師匠か、一度顔を見ておくのも悪くはない)

どういう事情があつて引き合わせるようなことになつたかは知らないが、それなりに面白いものが見られるかもしれない。ガレスはそう考えた。

(良いように手の平で転がされている感じは否めないが…)

チラツとマルスの顔を見てそう思うが、まあ仕方ないとそこは割り切つた。

「わかつた」

「頼むね」

マルスがにこやかに微笑んだ。その笑顔に、やはり狸という印象が一番に浮かんでしまふのは仕方のないことなのであろう。少なくともガレスにとつては。

「と言うことで、僕らは今からガトー様のところに行つてくるので、皆は待機しながら並行して、哨戒や負傷者の救護、補給なんかを行つていてくれ」

「わかりました」

「はっ」

「じゃあ行くうか、ガレス」

「わかった」

反対意見が出ないのを確認したところでマルスがガレスを伴ってガトーのところに向かおうとしたが、

「待ってくださいー！」

その直前に声を上げる者がいた。

「リンダ？」

誰かと思つてマルスが顔を向けた先にいたのは、リンダの姿だった。

「マルス様、私もお供させてください？」

「え？」

一瞬驚いたマルスだったが、すぐに得心した表情になる。

「そうか……」

リンダはミロア司祭の娘である。ガトーから見ればリンダは弟子の娘であり、リンダから見ればガトーは父の師でもあり、同時に仇敵の師でもある。無関心でいるなど言う方が無理のある話だった。

「…わかった、いいよ」

少し悩んだマルスだったが了承した。ガトーからはガレスを見極めるために連れてこいと言われたが、それ以外の人間を連れてくるなど言われたわけではない。それに、

リンダは先述の通りガトーと全くの無関係というわけでもないのだ。もしかしたらあまりいい顔はしないかもしれないが、そもそも誰も供を連れてくるなど言われたわけでもない。これらから判断し、マルスはリンダの供を許したのだった。

「ありがとうございます！」

リンダの表情がぱあつと華やいだ。だが、ガレスの姿を見てすぐに少し気後れしたような雰囲気になる。

(う……)

最初程ではないが未だになれないその威圧感に内心でたじろいでいるとガレスがそれに気付いたのか、

「クク、心配するな。取って食ったりはせん」

と、いつものように咽喉の奥で笑ったのだった。

「だ、誰が心配してるのよ！」

「ククク、さあ、誰かな？」

「ッ！」

軽くあしらわれたことに不満タラタラの様子だったリンダだったが、騒いで万一お供の話が取り消しになったら目も当てられないので抑えた。そんな二人の様子にマルスが気付かれないようにクスツと笑う。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

「はい！」

ガレスとリンダをお供にして、マルスはガトーの許へと向かったのだった。

「失礼します」

マケドニア城麓の村。戦いが始まる前にミシエイルが訪れた一軒の家屋にノックすると、マルスはガレスとリンダを伴ってその家に入った。

「参られたか」

家屋の中には一人の老賢者の姿があった。

（こいつが…）

（この方が…）

（ガトー（様））

ガレスとリンダは初めて目の当たりにするガトーに同じ感想を抱く。まあ、初対面の人間に対する感想としては極々普通の者だと思いが。

「よく来たなマルス王子。儂がガトーだ」

「はい」

マルスは頷くと、持参した光と星のオーブをガトーの前に置く。

「そうか、約束通り光と星のオーブを持ってこられたか」

マルスが持参した光と星のオーブを見てガトーが頷く。

「うむ、これでスターライトが作り出せる。暫し待たれよ」

「はい」

頷くと、マルスは一歩下がった。ガトーはその二つのオーブに念のようなものを込めていくと、やがてその二つが形を失って溶け合いはじめ、そして周囲が眩いばかりの光に包まれた。

「うわっ!」

「きゃっ!」

「……」

余りの眩さにマルスとリンダが手をかざして悲鳴を上げた。そんな中、唯一ガレスは顔を背けることもなく手をかざすこともなくジッとその様子を見ている。そして、

「できたぞ」

そのガトーの一言にマルスとリンダが恐る恐る目を開ける。そこにはここに入ってきたときと同じ室内の光景があつた。唯一違うのは、ガトーの前にあつた光と星のオーブ

ブがなくなり、その代わりに一冊の魔道書が置いてあることだけだった。

「さあ、持っていかれよ」

ガトーがマルスにその魔道書を渡す。

「それがマフーを破る唯一の呪文、スターライトじゃ。それを用い、ガーネフを倒されることがよい」

「これが…」

マルスは己に手渡されたスターライトの魔道書にまじまじと視線を落とした。魔道士ではないマルスにはこの魔道書の価値や力はわからないが、魔道士ならばわかるのだろう。

「ではリンダ、これは君に」

故に、マルスはその魔道書をリンダに手渡した。

「は、はい」

恐る恐る手を伸ばし、リンダがそれを受け取った。と、

「その娘は？」

ガトーがリンダに視線を向ける。

「あ、わ、私は」

リンダが自分のことを説明しようと口を開いたが、



「ミロア司祭の御息女です」

と、先んじてマルスがガトーに説明した。

「ミロアの？」

その説明に、ガトーの表情が驚いたものになる。

「はい」

「そうか…」

思うところがあるのだろう、何度も何度も頷いた後、ガトーはリンダに再び視線を合わせた。そして、

「こちらへ」

と、リンダを手招きして呼んだのだった。

「は、はい」

父親の師であつた人物に呼ばれ、緊張しながらもスターライトを抱きしめたままリンダがガトーの許へと向かう。そして、その眼前で立ち止まった。

「…成る程な」

じつくりとリンダの顔を見た後、ガトーが得心が言ったように頷いた。

「あ、あの…」

ガトーの意図がわからず、居心地が悪くなってきたリンダがか細く声を上げた。と、

「確かに、ミロアの面影がある」

ガトーが呟いた。その一言に、リンダが父であるミロアのことを思い出し、何故か緊張も解けた。余裕を持って、ガトーに対峙する。

(うむ…)

リンダの表情が変わったのがわかり、ガトーは内心で頷いた。そして、それを悟らせないように再び口を開く。

「リンダ…だったかな？」

「はい」

リンダが力強くハッキリと頷いた。

「マルス王子がこれをお主に託したということは、お主にガーネフを任せたということなのだろう。わかるな？」

「はい」

「だが、ガーネフは強敵ぞ。もしかしたらお主の父であるミロアと同じ運命を辿るかもしれない。それでもいいのか？」

「はい。覚悟はできています。それでも、私はやらなければなりません」

「そうか」

リンダの決意が固いことを知り、ガトーは諦め半分、頼もしさ半分といった感じで頷

いた。

「ならば、儂からこれ以上言うことはない。武運を祈る」

「ありがとうございます」

「うむ」

ガトーに一度頭を下げると、リンダはそのまま下がった。

「さて…」

そしてガトーはその視線を最後の一人、ガレスへと向ける。

「お主が件の黒騎士か」

「その狸王子が何と言っていたかは知らんが、確かに俺が黒騎士ガレスだ」

ガレスが頷いた。

「狸は酷いんじゃないかな？」

マルスが苦笑したがガレスは意に介さず、そしてそれはガトーも同じだった。ジツと

お互いを見据えている。

「…その狸から聞いたが」

口火を切ったのはガレスだった。

「だから、狸は止めてくれないか？」

「黙ってろ」

「参ったな……」

自分の意見を一刀両断されマルスが苦笑した。そんな二人……というか正確にはガレスを、リンダがビツクリした表情で見ている。

(アリティアの王子であることに加えて、全軍の総司令官の立場なのに……)

どうしてこんな失礼な口がきけるのか。そして、何故それをマルスが咎めないのかりんダは不思議だった。無論、ガレスの特殊性というのもリンダは承知しているが、それを差し引いても失礼が過ぎる。それなのに、その失礼を許されているのがリンダにはどうにも理解できなかった。

リンダがそんな思惑で自分を見ていることなど知る由もなく、ガレスはガトーに向かってそのまま続ける。

「貴様が俺を……へ呼んだそうだな」

「うむ」

ガトーを貴様呼ばわりするガレスにリンダは再び内心で驚いていたが、当人であるガトーは気にも留めた様子もなく頷いていた。

「では聞こう、俺に何の用だ」

ガレスが単刀直入にガトーに尋ねた。

「何、大したことではない」

それに対し、ガトーはそう答える。

「ただ、マルス王子が自分の手に余る異質を軍に迎え入れたと愚痴をこぼしての。儂に何とかしてくれんかと泣きついてきたのだよ」

「が、ガトー様……」

内情をばらされてマルスが困惑した表情になった。だが、ガレスは気にも留めた様子はない。

「ほお……」

頷くと、寧ろ楽しそうに咽喉の奥で笑ったのだった。

「で、貴様は俺をどう見る」

ガレスが単刀直入にガトーに尋ねる。

「うむ……」

一息つくと、ガトーはジツとガレスに視線を向けた。ガレスはその、無遠慮と言えなくもない視線を浴びながらも気にする様子はなく悠然と立っている。寧ろ、残りの二人であるマルスとリンダの方がハラハラしたり緊張感に堪えられなくなっているぐらいだった。

「成る程のう……」

どれだけ時間が経ったかわからないが、やがてガトーが口を開いた。

「終わったのか？」

「うむ」

ガレスの問いかけにガトーが頷く。

「そうか。では、教えてもらおうか」

「断る」

「何？」

ガトーの返答にガレスが怪訝な口調になった。

「どういうことだ」

発言の真意を知るため、ガレスがガトーに尋ねた。

「簡単なことよ。この一件はマルス王子の求めに応じたまでのこと。それ故、マルス王子にだけ伝えることにするだけだ」

「俺は当事者なんだが？」

「他人の自分評など聞きたいのか？ お主、そんなことには関心はなさそうだがな」

「関心はないが、貴様の観察眼には少なからず興味がある」

「そうか」

ガトーが頷いた。だが直後、ガレスを真つ直ぐ見据える。そして、

「しかしながら、やはり断る」

そう宣言したのだった。

「フン、余程俺には聞かれたくないということか？」

ガレスが忌々しそうに面白くなさそうに鼻を鳴らした。雰囲気が剣呑になったことを肌で感じ取り、リンダがビクツと身を震わせる。

「まあ、そうじゃな」

対してガトーは泰然自若といった様子のまま答えた。

「チツ……」

暫くの間ガトーを睨んでいたガレスだったが、やがて忌々しそうに舌打ちをして視線を外した。

「その狸といい貴様といい、食わせ者の多い世界だな、ここは」

「言ってくれる。お主が一番の食わせ者だろうに」

「フン、何とでも言え」

「ふっふっふっ」

ガトーが楽しそうに笑う。その姿に、マルスとリンダが内心で驚いていた。ガトーは笑わないなどという偏見は持っていないが、それでもこの場で笑顔が見れるとは思っていないからだ。

マルスとリンダがそんな失礼な感想を抱いているとは露知らず、ガトーが徐に口を開

く。

「まあ、そう臍を曲げるな。『異界』の御仁よ」

（！こいつ！）

今までの間にやはり何らかの確証を得たのだということがわかり、ガレスは警戒心を強めた。それはわかっているのだろうが、それでも尚ガトーは飄々とした様子を崩さない。

「どれ、せつかくここまで足を運んでくれたのだ。何か一つ、儂がお主の願いを叶えてやろうではないか」

「何だと？」

いきなり変わった話の展開に、またもガレスが訝しげな口調になった。

「貴様、何を企んでいる」

「企んでいるとは心外だの」

凄むガレスだったが、ガトーは飄々と受け流す。この辺りは流石に年の功といったところか。

「やり方に多々問題はあるようだが、それでもこれまで随分と働いてくれたようだからな。その働きに報いてやろうとしたまでのことよ」

「いきなりそんなことを言われてもな…」



ガレスが警戒する。初対面の人間に、ましてやマルス以上の狸である目の前の男にそう言われても素直に頷くことはできない。当然のことといえた。

「…身構えるのは無理もないがな」

そんなガレスの心中を察したかのようにガトーが言葉が続けた。

「疑い過ぎは損をするぞ」

「フン…」

再びガレスが鼻を鳴らす。そして、

「何でもいいのか？」

と、この件に関して初めて前向きな発言をした。

「うむ。但し、儂ができることに限るがな」

「そうか。だったら…」

そしてガレスはガトーにあることを頼んだ。これをもって全ての用件を片付けたマルスたちは、ガトーのワープによって次なる戦いの場へと送られることになる。

そこはテーベ。あのガーネフが待ち受けている幻の都だった。

## NO. 28 因縁の決着

“俺にやらせろ”

ガレスのその一言に水を打ったように周囲は静まり返った。そして今、

「ククククク…」

暗黒道の皇子が滅びの都へと足を踏み入れようとしていた。

時間は少しまきもどる遡る。

ミシエイルを倒してマケドニアの平定を終えたマルスたちは、ガトーのワープの魔法でガーネフが根城としているテーベまでテレポートしていた。流石に大賢者と言われるだけのことはあつてガトーの魔法は強力で、なんと一軍を丸々とテレポートさせたのだからその魔力恐るべしというところである。

イレギュラー感は何もないところであるが、何にせよ次の目標はガーネフとの決着であつた解放軍にとつてはその時期が少し早く到達しただけのことにはすぎない。慌ただしく編成を終えたマルスたちは、テーベ攻略における軍議を開こうとしいていた。

「……」

「……」

「……」

出撃の人員として選抜された面々が軍議の開始を待っている。パツと見いつもと変わらない光景ではあるが、大半の参加者は気もそぞろだった。何故なら、この席には今まで一度も現れなかったガレスの姿があったからだ。

何人もがチラチラと視線を走らせてガレスの様子を窺う。ガレスの隣に腰を下ろしているチキはニコニコしているが、ガレスはいつもと変わらずに真紅の瞳を光らせていた。

(あの男…)

(一体どういう風の吹き回しだ?)

(何でいるんだよ…)

声を潜めつつも周囲がざわざわとざわめきだす。無論、ガレスもそれはわかつてはいるが何も反応はしない。

(面倒な連中だな)

とは思ってはいるものの、一々相手をする気にもなれずに放っておいた。その中で、

さつきガトーの庵で一緒だったリンダは何か別に思うところがあるのか、明らかに他の連中とは違った思惑を孕んだ視線をチラチラと送ってくるのだが、それもまとめて捨て置いておく。と、

「お待たせ」

天幕にマルスとジェイガン、ハーデインが入ってきた。その瞬間、喧騒はピタツと止む。マルスが出撃の面々の顔を確認したところで、ガレスがこの場にいることに気付いて驚きの表情を浮かべた。

「ガレス…」

マルスと同様に、ハーデインやジェイガンも驚きを隠せないといった表情になる。

「何だ？」

「…どうしてここにいるのさ？」

およそ指揮官が言っている台詞ではないことに周囲がギョツとする。マルス自身も口を滑らせたすぐ後に失言だったことに気付いたのか、マルスにしては珍しく、あ、しまったといった表情になった。だが、ガレスは気分を害することもなかった。

「御挨拶だな」

そして、いつものように咽喉の奥でクククと笑った。

「出撃予定者が軍議に出ても何ら可笑しいことはないだろう」

「でも、今まで一度も出なかったのに……」

マルスが必要以上に驚き、うっかりと余計な失言をしてしまったのはこれが原因だった。ガレスはこれまで一度も軍議に出たことがなかったのである。今までは軍議で決まったことを事後報告という形だった。

ガレス自身も退屈な軍議に出たいとは思っていないが、事後報告で構わないとマルスに言っていたからだ。その軍議で決まった方針通りにガレスが動くことは滅多になかったが、それでも全くの身勝手に好き勝手なことをしてきたわけではないので、特に大きな問題もなくここまでこれたのだった。……まあ実際、ガレスの身勝手に振り回されたり後始末をさせられる方にはたまったものではないが。

ともかくにも、そんなわけでこれまで一度も軍議の席に顔を出していないガレスの突然の出席だったので、戸惑うのも無理はないと言えた。

「理由は……何となくはわかっているだろうか？」

ガレスがマルスの目を見据えながらそう告げる。

「……ガーネフ、かい？」

「ああ」

マルスとガレスのやり取りに、周囲に緊張が走った。特にリンダは父の仇の名前が出てからだろうか身じろぎせず、表情が憎しみを帯びた感じで強張る。

「まあ、出てきてくれたことは歓迎するよ」

そう言うのと、マルスが軍議の開催を皆に伝えた。参加者たちの表情が引き締まる。そんな中、

「ガレス…」

ガレスの隣に座るチキが少し不安そうな表情になってガレスを見上げた。

「どうした？」

「その…大丈夫？」

「？ 何がだ？」

言葉の意味が今一つわからずガレスが首を傾げた。

「えっとね…うまく言えないんだけど、さつきとは何か雰囲気が変わったような感じでしたから」

「そうか…」

表面には出してはいなかったが、流石に鋭いなど内心で舌を巻いたガレスは、チキを安心させるようにその頭を優しく撫でた。

「えへへ…」

鎧越しとはいえその感触が気持ちよく嬉しいのだろう、チキがくすぐったそうにしながらもはにかんだ。その、まあいちゃついているとも見える光景に周囲は内心で呆れた

り引きながらも軍議は開始した。

淡々と、今回の敵の戦力や地形、攻略方針などがマルスやジェイガン、ハーディンの口から語られていく。所々で質疑応答を交えながらも軍議は滞りなく進み、そしてつづがなく終了した。

「では最後に、何か意見があれば」

マルスが全員を見渡しながら尋ねる。と、ゆつくりとガレスが手を挙げた。

「ガレス……」

マルスの眩きに、総員がガレスに視線を向ける。そして、ガレスが手を挙げていることに驚いた。

「何かな？」

務めて平静にマルスが尋ねる。

「何か異存でも？」

「いや、作戦や方針に異存はない。だがガーネフ、あの男は」  
俺にやらせろ

ガレスのその一言に水を打ったように周囲は静まり返った。

「……気持ちはわかるけどね」

そんな中、いち早く再起動したマルスがゆつくりと口を開く。

「何度も説明したと思うけど、ガーネフはスターライトじゃないと……」

「そうか？ お前も見ているだろう、カダインで俺があつた男を圧倒したのを」

「それは……」

マルスが思わず口籠もった。確かにその前例がある。あの時もガーネフはマフーに手に襲い掛かつてきた。それは、襲われた自分が何より一番よく知っている。そのガーネフをガレスは圧倒したのだ。無理と言いつ切るのはそれこそ無理な相談だった。

「俺はこれまでお前たちに褒賞を要求した覚えはない。元々そんな気もないしな。だからその代わり、この程度の頼みは聞いてくれても構わんとは思わんか？」

「う……ん……」

マルスが考え込む。ガレスが言った通り、別にガレスの頼みを聞くのは何も問題はない。いやむしろ、被害が少なく収まるであろうことを考えると、渡りに船といえないこともない。しかし、

「納得できません！」

堂々と反論したのはリンダだった。リンダは立ち上がるとガレスを真っ向から睨む。

「あの男を……ガーネフを倒すのは私です！」

「随分な大口をたたくな、小娘」

「何とでも言いなさい。けど、この件に関しては絶対に誰にも譲れないわ」



「クク、面白い。ならばここで貴様を叩き潰せば俺の邪魔だてする奴はいなくなるな」  
「え、ちよつと!？」

予想外の方向に話が進みそうになっているのに慌てたマルスが驚きながらもそれを止めようとする。が、

「止めんか!」

「バカな真似をするな!」

それより前にジェイガンとハーデインが二人を制した。普段は冷静な二人の一喝に思わず自分たちに向けられたわけでもないのに他の参加者たちが背筋を震え上がらせた。チキも驚いてしまったのか、ガレスの鎧にギョツとしがみつく。

「これから戦いだというのに味方同士で争って何とする!」

「二人とも落ち着かないか!」

「す、すみません!」

リンダが頭を下げたが、ガレスはいつも通り、どこ吹く風といった涼しい様子だった。その姿に、叩頭していた頭を上げたリンダが不機嫌そうになる。話の流れからリンダもお説教をくらった形となつてしまつたが、リンダ自身は何もしていない。二人が止めに入らなければ一騒動あつたであろうことは紛れもない事実だが、リンダとしてはガレスに反論しただけである。喧嘩を吹っかけてきたのはガレスで、リンダは言うなれば被害

者であった。そんな、被害者の自分が頭を下げたのに、騒ぎの元凶であるガレスがいつも通りの傲岸不遜な態度でいればリンダがムツとするのも仕方のないことであろう。

では、そんな三人の厳しい視線を集めたガレスはというと、

「わかった」

と、一言呟いた。

「なら、あの男は貴様にくれてやる」

そしてそう続ける。司令官でもないのに何でこんなに偉そうな態度なのと思ったり、リンダがまた不機嫌になるが、これ以上みつももないところを見せるのは不本意なことで、何よりガーネフを譲られたことで矛を収めることにした。もともと、安心したのはマルス以下も同じだったのだが。

「その代わり、そこまでの露払いは俺にやらせてもらおうぞ」

妥協の代償とばかりにガレスが続けざまに口を開いた。

「え?」

「不服か? 獲物は貴様にくれてやるといったんだ。前座は俺がもらっても文句はある

まい?」

「それは…:そうだけど…」

戸惑いが隠せないといった様子でリンダが呟く。

「何を考えているの？」

「何も。強いて言えば、ただの八つ当たりだ」

「八つ当たり？」

「ああ。美味しいところを他人に譲ることになった鬱憤のな」

その後、いつものように咽喉の奥で笑ったガレスに全員が背筋を震わせた。ガレスはゆっくりと立ち上がるともう用はないとばかりにそのまま天幕を出て行った。

「あ、待ってよー」

その後をチキがトコトコと追っていく。しかし、それ以外の面々は少しの間ガレスの気に毒されたかのように動けなくなっていたのだった。

テーベへと足を踏み入れたマルスたち解放軍は、その重苦しい雰囲気思わず重力が増したかのように身体が重くなるのを感じた。

「テーベの神殿……ここに、ガーネフがいるのか」

身体の重苦しさと同時に咽喉がカラカラに渴き、唾を飲み込みながらマルスが一人ごちた。と、

『くくく……』

暗闇の中から不気味な笑い声が木霊する。

『マルスよ、ようやくここまで来たか』

「! 誰だ!? その声はガーネフか!」

『ふふふふふふ…』

マルスの呼びかけに応じるかのように近くに近づいた闇がぐにやりと歪み、その闇が人型を象る。そして次の瞬間、そこにはただならぬ気配の司祭の姿があった。

「! ガーネフ…!」

カダインで相対しているだけに、マルスはすぐにそれがガーネフだとわかった。まあ顔がわからずとも、雰囲気だけでわかりそうなほど尋常でない雰囲気を全身で醸し出しているのだが。

そしてその司祭がガーネフだとわかった直後、マルスを護るように何人もの戦士たちがマルスとガーネフの間に立って得物を構えた。

「くくく…待っておつたぞ、マルス」

だがガーネフは彼らを一顧だにせず、ただマルスを見ている。無視…というより、黙殺された形になった戦士たちの表情は一律ムツとしているが、ガーネフがそんなものを気にするはずはなかった。

「待っていた、だど?」

ガーネフのその物言いに引つかかったマルスが眉を顰めた。

「そうだ。お前が大陸の各地で勝利し、厄介な連中を倒して貴重な武器を持つてくるのをな」

こともなげにガーネフがそう答える。

「お前のおかげでカミュもミシエイルも我が前から姿を消した。感謝しておるぞ、くく…」

「おのれ…なんという…」

ガーネフの悪辣さにマルスが嫌悪感を露わにした。だが、それでガーネフがダメージを受けるはずもない。涼しい顔で先を続ける。

「可哀想だが、そろそろお前には消えてもらわねばならぬ。メイウスはわが手にファルシオンとマフーがある限り逆らわぬ。ガトーは俗世に顔を出す気はない…となれば、邪魔なのはお前だけだ。そう、世界を我が物とするためにお前は邪魔なのだよ。くくく…」

「そうはいかない。お前の思い通りになどさせるものか！」

「くくく…さて、できるかな？ お前には儂の本当の姿すら見ることができまい」

「…どういふことだ？」

ガーネフの今語った言葉の意味がわからず、マルスが怪訝な表情になった。と、そこ

へモロドフが駆け込んでくる。

「お、王子！ 神殿のあちこちにガーネフとおぼしきソーサーが現れたとの報告が！」  
「くくくく……」

マルスに伝えられたモロドフの報告を聞いたガーネフが不気味に、そして厭らしく笑った。

「さあ、戦え戦え！ 儂の分身どもと精魂尽き果てるまで戦うがよい。但し、本物の儂を倒さん限りファルシオンは手に入らんがな。ハーツハツハツハツハツハツ！」

マルスたちの慌てる様に満足そうに高笑いしたガーネフだったが、すぐにその余裕もなくなることになる。

「ククク……」

先ほどのガーネフと同じような笑い声が、また違った方向の闇から聞こえてきた。

「随分と威勢がいいじゃないか。ド三下の負け犬の分際で」

「貴様、あの時の！」

ゆつくりと姿を現したガレスに、先ほどまでの余裕は何処へやら、ガーネフは一瞬で怒気を孕ませた憤怒の表情になる。

「ククククク……」

対してガレスはいつもより五割増しでガーネフを嘲笑した。

「あの時のことは忘れてはおらんぞ」

カダインでの完膚なきまでの敗北が思い出されたのか、憎悪を募らせながらガーネフがガレスを睨み付けた。

「丁度いい、マルスともども貴様もここで殺してくれるわ!」

「ククク、笑わせる。また無様に叩き潰されたいか」

「余裕を見せていられるのも今のうちじゃ! 貴様だけは特別に念入りに八つ裂きにしてくれるわ!」

呪詛の言葉を紡ぎながらもガーネフはその場から姿を消した。こうして、いつも以上の緊張感に支配されながらテーベの攻略戦は始まったのだった。

「ふう…」

目の前の司祭を剣で切り捨てたマルスが緊張を解放するかのようによく息を吐き、額に滲んだ汗を拭った。

「状況は?」

周囲に視線を向ける。

「この付近の制圧は完了しました。ただ、まだ増援が現れることを見越せば、油断は禁物かと」

「うん。まあ、今回は僕たちは大人しくしてようか」

「はっ」

「しかし、良いのか？ あの男に任せて」

ハーディンが上を見上げながらマルスに尋ねた。

「いやあ、だってねえ…」

マルスとしてもどう答えていいかわからず、歯切れの悪い返答しかできない。

「ダメだって言つて、素直に聞くと思うかい？」

「…無理だな」

マルスの意見に少し考えたが、ハーディンは溜め息をつきながらそう答えることしかできなかつた。

「だろう？ 情けない話だけど、向こうが引かないならこつちが引くしかないよ」

「でも、どういうつもりでしょうか」

いつの間にか傍らにやってきたシーダがハーディンと同じようにマルスに尋ねる。

「何がだい、シーダ？」

「だって、手加減出来そうにないから、誰もついてくるなんて…」

シーダが心配しているように、ガレスは単騎でガーネフの許に向かっていた。正確には、スターライトを持ってきているリンダと、回復役のボアや牽制役のノルン、守戦力のチ



キといった面々も一緒なのだ、彼らは十分にガレスから離れてその後を追う形になっている。まさに単騎特攻、露払いといっていい役目をしていた。

「言葉通りなんじゃないかな？」

そんなシーダに、マルスがそう答える。

「手加減できずに周りを巻き込みかねないから、ついてくるなつてだけのことなんじゃない？　最近は随分ましになったとはいえ、オレルアン平原やオレルアン城でのこと、覚えてるだろう？」

「！」

マルスに指摘され、シーダが思わず思い出していた。馬の首ごと胴体を真つ二つに斬られて噴水の用に血を吹き出していたローソンや、両腕を斬り落とされた挙句鎧ごと真つ二つに両断されたマリオネスの姿を思い出し、シーダは思わず顔を蒼ざめて口元に手を当ててしまう。

「！　シーダ様！」

「大丈夫ですか？」

カインとアベルが慌ててシーダを気遣う。シーダは顔色こそ蒼く喋れない様子だったが、しきりに首を上下に動かして大丈夫という意味表示をしていた。

「あの男…何をするつもりなのか」

暗い闇の中、その姿は当然見えないがハーディンはガレスがいるであろう場所へと顔を向けた。

「まあ、ガレスのことだ。またとんでもないことをするんだろうけどね」

マルスはもう諦観した様子である。一々気にしていたら身が持たないと今更ながらに悟ったのかもしれない。遅すぎる結論ではあるが。

「それはこの戦いの後、リンダたちに聞けばいいさ」

そうしてマルスもまた、ガレスがいるであろう場所へと向けて首を上げたのだった。

暗い闇の中を、ゆっくりと進んでいく一団がある。

「やれやれ、こう四方が真つ暗闇だと気が滅入るな」

松明を手にしながら、ボアがボヤいた。暗闇の圧迫感に加えて、どこから敵が現れるかもわからない緊張感も相まって、神経が相当擦り減っているのだろう。

「ボア様、大丈夫ですか？」

「顔色もあまり良くないようですけど」

歩調を同じくして進むリンダとノルンがボアを気遣う。

「気を使わせてすまんのだ。だが、大事な。お主らこそ、注意と警戒を怠るなよ」

「はい」

「わかりました」

そのままリンダがボアの後ろに視線を向けた。

「チキ、貴方は大丈夫なの？」

最後尾、殿を任されている形のチキにリンダが尋ねる。そのチキは、不満そうというか不機嫌そうな表情を隠さなかった。

「チキ？」

チキの様子に気付いたリンダがもう一度尋ねた。と、

「……嫌い」

ムスツとした表情でチキがそう答えた。

「？」

「皆に助けられるまで、一人ぼっちで眠ってたあの神殿を思い出すからイヤ」

「あ……」

チキの不機嫌な理由がわかったリンダたちだったが、原因がわかったとはいえどうしようもなかった。何しろ、ここをこういう状態にしている原因を叩きに行っているのだから。申し訳ないと思うが、それまでは我慢してもらおう他はない。と、

「その辺にしておけ」

戦闘をきって進んでいたガレスがいつの間にか立ち止まっていた。

「どうかしたのか?」

「お客さんのお出ました」

いつの間にか、ガレスたちの周囲を不気味な司祭の集団が囲んでいた。

「! ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！」

リンダが魔道書を、ノルンが弓を構える。ボアはリンダと同じく魔道書を用意しつつも、比重は回復役として重きを置いているため、いつでも杖を使えるようにしていた。

「もう!」

テーベの雰囲気にとだでさえご機嫌斜めなチキはさつそく神竜へと姿を変えた。

（お前たちなんて、嫌いだーっ!）

鬱屈させてくれた鬱憤を蹴散らすかのように、チキがブレスを吐き出した。

「ククク、派手にやってるな」

チキの暴れっぷりを頼もしく思いながらガレスはリンダたちに視線を向けた。

「貴様たちは自分の身だけ守っている。残りは俺が叩き潰す」

「出来るんでしょね?」

リンダが挑発的な物言いをし、その態度にノルンとボアがギョツとした表情になってリンダを覗き込んだ。

「ハ、なめるな」

対してガレスはいつものように楽しそうに咽喉の奥で笑うだけだった。

「露払いが露を払えなくて何の露払いだ。貴様こそ、こんなところでガス欠になって、肝心のあの負け犬のド三下とやりあうときには魔力が残ってないなんて無様を晒すなよ」  
「大きなお世話！」

ガレスへの、そして何よりガーネフへの怒りをぶつけるかのようにリンダが魔道を放つ。ノルンも慌てて矢を番えては司祭たちに狙いを定めた。

「ククククク…」

楽しそうに笑うと、ガレスは己の正面に立つ司祭たちを斬り捨て始めたのだった。

「チツ…」

何人目かの司祭を斬り捨てたところで、ガレスが忌々し気に舌打ちをした。司祭たちに襲われてから少し時間が経った。こちらの被害としては軽微。深手を負うこともなく、こまめにボアが回復をしてきているため、軽微と表現した被害はないと言っても過言ではなかった。しかし、

(数が多すぎる…)

そのことがガレスを苛立たせていた。実力的には大したことはないのだが、とにかく数が多すぎるのだ。雨後の筍やボウフラの如く、倒しても倒しても次々に湧いてくる。

先述の通り実力は大了たことはないとはいえ、人海戦術でこられると厄介であった。それは、リンダたちに視線を移せば一目瞭然。

「はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

「っ！ 全く、次から次へと……」

リンダ、ノルン、ボアの三人が肩で息をし始めていた。チキにはまだそういった兆候は見えないものの、この状況にうんざりしているとか辟易しているような様子を感じ取れていた。

（全く、あのド三下らしく性根の腐った厭らしい手を使ってくるな）

苛立ちながら内心で悪態をつく。そうしながら、状況を打破するためにガレスはあることを決めた。

「おい」

少し離れたところで固まっているリンダたち三人にガレスが話しかける。

「何？」

額に滲んだ汗を拭いながらリンダが答えた。と、ガレスがクイツと首を捻って先への階段を示す。

「お前たち、先に行け」

「はあ!？」

何を言ってるのかといった声色でリンダが驚いた。ボアとノルンも言葉こそ出さな  
いものの、表情はリンダと同じように驚愕に彩られている。

「誘っているのか抜けているのかわからんが、幸いにして進行方向は手薄だ。お前たち  
だけでもどうにかなるだろう」

「いや、ガレスさんは？」

「俺か？ 俺は決まっている。こいつらを叩き潰すだけだ」

「バカな！ これだけの数を相手にか！」

ボアがなお驚きの表情のまま絶句したが、ガレスはいつもと変りない。

「こんな連中、物の数にも入らん。それに、揃いも揃って肩で息をしている連中に心配さ  
れる筋合いはない」

「でも…」

リンダが食い下がろうとするが、

「いいからさっさと行け」

ガレスの返答は何処までも冷たかった。

「さっきも言ったが、ここでガス欠になったら意味がない。それに正直、お前たちは邪魔  
でしかない」

「なッ！」

リンダがまた憤怒に表情を歪ませる。だが、ガレスはそれすらも黙殺した。相手をしていられるのも面倒なのである。

「いいから行け。いい加減にしとかないと、貴様たちも巻き込むぞ」

「わ、わかりました！」

「では、任せるぞ」

ガレスの雰囲気が変わったのを感じ取ったノルンとボアがリンダを左右から押さえつけ、引き摺るようにして先へと向かった。

「うっっ……！」

リンダはリンダで納得してはいないが、あくまでも標的はガーネフということもあつて何とか抑えているような状態だった。歯ぎしりをしながらもノルンとボアに抱えられ、引き摺られるようにして暗闇へと消えていった。

「唸っている場合か、あのバカが……」

そんなリンダを呆れながら見送ると、ガレスは自分以外に唯一残されたチキに下がるようにジェスチャーをする。一連のやり取りが聞こえていたために状況を理解していたチキは変身を解くと、ガレスの指示通りに少し下がった。

『くくくくく……』



暗闇から同じ声色の不気味な笑い声が幾つも聞こえてくる。その不快な笑い声とこのテーベの暗く重苦しい雰囲気、チキは益々不機嫌そうな顔になった。そんな中、暗闇から一人、また一人とガーネフが現れる。無論、ガーネフ本人ではなくその分身である。その証拠に、マフィーを持っていない。

またもや大量に姿を現したガーネフに流石に鬱陶しくなったガレスがフルヘルムの下で表情を歪める。それがわかつたわけでもないだろうが、まるで計ったかのように集団のガーネフが一齐に笑い出した。

「くくく、どうした？ ミロアの娘を先に行かせたようだが、捨て石にでもなるつもりか？」

「貴様がそんな殊勝な考えの持ち主だったとはな」

「何、心配するな」

「すぐに貴様と同じところに送ってやる」

「儂を侮辱した罪、死んでから悔やむがいい」

そしてガーネフたちの不快な笑い声が木霊する。その不快さにチキがこれ以上ないほど機嫌を悪くしてブレスで焼き払おうとしたが、再びガレスに止められて不承不承ではあるが思い止まった。

「…言いたいことはそれだけか？」

チキを制した後、自分を取り囲む無数のガーネフに対し、ガレスは静かにそう尋ねる。  
「何?」

「魔王などという肩書がついているからどれほどかと思つたら、やはり貴様は三下だな」  
「貴様ツ!」

この状況下でも変わらぬ侮辱にガーネフの表情が憤怒に染まつた。

(ちよつと突いただけでこれとはな…)

高が知れるとガレスは内心で呆れていた。だからこそ、師匠に人格を見抜かれたぐら  
いで狂つてしまい闇に堕ちたのだろう。

(もつとも、その件に関しては俺がどうこう言える筋合いでもないがな)

自身もラシュデイの甘言に乗つて暗黒道に堕ちたことと引き換えに力を得た身。そ  
の件に関してはガーネフを攻める資格は少なくともガレスにはない。

だが、だからこそなのか

(本当にイラつく。まるで、己の所業を鏡に映し出されているかのような)

イライラは頂点に達していた。だからこそ、目の前からさつさとこのイライラの元凶  
を排除したかった。例えばそれがガキの我儘と何も変わらなくとも。

そんなガレスの心情がわかるわけもなく、無数のガーネフたちは一斉に構える。

『殺すツ!』

口を揃え、同じことを言うガーネフたち。だが、ガレスは微動だにしない。どころか、いつものように咽喉の奥で笑いだす。

「何が可笑しい!」

「殺すだど? 貴様が? 俺を? この、身の程知らずが」

「ほざけ!」

「貴様一人で何が出来る!」

「貴様こそ、俺が何故その竜のお姫様以外を先に行かせたのかわからないのか?」

「何だど!」

そこで、不意に石畳の床に何かの紋様が走り始めた。

「な、何これ?」

一人傍観者状態のチキがそれに気付いてガレスに視線を向けた。だが、ガレスはチキに振り返ることはせず、楽しそうに笑っている。

「邪魔だからだ、あいつらがいるとな。貴様を…貴様たちを皆殺しにするにはな」

石畳に走る紋様がゆっくりと何かを形作っていく。赤黒く光るそれに、ガーネフたちもようやく気がつき始めた。

「ハ、ハ、これは」

「貴様、一体何を!」

「やつと気づいたのか？ やはり貴様は三下だ」

「クッ！」

いきなり感じ始めた悪寒がどんどん強くなったガーネフたちが、魔法を連発する。だが、

「遅い」

赤黒く光る紋様がガレスを中心とした五芒星の魔法陣として形を成した時、ガレスの真紅の瞳が光った。そして、

「死ね！」

「な、何だ!？」

テーベの神殿の入り口付近の敵の掃討を終えたマルスたちが、ガレスたちの後を追って階段を駆け上っていく。そして、もう少して今駆け上っている階段を上り切ろうかというところで、不意にその先にあるであろうフロアから赤黒い光の奔流が立ち上り、そして消えていった。

「今のは一体……」

呟いたマルスを始め、全員が呆気に取られていたが、ここは敵地であり今は戦闘中であることをいち早く思い出したマルスが号令をかける。

「考えるのは後だ。みんな、行くぞ！」

『はい！』

全員を引き連れ階段を駆け上ったマルスたち。そこで見たものは、チキとガレス。そしてガレスの周囲に無数に舞い散る魔道士のローブだった。

「チキ！」

チキの無事を確認したマルスがチキの許に慌てて駆け寄る。アリテイアの騎士たちを始め、部隊の半数がマルスに続いた。

「無事だったかい？」

「うん！」

ニッコリ微笑んで元気に返事をするチキに、マルスがここで何があったのかを尋ねようとしたのとほぼ同時に、

「くっ！」

ハーデインが舌打ちするのが聞こえ、慌てて振り返った。そこには、どこから出てきたのかまた数人のガーネフの姿があった。

「！・ガーネフ！」

ガーネフの姿を確認したマルスたちが武器を構えようとするが、

「だいいじよぶだよ」

チキがそれを押し留める。

「どうしてだい？」

「だって、ガレスが皆やつつけてくれるもん」

チキがそう答えるのとほぼ同時に、

「貴様らは引つ込んでいろ」

という、遠慮会釈のない言葉がガレスからハーディンたちに浴びせられた。

「何だ?!」

いきなりの、侮辱と取られても仕方のない物言いにハーディン以下マルスと共にチキの許に向かわなかった指揮官級の間人間が総じてムツとした表情をする。だが、ガーネフたちもハーディンや、ましてマルスですら目に入らない。その昏く、濁った瞳が今映すのは只一人。自分と同じように暗黒道に堕ちた目の前の黒騎士のみである。

「こゝ、殺す!」

「クロスクロスクロス!」

「バカが、分身とはいえとうとう正気も保てなくなったか。先ほどと同じく、死ぬのは貴様らだ」

「死ね!」

無数に現れたガーネフたちがそれぞれガレスに魔法を浴びせた。逃げ場のない魔法

の嵐の直撃を受け、ガレスはその身を魔法に包まれる。

『ガレス!』

無数の魔法の直撃をくらったガレスに、マルスたちが顔面蒼白になった。対照的に、ガーネフたちは厭らしく笑う。が、そのガーネフたちの足元に再び赤黒いエネルギーの奔流が走った。

「! な、何だ、これ!？」

「動いちやダメだよ。もし動いたら、一緒にやられちゃうから」

マルスたちが突然起こった予想外の事態に驚きの声を上げたものの、チキにそう諭されたためその場から動こうとはしなかった。だがそれはガーネフたちも同じだったように、パニックに陥っていた。

「こ、これは!？」

「バカな、あれだけの魔法をくらって!」

「な、何故だ! 何故消えん」

「クククククク…」

自分たち以外の笑い声が響き渡り、ガーネフたちがハツとして顔を向ける。そこには、確かに無数の魔法に包まれて消し炭になったはずのガレスの姿があった。

「クク、どうだ? 一瞬とはいえない夢が見れただろう?」

『クッ！』

憤怒に表情を歪めたガーネフたちが再び魔法を放とうとするも、その時には先ほどと同じくガレスを中心とする五芒星の魔法陣が完成していた。

「イービルデッド！」

ガレスがサタンブローバーを振り上げる。直後、魔法陣から赤黒いエネルギーの奔流が無数に吹き上がり、ガーネフたちを弾き飛ばした。

『グオオオオッ……』

人とは思えないような断末魔の悲鳴を上げながら、エネルギーの奔流に包まれたガーネフたちはその姿を消していく。無数のガーネフはすぐに消え去り、そして周囲は再び静寂に包まれていた。

『……』

何度も見せつけられてはいるものの、やはり規格外の力を見せつけられると呆然とするものである。後から来たマルスたちは微動だにできずガレスに視線を向けることしかできなかつた。そんな中、

「ガレスー」

唯一この中で一度目を目の当たりにしてたチキがトコトコとガレスの許に向かう。それが合図になったかのように、他の面々もガレスの許へと向かった。



「終わったの？」

ガレスの許に辿り着いたチキがガレスを見上げて尋ねる。

「さあな」

尋ねられたガレスもそう答えるしかなかった。ガーネフが分身をどの程度作れるのかなどガレスにわかるわけではないからだ。これで打ち止めかもしれないし、まだ分身が出てくるかもしれない。

（まあ、その時はこいつらに任せるか）

十分に露払いの役目は全うしたと自負するガレスが、己の許へ集まってくるマルスたちの顔を見ながらそう思った。

「が、ガレス……」

チキに追従するようにガレスの許に集まったものの、どう反応したらいいのかわからずにマルスが口を濁した。他の面々も同様に、何を言っているのかわからないといった感じで遠巻きにガレスに視線を向けている。と、

「行け」

ガレスがクイツと奥を指さした。

「え？」

「ここにいない他の連中は先に行っている。もう決着がついているかもしれないが、そう

じゃないかもしれん。お前らの援護が必要になっていくかもしれないぞ」

「あ、そ、そうか」

ガレスに諭されてそれに気付くと、マルスが表情を引き締めて振り返った。

「ガーネフの許に向かうよ。リンダたちの援護を！」

『おお！』

明確な次の指針を示されたことで他の面々の士気が上がり、隊列を整えて次々に奥へと向かった。

「後はお前たちに任せる。俺は疲れたから少し休むぞ」

「うん、わかった」

マルスが頷くのを確認した後、ガレスが自分に引っ付いて離れないチキの背中をポンと叩いた。

「お前も行け」

「え、でも…」

チキが困った表情になって逡巡する。ガレスが心配なのだろう。そんなチキに言い聞かせるかのようにガレスが言葉を続ける。

「お前の力は大きな戦力だ。ここで腐らせるのは惜しい。マルスたちの力になってやれ」

「だって…でも…」

「心配するな。少し休んだらすぐに向かう」

まさしく子供に言い聞かせるようにガレスが諭した。

「ホント？」

「ああ」

「絶対だよ？」

「わかっている。約束は破らん」

「…わかった」

まだガレスのことが心配な様子の子キだったが、再三の説得にようやく頷き、そのままマルスたちと共に奥へと向かったのだった。

「やれやれ」

マルスたちを見送って一人になった後、ガレスは大きく息を吐くとその場にどつかと腰を下ろした。刹那、身体がグラリと揺れる。

(ツ！)

慌てて石畳に手を着き、倒れそうになる身体をガレスは支えた。

(少し無茶をし過ぎたか…)

戦っている間はそうは思わなかったが、やはり身体は正直というところであろう。ダ

メージがガレスを襲った。とは言え実は、このダメージはガーネフとの戦いで負ったものではない。ではどう言うことかといえは、

(大急ぎで分身を創ったからな)

これが原因だった。先ほど、無数のガーネフたちの魔法の一斉攻撃に平然としていたガレスだが、こういうからくりがあったのだ。瞬時に自身の分身を創り出し、マトリョーシカよろしくそれを自身に被せて鎧としていたのである。そしてその、言うなれば外皮が燃え尽きたところでイービルデッドを放ち、ガーネフを皆殺しにしたのだ。その反動が今、ガレスの身体に襲い掛かっているのである。

「まあいい。俺の仕事としては十分だろう」

そして、上を見上げた。

「後はあの跳ねっ返りが勝てるかどうかだ」

現状どうなっているかはわからないが、何かといえはすぐに嘔みついてくるリンダを思い浮かべるとガレスは大きく息を吐いたのだった。

「くくく、愚か者が来おったか」

「！ ガーネフ……！」

時間を少し巻き戻しガレスと別れた少し後、リンダたちはテーベの神殿の奥で遂に本物のガーネフと対峙していた。

「あの男は儂の分身ともと遊んでいるようだな…」

辿り着いた一行の中にガレスの姿が見えないことに気付いたガーネフが少しだけ残念そうに呟いた。だが、それも一瞬

「くくく、まあよい」

すぐに厭らしい笑みを浮かべてガーネフが舌なめずりをした。

「まずは貴様たちから血祭りにあげてやるわ」

「それはこっちのセリフよ！」

スターライトの魔導書を手に持ち、リンダが一步前に進む。

「お父様の仇、ここで取らせてもらおうわ！」

「父…だと？」

ガーネフが少し考えこむが、すぐに再び厭らしい笑みを浮かべた。

「そうか小娘！ 貴様ミロアの娘か！」

「だったら何?!」

「くくく、そうかそうか」

何が可笑しいのかは知らないが、ガーネフが呵々大笑した。笑われている意味がわか

らず、そしてそれ以上に仇に嘲笑されていることが我慢ならずにリンダがガーネフを睨んだ。

「何が可笑しいの！」

「くくく、これが笑わずにいられるか」

ようやく笑いを収めると、ガーネフは血も凍るような殺気の籠った目つきでリンダを睨んだ。

「貴様の父であるミロアでさえ、我が前に屈した。娘である貴様が儂に勝てると思うのか」

「バカにしないで！ 私だって魔道士のはしくれよ！ それに、今はこれがあるわ！」

そしてリンダは己の手に持つスターライトをガーネフに見せつける。

「ほう、スターライトか……」

だがガーネフは特段取り乱す様子もなかった。

「ガトーめ、余計な真似をしてくれる。……だが、いかにその魔法が我がマフーを敗れる唯一のものだとしても、貴様のような半人前にマフーが敗れるかな？ 貴様の父であるミ

ロアならいざ知らず」

「それは、やってみればわかるわ」

「くく、確かにな」

リンダに相對するかのようになり、ガーネフもマフーを取り出した。

「安心しろ、すぐに父親の許へ送ってくれる」

「それは貴方よ、ガーネフ！ あの世界で父に詫びなさい！」

「生意気な小娘が……！」

双方ともに魔力を高めてゆく。ここまでリンダの脇を固める（兼、ここまで無理矢理に引つ張つてきた）役割だったボアとノルンは少し離れた場所であたりを注意深く警戒しながらこの戦いを見守っていた。

助力になるなら置いといておくにしても手を貸したかったところではあるが、マフーの前にはスタースライト以外は一切の抵抗が無駄なことを考えると、それすらもできない。傍観者に徹するしかなかった。

「ぬうっ！」

「はああっ！」

ガーネフとリンダがほぼ同時に魔力を高めた魔法を放つ。流石にマフーを破ることのできる唯一の手段とあつて一方的に攻撃こそされることはないものの、ガーネフの魔力は簡単に打ち破れるものではなく、二つの魔法はお互いの中間点でせめぎ合った。そして、お互い中和されたかのように弾け飛ぶ。

『くっっ！』

その結果に、お互いが齒噛みして悔しさに表情を歪めた。

(尻の青い小娘だと思っていたが、流石にミロアの血を引いているだけのことはあるか)  
(強い！ お父様と並び称されるだけのことはあるわ)

ガーネフ、リンダ共に額に汗を滲ませながら再び詠唱に入った。お互い相手のスキを探りながら数度魔法を撃ち、ジリジリとした消耗戦に入ろうとしたところでマルスたちが合流した。

「ボア司祭！ ノルン！」

「おお、マルス王子！」

「マルス様！」

焦れた雰囲気と緊張が張り詰めていたボアとノルンが、援軍の到着にこれ以上ないほどホツとした表情になった。

「遅れてすまない、状況は？」

「あの通りです」

ノルンが指し示した先には、大きく肩で息をしているガーネフとリンダの姿があった。

「はあ…はあ…」



「ふう…ふう…」

一目見ても、どちらも体力の消耗が激しいのがわかる状態であった。

「スターライトが効かないのかい？」

「いえ、効いてはいます。効いてはいるんですが…」

「同じぐらい、リンダも消耗しているのじゃ。せめてもう少し、魔道士としての実力が備わっていれば押し切れたとは思うが…」

「負ける…と?」

「いや…」

ボアが否定する。だが、その顔色は優れなかった。

「このままいけばお互いにジリ貧の体力勝負となる。そうなれば、リンダには勝ち目はあるまい。リンダが勝つには、その前にケリをつける他はない」

ボアの非情ともいえる宣告に、解放軍の面々の表情が一瞬で固くなった。そんな中、二人の一騎打ちは終焉を迎えようとしている。

「いつまでも鬱陶しい！ そろそろ大人しくあの世へ行け！」

「冗談！ 行くなら貴方一人で行ってよ。私は御免だわ！」

そして、

「マフー！」

「スターライト!」

何度目かの火花が散り、また魔力と魔力のせめぎあいが行われる。

「ぬう!」

「くっ!」

ここまでは今までと同じだったが、ここからが違った。これまで何度も撃ち合っても互角だったため、お互いにこれを最後とばかりに全魔力での攻撃を放ったのである。その魔力の衝撃波に、解放軍の面々の何割かは吹き飛んで転がったぐらいだった。

「くうううっ……!」

「ちいいいっ……!」

お互い、意地と体力と魔力をかけて全身全霊のマフーとスターライトを放つ。中間地点でせめぎ合うお互いの魔法だったが、徐々に趨勢が見えてきた。

「くっ!」

リンダが苦悶の表情を浮かべて膝を着く。その姿を見たガーネフが、ニヤリと笑った。と言つても、ガーネフ自身も体力・魔力共に限界が近づいているために余裕はほぼなかったのだが。

だが、スターライトの使い手であるリンダさえ倒してしまえば、マフーがこの手にある以上、後はどうとでもなる。それがわかっているからこそその笑みだった。対して、

(ち、力が…)

リンダは想像以上に消耗していた。こと魔力で言えばほぼ互角と言つてもよかつたが、成人を超えた男性と年端もいかなない少女の体力の差が出た格好となつていた。押し切られるかのように己を包もうとする魔力が迫ってくる。

(お父様…)

不意にリンダの脳内に父親の姿が浮かび上がった。まるで走馬灯のように。記憶の中の父はいつも優しくかつた。そして、その父がガーネフに敗れ生命を失うシーンが蘇る。

“だが、ガーネフは強敵ぞ。もしかしたらお主の父であるミロアと同じ運命を辿るかもしれない。それでもいいのか?”

“はい。覚悟はできています。それでも、私はやらなければなりません”

次に浮かんできたのは、この戦いの前、マケドニアの村でのガトーとのやり取りだった。そして今、現実にはガトーが危惧した通りリンダは父ミロアと同じ運命を辿ろうとしている。

(が、ガトー様、すみません)

脳内に浮かんだガトーに、リンダが申し訳なきから謝罪した。

(私では、ダメだったみたいです)

(そうか)

するとなんと、脳裏に浮かんだガトーが記憶のものとは全くの違った行動をとり始めた。

(え？ ガトー様?)

朦朧とする意識の中、リンダが脳裏に浮かんだガトーに問いかける。と、ガトーが笑みを浮かべた。しかし、それはマルスたちが浮かべるような温かいものではなく、ガトーが浮かべるような厭らしいものだった。と、その厭らしい笑みを浮かべたガトーがぐにやりと歪んで瞬く間に真っ黒な闇の塊となった。そして、

(やはり、俺が始末するべきだったか)

闇の塊が瞬時に別の人物の形を形どる。そこに現れたのは、黒騎士ガレスの姿だった。突然リンダの脳内に現れたガレスは、侮蔑するような態度でリンダを嘲笑する。

(まあ、お前がくたばったら俺が後始末をしてやる。だから、安心してとつとつとくたばれ)

脳内に浮かんだガレスのその態度、そのセリフが引き金となり、折れかけたリンダの心が立ち直った。

「ッ！ 誰が！」

ほぼ半分意識を飛ばし掛けながらも犬歯を食いしばり、リンダが限界を超えた。

「な、何ッ!？」

その予想外の反撃にガーネフも驚きを隠せない。そして、

「誰が、あんたなんかにッ!」

覚醒とも火事場の馬鹿力ともいえる魔力を放出し、リンダのスターライトがガーネフのマフーを呑み込んだのだった。

「ば、バカなッ! ぐ、ぎゃあああああッ!」

断末魔の悲鳴を上げ、ガーネフはスターライトの光に呑まれた。眩いばかりの光にマルスたちが思わず目を閉じ、そして次にその目を開いたときにはガーネフの姿はすでなく、全ての力を使い果たしたのか石畳に倒れ伏しているリンダの姿だけがそこにあった。

「リンダ!」

マルスたちが慌ててリンダの許に駆け寄る。すぐにレナがリンダの容体を調べた。

「レナ、どうだい?」

「大分消耗しています。呼吸や脈拍の反応はありますが、決して楽観視はできません。すぐに後方に運んだ方が良いかと」

「わかった、それじゃあ」

マルスが指示を出そうと顔を上げたところで、目の前の光景に度肝を抜かれ思わず叫

んだ。

「が、ガーネフ！」

『えっ!?!』

驚いて他の面々もマルスが視線を向けた方向に目を向けると、そこには身体の左半分が吹き飛んだガーネフの姿があつた。

「死ね！」

狂気の憎しみに彩られたガーネフが、ターゲットは誰でもいいとばかりにマファーを使おうとする。全員が死を予感した次の瞬間、何かが飛来してその身体を真っ二つにした。

「ぎゃああああああっ！」

長い、身の毛もよだつような悍ましい断末摩の悲鳴を上げ、今度こそガーネフはその生命が尽きたのだつた。そして、ガーネフの身体を両断したなにかは、飛来音だけを残して闇の中へと消えていった。

「な、何だ!?!」

「今のは一体!?!」

他の面々が混乱する中、マルスだけはそれに心当たり上がった。

(今のは…)

不意に、マルスが階下へと視線を向ける。そこにあるのは当然闇なのだが、その先にはいるはずのガレスへとマルスへの視線は向かつていた。

「フツ！」

何かをキャッチしたガレスが思わずその衝撃に息を漏らした。そして、実に楽しそうに咽喉の奥で笑う。

「ククク、成る程、いい仕事だ」

キャッチしたそれ：サタンブローバーを繁々と眺めたガレスが満足そうに頷いていた。先ほどガーネフの身体を真つ二つにして絶命させたのは、ガレスの投げたこのサタンブローバーなのである。

（大賢者とかいう大層な肩書はハツタリではなかったわけだ）

ガレスは少し前のガトーとの会見のことを思い出していた。何か一つ願いをかなえてやるといったガトーに対して、ガレスは己の得物であるサタンブローバーに投擲斧としての特性を付与するように依頼したのだった。

これまでも何度かサタンブローバーを投げたことはあるが、投擲斧としての特性はないため、投げたら一々取りに向かわなければならなかった。その手間が省けたことで飛躍的に使い勝手が良くなる。その性能の試験として、今ガレスはガーネフへとサタンブ

ローバーを投げたのだった。そしてサタンブローバーは、ガレスの狙い通りガーネフの生命を奪い、ブーメランのように戻ってきてキャッチしたというわけである。

「クツクツクツ…」

いつものように咽喉の奥で楽しそうに笑うガレス。と、

「…貴方は？」

不意に見知らぬ声が聞こえた。

「ん？」

聞いたことのない声…それも、若い女性の声に振り返ると、身なりの整った気品のあつる少女の姿があつた。

「？ 誰だ？」

見たことのない女性の姿に怪訝な表情になるガレスだったが、すぐにお付きと思われ兵士に促されてその場を去って行く。

「エリス様、お早く！ マルス様がお待ちです！」

「え、ええ。わかりました」

ガレスに後ろ髪を引かれるのか、何度か後方を気にしながらもその女性…エリスは兵士に護衛されながらテーベを駆け上つていった。

（そうか、あれがマルスの姉か…）



陣中で誰かから何度か聞いたことのあるその名前を思い出しながら、ガレスはエリスを見送ったのだった。

## NO. 29 その先に待つもの

テーベでの激戦を制し、遂にあのガーネフを倒してマルスは神剣ファルシオンと姉であるエリスを取り戻した。だが、その喜びに浸ることもなく次の地へと向かわねばならない。次の、そして最終の目標地点はドルーア。竜人族：マムクートの王国と言われている神秘に包まれた国である。

解放軍はテーベより出立すると、道々に物資の補給や兵士たちの補充などを行いながら一路ドルーアを目指す。長かったこの戦いも遂に最終局面を迎えようとする中、戦後のことを考える声も少しずつだが上がってきた。

軍へのスカウト

正規軍からの除隊

新たな地への旅立ち

敗戦国の扱い

国家間の関係修復や再構築

等々、他にも細かいことまで言えば実に多岐にわたるが、こういった声がちらほらと陣中で聞こえるようになってきていた。無論、気が早いことであり、勝つのを前提とし

ているあたりこういった油断が非常に危険なのは当然のことなのだが、次を見るのはあの意味当然であり、仕方のないことといえた。

そんな中、あの黒騎士の周囲でも色々と動きはあるものである。

「よお、大将」

「ん？」

陣中を歩いている時に不意に声をかけられ、ガレスは振り返った。するとそこには、ジェイクとベックのシューターコンビが肩を並べていた。

「貴様たちか……」

立ち止まると、ガレスが振り返る。

「何か用か？」

「おいおい、ご挨拶だな」

つれない返答に、ジェイクがやれやれとばかりに肩を竦めた。

「最近、御無沙汰だったからご挨拶したのによ」

「貴様らにとつてはそうかもしれないがな……」

心なしか、少々うんざりしたような口調でガレスが答えた。

「どうかしたのかい？」

ガレスの態度に引つかかったものを感じたベックが首を捻る。

「テーベからここまで、最近やたらと色んな連中が粉をかけてくる。だから、正直鬱陶しい……」

「ああ……」

「そういうことか……」

事情を理解したジエイクとベックが苦笑した。

「モテるねえ、全く」

「下らんことを言うな」

「まあ、それだけ貴方の実力が評価されてるってことさ。実力がなければ、誰も声なんかかけないだろう？」

「さつきも言ったが、鬱陶しいだけだ」

本音なのだろうが、やれやれといった感じでベックとジエイクがお互い顔を見合わせた。

「ま、仕方ないさ。人格はともかく、実力ならあんたは頭抜けてるんだ。今のうちに唾つきたいって思う陣営がいたって不思議じゃないだろう？」

「俺など抱え込んだところで、火種にしかなるまい」

「それでも抱え込みたい事情っていうのがあるところはあるんじゃないか？」  
「…確かにな」

ガレスの脳裏に、マケドニアでの決戦前のある記憶がよみがえった。が、とりあえずそれは置いておく。

「では、貴様たちの用件は？」

「いやあ、今までの流れからは言いにくいんですけど…」

「とはいえ、大の男二人がモジモジしてても気色悪いだけなので、ハッキリ言うことにする」

「ああ」

半ば以上、二人が何を言いたいのかわかったガレスだが、二人が言うのであればと話を遮らずに待つことにした。

「あー…その、だ。この戦争が終わったら、俺らと気ままに旅でもしないか？」  
「断る」

即断の回答だが、半ば以上こうなるとわかっていたジエイクとベックはガツカリというよりやつぱりといった表情になっていた。

「あー、やつぱり…」

「ま、そうなるか」

残念ではあるが仕方ないとも思いつつ、ジエイクとベックはこれ以上食い下がりはしなかった。話の流れでこうなるのはわかっていたし、いくら食い下がってもガレスが首を縦に振るとは思わなかったからだ。

「わかったよ。悪かったな」

「では、ついでに一つ聞かせてくれないか?」

「何だ?」

「貴方、この戦いが終わったらどうするつもりだ?」

ベックの問いかけにガレスは一瞬口を噤むが、すぐに、

「さあな」

と、答えた。

「その時になってみればわかる。そして、その時になってみなければわからん」

「答えになつてゐるのかなつてないのかわからない返答だねえ」

「言うな」

ガレスがいつものように咽喉の奥で笑った。

「上手いこと煙に巻いたつもりだったんだ。お前らも察して煙に巻かれてろ」

「何だそりゃ」

三人顔を見合わせ、互いに苦笑しあう。

「まあ、あんたの意思はわかったよ。こつちとしても、ダメ元だったからダメージも少ないしな」

「ひよつとして他の連中から声かけられてるって言うのも、似たような用件だったりするのかわ？」

「察しが良いな。その通りだ」

ベックの質問にガレスが頷いた。

「余程物好きが多いのか、戦後に色々と誘われててな」

「さつきも言ったけど、それだけ皆あんたを買ってるってことさ」

「この軍に変わり者しかいないことの間違いだろうか？」

「まあ、その側面がないとは言わないけど、他の誰もあんたに言われたくはないと思ってるだろうよ」

「そうだな。違う世界の住人なのだからな」

「クク、違うない」

そこで再び三人は苦笑しあつた。

「わかつたよ。あんたにその気がないんならどうしようもないな。今俺たちが言ったことは忘れてくれ」

「ただ、忠告ってわけじゃないけど身の振り方だけは少なからず考えといたほうが良い」

「ああ」

「んじやあな」

「失礼」

軽く手を挙げると、ジエイクとベックはガレスの許を去って行った。

（身の振り方……か）

少しの間二人の後ろ姿を見送った後、二人に背を向けて歩き出しながらガレスが考える。先ほど言ったように、テーベを出立してからこちら、接触してくる人間が多くなった。そして、そのほとんどがさっきのジエイクとベックと同じような用件だったのである。

ダロス、バヌトウ、シーザにラデイ、アテナ、エツツエル、ユミル等々、色々な人物から戦後の誘いを受けていた。が、その度にガレスは先ほどのような返答を返して断っていたのである。

（連中にどういう意図があるのかは知らんが……）

あるいは意図などなく、純粹に厚意で誘ってくれているのかもしれないが、自身がどういう存在かわかっている以上、そういう認識でいるのは流石に能天気すぎるといってものである。自身を抱え込んだことで余計な火種を抱えさせることにもなりかねないので断っているという側面もあるのだが。



(戦後……か)

そんなことを考えているとふと、目の前に迫りつつあるそのことを考えてしまう。先のことを見過ぎて足元を取られてしまつては元も子もないが、だからといって負けることを前提で戦いなど行わない。勝つことを前提としている以上、その先へ目を向けるのも当然のことであつた。

(そう言えば……)

戦後を考えた時、不意にもつとも重要な人物の顔が思い浮かんだ。そして、その人物に最近お目にかかつていないことも。

(……)機嫌伺いがてら様子でも見に行つてやるか。最期の御奉公だ)

我ながら柄にもない……そんなことを思うガレスだったが、これも最後が近づいているからこそか。そんなことを考えながらガレスは踵を返したのだつた。

陣中、とある天幕。

数ある天幕の中で最も嚴重に警備された天幕の中で、あまりすぐれない表情で座つているこの天幕の主がいた。

「ふう……」

その人物：ニーナがもう何度目かになるかわからない溜め息をつく。ガーネフを倒し、残るはメデイウスのみ。それを考えれば嬉しくないはずはない。嬉しくないはずはないのだが、やはりどうしてもある人物の面影を追い求めてしまっていた。

(カミュ…)

情けないことだとは思う。しかし、いつからか芽生えたその恋慕の情は未だに失せることがない。もう死んでしまったのに：いやだからこそ、心に残る恋慕の情は日に日に大きくなっていた。

(ああ…)

叶うならばもう一度逢いたい。しかし、それはできない。カミュはグルニアの決戦において戦死したのである。だからこそ、どこかで区切りをつけなければいけないのに、そのどこかが何時までも迎えられなかった。

(……)

浮かぬ表情のまま鬱々とした時間を過ごしていると、不意に天幕の外で人が倒れるような音が聞こえてきた。

(?)

その音に気付いたニーナがどうしたのかと思っていると、突然、

「いるか？」

と、天幕の外から声をかけられる。

(！)

一瞬ビックリしたニーナだったが、その声色が自分のよく知っている人物のものだと  
気付き、ホッとした表情になって

「ええ」

と、返した。すると音もなく天幕の入り口が開き、ニーナの予想通りの人物が現れる。

「久しぶりね」

その人物…ガレスの姿を見たニーナが軽く微笑んだ。

「そうだな」

ガレスも頷いて返答する。

「外に見張りの者たちがいたはずだけど、貴方何かした？」

「ああ。少し眠ってもらった」

「まあ…」

悪びれもしないその態度に、ニーナがクスクスと笑った。

「相変わらず酷い人」

「抜かせ。そんなのはとっくにわかっていることだろうが」

「確かにね」

再びニーナがクスクスと笑った。

「それで、どうしたの？」

ニーナが突然の訪問の理由を尋ねる。

「何、ちよつとしたご機嫌伺いだ」

「何それ」

ガレスの返答を聞いたニーナが三度クスクスと笑った。

「貴方、そんな殊勝な人物じゃないでしょう？」

「言ってくれるな……」

遠慮会釈のない物言いに、ガレスがフルヘルムの下で目を丸くしながら驚いていた。

「お前こそ、そんなに悪戯好きというか、意地の悪い性格ではないと思ったが」

「そう？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらニーナが尋ねる。

「俺の知ってる限りではな」

「ふふ、ごめんなさい。久しぶりだったから少し意地悪したくなっちゃったのかもしれない  
ません」

「何だそれは」

「ふふふ……」

ニーナの返答に毒気を抜かれ、そんなガレスがまた面白かったのか、またもニーナがクスクス笑った。

「俺がお前と交流するのを快く思わない連中がほとんどだからな。無駄に面倒なことになるのを避けるためには仕方ないだろう」

「ええ、わかっています。一応は味方だけど、危険極まりない上に身元ですら不確かな危険人物ですもの。アカネイアの重臣だけでなく他の者たちも私と貴方が接触するのが好まないのも当然ね」

「…性格だけでなく、随分遠慮なくものを言うようになったものだ」

「ふふ、ごめんなさい。…何故かしらね、貴方にはこんな感じになってしまふのよね」

本当に不思議…と呟いたニーナ。そして今までの様子を観察していたガレスは、随分とニーナの様子が安定していると思っていた。もともと、これも演技の可能性も十分あるのだから樂觀はできないが。

「でも…」

不意に、ニーナの表情が引き締まってその口元が呟く。

「ん?」

「でも、本当にご機嫌伺いに来てくれたの?」

「ああ」

「そう、ありがとう」

ニーナが微笑んだ。そしてその微笑みは今までの何処か作ったようなものではなく、本当に自然なものであった。ガレスも思わず戸惑ってしまうほどに。

「少しは気が紛れたか？」

内心でこんなことふうに動揺しているなどは決して悟られぬよう、ガレスがいつも以上に皮肉気な口調でニーナに話しかけた。

「ええ」

ガレスの問いかけにニーナが頷く。

「最近、少し鬱々としていたのは事実だから」

「グルニアの黒騎士の件だな？」

再度のガレスの問いかけにニーナが無言で頷いた。今更隠しても意味がないことだし、どこにも属さないガレスだからこそ隠す必要もなかった。

「こうなることはわかっていました。…でも、ダメですね。いつまでも終わったことを引き摺っているようでは」

「仕方ないことだ」

「え？」

侮蔑か、嘲笑でもされるかと思つて覚悟していたニーナだったが、予想外の同意する

ような意見に呆気にとられていた。

「人の気持ちなど、そう簡単に変わるものでもない。それが真剣なものであれば尚のことな」

「……」

そんなことを言うとは思わなかったのだろう。ビツクリした様子で固まっているニーナに気付いたガレスが、照れ隠しをするかのように咽喉の奥で笑った。

「ククク…俺としたことが、柄にもないことを言ったな」

まあいい。そう続け、ガレスは身を翻す。

「何にせよ、少しは気が紛れたようならいい。だが、いずれ気持ちに折り合いはつけろよ」

「わかっています」

「結構」

邪魔をしたなど最後に言い残し、ガレスはそのまま天幕を後にした。

「ふう…」

ガレスが去って行ったのを見送ったニーナは、大きく息を吐いた。そして、椅子に深々とその身を預ける。

(どういふ風の吹き回しだったのかしら?)

久しぶりに姿を現したガレスが、その理由として述べたのはご機嫌伺いというものだった。だが、ガレスという人間をそれなりにだが知っているニーナにとっては、それを素直に信じることも到底できない。

とは言え、じゃあ何か別の目的があつて、それは一体何なのかと考えてもニーナにはわかるわけはなかった。

(まさか本当に、気に掛けてくれただけ?)

でも、そんな理由でわざわざガレスが動くかしらと考えると、首を捻らざるを得ない。考えても埒が明かない問題に、ニーナはそれ以上考えるのをやめることにした。

(でも…)

先ほどのガレスの会話で、改めて気付いた思いが一つあつた。

(やはり、あの方への想いは気の迷いだったのですね)

オレルアンで敗残兵に蹂躪されかけたところを救われ、オレルアン城での祝勝会で二人で過ごした時間があつた。そう言った経緯から気になる存在であり、折を見て要所要所で交流したり、もつと有り体に言えばガレスと親しげにしている女性の姿を見て面白く思わなかつたこともある。

だがそういつた、ハッキリ言つてしまえば嫉妬の類の気持ちを見せていたニーナで



あつたが、カミュと再会して言葉を交わし、そして悲しみに打ちひしがれていた間にニーナは自分の心に燻るカミュへの恋慕の情がまだ残っていることを嫌というほど自覚していた。と同時に、一時はあれだけ執心だったがガレスのことも、ここで再会するまで思い出さなかつたのである。

そして先ほど再び言葉を交わしたが、ニーナの心には一時期の感情の昂りはもうなかつた。無論、この軍内の他の人間と比べると特別な感情はあるが、それは言うなれば感謝や親しみといったものであつて、決して男と女の感情ではなかつた。だからこそニーナは、ガレスに一時期感じた嫉妬や恋心は、生命を救われたことによる一時の感情の昂りだと判断したのだ。そして、自分の心を捉えて離さないのが誰なのかを再確認したのである。

「……」

ガレスに対する複雑な想いを自覚しながら、ニーナは暫くガレスの去つて行つた天幕の入り口を見つめていたのだつた。

ドルーア城を臨む戦いにガレスの姿はなかつた。最後の屋外戦ということ、これまでの方針通りに騎馬兵、飛行兵を軸に布陣を敷いたため、重騎士であるガレスの出番は

なかつたのだ。

本陣で戦況を見つめながら、ガレスはこれまでとそしてこれからを考える。やがて、解放軍の勝利の鬨の声を耳にしたガレスは己の天幕へと戻っていった。

長かつたようで短かつたこの戦争も、後少し。

## NO. ※※ 黒騎士ガレスについて Vol. 2

【現在の状態】

暗黒道の支配下からの脱却は進んでいるものの、長い間暗黒道に蝕まれていた影響か、根本的な性格の変化はまだ起こっていない。

但し、敵味方関係なく残忍で残虐で苛烈な態度をとることはなくなりつつある。味方に対してまにそういった面を見せることはあるが、あくまでもそういった態度を見せて怯えるさまを見るのが好きなのであり、本気でブチ切れているわけではない。とはいえ、許容範囲を超えれば実力行使を行うこともあるといったところ。敵に対しては言わずもがなである。

基本的に年長者になればなる程受けが悪く、年少者になればなる程懐かれる傾向がある。また、人間よりは他種族に同じく懐かれる傾向がある。

特殊能力、使用行使魔法に関しては特に変更も追加もなし。得物についてはガトーの助力により投擲斧としての特性が追加された。これにより、使い勝手が飛躍的に上昇している。

くく各勢力との現時点での関係くく

アリティア△△

協力を要請したのが他ならぬマルスだが、これまでの戦いで行動から、ガレス自身を余り快く思わない者とそうでない者の二極化の傾向になりつつある。

前者はジェイガン、カイン、アベル、ドーガ。後者はゴードン、ノルンといった面々。他ならぬマルスだが、相変わらずガレスを持って余して一抹の不安を感じながらも、信用してもいいのかも思っている。

その戦闘力で幾多の場面を助けられたことから、油断はしていないが恩義は感じているため、表立って排除するような真似はしていないといった状態。付かず離れずのお互いを利用しあう関係が一番いいと考えている。

アカネイアⅡ×

ニーナがガレスに救われたことについてはアカネイア騎士団の面々は感謝しているが、王家の唯一の生き残りである王女にはあまりにも不釣り合いな人物ということに警戒している。

そのため、どの人員ともおしなべて関係は良くない。その中でまだまじなのがミディ

ア、ホルス。敵視しているのがアストリア、ジョルジュ、トムス、ミシエラン、トーマス。中立がリンダ、ボアといったところ。

また、ニーナ自身のガレスへの想いは大分整理できており、今は命の恩人ということ、他の者よりも少し頼りにしているといったところ。カミュとの再会で、カミュへの愛、思慕の情が再燃したことでガレスに対する想いを自覚した結果である。

オレルアンⅡ×

解放軍結成までニーナを庇護しており、唯一確固たる一勢力としてドルーアに対抗していただけあって、横から掻つ攫つてその周りをうろつく（少なくとも、オレルアン騎士団にとってはそういう認識）ガレスのことはハッキリと敵視している。それは、ハーディンが何かにつけてガレスを見張らせていたことにも出ている。

表面上はお互い関わっていないものの、そういう関係性のために常に緊張感を孕んでいるような状態になっている。ただ、お互いに無駄な揉め事は起こしたくはないので互いに関わらないようにしている。

マケドニアⅡ○

ファーストコンタクトが強烈だったために最初は関係性は悪かった。（特に直接殺されかけたエスト）

しかし、マリアを手傷を負ってまで助けにくれたことで関係性は良化する。

と言つても、ペガサス三姉妹は相変わらずまだ警戒心が強く、ミネルバはそれよりマシといったところ。マリアだけは命の恩人と言うこともあり、また幼さからかガレスの根底を見抜いているのかかなり懐いている様子。それに引きずられるようにしてミネルバや三姉妹たちが距離を詰めているといった感じが一番適切な表現。

グルニア△△

顔見知りとなつているのがロレンスだけのため、特筆事項はなし。今後の展開次第。

タリス△△

シーダとはそれなりに関係が築けているものの、オグマを始めとする战士们はそのことにはあまり快く思っていない。かと言つて、表面的に対立する事態ではないので、有事には行動するがそれまでは静観を決め込んでいる。

その他〓〇〓△

様々な戦いを共に経験する中で、各人共に大分付き合い方というか対処方法がわかってきたこともあり、国家所属の連中と比較してもかなり関係はいい。宮仕えではないというところがいいように働いている。

その中で、交流したい者は交流し、交流を避けたい者は交流を避けているというスタイル。その取捨選択も各人の裁量に委ねられている。

アテナやチキ、バヌトウ、シーザ、ラデイ、ジエイク、ベック、チエイニーなどは大

分交流が深くなっている。特にチキはマリアと双壁を成すガレス大好きっ子。

## NO. 30 もう一人の竜姫

自分があるべき場所とは異なる世界、異なる空間。マルスに率いられた一部隊がそうとしか呼びびようのない場所に今いた。その目の前にそびえ立つのは、荘厳な雰囲気醸し出し、そして何者の侵入を拒むかのような白亜の塔。

マルスたちは今、その中へ足を踏み入れようとしている。この中にいるはずのとある存在の助力を求めて。

ドルーア城周辺の制圧を終え、いよいよドルーア城へと乗り込もうとする解放軍。その指揮をとろうとするマルスの頭に響いてくる声があった。

「マルス、マルスよ。聞こえるか？」

「その声は、ガトー様？」

「うむ」

ガトーがテレパシーを使い、マルスに話しかけてきた。

「何でしょうか？」



“これからどうするつもりじゃ?”

「このまま城内に乗り込み、メデイウスと戦うつもりです」

ハッキリとマルスがそう宣言する。

“ふむ……じゃが今のそなたたちの力では荷が重すぎよう”

「!・ ファルシオンも手に入れ、チキも仲間にしたのに……ですか?」

“うむ”

「メデイウスの力は、それほど強大だと?」

“その通りじゃ”

「……」

ガトーの指摘にマルスは口を噤んでしまった。驕りではなく、今までの戦いの経験や共に戦ってきた頼れる仲間たち。そして、神剣ファルシオンを取り戻したことでメデイウスと互角までとはいかずとも、それなりに対抗できるだけの力は有していると思っていたからだ。そして、その力を結集すればメデイウスの打倒も決して夢物語ではないと思っていただけに、ガトーの指摘に鼻をくじかれるような気がしたのだ。

“故に、そなたたちに儂からの最後の助力を与える。マルスよ、そなたの部隊の中から精鋭を数名選ぶのじゃ”

「え?」

“それを、これより閉ざされた空間へ送り込む”

「閉ざされた空間…ですか？」

予想していなかった展開に、マルスが戸惑いながらもガトーに尋ねた。

“この世界とは、全く異なる次元に存在する空間じゃ。そこにそびえる塔に入り、守り人の試練を乗り越え棺を探すのじゃ”

「棺…ですか？」

“うむ。そしてかの方の御意を得られれば、メデイウスとの戦いに臨むそなたたちにとつて大いなる助力となろう。急ぐのじゃ、マルス”

「は、はい。ガトー様」

突然のことに困惑を隠しきれないマルスだったが、これから相手にするのはメデイウスということもあり、戦力は多いことに越したことはないのでガトーの指示通りに精鋭を選んだ。

そしてマルスとその選ばれた精鋭たちは再びガトーのワープによってとある場所へと運ばれた。それが、この塔のそびえ立つ異世界なのである。

「ここが、ガトー様の言っていた塔…」

塔に一步足を踏み入れたマルスが思わず眩いていた。まるで長い悠久の時間、一人の侵入者も許さなかつたかのように室内に満ちる空気は澄んでいたが、どことなく圧力を感じさせる雰囲気にも満ちていた。そして、マルスの眩きが何処までも反響するかのようにならぬ静寂に満ち満ちていた。しかし……

「王子、塔の中には見知らぬ輩が待ち構えているようですぞ」

付き添いで共にこの世界にやってきたモロドフがそう忠告する。流石に多くの場数を乗り越えてきた老兵だけあつて、その嗅覚は衰えていないのだろう。そして、それと前後するかのようにマルスと共にこの世界にやってきた精鋭たちが纏っていた雰囲気を一変させ戦闘態勢になる。

「……成る程、守り人の試練というわけか」

「はい。どうなさいますか?」

「立ち止まつている余裕はないよ。戦おう。まずは、塔内の制圧を目指すんだ」

マルスの命令に、精鋭たちが各々答える。その中には当然、黒騎士ガレスの姿もあつたのだつた。

「ハッ!」

目の前の敵兵を斬り捨てたガレスが、その感触にフルヘルムの下で不機嫌な表情になつていた。

(全く……)

敵の手ごたえにイライラが募っている。別にこの敵兵が弱いというわけでもない。強さ的にはガレスを満足させてくれているのだが、敵自体に不満があるのだ。まるで影や霞でも切つているかのように消え去つているのである。

「……この連中は幽霊か？」

手ごたえの全くない感触に、ガレスは不満を隠せなかつた。

「文句があるなら後ろに引つ込んでいろ」

ガレスの態度やその戦闘の様子から不満タラタラなのが見て取れたハーディンが牽制するかのよう<sup>に</sup>ガレスを睨み付ける。

「ハーディン公の言う通りだ。気に入らないなら下げれ」

いつの間にか視界に入ってきていたアストリアも同じようにガレスを睨み付けた。もうこの戦争も終わりを迎えようとしているのだが、最後の最後まで彼らとはこういつた関係のままだった。

(面倒な連中だ)

辟易しながらも、ガレスから歩み寄るつもりは毛頭ない。そして事を荒立てて余計に

面倒なことになったらもつと鬱陶しいので、ガレスはこれ幸いと押し付けることにした。

「そうか。だったら貴様らに任せる。俺は殿に回る」

「さっさと行け」

「邪魔だ」

邪険に扱われるガレスだったが、そのまま引つ込んだ。昔のガレスだったら、今頃ハーディンとアストリアの首と胴は離れていただろうが、そんなことになってないあたり随分とまともになっていたものである。

(やれやれ…)

辟易しながら前線から引つ込んだガレス。と、

「あの…」

それを見計らったかのように誰かが話しかけてきた。

(ん?)

声のした方向に振り返ると、そこには見慣れないシスターの姿があった。

(いや…)

見慣れはしないが見たことないわけではないその姿を記憶から呼び起こす。そして、思い出した。

「これはこれは……」

そして、わざとらしく恭しく応対する。

「マルス王子の姉のエリス王女ではありませんか。私めに何か御用ですか？」

「え……あの……」

エリスもガレスに話しかけるにあたり、色々と脳内で会話のシミュレートをしたのだろう。だが、予想とは違った反応が返ってきて戸惑い、二の句が継げないようだった。その二人の間に入るように……いや、正確にはエリスをかばうように緑髪の魔道士が割って入る。

「マリク？」

割って入った、自分のよく知る幼馴染の顔を見上げるエリス。そしてそのマリクは、いつになく厳しい表情でガレスを睨んでいた。

「エリス様、少しお下がりがりください」

「え？ でも……」

「お願いします」

「わ、わかりました」

あまり見たことのないマリクの表情とその強張った口調に、エリスが吞まれたように頷くと数歩下がる。そして、ガレスとマリクの対峙になった途端、

「ククククク…」

いつもの様子になってガレスが咽喉の奥で笑いだした。その一変した雰囲気エリスが小さくだが身を震わせる。

「お姫様を護る騎士の登場か。お前の想い人か？」

「！・ 無礼な！」

あてずっぽうではあるが、実は結構いい線をつけていたガレスの指摘に、マリクが厳しい表情になって睨んだ。内心ではエリスにとつてもマリクにとつても嬉しく、そしてこそばゆいのだが、二人とも流石にそんな心境の変化は表情に出すことはなく、一見は先ほどまでと変わらずにガレスと対峙していた。

「…自分が置かれた立場を考えれば、貴方がこのように扱われるのは当然でしょう」

心境を落ち着かせるためだろうか、コホンと一つ咳ばらいをするとマリクは厳しい視線を更に厳しくする。置かれた立場というのが何なのか一瞬引つかかったエリスだが、先ほどガレスが醸し出した雰囲気を思い出しすぐに理解した。

「ましてエリス様はマルス様の姉君であり、アリティアの王女であらせられる御方。無駄な危険は排除せねばいけません」

「危険…？」

「ええ」

エリスの問いかけにマリクが頷いた。

「エリス様はまだ御存知ではありませんか？ この人物の…ガレスのことを」

「テーベでマルスのところに向かうときに少し顔だけ合わせました。以降、お話をする機会もないので御挨拶だけでもと思って」

「それはありがたいな」

ガレスの返答に、マリクはムツとした表情になった。

「接点がないのはエリス様がこの軍に加入してからまだ時が経ってないこともありましようが、恐らくはマルス様の指示もあるのでしょう」

「だろうな」

「この通り、本人も認めています」

「？ どういうことです？」

今一つ概要が掴めないのだろう、エリスが首を傾げた。

「…ハツキリ申し上げればこの御仁、黒騎士ガレスは我が軍に力を貸してはくれていますが危険人物としてみなされているということですから。故に、マルス様としても極力エリス様とガレスの接点を作りたくないでしょう」

「危険人物？」

「はい。先ほどの一変した空気、エリス様も肌で感じられたはずですよ」



「それは……」

言葉を飲み込み、エリスが頷いた。マリクが言った通り、身が震えた恐怖を確かにガレスから感じ取ったからだ。

「クツクツクツ……」

それを察したのか、ガレスの楽しそうな笑い声にまたエリスが震えあがった。

「まあ、そういうことだ」

そして、そう続ける。

「怖いかな？ 俺が」

「い、いえ、そんなことは……」

「クク、無理をするな。人間であれば当然の感情だからな。自分の理解できないものに恐怖するのは。それに、お前が恐怖を感じていることは正しい」

「え？」

「その気になれば、貴様らをまとめてこの場で殺すことぐらい簡単にできるという意味だ」

「！」

エリスが固まり、マリクが戦闘態勢に入るかの如く構えた。

「ククク、心配するな」

だがガレスは一向に意に介した様子もなくそう答える。

「えっ？」

『その気になれば』と言っただろうか？ 俺にその気はないから安心しろ。お前たち二人をここで殺したところで何がどうなる。死体が二つ増えるだけだ」

「…随分乱暴で尊大な物言いですね」

「クク、今更だ」

「……」

今更なのはそれはその通りだと思ったマリクだが、だからといってこんなことを堂々と云われて気分がいいわけもなく、相変わらずムツとしていた。エリスはマリクの後ろから顔をひよこつと覗かせて二人の様子を窺いながら、どうしたらいいかといった感じで戸惑っている。

「まあ、そういうことだ」

そして、そのエリスに気付いたガレスが不意にエリスに視線を向けた。

「えっ!？」

不意に話を振られ、エリスは普段の彼女らしくない驚いた様子と口調でガレスに答えた。あまりに驚いたため、マリクでも聞いたことのないような声色で、驚いてマリクが振り返ったほどである。

(何をそこまで驚いていることやら…)

エリスのパニクった感じの様子に内心で呆れながらも、ガレスはそれを億尾にも出さずに淡々と続ける。

「…御挨拶は丁重に頂戴しよう。だが、コイツが言っている通りお前が俺に近づくことを快く思わない連中が多いからな。これ以上は無用だ」

「え…でも…」

(ん?)

エリスの態度にガレスが少し引つかかるものを感じた。これだけ論じたのに、それでも何か言いたげなその態度が腑におちなかつたからだ。

(まだ何かあるのか?)

そう思ったガレスだが、下手に藪をつついて蛇を出すのも面倒なのでそれに気付かないふりをして黙殺することにした。妙な緊張感を孕んだ独特の空気が三人を包む。と、塔の上部の方から歓声が上がってくるのが聞こえた。

「…終わったようだな」

振り返って見上げると、ガレスはゆっくりと歩き出した。

「あの、どこへ?」

その足をエリスが止める。

「ここに来た目的を忘れたわけではあるまい。奴らのところに行つて目当てのものがあ  
るか確認しに行く。なければ、探さないといけないからな」

そのまま、ガレスはマリクとエリスの許を去つて行つた。

「はあああああつ…」

ガレスの姿が見えなくなったのを確認したマリクが、大きく息を吐きながらその場に  
へたり込む。

「ま、マリク!」

エリスも慌てて屈みマリクと視線を合わせると、心配そうな表情になつてマリクを気  
遣う。

「大丈夫?」

「エリス様…」

苦笑しながらマリクが微笑んだ。

「お恥ずかしいところを…」

「そんなことはないの。それより、どうしたの?」

「どうしたもこうしたも…」

苦笑したまま何とかマリクが立ち上がり、それに追隨するかのようになり、エリスも腰を浮  
かせた。

「彼と…ガレスと相対していればこうもなりますよ」

「そんなに？」

「ええ」

力なくマリクが頷く。

「マルス様たちのような歴戦の戦士ならともかく、私は一介の魔道士ですからね。戦えば間違いなく殺されるのは目に見えますから。…正直、逃げるのをこらえるので精一杯でした」

「でも、あの方が仰っていたように敵じゃないんだから、そんな心配は無用でしょう？」

「…どうですかね。それに、例えそうだとしてもあの威圧感やプレッシャーを真正面から受ければ消耗もしますよ」

「そうなの？ でも、そんなそぶりは見せなかったじゃない」

「それは当たり前ですよ。なにせエリス様が後ろにおられるのですから、退くわけにはいかないじゃないですか。例え、この生命を懸けることになっても」

「え？ それって…」

「あ…」

言葉の意味を察してしまったエリスと、思わず深いところまで言及してしまったことに気付いてしまったマリクが、お互い真っ赤になって俯いてしまった。どこからともな

く甘酸っぱい空気が流れるものの、状況がそれを許してはくれない。

「と、とりあえず私たちもマルス様に合流しましょう」

「そ、そうね」

真つ赤になりながらもマリクが思わずエリスの手を握ってそのまま二人は歩き出した。テンパっているマリクは気付いていないが、手を握られてエスコートされる形になったエリスはなお一層顔を赤くするのだった。

「…女性？」

塔を制圧した解放軍が見たものは、玉座から続く隠し階段だった。恐る恐るもそこを進んでいった解放軍は、とある一角に辿り着く。そこは、少し開けた不思議な空間だった。そしてその中央に、恐らくガトーが言っていたであろう棺が安置されていた。近づいて調べようとしたマルスたちだったが、そうする前に不思議なことが起こった。まるで意思でもあるかのように棺がひとりでにゅっくりとその蓋を開いたのである。そして中から現れたのは、マルスが今呟いたように妙齢の女性の姿だった。

「…あなたが、ガトー様の言っていた？」

「…あなたは…誰？」

マルスの問いに答えるでもなく、棺から姿を現した謎の女性がゆっくりと呟いた。

「僕はマルス。アリティアの王子です。あの、君…あなたは？」

「わたし…？ わたしは…ナギ」

「ここでようやく、彼女…ナギが名前を名乗った。」

「ナギ…ガトー様に言われて、あなたを探していました」

「ガトー…聞いたことがある。でも、思い出せない…」

額を抑え、少し苦悩するような表情をナギが見せる。

「もしかや、記憶を？」

「…わからない。何も、思い出せない。…でも、わかることがある。わたしは、あなたに

呼ばれて目を覚ました…」

「え!? 僕は何も」

マルスが戸惑う。実際に何もしていないのだから仕方のないことではあるが。だが、それを否定するかのようになギが小さくゆつくりとだがしっかりと首を左右に振った。

「あなたの魂が…わたしに救いを…だから…目覚めた…。わたしの力を…必要としている…あなたの魂が…」

「あなたの…力？」

「わたしも…共に戦います。さあ…行きましょう…はるか昔…やり残したことを…成し

遂げるために……」

こうして、神秘の雰囲気を纏った不思議な女性、ナギが解放軍の仲間になった。そして、ナギがそつと手を差し出す。

「手を……」

「え？」

「手を……取つてくれるかしら……」

「あ、え、ええ」

慌ててマルスがその手を取ろうとするが、

「ううん、違うの……」

ナギが再び首を左右に振った。

「え？」

「あなたではなくって……そちらの……」

ナギがマルスの背後に視線を向けた。マルスをはじめ、この塔の攻略に出陣していた者たちの視線が集まった先にいたのは……

「……俺か？」

いつの間にかここへやってきたガレスの姿だった。

「ええ……」



ニツコリと微笑み、嬉しそうに頷くナギ。それとは対照的に、どうするのかとハラハラ二人の顔を見比べている周囲の面々。そして、もう一方の当事者となったガレスは一呼吸置いた後、ゆっくりと前に進む。少し驚いた表情で道を開けたマルスの横を素通りすると、ガレスは徐に石畳に膝を着いた。

『!!』

まさかそんな真似をするとは誰も露ほども思わなかった解放軍の面々が固まってしまった。が、ガレスはそんなことを気にすることもなく、寧ろそんな周囲の面々を小馬鹿にするかのようにその手を差し出す。

「どうぞぞ」

「ありがとう…」

ナギがガレスの手を取ると、ガレスがナギが棺から出てくる介助をした。が、永い眠りから覚めた影響なのか、足がもつれてしまう。

「あ…」

「おっと」

足のもつれから倒れてしまいそうになったナギをガレスがそのまま受け止めた。

(軽いな…)

正直な感想を抱きながら、ガレスはナギがちゃんと立っているのを確認した後、離れ

た。

「大丈夫か？」

「はい…ありがとう…。あなたは…？」

「お前を支えたただけだ。何があるわけでもない」

「ううん…違うの…」

また、ナギが首をフルフルと左右に振った。

「ん？」

「名前を…知りたくて…」

「そうか。これは失礼したな」

「いいの…。それで…？」

「ガレス。黒騎士ガレスだ」

「ガレス…不思議…。あなたには…他の人にない何かを感じる…」

「そうか…」

直感で感じたことを素直に言っただけなのだろうが、それでもガレスの本質を見抜く  
辺りは流石に只者ではないとガレスは内心で舌を巻いていた。もつとも、周囲にとつて  
もあの男はどうしてこう節目節目にこういった役回りが回ってくるのかと苦々しくも  
不思議な様子だったが。

「よろしく…お願いね…ガレス」

そんな周囲の思惑などわからうはずもなく、ナギがニコリと微笑んだ。

「ああ…」

頷くガレス。この場にチキとマリアがいないことに心底感謝しながら、この異界の空間での旅路は終わったのだった。

残すは、最後の戦いのみ。

## NO. 31 天秤の傾く先

「長く…苦しい戦いだつたね…」

ドルーア城正門前。ガトーによつて導かれた異界から返つてきたマルスは、その威容を見上げながら思わず呟いていた。

「そうですな」

「まことに持つて」

いつものように傍らに控えるジェイガンとモロドフがマルスに追隨した。二人とも、アリティア陥落…いや、ドルーアが復活したときのことからこれまでのことを思い出しているのだろう。

「思えば、色々とありましたな」

「左様。いいものもあれば、思い出したいくないものまで実に様々と」

「うん…」

三人のその胸の中には言葉通り、これまでの苦難の道のりが去来していた。思い出したくないことの方が大半のそれは、まさに苦難の道のりであった。

グラの裏切りにあつて先王コーネリアスが戦死し、アリティア城は陥落。その際にマ

ルスの姉エリスは虜囚の身となり行方知れずとなる。タリスに落ち延びて二年の雌伏の時を経てようやく立ち上がるも、ここに至るまで苦難の連続の旅路であったことは言うまでもなかった。そしてようやく、その長い旅路も本当に終わろうとしている。

「感傷に浸るのはここまでだね」

振り返ると、マルスは彼の命令を待つ解放軍の面々の姿を見据えた。皆、緊張は垣間見えるものの臆することのない面持ちになってその時を今か今かと待ち構えている。彼ら彼女らを頼もしく思いながら、マルスは最後になるであろう命令を下した。

「これが最後だ！ 皆の力を僕に貸してくれ！ 行くぞー！」

『おおー！』

大地を揺るがすかのような喚声と共に、解放軍はドルーア城内へと突入したのだった。

「(ト)ト(ト)ト……」

ドルーア城内の一角。開かれた広間のような場所に姿を現したガレスが辺りを見回し思わず呟いていた。

ドルーア城は四方の城門が開かれた状態になっており、その各々の門からほぼ同じぐ

らしいの戦力が一気に攻め込んだのだ。戦力を分けることになるので当然戦力の分散を危惧する声があったが、一つずつ入り口を潰していつてメデイウスが完全に復活・覚醒する危険性を危惧し、戦力の分散という手を解放軍は選んだのであった。マルスにとつても苦渋の決断であったことは想像に難くないが、例え戦力が分散されても速度を重視したということなのであろう。何せメデイウスがいつ完全に復活・覚醒するかはわからないのである。

また、もし分散した部隊のうち行き止まりや罠にはまった部隊がいたとしても、今までの激戦を乗り越えてきた歴戦の猛者たちなら例え遅れても決戦の場には辿り着いてくれていると信頼していたのである。その点で、マルスは速度を重視したというより仲間たちへの信頼感の比重の方が大きくウエイトを占めていたということである。そんな中、ガレスがドルーア城内のとある一角に辿り着いていた。

「先ほどまでとは様子が違うな」

「うむ。そうだな」

ガレスと共に同じ道のりを進んできていた同行者の二人も周囲を見渡しそう呟いていた。

「お前たちもそう思うか」

振り返って目にしたその二人：ミネルバとロレンスにガレスが同意を得るように尋

ねた。

「ああ」

「今までとは明らかに造りが違うのでな」

「ああ。となると、ここは当たりか？ お客さんも出迎えてくれているようだしな」

「何？」

ミネルバが怪訝そうな表情になったのを見たガレスが、スツとある方向に手を向けた。そこには確かに、自分たちを迎え撃とうとしている敵兵の姿があった。

「成る程」

ロレンスもその姿を確認したのだろう、頷くと得物を構える。

「ただ敵がいるだけで、メデイウスがここにはいないという可能性もあるが……」

ミネルバも同様に得物を構えた。

「どちらにせよ、見逃してはくれないようだな」

「そうだな」

ガレスもロレンスとミネルバと同様に得物を構えた。そんな中、

「……いる」

ガレスたちと共にこの道のりを進んできたが、これまで何一つ喋らなかつたナギがポツリとそう呟いた。

「何？」

妙にその一言が引つかかったガレスがナギに視線を向ける。

「感じる…邪悪な思念が…この奥に…」

「そうか」

ナギのその一言で十分だった。視線を戻すと、今度はミネルバとロレンスに再び目を向ける。

「だ、そうだ。竜のお姫様がそう仰せだ」

「成る程」

「であれば、大当たりといったところか」

「の、ようだな。…だがその前に、露払いといこうか」

そしてガレスは戦闘態勢に入った。

「ああ！」

「承知！」

ミネルバとロレンスも戦闘態勢に入ると、まるで示し合わせたかのように三人は待ち構える敵兵に向けて突撃したのであった。そしてほぼ同時間帯の同フロア違う区画に、ガレスたちとは違う門から突入してきた他の部隊たちも辿り着いたのだった。



「お客さんのお迎えか」

「そのようだな」

待ち受ける敵を見て、オグマとナバールはほぼ同時に剣を抜いた。そして、肩を並べて構える。

「フツ…」

不意に、ナバールが口元を崩した。

「どうした？」

それに気付いたオグマが尋ねる。

「いや、まさか俺とお前がこうして肩を並べて戦うことになるとは思わなかったからな。今更ながら何の因果かと思っただけだ」

「成る程、確かにな」

オグマも軽く笑み浮かべた。

「マルス王子の導きかね」

「かもしれんな。あるいは、あの黒騎士の導きかもしれんが」

「妙な言い回しだが、間違ってもいないな」

肩を並べた二人が揃って口元を崩す。万一の時にガレスに対処するため、マルスの護

衛として自然とオグマとナバルが揃ってマルスの側にいることが多くなった。それを考えると、今こうして肩を並べているのも些か強引な論法ではあるがガレスが原因であると言うのも言い過ぎではなかった。

オグマがチラリと後方に視線を向ける。

「ゴードン、援護は頼む。エッツエル、お前も援護を。ただ、俺たちがやられたら回復に回ってくれ」

「はい」

「了解。……ただ俺は、便利屋じゃないんだけどね」

「そう言うな」

やる気がないわけではないだろうが不満そうな表情を見せたエッツエルにオグマが苦笑した。

「エッツエル！」

「何だよ。やらないとはいってないだろ？」

「そうだけど！」

「そこまでにしておけ」

ナバルが鋭い目で二人を睨んだ。ゴードンは申し訳なく俯き、エッツエルは白々しく口笛を吹いてそっぽを向いている。

「全く…」

そんな二人に忌々しそうな表情を向けるナバル。オグマは内心で苦笑しながら、コイツも随分変わったものだと思っていた。

(昔なら、注意などしなかったか。とつくに二人とも首と胴が離れていただろうがな)

こういった変化の起因がどこにあるのかはわからないが、間違いのないのはこの軍にいたことが原因の一端であるということだ。

「さて、それじゃあ行くか」

「ああ」

背後から放たれたゴードンの矢とエツツエルの魔法を合図にして、オグマとナバルは敵陣に斬り込んだのだった。

「随分広いところに出ましたね」

マリクがこれまでと違った開けた場所に足を踏み入れ、誰に聞かせるでもなく思わずそう呟いていた。

「そうですね」

「ええ」

その背後から顔を出したリンダとエリスも周囲を確認するかのようキョロキョロと辺りを見回していた。と、

「御三方、後ろへ」

エリスたちの後から顔を出したホルスが厳しい表情になってマリクたちに下がるように指示を出す。

「ホルス？」

「どうしたのです」

「敵です」

同じく最後尾を固めていたミディアが顔を出すとホルスと同じく一瞬で表情を厳しいものにし、これもホルスと同様に三人を護るように前に出た。その時には、自分たちと対峙する敵兵の存在にマリクもリンダもエリスも気づいていた。

「ホントだ……」

敵兵の存在に気付いたマリクが魔道書を手に取った。

「全く……」

リンダが不満そうな表情になり同じように魔道書を手に取る。但しその不満は敵が現れたことに対してではなく、それに気付かなかった自分に対してのものであったが。

「気を付けてくださいいね」

エリスはそのまま下がっている。シスターである彼女には敵と戦える手段は持たない。回復に専念するのみである。

「わかつております」

ミディアが軽く叩頭した。

「御二方は余り前に出過ぎず、援護に専念してください。前線は私とミディアで引き受けますので」

「わかりました」

「はい」

ホルスの指示にマリクとリンダが頷いた。

「久しぶりね」

肩を並べるようになったホルスに、馬上からリンダが話しかける。

「ああ、そうだな」

言っていることの意味がわかっているため、ホルスも頷いて返した。

「まさか、またこんな日が来るなんて少し前までは思ってもいなかったわ」

「そうだな。君はアカネイアの虜囚。私はドルーアに付いた裏切者だったからな」

「ええ。それが今はこの通り。人の運命なんてわからないものね」

「全くだな、マルス王子に感謝しないと」

「ええ。それと…」

「あの黒騎士かい？」

言い淀んだミディアとは対照的に、ホルスが何の躊躇いもなくそう告げた。そしてその言葉を聞いた直後、リンダの纏っていた雰囲気も少し変化した。

「…わかる？」

「詳しいことは全く。私も詳細は聞かないしね。ただ、あそこまで他のアカネイアの騎士たちに嫌われてるのを見ればただごとじゃないのはわかるさ。それに、纏っている雰囲気が尋常ではないのもよくわかってるからね」

「そう」

「大まかな事情としては聞いてるけど、仮にもニーナ様の御命を救ってくれたんだ。もう少ししかるべき対応をしてもいいんじゃないかな？」

「それはわかってるんだけどね…。さつき貴方が言ったように纏っている雰囲気が雰囲気でしょ？ 皆危険人物扱いしているのよ」

「わかるよ。よくわかる。ただ、パレスでの宴の時は実に堂に入った立ち居振る舞いだったじゃないか」

「ええ。それはそうなんだけどね。ただ、悪印象と好印象が半々だった場合、どっちがウエイトを占めるかと言われれば悪印象の方が強いじゃない？ だから…ね」

「好印象を打ち消すほど悪印象が強いつてことか」

「そういうこと」

ミディアが頷いた。ただそれはホルスの意見に同意するものというよりは、自分を納得させる意味合いが強かったが。

「それはそれで事実なんだから仕方ないけど、事実っていうならあの男が二ーナ様の御命を救ってくれたのも事実だから、上手く折り合いをつけてもらいたいものだね」

「それが出来れば苦労しないわ。逆に、それが自然に出来てる貴方の方が凄いのよ」

「普通のことだろう?」

「貴方にとつては普通でも、他の人にとつては普通じゃないつてこと」

「言いたいことはわかるけどね」

「そう。それじゃあ、取りあえずこの辺にしましょうか」

ミディアが槍を抜いた。ホルスも同様に槍を抜く。

「先陣にいるのは魔道士か」

「なら、私が釣るわ」

「頼む。普通の敵兵ならば私が囮になるべきなのだろうが、魔道士ならば聖騎士である君の方が適任だ」

「任せて」

ミディアが一番前に進み出た。そのミディアに襲い掛かった魔道士だったが、次の瞬間には消し炭になっていた。リンダのオーラが魔道士を貫いたのだ。

「ふん」

パンパンと、まるで手の平に付いた埃を掃うかのように叩くリンダ。

「どうかしたのかい?」

いつもと違う様子のリンダに気付いたマリクが恐る恐るそう尋ねた。

「え? い、いえ、別に…」

「そう?」

「は、はい」

マリクの問いかけに素直にコクリと頷くリンダ。頷いているために何故かは知らないがその顔が赤くなっているのが周囲に知られなかったのは不幸中の幸いだろう。ホルスとミディアも普段目にしたことのないそんなリンダの様子に目を丸くしていたが、いつまでもそうしているわけにはいかない。先陣が敗れたのを皮切りに次々と新手が湧いてきたからだ。

「お出でになったか。引き続き魔道士の類は君に任せても構わないかな?」

「ええ。勿論」

「助かる。物理攻撃の敵は私が対処しよう」



「お願いね」

「ああ」

そして二人はお互いの役割を決めると、それぞれが対処するべき敵へと向き直った。二人を援護するようにマリクとリンダも引き続き魔道書を手に取る。

「さて、僕たちもちゃんと仕事をしないとね」

「ええ。そうですね」

「うん。エリス様、回復はお任せします」

「はい。マリク、気を付けてくださいいね」

「ありがとうございます、エリス様。エリス様はこの僕が生命に代えても御守りします」

「ふふ、ありがとうございます。でも、無理はしてはいけませんよ」

「お任せください」

「……」

図らずも目の前でこのやり取りを見せられることになったリンダが複雑な表情で沈黙する。他の者には気付かれないように拗ねた感じで口を尖らせたが、敵兵が次々現れる状況に頭を切り替えるしかなかった。

(こうなったら、この連中皆あの黒騎士だと思つて魔法撃ち込んであげるわ)

物騒なことを考えながら、ここでも戦いの火ぶたが切つて落とされたのだった。

「はいは…」

本命と言つていいだろう。マルスが率いる一団がこれまでとは様相の違う場所へと姿を現した。今までの、ほぼ一本道の通路と言つていい城内から、開けた場所に出てきたことにマルスは気を引き締めるように辺りを見回した。

「これまでとはまた、随分と様相が違うな」

共に進んできたハーディンも辺りを見渡しながら、マルスと同じような感想を抱いていた。

「そうだね」

マルスもその意見に同意する。

「となれば、やはりここにメディウスが？」

「それは断定できないけど、用心するに越したことはない」

「違うない」

頷くハーディンの後ろから、後続が次々と顔を現した。と、

「いる…」

そのうちの一人、チキがここに足を踏み入れた直後、そう呟いて固まってしまった。

「チキ？」

「お兄ちゃん。いるよ、ここに」

「！ メデイウスのことかい？」

「うん。感じるの、とつてもとつても強い力と、すごく怖い気配を」

「そう。ありがとう」

チキのその一言を聞いたマルスがハーデインに振り返った。ハーデインも緊張した面持ちになり頷いている。

「竜の幼姫がそう言うということは……」

「ああ。どうやら目標は近いようだよ。皆、油断しないように」

そう注意し、マルスたちはそれぞれ各々の得物を抜いたのである。凶らずも、ほぼ同じタイミングで同じフロアに四部隊が出そろった。そしてこれより、本当の最後の戦いが始まる。

「死ね！」

斬りかかってくる剣士の斬撃を受け止めながら、いつものようにガレスは楽しそうに咽喉の奥で笑い、鏝迫り合いを続ける。

「ククク…」

「何が可笑しい!」

真紅の瞳に射抜かれながらの笑いに敵兵は馬鹿にされたと憤慨し、それと同時に言いようのない恐怖に襲われ、それを紛らわせるためにガレスを詰った。

「クク、なに、流石にここにいるだけあっていい腕をしていると思っただけだ。…だが」  
「うわっ!」

ガレスが力で敵兵を弾き飛ばした。そして、  
「俺を楽しませるほどではない。終われ」

そのまま袈裟斬りにしてその生命を断つたのだった。

「ふう…」

得物であるサタンブローバーの刃から血を滴らせながら、ガレスが一息ついた。そうしている間に、ガレスとともにここに足を踏み入れた連中も己の職分を果たし集まる。

「とりあえず、これで一応の片はついたか」

「うむ。見た限りではこの周辺にもう敵影はない。そう思ってもいいかもしれんな」

「とは言え、油断は禁物だが」

「それは無論だ」

ミネルバとロレンスが状況報告をしている横で、ナギがどこか遠い目をしながらぼ

おっと一点を見つめている。

「どうした？」

それに気付いたガレスがナギに声をかけた。ミネルバとロレンスも振り返ってナギを見る。

「感じるの…」

対してナギは相変わらずの雰囲気をつつたまま、ポツリとそう答えた。

「何をだ？」

「さっき感じた、邪悪な思念が…この奥に…」

「そうか」

ナギの返答を聞いたガレスがミネルバとロレンスに振り返った。二人とも、緊張した面持ちになってコクリと頷く。

「いよいよのようだな」

「うむ。この先にメデイウスが…」

「ああ。他の部隊の連中がどうしているかは知らんが、行くか」

「待て。我らだけでか？ 他部隊と合流した方が良いのではないか？」

「確かに」

「大丈夫…」

ミネルバとロレンスのもつともな危惧を否定したのはナギだった。

「来ている…すぐ近く…感じるの…」

「だ、そうだ」

ナギの答えを継ぐかのようにガレスがミネルバとロレンスに振り返る。

「お姫様がそう仰せだ。行くぞ」

「信用していいのか？ 疑っているわけではないが、抽象的すぎないか？」

「確かに。感覚や気配で動くのは危ないと思うが…」

ミネルバとロレンスがやんわりと難色を示した。二人が今言ったようにナギのことを信用してはいないのであるが、根っからの軍人である二人には確たる事実がない以上、軽々に動くのは余りにもリスクが高いように感じていたのだ。

「確かにな」

それについてはガレスも頭から否定はしない。軍人でもあるガレスには二人の危惧ももつともなこととしてよくわかるからだ。

「だが、だからと言っていつまでもここに在るわけにはいくまい。後続が来るといっわけでもないし、今来た道を引き返すわけにはいくまい。ならばどちらにしろ、進む以外には選択肢はない」

「む…」

「確かに…その通りだな…」

理路整然とそう諭され、ミネルバとロレンスは口を噤むしかなかった。確かにガレスの言った通り、ここにこのままいるわけにはいかない。と言つて、今来た道に戻るわけにもいかない。どの道、この先を進むしかないのである。

「では、行くか」

「うむ。今度は先陣は我々が引き受けよう」

「心得た。なら、今度は俺が殿につく」

「任せる」

「頼む」

「ああ」

ナギを挟むようにしてミネルバとロレンスが先陣を務め、ガレスが最後方に回つた。そんなガレスにナギが振り返ると、未だに掴みどころのない不思議な雰囲気を纏つたままニコツツと微笑んだ。

(…妙な奴だな)

何がそんなに楽しいのか、それとも余程ガレスが気に入ったのかは知らないが、実に楽しそうな嬉しそうな微笑みをガレスに向けたナギに、どうしたらいいものかとガレスは戸惑っていた。前の世界でのことが影響しているのかは知らないが、どうもガレスは

この世界では人外の者に異様に懐かれる傾向があった。どうしたものかと思いつつも、もう今更である。何せこの戦いが最後の戦いなのだ。

(この後の付き合いもあるだろうが、それはそれだ。とりあえず今は、この戦いに集中するか)

ナギに対して珍しく戸惑いというか気後れを感じながら、ガレスはミネルバたちの後に続いて進んだのだった。と、開けた場所から通路に出た。そしてそこには、また新たな新手的姿があった。

「新手的か」

「の、ようですな」

「やれやれ……」

うんざりしながらもミネルバとロレンスが得物を構えた。先制攻撃とばかりに魔道士が魔法を放ったが、

「……」

標的にされたナギが黙って精神を集中させる。そして竜化するとその魔法を苦もなく受け止め、お返しとばかりにプレスで魔道士を焼き払った。

「はああっ!」

「ふんっ!」



ミネルバとロレンスも自身に襲い掛かる敵と斬り結んでいる。ロレンスは普通の銀の槍だが、ミネルバは大陸最強の斧とも名高いオートクレールということもあり、終始有利に戦いを進めていた。無論、二人の技量の高さも戦況が優勢であることに一役買っているが。

そして、殿を任されていたガレスはというと

「ナイトメア」

ナイトメアで敵の意識を奪ったところをナギがブレスで焼き払い、

「デスククラウド」

デスククラウドで敵を弾き飛ばしたところをナギがブレスで焼き払い、

「ダーククエスト」

ダークククエストで敵にダメージを与えて弱らせたところをナギがブレスで焼き払うという、実に見事なまでのパターン化したかのような一連の行動で敵を倒していた。そうして目の前の敵兵が全て片付けられた後、

「おい…」

当然のようにガレスが憤懣やるかたないといった感じでナギに迫った。獲物を全て横取りされた形になってしまったのだから仕方ないのだが。

「何…?」

一方で、ナギは変わらぬ態度のまま悠然とガレスに微笑んでいる。その姿に、ガレスは詰め寄ろうとしたことが何だかバカバカしくなってしまうた。

「…聞くが、何故さっきの奴らを倒した」

「敵だから…貴方の…」

「そうか…」

無垢な子供のようにそう返され、ガレスは毒気を抜かれてしまった。その態度、そして雰囲気、ナギに他意がないのがわかったからだ。ナギは言葉通り、ガレスの敵だから敵兵を倒したに過ぎない。ポワポワした雰囲気、ニコニコ微笑むナギの姿を見てしまったら、これ以上何も言う気にはなれなかった。

（全く…）

余計な真似を…と思うのと同時に、毒気を抜かれて何も出来ないことに驚きも感じていた。

（俺自身、大分毒も抜けてきたというわけか…）

良いか悪いかはさておきその事実を認識していると、

『あつー！』

不意に随分先から声が上がったのに気づいた。

「ん？」

全員それに気付いたのだろう。ガレスを始め皆が顔を上げると、視線の先にはオグマ、ナバル、ゴードン、そしてエツツエルの姿があった。

「彼らは…」

「どうやら他部隊との合流はできそうか」

「うむ」

ミネルバとロレンスがオグマたちと合流を果たすべく先を急ぐ。その後をガレスはついていった。傍らには、歩調を合わせるかのようにナギの姿がある。

(……)

気付かれぬようにフルヘルムの下からチラツと様子を窺ったナギは変わらぬ雰囲気をつらつらと纏ったままニコニコしてガレスと肩を並べていた。

(何がそんなに楽しいのか…)

全く理解に苦しむと思いつつもながらも邪魔になるわけではないので邪険にすることもせず、ガレスとナギは肩を並べてオグマたちのところへ向かったのだ。

「無事なようだな」

無事合流を果たしたオグマたちに、ミネルバが安心したような表情になって声をかけ

た。

「ええ」

「何とか」

オグマとゴードンが頷く。ナバールは相変わらず腕組みして押し黙っており、エツツエルはガレスに向かって軽く手を挙げた。

「他の部隊の者には会ったか？」

ロレンスがそう尋ねると、

「いえ……」

ゴードンが表情を曇らせ、首を左右に振って表情を曇らせた。

「我らだけがここにいるのか。それとも、ただ単に他の部隊に合流できていないだけか……」

「どちらの可能性もあるな」

「そうですね」

顔を突き合わせて相談している中、誰も気がついていないが不意にガレスの真紅の瞳が光った。そして、

「……おおっ！」

裂帛の気合と共に、突然サタンブローバーを投げる。他の面々がビックリして振り

返ったその先には、身体を両断されて鮮血を流しながら絶命する敵兵の姿があった。  
「フン」

ブーメランの如く戻ってきたサタンブローバーをキャッチすると、ガレスはいつものようにつまらなそうに鼻を鳴らす。その刃から滴り落ちる鮮血に、ゴードンは思わずぞくぞくと身震いしてしまっていた。

「良く気付いたな」

エツツエルが感心したように呟いた。

「貴様たちからは死角となっていたが、俺にとっては丁度目線の先に現れたからな」

「そりゃ…可哀相に」

「抜かせ。すぐ死ぬか、少し後に死ぬかの違いなだけだ」

「…相変わらず容赦のないことで」

ガレスの口ぶりにエツツエルが乾いた笑いを上げるしかなかった。他の面々もナギとゴードンを除けば全員少なからず呆れているようだったが。と、今ガレスが敵兵を倒した奥から見知った顔がひよこつと出てきた。

「ん」

「あ」

ガレスがそれに気付いたのと、向こうがガレスたちに気付いたのはほぼ同じだった。

ガレスの一言が耳に入ったミネルバたちも、今度は揃ってガレスが目線を向けている方向に目を向ける。そこには、こちらに向かってくるマルスたちの姿があった。

「マルス王子」

「どうやら、残りの部隊もこのフロアに来ていたようだな」

「ああ」

マルスたちに気付いたミネルバたちこちらの部隊の全員も、マルスたちと合流すべく歩を進める。こうして、久方ぶりにこの城に突入した全部隊が集めたのであった。

時間を少し巻き戻し、ミネルバたちとオグマたちが合流したのとほぼ同時刻。マルスたちの部隊はミディアたちの部隊と合流していた。

「マルス王子！」

「ミディア！ マリクや姉上も！」

「マルス！」

「マルス様！ 良かった…」

「ハーディン公、ご無事のように何よりです」

「貴殿もな。ホルス殿」

お互いの無事を喜ぶマルスたち。だが、喜んでばかりもいられないのも事実だった。「ところで、君たちだけかい？」

「ええ」

ミディアが頷いた。

「今のところ、我々が合流したのはマルス様たちだけです」

「そうか……」

その返答に、マルスの表情が曇った。

「そもそも、他の部隊の者がここにいるのかどうかも定かではないからな」

ロレンスがしていたのと同じ危惧をハーディンもしていた。

「確かに。偶然僕たちはここで合流できたけど、残りの部隊は全然違うところにいるという可能性も十分あるからね」

「うむ」

「まあオグマたちの方はともかく、ミネルバ王女たちの方はあまり心配してないけどね。ナギもガレスもいるから」

ガレスの名を聞いて面白くなさそうな表情をしたものが数名おり、それに気付いた者も同じく数名いたが誰も何も言わなかった。

「とは言え、いつまでも孤軍にしておくわけにはいかないのも事実だからね」

「うむ」

「取りあえず、前に……」

進もうと号令をかけたところで、マルスはこちらに向かつてくる敵兵の姿に気付いた。一瞬で険しくなった表情に他の面々も軒並みマルスが視線を向けている方向に振り返る。それとほぼ同時に、

「ぎゃつー！」

敵兵は悲鳴を上げながら倒れた。倒れるというよりは、身体を真つ二つにされ、鮮血を撒き散らしながら絶命したといった方が正しいかもしれないが。そしてマルスたちは、その敵兵の生命を奪つたものの正体をしっかりと見ていた。

「今のは……」

「うむ……」

心当たりがあり過ぎる武器の姿に慌ててマルスたちが駆け出す。そしてその敵兵の先にあつた通路から顔を出すと、その先には自分たちと同じように合流していたミネルバたちの部隊とオグマたちの部隊の姿があつたのだつた。

時間は戻り、全部隊合流直後。



お互いの無事を確かめ合った解放軍はこれからの指針について相談しあう。

「無事に皆合流できたということ、後はメデイウスだけなんだけど…」

どこにいるのか…と呟いたマルスに、

「心配するな」

答えたのがガレスだった。

「どういふことだい？」

マルスがその真意を尋ねる。他の面々もおしなべて訝しげな顔をしていた。

「こちらの…」

そのままガレスがナギの肩に手を置いた。それを見たチキが面白くなさそうにムツとしたような表情になる。

「竜のお姫様が感じているそうさ。この奥に邪悪な気配があるとな」

「そう言えば、チキもさつき同じことを…」

傍らのチキにマルスが視線を向ける。

「チキ、どうだい？ 君が感じた強い力と怖い気配っていうのは今も感じる？」

「え？ う、うん」

「そうか…」

言い淀んだチキに少し不信感を感じながらも、マルスが表情を険しくした。

(二人とも意見が一致したとなると、やはりこの奥にメデイウスが…)

その確信を持つ。そんな中、

「…その邪悪な気配つてのは、お前さんのことじゃないのか」

皮肉気な口調でアストリアがガレスに食って掛かった。

「何だと?」

ガレスの口調が少し険を帯びる。だが、アストリアも負けてはいない。

「ああ、そりやあり得る話だ」

ジョルジュも参戦してさらに雲行きが怪しくなった。

「竜のお姫様方の言ってることは疑われないが、邪悪っていうならお前さんだって十分当てはまるだろ」

「そうだな。自分でも自覚してるんじゃないか」

「貴様ら…」

突然喧嘩を吹っかけてきたことにガレスの雰囲気が変わっていく。それに気付いた周囲が慌てて割って入った。

「ちよつと! アストリア、ジョルジュ!」

「やめないか、こんな時に!」

「思ったことを言っただけだ」

「そうそう。別に悪いことじゃないだろ」

「状況をわきまえろ！ この戦い自体最後の大詰めなのに、こんなところでいざこざを起こしてどうする！」

「フン」

「チツ」

面白くなさそうな表情になってアストリアとジョルジュが鼻を鳴らして舌打ちした。やはり、ガレスを敵視する連中との蟠りは最後まで解消はされなかった。その証拠……と言うわけではないだろうが、ハーデインはこの一連の騒動を止めるまでもなく冷たい目で黙って見ていたからである。本来なら立場的に割って入って止めるべきなのに……だ。この蟠りがいずれ尾を引くことになるのだが、それはまた別の話。

一方、ガレスを抑えるようにミネルバとロレンスもその前に立ちはだかる。

「…何の真似だ」

「落ち着け」

「そうだ。バカな真似は考えるな」

「わかっている。こんな安い挑発に乗るほど俺はバカではない」

「…本当だな？」

ロレンスが念を押すようにガレスに尋ねた。

「無論だ」

「…わかった」

その返答に、ミネルバも不承不承ながら理解を示してガレスの前をどいた。自然と目の前にいることになるアストリアとジョルジュがまるで敵でも見るような目つきで自分を睨んでいるのをガレスは見るようになった。そしてもう一つ、彼らほどあからさまではないがハーデインの冷たい視線も勿論感じていた。

(やれやれ…)

内心でゲンナリしながらガレスがフルヘルムの下でうんざりした表情になっていた。ニーナの件があるとはいえ、いつまでもこんな感じで敵視されてもいい加減うんざりする。それこそ殺してしまった方がある意味面倒はないのだが、戦場で大つばらに殺すわけにはいかないし、暗殺なんて真似をすれば疑われるのは真つ先に自分である。それを考えれば業腹ではあるが生かしておく他はなかった。

(あまり凶に乗るなよ、小童が)

いい加減鬱積した鬱憤が許容を超えかねないところではあるが、確かに状況が状況だけに内輪揉めをしている場合ではないため抑える。このままこいつらの身体をぶった斬つてやったらどれほど気持ちいいかと思わないでもなかったが、それはできない状況であるのだ。

(チツ…)

ムカつきを抑えながらも納得できるわけもないため、ガレスはさっさと終わらせることにした。

「この奥だな？」

ナギにそう尋ねると、ガレスは奥に視線を向けた。その先には、仄暗い廊下が長々と続いている。

「ええ…。この…奥…」

「わかった。…だ、そうだ」

「私も！ 私も感じる！」

「そうか」

いきなり話に乱入してきたチキに頷き、ガレスがマルスへと振り返った。

「うん」

コクリと頷くと、マルスが振り返ってそこにいる面々全員の顔を見渡す。

「さあ、最後だ。全部隊合流できたことだし、今まで以上に慎重に進むよ」

皆の賛同の意見を得ると、解放軍は進みだした。先陣を切るのはアカネイアの戦士たち。中軍はマルスやハーディンと魔法や弓の支援部隊。後方を固めるのがガレスに口レンス、チキにナギにミネルバといった面々だった。

一行は前から襲い掛かってくる敵を倒しながら少しずつ進む。援軍として現れたのだろうか後方から襲い掛かってくる敵も同じように倒しながら、速度よりも慎重さを重視して廊下を進んだ。

(いよいよよ……か)

この奥に、解放軍が最終目標としている目指すべき敵、メデイウスの姿がある。もつとも、この世界の住人ではないガレスにとつてはメデイウスがどれほどの存在であるなどは知る由もない。伝え聞いているのはチキヤバヌトウ、ナギと同じ竜人族：マムクートであるということのみである。

亜人間：…デミ・ヒューマンや魔獣、ドラゴンの類は元の世界で普通に存在していたが、竜人族：マムクートはゼテギネアの地にはいない存在である。だからこそ、ガレスは楽しみだった。

(ククク…)

フルヘルムの鎧の下で声を殺しながらガレスが笑う。自分の元の世界にいない種族ということ、一番戦っていてワクワクしたのがマムクートだったからだ。竜化してしまえば確かに普通のドラゴンではあり、ドラゴンならばゼテギネアの地にもいるのだが、人でもある以上竜人族には知恵がある。そこが、純粋なドラゴンとの唯一にして大きな違いだった。

獸を相手にしていても面白さというものは無い。だが、そこに知恵が備われれば途端に強敵になる。今までの数少ない竜人族との戦いもそうだった。そして、この奥にいるのはその総大将なのだ。

(これがワクワクせずにはいられるか)

どれほど楽しませてくれるのか。それを思うとガレスは笑みが止められなかった。もつとも、いつも通りフルプレートの鎧を着こんでいるのでその顔を表に晒すことはなかったが。と、不意にガレスはクイックイツと引つ張られるのを感じた。

(ん?)

何事かと思つて顔を向けると、そこにはどうにもご立腹な雰囲気を感じたチキの姿があった。

(?)

その姿を不審に思いながら、ガレスはどうした? と、チキに尋ねる。と、  
「ガレス、ナギと何かあったの?」

(?)

それはどういう意味だと思つたガレスではあったが、特筆して何かがあったわけではないため、

「何も」

と、正直に答えた。だが、その回答はどうにもチキのお気に召さなかったようで、ご立腹な雰囲気はそのままに頬がぷくーっと膨れた。

「でも、仲良さそう」

「そうか？」

「そうだよ。だって、今だってさ……」

ご機嫌斜めのままチキがガレスの傍らに視線を向ける。そこには、今までと変わらぬ様子でニコニコしながらガレスと寄り添うように歩いているナギの姿があつた。

「ナギばかり……」

その様子に、チキが不満ですといった様子ありありにぼそりと呟いた。更に間の悪いことに、

「どうしたの……？」

ナギがニコニコしながらチキに話しかける。ナギに他意はないのはわかりすぎるほどわかつていることなのだが、それでもガレスを独占している（ように見える）ナギに気を使われ、チキは面白くなかった。

「何でもないよ！」

そう言うと、プイッとチキがそっぽを向いてしまった。

「あらあら……」



どうしたのかしらとばかりにナギがガレスに視線を向けたが、視線を向けられてもガレスにもどうしようもない。

(何を拗ねている…)

ナギと仲良さそうというのは間違いではないだろうが、それも少々語弊があつて仲が良いというよりはナギが一方的にガレスのことを気に入っているにすぎない。そしてガレスとしては好意を向けてくる相手を邪険にするような真似をしていないだけのことだ。とは言え、加入した直後とはいえそういった対象はガレスだけということもあつて余計に目立つのだろう。

(やれやれ…)

何時の時代でも何処の世界でもへそを曲げた女の機嫌を取るのは大変だなどうんざりしながら、ガレスがチキの頭を撫でた。

「…何？」

だが今回は大分根が深いのか、チキはまだムスツとしていた。

「そうむくれるな。可愛い顔が台無しだぞ」

「ふーんだ！ そんなこと言つても、もう知らないもん！」

そつぽを向いたままお冠のチキに、どうしたものかと思ひながらガレスがナギに視線を向けた。だがナギは相変わらずニコニコしながらガレスと寄り添って歩いているだ

けである。問題解決の手助けにはなりそうにもなかった。

(困ったお姫様だ…)

取り付く島もないチキのご立腹に、ガレスは一旦チキのことは置いておくことにした。状況打開の糸口が見つけれられない今の段階では、何をしても無駄になりかねないからだ。

そんな妙なやり取りがありながらもどれくらい進んだところだろうか、廊下の奥から不意に竜の咆哮が響き渡った。

『！』

その、身の毛もよだつような咆哮にある者は固まり、ある者は小さく悲鳴を上げ、ある者は顔を青くし、またある者は額に脂汗を滲ませながら忌々しい表情で進行方向を睨んでいた。当然、進軍をやめるわけにはいかなないので、進軍は続けることになる。

敵兵を退けながらの進軍を続けることになり、断続的に響き渡る咆哮が当然強く、大きく、近くなってくる。そうするたびに緊張が走って顔から表情を無くすものが増えていく中、やがてその時は訪れた。

「メデイウス…」

大広間と言つていい最深部に到着した一行の前に、玉座に座っている一人の男の姿があった。先ほどもまで咆哮が聞こえていたのに今はその姿の影も形もないことから、一旦変身を解除したのだろう。

(意外と律儀なのか?)

不意にそんなどうでもいい感想がガレスの頭に浮かんだが、それこそどうでもいいことなので取り敢えず置いておくことにした。

「来たか…小僧」

メデイウスがゆっくりと口を開く。何気ない一言なのだが、この場の空気が一段と重みを増したように解放軍の面々は感じていた。

「百年前のようにはいかんぞ」

「そうはさせない！ 僕は…いや、僕たちは必ず貴様を倒してみせる」

「面白い」

メデイウスが徐に玉座から立ち上がるとニヤリと笑みを浮かべた。それは猛禽のような獐猛なもので、見る者の心胆を寒からしめるには十分すぎるほどの迫力を持つものだった。と、

「ん？」

何かに気付いたメデイウスが視線をマルスから外してある人物に向ける。そして、

「ほお……」

　　楽しそうな笑みを浮かべた。

「中々面白いのを飼ってるな」

「何？」

　　マルスがメデイウスの視線を追ってその先に目を向ける。そこには、沈黙をもってメデイウスに対峙しているガレスの姿があった。

「小僧。その男はお前たちの側に立つ者ではあるまい」

「……だったら？」

　　マルスが一瞬言い淀み、そして答える。確かにメデイウスの言っていることは間違いないからだ。協力してもらっているとはいえ、ガレスがこちら側の存在ではないのは本人も周囲も良く自覚していたからだ。と、メデイウスがガレスに向かって右腕を差し出した。

「貴様、名は？」

「…俺はガレス。黒騎士ガレスだ」

「そうか。ガレス、貴様、こちらにこい」

『！』

　　まさかの勧誘に解放軍の面々の間に衝撃が走る。そして尚戦慄だったのは、

「ほお…」

満更でもなさそうな声色でガレスが応えたことであつた。

「自分でもわかっているだろう？ 貴様はそちらにいるべき存在ではない。また、そちらにいたところで貴様が報われることもあるまい」

「…そうだな」

少し言い淀んだが、ハッキリそう答えたことに解放軍内に緊張が走つた。

「貴様に言われるまでもなく、自覚はしている」

「そうだ。人間がどれほど愚かでどうしようもない存在であるかは儂が良く知っている。今はまだいい。だがいずれ、貴様の居場所はそこにはなくなる。だが儂ならば、貴様の居場所は作つてやれる」

そこでメデイウスが差し出した手を伸ばした。

「さあ、我が手を取れ。儂と共に歩もうぞ」

「クツ…」

石のように固まつてしまった解放軍の面々を嘲るかのようにガレスが吹き出す。そして、

「クツクツクツクツクツ…」

いつものように咽喉の奥で笑いだした。真紅の瞳が光り、狂気を纏つたかのように笑

うその姿に人は誰もが恐怖した。が、

「……」

ナギが傍らからそつとガレスの手を握り、

「……」

ほぼ同時にチキがガレスの前に進み出てきてメデイウスを睨んだ。まるで、ガレスの盾となるかのように。

「貴様たちは……」

普通の人間とは違う気配……もつと言ってしまったえば自分と同じ気配をチキとナギから感じたメデイウスが先ほどまでの楽しそうな表情から一変し、険しい表情になった。と、

「どけ」

ガレスがチキの肩を掴むと、横にどくように促す。

「だって……」

先ほどまでのお冠な様子は何処へやら、チキは泣きそうな心細げな表情でガレスを見上げていた。傍らのナギは何も言わないが、ガレスの手を握るその力を少し強くする。

「いいから、どけ」

「……」

ガレスに再度促され、チキは不安げな表情そのままに少し脇へとどいた。そしてそのまま、ガレスはナギの手を払い除けて前に一步進む。だがその払い除ける手は、決して乱暴なものではなかった。

「中々面白い提案だったぞ」

「！ ガレス！」

今更ながらに最悪の事態を避けるべくマルスがガレスに向かって叫ぶ。だが、ガレスは柳に風とばかりに微動だにしない。

「だが、悪いな」

代わりに口を開くとメデイウスにそう告げ、そして、

「断る」

そう、続けたのだった。

「フン……」

ガレスの返答を聞いたメデイウスが差し出した右腕を降ろすと、心底失望したとばかりに口を開いた。反対に、チキが嬉しそうな表情になってガレスに抱き着き、ナギも同じように嬉しそうな表情になって再びガレスの手を取って更に強く握ったのだった。

「儂の眼鏡違いだったようだな。所詮貴様も下らん存在だったか」

「どう思おうが貴様の勝手だが、俺が貴様の提案を蹴ったのは恐らく貴様の考えている

ような理由ではないと思うぞ」

「何だと?」

メデイウスの表情が訝し気になった。ガレスがそのままチラツと、背後や脇にいる解放軍の面々に視線を向ける。

「俺が貴様の提案を蹴ったのは、貴様につくところと戦わなくちゃならないからだ」

「下らん、俺の予想通りだ。貴様も所詮、情にほだされるような下等な存在だったか」

吐き捨てるように侮蔑の表情を向けるメデイウス。

「いや…」

対して、ガレスは視線を戻すとゆっくりと首を左右に振った。

「俺がこいつらと戦いたくない理由は、貴様が予想した理由と正反対の理由だ」

「何?」

メデイウスの表情が怪訝になる。

「貴様と組むということとはこいつらと戦うということだ。だがそうすると、貴様とは戦えなくなる。敵として殺し合うならどちらが楽しいか：貴様と殺し合った方が余程楽しそうだと判断したからだ」

そしてゆっくりと、ガレスがサタンブローバーの穂先をメデイウスに向けた。

「折角の極上の獲物だ。味合わない手はないだろう? 俺を楽しませろ」



「身の程知らずが」

メデイウスが憤怒の表情になってガレスと、そしてマルスたちを睨んだ。

「ならば望み通りにしてやる！ 地獄の業火で焼かれるがいい！」

「ククク…貴様の思い通りいけばいいがな？」

「ほざけ！」

メデイウスの瞳が光り、その身体が人のものから変化していく。そして変身した竜の姿は、今まで見たどの竜よりも大きく、強く、禍々しい姿をしていた。

「これが、メデイウスの真の姿…」

遂にその真の姿を目の当たりにしたマルスがその威容にゴクリと唾を飲んだ。と、解放軍の面々の脳内に声が響き渡る。

『アンリの末裔である小僧。貴様が、どれほどのものか試してやる！ その愚か者共々な！ さあ、かかってくるがいい！』

「望むところだ！ 行くぞ、皆！」

『おお！』

大広間に鬨の声が響き渡り、ついに最後の戦いが始まった。

「ッ！」

マルスが石畳を転がって間一髪でブレスをかわした。口の中に少量ではあるが砂利が入り、それを吐き出す。

（流石…強い！）

眼前で未だに健在のメデイウスを厳しい視線で睨み付けながら、マルスは荒い呼吸を繰り返していた。

メデイウスとの最終決戦に挑んでから少々時間が経った。流石にメデイウスも一人では解放軍を相手にするつもりはないらしく、援軍として駆け付けた敵兵を相手にここここで戦闘が繰り広げられている。そんな中、メデイウスとの戦いで要となるのはやはり神剣ファルシオンを持つマルス。そして、同じ竜人族であるチキとナギ。最後に、

「イービルデッド！」

地面に走った五芒星の紋様から赤黒いエネルギーの奔流が走り、メデイウスの身体を弾き飛ばしていく。メデイウスは咆哮を上げるものの、ダメージは軽微なのかほとんど変わるところはなかった。

「チツ、やはりあまり効かんか」

その結果に、ガレスが忌々しく舌打ちをした。メデイウスとの戦いで要となる最後の一人はガレスだった。というより、メデイウスが執拗にガレスを狙ってきていると言っ

た方が正しいかもしれないが。

その攻撃を、受け止め、かわし、いなしながらも何とかガレスは踏ん張っている。その隙についてマルス、チキ、ナギがメデイウスに攻撃しているので、ある意味ではガレスが正しい陽動になっているともいえた。

(まさかここまで見越してあんな挑発するような物言いしたのか?)

一瞬そんなことを考えたマルスだが、さつきメデイウスの誘いを蹴つたときの様子を感じ出し、それは考え過ぎかと思ひ直した。あの時のガレスが嘘を言っているとは思えなかったのだ。それと同時に、あの時のガレスを思い出して背筋が震えあがるのを感じていた。だが、それは他の面々も同じこと。

(あの男…)

ハーディンが剣と槍を駆使して増援を叩き伏せながらガレスに思いを馳せている。

(先ほどのメデイウスとのあのやり取り、やはり油断はできん)

もう何人目になるかわからない増援を切り伏せ、ハーディンの目が鋭くなった。

(排除せねば…。この戦いが終われば世界は平和になる。平和な世界にあのような危険な不穏分子はいらん。何よりニーナ様のためにも…)

同じようなことを思っているのはアストリアとジョルジュであった。

(ニーナ様の一件があったとしても、やはりあの男は危険すぎる)

(いずれ、必ず災いの種になるだろう。そうなる前に手を打たねば……)

上述三人よりまだましとは言え、同じような想いを抱いているのはミディア・ホルス・リンダの三人。

(パレスで生命を救われた身だからこんなこと考えたくないけど、ハーディン公やアストリアたちが危惧するのも無理はないわね。アカネイアから切り離しつつ、それとなく論すのが一番の上策かしら)

(あの御仁、やはり他の皆が言うように油断はできん。だが、話の通じない人物ではないということもわかっている。もう少し、己を改めてもらえればいいのだが……)

(あいつ……やっぱり油断できない。でも、確かにあの力はガーネフと同じ暗黒の力だけ……あいつの力は……)

そして比較的中立なのが残りの面子であった。その中立具合もピンからキリまであるのだが。だがどちらにしろ、全員がガレスに思うところがあつたのは紛れもない事実である。

そんな中、当の本人であるガレスはメデイウスとの勝負に焦れてきていた。

(まったく、しぶとい奴だ)

威嚇するように咆哮するメデイウスを睨み付けながらガレスは内心で悪態をつく。今まで数多くの敵を屠ってきた暗黒魔法の力も、同じ力を源にしているからかメデイウ

スにはこれまでと比べて格段に効果は薄かった。それはガーネフ相手でも同じなのだが、そこはやはり強さというか存在の格の違いが余計に効果を薄くさせているのだろう。

(やはり俺のような外法・外道には神は微笑まんらしい)

元よりそんなことを期待してもいないがなと皮肉気に自嘲しているガレスに、メディウスがブレスを吐いた。

「一」

石畳をサタンブローバーで叩き割って壁を作り、何とかブレスを防ぐ。実体のある剣や弓、槍や斧といった武器と違い、魔法やこういつたブレスは受け止められないのでこうやって防ぐかかわすしかない。重騎士であるガレスには避けて対処することはなかなか難しいため、こうして防ぐしか手立てはなかった。

もつとも、今までのマムクート相手だったら避けるのも可能だったのだが、流石に敵の首魁であるだけあってメディウスからはそれだけの隙は見いだせず、スピードも速いためこうやって防ぐしか手立てがないのが現実だったが。だが、防戦一方というわけでもない。

ガレスに攻撃する隙についてナギ・チキ・マルスが波状攻撃を行う。だが流石にメディウスは百戦錬磨なだけあり、三人を相手にしてもこれまで致命傷をくらっていない

かった。深手を負わせていないとはいえ、傷は与えているのでこのままいけばいずれ勝てるのは間違いないと思われる。だがそれまで三者の体力や精神力が持つかと言われればそうは思えなかった。三人とも汗を滲ませながら荒い息を繰り返しているからである。

（ジリ貧か。だったら勝負に出るか）

ブレスによつて吹き飛ばされた石畳の瓦礫からガレスが姿を現す。そして、

「オオオオオッ！」

サタンブローバーを手に突貫したのだ。

「ガレス！」

「無茶だ！」

「！」

チキとマルスがその行動に驚愕の声を上げた。何せ、重騎士であるガレスは先述のようにスピードは遅い。無論、そこらへんの重騎士に比べれば比ではないほど速いが、スピードで言えばメデイウスの方がよっぽど早いのだ。そしてメデイウスは、遠距離攻撃でもあるブレスを使用してくる敵だった。邪な笑みを浮かべたかのようにメデイウスの顔が歪み。そして、メデイウスのブレスがガレスの全身を包み込んだ。

「オオオオオッ……」

業火に焼かれたガレスの手から力が抜け、握っていたサタンブローバーが滑り落ちる。

「この俺が負けるというのか…」

それを末期に、ガレスの全身は跡形もなく燃え尽きたのだった。

「あ…あ…」

「そんな…」

塵一つ残らずガレスが消滅したことにチキとナギが呆然とした表情を浮かべる。マルスを始め、他の解放軍の面々も驚きの程度の差こそあれ、皆同じ思いだった。と、ガレスを始末したメデイウスが標的を残りの解放軍の面々に向ける。

『！』

つい今しがたのシヨックな場面を引き摺りつつも、同じ轍を踏むわけにはいかない解放軍の面々は構える。まだチキとナギが残っているうえにマルスも健在ということではメデイウスは決して油断はしていなかった。

(だが、あの小癩な黒騎士は潰した。後は一人ずつ料理していけばいいだけ。まずは…) 　メデイウスの瞳が光り、マルスを捉えた。

(貴様だ、小僧！)

憎き宿敵アンの末裔ということもあり、メデイウスがマルスに襲い掛かろうとし

た。だがその時、メデイウスの死角から不意に何かが飛んできてメデイウスの胸板に深々と突き刺さる。

「グオオオオオオッ！」

天地が鳴動し、身の竦むような咆哮を上げてメデイウスが暴れ出した。

「あれは！」

肉を切り裂く音と共にメデイウスの胸板に突き刺さったそれは、ガレスのサタンブローバーだった。不意に思わぬ大ダメージをくらったメデイウスはまだのた打ち回っている。

（チャンスだ！）

思わぬところからの攻撃に混乱し前後不覚になっているメデイウス。このチャンスを逃がす手はなかった。

「チキ！ ナギ！ 援護を」

「う、うん！」

「はい……」

二人が神竜へと変身し、メデイウスの左右からブレスを吐く。神竜のブレスに大ダメージを受けたメデイウスが、断末魔と表現すべき咆哮を上げた。そして、

「はああああっ！」



マルスが走ってチキの身体を駆け上ると飛び上がる。そして、今だ暴れているメデイウスの額にファルシオンを突き刺したのだった。

「グオオオオオオオッ！」

「やったか!？」

ボロボロになりながらその光景を見ていたハーディンが声を上げる。他の面々も固唾を飲んで見守る中、メデイウスは竜の姿から徐々に人の姿へと戻っていった。

「ぐっ……」の儂が……

人の身へと戻ったメデイウスが息も絶え絶えになりながら立ち上がった。その姿に解放軍の面々の間に戦慄が走る。

「人間如きに敗れるとは……いや……」

そこでメデイウスは誰もいないはずのとある場所に目を向けた。

「貴様が……貴様さえいなければ……」

「ククククク……」

その場所から聞こえる、いつもの笑い声にハツとした解放軍の面々がその場に視線を向ける。そこにあつたのは只の闇。そして闇が人の形を象り、現れたのはガレスの姿だった。

「ガレス！」

ガレスの無事を確認したチキが嬉しそうに微笑みながらピョンとジャンプした。ナギも先ほどまでと変わらぬ穏やかな表情に戻っている。

「こんな小僧どもに敗れることはなかったものを…」

「ククク、そうか。それは残念だったな」

ガレスがいつものように咽喉の奥で笑った。

「だが俺も、お前と十分に殺し合えなかったのは全くもって残念なのだがな」

「おのれ…ッ！　だが心せよ、人の心に悪がある限り我が分身が姿を現すであろう。心せよ…闇は、光ある限り永遠に消えはしないのだと…」

「貴様に言われるまでもない」

「ふ…グオオオオオオオオオツ！」

断末摩の咆哮を上げ、メデイウスは倒れた。そして地竜族の王の名の通り、その身体は地面と一体化するかのようになくなっていき、消し失せたのだった。残るのは、激闘の痕跡のみ。

「終わった…のか？」

半信半疑でマルスが呟く。何せ、先ほどまで激闘に注ぐ激闘だったのだ。全て終わったというのを不審に思うのも仕方のないことであった。が、

「恐らく」

ボロボロになりながらマルスの傍らへとやってきたハーデインが、そのマルスの意見を肯定するかのよう同意する。

「ハーデイン公」

「マルス王子、戸惑う気持ちはわかるが取りあえず残してきた残存部隊に連絡を。終わったのであれば、向こうでもなにがしかの変化は訪れているはずだ」

「うん、そうだね。ゴードン、皆のところに行つてきてくれ。万一何かあった時のために、オグマとナバールも一緒に行つてくれるかな？」

「はい、わかりました」

「かしこまりました、王子」

「わかった」

「すまないね。それじゃあ、頼むよ」

「はい」

ゴードンが軽く一礼すると、オグマとナバールと共に城外の残存部隊への伝令へと向かった。その間、残りの面々の大半はハーデインの指示を受け、周囲の見回りへと向かっていく。そして、

「ふーっ……」

大きく息を吐いたガレスがその場に腰を下ろして胡坐をかいた。

「ガレスー！」

「ガレス……」

当然のようにその側にチキとナギが寄ってくる。そしてチキはそのままの勢いでガレスに抱き着き、ナギは変わらぬ雰囲気ですぐガレスの傍らに腰を下ろした。

「どうした？」

さつきまでお冠だったチキの変化っぷりにガレスがフルヘルムの下で怪訝な表情になる。

「だってだってだって！」

「クク、俺が死んだとでも思ったか？」

「だってえ……」

「あの程度で俺が死ぬわけないだろう」

「でも……どうやって……？」

ナギが首を傾げた。メイウスのブレスは完璧にガレスの身体を捉えていた。全身を業火に包まれたあの状況で生きていたとはナギも思わなかったのだ。しかも見る限りは無傷で。

「まあ……そこは色々……な」

ガレスが答えを濁す。タネとしては非常に簡単で、あの時特攻させたのはお決まりの

分身だったのだ。本体であるガレスは少し離れた視認のしにくいところで待機していたのである。この城内が基本薄暗く、照明も燭台の火ぐらいしかないことも幸いし、味方だけでなくメデイウスにも気づかれなかったのだ。もともと、メデイウスはそもそもガレスが己の分身を創り出せるということすら知らないのだから仕方ないのだが。

そして、自分を討つたと思いい込んだメデイウスが背を向けたところでサタンブローバ―を回収し、それを投擲して胸元へとブチ込んだのである。思わぬダメージを受けたメデイウスは取り乱し、そしてそのままチキ、ナギ、マルスの連携でとどめを刺されたという流れだった。

と、そこに石畳を踏みしめる音がした。

「ガレス…」

「んっ」

顔を上げる。そこには、自信を見下ろしているマルスの姿があった。

「これはこれは…」

自身に抱き着いているチキを優しく引き剥がすと、腰を下ろしたばかりだったがガレスはその場から立ち上がった。

「御大将が自らお出でとは」

「よしてくれ」

その慇懃無礼な物言いにマルスが苦笑する。だが、すぐに表情を戻した。

「メデイウスは……」

「倒したさ」

少なくとも今はな、という一言は呑み込んでガレスがそう告げた。別に何かしら確信や予感めいたものがあつたわけではない。ただ己を省みればよくわかることだが、ああいう連中のしぶとさだけは身をもつてよく理解しているので、そんなことを思っただけなのだ。

（杞憂だつたらいいのだがな……）

一抹の不安を感じながらも、今倒したのは間違いないので余計なことは言わなかつた。

「本当かい？」

だがマルスは信じられないようだった。というより、用心しているのだろう。何せメデイウスは最終目標であつた相手である。倒せば勝利なのだから、そのところに慎重になるのは仕方なかつた。

「ああ」

そんなマルスの不安を払拭させるかのようにガレスが頷いた。

「大体、もし奴がしぶとく生き残っていたなら。今頃お前の首が飛んでいるか、胴体に風

穴が開いているだろう？ 何せ奴に背を向けているのだからな」

「！ 確かに」

慌ててマルスが振り返る。位置関係的にマルスはメデイウスに背を向けていた形になっていたので。もしメデイウスが生きていたらそんな隙だらけのマルスを逃すはずはなかった。宿敵の末裔であり、神剣ファルシオンを使える唯一の存在だからだ。

「まあ、そういうことだ」

「そうか……」

マルスがホツと一息つく。ここにきてようやく、マルスもメデイウスが倒れたということに実感を抱くことができたのだ。と、大広間の入り口が付近が騒がしくなってきたのに誰も気付いた。そして、

「マルス様！」

ゴードンが先頭になって戻ってきた。その後を、オグマとナバル。そして、残念ながら今回の出撃に参加できなかった解放軍の面々たちが次々と入ってくる。

「残存部隊ですが、城外での戦闘が終了し城内での喧騒が聞こえなくなつたとのことでこちらに向かつてきていました。ですので、事情を説明して合流した次第になります」

「わかつたよ。御苦労だったね、ゴードン」

「はい！」

満面の笑みを浮かべ、ゴードンが戻った。合流した部隊の面々は皆思い思いにこれまでのことを語り合い、お互いをいたわり合っている。

「マルス様！」

「マルス」

「マルス様！」

「王子……」

「良く御無事で……」

マルスの元にも、シーダをはじめエリス、マリク、ジエイガン、モロドフが集まっていた。そして、

「マルス」

当然、ニーナもマルスの許へと足を運んでいた。

「ニーナ様！」

慌ててマルスが臣下の礼を取るが、

「よい。顔を上げなさい」

「はい」

ニーナに諭され、マルスが臣下の礼を崩した。

「辛く、長い日々でしたが、よく頑張ってくれました。貴方には感謝の言葉しかありません



ん」

「勿体ないお言葉です。ですが、本当に大変なのはむしろこれからかと」

「そうですね。長い戦乱によってどの国も荒れ果ててしまいました。それを立て直すには、また長い年月を要するのでしょうかからね」

「はい。私もアリティアの復興に尽力しなければ」

「それは勿論、彼女と共に……ですよね？」

「え？」

少し首を傾げたマルスが、ニーナの視線が自分から外れていることに気付いた。その視線を追って振り返ると、そこにはシーダの姿があった。

「あ、あの、私は……」

突然話を振られ、真っ赤になってシーダが俯いてしまう。が、それは何もシーダだけではない。

「あ、いや……」

マルスもこの状況に戸惑い、二の句が継げなくなってしまう。まさかこんな展開になるとは思ってもいなかったからだ。そんなマルスの背中を、ニーナがゆつくりと押す。

「ほら、マルス」

「あ、えっ……と」

顔が赤くなり、全身の血液が沸騰してくるのを感じる。だが、ここまで御膳立てされてケツを捲るわけにもいかなかった。

「シーダ」

「は、はいっ!」

「その…僕の気持ちを伝えておきたいんだ。君さえよければ…その…一緒にアリテイアに来てくれないか?」

「!!」

シーダはマルスのその申し出に顔を真っ赤にしたまま固まってしまった。

「タリスで海賊と戦ってから今日まで、ずっと君は僕の側にいてくれた。君の存在が、どれだけ僕の心を支えてくれたことか。だから、その…」

そこで一呼吸区切り、そして、

「上手く言えないけど、これからもずっと側にいてほしい」

マルスが今抱いている正直な想いを真っ直ぐにシーダに伝えた。

「マルス様…勿論、喜んで…」

それに対し、シーダも顔を真っ赤にしながら受け入れる。その光景に、周囲の者は微笑んだり拍手を送ったりしていた。

「いや、その…」

真つ赤になつて鼻の頭を擦りながらマルスは落ち着きなく周囲に視線を向けた。と、その目が捉えた一人の人物に、照れくさい想いも一瞬で吹き飛んでしまつていた。

(ガレス…)

チキとナギ、それに合流したマリアやミネルバ、バヌトウにロレンス、チエイニーたちと何かを話しているガレスの姿が、マルスを捉えて離さなかつた。

(結局、貴方のことは最後までわからずじまいか…)

これまでのことを思い出しながらそう思いを馳せる。戦闘能力ならば解放軍の恐らく誰よりも高いが、その力は間違ひなくこちら側のもではなく向こう側のものであつた。そのせいで余計な摩擦や誤解を生み、それが不協和音となつて最後まで解消することとはなかつた。

だがその力は結局内には使われることはなく、危惧していたことは杞憂に終わった。それが始めからそんなつもりは更々なかつたのか、それとも計算ずくで欺いた上の行動だつたのかはわからない。今もまだ欺いていないとは限らないのだ。

味方のままでいてくれるのか、それともいつか敵に寝返つてしまうのか。その不審は最後まで続いた。メイウスからの誘いの最初の返答には、全員血の気が引いたに違ひない。

だが、とにかくにも最後までガレスは仲間であつてくれた。その危うさには恐怖を感

じていたが、その強さにことごとく救ってもらったのもまた事実だった。と、マケドニア城近くの村でのガトーとのやり取りをマルスが思い出した。

『マルス王子』

『ガトー様、如何でしたか？』

『うむ。あの男は危険じゃ。それは間違いない。正気を保ったままガーネフと同じ場所に立っているようなものじゃ』

『やはり…』

『うむ。とは言え、完璧にあの男のことを言い当てているとは思わんがな』

『はい』

『だが、だからこそ白にも黒にもなる』

『それは？』

『言ったであろう？ 正気を保ったままガーネフと同じ場所に立っているようなものじゃと。ガーネフはマフーに取り込まれたからこそ戻ってくることはできなかった。だが、あの男は少なくとも自身の持つ闇の力には取り込まれてはおらん。故に』

『はい』

『おぬしたち次第でどうにでもなる。心強い味方にも、恐ろしい敵にもな。その天秤は今も揺れ動き、最終的にどちらに傾くのか。それは流石にわからなかった』

『……』

『故に心せよマルス王子。お主たちの行いが、あの男が味方のままであるか敵になるかを決めるということ。お主に清濁併せ呑む器量があれば、恐らくあの男は敵対すまい。だが、もしそれが出来なかつた場合は……覚悟を決めておくことじゃ』

『……』

『大変な難題、火種かも知れんぞ。それこそ、ガーネフやメデイウス以上のな』

『ありがとうございます。やはり、彼をガトー様の許へお連れしてよかつた』

(ガレス……)

今一度、マルスは鋭い視線をガレスに送った。漆黒の騎士は今も尚チキや MARIA、ミネルバたちに囲まれている。その光景だけ見れば、何とも穏やかな光景と言えるかもしれない。だが、それがいつ覆されるかもしれない危ういものであることもマルスは自覚していた。

(君と敵対するようなことを祈っているよ。勿論、そのために僕たちもやれ

ることはしないといけないし、そして、やってはいけないことはしないようにしないといけないけどね)

ガーネフとメデイウスは倒れ、世界には平和が戻った。その平和が長く続くことを切望しながら、マルスはガレスから視線を外したのだった。

こうして、後の世に暗黒戦争と呼ばれる長い戦いは終わりを告げた。そして、この場には本来いないはずの存在は、先の世で何をもたらすのか。今は誰にもわかるわけはなかった。